おとなーげ 大人氣 (名) 大人らしきさま。老成の風。

おとなげーなし 大人氣無 (形) 〔一〕おとなおとなしからず。いはけたり。砂石集「おとなげなく彼れを打たんとして、倒れて侍るねたさにこそ申し候ひつれ」〔二〕おほぎやうなり。いくぢなし。國姓爺「一刃で向かふは大人氣なし」

おとなーごころ 大人心 (名) 大人らしき心。おちつきたる心。狭衣「かかる御おとな心を、うつくしう思ひきこえ給へば」

おとなーし 大人 (形シク) 〔一〕おとならし。おとなびたり。宇津保「藤原君」さやうにおとなしきすまひし給ふべきなん、おはしまさぬ」源氏「澪標」十一になり給へど、程より大きに、おとなしう清らにて」〔二〕宿老らし。頭だちたり。大鏡「さるべくおとなしき人人、何がしかがしといふ源氏の武者たち」宇治拾遺「おとなしき郎等進み來て」〔三〕おちつきて穏かなり。すなほなり。穏當なり。温順なり。老成なり。太鼓「狂言」「名を詐けて貰うては、今迄の通りにしてはならぬほどに、隨分おとなしうさしめ」

おとなしーけ 大人氣 (副) おとなしさら。おとなしきさま。

おとなしーさ 大人 (名) おとなしくある度合。おとなしきこと。

おとなしーさま 大人樣 (名) おとなしき樣子。夕霧「阿波鳴渡」「氣高い好いお子や、聞き及びしよりおとなしさま」

おとなじみる 大人染 (自動上) 次條の口語。

おとなーじむ 大人染 (自動四) 大人らしくなる。

おとなしーやか 大人くさくなる。(副) おとならしきさまに。落ちつきたるさまに。いかにもおとなしく。いかにもすなほに。保元「義朝惜少地」「長子」しやかに宜へば」平治「光朝「第熟矢」「蒔絵の細太刀を、おとなしやかに佩き給ひ」

おとなーだつ 大人立 (自動四) おとなぶ。年長ず。〔一〕おとなめく。かしらだつ。宿老らし。老成めく。枕「おとなだちたる人の、いやしからず、しのびやかなる御けはひにて」同「受領など、おとなだちたる人は、太きいとよし」

おとなーづく 大人附 (自動四) 大人らしくなる。名義抄「長ナリ」

おとなーひ (名) 〔一〕おとなふこと。おとろおどろしく踏みとどろかすから臼の音も中略いとあやしう、めざましきおとなひとのみ聞き給ふ」〔二〕おとづること。訪問。源末「蓬」ふりにたるあたりとて、おとなひ聞こゆる人もなかりけるを」

おとなひーびと (名) おとなふ人。訪問する人。貫之集「おとなひ人(稀客)の馬よ。おりて、しばし松のもとに休むに」

おとなーびる (自動上) 〔一〕貴、發ふつ。香きこゆ。書す。ひびく。神代紀「夜者著(ハ)標火而喧響(ム)之、晝者如五月蠅而沸騰之。喧響、此云浴等鄙比」〔二〕おとづる。訪問す。訪ふ。源賢木「さしは〜ては、おとなはず侍るめり」

おとなーぶ (自動上二) おとなだつ(大人立)に同じ。おとならしくなる。枕「上達部のおとなぶるに、親のたちかはりしれ行くことは」

おとなーぶる 大人振 (自動四) 〔一〕大人らしきそぶりをなす。〔二〕大人なることを誇る。

おとなーやく 大人役 (名) 一人前の大人と見なされてなすべき役目。緋縮緬卯月紅葉「年はいかねど、男を持てば大人役」

おとなをむな 大人女 (名) 家の事など取り賄ふ老女。頭だつ老女。住吉「侍從はおとな女にて、よろづに大事の人にて」

おとーね 乙子 (名) 月の最後の子(末)の日。宇津保「藤原君」「大將殿には廿七日出できたるおとねになん、嵯峨の院に御賀まゐらんとし給ひける」

おとのーあぶら 大殿油 (名) おほとのあぶら(大殿油)に同じ。大上薦御名之事「女房詞。一、あぶら。おとのあぶらといふ」

おとーはやき 音羽燒 (名) 次條に同じ。生玉心中「錦手・乾山・音羽燒の、皿の、鉢の、茶碗のと」

おとーはやまーやき 音羽山燒 (名) きよみづやき(清水燒)を見よ。

おとーひと 弟人 (名) 古語。おとうと(弟)。おと。雄略紀「心懷悖惡行闘」友王(オトヒト)」

おとーひめ 弟姫 乙姫 (名) 〔一〕次の姫。妹の姫(えひめの對)皇極紀「長女中略少女(オトヒメ)」〔二〕龍宮に居るといふ仙女の稱。

おとひめーぎみ 弟姫君 (名) 前條に同じ。榮華「源帥」ときこえしが、御おと姫君をとりて養ひ奉り給ひしなり」

おとひめのかんざし 弟姫簪 (名) 〔椹〕あまも(大葉藻)の異名なるべし。

おーとほし 御通 (名) ざる(笊)をいふ。女詞。

おーとほし 御點 (名) らふそく(蠟燭)をいふ。女詞。

おーとほね (名) こゑ。音聲。艶狩劍「地三」やいやかましい、音ほね立てな」膝栗毛「助けてくれると、悲しいおとぼねを出しをった」

おーとほり 御通 (名) 〔一〕通ることの敬語。通り給ふこと。諸藩「此のあたりには御宿もなし。今少し先へお通りあれ」〔二〕貴人の前に召し出ださるること。召し出だし。早雲寺殿廿一箇條「出仕の時、御前へ參る可からず。御次に祗候して、諸傍輩の體見つくろひ、さて御とほりへ罷り出づべし」〔三〕おとほりのさかづき(御通盃)の略。後水尾院年中行事「御通」狂言「盃」「殊の外御機嫌ぢや。いつは下だされねども、此の度はお通りを下ださるるほどに、三盃づつたべて」

おとほりのさかづき 御通盃 貴人の前に召し出だされて、手づから御酒を賜はること。

おーとまさり 弟優 (名) 兄又は姉より、弟又は妹のまされること。宇津保「藤原下」「藏人の少將の、おとまさりになりわかれぬべかめるかな。ただ今の上人はこれ一人なめりかし」

おーとまし (形シク) 〔うとましの訛り〕うとむべくあり。好ましからず。おあん物語「なく靡がよなよなしておぢやった、おとましやおとましや」狂言「蓬島」「はれさて、おとましい者と連れだったことぢや」

おとみーづばり (名) 小兒の病の名。乳のみごある母の、懷姙してつはりとなりたるため、乳兒の乳離れして起こるもの。

おーとみーや 弟宮 (名) 妹の姫宮。大鏡「上」「おと宮のうぶやしなひを、姉宮のやしなふ見るぞうれしかりける」

おーとむすこ 弟息子 (名) 長男に對して、以下の子。曾我五人兄弟「菜は故河津が乙息子、祐成が弟、箱王丸と申して」

おーとむすめ 弟娘 (名) 次女、又末の女。神武紀「小女(オトムスメ)」倭馬樂「我「あやめの郡の大領のまな娘といへ、於止辛須女(オトムスメ)」とこそいはめ」

おーとめ 乙女 (名) をとめ(少女)の訛り。

おーとめば 御留場 (名) 江戸時代、將軍の鷹狩の場。

おとも-ぐら 御供鞍 (名) 馬具。供奉の人の乘る鞍にや。(偽馬)吉續記「延元二年正月十四日」「別當(檢非違使別當右兵衛督)御供鞍」

おーともじ 乙文字 (名) おとごぜ(乙御前)に同じ。花山に住む人とても口とぢて、この乙文字はとどめざらなん」

おとも-しゅう 御伴衆 (名) 室町幕府の制。將軍に近侍し、御成の時供をする役。年中定例記「管領、大帷子。其外、御相伴衆・御供衆・申次・小笠原以下、更打」

おーとや 乙矢 (名) 射藝の語。はやかたはになりぬらん、今はおとやに霜のふるらん」著聞「源三左衛門尉翔秀たり(中略)おとやにて、又後の串を射てけり」

おとや ごめん 乙矢御免 射藝の語。老功の者、貴人の前にて射るに、最後の乙矢を射るを免ぜらるること。例へば十の矢、九つまで中たりたる時、十日の矢を射ずして猶中りとせらるること。(百人一首)

おーとよめ 弟嫁 (名) 弟の妻。おとうとよめ。(綾(ワイ)の對)和名「姒婦。爾雅云、長婦謂之姒、婦(ヲトヨメ)幼婦(ヲトヨメ)」

おとらしゃ (名) 癲癇の人をいふ、大和國の方言。(松屋筆記)

おとり 劣 (名) おとること。又、其のもの(まさりの對)竹取「人の心ざしひとしかなり。いかでか中に、おとりまさりは知らん」源澪標「さまでたづねんものとも、おとりの下司は思はず」

おとりかーかた 御取筒方 (名) 昔の牧稍吏の稱。

おとりーけ 劣氣 (名) 劣りたる樣子。榮華「音樂」「これに又殿の上の御方、劣りげなし」

おーとりこし 御取越 (名) 陰暦十月、諸人の家にて修する親鸞上人忌のこと。正忌は十一月にて、本願寺にて修するが故にいふ。

おーとりさま 御西樣 (名) とりのまち(酉町)に同じ。

おとり-ざま 劣方 (名) 劣りたるかた。源「藤袴」よろづのこと、昔にはおとりざまに淺くなりゆく世の末なれど」

おーとりすゑ 御取据 (名) 土器の大なるに、さかなを盛りて出だすこと。鉢の物。かはらけもの。

おとり-ばら 劣腹 (名) 母方の身分、他に比して劣れること。又、其の子。源「澪標」「中のおとりばらに女出でき給ふべしとありしこと」同「手習」「かのひじりのみこの御娘は、ふたりと聞きしを、兵部卿の宮の北の方はいづれぞとの給へば、此の大將殿の御のちのは、おとりばらなるべし」

おとる 劣 (自動四) 〔一〕他に比べて及ばず。まさらず。古今「春上」「散る花のなくにしとまるものならば、われ營におとらましやは」〔二〕等位降だる。われ營におとらまを、やんごとなき人の打つとて中略おとりたる人の、ゐずまひもかしこまりたるけしきに」〔三〕ゑる(減)。費ゆ。損失す。皇極紀「癸「拾遺」「拾遺」「都無」所益、損費(オトラム)」極甚」宇鏡「費減」「損」「益」

おとらじ-けじ 互ひに負けじとき そふ。榮華「音樂」「われもわれもと、おとらじまけじと思ひたるけしきどもをかし」

おとれ 己 (代) おのれ(己)の訛り。うめ。汝。狂言「花子」「やい、おどれさへ、花子樣とぬかすか」

おどろ 棘 (名) 〔一〕荊棘などの亂れ繁りたること。又、其の處。枕「卯の花中略あやしの家ども、おどろなる垣根などに、いと白う咲きたるこそをかしけれ」宇鏡「藏人」「名義抄「榛ハギ」」〔二〕髮などの亂れたるに譬へていふ語。後拾遺「雜」「道芝やおどろの髮にたらされて、移れる香こそくさ枕なれ」堀河百首「今日くればしどろに見ゆる山がつの、おどろの髮も葵かけたり」

おどろ-がのき 棘軒 荊棘などの生ひしげりたる軒端。夫木「ふかき夜をとふ人もがな、岡のべのおどろがのきに匂ふ橘」

おどろ-の かぶり 棘冠 (基督の故事より出づ)小人に憎まれて惡名を被ること。

おどろ-の みち 棘路 〔一〕荊棘などの亂れ ひたる路。新古今「雜」「春日野のおどろの道のうもれ水、末だに神のしるしあらはせ」〔二〕八臣又は公卿の稱。きよくろ(棘路)を見よ。新拾遺「「位山おどろの道も程遠し、花の外なる柴の椎柴」

おどろ-おどろ-し (形シク) おどろくべきさまなり。御山なり。竹取「あななひに、おどろおどろしく、二十人の人のぼりて侍れば、あれて、寄りまうでこずなり」

おどろかし 驚 (名) 〔一〕おどろかすこと。おどかし。かかしにもおどし。後撰「戀六」「小山田のおどろかしにもこさりしを、いとひたぶるに逃げし君かな」

おどろかし 驚 (形シク) 驚くべきさまなり。おどろおどろし。宇津保「俊蔭」「御門、琴どもをこころみ給ふに、おどろかしき聲出でて、おどろき給ひて」

おどろかし-げ 驚氣 (闘) おどろかしきさま。枕「うつぎ垣根といふものの、いとあらあらしうおどろかしげにさし出でたる枝ども」

おどろかし-さ 驚 (名) おどろかしき度合。おどろかしきこと。

おどろかす 驚 (他動四) 〔一〕驚くやうにす。おどかす。おどかす。枕「とねりの、馬どもをとりて、おどろかして笑ふを」源「藤袴」「み心ばへありて、おどろかさせ給ふ」〔二〕眠りをさます。源「若菜」「まだおどろかい給はじな、いで御目さましきこえなん」

おどろき 驚 (名) おどろくこと。相模集「衣手は山田のそほづと思ふとも、おどろきなき世にのみぞへん」

おどろき-あし 驚足 (名) 大またにありくこと。物に驚きたるやうなる足つきなればいふ。武烈紀「おどろき足とて、いにしへより笑ひ候事」

おどろき-いる 驚入 (自動四) いたく驚く。眞に驚く。狂言「鬼」「扨も扨も奇特千萬、おどろき入りましてござる」

おどろき-うま 驚馬 (名) はねうま。あがりうま。蓬窓「おどろきうまのやうに、手なふれ給ひそ」

おどろき-がほ 驚顔 (名) 驚きたる顔つき。驚きたる樣子。盛忠百首「さよの浦に波のしらむを明けぬとや、おどろきがほに千鳥たつなり」

おどろき-ばん 驚盤 (名) 畫きたる物が運動するやうに見する一種の裝置。一定の距離を保ちて、物の、順次に變化

する狀を紙に畫き、圓筒の内面に入れ、其の圓筒を廻轉して、周圍にある間隙よりのぞけば、畫きたる物は恰も活動するが如く見ゆるもの。

(おどろきばん)

おどろく 驚 (自動四) 一 意外なる事に遇ひて心さわぐ。びっくりす。土佐日記「おどろきてよみてんやは」字鏡「愕然於止呂久」たまげる(東國)・ちめうした(下總)・どうてんした(津輕)・おびえる(出雲)・たまがる(薩摩)(物類稱呼) 二 眠りさむ。垂仁紀「共寢中驚天皇則寤之(オドロキテ)」萬四「いめのあひはくるしかりけり、驚(オドロキ)て掻きさぐれども手にも觸れねば」

おどろし 驚 (形二) 驚くべし。仰山なり。續紀卅「共人等乃和美安美應久爲久相言部、驚呂之(オドロシキ)事行奈世岐」

おどろしい (形口語) おそろし。畿內近國、加賀國及び四國の方言。物類稱呼

おどろふ 衰 (自動下二) 劣り行く。勢ひ減(へ)る。力弱る。衰微す。萬十二「わがよはひし衰(オトロヘ)ぬれば、白たへの袖の馴れにし君をもぞ思ふ」竹取「老いおとろへ給へるさまを見奉らざらんこそ戀しからめ」

おどろへ 衰 (名) おとろふること。衰微。源竹川「內內の御寶ものらうじ給ふ所所、その方のおとろへはなけれど」

おどろへ-はつ 衰果 (自動下二) いたくおとろふ。狂言(不六)「都にて見し時よりは、おとろへはてたる無殘さよ」

おどろへ-はてる 衰果 (自動下一) 前條の口語。

おどろへる 衰 (自動下一) おとろふ(衰)の口語。

おどろん (名) 小兒の翫物。紙製の人形に笠をきせ、細き串を兩方の脇の下にさし、末のひらきたる所におもりを附けたるもの。これを指先に立たすれば、おもりにより釣り合ひ立ちて、踊るやうに見ゆ。嬉遊笑覽

おと-をぢ 弟叔父 (名) 父の弟。しゆくふ(叔父)。仲哀紀「叔父(ヲヂ)」和名一注「釋名曰、仲父之弟、曰叔父、叔父之弟曰季父(阿叔)」

お-な (名) 新婦の稱。おなあ。狂言(昔聟)「や、おなはなんとして來たぞ」同(水論聟)「やあ、おなあ、おなか、足をとれ」同(料理聟)「やあ、おな樣でござるか、ようござりました」

お-なあ (名) 前條に同じ。狂言(關太夫聟)「此の仕やうを、おなあが存じて居ます」

お-ないぎ 御內儀 (名) 他人の妻の敬稱。狂言(しし狩)「なう御坊、さぞお內儀をおもちやらうの」

おない-どし 同年 (名) おなじとし(同年)の音便。おなじ(同)形の條を見よ。

お-なか 御中 (名) 一 しよくじ(食事)をいふ、宮女の詞。二 はら(腹)をいふ、女詞。五十年忌歌念佛上「お夏樣と密通して、お夏樣のお腹(ナカ)は、茶壺を抱いたやうになる」

お-なか 御中 (名) [中は中﨟の義] 室町時代、武家の奥向に仕ふる女中の役名。簾中舊記「御なかよりは奉公使へは、とうばいまゐる人人」

おなか-がしら 御中頭 (名) おなかの頭。中﨟頭。簾中舊記「やくしやばかり袴めし候ほどに、大上﨟・御中がしら、ほんにめし候ひつる」

おなか-ごころ 御中心 (名) おなかのこころもち。はらぐあひ。昨日は今日の物語「昨日のお藥にて、一段とおなかごころもよく候」

お-ながれ 御流 (名) 一 ながれ(流)の敬語。二 貴人の飲み餘して、盃に殘りたる酒の餘滴(シヅク)。又、貴人より頂戴する酒。三 目上の人の所有品の使ひふるし、又は不用となりて、目下の人に與ふるもの。四 操ねてもくろみたる事の、やめとなること。計畫の廢止。

お-なかゐ 御中居 (名) 江戸時代、諸大名の大奥に仕ふる女中の役名。中﨟よりは卑く、御末よりは上なり。

お-なごら (副) ねんごろ(懇)をいふ、信濃國の方言。物類稱呼

おなじ 同 (形二) 一 彼れと此れとひとし。一なり。異ならず。一樣なり。萬廿「あしびきの山は無くもが、月見れば於奈自伎(オナジキ)里を心隔てつ」同四「戀ひ死なむそれも同(オナ)ぞ、何せむに、人目人ごと、こちたみ我がせむ」二 永く變はらず。元のままなり。孝德紀「自始治國皇祖之時、天下大同(オナジク)都無彼此者也」

おなじく は 同じことならば。枕四「同じくは、庭にまことの山を作らせ侍らんとて、さぶらひ召して」同五「一つは何せん、同じうは數多をつかうまつらんなど、いふほどに」

おなじ とし 同年 一 其の年。千載哀傷「同じ年の冬」二 生まれたる年の同じきこと。おないどし。どうねん(同年)。源少女「きんちらは同じ年なれど」

(諺)**同じ穴の狐** 同類なりとの譬へ。和漢古諺「同じ穴の狐」

(諺)**同じ穴の狸** 前條に同じ。

(諺)**同じ穴の貉** 前條に同じ。

(諺)**同じ釜の飯を食ふ** 一つ家に同居す。

(諺)**同じ流れを掬ぶ** 一樹の蔭に宿り、一河の流れを汲むの意。平家一、妓王「一樹の蔭に宿り合ひ、同じ流れをむすぶだに、別れは悲しき習ひぞかし」

おなじ 同 (接頭) 名詞に冠して、同一なる意を表はす語。景行紀「一日、同(オナ)胞而雙生」萬廿「月見れば於奈自(オナジ)國なり、山こそは君があたりを隔てたりけれ」同廿「君がむた行かましものを、於奈自(オナジ)ごとおくれて居れど善き事もなし」

おなじく 同 (接) 幷びに。及び。謠經政「青山といふ琵琶を亡者の爲めに手向けつつ、同じく絲竹の聲も佛事をなし添へて」

おなじ-に 同 (副) おなじく。ひとしく。同樣に。

おなつ-こぢよろ (名) 【動】しろこ(白子)をいふ、伊勢國山田の方言。嬉遊笑覽

お-なで 御撫 (名) 一 はうき(帚)をいふ、女詞。二 下婢を兼ねたる妾。おさすり。

お-なべ (名) 夜、仕事をすること。よなべ。油粕「戸をたてぬればあかくこそあれ(の句に) おなべする宿に夜光の玉もがな」

お-なべ 阿鍋 (名) げぢよ(下女)の稱。

お-なほし (名) 【動】ふな(鮒)をいふ、女詞。

お-なま (名) 一 なます(膾)をいふ、女詞。二【建築】完全にして、疵なきものの稱。

お-なめ (名) おもひもの(思者)をいふ。南部の方言。物類稱呼

お-なら (名) へ(屁)の異名。鷹筑波「そよと春邊に匂ひぬるかな(の句に) いにしへのおならの京の八重櫻」

お-なり 御成 (名) 出で行くことの敬語。宮方・攝家・將軍などにいふ。若狹國今宮名領主次第「御成り有りて、玉華院に入御」

おなり-ぎり 御成切 (名) 碁石ほどの大きさに、丸くおしひらめたる猪の子餅。古へ將軍より、紙に包みて臣下に賜はりしもの。貞丈雜記

おなり-そうぶぎやう 御成總奉行 (名) 武家時代の職名。將軍諸家に臨まるる折り、諸家にて臨時に命ずるもの。御成りに關する諸事を指揮す。

おなり-には 御成庭 (名) 中に垣など設けざる庭。怪しき者の隱れ忍びて不敬などする虞れなきより、宮方・攝家などの出入する所に此の制を用ふ。

おなり-みち 御成道 (名) おなりの時の通路。

お-なんど 御納戸 (名) 一 なんど(納戸)の敬稱。若風俗「おなんどより、路金まで賜はりて」二 江戸城大奥の間の名。衣服を脱ぎ替へ、化粧などする所。三 おなんどやく(御納戸役)の略。四 次條の略。娘節用「藍おなんどの唐縮緬、裾に光琳の鶴の染めだし」

おなんど-いろ 御納戸色 (名) 染色の名。鼠色を帶びたる藍色。

おなんど-かた 御納戸方 (名) 次條に同じ。

おなんど-やく 御納戸役 (名) 江戸時代の職名。幕府・諸大名の御納戸を掌りて、衣服・器物の出納をする役。おなんどかた。

おに 鬼 (名) 一 死人の靈魂。和名二「人神曰鬼」四聲字苑云、鬼、人死神魂也」名義抄「神(オニカミ)」二 幽魂など、祟りをなす無形の物の稱。もののけ。幽靈。神代紀上「此用桃避鬼(オニ)之緣也」欽明紀「言鬼魅(オニ)不敢近之」三 想像上の生物。人類の形をなし、口は耳の邊まで裂け、銳き牙を有し、頭に牛角あり。裸體にして腰に虎の皮を絡ひ、相貌獰惡にして怪力ありといふ。しこめ。羅刹。夜叉。竹取「鬼のやうなるもの出で來て、殺さんとしき」著聞廿「鬼は物いふことなし。其のかたち身八九尺ばかりにて、髮は夜叉の如し。身の色赤黒く、まなこまろくして猿の目の如し。皆はだかなり。身に毛おひず」四 勇猛なる者、荒く恐しき者の稱。國姓爺後日合戰「中にも小西の何某、加藤の鬼令官なんどといふ猛將」五 無慈悲にてむごき者の稱。六 借金とり。債鬼。七 鬼事(オニゴト)の遊戲に、人を捕らふる役の稱。八 飲食物の毒見。おになめ。おにとり。鎌倉年中行事「御臺をば、手長而道まで持てまゐり、役人にあづけ申す時、持參あり、如常殿中「おにを被申」九 おにがはら。かたおに・くわんすおに・めんおになどあり。

(おにがはら)　(かたおに)　(くわんすおに)　(めんおに)

おに が とふ 鬼問 地獄の鬼が、見たりや食ひたりやと問ふ程、著名の名所又は名物をいふ。卜養狂歌集(異本)「十團子を食へといふ。その仔細は、來世にて、宇津の山の十團子を食うたかと鬼が問ひけるほどに、是非食へといひければ」好色子鑑「草津の姥が餅、清見寺の膏藥とは、地獄にて鬼が問ふ」

おに が わらふ 鬼笑 來年の事をいへば鬼が笑ふに同じ。らいねん(來年)の條を見よ。

おに とも くみ さう 一 いかにも强さうなること。元氣みちみちたる譬へ。太閤記五「聊か休息し侍りし驗しにや、氣力殊の外附いて、鬼とも組みつべうぞ覺えたる」二 ものの情を知らぬに譬ふる語。冥途飛脚上「鬼とも組まん八右衞門、ほろりと涙ぐみ」

おに の くび を とる 爲し難き事を成し得たり。大いなる手柄を立てたり。夕霧阿波鳴渡中「大豆で打ち出す鬼の首、取ったやうにぞ申しける」

おに は そと 鬼外 福は內、鬼は外の略。ふく(福)の條を見よ。

おに ひとくち 鬼一口 物の僅少なること。又、事の容易なる譬へにいふ語。謠山姥「古への鬼一口の雨の夜に、雷なりさわぎ恐ろしき」小町踊「日に見えぬ鬼一口か秋の風」艶狩劍本地五「惟茂殺すはおのれを頼まず、鬼一口に嚙んでやる」

おに を あざむく 欺鬼 力猛く又は相貌恐ろしくて、鬼かとあやまる。國姓爺三「鬼を欺く國姓爺、龍虎と勇む吳將軍」

おに を すに さして くらふ 恐るべきものをも眼中におかず。勢すさまじきに譬ふ。盛衰記卅七(本侍合戰)「形勢は、鬼を酢に指して食はんずる景氣也」

(諺)**鬼が出るか、佛が出るか** 來たらんとする運命の豫測し難くして、氣づかはしきにいふ。

(諺)**鬼に金棒** 猛き鬼に鐵棒を授け持たしむること。一層强さを添ふる譬へ。吾吟我集七「軒にふく瓦をとめてさす釘や、手づよく見ゆる鬼にかな棒」國姓爺三「母が遺言、釋迦に經、父が庭訓、鬼に鐵棒」

(諺)**鬼にきもとらる** いたく恐るるさまをいふ。袖中抄(たましひのまを)「諺に曰はく、鬼に神(モ)とらるるといふは是れ也」宇治拾遺二「この人のけしき、今は逃ぐともよも逃がさじと覺えければ、鬼に神(モ)とられたるやうにて、倶に行くほどに」

(諺)**鬼に衣** 狼の法衣(コロモ)に同じ。おほかみ(狼)の條を見よ。世話盡「鬼に疣、鬼に衣の用なき」本朝町人鑑中「形は出家になれども、中中內心は皆鬼に衣なり」

(諺)**鬼のこない時洗濯せう** 鬼の留守に洗濯に同じ。後撰夷曲集九「我が心鬼のこぬまに洗濯せう、欲垢ありて隱れ期はうし」

(諺)**鬼の空念佛** 姦惡なる者の、心にもなき慈悲をよそふ譬へ。

(諺)**鬼の念佛** 前條に同じ。

(諺)**鬼の目に涙** 殘虐なる人にも、時ありて情ある譬へ。後撰夷曲集九「たてかねし擅を見たら地獄なる、鬼の目にもや涙流さん」文武五人男二「鬼の目に涙とは此の事よ、腹筋やと、樣樣嬲り弄び」

(諺)**鬼の留守に洗濯** 監督者なき間に休息をすべしとの譬へ。

(諺)**鬼も十七、山茶も煮ばな** 次條に同じ。

(諺)**鬼も十八** 次條の略。毛吹草「鬼百合も今十八か花盛かり」醒睡笑六「彼の博奕うち、鬼の尻をそと知らぬふりしてつめりけり。鬼がいふ、妥な人は、豊中にと。鬼も十八といふ事あれば、おくゆかしくや」

(諺)**鬼も十八、番茶も出ばな** 醜く又價なきものも、或る時機には他を引きつくる力あること。

おに 鬼 (接頭) 異形、又は龐大なるものに稱する語。「おにがに」和名廿「貫衆(於爾和良比)」

おに-あさ (名) 【植】いらくさ(蕁麻)の異名。

おに-あざみ (名) 【植】やはずあざみ(飛廉)の異名。續猿蓑下「茨ばら咲きそふものもおにあざみ」

おに-あさり 鬼淺蜊 (名) 【動】軟

體動物、鱗鰓類の一種。文蛤科に屬す。殼はあさりに比して脆れて短く質厚くして、齒は三箇所にあり、殼緣も赤齒を有し、放射肋粗く瓦狀をなし、表面は淡褐色にして內面は白色なり。本邦、中部の海中に產す。

おに-あそび 鬼遊 (名) おにごと(鬼事)に同じ。

おに-あば (名) 【植】おほあば(樂)の異名。

おに-あふぎ 鬼扇 (名) 能樂にて、鬼の持つ扇。赤地に一輪牡丹などを畫く。

おに-いた 鬼板 (名) 棟の兩端、鬼瓦のあるべき所(おほひとす)て、飾りとする板。其の左右の下方にある飾りをひれといひ、渦卷・波・若葉・雲などの形を用ふ。

おに-うこぎ (名) 【植】五加科、五加屬の落葉灌木。幹の高さ數尺乃至一丈、刺あり。葉は互生、掌狀複葉、五小葉より成り、各小葉は長菱狀、裏面に絨毛ありて、うこぎに比し一般に大なり。夏日、白色の小花を繖形花序に排列す。我が國、各地の山地に自生す。

おに-うち 鬼打 (名) おにやらひ(追儺)に同じ。小町曲「鬼打といふはまことか除夜の豆」

おに-うち-ぎ 鬼打木 (名) 正月の始め、疵なき木をとりて來に葉を殘し、門に寄せかけおくもの。江戸時代、正月十四日の年越に立てたり。おにぎ(鬼木)で射石(ゆ)(鬼打木仁王の門に無かりけり」

おにうち-まめ 鬼打豆 (名) おにやらひの時、鬼を追ひやるとて打ちまく豆。

おに-うど 鬼獨活 (名) 【植】ほまうどの異名。

おに-おさへぎ 鬼押木 (名) おにさへぎ(鬼押木)に同じ。

おに-おどし 鬼威 (名) おにやらひの時、鬼を威し逐ふとて飾るもの。下文を見よ。道の幸「菊川に出づれば、家毎に長き竿にいかき附けて樅さしたるを、扉の柱に結び添へて立てたり。何ぞと問へば、節分(せつぶん)で御座りますから、おにおどしを立てますると云ふ」

おに-おに 鬼鬼 (名) おにごと(鬼事)をいふ、陳前國仙臺の方言(物類稱呼)。

おに-おに-し 鬼鬼 (形) 鬼の如きまなり。猛く恐ろし。なさけ心なし。殘虐なり。源夕霧「うたげにもの給はせなす姫君かな、いとおにおにしう侍るさがなものをとて」

おに-ぶろし 鬼下 (名) わさびおろしに似て、齒のあらきもの。

おに-が-しま 鬼島 (名) 昔、鬼の住めりと言ひ傳へし島の名。狂言「貴(ぶ)、昔、鎭西の八郎爲朝と申す御方が、鬼が島へござったれば」

おに-がしら 鬼頭 (名) 古語。おほがしら(魁)に同じ。名義抄「魁(おほがしら)、鬼」

おに-がた-の-はた 鬼形幡 (名) 紋所の名。かぢのは(梶葉)を見よ。

おに-かぢの-は 鬼梶葉 (名) 紋所の名。かぢのは(梶葉)を見よ。

おに-がに 鬼蟹 (名) 【動】へいけがに(平家蟹)の異名。

おに-がはら 鬼瓦 (名) 屋根の棟の鴟に置く大なる瓦。鬼の面などに象る。惡魔降伏のためなりと。一說、河伯の形にて、火防のためなりと。重井筒「道は三途のかはら葺き、霜の劍の山冴えて、ここに地獄の鬼瓦」 紋所の名。おに(鬼)を見よ。

(諺)**鬼瓦にも假粧** 醜きものも、假粧すれば見惡からずとの譬へ。毛吹草「朝霜は鬼瓦にも假粧かな」

おに-がみ 鬼神 (名) 荒く恐ろしき神。きしん(鬼神)。源若紫「いとやはらかにの給ひて、鬼神もあらだつまじき御けはひなれば」

おに-がや (名) 【植】いぬがや(粗樠)の異名。

おに-がら-やき 鬼殼燒 (名) 料理の語。蝦を殼のまま附燒にしたるもの。

おに-き 鬼木 (名) おにうちぎ(鬼打木)に同じ。

おに-きしん 鬼鬼神 (名) 鬼神(おに)に鬼を重ねて、意を强めいふ語。室町千疊敷「ええ胴慾な鬼鬼神」

おに-きた 鬼北 (名) 【北東を鬼門といふによるか】二月の風。丑寅卽ち、北東の方より吹くをいふなるべし。漢內・中國の船人の詞(物類稱呼)。

おに-く (名) 【植】きむらたけ(肉蓯蓉)の異名。

おに-くこ (名) 【植】くこ(枸杞)の異名。

おに-くさ (名) 【植】紅色藻類、石花菜(ぎ)屬の海藻。體は扁平、兩緣薄く、中肋を有す。中肋は上部に至れば不明となる。兩緣より不規則に枝を踈生し、且つ兩緣並びに枝端等より、基部細く長楕圓形にて二三回羽狀に分岐せる小枝を密生す。全體濃紅紫色を帶び、軟骨樣なり。我が國、諸所の淺海、浪荒き岩礁に自生す。寒天を製すべけれど、質は劣れり。

おに-くび 鬼喰 (名) 食物の毒見をすること。鬼喰(ぐい)をなすこと。四季物語六月「鬼喰をさせて、宮內のかみをしてまゐらすれば」

おに-くるみ 山胡桃 (名) 【植】胡桃(くるみ)科、胡桃屬の落葉喬木。幹の高さ四五丈。葉は奇數羽狀複葉にして、各小葉は長楕圓形または楕圓狀倒卵形、鋸齒を有し、毛茸あり。花は單性、雌雄同株、葇荑花序に排列し、雄花は緣色、雌花は稍赤色を帶び、六月頃開く。果實は核果なり。我が國、各地の山地に自生す。種子は食用に供し、又之より油を搾り、材は器具用とし、樹皮は染色用に供す。

おに-くわんざう 鬼萱草 (名) 【植】やぶくわんざう(千葉萱草)の異名。

おに-けし 鬼罌粟 (名) 【植】罌粟(ぞく)科、罌子粟屬の多年生草本。莖に粗毛を有す。葉は羽狀に深裂し、各裂片は線狀長楕圓形、鋸齒を有す。五月頃高く花莖を抽出し、濃赤色、大形の花を開く。近年、船載の觀賞用植物なり。

おに-こ 鬼子 (名) 【狂言(石)三(流)】昔から、親に似ぬ子は鬼子ぢやとぞふが」 鬼の如き子。浦島年代記「きあ、鬼子と熊との棒捻ぢや、前代未聞」

おに-ご (名) おにごと(鬼事)に同じ。

おに-ごと (名) 醜惡なる鬼。十訓抄「鬼ここめをも物ならず思へる武士は、おそろしきものぞ」 砂石集「あら手にて、鬼ここめのやうなりし輪田が一門を、かけ散らしたりし武士也」

おに-ごころ 鬼心 (名) 鬼の如く殘虐なる心。落窪「げにや、天が下の鬼心の人も、え憎み奉らじ」

おに-ごっこ (名) 次條に同じ。

おに-ごと 鬼事 (名) 【狂言】鬼樂の語。土蜘蛛・羅生門などの如く、鬼・惡魔など

を仕手に仕組みたる能。 小兒の遊戲。一人鬼となり、衆童を追ひて捕らへ、其の捕らへられたる者、代はりて鬼となるもの。おにごっこ。おにごと。おにわたし。おにんぶくろ。おにあそび。つかまへぼ

おに-ごのみ 鬼好 (名) おにころし(鬼殺)を見よ。下野國日光の方言(物類稱呼)。

おに-ごぶし (名) 【動】軟體動物、腹足類の一種。おにこぶし科に屬す。殼は堅固なる紡錘形をなし、螺塔は僧層よりも少しく短く、隔たりたる螺肋上に、鋭くして大なる刺狀結節を有し、肩角上の結節は殊に大なり。淡褐色の稍厚き表皮を被り、帶黃白色の地に黑褐色の雲影ありて、不規則なる廣き縱橫帶をなし、口內は帶白色なり。

おに-ことあがい 鬼熊川 (名) 熊川(ぐまがは)の一種。

おに-ことろし 鬼殺 (名) 味辛く、酒精分の强き惡酒。やれいたざけ(野生おにごころ)下野でつべん(邊河物語)。 烟草の一種。極めて氣のつよき下等品。

おに-さへぎ 鬼押木 (名) 伊勢神宮の邊にて、正月門松の根のもと又は戶外に、罐にて橫筋を引きて立つる割木。おにおさへぎ。

おに-し 御西 (名) 眞宗の信者の語。西本願寺派の稱。(御東の對)

おに-しだ (名) 【植】おにやぶそてつ(海蝦青)の異名。

おに-しば (名) 【植】木本科、結縷草(ぞう)屬の多年生草本。莖は細く剛硬、地上を匍匐し、各節より根を下生す。葉は細長、剛質にして尖り、殆ど平滑なり。夏季、褐色の花を開き、短き穗狀花序に排列して太し。我が國、各地の海濱に自生す。しばに似て大形なるものなり。

おに-しばり 黃瑞香 (名) 【植】瑞香(ずいかう)科、瑞香屬の落葉灌木。幹の高さ三四尺。葉は倒長卵形全緣、枝頂に叢生し、冬季は存し、夏季に至れば脫落す。淡黃綠色の花は葉腋に簇生し、赤色楕圓形にして美なる果實を結ぶ。我が國、各地の山野に自生し、又觀賞用として栽培す。樹皮の纖維は製紙の原料に供す。我邊の物には有毒の物質を含めり。こせう。なつばうず。

(りばしにお)

おに-しぼり 鬼絞 (名) しぼりぞめの一種。その形の粗く大なるもの。

おに-すぎばら 鬼杉原 (名) 次條の略。

おに-すぎばらがみ 鬼杉原紙 (名) 杉原紙の一種。版は大中(だいち)と同じくて、色は鮮明ならず。すきこみ。十帖紙。 檀紙の一種。備中國松山產出の小高の一名。

おに-すけ (名) 【植】みくりすげの異名。

おに-すすべ (名) 【植】ほこりたけ(馬勃)の異名。

おに-ぜり (名) 【植】うまのあしがた(毛莫)の異名。

おに-せんべい 鬼煎餅 (名) 鬼の面の如く、醜くふくれたる煎餅。賢女心袵(泉鏡花)「所の名物、鬼煎餅を賣る」

おに-ぜんまい (名) 【植】薇(ぜんまい)科、薇屬の多年生草本。根莖は强大なり。葉は叢生し、高さ二乃至七尺、巾五乃至八寸に達し、二回羽狀に分裂し、各裂片は線狀長楕圓形、最後の小裂片は楕圓形鈍頭なり。二三の葉は中央部收縮して胞子を著け、實葉に變ず。此の部は熟すれば褐色の胞子を飛散す。幼葉は綿毛を蒙りて卷旋すること薇(ぜんまい)の如し。我が國、各地の山野に自生す。 こもちしだの異名。

おに-たて (名) 【植】おほけたて(鉈草)の異名。

おに-だひ 鬼鯛 (名) 【動】まつかさうを(松毬魚)の異名。

おに-たびらこ 黃鵝菜 (名) 【植】菊科、黃鵝菜屬の草本。莖の高さ一二尺。葉は長篦形、不整なる羽狀に深裂し、鋸齒を具へ、やや菜蕓(ぞう)に似たり。花は黃色にて、莖頂に數多生じ、頭狀花序に排列し春季開く。果實は冠毛を有し、風に從ひて飛散す。我が國、各地の路傍・庭園等に自生す。

おに-だまり 鬼會 (名) 鎧の胸板の異名。

おに-たらし (名) おんたらし(御執)の訛り。下學集「御多羅(おんたらし)枝(えだ)」

おに-づた 鬼蔦 (名) 紋所の名。つた(蔦)を見よ。

おに-つつじ (名) 【植】れんげつつじ(羊躑躅)の異名。

おにつら-だらいん 鬼貫導引 (名) 【攝津國伊丹の俳諧師、上島鬼貫の創めたるよりいふ】按摩の一法。小兒の足より上へもみ上ぐるもの(傳授)。

おに-と 鬼斗 (名) 隅肘木(すみやぢき)の上に置かるる斗形(ますがた)。其の面は他の斗の面と同じ見通しに置かれ、隱ひて斗繰は特別なる形をなす。いがと。角斗。菊斗。

おに-どころ 山草藥 (名) 【植】葇荑(ぞくず)科、葇荑屬の多年生草本。細き蔓莖は有して他物に纏繞す。葉は心臟形鋭頭、長き葉柄を有す。花は淡黃色にて單性、雌雄異株、葇腋に生ずる長き穗狀花序に著き、夏日開く。我が國、各地の山野に自生す。根は苦味ありて食ふべからず。えどところ。おほどころ。きどころ。本草和名「草蘚(ぜんたい)、枕人(ちんじん)、「おにどころ」」

おに-どころ (名) 【植】きくばどころの異名。

おに-どの 鬼殿 (名) 妖怪の出づる邸宅。ばけものやしき。今昔「三條よりは北、東の洞院よりは東の角は鬼殿と云ふ所也(中略)その三條東の洞院の鬼殿の跡に、大きなる松木有りけり」

おに-とり 鬼取 (名) 食物の毒見をすること。おに。

おにとり-やく 鬼取役 (名) ぜんぶきやく(膳奉行)に同じ。

おに-なべな (名) 【植】山蘿蔔科、なべな屬の二年生草本。莖の高さ六尺。葉は對生、廣披針形、粗鋸齒を有し、相對せる葉の葉脚互ひに合著せり。花は紫色にて頭狀花序に排列し、秋季開く。果實は楕圓形にて、全部に鈎刺を有す。歐洲の原產なり。果實は羅紗製造の際、毛を掻き出だすに用ひらる。

おに-なめ 御煮嘗 鬼嘗 (名) 貴人に供する食膳の毒味をすること。おに。

おに-なるこ (名) 【植】莎草科、藨(ぼう)屬の多年生草本。莖の高さ一二尺。葉は細長、尺餘に達す。花は單性、雌雄同株、穗狀花序に排列し、花序は葉腋及び莖頂に生ず。莖頂に一二箇の雄花穗、其の下方に二三箇の雌花穗を生じ、五月頃緣褐色を呈す。我が國、各地の原野水濕の地に自生す。おになるこすげ。

おになるこ-すげ (名) 【植】前條の異名。

おにのう　鬼能（名）能樂にて、藤戸・山姥の如く、鬼に關する事を脚色とせる能。常に四番目に演ずるを以て四番物ともいふ。

おに-の-かは　鬼皮（名）昔時、除暦三月三日に食する草餅の異名。塵添壒囊抄「餅供」に「三月三日の草餅は、鬼の皮とて食するなり」

おに-の-からかさ　（名）【植】らんからはぐまの異名。

おに-の-さぬ　鬼衣（名）死人の著物。字鏡集「袋」

おに-の-くるま　鬼車（名）〔格物論に、胡蝶一名鬼車とある字の直譯〕【動】てふ（蝶）の異名。雅楚辭集「蝶の名を思ひまはせばおそろしく、鬼の車とのする書もうし」

おに-の-けし　續斷（名）【植】菊科、苦菜屬の一年生草本。莖の高さ一乃至數尺。葉は下部のものは倒卵形又は笹形にして葉柄あり、上部のものは橢圓形又は披針形、共に羽狀に淺裂するか或ひは齒牙緣をなし、葉脚は耳形をなす。夏秋に互りて淡黃色の花を開き、頭狀花序に排列す。歐亞大陸の原野に自生す。

おに-の-こ　鬼子（名）【動】みのむし（蓑蟲）の異名。藻鹽草「鬼子の子」「蓑蟲の事」「枕」「みのむしいとあはれなり。鬼の生みければ、親に似て、これもおそろしきここちぞあらんとて」

おに-の-さら　鬼皿（名）〔おにごと（鬼事）をいふ、常陸國の方言。俗語雜呼〕〔小兒の遊戯の一。下文を見よ。牛馬問「わらんべどもの遊びに、友を集めて、左右の手を寄せて數へ、鬼の皿と云ふことをす」

おに-の-しこぐさ　鬼醜草（名）【植】しをん（紫苑）の古名。藻鹽草「紫苑。おにのしこ、草（此れにつづき稽稽の誤もあり。）」

おに-の-つぶて　鬼礫（名）いはつぼ（石壺）に同じ。

おに-の-はらわた　鬼腸（名）古へ陰暦七月七日に、瘧病のまじなひなりとて食ふ索麺の稱。塵添壒囊抄「七月七日、索麺、鬼腸（オニワタ）とて食べ之」

おに-の-ま　鬼閒（名）清涼殿の中にある室の名。壁に白澤王、鬼を斬る繪ある故に名づく。榮華（ヒ）「内にて、鬼の閒の方にさぶらへば、御前に召して有樣など問はせ給ふに」禁祕抄「鬼閒（中務）南壁白澤主切ノ鬼繪」

おに-の-まゆ　鬼眉（名）重陽の節に、酒にひたす菊の花。塵添壒囊抄「九月九日の菊の花は、彼の鬼の眉とて、酒に入れて飲之。惡病を去けて命長し」

おに-の-まゆはぎ　（名）【植】やはずあざみ（飛廉）の異名。

おに-の-み　鬼飲（名）酒など、毒見のために、先づ飲み試むること。御傘「盃をはじむるを鬼のみといふ事あり」

おに-の-やがら　天麻（名）【植】蘭（ラン）科、天麻（オガラ）屬の一年生草本。朽木に寄生す。高さ五六寸にして、全體白色半透明なり。頂端に白色の一花を開く。我が國、各地の山野に自生す。おにやがら。かみのやがら。かみのや。てんま。ぬすびと。のあし。和名抄「續斷（後漢書）云、是乃復加良」

おに-ば　鬼齒（名）やくばの、牙の如く外に向かひたるもの。

おに-はしり　鬼走（名）社寺などにて牛王の祭の時に、鬼を追ふこと。

おに-はす　茨實（名）【植】薤蓮科、茨實屬の多年生草本。水生植物なり。根莖に有し、之より葉を出だす。葉は楯狀圓形、裏面は紫色を呈し、葉脈著しく隆起し、徑五六寸に達す。花梗の頂端に、紫色に一て徑一二寸の一花を著け、夏日開く。葉・花梗等總べて刺多し。我が國、暖地の池沼に自生す。種子及び根莖は食ふべし。いばらばす。けとう。みづぶき。みづぶき。

おに-はなびし　鬼花菱（名）紋所の名。はなびし（花菱）を見よ。

おに-ばば　鬼婆（名）奸惡また無慈悲なる老婆を稱する語。

おに-ばり　（名）【植】せんだんぐさ（鬼鍼草）の異名。

おに-は-を-はく　御庭掃（句）追從をなす。詔ひをなす。

おに-び　鬼火（名）沼澤などの濕地に、雨夜など、青く燃え出づる燐火。きつねび。いうれいび。陰火。和名抄「燐（太素經）鬼火也。人及牛馬兵死者血所化也」

おに-びし　（名）【植】菱（ヒ）科、菱（ヒ）屬の一年生草本。水生植物なり。水底に根を生じ、葉は細長き莖に依りて水面に浮かび、沈生葉にして橢狀に細裂したると、尋常葉にして叢生し、菱狀、卵形、鋸齒、又は廣楔形を緣なるとの二類あり。花は葉腋に生じ、白色にて四瓣なり。堅き閉果を結び、四本の稍曲がれる棘を具ふ。我が國、各地の池沼に自生す。

おに-びし-かぢのは　鬼菱梶葉（名）紋所の名。

おに-ひのき　（名）【植】あすなろ（羅漢柏）の異名。

おに-ひら　鬼平（名）鷹の足部の名所。たか（鷹）を見よ。

おに-ひるぐさ　（名）【植】ほしりどころ（其宿）の異名。

おに-ふすべ　（名）【植】ほこりたけ（馬勃）の異名。本草和名「馬勃（弘景）一名鬼蓋（蓋）」

おに-へご　（名）【植】へご（杪欏）の異名。

おに-ほし　鬼星（名）きしゅく（鬼宿）に同じ。

おに-ほぼづき　（名）【植】いがほほづき（刺酸漿）の異名。

おに-まひ　鬼舞（名）古語。おにやらひ（追儺）に同じ。字鏡集「儺（オニヤラヒ）」

おに-みかげ　鬼御影（名）みかげ石の質粗きもの。

おに-みそ　鬼味噌（名）〔燒味噌の辛きもの。（蓼蟲）〕〔名のみにて、質惡しき味噌。見かけのみにて内心弱き人に譬へていふ。よわみそ。太平記（三）「唐橋や隱の小路の燒けしこそ、桃の井殿は鬼味噌をすれ」日本振袖始「近頃弱味噌・鬼味噌の汁かゝ、鬼喰ひ殘す殘念殘念」

おに-みつば　（名）【植】うまのみつば（變豆菜）の異名。

おに-むし　鬼蟲（名）【動】かぶとむし（兜蟲）の異名。

おに-むしゃ　鬼武者（名）極めて强猛なる武士の稱。

おに-むすめ　鬼娘（名）〔一竹惡なる娘。〕〔二醜〕恐ろしき姿の娘。

おに-めろ　（名）【植】まるめろ（榠樝）の異名。

おに-もぢ　鬼綟（名）荒く絞りたるもちがた。

おに-もみぢ　（名）【植】槭樹（モミ）科、槭樹屬の落葉喬木。葉は對生闊形、五深裂し、上面平滑、葉脚は心臟形、各裂片には鋭頭數箇の粗鋸齒あり。春季、葉に先だちて淡黃色の花を開き、密繖狀總狀花序に排列し、雄性なり。果實は翅果。我が國、各地の山地に自生す。おほばな。

おに-やがら　（名）【植】おにのやがら（天麻）の異名。

おに-やく　鬼役（名）飲食の毒味の役。

おに-やけ　（名）〔一わかしゅ（若衆）の異名。〔二かうもん（肛門）〕の異名。俗語雜賢〕

おに-やぶそてつ　海蝦青（名）【植】木龍骨科、貫衆（ヤブソテツ）屬の多年生草本。地下に根莖を有し、之より大なる羽狀複葉を簇生し、葉柄の基部は茶褐色の鱗片を被り、各小葉は倒楔狀鋭頭、やや歪形を呈し、質厚くして少しく光澤あり。子囊群は圓形にして、葉裏に不規則に附著す。我が國、海濱に自生す。おにしだ。

おに-やぶまを　追儺（名）【植】のまをの異名。

おに-やらひ　鬼遣（名）昔、十二月晦日の夜、人を疫病の鬼に扮裝せしめて追ひ遣ふ式。儺遣（ナヤラヒ）。追儺（ツイナ）。後世は、節分の夜、大豆を炒りて鬼打豆と稱し、福は内鬼は外と喚びて、それを打ち撒く。まめうち。まめまき。

おに-やんま　（名）【動】昆蟲類中、脈翅類の一種。とんぼの類。黃色にして眼は頭上に相接し、尾端に葉狀片無く、大形なり。本邦、到る處に產す。

おに-ゆり　卷丹（名）【植】百合（ユリ）科、百合屬の多年生草本。莖の高さ數尺に達し、地下に鱗莖を有す。葉は互生、披針形全緣、葉柄無く、葉腋に珠芽を生ず。莖頂に赤色の花をつけ、紫點ある大なる花被を有して美なり。我が國、各地に栽培せられて觀賞用とし、又鱗莖を食用とす。いぬゆり。けんたん。帝山丹。六帖

おに-よけ　鬼除（名）おにころし（鬼殺）に同じ。

おに-わかめ　（名）【植】褐色藻類、おにわかめ屬の海藻。體は大にして褐色、莖部は太く圓柱狀なり。葉狀部は扁平、太き中肋を有して單一なれども、通常左右より深裂す。實葉は多數莖部の左右に生じ、各短き柄を有し、扁平なる葉狀物なり。我が國、北海道の淺海に自生す。

おに-わたし　鬼渡（名）おにごと（鬼事）の異名。おにごっこ。浮世床「鬼渡しや、草履蹴しをする仲間だはな」

おに-わらは　鬼童（名）鬼の如き姿したる童。枕「御使にいきたりけるおにわらはは、臺盤所のとじといふものの供なりけるを」

おに-わらび　（名）【植】おほかぐま（狗脊）の異名。字鏡「母衰（良紀）」「狗脊（紀）一名鬼狗（良比）」和名抄「貫衆（紀）一名鬼狗（良比）」「おにわらび」

おに-ゐるかど　鬼居門（名）〔鬼門の字の譯語〕きもん（鬼門）に同じ。

おに-をどり　鬼踊（名）鬼の踊、又鬼に擬して踊ること。生玉心中「罪業の程思はれて、呵責恐ろし、鬼踊の寺の籔垣物凄く」日本振袖始「脊屬どももいきいきと悅び勇み跳ね廻はる。鬼踊ともいつつべし」

おに-をんし　（名）【植】ひめはぎ（遠志）の異名。

おに-ん-ぶくろ　（名）おにごと（鬼事）の異名。

おぬし　御主（代）そなた。おまへ。おのし。（同輩以下の對稱に用ふ）狂言「「やいそこなもの、おぬしが所へは、もはやあの娘はやらぬぞ」同「「おぬし願むことでない。のかしめ」

おぬめり　（名）【動】なまこ（海鼠）をいふ、女詞。

おね-の-こ　（名）おほねらの子。おほねらを見よ。藥師通夜物語「白鼠・野鼠・廿日鼠・こねら・おねら・おねの子、產屋の内の赤鼠に至るまで、皆これ飢饉に及び申し」

おねば　御根葉（名）にぬき（煮拔）をいふ、女詞。

おねば　御枯（名）ことをしげみこちたみ、已世世（モロ）にいまだ渡らぬ朝川渡る」

おねむ　御睡（名）〔ねむはねむりの略〕ねむる（眠）をいふ、幼兒の語。

おね-ら　（名）大なる鼠の稱。藥師通夜物語「白鼠・野鼠・廿日鼠・おほねら。」こねら・おねら・おねの子、產屋の内の赤鼠に至るまで、皆これ飢饉に及び申し」

おねり　御練（名）〔一そろそろ歩くこと。〔二寺院にて行ふ行道の儀式。

おの　己（名）おのれ（己）に同じ。天智紀「橘は於能（オ）が枝なれれども、玉にぬく時おやじをにぬく」萬「意乃（オ）が身し、いたはしければ」

おの-がいろいろ　己色色　次條に同じ。續古今「雲しきてふる春雨はわかねども、秋の垣根はおのがいろいろ」

おの-がさまざま　己樣樣　次條に同じ。勢語「今までに忘れぬ人は世にもあらじ、おのがさまざま年のへぬれば」

おの-がじし　おのおの思ひ思ひに。おのがさまざま。萬「各寺師（ジ）ひとしなすらし、妹に戀ひ日にけに瘦せぬ、人に知らえず」貫之集「おく霜の心やわける菊の花、うつろふ色のおのがじしなる」

おの-がしなしな　己品品　おのがさまざま（己樣樣）に同じ。前條を見よ。風雅「法の雨はあまねくそそぐものなれど、うるふ草木はおのがしなしな」

おの-がちりぢり　己散散　めいめいばらばらに。古今「秋の紅葉と人人は、おのがちりぢりわかれなば」

おの-もよ　おのがよ。わが世。萬「人ことをしげみこちたみ、已世世（モロ）にいまだ渡らぬ朝川渡る」

おの-が-よよ　己世世（名）夫婦離

（諺）**おのが田へ水を引く**　自分だけ都合よきことを計る譬へにいふ。良經集「小山田の苗代水のひきひきに、わかつや人の心なるらん」

おの　（名）古語。おもて（表）。おも。おのと。萬「針袋とりあげ前に置きかへさへば、おのとも於能（オ）や、裏も繼ぎたり」

おの　（感）古語。疑ひ怪しむ時、發する聲。おんの。やあ。字鏡「吁（也疑反）訝（紀）」

おの-おの　各（代）多人數の場合の對稱に用ふる語。かたがた。おのおのがた。あなたたち。各位。狂言「某も、各を近日申し入れうと思ふが、何とあらう」心中刃氷湖日「平兵衛が咄で聞きました大和の雪駄屋殿は、各で御座るか」

おの-おの　各（副）ひとりびとり。ひとびと。めいめい。それぞれ。各自。竹取「賜はせたる物は、おのおの分けつつ取り」勢語「おのおの親ありければ、つつみて、云ひさして止みにけり」

おのおの-がた　各方（代）おのおの（各）に同じ。

おの-が-たかばかり　（名）己れが手の大ゆびと人さしゆびとをひろげて、それを五寸とし、又其のひとさしゆびの中のふしと上のふしとの閒を一寸として丈を度ること。貞丈雜記

おの-が-どち　己同志（名）自分どもの仲閒。字津保（藤原）「人も聞かぬ所にて、おのがどち隱したる手ども」あちはして見侍らんこそはえなかるべけれ」

おの-が-むきむき　己向向（副）各の心の向きたる方に。思ひ思ひに。觀詞式（ナ）「己乖乖（オノガムキ）不合在」萬「はふ葛の各各向向（オノガムキ）」あま雲のわかれしゆけば」

別して、各自に世を渡ること。勢語「おのが世世になりにければ、疎くなりにけり」後撰五「竹のもとのふるねはかはるとも、おのがよとにはならずもあらなん」

おのがれ (代) おのれ(己)に同じ。

おのさ (代) おぬし。おのし。参河國の方言

おのさま 己様 (代) あなた。そなたさま。おまへさま。おのさん。緋縮緬卯月紅葉「おの様の女房よ、仕方の悪い事あらば、なぜ殺してなりともなされずーて」

おのさん (代) 前條の音便。本朝三國誌十四「日本はおのさんも手に餘って折りにくがる」

おのし (代) おぬし(御主)の轉。狂言「おのしとおれと組み合うたぎせいはえいぎせいではないか」

おのじな お字名 (名) お梅・お竹などの如く、頭におと附きたる婦人の名。

おのせ (名) いしなご(石投)をいふ、伊勢國の方言

おのづから 自 (副) 〔物事のもとよりありしままに。其のままに。ひとりでに。自然に。天然に。おのづと。顯宗紀「功隣造物、潛酿映世」萬十一「山のべのいそしのみ井は、自然なれる錦を張れる山かも」〔もしひょっと。もしも。萬一。宇治拾遺「おのづから、歌などやいると思ひて」新古今五「おのづからいはぬをしたふ人やあると、やすらふほどに年のくれぬる」〔わざとならず。偶然。枕「わざとせうそこして呼び出づべきことにもあらぬを、おのづからしづかに、局などにあらんにもいへかし」

おのづと 自 (副) 前條に同じ。狂言「ひたもの天窟をはらせらるるが迷惑さに、おのづと御無沙汰致しまして

おのづま 己妻 (名) 古語。おのがつま。萬「於能豆麻」を人の里におき、おぼほしく見つつぞきぬる、此の道のあひだ」

おのと (名) 古語。おもて(表)。おの。萬「針袋とりあげ前に置きかへさへば、於能等」おもおや、裏もつぎたり」

おのぼりさん 御上様 (名) 京都にて見物のためのぼり來たりたる人の稱。

おのぼれ 己惚 (名) うぬぼれ(己惚)に同じ。

おのみ (名) 料理の語。雉子の首ばかり燒きて、肴に出だすこと。

おのも・おのも 各 (副) おのおの(各)に同じ。續紀「於乃毛於乃毛」真仁明

おのら 己等 (代) おのれら。われら。神武紀「諸皇子對曰「赤恆以鳶」念」宇津保「おのらがいとけなきを見捨てて、天上へ歸り給ひにしかば」

おのれ 己 (名) 其の人また其の物自身。自分。自身。おの。枕「女は、おのれをよろこぶものために、頭つくりす」源夕顔「白き花ぞ、おのれ獨り名みの眉開けたり」

(諺)己れの頭の蠅を追へ　他人の事に容喙せんよりは、むしろ自己の處置をなすべし。

(諺)己れの欲せざる所は人に施す勿れ　自分の好まぬ事は人に仕向くるな。論語衛靈「己所不欲勿施於人」

おのれ 己 (代) 〔われ。おれ。余。予。雄略紀「歴問群臣、莫能有對、故脱「ゆ」ゆ名みのらえてを」萬十「於能禮」ゆ名みのらえてをれば、あーげ馬のおもたかぶだに乘りてくべしや」宇津保俊蔭「山のあるじ、俊蔭にのたまふ。おのれは天上より來たり給ひし人の御子供なり」〔下輩に對し、又は人を屬る時の對稱代名詞。なんぢ(汝)。其のはう。うぬ。神樂梁塵「葦原田のいなつき蟹のや、於乃禮」さへよめを得ずとてや」古今仮名序「あしひきの山田のそほづ、おのれさへ我れをほしといふ、うれはしきこと」宇治拾遺十「この男、犬ども、くらへおのれ、と云へば」狂言「おのれ、人の飲まうといふ時は飲まさいで」

おのれやれ 人を罵りて、呼びかくる語。傾城反魂香十「遣手はしてもおのれやれ、一度は狩野の元信が内儀と云はれう、云はれうと」

おのれ 己 (副) おのれと(己)に同じ。萬十「いや彦の於能禮」かむさび、青雲のたなびく日すら小さめそばふる」後撰雜六「ちはやふる神にも何かたとふらん、おのれ雲ゐに人をなしつつ」源夕顔「松の木の、おのれ起きかへり」

おのれ・おひ 己生 (名) ことさらに作らざれど、おのづから生ひ出でたるもの。

おのれ・がほ 己顔 (名) われはがほ(我顔)に同じ。俊成女五「松が枝萩の葉むけにうちなびき、おのれがほなる風の音かな」

おのれと 己 (副) われと。自分と。自分ながら。ひとりぐに。續千載夏「人とはでおのれと名のるほととぎす、暮れゆく空を過ぐる一聲」

おのれめ 己奴 (代) おのれ(己)に同じ。を強めていふ語。人を罵る詞。うぬめ。狂言「殿かと思うたれば、おのれめは何してここに居るぞ」

おのれら 己等 (代) 〔おのれ(己)に同じの複數。われら。源上東「げにおのれらが見奉るにも、さなんおはします」〔なんぢ(汝)の複數。汝等。宇治拾遺十「犬どもをとり入れて云ふやう、おのれらこの日どろいたはり飼ひつるかひありて、このたびわが命にかはれ、おのれらよ」

おーは 御葉 (名) な(菜)の敬語。女詞。「おはを漬ける」

おーば (名) 「おほばの略」〔嗅母。和名三「祖母。倭雅云、父之妣爲王母」源桐壺「かの、御おば北の方」〔年老いたる女の稱。ばば。

おばあさま (名) 前條に同じ。

おばいけ (名) 鯨の尾と身との間の肉。

おばいはいーであひ (名) へつらひて、服從し來る者共を嘲ていふ語。馬鹿に附ける藥。なんでも早く呑みこみ、こじつけるゆゑ、出入りのおはいはいであひが、これはこれは、投投恐れ入つたと、やたらに褒めそやすので」

おばーおとど (名) おばぎみ。おばさま。源夕顔「あないとほしや、おばおとどの上ないたうかろめ給ひぞ」

おばーがしら (名) 【植】おきなぐさ(白頭翁)の異名。

おーはかせ 音博士 (名) おんはかせ(音博士)の略。

おはからひーかた 御計方 (名) 室町幕府の職名。諸家より獻上物の返禮すべき物を取り調べ置くことを掌るもの。おはからひのしゅう。年中定例記「右筆、御前條に同じ。

おはからひのーしゅう 御計衆 (名)

おはき 御萩 (名) はぎのもち(萩餅)に同じ。堀河狂歌集「己惜しや餅の名にある萩の花、それさへあるにつくるみそ

はぎ」

おはぎ (名) 【植】よめな(雞兒腸)の異名。うはぎ。和名十「齊蒿。七卷食經云、齊蒿菜。一名、我蒿菜、崔禹曰、狀似艾草而香、作羹食之」

おはぐろ 御歯黒 (名) はぐろめ(歯黒)をいふ、女詞。大上臈御名之事「女房詞。一、つくるかね、おはぐろ」鐵漿。

おはぐろ・おや 御歯黒親 (名) かねおや(鐵漿親)に同じ。陸摩歌十「おはてなされた母様の、おはぐろ親にならせられ、おれと兄弟同然に」

おはぐろ・つぼ 鐵漿壺 (名) はぐろめの液を納るる壺。博多小女郎波枕十「守本尊・鰯硯、鐵漿壺も詰り出で、金になれとや、口口につけて驢る驢る、雛市に」

おはぐろ・とんぼ 御歯黒蜻蛉 (名) 【動】かねつけとんぼ(鐵漿附蜻蛉)の異名。

おはさふ 御座 (自動) おはす(御座)の延。宇津保上「生まれ給ひつる御子を、うつくしみおはさふ」

おはじき 御彈 (名) 小兒の遊戯の一。數人、きさご貝の殼又は小石を出だし合ひ、一人これを集めて席上に撒布し、一箇を指先にて彈きて、他の一箇に打ち當てたる時は、其の二箇を己れの得分とし、過ちて當て損じたる時は番を次の人に讓り、次の人其の殘部を撒布して前の人の如くす。斯くして、各自所得の多少によりて優劣を判ず。

おはした 御半下 (名) おすそ(御末)に同じ。狂言「あとからおはしたが急に呼びました」

おはした・しゅう 御半下衆 (名) おすそしゅう(御末衆)に同じ。

おはし・どころ 御座所 (名) おはしましどころ(御座所)に同じ。源浮舟「おはし所等ねられ給ふ日もありと聞こえきかし」

おはしま 欄 (名) らんかん(欄干)の古名。和名十「軒檻。漢書注云、軒檻、上板也」

おはし・まさふ 御座 (自動) おはします御座の延。宇津保「こなたかなたの君たち、數をつくしておはしまさふ」同上「宮たち垣のごとおはしまさひ、よるは御めぐりにおはしまさふめれば、これかだに、え近くも參らずなん」

おはし・まし 御座 (自動) おはしまし御座の延。榮華「みかど、おはしましの所におはしませば」

おはし・ます 御座 (自動) 御座にますを添へ、一層敬意を強めていふ。ます。舞男紀「因幸」有馬」竹取「いづれ、劣りまさりおはしまさねば」遷居「御天武上、出行」到行

おはし・ます 御座 (助動) 動詞につけて敬意を強めいふ。たまふ。拾遺「天暦のみかど、四十になりおはしましける時」源桐壺「上も御涙のひまなく流れおはしますを」

おはしりしゅう 御走衆 (名) 鎌倉・室町幕府の職名。將軍出行の時、徒歩隨行するもの。小侍所に屬す。

おはす 御座 (自動) 次條に同じ。宇治拾遺「わたうだちこそ、させる能もおはさねば、物をも惜しみ給へ」

おはす 御座 (自動) 〔あり(在)を敬語。竹取「おのがもとに、しばしおはしつるなり」同「われ、朝ごと夕ごとに見る竹の中におはするにて、知りぬ」〔くる(來)の敬語。萬十「にひむろの葉草刈りに御座」給はれ、草のごと寄りあふ少女は君がまにまに」竹取「みな月の照りはたためくにもさはらず來けり」そのおはすらん人人に申し給へ」〔ゆく(往)の敬語。竹取「捨てて、はのぼり給ふぞ、具してゐておはせね」源若紫「おはする處は、六條京極わたりにて」

おはす 御座 (助動) 敬意を表すに用ふ。源夕顔「おとどいとをかしと、ほの聞きおはす」

おはた・ざし 御旗差 (名) 南北朝・室町時代の職名。官軍の目標として、錦の御旗を持つ役。太平記十四、義貞「內裏軍本」

はしますところ。おはしますべき所。おはしどころ。榮華「みかど、おはしましの所におはしませば」

おはし・ます 御座 (自動) 御座にますを添へ、一層敬意を強めていふ。ます。舞男紀「因幸」有馬」竹取「いづれ、劣りまさりおはしまさねば」遷居「御天武上、出行」到行

おはし・ます 御座 (助動) 動詞につけて敬意を強めいふ。たまふ。拾遺「天暦のみかど、四十になりおはしける時」源桐壺「上も御涙のひまなく流れおはしますを」

おはしりしゅう 御走衆 (名) 鎌倉・室町幕府の職名。將軍出行の時、徒歩隨行するもの。小侍所に屬す。

おはす 御座 (自動) 次條に同じ。宇治拾遺「わたうだちこそ、させる能もおはさねば、物をも惜しみ給へ」

おはす 御座 (自動) 〔あり(在)を敬語。竹取「おのがもとに、しばしおはしつるなり」同「われ、朝ごと夕ごとに見る竹の中におはするにて、知りぬ」〔くる(來)の敬語。萬十「にひむろの葉草刈りに御座」給はれ、草のごと寄りあふ少女は君がまにまに」竹取「みな月の照りはたためくにもさはらず來けり」そのおはすらん人人に申し給へ」〔ゆく(往)の敬語。竹取「捨てて、はのぼり給ふぞ、具してゐておはせね」源若紫「おはする處は、六條京極わたりにて」

おはす 御座 (助動) 敬意を表すに用ふ。源夕顔「おとどいとをかしと、ほの聞きおはす」

おはた・ざし 御旗差 (名) 南北朝・室町時代の職名。官軍の目標として、錦の御旗を持つ役。太平記十四、義貞「內裏軍本」より下だされたる錦の御旗中略俄かに風烈しく吹きて、金銀にて打ち附けたる日月の御紋切れて地に墮ちけるを、御旗差の秦久武周章て是れを取る」

おはた・ぞし 御旗副 (名) 室町時代の職名。騎馬にて御旗差にさし添ふ役。了俊大草紙「錦の御旗差には、御旗副と號けて、好き兵或ひは七騎などを副へらるるなり」

おはち 御鉢 (名) めしばち(飯鉢)。めしびつ(飯櫃)。

おはち・がまはる 御鉢廻 順番が廻はり來たる。浮世床「おれが番か有り難い。やっとのことでお鉢が廻はってきた」

おはち・れう 御鉢料 (名) 寺院にて、供米の稱。

おはつ 御初 (名) はつ(初)の敬語。はじめてなること。「おはつにお目にかかる」

おはつ・げ 御葉漬 (名) なづけ(菜漬)を美しく風流に作り、廻はして勝負をする戯れ。下文を見よ。缺唇物語「我れ幼稚の時、木を以て八方といふ物を獨樂の如く作りて、その八つの面に春・夏・秋・冬・花・鳥・風・月といふ文字を書きて、同じ文字の札を七つ書きて、めんめんに持ちたて門とし、鳥といふ字を名目と定め、是れを廻はして、ばくちの如く勝負す中略是れを美しく風流に作りたるをおはなごまといふ」

おはつ・げ 御葉漬 (名) なづけ(菜漬)をいふ、女詞。

おはなごま 御花獨樂 (名) こまを美しく風流に作り、廻はして勝負をする戯れ。下文を見よ。缺唇物語「我れ幼稚の時、木を以て八方といふ物を獨樂の如く作りて、その八つの面に春・夏・秋・冬・花・鳥・風・月といふ文字を書きて、同じ文字の札を七つ書きて、めんめんに持ちたて門とし、鳥といふ字を名目と定め、是れを廻はして、ばくちの如く勝負す中略是れを美しく風流に作りたるをおはなごまといふ」

おはなし (名) 江戸時代の末に行はれたりし富籤の一種。下文を見よ。寛天見聞記「おはなしと云って、一のとみの番のみ書き附けて賣り歩くこと、市中縱横數

十人に及べり。是れは、とみの札を買ひたる者のためにあらず、第附とて、一のとみをあてものとして、一錢・二錢を掛けにす。一文を八文にして取る割合」

おはなしうり 御花畑 (名) おはなしを賣りあるきし人。寛天見聞記「けんとく寶・札寶・おはなしうり」

おはなばたけ 御花畑 (名) 高山の頂近き處などに、雜草生ひ、夏季、一時にその花開く處。北上するに從ひ、平地にもあり。

おはね 御跳 (名) はねかへりもの。おてんば。

おはへる 追 (他動下) おふ(追)の延。砂石集「あの法師とら、よと事しくのしりければ、冠者ばらおはへて搦めてけり」

おはま 御濱 (名)【動】はまぐり(蛤)をいふ、女詞。大上萬御名之事「女房詞。一、はまぐり、おはま」

おはまり 御塡 (名) 一はまること。執著すること。深く心をこむること。薩摩歌「今の尼の話が、お蘭に似たゆゑに、其處を以てのわる推か。いや是れは、いかいおはまり」二だまさるること。御伽名代紙衣「今世間に、たぶらかされし事をおはまりといふ」

おはむぎ 御歯向 (名) 詔ひ。おせじ。浮世風呂「此の本をやるからの、おいらも役者にしてくんねえなと、合卷の繪草子をおはむきに遣る」

おはもじ 御は文字 (名) 恥かしきをいふ、女詞。おはもじさま。油粕「先乘物をたてて色めくの句ふりがたき扇の歌はおはもじや」夕霧河波鳴渡「此の中に物申すは、おはもじながら」

おはもじ-さま 御は文字様 (名) 前條に同じ。生寫朝顔日記「おはもじさまやとさしうつむく」

おはやう 御早 (形、感) 一早きことの敬語。最明寺殿百人上臈女房「何れもこれはお早やうと、物靜かにそ伺候する」二朝、人にあいさつする語。

おはゆる 追 (他動) おはへる(追)の訛り。曾根崎心中「心も夏の夜のならひ、命おはゆる雛の靡」

おはら 盃 (名) 盃の一種。ひらたく作りたるもの。後者昔物語「巧みせる事も無く、朱塗の盃にて、世に云ふ所のおはらの形したり」

おはらぎ 大原木 (名) 大原女の賣る薪。

おはらご (名) おこらご(御子良子)の訛りなるべし。松屋筆記「類聚名物考」「おこらご俗にはおはら子ともいふなり」

おはらひ 御祓 (名) 一災厄を除く爲めに、神社・佛寺より出だす札。狂言「こなたへはめでたうお祓、かみ樣へは物指」二おはらひぼこ(御祓箱)の略。鷹筑波「風の神のおはらひなれや扇子箱」

おはらひ 御拂 (名) 一拂ふことの敬語。又、その物。二代價の支拂。女詞。「御拂をいただく」

おはらひ-くじ 御祓籤 (名) 籤をとりて、神慮を伺ふこと。望一後千句「或る時、御祓くじにて神慮を伺ひ給ふ」

おはらひ-ざし 御祓差 (名) 兜の名所。はらひだて(祓立)に同じ。

おはらひ-だんご 御祓團子 (名) 神社の祓除の祭禮などに賣る團子。

おはらひ-ばこ 御祓箱 (名) 一御祓(おはらひ)を納れたる箱。今川大雙紙「伊勢の御はらひ箱披露する時、主人御請け取り給ひて、口をあくるまねして、御戴き有る事也」二武具。指物の名。たいま(大麻)に同じ。三使用人の解雇せらるること。(御拂を御祓の語にかけていふ)

おはらひ-もの 御拂物 (名) 一賣り拂ふべき品物。二追ひ拂ふべき人物。源氏十二段長生島臺「姫はお拂ひもの、さあさあ出よと小腕取り」

おはらへ-だて 御祓立 (名) はらひだて(祓立)に同じ。甲冑製作鑑「おはらへだてのこと。上代は鍬形臺の間へ飾り金物にしたり。中古よりは鐵にて作る。また折釘も稀れにあり」

おはらみこ 大原巫 (名) あづさみこ(梓巫)を云ふ、京都の方言。

おはらめ 大原女 (名) おほはらめ(大原女)に同じ。年年隨筆「大原女といふ事をおはらめかと五もじ歌によみたりしを、當座の歌なりければ、人人打ちたぐめりし。げに杜撰なるが如くなれど、建保職人歌合の作者におはらめあり」

お-はり 御針 (名) 一針仕事をすること。裁縫。「おはりの稽古にゆく」二雇はれて針仕事をする女。浮世床「縫物が出來ねえから、月傳ひのお針を置くのさ」

おはり-と 御針子 (名) 針仕事の稽古をする子女。

おはる 生 (自動四) 生(ナ)ふ。萬葉「あはをろのを引田に於波流(オハル)たはみづら、引かばぬるぬる、あをことな絶え」

お-はれ 御晴 (名) 一晴れの著物。美服。浮世風呂「大原女「田婢(ハヤヒ)の湯具(ユシ)から、令室(ガヤシ)の紺布(ハ)へも移る」二おなり(御成)に同じ。運歩色葉「御晴(ハレ)」本右節用「御晴(ハラ)出」

おはれ-かかる 負掛 (自動四) 一寄り掛かる。狂言「ひっそうてといへば、おはれかかるやうにしをる」二負はる。依頼す。

おばをば 從祖母 (名) じゆうそぼ(從祖母)に同じ。名義抄「從祖母(オバヲバ)」

おひ (名)【植】ばいも(貝母)の異名。

おひ 笈 (名) 一著物を身に纏ふ時、腰の邊にて結ぶ紐などの稱。布・帛・組・革等種類多し。武烈紀「おほきみのみ於寐(ヒ)のしづは結び垂れ」萬葉「我がせなを筑紫へやりてうつくしみ、於此(ヒ)は解かなな、あやにかもねも」腰帶紀天武下「帶に似たる狀をなす物の稱。「おび封」」萬葉「おほ君のみかきの山の帶(ヒ)にせる、細谷川の音のさやけさ」二ゆはたおび(結肌帶)の略。浮世風呂「もう跡月、帶を致しましたはな」

おひ-の-いはひ 帶祝 (名) 懐妊して、五月目に著帶する祝ひ。簾中舊記「御産所の事。御帶の御祝ひには」

おひ-ひもとく 帶紐解 (名) 一少しも用心せず。心配氣なし。おびをゆるうす。大鏡「翁らがいやしき宿りも、帶ひもときて、門をだにさして、やすらかに延び臥したれば」二男女の間、隔てなくなる。何事も打ち明けてものす。心うちとく。

おひ-を-ゆるうす 緩帶 (名) 心配なくなる。心おちつく。諺草「俗に何の氣遣ひもなきを帶を緩うすといふ。此の事漢書匈奴傳に出でたり」

(諺)帶に短かし襷に長し 物事の中途半ばにして、何れの役にも立ち難きに譬ふ。

おひ-あがる 生上 (自動四) 上の方へ生え延ぶ。榮華物語「せんざい・うゑ木ども、心にまかせておひあがり」宇治拾遺「猿中毛はおひあがりたるさまにて」

おひ-あげ 帶揚 (名) 女の帶の下からぬやうに結ぶ帛。せおひあげ。

お-ひいさま 御姫樣 (名) おひめさま(御姫樣)。

おひ-いだす 追出 (他動四) 追ひて外へ出だす。おひだす。大和物語「女を、めのもとにゐて來て置きたりけり。憎げなる事どもをいひて、めつひにおひ出だしけり」

おひ-いづ 生出 (自動下) 一生まれ出づ。はえいづ。萬葉「みな底に生ふる玉藻の生不出(イカズ)、よしこのごろはかくて通はむ」二成長す。生育す。源氏物語「わか宮などおひいて給はば、さるべきついでもありなん」

おひ-いづ 追出 (他動下) 追ひ出だす。飲明紀「掖出(イダシ)我久禮山戍、而遂有之」宇津保俊蔭「かゝる事知りたりける下司を、はかなき事にて打ちおひいでければ、腹立ちて」

おひ-いで 生出 (名) おひいづる(生出)こと。おひたち。狹衣「ねぢけがましきおひいでなどを、いとめやすきことも、いそぎおぼしめされざりけり」

おひえ 怯 (名) おびゆること。おびえたること。

おひえ-どぎ 怯閧 (名) 怯え怖れながら、閧の聲をあぐること、甲陽軍鑑「おびえ鯨波をつくり、あわてて立ちのき」

おひえる 怯 (自動下) おびゆ(怯)の口語。

おひ-おくる 追後 (自動下) 跡を追ひて後る。追ひかけて及ばず。平治「朝日新聞青春文庫「父にも兄にも追ひ後れて、雪の中にただ一人さまよひ給ひけるが」

おひ-おとし 追落 (名) 一追ひおとすこと。二おひはぎ。ひはぎ。强奪。三圍碁の語。敵に追はれて、つぎ目の石をつぎても活路を見出ださぬこと。

おひ-おとし 帶落 (名) 柔道の語。相手の前帶を執り、我が左足を相手の後横に出だし、我が左腕を相手の胸の前に當てて、敵をして兩足浮き上がりて後に倒れしむる手。

おひ-おとす 追落 (他動四) 一追ひ拂ふ。追ひやる。二軍陣の語。城兵を追ひ拂ひて、其の城を我が手に入る。武家名目抄「某共の城を我が手に入る。武家名目抄「某共の城を我が手に入る。武家名目抄「某共

同日記。あたり遠く隔てたるほどのおひ風も、まことに百ぶの外も薫りぬべきここちしける」

おひ-かた　負方　(名)　借金。借財。

おひ-がち　追勝　(名)　馬藝の語。まうけがち(儲勝)を見よ。　東鑑十九、建保元年五月廿九日「一番左景頼、追勝」

おひ-がね　負金　(名)　刀の鞘の名所。

おひ-かね　帯金　(名)　[略]帯の狀に、物に纏ひ附けたる金具。名義抄「鞦[ナリカケ]、ヒモカケ」　[略]刀の金具の名。環にして緒を貫き腰に佩ぶるもの。

おひ-かは　追川　(名)　【動】はえ(蠅)の異名。

おひ-かは　帯革　(名)　革にて作りたる帯。和名抄「鞾(本朝式略)、皮帯紐也。楊氏漢語抄云、腰帯之革、未詳」鈴具(巻七)「鞾也」

おひ-かは　帯側　(名)　帯地のかは。

おひ-かはる　生更　(自動四)　はえ更はる。かはりて生ふ。萬三「少女らが後のしるしとつげをぐし、生更(ハエカハル)おひて隙きけらしも」　拾遺雜三「久しくもおもはえねども、住吉の松や二たびおひかはるらん」

おひ-かひをけ　被具桶　(名)　「おひはおほひの略」具おほひに用ふる具桶。婚禮の具に、具片方づつ一つ入れたる具桶と區別する爲めに特に名づく。貞丈雜記

おひ-かへす　逐返　(他動四)　逐ひ立てもと、へ返らす。おひもどす。枕三「とのもりづかさきたりしを、またおひかへして」

おひ-かへり　生歸　(名)　刀の鞘の名所。をりがね(折金)に同じ。　桂川地藏記「刀者金銀柄鞘中略生歸」

おひ-かへる　生返　(自動四)　おひかはる(生更)に同じ。新千載夏「君が引く子の日の數をかぞふれば、綿にかく松のおひかへるまで」

おひ-がみ　帯紙　(名)　帯の如く物に巻きつくるために細長くしたる紙。たいし(帯紙)。郵便物包裝規則第三「無封書狀定時刊行物書籍印刷物業務用書類寫眞書畫圖は開封と爲し又は帯紙若は紐等を以て結束し」

おひ-からし　追枯　(名)　役に立たぬやうになるまで追ひ使ふこと。「大津馬のおひ枯らし」

お-ひき　御引　(名)　ひきでもの(引出物)に同じ。心中萬年草「これの内の奴等にも、何がなしに、三百づつお引きをやるが合點ぢや」

おひ-ぎ　負木　(名)　武家時代、婦女の駕籠に代へて乘りしもの。それに足をかけて人の背に負はる。落穂集六「昔は婦人當時の武家に負木と申す物を持たせて遣はし、女房にはかつぎをかぶらせ、伴の負木に腰をかけさせ、しろに負はせ、呼びむかへ候との事に候」

おひき-いだす　誘出　(他動四)　欺きてさそひ出だす。

おひき-いる　誘入　(他動下)　前條の如く誘ひ入る。

おひき-いれる　誘入　(他動下)　前條の等にも、何がなしに、三百づつお引きをやるが合點ぢや」

おひき-ずり　御引摺　(名)　[略]衣服の裾長くして、歩むに地を曳きずること。又、其の事をなすにぶしゃうなること。又、其の人を嘲る語。

おひき-たす　誘出　(他動四)　おびきいだす(誘出)に同じ。持統天皇歌軍法「母の籠命と世に知らせ、おびきださんと謀れども」

おび-きは　帯際　(名)　帯をしめたる處。榮華物語「御帯きは、けざやかに見えたるなど」

おびき-よす　誘寄　(他動下)　おびきて招きよす。

おびき-よせる　誘寄　(他動下)　前條の口語。源氏十二段長生島臺「盗人どもをおびき寄せ、洩らさず討ち取り申すべし」

おひ-ぎり　追切　(名)　追ひさまに斬ること。賀越闘諍記「北島衆を中に置き、左右兩方へ分かれて追切りにす」

おひ-く　追來　(自動カ)　あとを追ひて來たる。萬五「とりつづき憶比久留(オヒク)ものは、もものくさにせめよりきたる」

おびく　誘　(他動四)　欺き誘ふ。だましてさそふ。

おひ-くづす　追崩　(他動四)　敵陣を追ひ討ちて破る。甲陽軍鑑「追ひくづす時、その勝ちたる方にて」

おひ-くび　追首　(名)　逐ぐるを追ひて取る首。甲陽軍鑑「せりあひ合戰などに、追頸の、しかも雑兵者を一人討ちては」同「おごるをあげて、村上方を斬りくづし、悉く追頸を取る間に」

おひ-くび　帯貧　(名)　支那古代の鎧の胸先につけたる鬼面の形。口に帯を噛ましむるより此の名あり。雅樂、秦王破陣樂などの裝束にもあり。

おび-くらげ　帯水母　(名)　【動】腔腸動物、樅水母類に屬する一種。體の長さ大なるは三尺位りに達す。扁平帯狀にして透明なるもの。海上に浮游す。

おひ-くる　追繰　(他動四)　順を追ひてあとへ繰りくる。女殺油地獄「卯月なかばの初鰹さ、末の間に追ひ繰りて、まだ肌寒き川風を」

おび-ぐるま　帯車　(名)　ねつけ(根附)に同じ。嬉遊笑覽「寶倉「山の腰月もや雲の帯ぐるま」

おび-ぐるわ　帯郭　(名)　こしぐるわ(腰郭)に同じ。玉露叢「元和元年五月七日申の刻御中より中略速水甲斐守父子、捕者父子は、山里の帯曲輪の二間に倉に取り籠もり」

お-ひけ　御髭　(名)　ひげをはやしたるものの稱。

おひげ　の　ちり　御髭塵　次條の略。傾城酒呑童子「お伽共がお髭の塵。さて「熊野の面白さ」

おひげ　の　ちり　を　とる　取御髭塵　次條に同じ。文武五人男「時の威勢に理を忘れ中略お髭の塵をとりどりに、散ひなびくうたてさよ」

おひげ　の　ちり　を　はらふ　拂御髭塵　人に諛ひ媚ぶる意にいふ。支那、宋の丁謂が、寇準の鬚に羹のつきたるを拂ひたる故事より出づ。

おひげ　を　よむ　讀御髭　人の弱點を知りて能給す。はなげをよむ。

おひ-ごえ　追肥　(名)　原肥の補助として、作物生育の途中に施す肥料。

おひこし-ぶね　追越船　(名)　他船を追ひ越さんとする船。海上衝突豫防法には、その船は他船の航路を避くべき義務を有すと規定す。

おひ-こす　追越　(他動四)　あとより追ひ來たりて、そのさきとなる。

おひ-こむ　追込　(名)　[略]おひこむこと。[略]所に多く詰め込むこと。[略]劇場見物席の末の方、入りごみの席。おほい

りば。おひこみば。圓下等の娼妓。風俗文選「傾城百人一つり香ならん。追込み・辻君のたぐひは、匂ひ曾て定まらず」

おひこみ-ば　追込場　(名)　前條に同じ。

おひ-こむ　追込　(他動四)　[略]追ひて入る。追ひて入らしむ。基佐集「露深き草野に牛を追ひこみて、暮るればそことたづねわびぬる」　[略]物を内攻せしむ。

おひ-こむ　追籠　(他動下)　罪ある者など、家に籠居せしむ。おしこむ。榮華物語「有國をつかさ・位もとらせ給ひて、おひこめさせ給ひてしを」

おひ-こめ　追籠　(名)　おひこむること。籠居せしむること。

おひ-こめる　追籠　(他動下)　おひこむ(追籠)の口語。

おひ-こる　生凝　(自動四)　おひしげる。宇津保俊蔭「草のおひこりて、家のあばるるまに」蜻蛉日記「つくろはせてし草なども、煩ひしよりはじめて打ち捨てたりければ、おひこりて、いろいろに吹き亂れたり」

おひ-さかな　追肴　(名)　後より追加して出だす肴。

おひ-さがり　生下　(名)　婦人の髪の、背後に長く垂れたるもの。紫式部日記「髪の筋こまやかに清らにて、おひさがりの末より一尺ばかり餘り給へり」

おひ-さき　生先　(名)　生ひ行くさき。行く末。成長する末。將來の希望。源氏若菜「親などたち添ひもてあがめて、おひさきこもれる窓の中なる程は」

おひさき　なし　生先無　將來のたのみ少なし。枕「おひさきなく、まめやかにえせ幸ひなと見てゐたらん人はいぶせくあなづらはしく思ひやられて」同「よるは門つよくさせなと、車行ひたる。いみじうおひさきなく心づきなし」

おひさちも-もの　負幸物　(名)　出雲國の國造の新任の時賜はる物。臨時祭式「賜二出雲國造一負幸物。金裝横刀一口、絁廿疋、絹十疋、調布廿端、鍬廿口。右任國造、訖中略于時辨宣云、出雲之國造正今定給(ヒ)雷(ノ)姓者、賜二負幸之物一(ヒ)宣。國造稱唯」

おひ-さま　御日様　(名)　たいやう(太陽)をいふ、婦人・幼兒の語。

おひ-ざま　追様　(副)　あとを追ひて。あとにつづきて。あとを追ひながら。平治物語「縅し立てたる鎧五十領、追様に遣はされけり」

おひざも-と　御膝下　(名)　[略]貴人の居處近き所。輦轂の下。曾我虎磨「お膝元を驚がせしは、まづ上に對して狼藉者」

おび-さん　帯棧　(名)　戸の中程に取り附けたる横の棧。

おひし　大石　(名)　古語。大なる石。おほいし。記「伊勢の海の意斐志(オヒシ)に、はひもとほろふしただみの」

おひ-じき　追敷　(名)　取引所の語。おひしようこきん(追證據金)に同じ。

おひじき-ぎん　追敷銀　(名)　前條に同じ。

おひし-ぎは　帯仕際　(名)　帯をする處のきは。國姓爺後日合戰「帯し際引っ掴み、片手に提げ」

おひしろ-はだか　帯代裸　(名)　女子の、細帯をしめたるのみなること。細帯すがた。

おひし　ゲ　ど　う　(ろどげしひゐ)

おひ-しげる　生茂　(自動四)　草など、はえ茂る。古今夏「戀ふれどもあふ夜のなきは、忘草夢ちにさへや生ひしげるらん」

おひ-した　帯下　(名)　[略]帯をしむる腰の邊。(袴の丈などにいふ)

おび-しばり　帯縛　(名)　腰・腹の左右にて、帯のあたる處。よわどし。和名抄「腰(波比)之腰左右、盧肉處也」

おび-じめ　帯締　(名)　おびどめ(帯留)を見よ。

おひ-しょう　追證　(名)　次條の略。

おひ-しょうこきん　追證據金　(名)　取引所の語。證據金の一。株式會社組織の取引所が、相場の昂低に應じ、本證據金の追加として徴收する證據金。おひじき。おひしよう。

おひしょう-ぜめ　追證攻　(名)　取引所の語。買占め又は賣崩しによりて生ずる違約の損害に備へ、かつ其の弊を防ぐために、追證據金を徴收すること。

おひしろ-はだか　帯代裸　(名)　女子の、細帯をしめたるのみなること。細帯すがた。

おひ-すがぶ　追次　(自動下)　次條に同じ。源少納言「人知れず思ひ給へ心ざしたるを、かういふさいはひ人の腹の后がねこそ、また追ひすがひぬれ」

おひ-すがる　追縋　(自動下)　[略]跡より慕ひて追ひ及ぶ。　[略]一旦拒まれたるを、强ひて頼む。

おひ-すつ　追乘　(他動下)　追ひ拂ひてふりすつ。宇治拾遺「犀をば、しうとやがておひすてけるとぞ」砂石集「盲目になりて後、又使はんとしけるを」

おひ-すまひ　追相撲　(名)　相撲の節會に、勝負疑はしき者を召して、翌日更に相撲せしむること。北山抄「七月相撲抜出二番」略式追相撲」

おひ-すまひ　負籠　(名)　背に負ふ籠(ロウ)。おひ。

おひ-ずり　笈摺　(名)　巡禮の衣服の、背のすれを防ぐために著る衣。袖なき單にて、羽織に類す。左・右・中の三部より成り、兩親あるものは左右の兩部に赤地、中央に白地、なきものは左右の兩部に白地、中央に赤地の布を用ふ。おひずる。三十二番歌合「順禮。おひずりに花の香しめて、中入りの都の人の袖にくらべん」領城何波鳴門「笈摺も、二親のある子ぢやによって、兩方は藍染」

おひ-ずり　追摺　(名)　印刷物の不足して、更に追ひかけて印刷すること。又、其のもの。ましずり。

おひ-ずる　笈摺　(名)　おひずり(笈摺)に同じ。賀古教信七墓廻「佛前に供へたる、順禮のおひずるを虔げて」

おひ-すゑ　生末　(名)　おひさき(生先)に同じ。おひたつすゑ。源夕顔「命あらばすがた。

それとも見まし、人知れず岩根にとめし松のおひすゑ」

おひ-せむ 追逼（自動四）追ひてせまる。宇治拾遺「きつね身を投げて逃ぐれども、おひせめられてえ逃げず」

おひ-せん 追銭（名）一旦渡したる上に、更に餘分に渡す錢。「盗人におひせん」

おひ-せん 追膳（名）式の膳の時、食物をかきわけて食すること。三議一統「おひぜんと號して、御食をかきわけて、何にてもあれ、まゐりたる汁をかけてきこしめすなり」下學集「追膳・公卿・衝重」

おひ-そだち 生育（名）おひたち。成育。聖德太子繪傳記「かう見た所、かたがたは卑しからざる生ひ育ち」

おひ-そばる 生添（自動四）生長して、丈の高さ加はる。榮華物語「おひそはる行く末遠き姫松と、こだかきかげと結びつるかな」

おひそへ-の-たち 帶添太刀（名）こだち（小太刀）に同じ。

おひ-そや 負征矢（名）身に負ひ持てる征矢。近世、箙に盛る征矢の稱。鎩は丸根を定めとす。萬葉「はるばるに家を思ひて、於比曾箭（オヒソヤ）のそよと鳴るまでなげきつるかも」

おひ-だき 追炊（名）飯など、不足して、更に炊ぐこと。大織冠「目利きは遠はは、一人前に五人當て、追ひ焚きすな」

おひ-だし 追出（名）一追ひ出だすこと。二興行物の終はること。小町踊「入相もおひだしとなる花見かな」

おひだし-ぐすり 追出藥（名）病氣の内攻を防ぎて、表に發せしむる藥。陸奥歌「且那祇苓致され中醫季中にそこを追出藥」

おひ-だす 追出（他動四）一外へ追ひ遣る。放つ。狂言「いえ、御亭樣の。笠を取らせて追ひださうと思うて」二藥を用ひて、病毒を表へ發せしむ。

おひただし 夥（形シク）一數甚だ多し。衆多なり。謠曲「あらおびただしの軍兵やな」二甚し。仰山なり。非常なり。宇津保「いんじやう・鼓・物のね、一たびに打ち吹きひき合はせたり。おびただしくめでたし」著聞「やがて腫れて、幾ほどもなく、おびただしき瘡に成りにけり」生徒敬「下學集」

おひただし-げ 夥氣（副）おびただしさう。

おひただし-さ 夥（名）おびただしくある度合。おびただしきさま。堀河百首「驚かぬ人は有らじな、曉の霞の音のおびただしさに」

おひ-たち 生立（名）一おひたつこと。育ちゆくこと。成立。二幼時の經歷。

おひ-たつ 生立（自動四）次第に生ひ行く。そだち行く。成長す。成立す。記「川の邊に淤斐陀豆（オヒヒヅ）るさしぶを」萬「ときじくのかくのこのみの中略國もせに於非多知（オヒタチ）さかえ」源「おひたたんありかも知らぬ若草を、おくらす露ぞ消えんそらなき」

おひ-たつ 追立（他動下）追ひて去らしむ。追ひやる。追ひ拂ふ。榮華「かやうに例ならぬ事さふらへば、まづおひたてさせ給ふに」

おひ-たて 追立（名）おひたつること。おひたてらるること。天神記「追立ての官人ども、用意せよとひしめいて」

おひ-たて （名）黎（オヒタテ）の名所。和漢三才圖會「素梢（おひたて）太天後如」拇而喬者也」

おひ-たて-の-つかひ 追立使（名）流人を追ひ立てて、配所に赴かしむる使。おったてのくわんにん。保元「左府公遠長實「檢非違使惟繁・資能、二人追立ての使にて」

おひ-たてる 追立（他動下）おひたつ（追立）の口語。おったてる。

おひ-たむ 生留（他動四）おひとむ（生留）に同じ。萬「あすかの川のみをはやみ、生多米（オヒタメ）がたきいは枕、苔むすまでに」

おひ-ぢ 帶地（名）帶に仕立つる布帛。

おひ-ちらかす 逐散（他動四）次條に同じ。著聞「醍醐法師におひちらかされて、からき目見たりけり」

おひ-ちらす 逐散（他動四）逐ひて散離せしむ。おひちらかす。蜻蛉日記「あさましき人、わがかどより、例のきらきらしうおひちらして渡る日あり」

おひつ 御櫃（名）おはち（御鉢）に同じ。めしびつ。

おひ-つかひ 追使（名）追ひ使ふこと。驅使。

おひ-つかふ 追使（他動四）おひまはして使ふ。少しのひまを與へず使ふ。

おひ-つき 追附（名）おひつくこと。あとよりの附け加へ。つるか。

おひ-つぎ 追繼（名）あとより次第につぎ足すこと。追加。

おひつき-ぐび 追附首（名）逃ぐる敵に追ひつきて斬りたる首。甲陽軍鑑「逃ぐる敵といへども切りあうて辛苦仕り、取りたる頸は追附頸とは申せ共、少し

ふりよくして」

おひ-つく 追附　追著（自動四）一追ひて及ぶ。おっつく。勢語「しりにたちて追ひ行けど、えおひつかで」二字を離さずしてつづけざまに書く。散らし書きなどにせず。源「みちのくに紙に、おひつき書き給ひて」

おひ-つぐ 生繼（自動四）生ひかはりて其のあとにつぎ行く。萬「おみの木も生繼（オヒツ）にけり」

おひ-つづく 佩續（他動下）絶えず佩ぶ。萬「針ぶくろ應婢都都氣（オヒヅ）ながら里ごとに、てらさひあるけど人も咎めず」

おひ-づな 追綱（名）馬具。紫の組緒の太き綱。大名の引馬に用ふ。おひなは。

おひ-つむ 追詰（他動下）逃ぐる途無きまでに追ひ迫まる。追窮す。おひつめる。宇治拾遺「逃げて西へ走りしが、冠者が家の前ほどにて追ひつめられて」

おひ-つめる 追詰（他動下）前條の口語。

おひ-て 追風（名）おひかぜ。順風。鳥羽千首「ささ浪の山の嵐をおひてにて、しがの湊を出づる船人」新六帖「とどまらずいふかひぞなき、沖かけておひての風に出づる舟人」

（諺）追風に帆をあげる 得手に帆を揚げるに同じ。えて（得手）の條を見よ。

おひ-て 追手（名）逃ぐる者を追ひかけ行く人。おって。謠「追手は犀犀に、とめよとめよと追っかくる」

おひて-がほ 追手顔（名）おひてらしき顔つき。おひ手らしきやうす。謠「鵜「柳が浦の秋風の、追手がほなる跡の波」

おひと 首（名）上古の姓の一。おうと。神代紀「忌部首（オヒト）遠祖、太玉命」首渠（オヒト）記

おひ-ど 帶戸（名）戸の腰に桟（オヒド）あるもの。帶桟（オヒド）ある戸。

おひ-どうがね 帶胴金（名）どうがね（胴金）を見よ。

おひ-とき 帶解（名）（附け帶を除く義）童兒の附紐を除きて、始めて帶を用ふる祝ひ。十一月に行ふ。男兒は五歳より九歳までの間、女兒は七歳にて行ふ。ひもとき。おびなほし。ひもおとし。ひもなほし。五元集「髪置・袴著・帶解・元服」

おひ-とき の いはひ 帶解祝（名）おびとき（帶解）に同じ。おびなほし。

おひ-とき-すがた 帶解姿（名）帶とけて、だらしなき姿。うちとけたるすがた。

おひ-ととのほる 生調（自動四）生長して身體よく整ふ。源「はたちばかりになり給ふままに、おひととのほりて、いとあたらしくめでたし」

おひ-とどむ 追留（他動四）次條に同じ。狭衣「此の御供の人見つけて、かやかやとおひとどむるに、え逃げでおひとどめられぬ」

おひ-とむ 追留（他動四）追ひつめて留まらしむ。おひとどむ。

おひ-とむ 生留（他動下）生ひたるまに留めおく。夫木「濱なとる荒磯のをのしき波に、おひとめがたき春の若草」

おひ-とめ 追留（名）追ひとむること。追ひつめて留まらしむること。甲陽軍鑑「敵二方へ敗軍なれば、此の筋は犀河追ひとめなり」

おひ-とめ 帶留（名）一女の帶の上をおさへ結ぶ平打の紐。兩端に金具ありて嚙み合はしむ。おびかけ。又、丸ぐけにして金具なきものを帶じめと云ふ。二刀の緒の名所。をりがね（折金）に同じ。

おひ-とめる 追留（他動下）おひとむ（追留）の口語。

おひと-よし 御人好（名）好人物。こころよし。

おひ-とり 追鳥（名）おひとりがり（追鳥狩）の略。謠「善知鳥」身の苦しさも悲しさも忘れ草の追鳥、高綱をさしひく汐の」百合若大臣野守鏡「あなたこなた（追鳥の、狩場の時雨涙の雨」

おひ-とり 帶取（名）太刀の緒（オヒ）にからみて、腰に纏ふ緒。たちのを（劍緒）。あしを（鞋緒）。おびとりがは。和名十「攀鏡（於比乇）佩刀把中皮也」

おひ-とり-がは 帶取革（名）前條に同じ。續後拾遺「太刀の帶とりがは」

おひ-とり-がり 追鳥狩（名）山野にて鳥などを追ひ立てて狩りすること。おひとり。東鑑「十三、建久四年「於武藏國入間野有追鳥狩」」

おひ-なな 御雛（名）ひな（雛）の敬稱。雛人形。

おひ-ながす 負流（他動四）負ひたるままに下へさぐ。吉野忠信「尻籠（シ）の矢、箙下がりに負ひ流し、弓押し張って」

おひ-なげ 負投（名）しょひなげ（背負投）に同じ。せおひなげ。傾城酒呑童子「負投げ・懸投げ、腹搗」

おひ-なは 追繩（名）一馬具。おひづな（追綱）に同じ。二野馬を捕らふる繩。かけなは。

おひ-なは 負繩（名）物を背負ふに用ふる繩。狂言「どれからぞ負うて參ったやら、おひ繩がござる」

おひ-なぼし 帶直（名）おびとき（帶解）の古名。伊勢貞順記「帶直しの事。九歳にて仕り候」堀河狂歌集「かみ置や又ははかまぎ・帶なほし、九十の賀まで人もあやかれ」

おひなほし の いはひ 帶直祝　おびなほし（帶直）に同じ。おびときのいはひ。

おひ-なほり 生直（名）おひなほること。宇津保「藤原」日ごろは近く物し給ふと承りつれば、おひなほりをもとなん」源「此の宮例の御心ならば、月頃のほどに、いかなるすき事どもをし出で給はましし。こよなくしづまり給ひて、人目には少しおひ直りし給ふかなと見ゆるを」

おひ-なほる 生直（自動四）正しく改まる。かはりてよくなる。舊の如くなる。相模集「片山の柏のくぼてさしながら、おひなほる見る榮えともがな」

おひ-なむ 負並（他動四）古語。ならべ負ふ。共に負ふ。萬「わがもたるまそ鏡に、あきつひれ負並（ナメ）持ちて」

お-ひなる （自動四）眠りさめて起くることの敬語。お起きになる。おひんなる。

おひ-なる 生成（自動四）おひたつ。生ひ出づ。宇津保「藤原」かの袖君のよくおひなり給ひつるを、いかで内に參らせてしがな」源「若草」見るままに、いと美しげにおひなりて、愛敬つき」

おひ-にがす 追逃（他動四）一追ひ捕へひて逃がす。にがしゃる。二追ひ拂へんとして逃げらる。

おひ-ぬく 追拔（他動四）おひこす（追越）に同じ。菅原傳授手習鑑「古き弟子ども追ひ拔き、あっぱれ手書になるべし」

おひ-ねがひ 追願（名）追加して願ふこと。つゐぐわん。浮世風呂「追願ひをなすって、最二三日お泊めなさいましな」

おひ-の-く 追退（他動四）追ひ拂ふ。追ひしりぞく。枕「おひのけられたるえせ車ども」

おひ-のける 追退（他動下）前條の口語。

おひ-のこ 帶鋸（名）帶革の如く薄く長き鋸。機械にかけ廻轉して用ふ。

おひ-のぼる 生上（自動四）草木など、おひたちて丈たかくなる。源「生」よもぎは、のきを爭ひておひのぼる」

おひ-の-よ 生世（名）生ひゆく世。生ひ來たりし世。古來、おひを老いとせしは誤りなりと。梅園「宇津保「梅花」「水まさる淀のまこものおひの世に、ふかく物思ふ春にもあるかな」同「藤袴」「おひのよにちをのみ知れるみどりごの、松のもちひをいとどくふらん」同「初音」仲忠は更におひのよに空ごとをなん知らず侍る」

おひ-は 追羽（名）鷹の、鳥を追ひ行く時の羽の委（オヒ）「和訓栞」定家鷹三百首「おち草をぬすたつ鳥ものびやらじ、おしつけて行く鷹のおひはに」

おひ-はぎ 追剝（名）おひはぐこと。又、その人。ひはぎ。おひおとし。行劫。掠奪。東海道名所記「旅慣れぬ人は、道はぎに逢ひて殺さるるか」

（諺）追剝原へ獵狩 自ら求めて危きに向かぶ譬へ。聽耳世間猿「當時町方の醫者衆が、銀口入、嫁入りの仲人、茶屋女の居け所、初日棧敷の使ひなさるる方の藥召しあがらるるは、畢竟追剝原へ獵狩にござる同前」

おひ-はぐ 追剝 (他動四) 行人を追ひ劫やかして、衣服・財物を剝ぎ取る。ひはぎを行ふ。追ひおとす。

おひ-はご 追羽子 (名) おひばね(追羽根)に同じ。

おび-はさみ 帶挾 (名) ねつけ(根附)に同じ。真樹文集「印籠・煙袋・帶挾・珊瑚珠・緒止等」

おひ-はしらかす 追走 (他動四) 次條に同じ。狂言「又しても又しても、男をおひはしらかして」大蔵同三人すは盗人と申さば、わっぱと申しておひ走らかしませう」

おひ-はしらす 追走 (他動四) 追ひて、逃げ走らしむ。おひはしらかす。

おひ-はなす 追放 (他動四) 次條に同じ。狂言「誰れもごさらぬか、此の猿を追ひ放いて下だされい」はなしおく。はなして自由にさす。狂言「廣い野山へおひはなして置かうまで」

おひ-はなつ 追放 (他動四) 追ひ遣る。追ひ拂ふ。つゐはうす。夫木「山陰に獲せさらぼへる犬樞、おひはなたれて引く人もなし」

おひ-はね 追羽根 (名) 二人以上集まりて、一つの羽子を順次につくこと。羽子板。おひはご。

おひ-ばら 追腹 (名) 主君の死を悲しみ、跡を追ひて切腹すること。殉死。ともばら。義輪軍記「防矢射ける人人も追腹切りて、同じ枕に伏しにける」丹波與作「追腹ほどの御恩の家」

おひ-はらひ 追拂 (名) 一追ひはらふこと。二追ひ遣ること。放(ハナチ)に同じ。

おひ-はらひ 追拂 (名) 一あとより支拂ふこと。二【法】一時支拂を免除せられ、又は支拂義務の不明なるために支拂はざりしを、後に至りて支拂ふこと。民事訴訟法第百「訴訟上救助の取消及ひ敷額追拂の義務」

おひ-はらふ 追拂 (他動四) 追ひ遣る。追ひ出だす。放逐す。宇津保蔵開「妻をもおひはらひて」源浮舟「國のうちをもおひはらはれぬ」

おび-ひき 帶引 (名) 一數人集まりた る時、餘興に、帶を出だし合ひ、其の端に紙縒を結び附け、これを引きて、當たりたる帶を我が有として交換すること。宋華日工集「府君聞金帶經年段段結續、欲互相交易所謂帶引者也」二遊戯の一。帶の兩端を引き合ひて、力の優劣を競ふもの。

おび-ふう 帶封 (名) 郵便物などを、封ぜずして、帶紙にて結束すること。

おひ-ふき 追吹 (名) 笛などの吹き方。下文を見よ。歌舞品「追ひふき。陵王等の亂序に、且つ吹き、且つ止むの吹き方なり。追ひつがひに吹くとは別なるべし」

おび-ぶくろ 佩袋 (名) 腰などを入れ、腰に帶ぶる袋。和名十四「紙「腰囊之可」帶也」

おひ-ふす 追伏 (他動四) おひかけて逃ぐる所なきやうにす。著聞「逃げんには、いかにも追ひふせられぬべし」

おひ-ふせる 追伏 (他動四) 前條の口語。

おひ-まくる 追捲 (他動四) 烈しく追ひ散らす。賀越闘諍記「四方を拂ひては八面に當たり、追風纔(ナガ)に」

おひ-まさり 生優 (名) おひまさること。大和物語「見るたびにやうやう好くなりもてゆく。ことの外におひまさりして見えければ」

おひ-まさる 生優 (自動四) 生長するに從ひてよくなる。宇津保「藤壺の御方よりも、おひまさり給ひなんかし」源玉鬘「こよなうこそ、おひまさりて見え給ひしか」

おひ-まどはす 追惑 (他動四) 追ひて見失ふ。ゆくへ分からずなる。源夕顔「おひまどはして、なのめに思ひなしつべくは、ただかばかりのすさびにても過ぎぬべきことを」同玉鬘「われを惡しと思ひておひまどはして、いかがしなすらんと思ふに」

おひ-まはし 追廻 (名) 一おひまはすこと。二綱の一種。四方の圍りを竹にて造り、其れに綱を張り、魚を追ひ廻はしてすくひ捕るもの。

おひ-まはす 追廻 (他動四) 一彼方此方と追ひかく。狂言「取らすまいといへば、是非取らうといふ故におひまはす」二はげしく使役す。情なく使ふ。おひつかふ。室町千疊敷「三好などの下につき、外様なみに追ひ廻はされんも口惜し」

おひ-め 負目 (名) 身に負ふ借財。かり。借金。借錢。負債。

おひ-め 追目 (名) さきの失敗に懲りずして、續いて復その事に取り懸かること。

おひめさま-しごと 御姫様仕事 (名) 臨屏なる細工。

おひめさま-ぢ 御姫様地 (名) 姫糊と砥の粉とを塗りたる下等の漆器。

おひ-もち 追持 (名) 馬藝の語。まうけがち(儘勝)を見よ。東鑑四十六建長六年八月十六日「一番左追持、富所左衛門尉」

おひ-もつ 負持 (他動四) 一荷なひ持つ。二名を負ふ。名のる。萬「大伴の遠つかむおやの其の名をば、大久米主と於比母知(オヒモチ)て」

おひ-もどす 逐戻 (他動四) おひかへす(逐返)に同じ。大鏡「狂言不思議「もし腹を立てたならば、賣僧でござらうによって、おひ戻いてやりませうが」

おひ-もの 負物 (名) 一背に負ふ物。文武五人男「定春と菜が負物を、御湯背負ひ」二おひめ(負目)に同じ。建武式目追加「一、負物年紀事中略經二數十箇年一、以古借書、令催促借主子孫之條」

おひ-もの 追物 (名) 魚又は鳥の肉などの燒物。江次第十七、東宮「追物二種小鳥・雉」類聚雜要「追物薄鱠・鳥足・鳥・生・雉・鯉・鯽・鯉より鱠」

おひ-もの 佩物 (名) 身に佩ぶるもの。

おひもの-い 追物射 (名) おんものい(追物射)に同じ。本朝平家「木曾はこれを見て、すは平家は落つるは中略おひものいにこそ射たりけれ」

おひ-や 御冷 (名) 一みづ(水)をいふ。女詞。おひやし。狂言御笠「今に御酒の酔がさめぬ、そのおひやを持ってこい」二昔時、たいこもち(幇間)の異名。色葉字類抄

おひ-やう (名) 【動】軟鰭類、ひらめ科に屬する魚。體の長さ三尺餘りに達し、頭部は濶く眼は大にして、全身暗褐色。多くは北海に產す。大鮃。

おひや-かす 脅 (他動四) 一おびえしむ。おとして畏れしむ。おびやす。源夕顔「荒れたる所は、狐などやうのものの、人おびやかさんとて、げおそろしう思はするならん」同東屋「いと腹だたしげにおひやかしたれば」二おどして我が意に從はす。

おひ-やくど 御百度 (名) ひやくどまゐり(百度參)に同じ。小町節「お百度を時雨もするや神路山」曾根崎心中「丹波屋までは、お百度ほどと尋ぬれど」(謡)お百度を囮む 度度、人を訪問するに譬ふ。

お-ひやし 御冷 (名) みづ(水)をいふ。女詞。おひや。大上臈御名之事「女房詞。一水、おひやし。ゐのなかとも」狂言「お冷し持って參りけり」

おひやす 脅 (他動四) おびやかす(脅)に同じ。宇鏡「惱(ナヤ)ましたてまつる」

おひやら-かす (他動四) ひやかす。からかふ。愚弄す。

お-ひやる 追遣 (他動四) 追ひて去らしむ。おひ拂ふ。おひのく。せきたてて去らしむ。勢語「この女をほかへおひやらんとす」枕「のちになど云ひても、おひやりつべけれども」

お-ひやる (他動四) 一ひやかす。娯節用「何をいふかと思ったら、おれが顔の棚卸しか。いい加減におひやるものだ」二へつらふ。おべっかをいふ。膝栗毛「百兩の宮に當たりしにつけこみ、なんでも割前をせしめんと、無性におひやり散らかし」浮世風呂「おひやる手合を四五人引き連れて各劇の座をと」

おびゆ 怯 (自動下) 一怖れ驚く。おづ。崇神紀「登(ナヒ)退」萬「虎かほゆると、諸人の惑流(ナヒ)までに」宇鏡「愕然(ナヒ)」二夢におそはれて驚く。源若紫「物におそはる心地して、やとおびゆれど」

おひ-ゆく 生行 (自動四) 次第に生ふ。成長して行く。源若菜「はつ草のおひゆく末も知らぬまに、いかでか露の消えんと すらん」

おひ-ゆく 追行 (他動四) 跡を追ひて行く。萬「わかせこが跡ふみもとめ追去(ナヒ)ば、木の關守い、とどめてむかも」

おひょう (名) 【植】榆科、榔榆(ナヒ)屬の落葉喬木。幹の高さ一丈。葉は倒卵形、葉先三又は五に淺裂し、葉脚は一側やや長し。夏季、黄綠色の花を開く。我が國、北部の山野に自生す。皮は强靱にして用ふべし。

おひより 御日和 (名) 江戸時代の乞食の一種。霖雨の時、所所に紙切を結びたる破傘をさし、御天氣快晴、御日和御祈禱と云ひて錢を乞ふもの。守貞漫稿

おひ-よる 追倚 (自動四) 順ひ依る。たよる。續後紀「佛にも神にも申し上ぐることの言葉は、此の國の本つ言葉に逐倚(ナヒ)て、もろこしの言葉を借らず」

おひら 御平 (名) ひらわん(平椀)の略。女詞。

おひらの ながいも 御平長芋 おひらの中に盛りたる長芋の、見かけのみ美くして美味ならざるより、容貌のみ美くして閒のぬけたる人に譬へいふ語。

おひら (名) 【動】たひ(鯛)をいふ、女詞。

おひらぎ 御開 (名) 一落ちのびることの忌詞。退却。太平記十五「ただまづ筑紫へお開き候へかし」二祝ひごとの席などに用ふる語。酒宴のをはりの稱。をはる・かへるなどの忌詞。

おひる 御昼 (名) 一ひる(晝)の敬語。二ひるめし(晝飯)の敬語。三獄に子供がお晝の時分も忘れ、どこにどうして居さんした」

おひ-ひる (自動四) おひなるに同じ。中務日記「かくまで御所に御人ずくなくなりつれば、御ひるよりさきにと、いそぎ參りたれば」

おひる 生 (自動上) おふ(生)の口語。

おびる (自動上) 一切くおほやうなり。無邪氣なり。源賢木「やはらかにおびれたるものから、深う由づきたるところの、並びなくものし給ひしを」狹衣「いたうおびれ、しどけなき聲にて」二ぼんやりす。とぼける。源總角「君たちのいはけなく寝おびれたるけはひなど」

おびれる (自動上) 前條の口語。

お-ひろひ (名) ほかう(歩行)をいふ、女詞。日本武尊吾妻鑑「もとのやうにおひろひと云はれてせん方投げ首に、心も染まぬ歩みぶり」

おひ-わけ 追分 (名) 一街道の、左右に分かるる岐(ナヒ)。新六帖「旅人の野中の道のおひわけに、名殘り多くも行きわかれぬる」二次條の略。

おひわけ-ぶし 追分節 (名) 小唄のふしの名。おひわけ。

おひわけ-ゑ 追分繪 (名) おほつゑ(大津繪)の異名。

おひ-ををる (自動四) 古語。生ひて繁る。萬「うち橋に生乎鳥禮(オヒヲヲレ)る川藻ぞ、枯るれば生ゆる」

おひん-なる (自動四) おひなるの音便。

おふ (名) 【動】おほのがひ(大野貝)なるべし。宇鏡「蛤(阿久比)、貝(同)、鮑(於天反)、(阿波比)、水蛭(阿波比)、蛤(阿波比)、蛤(阿波比)、水蛭(阿波比)、貝子(阿波比)、貝子(阿波比)、貝子

及ばんとして急ぎ行く。跡につきて走る。萬[二]とりつづき意比[ヒ]くるものは、ももくさにせめ寄りきたる」同[廿]夕狩に千鳥蹈みたて、於敷[フ]ごとに、ゆるすことなく」[三]及ぶ。おひつく。源[梅]「御車かくるほどにおひて」[四]其の方に向かひて行く。土佐日記「大湊より那波のとまりをおほんとて漕ぎ出でたる」同「十一」日、曉に舟を出だして室津をおふ」[四]直往に廻る。天武紀[下]「坂本財臣卒[中]贈[ヲクリ]小紫位」[五]其のままに追ひ行く。過ごし行く。經行く。「順をおふ」「年月をおひて」

おひも　おふ　追追　多く追ひたることを強めていふ。曾我曾稽山[二]「追ひも追うたり廿八町、息の限りをおっつめられ」

おふ　逐　追　(他動)[四]　[一]退け去らしむ。出だし遣る。おひはらふ。やらふ。放逐す。繼體紀「警蹕[ケイヒツ]前驅」萬[二]「しこほとときすあかときのうらがなしきに、雖追[オフ]」おへど、なほしき鳴きて」枕[二]「おひのけられたるえせ事ども」[二]驅す。驅る。「馬をおふ」

おふ　大　(接頭)　古語。おほ(大)に同じ。記[二]「意布[オフ]をよし、鮪突くあまよ」萬[廿]「於布[オフ]しもと、このもと山のましばにも、のらぬいもが名かたに出でむかも」

おふ　帶　(他動)[四]　次條に同じ。繼體紀「わがおほ君の於麼[オビ]せる、ささらのみ帶結びたれ」萬[二]「みもろの神の於婆[オビ]せるはつせ川、みをしたえずば我れ忘れめや」

おふ　帶　(他動)[上]　[一]腰にさぐ。身に著ごとに、てらさひあるけど人も咎めず」[二]たもつ。含む。枕「梨花一枝春雨を帶びたりなど」

おふ-ぶう　(名)　ゆ(湯)をいふ、小兒の語。(飲み又浴ぶるに)浮世風呂[二]「おぶうはどこだ」

おふ-おふ　追追　(副)　あとをおひつつ。あとをおおやうにして。爲忠百首[下]「うちはやめ風したさまへ逃ぐるまに、おふおふ雪のふりもつむかな」

おふ-ふく　御服　(名)　貴人の小袖の稱。東鑑[四十三、建長四年四月一日]「親王自關本御出[中]御服二重織物」

おふく　はいり-ぐう　御服拜領　君主の著けたる衣を、己れが著料に賜はること。大内問答「御ふく拜領の事、きぼにて候」

おふ-ふく　御福　(名)　[一]ふく(福)の敬語。狂言[鷺]「夜前多聞天より、お福を下だされてござる」[二]おたふく(阿多福)に同じ。おかめ。傾城反魂香[二]「姫君は扶置き、たとへ餅屋のおふくでも[中]夢山三が詞を」「たん立てずにおかれうか」[三][動]ねずみ(鼠)をいふ、上野國の方言。

おふ-ふくろ　御袋　(名)　母親。母。鎌倉年中行事[上正月]「御臺様・御袋様・上臈・中臈・下臈、みなみな御所(御參)りあり」康富記[享徳四年九月廿日]「今曉室町殿姫君誕生也、御袋、大館兵庫頭妹也」

おふく-わけ　御福分　(名)　もらひ物など、他に分かち與ふること。福分。おすそわけ。

おふけ-なし　(形)　おほけなしに同じ。

おふけ-やき　御深焼　(名)　次條に同じ。

おふけぬ-やき　御深井焼　(名)　昔、尾張國名古屋城中にて燒き創めたる陶器。おふけやき。

おふさる　負　(自動)[四]　[一]負はる。せおはる。[二]人にたよる。依頼す。

おふし　啞　(名)　談話の機能を缺ける不具者。おし。啞者。暗啞。字鏡「暗[ヒ]不和名[二]「瘖瘂之不能言也」名義抄「瘖[オフ]」

おふし-ぜみ　啞蟬　(名)　おしぜみ(啞蟬)に同じ。

おふし-ひさご　(名)　古語。水に浮かぶる料に用ふる匏。仁德紀「取[二]全匏[ヒサゴ]兩箇」

おふし-みづ　(名)　おはぐろ(御歯黑)をいふ、女詞。

おふし-もと　大梏　(枕)　「おふはおほに同じ」古語。大なるしもとにて、もとにかけていふ。一說、おふは生ふにて、生ひたるしもと。萬[廿]「於布[オフ]之毛等[シモト]」この本と山のましはにも、のらぬいもが名かたに出でむかも」

おふしょん-とりひき　(英 Option)　(名)　取引の語。歐羅巴の取引所に行はるる特權附定期取引。即ち、賣方又は買方が、相場の變動によりて生ずる危險を無限に負擔することを欲せざるとき、其の相手方に一定の打歩を支拂ひて、其の契約を解除し得る權利を豫約するもの。

おふす　痴　(自動)[四]　古語。談話の機能缺けて物を言ふこと能はず。天智紀「啞(シブ)不能言」

おふす　(自動)[四]　古語。水に身を浮かぶ。泳ぐ。仁德紀「全匏[ヒサゴ]」和名[四]「拍浮[於布]」

おふす　負　(他動)[下]　おほす(負)に同じ。萬[二]「しほ船のへこそ白浪、にはしくも於不世[オフ]たまほか、おもはへなくに」

おふだ-しゅう　御札衆　(名)　鎌倉幕府にて、昵近を許されたる小侍所の番衆。

おふだ　御札　(名)　守札。ごふう。

おふつみ-ぎう　御佛名　(名)　古昔、十二月十九日より二十一日まで三日間、禁中にて行はるる佛事。仁壽殿の本尊を移して御帳の内に掛け、南の觀の間に、南北に机を立て佛像・塔形を置き、庇に地獄繪の屏風を立つ。三世諸佛の名號を唱へて罪障消滅を祈るよりいふ。江次第[二]「御佛名」

おふ-て　追手　(名)　おほて(大手)に同じ。

おふと　首　(名)　おびと(首)に同じ。景行紀「村之無長、邑之勿首[オフト]」

おふな-おふな　(副)　身の程に負ひ得るだけの力を盡くして。身分相應に。ねんごろに。勢語「おふなおふな思ひはすべし、なぞへなく高きいやしきくるしかりけり」宇津保[藤原]「大宮ことしもありがほに、おふなおふな子ども引きつれて」隨分[萬葉]

おふぶ　負　(他動)[四]　おふ(負)[他動]の訛り。

(誤)おぶはうと言へば抱かからう　恩に馴れて、つけあがる譬へ。和歌民のかまど「負ふといへばだからう」

おふみ　御文　(名)　[一]ふみ(文)の敬語。[淡路]「狂言[鷺]「なんと、お文でも遣されませぬか」[二]速如上人が門徒に與へたる消息。

おふ-もの　追物　(名)　騎馬にて、地を走る獸を追ひて射ること。

おふもの-い　追物射　(名)　おんものい(追物射)に同じ。

おぶら-ーと　(獨 Oblate)　(名)　澱粉と護謨末とを以て製したる薄き餅の片の如きもの。形もなかの皮に似たり。水に濕して軟かにし、飲み惡しき散藥を包みて服用するに用ふ。水に濕さずして直ちに藥物を包被し得る半透明なるものを柔軟

おぶらーと・といふ。

おふれ　御觸　(名)　ふれ(觸)の敬語。布達。三世相錦繡文章「召し捕つて差し出せと、嚴しいおふれの其の中へ」

おぶを　大魚　(名)　古語。大なる魚。次條を見よ。

おぶを-よし　(枕)　「しは輕く添へたる附」鮪は大魚なれば、大魚よ、しびと、呼びかけていふ。記[下]「意布賀余志[オフカヨシ]鮪突くあまよ、しがあれば、うらこほしけむ」

おへこ　(名)　[一]をへこの訛り。[二]ふんどし(犢鼻褌)の異名。

おへこ　(名)　山城國紫野の今宮にて、氏子の稱。

おへ-さま　御家様　(名)　おいへさま(御家様)に同じ。長町女腹切[二]「且那殿・おへ様へ、よいやうに頼むぞや」

おへさまがほ　御家様顔　(名)　主婦らしき顔附。女房氣取。重井筒[二]女は亭主と坐を組みて、おへ様顔して居たりける」

おへ-たい　(形[ロ語])　冷やかなり。つめたし。幼兒の語。

おへっか　(名)　人に詔ふこと。へつらひ。

おへ-ない　(形[ロ語])　施す手段なし。手にのらぬ。しやうがない。馬鹿につける藥。「松右衛門の分別らしい顔も、おへないよいよ、爺の姿あらはれ」

おへや　御部屋　(名)　[一]宮中の御服掛・御膳掛・鍬比などの稱。[二]貴人の妾などの尊稱。

おへや-さま　御部屋様　(名)　前條に同じ。

おへや-しゅう　御部屋衆　(名)　室町幕府の制。將軍の寢所に宿直する役。將軍同族のもの之を勤む。

おへやーな　御部屋鏃　(名)　けしびか(芥子鏃)に同じ。

おへら　(英 Opera)　(名)　西洋演劇の一。音樂を用ひて、歌ひながら演ずるもの。歌劇。樂劇。

おへらかす　(他動)[四]　嘲弄す。ひやかす。

おへら-ぐらす　(英 Opera-glass)　(名)　觀劇用の雙眼鏡。形小さし。遠距離を見るに適せず。

おへら-ばち　(名)　せんべい(煎餅)をいふ、羽後國秋田の方言。

おへる　生　(自動)[下]　おふ(生)の口語。

おへる　御辨　(名)　べんたう(辨當)の略。小兒の語。

おへんちゃら　(名)　口さきばかり巧みにて、實意のなきこと。又、其の人。巧言。

おほ　大　(名)　おほきなること。おほきなるもの。萬[二]「夏蔭のねやのしたにきぬ裁つわぎも、裏まけて我がため裁たばやや大[オホ]に裁て」

おほ　凡　(副)　古語。おほよそ。大概。安閑紀「凡合[オホ]肆拾町」萬[二]「そらかぞふおほつの子が逢ひし目に、於保[オホ]ならば見しかば今ぞくやしき」同[三]「凡[オホ]ならばかもかもせむを、かしこみと振りたき袖をしぬびたるかも」同[廿]「おのがをを於保[オホ]にな思ひそ、庭に立ちゐますがからに駒にあふものを」

おほ　大　(接頭)　[一]物の廣く大なるを表はす語。記[下]「をさかの意富[オホ]むろやに」神武紀「伊勢の海の於費[オホ]石にや」[二]量の多きを表はす語。萬「わが里に大[オホ]雪ふれり、大原のふりにし里にふらまくはのち」字鏡「雰[ヒ]於保[オホ]」[三]讃美又は尊敬の意を表はす語。記[下]「よくすにかみし意富[オホ]みき」同「やすみしし我が意富[オホ]君」同[下]「誰れぞ意富[オホ]まへに申す」[四]甚しき意を表はす語。萬[廿]「鳥とふ於保[オホ]をそ鳥の、まさてにも來まさぬ君をころくとぞ鳴く」竹取「かぐや姫てふ、おほぬす人のやつが」盛衰記[四十七]「同じき七月九日午の刻、大地震なり」[五]最初又根原などの意を表はす語。字鏡「昕[根原]加止支[ヒ]」

おほ-あかぎ　大蓁　(名)　[植]あかざ(藜)の異名。

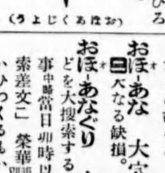
おほ-あがたぬし　大縣主　(名)　縣主の勢望あるもの の稱か。又は小縣に對する大縣の縣主か。記[下]「聚[タ]且波之大縣主[アガタヌシ]」名由恭理之女」同[下]「志幾之大縣主[アガタヌシ]家」

おほ-あかとき　(名)　古語。あかつき(曉)に同じ。字鏡「昕[旦朱阿]」

おほ-あきなひ　大商　(名)　手廣くあきなひをすること。

おほ-あきんど　大商人　(名)　手びろく商ひをする人。富豪の商人。豪商。

おほ-あくじょう　大惡尉　(名)　能樂の面の一。



(うよじくあはな)

おほ-あくび　大欠伸　(名)　大聲にあくびをすること。無遠慮にあくびすること。丹波與作[下]「心を盡くして氣がつきたと、大あくびして居たりける」

おほ-あぐら　大胡床　(名)　無遠慮にあぐらをかくこと。傾城島原蛙合戰「座敷にのさのさ富樫の左衛門、膝をまくって大あぐら」

おほ-あざ　大字　(名)　市町村制施行前に町名又は村名たりしものが、施行後、市町村制の下に入りたるもの。(小字の對)

おほ-あし　大足　(名)　[一]大きなる足。[二]大足にあるく」

おほ-あしらひ　(名)　おほよそにあしらふこと。御重に待遇せぬこと。諸國物語「新參の身として、故參の人をおほあしらひにするゆゑ」

おほ-あせ　大汗　(名)　甚しく出づる汗。狂言[鷺]「大骨をらせ、大あせを流させる」

おほ-あたま　大頭　(名)　[一]大なる頭。[二]かしらぶん。首領。巨魁。

おほ-あたり　大當　(名)　物事の甚よく成功したること。大藥昌。「今度の相撲は大あたり」

おほ-あつあつ　大熱熱　(名)　深くはまりこむこと。いたく熱中すること。

おほ-あな　大穴　(名)　[一]大なる穴。[二]大なる缺損。

おほ-あなぐり　大檢察　(名)　盜賊などを大搜索すること。北山抄[三]「大索[オホアナグリ]事[中]當日卯時以前、上卿參入、令改書盜索差文」榮華[別]「世には、大あなぐりといひつくるもいとゆゆし」

おほ-あに　大兄　(名)　第一の兄。長兄。伯兄。

おほ-あね　大姉　(名)　第一の姉。宇津保[藤原上]「娘などのあると聞きしはありや。三人侍りしは。大あねはなくなりさぶらひにき。今二人さぶらふは」

おほ-あは　粱　(名)　[植]禾本科、粟[アハ]屬の一年生草本。粟[アハ]の一品種。大形なるもの。おほあは。きなるきみ。けあは。

おほ-あはがへり (名) 【植】禾本科、あはがへり屬の二年又は多年生草本。葉の高さ三四尺。葉は細長。花は細長き圓柱狀に密集し、穗狀花序をなし、七月頃淡綠色を呈す。近時輸載せるものにて、牧草として有名なり。ちもし—。

おほ-あぶらすすき (名) 【植】禾本科、油蔴屬の多年生草本、莖の高さ五六尺にして粗剛。葉は長大なる線形なり。八九月頃、莖頂に花を開き、小穗をなして複穗狀花序に排列し、小穗はやや大形、白色の毛茸を有し且つ芒を具ふ。我が國、北部の山地に自生す。

おほ-あへ 大麻 (名) だいきやう(大麻)に同じ。百合若大臣野守鏡「三日・四日・七日に打ち織き、朝勤・大あへ・白馬の」

おほ-あま 大尼 (名) あま(尼)の敬稱。源氏物語「かの大尼ぎみも、今はことなきほけ人にておはりけんかし」

おほ-あまさがころ (名) 【植】百合科、黃精(オウセイ)屬の多年生草本。萎蕤(イワヒヒ)の變種。大形なるもの。

おほ-あみ 大網 (名) 大なるあみ。ひろき網。宇津保物語「あま・かづき召しつどへて、よき物かづかせ、むら君召しておほあみ引かせなと」

おほ-あみがさだけ (名) 【植】子囊菌類、あみがさだけ屬の菌類。全高一尺、徑五六寸に達す。頭部は球形にして、表面に蜂窩狀、不正多角形の陷沒ありて、玆に黃褐色なる腹子を生ず。柄部は黃色にて太く長く、上方に向かひて少しく細くなれり。我が國にては稀れに森林陰濕の地に自生す。

おほ-あむどの (名) だいこくでん(大極殿)の古名。大安殿(ダイアンデン)を訓み誤りたるものなるべし。天武紀「大極殿(オホアムドノ)」

おほ-あめ 大雨 (名) 甚しくふる雨。和泉式部集「おほ雨のあした、よひはいかがと宮よりある御返事」

おほ-あや 大綾 (名) 帛の文(アヤ)の大なるもの。右義一說、大紋の綾。蔡邕(サイヨウ)紫の大綾(オホアヤ)のころも」

おほ-あらき 大荒城 (名) 古語。あらき(荒城)の敬語。萬「おほきみのみことかしこみ、大荒城(オホアラキ)の時にはあらねど雲がくります」

おほ-あらぎ (名) 【植】めぐさ(薄荷)の異名。少彥名遺法「於保阿良岐(薄荷)」

おほ-あらは 大童 (名) おほわらは(大童)の訛り。長門平家十六「敵三騎が中にとりこめられて、大あらはになりて」

おほ-あらめ 大荒目 (名) 【札(サネ)】を、開粗く綴るよりいふ。鎧の縅し法の一種。幅廣き札を、絲目を太く粗く綴ること。又、そのもの。保元新院御所「白き唐綾を以て縅したる大荒目の鎧、同じき獅子金物打ったるを著るままに」

おほ-あららぎ (名) 【植】めぐさ(薄荷)の異名。

おほ-あり 大蟻 (名) 【動】昆蟲類中、膜翅類の一種。我が國最大の蟻なり。全體黑色を呈し光澤あり。胸背部は赤褐なり。松の根に巢を營みて大害を與ふ。和名抄「大蟻。碩雅集注云、蚍蜉一名、馬蟻(阿利)也」

おほ-あれ 大荒 (名) 【俗】甚しく荒はてたること。【俗】風雨の激しきこと。

おほい (接頭) 「古昔、冠階を大(イキ)廣(ヒロ)に分かつてるとより起こる」【俗】おほきの音便。位階の正をいふ。(從をひろいといふ對)【日】同官にて、高き方の稱。(低きをすないといふ對)「おほいものまをすつかさ」

おほい-いくさのきみ 大將 (名) たいしやう(大將)に同じ。雄略紀「拜爲大將(オホイクサノキミ)」

おほい-うちのしるすつかさ 大內記 (名) だいないき(大內記)に同じ。(少內記[スナイキ])の對)

おほい-おほいきさいのみや 太皇太后宮 (名) たいくわうたいこうぐう(太皇太后宮)に同じ。

おほい-おほともひ (名) さだいべん(左大辨)又はうだいべん(右大辨)に同じ。(なかのおほともひ・すないおほともひの對)和名抄「左右大辨(詩注俱公保止毛比)」

おほい-おろしもののつかさ 大監物 (名) だいけんもつ(大監物)に同じ。(少監物(スケイオロシノモノツカサ)の對)

おほい-かきのつかさ 大主鈴 (名) だいしゆやく(大主鈴)に同じ。(少主鈴(オホキノツカサ)の對)

おほ-いき 大息 (名) ふとく息をつくこと。ためいき。ふといき。といき。たいそく(大息)。著聞「大息打ちつきて、寢も入らずして、夜もすがら物を思ひたるけしきなり」

おほい-ぎみ 大君 (名) 第一の姉君。源氏物語、式部卿の宮の御おほいぎみよ」榮華物語、おほい君はただ今は十七八ばかりにて、また中姫君十五六ばかりにて」

おほい-くらのつかさ 大藏省 (名) おほくらしやう(大藏省)に同じ。

おほい-こ 大子 (名) 第一の姉。大和物語「故みやすん所の御姉、おほいこに當たり給ひけるなん」

おほい-ことわるつかさ 大判事 (名) だいはんじ(大判事)に同じ。(少判事[スナイハンジ]の對)

おほい-きうくわん (名) 主典(ナイサウ)の中の高き方の稱。大典・大錄・大疏・大屬・大志等の類。きうくわん(主典)を見よ。

おほ-いし 大石 (名) 大きなる石。いは、たいせき(大石)。(小石の對) 神武紀「伊勢の海の於費異之(オホ)にや、いはひもとへるしただみの」

おほ-いしうち 大石打 (名) 鷹の尾羽の名。たか(鷹)を見よ。

おほ-いしるすつかさ 大外記 (名) だいげき(大外記)に同じ。(小外記[スツカサ]の對) 和名抄「大外記(須加伊之流)」

おほ-いすけ (名) 次官(スケ)の官の中の高き方の稱。大輔・大蔵などの類。すけ(次官)を見よ。

おほ-いすずのつかさ 大主鈴 (名) だいしゆれい(大主鈴)に同じ。(少主鈴[スツカサ]の對)

おほ-いそぎ 大急 (名、副) 甚しく急ぐこと。火急。

おほ-いたくみ 大工 (名) たいこう(大工)に同じ。(小工[スツカイ]の對)

おほ-いたどり (名) 【植】蓼(タデ)科、蓼屬の多年生草本。莖は高さ六乃至十尺、分岐少なし。葉は著大にして尺許、基部心臟形をなし先端尖る。根莖は匍匐し、これより莖を簇生す。莖の先端に近き葉腋より複總花序を著生す。花は夏日開き、帶紅綠白色、或ひは單に白色。黑色の小果を生ず。本邦、北部・中部の高山に產す。

おほ-いたび 蓆茹 (名) 【植】紫科、無花果(イチジク)屬の攀緣性の常綠灌木。よく分枝し、頗る蔓延す。葉は卵形全緣、革質なり。葉腋に餌花し、隱頭花序に排列す。我が國、沖繩其の他の暖地に自生す。いたびかづら。いたみ。いぬたぼ。ひどづた。ひめいたび。

おほ-いたぶき 大板葺 (名) 【建築】幅一尺程、長さ棟より軒までの板にて葺きたる屋根。木戸門・井戸屋形等に用ふ。

おほ-いちざ 大一座 (名) おほぜいの一座。多人數の集會。柳樽「大一座多藝なやつは油蟲」

おほ-いと 大絲 (名) 古語。つむぎ(紬)に同じ。名義抄「紬(オホイトツムギ)」

おほ-いとかけ 大絲掛 (名) 【動】軟體動物、腹足類の一種、いとかけがひ科に屬する貝。いとかけがひに比し大にして稀れなり。價貴し。

おほ-いとぎべ 大解部 (名) ときべ(解部)を見よ。

おほ-いとすけ (名) 【植】はひすげの異名。

おほ-いどの 大殿 (名) だいじん(大臣)の尊稱。源氏物語「おほい殿の君、いとをかしげにかしづかれたる人とは見ゆれど」

おほ-いとのしるすつかさ 大外記 (名) だいげき(大外記)に同じ。(少內記[ショナイキ]の對)

おほ-いなご (名) 【動】とのさまばったの異名。

おほ-いぬたで (名) 【植】蓼(タデ)科、蓼屬の一年生草本。莖の高さ四乃至六尺。葉は廣披針形、下部のものは稍廣き槍穗狀をなす。花序は穗狀にして、全體長き圓筒狀をなし、初夏、紅白種種の花を密生す。我が國、各地に產す。

おほ-いぬのひげ (名) 【植】しろいぬのひげの異名。

おほ-いぬぶぐり (名) 【植】玄參科、草本威靈仙(ウツボグサ)屬の一年生草本。莖の高さ四五寸。葉は卵形鋸齒を有し、短き葉柄を具ふ。春季、葉腋に鮮青色の花を一箇づつ開く。歐洲の原產なれども、近年我が國に輸入せられ、原野・路傍に野生の狀態となす。

おほ-いはばたざを (名) 【植】十字花科、南芥(ハタ)屬の二年生草本。莖の高さ一二尺。根葉は笹形、又は倒卵形鈍頭齒牙を有す。莖葉は長楕圓狀卵形、葉腳少し莖を抱く。春夏の際、莖頂に淡綠色の花を開き、總狀花序に排列す。果實は莢にして直立す。我が國、各地の山地に自生す。

おほ-いはらん (名) 【植】うちやうらんの異名。

おほ-いび 大指 (名) おほゆび(大指)の訛り。

おほ-いぼたのき (名) 【植】おほばいぼたのきの異名。

おほ-いまうちぎみ 大臣 (名) おほきまへつぎみ(大臣)の音便。大臣。古今春上「東三條の左のおほいまうちぎみ」和名抄「大臣(於保伊麻宇知岐美)」

おほ-いまうちぎみ 大臣 (名) 前條に同じ。成務紀「以武內宿禰爲大臣(オホイマウチギミ)」

おほ-いまつりごとの-おほまへつぎみ 太政大臣 (名) だいじやうだいじん(太政大臣)に同じ。

おほ-いまつりごとの-つかさ 太政官 (名) だじやうくわん(太政官)に同じ。和名抄「太政官(阿乎止乃麻つ里ごと乃つかさ)」

おほ-いまつりごとびと (名) 判官(ハウガン)の官の中の高き方の稱。大忠・大丞・大進・大尉等の類。じよう(判官)を見よ。

おほ-いみやつこ 大領 (名) たいりやう(大領)に同じ。(少領(スケイリヤウ)の對)

おほ-いものまうすつかさ 大納言 (名) だいなごん(大納言)に同じ。(中納言[ナカノモウスツカサ]の對)

おほ-いり 大入 (名) 【俗】興行場にて、看客の滿員になること。【日】次條の略。

おほ-いりーは 大入場 (名) おひこみ(追込)に同じ。

おほ-うしのけぐさ (名) 【植】禾本科、牛毛草(ウシノケグサ)屬の多年生草本。莖の高さ五六寸乃至一尺。葉は細長き線形、叢生す。花莖は夏季抽出し、小穗を總狀花序に粗生し、花は淡綠色を帶ぶ。我が國、中部以北の高山に自生す。

おほ-うしろ 大後 (名) 射藝の語。おほま(大前)を見よ。

おほ-うた 大歌 (名) 古昔、宮中大歌所にて採用せられたる歌。又、それを奏する人。(小歌の對) 續紀十六「天平元年、宴五位已上、奏雅樂及大歌於庭」 江次第十五「次大歌・小歌發聲如恆」

おほうた-どころ 大歌所 (名) 古昔の役所の名。國國の風俗歌、又は神樂・催馬樂等の歌曲を掌る所。毎年陰曆十月廿一日開きて、翌年正月十六日閉づるを例とす。古今「大歌所御歌」

おほうた-はじめ 大歌始 (名) 大歌所の開き初め。陰曆十月二十一日とす。太平記「十月は中略おほ歌はじめあり」

おほ-うち 大內 (名) くわうきよ(皇居)の御異稱。だいり(內裏)。禁中。雄略紀「勅喚內裏(オホウチ)」 千載「二條院の御時、大內におはしましてはじめて花有喜色といへる心をよませ給ひけるに」 宮記 禁省 天武紀下

おほ-うぢ 大氏 (名) 一族中の宗家。(小氏の對)

おほ-うちらど 大內人 (名) おほうちびと(大內人)の音便。

おほうち-かた 大內方 (名) 宮中方。(武家方の對) 淀鯉出世瀧徳「公家樣のお袖判を僞せ判し中略大內方よりお詮索」

おほ-うちぎ 大袿 (名) 袿の、ゆきたけなどを大きく仕立てたる物。緣などに賜はるものにて、拜領したる者、當の袿に仕立て直して著る。(小袿の對)頭巾 宇津保祭使「女のよそひ裳十具、しらは袴そへて、おほうちきと重ねいれて」 後撰春上「元日に二條のきさいの宮にて、白きおほうちきを賜はりて」

おほ-うちぎり 大內桐 (名) 五七の桐の紋。丹波與作「宝家に嚴大內ぎり、覆ひ掛けたる挾箱」

おほ-うちしゆご 大內守護 (名) 官名。禁中を守護することを掌る。始めは、公家にて武勇のものを選びあてしが、後には武家の家人をして從事せしむ。頼政建「大內守護ながら、殿上許されぬ事を思はぬにしもなかりけるに」

おほ-うちそだち 大內育 (名) 大內風のそだて方。貴族そだち。孕常聲「一人娘、淨瑠璃御前と聞こえしは中略大內育にかしづきて、若紫の稚立ち」

おほうち-びし 大内菱 (名) 模様の名。菱の花の形したるもの。一代女「大内菱の中幅帯、前に結びて」

おほうち-びと 大内人 (名) 大神宮に奉仕する神官。供御の物などを掌る。また熟田・國懸等の大社にもあり。

おほうち-びな 大内雛 (名) だいりびな(内裏雛)に同じ。芭蕉句「大内びな人形天皇の頃かとよ」

おほうち-ぼん 大内本 (名) 昔時、周防國の大内義隆が覆行せし書籍。二種あり、一は紙を明國に遣はし、摺らせて取り寄せたるもの。一は我が國にて印刷したるもの。山口本。

おほうち-やぎゃうばん 大内夜行番 (名) 禁中を夜毎に巡行して、非常を警むる役。

おほうち-やま 大内山 (名) おほうち(大内)に同じ。禁中。皇居。源玉鬘「もろともに大うち山は出でつれど、入るかた見せぬいさよひの月」

おほうち-ゆかり 大内縁 (名) 宮中に縁故あること。蜻丸「殊に某が妹は、女院様のお末の率公仕る、大内ゆかりと申し」

おほうち-んど 大内人 (名) おほうちびと(大内人)の音便。

おほうちなはら 大海原 (名) ひろびろとしたる海洋。

おほうちばら (名) 【植】さるとりいばら(蕀薇)の異名。和名抄「拔薇(略)保保乎賀賀良」

おほうへ 大上 (名) 貴人の母。おほきたの方。源竹河「大うへ、御心の至る限りの事ども、殘りなくせさせ給ふ」榮華樂花「北の方・大うへ、御心の至る限りの事ども、殘りなくせさせ給ふ」

おほ-うま 大馬 (名) 馬の、骨格大なるもの。平家九二「熊谷・平山が乗りたる馬は、飼ひに飼ひたる大馬どもなりければ」

おほ-うまじるし 大馬標 (名) 大きなる馬標の稱。(小馬標の對)雜波戰記「金の扇子の大馬標、銀の瓢箪指し通し、本に金の切先附きたる小馬標」

おほ-うみ 大海 (名) ㊀大なる海。大洋。萬葉「大海(おほ)に島もあらなくに、うなばらのたゆたふ波にたてる白雲」蜻蛉日記上「吹く風につけても物を思ふかな、大うみの波のしづ心なく」㊁かいぶ(海賦)に同じ。宇津保樽上「つぎつぎのは、朽葉・かうかさね色のすりのおほうみのもなり」枕十三「おほうみ」

(諺)**大海を手で壞く** 爲さんと欲しても、力及ばず、出來難きに譬ふ。毛吹草「大海を手柏てせく霧閉かな」吾吟我集「大海を手でせく如し、流れゆく年月なみを惜しむ心は」

おほうみ-の-はら 大海原 (名) おほうなばら(大海原)に同じ。萬五「いなみぬの大海乃原(おほうみ)の、あらたへの藤井の浦に」祝詞式大祓「瀬織津比咩云神、大海原(おほうみ)に持出(もちいで)む」

おほ-うめがささう (名) 【植】鹿蹄草科、うめがささう屬の多年生草本。莖の高さ三四寸乃至一尺、下部は横臥する性あり、てよく分枝す。葉は笹形又は楔狀披針形、鈍頭又はやや鋭頭、鋭鋸齒を有して光澤あり。六月頃、白色又は紅暈を帶びたる數花を莖頂に開き、繖形に排列す。我が國、北海道に自生す。

おほ-うりかへで (名) 【植】うりはだかへでの異名。

おほ-え 大兄 (名) おほあに(大兄)に同じ。

おほ-え 大江 (名) 大きなる江。後拾遺雜五「わたのべや大江の岸にやどりして、雲ゐに見ゆる伊駒山かな」

おほ-え 大枝 (名) 大きなる枝。おほえだ。三代實錄「大枝(おほえ)をこえて、走りこえて、走りこえて、躍りあがり、我れや護る田にやあさり、あさりはむ鳴や、を鳴や」

おほ-え 覺 (名) ㊀おぼゆること。源夕顔「扇をならし給へば、おぼえなきこちすべかめれど、聞き知らぬやうにやはとて、ゐざり出づる人あなり」㊁心に留めて忘れぬこと。心當り。記憶。狂言鬼「此の山は毎年出る山で、則ち町の名も橋辨慶の町と申します。覺えの無いことでござる」大藏狂言「覺えの無いことでござる」「そなたに、何も意見を受くるおぼえは無いが」㊂技術に就きて自信のあること。「腕におぼえあり」宇治拾遺「此の尻蹴よといはるる相撲は、おぼえある力、こと人よりはすぐれ」甲陽軍鑑「如此の大將の下には中略おぼえの者多く出づるものなり」四人に思はるること。寵遇せらるること。信用。名望。又、その人。宇津保樽上「世におぼえあり、みめきらきらしき四位・五位」源帚木「時世うつろひて、おぼえ衰へぬれば」隆信集「少將定家、この母のおぼえなりけるを」玉世の聞え。評判。源帚木「ねぢけがましきおぼえだになくば」

おほ-え-がき 覺書 (名) ㊀記憶に備ふるための書き置くこと。又、其の文書。東遷基業「如水・菊正相談し、立花宗茂に下城を勸むべしとて中略覺書を出だし授く」民事訴訟法第三百十四條「證人は其の供述に換へて書類を朗讀し其他覺書を用ゐることを得す但し算數の關係に限り覺書を用ゐることを得」㊁外交文書の一。相手國に對して、自國の寶見又は希望を陳述するために用ひられ、其の形式は正式の條約より簡易なるもの。

おほ-え-ぐさ 覺草 (名) 慶賀に、鳥の落ちたりと覺ゆるあたり。日葡辭書「われしらず。

おほ-え-ず 不覺 (副) いつしか。偶然。源乘生「おぼえず、神佛の現れ給へらんやうなりし御心ばへに」新古今歴上「暮れかかるむなしき空の秋を見て、おぼえずたまる袖の露かな」

おほ-え-ちゃう 覺帳 (名) 記憶のために、とめおく帳簿。手びかへ。孕帶磐「馬方に牛金渡す錢拂ひ、數多の手代が覺帳」

おほ-えのころ (名) 【植】禾本科、粟(あわ)屬の一年生草本。狗尾草(ねこじゃらし)の變種。大形なるもの。

おほ-えのみ (名) 【植】えごま(荏)の異名。

おほ-えびかづら (名) 【植】ぶだう(葡萄)の異名。本草和名「蒲陶(略)衣比加豆良」

おほ-えり 大襟 (名) 小袖の前を廣くあけて著ること。貞丈雜記

おほ-ゑる 覺 (他動) ㊀おぼゆ(覺)の口語。知る。會得す。大藏狂言「今一つ飲んで、風味を覺えう」㊁思ひおこす。思ひだす。狂言「鳥類子孫」「ああ某がおぼえた。ここでおりやる」同「いや、名はおぼえました」「舅おぼえたか」㊂肝に徹す。「こたへる。狂言「舅おぼえたか」同「此の金剛杖で甲を打ち割ってくれうぞ。覺えたか、覺えたか」

おほ-おかた 大御方 (名) おだいはう(御大方)に同じ。

おほ-おく 大奥 (名) 江戸時代、御臺所の居る所。且つ將軍の休息所。婦人のみここに仕ふ。

おほ-おにばす (名) 【植】睡蓮科、おほおにばす屬の多年生草本。有名の水草なり。葉は巨大なる圓形楯狀にして、直徑五六尺に達し、葉面は淡綠色、裏面は深紅色、葉緣少しく上方に屈曲し、質強硬能く數歲の兒童を載するを得べし。花ははすの花に似て大形、周圍六尺に及び、艷美なる數百枚の花瓣より成り、花心は鮮紅色、周邊は雪白色なり。南米あまぞん河の上流に自生す。土人は其の果實を食す。

おほ-おば 大祖母 (名) ひばば(曾祖母)に同じ。そうそぼ。和名三「曾祖母。爾雅云、祖父之母爲曾祖母」

おほ-おび 大帶 (名) しん(紳)に同じ。

おほ-おぼ (副) おぼおぼしく。はきとせずして。源蜻蛉「あやしきまでことずくなに、おぼおぼとのみものし給ひて」

おほ-おぼし (形ク) ㊀はきとせず。おぼろなり。おぼつかなし。隣朧たり。源賢木「たそがれ時のおぼおぼしきに、同じなほしどもなれば、何ともわきまへられぬに」同上若菜「もうもうに、耳もおぼおぼしかりければ」㊁うとうとし。源帚木「おぼしだに隔てて、おぼおぼしくもてなさせ給ふには、何事をかきこえ侍らん」紫式部集「方たがへに渡りたる人の、なまおぼおぼしき事ありて歸りける、つとめて」

おほ-おぼぢ 大祖父 (名) ひぢぢ(曾祖父)に同じ。ひいぢぢ。そうそふ。字鏡「曾祖(略)知」和名三「曾祖父。爾雅云、祖父之父爲曾祖父(略)保知」

おほおほぢ-をぢ (名) 曾祖父の兄弟。和名三「族父。爾雅云、父之從祖昆弟、爲族父(略)乎知」

おほ-おばば 大祖母 (名) ひばば(曾祖母)に同じ。

おほ-おみ 大臣 (名) 上代の官。臣(おみ)のかばねの首領。大連と共に政を執ること、後世の左右大臣の如し。雄略紀「以平群臣眞鳥爲大臣(おほおみ)」

おほ-および 大指 (名) おほゆび(大指)に同じ。おやゆび。和名三「拇。國語注云、母指(略)大指也」名義抄「拇(オホヨビ)」

おほ-おろし 大颯 (名) 曲馬の曲の名。當流小栗判官「大颯・小颯中略といふ曲を、乘りかへしひきかへし」

おほ-が 繰車 (名) いとくりぐるま(絲繰車)に同じ。和名抄「綮車(略)乎久利久流末」糸車。唐韵云、綮(略)東宮切(略)繰繭取絲也」

おほ-が 大鋸 (名) 大なる鋸。おが。がんぎ。かがり。「おほがひき」

おほ-がうし 大格子 (名) 辨慶縞(ベンケイ)の大なるもの。(小格子の對)

(しうかはこ)

おほ-からす (名) 【植】とろろあふひ(黃蜀葵)の異名。

おほ-からもり 大蝙蝠 (名) 【動】乳類中、翼手類の一種。大なる蝙蝠にして、兩翼を擴ぐれば三四尺に達し、體色は稍赤味を帶び、尾は甚だ小なるか又は之を缺く。齒は白齒は鋭利ならず。主として果實を食とし、晝間は陰所又は樹間に隱れ、黃昏より飛翔す。本邦、琉球・小笠原島等に產す。

おほ-がかり 大掛 (名) 大仕掛。大計畫。大事業。國姓爺後日合戰「雀を捕るに雁の網では羅ちぬはず。大懸りの寄手、軍令が締まらぬ、もっとももっとも」

おほ-がき 大垣 (名) 外圍の大きなる垣。築地などをいふ。源蜻「ものはかなげなる小柴をおほがきにて、板屋ども、あたりあたり、いとかりそめなり」榮華「方四町をこめて大垣にして、瓦葺きたり」

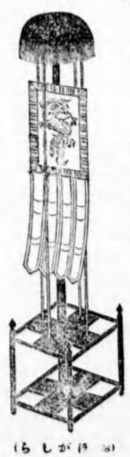
おほ-かく 大角 (名) ㊀大なる角材。㊁錢百三十二文の稱。昔の芝居の隱語。

おほ-かぐま 狗脊 (名) 【植】本龍骨科、こもちしだ屬の多年生草本。地下に匍長なる根莖を有し、之より生ずる葉は、葉柄一尺乃至一尺五寸、殆ど平滑、基部は黑色なり。葉身は羽狀複葉、楕圓狀披針形、鈍頭、葉脚に向かひて細くなり、長さ一二尺、巾五六寸。各小葉は線狀、披針形、鋭尖頭、互生又は對生、革質平滑、何れも羽狀に深裂し、葉緣微尚牙を有す。支脈上に子囊群を生じ、實葉・裸葉共に同形なり。我が國、各所の山地陰濕の地に自生す。おにわらび。いぬわらび。

おほ-かさ 大嵩 (名) かさの大きなること。おほがら。聖德太子繪傳記「造(コヲ)は大かさもの、既に危く見えにける」

おほ-がさ 大傘 (名) 古貴、用ひし大きなる傘。廣く開き、柄長し。和名三「蓋(略)天美加佐」長八尺「笠有柄也」枕三「大笠柄一枚ず、ただ手のかぎり笠をとらへさせて」

おほ-かさじるし 大笠標 (名) 笠標の近世の制。幅八九寸長一尺二三寸の物を小笠標といひ、二幅の物を中笠標といひ、其より大なるを大笠標といふ。(民具圖說)太



(らしがはこ)

の一種。竿の頭に、馬尾又は靈染の苧を束ね垂れて旗をつけたるもの。御出位又は御祓の時などに用ふ。おにがしら。せちのはた。だら(袋)。榮華「そぎ中略おほがしらなどいひて、例のおそろしげに、すぢふときかみよりかけて、さすがにうるはしくて渡る」

おほ-がしら 大頭 (名) ㊀大群の長。(小頭の對)武家名目抄甲陽軍鑑末書「武田兵庫殿を大頭に被成」㊁くせまひ(曲舞)に同じ。

おほ-かず 大數 (名) おほよその數。たいすう(大數)。孝德紀「錄民元數(略)」

おほ-かしはで-のつかさ 大膳職 (名) 旗平記七、楠村參「由井濱の浦風に、濃き紅の大笠標を吹きそらさせ」

おほ-かし (名) 【植】㊀あかがし(血櫧)の異名。㊁おほかしはの異名。

おほ-かしは 大柏 (名) 紋所の名。

おほ-かしは (名) 【植】殼斗科、櫟(クヌギ)屬の落葉喬木。樹皮は非常に大にして、長さ一尺に及ぶものあり。葉先に近き葉緣に重鋸齒なることあり。嫩葉はかしはに同じく、表裏共に褐毛密生す。我が國、各所の山地に自生す。おほかし。

おほ-かしはで-のつかさ 大膳職 (名) たいぜんしき(大膳職)に同じ。和名三「大膳職(略)天乃豆加佐」

おほ-がしら 蠟節 大頭 (名) 旗

おほかぜ 大風 (名) 暴く吹く風。皇極紀「人風(オホカゼ)」和名「大風(ハヤテ)」(誹)**大風の吹いたあとのやう** 騒がしかりし後の靜寂なるさま。

おほかた 大方 (名) 貴人の母。太平記「大方殿は、自害して火に入らせ可給由仰せ候」武家閑談「權現樣御大方樣」

おほかた 大方 (名・副) 一十のうち八九。あらかた。ほとんど。多分。大抵。大概。萬三「大方(カタ)は何かも慰ひむ、ことあげせず妹に寄り寢む年は近きを」古今雜上「大方は月をもめでじこれぞこの、積もれば人の老いとなるもの」二おしなべて。一通り。一般。源若菜上「大かたに花の袖を見ましかば、露も心のおかれましやは」

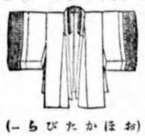
おほがた 大形 (名) 一すべて、形の大なるもの。(小形の對) 二大なる形の模樣。奥女中袖鏡「おほがたのかたはづし」三ごんの丞(權兵衛)を見よ。

おほかたな 大刀 (名) 一古昔、腰刀の大なるものの稱。平家「腰ノ打ノ上ノ」おほ刀を抜き出だして、鬢にすはりすはりと引き當てければ」二後世、大なる鍔刀(ガタナ)の稱。

おほかたなし (形ク) 一方ならず。甚し。甲陽軍鑑「誠信大かたなく無興にて」

おほかたぬぎ 大肩脱 (名) おほはだぬぎ(大肌脱)に同じ。盛衰記「伊藤、皆甲冑を脱ぎ棄て、大肩脱に成り、櫂の面に進み出でて」

おほかたびら 大帷 (名) 一裝束の下に著る布製の汗取。形、單衣に似て小さく短し。春冬は白、夏秋は紅、老人は香染を常とす。後世、單・下襲等の著用を略して、大帷に單・下襲の襟を附け、且つ袖に單の袖のみを附けて用ふることもあり。裝束抄「紅に染めたる大帷なり。汗取の帷と號して、夏秋是れを著る。近代單の袖ばかりを附けて、夏冬共にこれを著す」二武家にて、白き布にて作り、こはく糊をつけ、單の直垂の下に重ねて著るもの。宗五大雙紙「武家の仁も、大かたびらの時は白き小袖を著るべし」


(おほかたびら)

おほかた-まゆ 大形眉 (名) 幼き人につくる眉の一種。女重寶記「凡そ、眉にいろいろの名あり(中略)大かた眉(中略)是れは幼き人につくる眉なり」

おほ-かたり 大騙 (名) 大仕かけのかたり。又、人を罵る詞。浦島年代記「そりや大かたり・大盜人、ぶてよ、たたけも口ばかり」

おほかての-まうしぶみ 大粮申文 (名) 王朝時代、諸寮・諸司・諸衞等より、月俸・食料などを請求する申文。毎月あるべきを、總括して十月に行はる。江次第「大粮申文」

おほ-がな 大假名 (名) 大きなる假名文字にて、拾ひ書にしたること。(著聞集)「あさましき大假名にて、御返事を申しける」同「大假名のいまいましげなるにて」

おほ-がにつり (名) 【植】禾本科、おほかにつり屬の多年生草本。莖の高さ三四尺、單一なり。細長なる葉を有す。初夏、誅なる六七寸の穗を抽出し、小穗は細小なる柄を有し、七八分の芒あり。歐洲原産の牧草にして、近時本邦にても栽培する所あり。おーとぐらす(oat-grass)。

おほがね 大鐘 (名) つりがね(釣鐘)に同じ。和名「洪鐘(俗云大鐘)」榮華(浦海)「そこらの僧俗、數知らぬ人、御堂にして、ぬかをつき、おほがねをつきて申しのの しり」

おほがね 大矩 (名) 土木・建築等にて直角を定むるに用ふる大なる三角規。

おほ-がね 大金 (名) 多額の金錢。たいきん。三世相錦繡文章「折りを見合はせ、おほがねまうけをせにやならねえ」

おほがね-もち 大金持 (名) 多くの財貨を所有する人。財産家。金滿家。博多小女郎波枕(長唄)「天竺の大金持、月蓋と名に高き、さってもしはい長者あり」

おほか-のき (名) 【植】はくうんぼくの異名。

おほ-かは 大川 (名) 大なる川。大河。たいせん(大川)。萬三「わたらひの大河(カハ)のべの若ひさぎ、わがひさにあれども慰ふるかも」(誹)**大川を手で掻く** 大海を手で掻くに同じ。おほうみ(大海の條)を見よ。

おほ-かは 大革 (名) おほつづみ(大鼓)に同じ。

おほかは-いちご (名) 【植】きいちご(懸鈎子)の異名。

おほかは-ぐち 大川口 (名) 大川の、海へ流れこむところ。おほかはじり。

おほかは-じり 大川尻 (名) 前條に同じ。

おほ-かはづすげ (名) 【植】莎草科、薹(スゲ)屬の多年生草本。莖の高さ二尺、鐵長なり。葉は細長、莖より短く、巾は一分に過ぎず。苞は短き錐狀。花は各數箇づつ小穗に集まり、小穗は五乃至十箇莖頂に叢生し、褐色なり。我が國、各地の原野水濕の地に自生す。

おほ-かはほり 大蝙蝠 (名) 【動】おほかうもり(大蝙蝠)に同じ。

おほかは-みづ 大川水 (名) おほかはの水。おほかは。堀河百首「吉野なる大川水のよそほひは、代代にも更に絶えじとぞ思ふ」

おほかはよど 大川淀 (名) 大川の淀むところ。萬今「今しくは見めやと思ひしみよしぬの、大川余杼(ハヨド)を今日見つるかも」

おほ-かはら 大河原 (名) 大きなる かはら。廣き河原。記中「艇なづむ、意富迦波良(オホカハラ)の植草」

おほ-がひ 大峽 (名) 大なる山の間。(小峽(ガヒ)の對)祝詞式(大祓)「奥山乃大峽(オホガヒ)・小峽(ガヒ)立(ガヒ)木乎」

おほ-がひ 大貝 (名) 一大きなる貝。鎌田兵衞名所盃「浮かむ瀬と昔に聞く、大貝の硯瑞盃に」二漢字のつくりの名。頃・須・順等の、右傍にある頁の字の稱。(貝をこがひといふの對) 國姓爺後日合戰「順の字(中略)つくりの大がひ八點を離し、百八となる」

おほ-がひき 大鋸引 (名) 大鋸(オガ)にて木材をひく人。三十二番歌合「大がひき。柚板は世に出でながも哀れ身の、おがひきこもる山住ぞうき」

おほ-かぶき 大歌舞伎 (名) おほしばゐ(大芝居)に同じ。

おほ-かぶら 大鏑 (名) 鏑矢の、鏑の大なるもの。保元(白河殿落)「御曹司件の大鏑を以て、ひやうと射給ふが」

おほ-かぶろ 大禿 (名) 大なる禿鞘

(カブロ)。陳摩蘇(禮記)「萑蒲皮の角十文字、白頭の大禿、これ越前六角家の」

おほ-かべ 大壁 (名) 土蔵などの如く、全部をかべぬりにしたるもの。

おほ-かへし 大返 (名) そうがへし(總返)に同じ。甲陽軍鑑「三千の人數を一手に作り、大返しといふ物に返して、一戰を始む」

おほ-かへで (名) 【植】おほつたもみぢの異名。

おほ-かさり (名) かまりを見よ。

おほ-かみ 大神 (名) おほみかみ(大御神)に同じ。崇神紀「令祭(ハラ)大神(オホカミ)」萬三「そらみつやまとの國は(中略)大神(オホカミ)のいはへる國ぞ」

おほ-かみ 大噛 (名) 粗く噛むこと。宇津保(俊蔭)「やい米は、大かみにこそはかめ」

おほ-かみ 狼 (名) 【動】食肉類、犬科に屬する獸。和犬大にして體は瘠せ、頭は細長にして口大きく、毛色は灰色又は薄茶色。吠聲頗る高く遠方に響く。性甚だ猛惡にて人畜を害す。我が國には產せず。世俗狼と稱するは皆豺(サイ)なり。排哈紀「無レ異二於豺狼(サイロウ)一」和名抄「說文云、狼(ロウ)似(ニ)犬而銳頭、白頰者也」(誹)**狼の衣** 表面殊勝に見えて、內心のおそろしき譬へ。雅楚醉興集(舞)「狼のころもにひとし、魚の棚上下きつつ番をする猫」

おほ-かみ-ぐさ (名) 【植】ちやんばぎく(博落廻)の異名。

おほかみ-もの 狼者 (名) わうちやくなる人を罵りていふ稱。

おほかみ-れん 狼連 (名) (狼の、隙あらば飛びかからんとするに譬ふ) 女藝人に對し、猥らなる心を抱きて、常につきまとふ人人の稱。

おほ-かめ (名) 【動】おほかみ(狼)の訛り。(方言)

おほかめ-だぶし (名) 【植】ちやんばぎく(博落廻)の異名。

おほかめの-き (名) 【植】むしかりの異名。

おほ-かもめづる (名) 【植】蘿藦科、かもめづる屬の多年生草本。莖莖を有す。葉は披針形又は三角狀披針形、幽脚耳形を呈す。葉腋に生ぜる短き穗狀花序に、暗紫色の花を排列して開く。果實は嘗熟なり。我が國、各地の原野に自生す。

おほ-がら 大辛 (名) 七色唐がらしの「最も辛きもの。(中辛・小辛の對) 七個人」七色薬椒の大辛といふのを」

おほ-がら 大柄 (名) 一常人より長大なる軀幹。二普通より大なる縞柄(ガラ)。

おほ-からあぶひ (名) 【植】たちあふひ(蜀葵)の異名。

おほ-からう 大家老 (名) たいらう(大老)に同じ。

おほ-からし 大芥 (名) 【植】十字花科、菜薹(アブラナ)屬の一二年生草本。莖の高さ三四尺。葉は大にして倒卵形又は長楕圓形、鈍頭、不齊の鋸齒を有す。春夏の候、總狀花序を抽出し、黃色の十字形花を開く。果實は小なる莢なり。我が國、各地の園圃に栽培せらる。若き莖・葉は食用とす。いせな。おほばがらし。かきな。たかな。ばせうな。

おほかり 多 (自動) 多くありの約。萬三「初雪はちへにふりしけ、慰しくの於保加流(オホカル)我れは見つつしぬばむ」源(若菜下)「いと聞きにくきことおほかり」

おほ-がり 大雁 (名) 【動】ひしくひ(菱喰)の古名。雄略紀「鷲(オガリ)」

おほ-がんだら 大强盜 (名) 大仕掛の强盜。又、人を罵る詞。大織冠「大がんだうのいきずりめ」

おほ-かんぬし 大神主 (名) 上古、大神宮に奉仕せし神官。禰宜の上にあり。

おほ-き 大樹 (名) しやうぐん(大將)の異稱。たいじゅ(大樹)を見よ。

おほき 大 (名) おほきなること。大なること。竹取「海の上にただよへる山、いとおほきにてあり」同「このちご養ふほどに、すくすくとおほきになりまさる」

おほき 大 (副) 甚しく(量・數・幅・聲など)。いみじく。一通りならず。ことのほか。非常。竹取「天の下の事はとありともかかりとも、御命の危さこそおほきなるさはりならめ」宇津保(俊蔭)「山のある、おほきに驚きて」同(藤原)「おほきなる倉は、一國を治むるほどに寶を積みて」宇津保(下)「宮より西、おほきなる川のほとり」宇治拾遺「僧伽多、大きなる聲を放ちて走りまはって」でっかい(東州)がいづない(關東)でこと(お屋上臨)。遠ふとい(西國)(物想)(鼻呼)江(白酒)(遊)。骸酷なる處置。ひどいめ。浮世風呂「今に歸ったら、大きな目に逢はせて遣りませう」

おほき に おせわ 餘計なる世話。無益なる世話。人を嘲るにいふ語。(誹)**大きな顔する** 尊大に構ふ。

おほき 大 (接頭) 一おほ(大)に同じ。景行紀「碩(オホ)田(ハタ)」萬「酒の名を大じりとおほせし、古への大(オホ)じりのことのよろしさ」二おほい(大)接頭に同じ。成務紀「大臣(オホオミ)」持統紀「東宮大傅(オホモリ)」古今序「おほき三つの位、柿本の人麿(オホモリ)」勢語「おほきおほいまうち君(おほおとど)」と聞こゆるおほしけり」

おほ-き 大木 (名) 大なる木。たいぼく。祝詞式(祭)「遠山・近山(中略)生留、大木(オホキ)・小木乎、本末打切乎、持參來(ル)」(誹)**大木に蟬** 大小甚だ懸隔せる譬へ。

おほ-き-うみ 大海 (名) 大洋。だいかい。神代紀上「溟渤(オホキウミ)以之鼓盪」萬「於保吉宇美(オホキウミ)のみな底ふかく思ひつつ、裳ひきならしし菅原の里」

おほ-き-おとど (名) だいじやうだいじん(太政大臣)に同じ。勢語「おほきおとどの、榮華のさかりにみまそかりて」

おほ-き-おほいきさいのみや 太皇太后宮 (名) たいくわうたいこうぐう(太皇太后宮)に同じ。

おほきおほいきさいのみやの-つかさ 太皇太后宮職 (名) たいくわいこうぐうしき(太皇太后宮職)に同じ。

おほき-おほいどの (名) 次條に同じ。源若菜「おほきおほい殿の君たち、頭弾・兵衞佐・大夫の君など」

おほき-おほいまうちぎみ (名) だいじやうだいじん(太政大臣)に同じ。おほきおとど。勢語「おほきおほいまうち君ときこゆるおはしけり」

おほき-おまへ 大御前 (名) 貴人の母の敬稱。源浮舟「おほきおまへの御覽ぜざらんほどに、御覽ぜさせ給へとなん」

おほき-おみ 大臣 (名) だいじん(大臣)に同じ。おほおみ。皇極紀「大臣(オホオミ)」

おほき-さ 大 (名) 大きくある度合。竹取「こゝらおほきさまで、養ひ奉る心ざ

しおろかならず」勢語「白き鳥の、はしとあしと赤き、鴨のおほきさなる」

おほ-きさいのみや　皇太后宮（名）くわうたいこうぐう（皇太后宮）に同じ。おほきさき。勢語「おほきさいの宮おはしましける」

おほきさいのみや-の-つかさ　皇太皇宮職（名）くわうたいこうぐうしき（皇太后宮職）に同じ。

おほ-きさき（名）一きさき（后）の尊稱。神武紀「尊爲正妃」爲皇后（オホキサキ）」二くわうたいごう（皇太后）に同じ。綏靖紀「尊爲皇后」日皇大后（オホキサキ）」

おほきさ-し　大（形）「此の語おほきき、おほきけれの活用なし。口語にはおほきいといふ」一軍多し。かさ大なり。ひろし。ふとし。狂言千鳥「おほきうはどざれども、そこさ（千鳥ちやと思し召せば濟む事てござる」二荒し。いみじ。狂言長光「人の太刀に手を掛くるとは、おほきい盜人めぢや」甲陽軍鑑「信州河中島において、大きく負け」

おほきさ-たくみ　大匠（名）工匠の長。記傳「おほたくみ。舒明紀「大匠（オホキタクミ）」

おほきさだ-てふ（名）紋所の名。

おほきたのかた　大北方（名）貴人の母。先代の北の方の稱。源氏「此のおほ北の方ぞ、さがなものなりける」

おほ-きたのまんどころ　大北政所（名）堀政・關白の母の尊稱。（北政所の對）永嘉門院・近衛おほきたのまんどころなど、やんごとなきかぎり、うちつづきかくれ給ひぬれば」

おほきさ-ごき　大切丸（名）刀のきつさきの大なること。又、其の刀。長町女腹切「大切ッ先のだんびら物」

おほ-きど　大城戸（名）大なる城門。崇神紀「於朋者城（オホキド）よりうかがひて、殺さむとするを知らに」狂言文蔵「大木戸開かせ切って出づる」

おほ-きぬたさう（名）【植】茜草（オホキ）科、茜草屬の多年生草本。莖の高さ二三尺。葉は四隅づつ輪生し、長卵形鋭頭、全緣なり。莖頂及び葉腋に白色の小花を開き、圓錐花序に排列す。我が國、各地の山野に自生す。

おほ-きば（名）【植】あをき（桃葉珊瑚）の異名。

おほ-きばち　大樹蜂（名）【動】膜翅類、樹蜂科に屬する昆蟲。體の長さ一寸許りにて、觸角は長き鞭狀をなす。體形は圓筒狀にて、上半は黑色、下半は淡黃色、翅は暗黃色。幼蟲は松杉科植物を侵害す。

おほ-きまへつぎみ　大臣（名）（おほきまへつぎみの音便）だいじん（大臣）に同じ。

おほきまち-の-つかさ　正親司（名）おほきまちみのつかさ（正親司）に同じ。

おほきまつりごと-の-おほまちぎみ　太政大臣（名）だいじやうだいじん（太政大臣）に同じ。天智紀「以大友皇子、拜太政大臣（オホキマツリゴトノオホマチギミトナシ）」

おほき-まへつぎみ　大臣（名）だいじん（大臣）に同じ。まうちぎみ。おほいまうちぎみ。成祈紀「以武内宿禰爲大臣（オホキマヘツギミ）」

おほ-きみ　大君（名）一帝王の稱。記「しが花の照りいまし、しが葉のひろりいますは、淡富岐美（オホキミ）ろかも」萬「於保伎美（オホキミ）のみことかしこみ、かなしいもが、た枕離れ、夜たちきぬかも」二親王及び諸王の稱。後には專ら諸王にいふ。記「たか光るひのみこ、やすみししわが意富岐美（オホキミ）」「祝詞式「王（オホキミ）・臣等爲使兵」

おほきみ　のかぜ　大君風　宋玉の故事による。下文を見よ。夫木「あふぎけるを我が大君の風なれば、たれも涼しき宮の内かな」宋玉文選「楚襄王遊於蘭臺之宮、宋玉・景差侍。有風颯然而至、王乃披襟而當之曰、快哉此風、寡人所與庶人共者邪。宋玉對曰、此獨大王之風耳、庶人安得而共之」

おほ-きみ　大君（名）主君を敬ひ呼ぶ語（若君の對）國府臺戰記「おほぎみ義朝をはじめ奉り、御舍弟元頼、わかぎみ兩三人」

おほきみ-すがた　大君姿（名）袍又は直衣・布袴など著た人の中に、直衣を著て、うちとけたる姿なるにいふ。源花宴「みな人はうへのきぬなるに、あざれたるおほきみすがたの、なまめきたるにて」同行幸「櫻のからぎぬの御なほし、今やう色の御ぞひきかさねて、しどけなきおほきみすがた」

おほきみ-づかさ　正親司（名）おほきみのつかさ（正親司）に同じ。

おほきみ-の　大君之（枕）天子は、きぬがさをささせ給ふゆゑ、みかさにかけていふ。萬「大王之（オホキミノ）みかさの山の帶にせる、細谷川の音のさやけき」

おほきみ-の-かみ　正親正（名）正親司の長官。

おほきみ-のさくわん　正親令史（名）正親司の主典。

おほきみ-の-じよう　正親佑（名）正親司の判官。

おほきみ-の-たいふ　正親大夫（名）正親正にて、五位に敍せられたるものの稱。

おほきみ-の-つかさ　正親司（名）古への役所の名。宮內省の被管、皇親の名籍を掌るところ。正（ヨ）以下、佑（ジヨウ）・令史（リヤウし）・史生等の職員あり。おほきみづかさ。おほきんだちのつかさ。

おほき-みやつこ　大領（名）たいりやう（大領）に同じ。齊明紀「淳代郡大領（オホキミヤツコ）」

おほきみ-をんな（名）王女。女王。源宮木「ふるおは君女の数（きこえければ、ひがごとにもやとつつましくて、手ふれ給はず」

おほ-きもいり　大肝煮（名）おほじやうや（大庄屋）に同じ。

おほき-ものまをすつかさ　大納言（名）だいなごん（大納言）に同じ。天智紀「御史大夫（オホキモノマヲスツカサ）」天武紀「大納言（オホキモノマヲスツカサ）蘇賀果安臣」

おほ-ぎやう　大形（名、副）一盛んに大きくすること。おほげさ。「事業をおほぎやうに始める」我衣「屋臺と云ふ物、おほぎやうになりたるは、元祿の頃より始まりたり」二實際よりおほげさにいひたつること。誇大。「おほぎやうに吹聽する」

おほ-ぎやか　大（副）大きなるさまを表はす語。枕「おほぎやかなるわらはの」

おほ-ぎり　大切（名）一物を大きく切り分かつこと。又、其の物。二芝居など

にて、其の日演ずる幕の終り。おほづめ。大團圓。三物事の終局。大尾。

おほ-ぎりしま（名）【植】たうつつじの異名。

おほ-ぎりふ　大切生（名）切生（ヲリ）の一種。切生（ヲリ）の大形なるもの。本門平家「六箭綸」河越太郎重頼中間大ぎりふのそやのうは矢に、あまのおもて刈ぎたるを負ひたりけり」

おほ-きさだち-の-つかさ　正親司（名）おほきみのつかさ（正親司）に同じ。和名「正親司（オホキサダチノツカサ）」

おほ-く　多（名、副）一おほかた。あらまし。大抵。源帚木「陰陽師なども、多くは女のらちとのみトなひ申しければ」二なみ。普通。大方。枕「まことに、年ごろはおほくの人なめりと見つるを」

おほ-くくり　大括（名）全部を一まとめにすること。そうぐくり。そうくわつ（總括）。

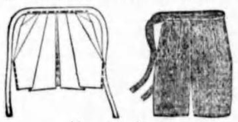
おほ-くけ　大紺（名）一くけ針の大なるもの。二あらあらしくくけること。

おほ-くさそてつ（名）【植】水龍骨科、くさそてつ屬の多年生草本。葉は高さ二三尺に達し、葉柄の若き部には淡褐色の鱗片を有す。葉身は二回羽狀に深裂し、其の小裂片は微鋸齒を有す。實葉上に子囊群を生じ、管葉は稍羽狀、子囊熟すれば黑褐色の胞子を生ず。我が國、各地の山地陰濕の地に自生す。いぬがんそく。いぬくさそてつ。

おほくさ-りう　大草流（名）料理法の一流。室町時代、足利殿中の料理家、大草三郎左衛門の創めたるもの。

おほ-ぐそく　大具足（名）弓・矢・鎧等、武具の大なるものの稱。狐鷲合戰物語「徒武者は大太刀・大具足どもにて」

おほ-くち　大口（名）「大口袴の略。裾の口廣ければいふ」紅の生絹・平絹・張絹等にて仕立てたる袴。束帶の時、表袴（ウハバカマ）の下に著す。老人は白などを用ふ。あかおほくち（赤大口）。又、その前の方を張り出だすために、その方を、太絲の織地にて仕立てたるを前張大口と稱して公家著用し、之に反して、それを後の方に用ひたるを後張大口と稱して、武家の著用、又能裝束等に用ふ。共に略して單におほくちとも稱す。


（ちくはお）

おほ-ぐち　大口（名）一大いなる口。著聞「犬走りかかりて、犬口あきてくひつかんとするを」二勝手なることを憚らず言ふこと。大言壯語。俚言集覽「阿南陀丸」大口利いてあばれ屋の軒」三賣買・取引の多額なること。（小口の對）「大口の手合せ」

おほ-くちきれ（名）【動】軟體動物、腹足類の一種。くちきれがひ科に屬す。殼は長さ凡そ一寸、正圓錐形をなし、美麗にして光澤あり。螺塔高く、螺層脹ることなく、十數階に達し、縫合深し。

おほ-くち-の　大口之（枕）おほくちは狼の口の大きなるをいふ。狼を眞神ともいへば、まがみにかけていふ。萬「大口能（オホクチノ）まがみの原にふる雪は、いたくなふりそ、家もあらなくに」

おほ-くち-の-はかま　大口袴（名）おほくち（大口）に同じ。和名「大口袴（オホクチハカマ）知加末」

おほくち-ばかま　大口袴（名）前條に同じ。名義抄「裙（オホクチハカマ）」

おほ-くづれ　大崩（名）戰に敗れて、大に陣立の動き亂るること。太閤軍記「朝長は、郡大崩れにて、膝の口を射させ、とかく煩ひ給ひしが」

おほ-くばう　大公方（名）前將軍の尊稱。畠山記「大公方尊氏公、天下御草創の刻み」

おほ-くばがた　大鍬形（名）兜の鍬形の大なるもの。愚管抄「大鍬形の兜取つて著て、緒しめ打ち出でければ」

おほ-くび　大領（名）袍又は狩衣などの盤領（アクビ）の前襟の稱。和名「袍（オホクビ）衣前襟也」

おほ-ぐひ　大食（名）多く物を食ふこと。おほぐらひ。たいしよく。浮世風呂「あいさ、大喰ひだからね」

おほくぼ-ふぢ　大久保藤（名）紋所の名。

おほ-ぐも　大蜘蛛（名）【動】くもの一種。大形にして體の長さ七八分に達す。脚長くして毛を生じ、體色黃褐色にして黑斑を有するもの。

おほ-ぐら　大藏（名）一大なる倉庫。著聞「建てそめてまだものつかぬ大藏は、もとの修理にもまさらざりけり」二大藏者の倉庫。

おほくら-さきやう　大藏卿（名）一古への大藏省の長官。おほくらのかみ。源桐壺「大藏卿藏人かうまつる」二明治十八年十二月の官制改革以前に於ける、大藏大臣の稱。

おほくら-じくわん　大藏次官（名）各省次官の一。大藏大臣を佐け、大藏省の事務を整理し、其の各局部の事務を監督する勅任官。

おほ-くら-しやう　大藏省（名）一古への八省の一。諸國より納むる調・庸の物を出納し、權衡・度量及び贄買の估價等を掌る。おほくらのつかさ。二現今各省の一。大藏大臣の統轄の下に、財政事務を取り扱ふもの。大臣官房の外、主計局・主稅局・關稅局・理財局・國債局の五局を設け、次官・各局長・參事官・祕書官・書記官及び屬の職員を置く。大藏省官制「大藏省」

おほくら-しやうしやうけん　大藏省證券（名）次條に同じ。

おほくら-しやうしやうけん　大藏省證券（名）一官省札幣發の高及び二分金外出豫防のため、爲換座三井組の名義を以て、明治四年十月發行し、同八年五月三十一日より其の通行を廢止せられたる兌換紙幣。十圓・五圓・壹圓の三種あり。二流動公債の一。一會計年度內にて、一時生じたる歲入の不足を補ふために、大藏省より發行する無記名利附定期拂の證券。十萬圓・一萬圓・千圓・五百圓・百圓の五種とす。其の償還期限は、發行したる年度の歲入を以て、十二箇月以內に仕拂ふを通例とし、其の最高額は每年の豫算によりて定まるものとす。大藏省正金兌換證券。大藏省證券條例「大藏省證券」

おほくら-しやうれい　大藏省令（名）大藏大臣の發する省令。

おほくら-だいじん　大藏大臣（名）各省大臣の一。政府の財務を總轄し、會計・出納・租稅・國債・貨幣・預金・保管物・信託及び銀行に關する事務を管理し、府・

縣・郡・市・町・村及び公共組合の財務を監督するもの。大藏省官制第一「大藏大臣」

おほくらだいじん・くわんばう　大藏大臣官房　（名）大藏省の一部局。機密、官吏の進退・身分、大臣の官印・省印の管守、公文書類及び成案文書の接受・發送、統計報告の調製、公文書類の編纂・保存、本省の經費及び諸收入の豫算・決算・會計等、大臣官房一般の事務を掌るもの。

おほくら・の・かみ　大藏卿　（名）おほくらきやう（大藏卿）に同じ。

おほくら・の・さくわん　大藏錄　（名）大藏省「の主典。

おほくら・の・じよう　大藏丞　（名）大藏省「の判官。

おほくら・の・すけ　大藏輔　（名）大藏省「の次官。

おほくら・の・つかさ　大藏省　（名）おほくらしやう（大藏省）に同じ。欽明紀「拜ㇾ大藏省（オホクラノツカサニ）」和名抄「大藏者乃倉加伎」

おほくら・びと　大食　（名）おほぐひ（大食）に同じ。

おほくら・りう　大藏流　（名）一能樂の太鼓の一派。大藏源右衛門を祖とす。二能樂の小鼓の一派。大藏宗全を祖とす。今は大倉の字に改む。三狂言の一派。大藏彌右衛門を祖とす。

おほ・くりげ　大栗毛　（名）栗毛の馬。太くたくましきもの。東鑑十一「建久二年八月廿三日「多好方等欲ㇾ歸洛之間、自ㇾ政所ㇾ賜ㇾ餞物」中略一疋、おほくりげ」

おほ・ぐるま　土木香　（名）【植】菊科、旋覆花（センプクカ）屬の多年生草本。莖の高さ二乃至六尺、太き根を有し、之より多數の莖叢生。葉は分枝する事稀にして、上部に毛茸あり。葉は大なる廣楕圓形、表面は粗糙、裏面には毛茸を生じ、齒牙緣を有し、下部の葉は長き葉柄を具へ、上部のものには無し。莖頂に花をつけ、一又は數箇の頭狀花序を綴り、徑二三寸に達し黃色を呈す。歐洲の原產なり。

おほ・ぐれ　（名）大なること。おほがら。今宮心中「書付「格好こそ大ぐれなれ、昨日今日の前髮を」

おほくれ　（名）乞食の一種。弊れたる綿服などを著し、或ひは古き輪袈裟のみをかけ、木魚をうち、或ひは割りかけの竹に四五文の錢を串にして振るひ鳴らし、讀經に擬して誦讀し、錢を乞ひあるくもの。守貞漫稿

おほ・くろ　大黑　（名）色の、甚しく黑きこと。萬「ぬばたまの妻太の大黑（オホグロ）見るごとに、豆勢のを黑しおもほゆるかも」

おほ・くろうめもどき　（名）【植】うまのすずくさ（馬兜鈴）の異名。

おほ・くろばな　（名）【植】うまのすずくさ（馬兜鈴）の異名。

おほ・けさ　大袈裟　（名、副）一大なる袈裟。伊勢大輔集「京ぜんりしと云ふ人の、おほげさ錢はせしに、かたなやあるといひたりし、おこすとて」二大きく袈裟がけに斬ること。源氏冷泉節「さあお慰みに大袈裟を遊ばせ、われわれは一の胴・二の胴」三おほぎやう、大形に同じ。「おほげさなことを云ふ」

おほ・けし　大　（形）古語。大きなり。おほきし。記「いちさかき實の意富祁久（オホケ）を、ここだひるね」

おほ・けたで　荊草　（名）【植】蓼（タデ）科、蓼屬の一年生草本。莖は直立し、高さ五六尺、よく分岐し、その面は粗毛にて蔽はる。葉は卵形、先端尖り、長さ二三寸乃至七八寸。秋季花を開き、複穗花序にして密生し、桃色を帶ぶ。雄蕊は八箇、雌蕊は三箇。小なる種子は栗實狀なり。我が國各地に栽培せらる。いぬたで。おにたで。

おほけな　（形）おほけなしの語幹。字治拾遺「あなおほけなる（おほけな、かかる）事な云ひそ、樣にも似ずいまいまし」

おほけな・げ　（副）おほけなさやう。おほけなさやう。

おほけなさ　（名）おほけなき度合。おほけなきさま。源「けしからぬ心のおほけなさを聞こしめしつけたらん時と、おそろしければ」

おほけ・なし　（形）〔おほけは大氣の義にて、なしは助語。一說、負氣無き義〕身に不相應なり。大膽なり。おふけなし。宇津保「何の報いにかありけん、つたなき身におほけなき心つきて」源夕「我が心ながら、かかるすぢに、おほけなくあるまじき心のむくいに」

おほけば　大下馬　（名）下馬の標におく大なる木、又は石。室町千疊敷「大下馬の道具どめ、四尺四面の立て石、えいやっと引き起こし」

おほこ　（名）一未だ世なれざること。處女。兒童。夕霧「阿波鳴渡「すみ前髮のお小姓らしい、その器量のよさ、恍惚子（オホコ）さ」五十年忌歌「念佛「手入らずの、田舍生れのおぼこにも」二〔動〕蠶（オホコ）の子。蠶業

おほ・ごぞふね　大御座船　（名）ござふね（御座船）の敬稱。

おほ・ごし　大腰　（名）一大きなる腰。又、相撲の手の名。竹齋物語「すまひの手には中略大ごし・もとつめ・むかうつき」平家女護島「「晉に聞こえし能登の守、大腰に地響うたせ、尻居にどうと投げす玄たり」二婦人の裝束に用ふる裳の名所。も（裳）を見よ。雅亮裝束抄「からぎぬを著せて、もをとりて、おほごしを中折りに下へ折りて」

おほ・ごしやう　大小姓　（名）奥小姓或ひは小姓組などの總稱。（小小姓の對）

おほ・ごしゅ　大御酒　（名）おほざけ（大酒）に同じ。狂言「書「路次にて大御酒にたべ玄ひ、道とも存ぜずふせってござれば」

おほ・ごしよ　大御所　（名）將軍の父の尊稱。及び其の住所。東鑑十八「建仁三「江馬殿折節被ㇾ候ㇾ大御所（頼朝）」東下「建久元年九月六日「尼御前御遺跡」

おほ・ごすん　大五寸　（名）長さ二寸一二分の釘。

おほ・ごと　大事　（名）常にかはりたる大なる事。だいじ。

おほこ・にんぎやう　大小早　（名）伊勢國山田・津などにて賣る、張子の麁製なる人形。

おほ・こばや　大小早　（名）和船の名。帆四五反より六七反までの軍船。

おほ・こぶね　大古船　（名）甚だ古びたる廢船。

おほ・こぼし　（名）【植】はくもくれん（玉蘭）の異名。

おほ・こぼりのみやつこ　大領　（名）たいりやう（大領）に同じ。

おほ・こめくさ　（名）【植】むしくさ（蚊母草）の異名。

おほ・こめつつじ　（名）【植】石南（シャクナゲ）科、石南屬の落葉灌木。こめつつじの變種。

其の枝長く、葉も亦少しく大にして、三條の著しき葉脈を有し、橢圓狀披針形、短き葉柄を具ふ。夏日、白色の四弁は五裂せる花を開く。我が國、各地の高山に自生す。

おほ・ごもり　大籠　（名）大勢のおこもり。多人數の參籠。狂言「鑑「馬」いつとは云ひながら、夜前も大ごもりであったなあ」

おほ・ごれんちゅう　大御簾中　（名）貴人の母。武家名目抄「大御簾中、休庵樣へ御隔心之事勿論ながら」

おほ・ごゑ　大聲　（名）高き聲。たいせい（大聲）。かうせい（高聲）。かうしやう（高聲）。土佐日記「行くさきに立つ白波の聲よりも、おくれて泣かん我れやまさらんとぞよめる。いと大ごゑなるべし」源夕「大ひちりき・さくはち・笛などの、おほごゑを吹きあげつつ」

おほ・さ　多　（名）多くある度合。

おほ・さいう　大左右　（名）能樂の語。左右の形（ヲ）の大なるもの。卽ち、先づ左手を上げ右手を下げて、地謠座の左へ行き、左にて、足拍子を一つして、體を廻しざまに、左手を下げ右手を上げて、脇正面へ至ること。

おほ・さいばり　大前張　（名）神樂歌の曲。宮人（ミヤビト）・木綿志手（ユフシデ）・雜渡湯（ザトウ）・踏張（ハリ）・階香（キザハシ）・木綿（ユフ）・井奈野（イナノ）・脇母古（ワキモコ）等の總稱。（小前張の對）

おほ・ざう　（名、副）おほぞうに同じ。

おほ・さうは　大相場　（名）相場の變動の大なること。

おほ・さか　（名）【植】ふしぐろせんをうの異名。

おほ・さか・あさづけ　大阪淺漬　（名）漬物に大阪に行はるるよりいふ）細き大根と薑とに鹽をふりかけ、重石を置きて漬けたるもの。おほさかづけ。

おほ・さか・いちぶきん　大阪壹分金　（名）慶長四年、大阪にて豐臣秀頼の發行せし一分判金。面に一分、背に光次の文字と華押とあり。大阪方金。大日本貨幣史「大阪壹分金」

おほ・さか・からし　大阪格子　（名）戶の横桟の間に、子を細かく組みたる小障子をはめたるもの。

おほ・さか・かねぶぎやう　大阪金奉行　（名）江戶幕府の職名。大阪城に收入する金銀出納の事を掌る。

おほ・さか・がはら　大阪瓦　（名）宮殿などに用ふる大形の瓦。ひろまもの。

おほ・さか・かばん　大阪加番　（名）江戶幕府の職名。八箇月づつ大阪城に交代して警衛に當たる。（大阪定番の對）

おほ・さか・きりづけ　大阪切漬　（名）大根を薑ともに細くひき、鹽をふりかけ、重き石を置きて漬けたるもの。おほさかづけ。

おほ・さか・ぐそくぶぎやう　大阪具足奉行　（名）江戶幕府の職名。大阪城中にあり、備附けの具足の事を掌る。

おほ・さか・ぐらぶぎやう　大阪藏奉行　（名）江戶幕府の職名。大阪城に收むる米穀の出納を管す。

おほ・さか・さう　（名）【植】ふしぐろせんのうの異名。

おほ・さか・じやうだい　大阪城代　（名）江戶幕府の職名。大阪城に駐在して、近畿を警備し、大阪及び附近の訴訟を聽斷し、兼ねて關西諸侯の動靜を察す。

おほ・さか・じやうばん　大阪城番　（名）次條に同じ。

おほ・さか・ぢやうばん　大阪定番　（名）江戶幕府の職名。大阪に在住して、城中の警備を掌る。大阪城番。

おほ・さか・づけ　大阪漬　（名）おほさかあさづけ（大阪淺漬）、又はおほさかきりづけ（大阪切漬）の略。

おほ・さか・つち　大阪土　（名）黃に赤色の交じりたる土。此の土にて壁を塗る事大阪より起こりて、古く世に行はれたり。隱叢「上塗の大阪づちやったもみぢ」

おほ・さか・てっぱうぶぎやう　大阪鐵砲奉行　（名）江戶幕府の職名。大阪に在りて、城中の鐵砲・彈藥の事を掌る。

おほ・さか・ど　大阪戶　（名）土藏の、漆喰塗（ヌリ）の引戶。

おほ・さか・なでしこ　（名）【植】石竹科、瞿麥（クバク）屬の多年生草本。瞿麥の一變種。花鄙長大なるもの。花の色は種種あり。いせなでしこ。

おほ・さか・にはか　大阪俄　（名）大阪にて興行する廉易なる芝居。浄瑠璃の事を演じて興あらしむ。

おほ・さか・はうきん　大阪方金　（名）（長方形なるよりいふ）おほさかいちぶきん（大阪壹分金）の異名。經濟纂要前集「慶長四年始鑄ㇾ方金（大阪方金）」

おほ・さか・はそんぶぎやう　大阪破損奉行　（名）江戶幕府の職名。大阪城の修繕の事を掌る。

おほ・さか・ふなて　大阪船手　（名）江戶幕府の職名。大阪の官船の事を掌り、併せて大阪の商船を檢す。

おほ・さか・ぶね　大阪船　（名）廻船の一種。大阪にて作り出だす荷船。

おほ・さか・まちぶぎやう　大阪町奉行　（名）江戶幕府の職名。大阪にありて、大阪の市街を管し、市內及び近國の訴訟を裁斷す。

おほ・さか・もの　大阪物　（名）慶長以後、大阪の刀工の鍛ひたる新刀の稱。

おほ・さか・ゆみぶぎやう　大阪弓奉行　（名）江戶幕府の職名。大阪城中に備附けの弓矢の事を掌る。

おほ・さき　大前　（名）さきばらひのさきを追ふ聲を長くひくこと。（こさきの對）枕「左衛門の陣に入り給ふ上達部のさきども、殿上人のは短ければ、おほさき・こさきと聞きつけてさわぐ」

おほ・さき・づかひ　（名）狐つかひの類。信濃國南牧にていふ詞。笑覽

おほ・さくらさう　（名）【植】櫻草（サクラソウ）科、櫻草屬の多年生草本。莖の高さ一尺。葉は腎臟狀圓形、葉脚心臟形を呈し、長き葉柄を具ふ。花莖は細長一尺餘に達す。夏季、紅紫色の花を開き、果實は蒴なり。我が國、高山に自生す。

おほ・ざけ　大酒　（名）多くの酒。たいしゅ（大酒）。豪酒。狂言「書「ことに、大ざけまでたべて醉狂を致し」

おほ・ざけ・のみ　大酒飲　（名）多く酒を飲む人。大酒家。

おほ・さぎい　（名）【動】かやくぐり（茅潛）の異名。

おほ・さつ　大札　（名）額面價格壹圓以上の紙幣。卽ち、一兩札・五兩札・十兩札・一圓札・五圓札・十圓札・五十圓札の

類(ぺ小札の對)明治二年五月二日布告「大札を以て小札に換へ或ひは小札を以て大札に換へ通用することは勝手たるべし」憲法類編明治三年九月十七日達「金札大札の分、僻遠の地にては融通に差し支へ、紙幣の趣きも聞こえしにより、今般民部省通商司に於いて、貳分・壹分・貳朱・壹朱の小札を製造し、追追大札と引き替へ、乃ち其の引き替へたる大札は斷截に附すべし」

おほぎっぱ (名、副) 一小事に拘泥せざる性質。おほまか。おほやう。二細密にわたらざること。およそ。あらまし。

おほぎざま 大薩摩 (名) 次條の略。東海道名所記「ここはなほ夥しく、大ざつま・小さつまなどとて」

おほぎさつまぶし 大薩摩節 (名) 慶安の頃、薩摩淨雲の創めたる淨瑠璃節の一種。後、分かれて小薩摩・河東などの數派となれり。

おほぎと 邑 阝 (名) 漢字の部首の名。郡・邸・鄭などの右傍にある阝、卽ち邑の字(阜の阝をこざとといふの對)おほざる。

おほざび 大皺 (名) 烏帽子のしわの、岩石の面の如く高低定まらざるもの。源氏烏帽子折「此のわっぱが著やうする烏帽子は、大さびの粒の荒らかに、一くせみくせませ」

おほさぶらひ 大侍 (名) うちさぶらひ(內侍)をいふなるべし。著聞集「三浦の介義村もとよりさぶらひて、おほさぶらひの座上に袴ひけり」

おほざや 大鞘 (名) 取引所の隱語。鞘(ざや)の大なること。さや(鞘)を見よ。

おほざる 邑 阝 (名) おほざと(邑)に同じ。(こざるの對)逕歩色葉「阝

おほざる 大申 (名) かのえさる(庚申)の異稱。東洞房語園「日本堤は百年ばかり以前のおほざるのとき出來しと。田舍の言葉に庚申の年をおほざるといふ」

おほさるこやなぎ 山柳 (名) 【植】楊柳科、柳(ぬ)屬の落葉灌木。葉は互生、長橢圓形、鋭頭、葉脚は圓形、微鋸齒を有し、裏面には白毛密生す。花は單性、雌雄異株、葉荑花序に排列し、早春、黃赤色の雄花と綠色の雌花とを生ず。我が國、各地の山地に自生す。やまねこやなぎ。

おほさんざし 羊机子 (名) 【植】薯蕷科、山櫨子(ぢさし)屬の落葉灌木。山櫨子に似て葉の大なるもの。

おほさんずん 大三寸 (名) 松村の七寸角を十六割にしたるもの。長さ九尺又は二間あり。ろくぼんさんずん。

おほさんざせう (食茱萸)の異名。

おほさんちゅう 大三重 (名) さんちゅう(三重)を見よ。

おほし 大師 (名) 五節の舞を教ふる人。

おほし (名) 【植】からだいわう(大黃)の異名。和名抄「大黃 波乎之」

おほし 多 (形) 數又は度・量たくさんなり。少なからず。萬葉「ただに逢はずあらくも於保久(おほく)、しきたへの枕さらずて、いめにし見えむ」同「はつ雪は千へにふりしけ、戀しくの於保加(おほか)る我れは見つつしぬばむ」碩記「博(博)士甚大・大紀(大紀)」舞明「たんと・ぜう・だいぶん」舞西「ふんだん」舞東「武せんど」京都「たうど」相國「だらく」常陸「まうに」紀野「どんと」上總「しごくだま」京江「しこたま」東國「よんこ」仙臺「よんにやう」

おほし 凡 (副) およそ(凡)に同じ。神代紀「凡川內直」源少弐「おほし、かいもとあるじ、甚だひざうに侍りたうぶ」

おほし 思 (名) おぼすこと。おぼしめし。榮華「見果てぬ夢おほしの」おぼしのままになり給ひぬるも、ことわりに見え給ふ」

おほし 思 覺 (形) 思はるべくあり。おもはし。蜻蛉日記「親とおぼしき人に」源夕顏「み格子一まと上げて、見奉り送り給へとおぼしく、み几帳引きやりたれば」

おほしあつかぶ 生扱 (他動四) 養育す。そだて養ふ。源若紫「この姫宮をかくおほしあつかひて」

おほしか 大鹿 (名) 【動】偶蹄類、麋鹿科に屬する獸。毛色、牡は青黑色にて、牝は褐色。角は年年交脫して年年一枝を增し、梍れ牡にのみこれを有す。和名抄「麋。四聲字苑云、麋(麋)似鹿而大、毛不斑、以冬至解角者也」本草字鏡「麋(於保)」

おほしじかけ 大仕掛 (名) しかけの大なること。おほがかり。

おほしさあみ 大敷網 (名) 敷網の一種。垣網又は返しとて魚の通路を要する部と、臺網又は魚取とて魚を集めて捕らふる囊狀の部とより成るもの。四艘の舟にて取り圍み、魚の臺網の上に來たれる時、網を繰りて捕らふ。

おほしじご 大四五 (名) 船の荷轡(ぢご)の押綱(ぢご)の名。

おほしした (名) 【植】一うらじろ(裏白)の異名。二こばのとねりこの異名。

おほしだい 大時代 (名) 物事の、いたく古色を帶びたるもの。

おほしたつ 生立 (他動下二) 養ひそだつ。そだつ。竹取「などか、おきなの手におほしたてたらんものを、心にまかせざらん」字津保俊蔭「言ひ教ふることもなくて、おほしたつるに」

おほしだれ (名) 【植】おほばやなぎの異名。

おほしばね 大芝居 (名) 大仕掛の芝居。大劇場。(小芝居の對)

おほしばん 大四半 (名) 旗の一種。四半(ばん)の大なるもの。會津陣物語「上杉の大軍、推し來たり候と告げたりければ中納言日の丸の大四半一里計りに見ゆ」

おほしほ 大潮 (名) 潮の高低の差の最大なるもの。毎月、新月及び滿月の二期に起こる。堀河百首「大しほや淡路の瀨戸の吹分けに、のぼり下だりの片帆かくらん」

おほしぼ 大皺 (名) 一しぼの粗きもの。二おほしぼさんとめ(大絞棧留)の略。

おほしぼっかは 大皺革 (名) 革のしぼの粗く大なるもの。

おほしぼさんとめ 大絞棧留 (名) さんとめ革の絞(ぢ)の、粗く大なるもの。

おほしま 大島 (名) 一大なる島。(小島の對)二大隅の大島より產する砂糖の名。三おほしまつむぎ(大島紬)の略。

おほしまつむぎ 大島紬 (名) 紬の一種。大隅國大島の土人の手に成るもの。精良なる紬絲を用ひ、土產の草根を以て一種の褐色に染む。絣(ぬ)多し。品位高尙にして優雅。同地方の特技とす。おほしま。

おほしまの 大島之 (枕) 島は浦近きものなれば、大島のうらとつづけ、又淡路島を大島ともいふより、鳴門にかけて大島のなるとつづけてもいふ。後撰戀二「人知れず思ふ心は大島の、なるとはなしになげくころかな」源玉鬘「船人は誰なしになげくころかな大島の、うらかなしげに聲のきこゆる」

おほしまふうつう 大島風通 (名) 屬通織の組織を以て縞絲を表裏に現はし緯(ぬ)織の如く見せたるもの。多く紬綿交織にして、外見大島紬に似たり。

おほしまりう 大島流 (名) 江戸時代の初め、大島吉綱の創めし槍術の一派。

おほしめし 思召 (名) おぼしめすこと。大鏡狂言人「いづれも、山の思召しもござらば仰せられて下だされい」

おほしめす 思召 (他動四) おぼす(思)にめすを添へ、一層敬意をつよめていふ。竹取「子安貝とらんとおぼしめさば、たばかり申さんとて」枕「物しげにおぼしめしたるも」源梅枝「かくながら、ともかくもならんを御覽じはてんとおぼしめすに」

おほしゃう 大莊 (名) 大きなる莊園。(大莊)狂言「宇多の莊と云ふ大莊を賜はってよりこなた」

おほしゃうじゃう 大猩猩 (名) 【動】ごりら・の異名。

おほしゃうや 大庄屋 (名) 江戸時代、庄屋の上に位し、數村又は數十村を支配せるもの。大肝煎。檢斷。大總代。大横目。

おほしゃうらふ 大上蔣 (名) 禁中の女官の最も重き職。攝家の女これに任じ、(蔣)狂言「宇多の莊と云ふ大莊を賜はってよりこなた」

おほしゃうじゃう 大猩猩 (名) 【動】ごりら・の異名。

おほしゃうや 大庄屋 (名) 江戸時代、庄屋の上に位し、數村又は數十村を支配せるもの。大肝煎。檢斷。大總代。大横目。

おほしゃうらふ 大上蔣 (名) 禁中の女官の最も重き職。攝家の女これに任

ぜらるといふ。又、借して幕府のにも稱す。海人藻芥「大上臈と申すは、攝家の御女也」

おほしょりん 大如輪 (名) 【動】如輪(ぢりん)の一種。

おほしらびそ 大白檜曾 (名) 【植】松杉科、檜(ぬ)屬の常綠喬木。幹の高さ十丈餘りに達す。樹皮は帶黃褐色にして灰白色の斑點あり。葉は線狀、長橢圓形、先端二裂し、枝上に密生す。球花を開き、圓柱狀にして長さ三寸乃至五寸の兩端則く先端少しく凹入せる球果を結ぶ。本邦、北部の高山に自生す。材は用ふべし。あをもりとど。あをもりとどまつ。おほしらべ。おほりうせん。

おほしらべ (名) 【植】前條の異名。

おほしをん (名) 【植】しをん(紫苑)の異名。

おほしんぶん 大新聞 (名) 新聞の紙面の大なるもの。又、有力なる新聞の稱。(小新聞の對)

おほす 生 (他動四) 一はやす。延ばす。生ぜしむ。萬「山吹は撫でつつ於保佐(おほさ)む、ありつつも君をしつつかざしたりけり」同「なでしこを宿に蒔き於保之(おほし)」著聞「爪を長くおほして、敵を搔きけるに」二そだつ。成長せしむ。養育す。榮華「母もおはせぬ源君を、我がふところにておほし奉りたれば」

おほす 仰 (他動四) いふ(言)、又いひつく(言附)の敬語。續紀「於保世(おほせ)給布御命(ぜ)」竹取「つかさつかさに仰せて」宇津保「などかは、さはおほする」

おほす 負 (他動四) (負ほすの轉)一脊に負はしむ。負はす。萬「かたもひを馬にふつまに於保世(おほせ)もて、こしへにやらば人かたはむかも」字鏡「馬馱(馬馱)」二責めを負はしむ。かぶす。かこつく。萬「わぎもこにあが戀ひ死なば、そわへかも神に於保世(おほせ)む、心知らずて」古今春上「木づたへばおのが羽風に散る花を、誰れにおほせてここら鳴くらん」三金を貸らしむ。負財せしむ。字鏡「債(於保)」大鏡狂言「世に、金錢をおほせた者もあれど、金錢故に命を取られた者もないものぢや」

おほす 課 (他動下二) 一罪過の償ひとして物を出ださしむ。科す。神代紀「科(おほす)之以千座置戸」遂促微奏」同「科(おほす)以千座置戸」二あてはむ。當つ。課す。崇神紀「宜當此時、更校人民、倉知長幼之次第、及課役之先後焉」後撰雜「をしと思ふ心はなくて此のたびは、行く馬に鞭をおほせつるかな」源少女「もろともに罪をおほせ給ふは、うらめしき事になん」拾遺雜賀「春日野の萩の燒け原あさるとも見えぬなき名をおほすなるかな」三程に合はす。似合はす。源蜻蛉「さまざまにせさせ給ふことは多かりけれど、おどろおどろしかりぬべければ、ただ人におほせたる程なりけり」

おほす 果 (他動下二) 果たす。遂ぐ。終ふ。源末摘「いとよう書きおほせたり」同明石「手など、こよなくまさりにけりと見おほせ給うて」落窪「このさうぞくどもいとよし、よく縫ひおほせたりと譽むれば」萬代集三「山深み淋しき宿のあるじとは、なりおほせたる身にもあるかな」

おほす 思 (他動四) (おもほすの約)(おもふ)の敬語。神代紀「若欲(おほす)還鄕者」竹取「おぼすらん事、何事ぞといへば」

おほすぎごけ (名) 【植】苔蘚類、ひめすぎごけ屬の蘚類。地下に簡單なる假根を有し、地上に寸餘の細莖を出だし、これに細小の葉を密生す。雌器・雄器は異株に生ず。子囊を生ずる時は全高四寸餘に達し、子囊は廣楕圓形、四箇の稜角あり。我が國、各所の山地に自生す。

おほすけ 大介 (名) 年給によりて賜はりたる國の國守が、國符・鹽宣等に署判する場合にのみ稱せし名。

おほすけかづら (名) 【植】さねかづら(南五味子)の異名。

おほすず 大鈴 (名) たく(鐸)に同じ。名義抄「鐸 オホスズ」

おほすずがや (名) 【植】こばんさう(小判草)の異名。

おほすずめのかたびら (名) 【植】禾本科、いちごつなぎ屬の多年生草本。莖の高さ一乃至三尺、下部は多少横臥する性あり。葉は細長、二乃至五寸に達す。夏日、黃綠色の花を開き、二三箇づつ集まりて小穗をなし、小穗は又圓錐狀に排列す。我が國、各地の原野に自生す。

おほすずめのてっぱう (名) 【植】禾本科、看麥娘(ぬ)屬の多年生草本。莖の高さ三尺、細長き葉を有す。花は長さ二三寸の穗に密集し、圓柱狀をなし、八月頃、綠褐色を呈し、芒を具ふ。近年舶載の牧草なり。

おほすぢ 大筋 (名) あらまし。大略。

おほすながし 大洲流 (名) 紋所の名。曾我五人兄弟小袖「大洲ながしは安田の三郎」

おほすべらかし 大垂髮 (名) 婦人の下げ髮の長きもの。

おほすべりひゆ 莧耳草 (名)【植】馬齒莧(ばしけん)科、馬齒莧屬の一年生草本。馬齒莧の變種。形大にして直立するもの。たちすべりひゆ。

おほすみあか 大隅赤 (名) 墨棚に飾る、すみあかの大なるもの。

おほすみれ (名)【植】えぞすみれ(胡堇草)の異名。

おほすやき (名) 鐵のさき、鑿の如くに尖りたるもの。淺井三代記「定五人張りに十六束の矢束を引き、大すやきを以て四町面を射通しける」

おほすり 大掘摸 (名) すり(掏摸)に同じ。罵る語。唐船噺今國姓爺「絲林め、大すりども」

おほせ 仰 (名) おほすること。いひつけ。命令。竹取「おのおのおほせ承りて、まかり出でぬ」土佐日記「み舟よりおほせたぶなり、朝北の出でこぬさきに綱手はや引け」

おほせ (名) 除暦四月、日和よき日に吹く南風。伊勢國の方言(物類呼)

おほせあける 仰上 (他動下) 申しあぐ。狂言(磯かり)「上へはお奏者のお心得を以て、宜しう仰せ上げられて下だされませえ」

おほせい 大勢 (名) 數多の人。多人數。たいせい(大勢)で大衆。謠曲(敵のおほせい、あれは巴か女武者、餘すな洩らすなと、敵手しげくかかれば」

(諺)大勢に手なし 多數には勝つべき方法なし。駿豪雜話「世話に大勢に手なしと云ふやうに、一世の風俗には勝ちがたし」

おほせいだす 仰出 (他動下) おほせを下だす。謠(小塩)「大方殿よりの御諚には中路と仰せいだされて候」

おほせいだされさふらふこと 被仰出候事 明治元年より六年頃まで、法令の末尾に記載して、其の法令が、天皇より仰せ出だされたるものなることを表示せるもの。現今の法律又は勅令に當たる。

おほせいで 仰出 (名) おほせいだされたること。御沙汰。おさしづ。

おほせいろうだな 大西樓棚 (名) 四十八棚の一。床間(ゆか)・書院などの脇に設くるもの。大橋棚。

おほせがき 仰書 (名) 天皇又は貴人の仰せを書き記すこと。又、其の文書。枕「よき人中心にくき所へ遣はすべき仰せがきなどを」

おほせかく 仰掛 (他動下) いひかく(言掛)の敬語。枕「よしよし、またおほせかくべき事もぞ侍る」

おほせかた 負方 (名) 貨方。貸主。渡世身持談義「妻子の物まで、おほせ方へつぎたて」

おほせき 大關 (名) 一力士の階級中、最上位の稱。せき。せきとり。ほて。二其の仲間にて、最も傑出せるもの。

おほせきおもだか 大關澤瀉 (名) 紋所の名。おもだか(澤瀉)を見よ。

おほせごと 仰言 (名) 仰せられる言葉。命令。崇神紀「天皇之命(おほせごと)也」竹取「君の使といはんものは、命を捨てても、おのが君の仰せごとをばかなへんとこそ思ふべけれ」

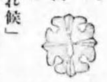
おほせたい 大世帶 (名) 手廣くらしむき。大いなる生計。生玉心中「何程の大世帶も、捌きかねまい女房ぢやと、いはれうと思うたに」

おほせつぎ 大節季 (名) 一年の終りに近き日。節季。歳末。一代女「おほせつきに、一門中から」

おほせつく 仰附 (他動下) いひつく(言附)の敬語。保元(上)「尋ね參らすべき山・播磨守に仰せ附けらる」

おほせつける 仰附 (他動下) 前條の口語。

おほせつば 大切羽 (名) 刀劍の金具。切羽(せつば)の一。鍔より少し小さくて、鍔形なるもの。(小切羽の對)宗五大雙紙「大せつば・小せつばなどまで、金にて作りたるをはかれ候」


(おほせつば)

おほせなぎ (名) ためいき(溜息)をいふなるべし。三河物語「汗を握りておほせなぎをつきて居たる處へ」

おほせぶみ 仰文 (名) おほせがき(仰書)に同じ。

おほせみ 大蟬 (名)【動】くまぜみ(熊蟬)の異名。

おほせり (名)【植】たうき(當歸)の異名。催馬樂「於保世利(おほせり)は國のさたもの、小ぜりこそ、ゆゑでてもうまし」和名抄「當歸(唐本注云、一云於保世利)」

おほせる 仰 (他動下) おほす(仰)の口語。

おほせる 負 (他動下) おほす(負)の口語。

おほせる 課 (他動下) おほす(課)の口語。

おほせる 果 (他動下) おほす(果)の口語。

おほせんじ 大宣旨 (名) 太政官より、被管の諸司もしくは寺社等に下だす公文書。大臣宣し、辨官草し、太政官符と太政官牒との代用をなすもの。西宮記(下)「宣旨樣、大宣旨、某物若干(下大)」

おほせんなり (名)【植】一茄科、おほせんなり屬の一年生草本。莖の高さ四五尺、よく分枝す。葉は卵形缺刻狀にして、齒牙を有す。花は葉腋に單生し、夏日開き、淡青色にて鐘狀をなす。南米べる國の原產。現今廣く庭園に栽培せらる。二ぶだうほほづきの異名。

おほそ 御細 (名) 一おび(帶)をいふ、女詞。二【動】いわし(鰯)をいふ、女詞。大上臈御名之事「女房詞。一、いわし。むらさき。おほそとも、きぬかづきとも云ふ」

おほそう (名、副) 〔おほぞらの誤りとも訛りなりともいふ。一說、あふさわの訛りと宣長〕しまりなき、又おもてむきなどの寛にいふ語。なほざり。一通り。おほざう。源氏(帚木)「やんごとなく、せちに隱し給ふべきなどは、かやうにおほぞうなる御厨子などに、打ちおき散らし給ふべくもあらず」同(玉鬘)「今はかうおほぞうのすまひならで、のどやかに行ひをもとなん思ふ」

おほそうだい 大總代 (名) おほじやうや(大庄屋)に同じ。

おほそこいた 大底板 (名) 船大工の語。船底の外面を包める板張。

おほそで 大袖 (名) 一輻廣き袖。二禮服の上著。袖口大なる故にいふ。雅亮裝束抄「こらい服のやう。大そで」三大鎧の袖。幅廣く大なり。(壺袖・小袖の對)

おほそなへ 大備 (名) 戰陣にて、陣立の大なるもの。義殘後曇「御檢使石田・增田・大谷、郡合八千、小早川大備へなれば先陣し給ふ」

おほそら 大空 (名) そら(空)の稱。廣大なるよりいふ。神代紀「天地初判、一物在於虛中(おほぞら)」竹取「大空より八人雲に乘りており來て」大虛記「虛空(おほぞら)」

おほそら (副) たほざり。よのつね。おほそう。宇津保(藤原)「身なみたいてい。おほぞう。宇津保(藤原)「身はかくおほぞらなる所の、心を心にまかせ給はぬなれば」同(蜻蛉)「いかでか、さおほぞらには思ひて、ここにありやとて」

おほそり 大反 (名) 刀のそりの甚しきこと。又、其の物。百合若大臣野守鏡「木瓜鍔の太刀作り、九州樣の大そり」

おほそりさげ 大剃下 (名) 甚しく剃り下げたるやつこあたまなるべし。元和九年五月十五日御法度條條「一、大なでつけ・大そりさげの事」

おほそれ 大外 (名) 甚しき放蕩者。

おほだい 大臺 (名) 遊里の詞。江戸時代、金一分に價する酒肴の臺の物。

おほたい (形口語) おもたし(重)の口語、おもたいの訛り。

おほたいくわん 大代官 (名) 武家時代の職名。郡代・郡奉行の類にて、國内の事務を大小となく沙汰するもの。もと貢・收納・公事をも兼ね掌る。

おほたいこ 大太鼓 (名) 一だいこ(大太鼓)に同じ。吉野都女楢(神樂堂)の大太鼓、亂調に打ち立て給はば」二洋樂の太鼓の一。三芝居などにて、囃方に用ふる太鼓の一。

おほたいこんさう (名)【植】薯蕷科、水楊梅(ヤマノイモ)屬の多年生草本。莖の高さ三乃至五尺。根葉は羽狀複葉にて、各小葉は楔形、葉も亦楔形にして狹し。花は圓錐花序に排列し、夏日開き、黃金色にて五瓣なり。我が國、各地の原野濕地に自生す。

おほたいづ 大道具 (名) 一劇場の舞臺の飾附けに用ふる道具。(小道具の對)二次條の略。

おほたいづぐ 大道具方 (名) 劇場の大道具の飾つけなどをなすもの。おほだうぐ。

おほたか 大高 (名) 一こしだか(腰高)に同じ。菓子を盛る器。丹波與作(歌舞伎)「大高に、お菓子さまざま、ぶんかうに盛り入れ」二おほたかだん(大高檀紙)の略。枹狩劍本地「大高の結び文」

おほたか 大鷹 (名)【動】一鷹大なる鷹の稱。勢語「昔、仁和の帝(光孝)おほたかの鷹かひにてさぶらはせ給ひける」若鷹。二鷹の雌。體大なり。鷹狩に用ひて、鶴・雁・鴨・鴛・雉・兎等を捕らへしむ。之を大鷹狩といふ。だいたか。和名抄「鷹(中略)三歲名乙之青鷹白鷹」(運歩色葉集)「大鷹、若後太加乃見鷹」

おほたかがり 大鷹狩 (名) おほたかだん(大高檀紙)に同じ。

おほたかがみ 大高紙 (名) おほたか(大鷹)を見よ。貫之集「大鷹狩。霜がれの草葉ををしと思へばや、冬野の田をば人のかるらん」

おほたかぐさ (名)【植】からもりさうの異名。

おほたかだん 大高檀紙 (名) 檀紙の一種。竪尺七寸餘、横は二尺二寸餘。中形を中高、小形を小高といふ。おほたか。大高紙。檀紙。

おほたき 御火焚 (名) 神社にて、年年十一月中、日を卜して、庭火を焚く儀式。藁村句「御ほたきや霜美しき京の町」

おほたくみ 大匠 (名) 大工の長。おほぼたくみ。記(下)「意富多久美(おほたくみ)をぢなみこそ、すみかたぶけれ」

おほたけ 大嶽 (名) 大山。たいがく(大嶽)。永久百首「比叡の山そのおほたけはかくれねど、なほ水のみは流れてぞふる」

おほだけ (名)【植】はちく(淡竹)の異名。和名抄「篠竹。唐韻云、篠(渠鳥切)竹名。俗(保)太介竹名也」

おほたたがみ 大疊紙 (名) 厚き檀紙に箔など散らしたる紙。鼻紙また詠草などの料とす。(秋草)

おほたち 大太刀 (名) 一大きなる刀。武烈紀「飫甕陀換(おほたち)を誰れはきたちて拔かずとも、末はたしても逃はむとぞ思ふ」二近古、長さ六七尺許りの太刀の稱。背に負ひ、又は肩に擔げて軍陣に携ふ。又、伊勢貞丈は近古の長太刀に同じと。嘉吉物語「安積殿いざや組まんとて、六尺餘りの大だちをまつかうにさしかざし」

おほたちつかひ 大太刀使 (名) 太刀を、巧みに使用する人。謠(烏帽子折)「熊坂も大太刀使の曲者なれば」

おほたちばほり 大立廻 (名) 殊に劇しきたちまはり。

おほたつ 大立 (名) 和船の名所。蘆にある門。たつき(立木)」を見よ。

おほたて (名)【植】夏(ヒ)科、蓼屬の一年生草本。かはたてに似て、莖・葉共に綠色なり。初夏、花を開く。我が國、各地に栽培せられ、刺身のつま又はたであへとして最も賞用せらる。宇鏡集「茱(オホ)」

おほたて 大立舉 (名) 鎧(ヨロヒ)の腿當の一種。總體鐵にて作り、立擧の特に高く大なるもの。大將又は勇士の著用。太平記(八、四月三)「長七尺許りなる男の中略大立舉の腿當に、膝鎧懸けて」

(げあてたたあ)

おほたてもの 大立物 (名) 兜の前だてもの、殊に大きなるもの。

おほたてもの 大立者 (名) 一當時の俳優中、技倆などが最も勝れたるもの。二その社會にて、最も尊重せらるる人。

おほたに 大谷 (名) 杉原紙(スギハラガミ)の一種。(雜)

おほたにわたり (名)【植】水龍骨科、貫衆(ヤブソテツ)屬の多年生草本。地下莖を有し、之より葉を叢生す。葉は殆ど無柄、全長三尺餘、莫先・葉脚共にやや尖り、全緣又は波狀、中には缺刻を有するものありて、中肋の左右に側脈平行に出で、稍ばせうの葉に似、披針形にて常綠なり。我が國、暖地の險地に自生す。たにわたし。

おほたば (名、副) 一東(タバ)の大なるもの。小たばの對。二おほげさ。おほぎやう。おほざっぱ。おほまか。

おほたば にでる おほげさに爲し始む。傾城色三味線「頭から大たばに出て、當流の手を盡くしたる料理」

おほたばけ 大阿呆 (名) 大ばか。人を罵る語。天網島「おほたばけめ、それを誰れが吟味する」

おほたぶさ 大髻 (名) 男の髮の髻

を、大きく結びたること。又、そのもの。國姓爺に若衆てたちに應をかへ、撫でつけ髪の大たぶさ」

おほたぶみ　大田文（名）日本全國の田文。即ち、國中の田文を集めて一帳簿とせるもの。東鑑十七、建仁元年「明春駿河・武藏・越後等國國、可二作整大田文之由、被仰行光・清定」

おほたまがやつり（名）【植】莽草（シキミ）科。淫羊藿（ヒツジグサ）屬の一）年生草本。莖の高さ一二尺、細長なる葉を有す。夏日、花莖上に小球狀の穗數箇を生じて、綠褐色の花を開く。我が國、各地水濕の地に自生す。

おほたまじゃり　大玉砂利（名）直徑五寸ばかりの砂利の稱。

おほたやき　太田燒（名）まくずやき（卷葛燒）に同じ。

おほだやき　網田燒（名）磁器の一。肥後國宇土郡網田村より製出するもの。有田燒に似たり。

おほたら（名）【植】からすざんせう（食茱萸）の異名。和名抄、食茱萸、大良良

おほだんな　大旦那　大檀那（名）一布施物などを多く喜捨する檀越。賀古教信七墓廻「念佛の大檀那となすべし」二おやだんな（親旦那）に同じ。（若旦那などの對）

おほぢ　大路（名）幅廣き通路。おほみち。大道（こうぢの對）神武紀「虜兵滿路（チマタ）、難以往還」萬五「青によし奈良の於保知（オホヂ）は行きよけど、この山道は行きあしかりけり」名義抄「大路オホヂ」

おほぢ（名）一ちぢ（祖父）に同じ。祖父。和名、「祖父、爾雅云、父之考、毛詩云、王父、孔穎云、王父、祖父之父也

おほ-づもり 大積 (名) おほよその見つもり。甲陽軍鑑「小國なれば大積りにも、きうきう二萬四千の人數なるを」

おほつ-ゑ 大津繪 (名) 一粗く走りがきしたる戲畫。近江國大津より賣り出だす。始めは佛畫多かりしといふ。又、大津の住人浮世・又平など、かき始めたりともいふ。道分繪。芭蕉句「大津繪の筆のはじめは何佛」傾城返魂香「似合うたやうに、大津繪かいてをれ」二清元また長唄に合はせて演ずる踊の一種。三次條の略。

おほつゑ-ぶし 大津繪節 (名) 俗謠の節の名。大津繪の戲畫を詠み列べて節付けしたるよりいふ。おほつゑ。

おほ-て 大手 (名) 一軍陣の語。敵の前面を進擊する陰。おふて。(からめての對)「盛衰記」「源氏の大手は、昌陽野に陣を取りて遠火を燒く」二城郭の前面の稱。(からめての對)おふて。「東鑑」「四年八月一日「引籠り當所衣笠城、各張陣、東木戸口大手」」三取引所の語。多額の賣買。「大手の解谷ひ」四おほてすぢ(大手筋)の略。「大手は見送り」

おほ-で 大手 (名) 手を振りて勢ひを示し、又兩手を廣ぐる狀にいふ語。「大手をふってあるく」保元「攻篠原」「大手を廣げて、どこまでもどこまでもと追はれけるが」

おほ-でいり 大出入 (名) おほいなる論爭。大訴訟。昔昔物語「この事に付、ややもすれば大出入出て來」中興「大喧嘩數度あり」

おほて-すぢ 大手筋 (名) 取引所の語。「大手筋は手控へ」

おほ-でっぽう 大鐵砲 (名) おほづつ。いしびや。大砲。

おほ-てて 大父 (名) おほぢ。ぢぢ。細父。榮華「おほててがおはしたりけるを知らで」

おほ-てまり (名) 【植】忍冬科、葉蓮(ハガヒ)屬の落葉灌木。幹の高さ數尺。葉は對生、やや心臟形、鋸齒を有し、少しく皺紋あり。裏面葉脈上に殊に著るしき毛茸を有す。初夏、白色の花を開き、密集せるやや球形の聚繖花序に排列し、白色の大なる假花と、小なる兩性花とより成る。我が國・各地の庭園に栽培し觀賞せらる。てまりばな。てまりくわ。

おほて-もん 大手門 (名) 大手の門。おほて(大手)ぐちを見よ。平家女護島「六波羅の大手門」

おほ-でり 大照 (名) てりつゞきたるひでり。おほひでり。大旱。

おほ-てんじん 大天神 (名) 能樂の面の一。藍染川等に用ふるもの。

(んじんてはお)

おほ-てんつき (名) 【植】茜草科、飄拂草(ヘクソカヅラ)屬の草本。莖の高さ二尺、叢生す。葉は細小なり。花は長楕圓形の小穗狀に排列して、數箇莖頂に生じ、夏秋の際、茶褐色を呈す。我が國、各地の原野に自生す。

おほ-と (名) 古語。貴人のおそば。御座所。おもと。景行紀「歌」其二女」而納幕下(オホトノ)」御紀 舒明 臥内紀

おほ-と 大戸 (名) 表口などにある、大なる戸。博多小女郎波枕「暖簾はづし、おほとをしめて、墨ぐろに貸屋札」

おほ-ど 大門 (名) 古語。大なる海峽。萬「ともしびの明石大門(オホト)の詞に入らむ日や、漕ぎわかれなむ家のあたり見ず」

おほ-どう 大胴 (名) おほつづみ(大鼓)の異名。

おほどう-さき 大胴先 (名) 鎧の名所。めてのくさずり(馬手草摺)に同じ。

おほ-どか (副) 大やう。大らか。おほのか。おほまか。のどやか。宇津保「上「しづかに、ちごの御ありさまともなく、おほどかなり」枕「君見知らずがほにて、おほどかにてゐ給へり」

おほ-どきん 大兜巾 (名) 能樂に用ふる兜巾の一。天狗の頭に戴くもの。

おほ-どく (自動四) 大やうにてあり。のどやかにてあり。取締りなくあり。打ちとけてあり。おどく。源若紫「かたちをかしく、打ちおほどき、若やかにて、まぎるる事なきほど」同夕顏「人のけはひいとあさましくやはらかにおほどきて、物深く重き方はおくれて」

おほ-どく (自動下二) 前條に同じ。源若紫「いとわかやかに、おほどけたる心ちす」同若菜下「扇をとられてからきめを見ると、うちおほどけたる樣にいひなして」

おほ-どこ 大床 (名) 石にて構へ、棺を據ふもの。和名「都波良倍」「棺著也」

おほ-どこ 大所 (名) 大なる榜へのお家。大家。「狗になるともおほどこの狗になれ」

(諺)大所の犬となるとも小家の犬となるな 犬になるとも大所の犬になれに同じ。いぬ(犬)の條を見よ。

おほ-どころ 大所 (名) おほどこ(大所)に同じ。

おほ-どころ (名) 【植】おにどころ(山蕗)の異名。

おほ-とし 大歳 (名) おほつごもり(大晦)に同じ。(小歳(コトシ)の對)夫木「三島野に神のみたかを引きすゑて、狩らぬ日もなし、おほとしのに〈」

おほ-としこし 大年越 (名) としこし(年越)に同じ。

おほ-どしより 大年寄 (名) たいらう(大老)に同じ。

おほ-どた (名) 取引所の語。どたを見よ。

おほどち (名) 【植】をとこへし(男郎花)の異名。宇鏡「茶(ヒ)」

おほどちな (名) 【植】前條に同じ。

おほどちやうつなぎ (名) 【植】木本科、どちやうつなぎ屬の一年生草本。莖の高さ二三尺。葉は細長なり。花は小穗をなし、小穗は長さ六七寸の組なる圓錐花序に排列し、六七月頃開く。我が國、北部の原野・畦畔に自生す。

おほとなぶら 大殿油 (名) おほとのあぶらの約。枕「おほとなぶら近くまゐりて、夜ふくるまでなんよませ給ひける」源末摘花「風吹き荒れて、おほとなぶら消えにけるを、ともしつくる人もなし」御殿油。

おほ-とねり 大舍人 (名) 古へ中務省に屬せる官。禁中に宿直して、雜事に使はれ、行幸の時には供奉をつとむ。總數八百人、左右に分かれしが、大同三年合して一となれり。孝德紀「命」帳内(オホトネリ)皆令」解刀」和名「大舍人寮」保元「白河殿」「大舍人寮の長官。

おほとねり-の-かみ 大舍人頭 (名)

おほとねり-の-さくわん 大舍人屬 (名) 大舍人寮の主典。

おほとねり-の-じょう 大舍人允 (名) 大舍人寮の判官。

おほとねり-の-すけ 大舍人助 (名) 大舍人寮の次官。

おほとねり-の-つかさ 大舍人寮 (名) 次條に同じ。和名「大舍人寮」延喜式「左右兵衛府」「大舍人寮乃豆加佐」

おほとねり-れう 大舍人寮 (名) 古へ官署の名。中務省の被管。大舍人の名帳を記し、分番・宿直などを下知することを掌る。頭・助・允・屬の職員を置く。

おほ-とぬ 大殿 (名) 一宮殿の尊稱。おほとど。神代紀「殿(オホトノ)寒」景行紀「納御帳於(オホトノ)之中」萬「大宮はここと聞けども、大殿(オホトノ)はここと云へども」殿屋・宮室 正義紀 二内裏 音同 正義紀 三大臣の尊稱。おとど。源若紫「おほとのの御心いとほしければ、まかで給へり」平治「源義朝「大殿(オホトノ)」大殿腸白・太政大臣宗輔」四貢人の當主の父の尊稱。保元「義朝始め平第頭殿の御承りにて、昨日の曉斬られさせ給ひ候ひき」源狂言「私は大殿樣より召し仕はれたる者でござるが」五貢人の世子に對して、當主を呼ぶ尊稱。丹波與作「ま一度、大殿樣・御袋樣と御盃」

おほとの-あぶら 大殿油 (名) 大殿にともす油火の燈。おほとなぶら。おとのあぶら。枕「高つきにまゐりたるおほとのあぶらなれば」

おほとの-ごもり 大殿隱 (名) おほとのごもること。落窪「なぞのおほとのごもりぞ、物いひ知らずなありそ」

おほとの-ごもる 大殿隱 (自動四) いぬ(寢)の敬語。御寢なる。勢語「みこおほとのごもらで、あかし給ひてけり」宇津保菊宴「よるはやがて、こなたにおほとのごもれば」枕「上のおまへの、挂によりかかりて少しねぶらせ給へるを、彼れ見奉り給へ、今は明けぬるに、かくおほとのごもるべき事かはと申させ給ふ」

おほとの-がひ 大殿祭 (名) 神今食・新嘗祭・大嘗祭の前後、又は皇居の遷移、齋宮・齋院卜定の後等に、屋船久久遲(ウウヂ)命・屋船豐宇氣姬命を祭りて、宮殿の災異なきやう祈り鎭むる儀。宮內省式「大殿祭」延喜式「宮內省」

おほ-とのゐ 大宿直 (名) 次條の略。伊勢大輔集「院の白川殿におはしますころ、右大殿もおほすことあるなるに、おほとのゐに候ひ給ふつとめて」

おほとのゐ-どころ 大宿直所 (名) 大內裏を守護する者の詰め所。主殿寮・梨本曹司との間にあり。おほとのゐ。

おほ-とびで 大飛出 (名) 能樂の面の一。龍山・江島等に用ふ。

おほ-とびと 侍從 (名) じじゆう(侍從)に同じ。おもとびと。官位令「侍從(オホトビト)」

おほ-とびしがら (名) 【植】木本科、牛毛草(ウシケグサ)屬の多年生草本。莖の高さ三尺餘。葉は長大にして五六尺に達す。花は小穗をなし、小穗は疎なる圓錐花序に排列し、夏日、淡綠色を呈す。我が國・中部以北の高山に自生す。

おほ-どほり 大通 (名) 市中の廣き路。おほぢ。大道。

おほ-ども 大供 (名) 年壯にして、なほ小供心あるもの。又、おとな(大人)を嘲りていふ語。(小供の對)

おほ-どもの 大伴之 (枕) みつ及びたかしにかけていふ。みつは昔の攝津國に屬せし地名、高師は昔河內國に屬せし地名。攝・河の二國、もと大伴氏の領なりしよりいふなるべし。萬「いざ子どもはやもやまとへ、大伴乃(オホトモ)みつの濱松待ち戀ひぬらむ」同旦「大伴乃(オホトモ)たかしの濱の松が根をまきてしぬれど、家ししぬばゆ」

おほとも-ひ 辨 (名) べんくわん(辨官)に同じ。和名「大辨」延喜伊勢「齋宮乃官」同「中辨」保元「正官」

おほとも-ひ-の-つかさ 辨官 (名) 前條に同じ。天武紀「法官校定、卑」送大辨官(オホトモヒノツカサ)」

おほ-とり 大鳥 (名) 一鶴・鳳凰・鶴(ツル)等形大なる鳥の稱。天武紀「數百鶴(オホトリ)當大宮」以高翔」和名「鶴」水鳥、似鶴而黑」樹者也」二ほくてう(鵠)の異名。(諺)天鳥の尾より小鳥の頭 雞口となるも牛後となる勿れに同じ。けいこう(雞口)の條を見よ。

おほ-どり 大取 (名) 多くとること。澤山とること。「大どりせうより小どりしろ」

おほ-どり-あゆみ 大鳥歩 (名) 大足にあるくこと。諺「鳥(子)は五尺三寸の大太刀をするりと拔いて打ちかたげ、大鳥歩みに、ゆらりゆらりと歩み出でたる有樣は」

おほ-とりうち 大鳥打 (名) 弓の名所。とりうち(鳥打)を見よ。

おほ-とりけ 大鳥毛 (名) 鷹の羽を、栗のいがの如き狀に大きく作りて、馬印又は槍の鞘にしたるもの。堀河波枕「豪笠・立て傘・馬印、これぞ名にし大鳥毛」

おほ-とりとまらず (名) 【植】へびのぼらずの異名。

おほ-とり-の 大鳥之 (枕) 大鳥の羽にかけていふ。一說、大鳥は鷲にて、矢に矧ぐには、羽をかふるを待ちて用ふる故に、羽易へにかけていふ。萬「大鳥(オホトリ)けがへの山に、わが戀ふる妹はいますと」

おほ-とりもち (名) 【植】やまぐるまの異名。

おほ-どる (自動四) 亂れひろがる。萬「花にはひ於保登禮(オホトレ)るくそかづら、謎ゆることなく宮仕へせむ」

おほ-どる (自動四) 一前條に同じ。枕「すすき中略冬の末まで、かしらいとしどけなくおほどれたるも知らで」源手習「髮のすそのへ、俄かにおほどれたるやうに、しどけなくさへそがれたるを」二おほどく。源若紫「大路近き處に、おほどれたる聲して、いかにとか聞きも知らぬ名のりをして」

おほ-どろどろ (名) 芝居にて、幽靈の出づる時などに、卿しくどろどろと太鼓を打ちならすこと。

おほ-とん (名) おほびけ(大引)に同じ。

おほ-な 大名 (名) ひろきとなへ。(小名の對)

おほ-なか 大中 (名) 杉原紙の一種。縱は二尺八分、横は一尺五寸のもの。(名義抄 紙類)

おほ-なかぐろ 大中黑 (名) 一切生(ウリ)の一種。上下白くて、中に黑き斑あるもの。保元「白河殿」「二十四差したる大中黑の矢、頭高に負ひなし」二紋所の名。ひとつひきりやう(一引兩)に同じ。太平記「大中黑と二つ引兩と、二つの旗を入れかへ入れかへ」

おほ-なかじろ 大中白 (名) 切生(ウリ)の一種。上下に黑き斑ありて、中の白きもの。

おほ-ながれ 大流 （名） 貴人、酒を飲み殘して銚子の中へ入れ、これを臣下などにつぎて賜ふこと。諸禮雜記「大流れの事。大流れといふは、貴人酒を飲みして銚子の中へ打ち入れ給ふを云ふ。土器を手にすゑて來る也。土器をいただくべからず。酒をうけて、酒をいただき飲みて、土器を持もて立つべし」

おほ-なげだし 大投出 （名） 縫針の一種。最もふとく長きもの。雜巾針。

おほ-なし （名） 筒袖の類なるべし。世間手代氣質「紺のおほなしに、紺の股引」

おほ-なだい 大名題 （名） 一芝居の狂言全體にわたる標題。（小名題の對）二大名題を示したる看板の稱。名題看板。戲場新話「大阪の芝居、今二のかはり狂言のおほなだい、いつにても、傾城と字を名題の上に置くこと」

おほ-なづな （名） 【植】でんばいなづな（馮藍菜）の異名。

おほ-なでつけ 大撫附 （名） 總髮をなでつけて後ざまに垂れたるものなるべし。（繁昌記）元和九年五月十五日御法度條條「一、大なでつけ・大そりさげの事」

おほ-なほし 大直 （名） 一天濃紙の大形のもの。（雜記）二土藏の壁の上塗に、砂漆喰を塗ること。

おほ-なほび 大直日 （名） 〔直日は撓み慣みたるを常の如く直す義なりと〕（萬葉）神事など竟りて、宮中にて宴を賜はること。なほらひ。おほなほみ。古今（大歌所）「おほなほびのうた。あたらしき年の始めにかくしこそ、千年をかねてたのしきをへめ」

おほ-なほみ 大直日 （名） 前條に同じ。神樂「みや人のしでは榮ゆるおほなほみ、いざわがともに神さかもどれ」

おほ-なみ 大波 （名） 大なる波。荒き波。神代紀「迅風洪濤（オホナミ）」

おほ-なめ 大滑 （名） 馬具の名。下鞍の下に敷くもの。飾馬（カザマ）に用ふ。飾抄「御方違行幸中（嘉慶）淺黃手綱、無文革大滑等」

（めなほお）

おほ-なめ 大嘗 （名） 次條の略。諸（嘉）又年のはの大嘗に、したがふ小忌の人たちも」

おほなめまつり 大嘗祭 （名） だいじやうさい（大嘗祭）に同じ。

おほ-なら （名） 【植】殼斗科、櫪（カシ）屬の落葉喬木。幹の高さ數丈。葉は大にして倒卵形、粗鋸齒を有し、鋸齒の先端は尖らず、裏面に毛茸なく、葉柄あり。春季、單性、雌雄同株の花を開く。果實は堅果にして、淺き椀狀の總苞、即ち殼斗を具ふ。我が國、各地の山地に自生す。のいしなら。まなら。みづなら。

おほ-なり 大成 （名） 實（ミ）多くなること。實（ミ）多く熟すること。（大鏡）狂言（柿山伏）「當年は、柿が大なり致いてござる」

おほ-なるこゆり （名） 【植】百合科、黃精（オウセイ）屬の多年生草本。黃精の變種にて、花の大形なるもの。おほばわうせい。ちくえふのなるこゆり。

おほ-なんど 大納戸 （名） 納戸役の一。（小納戸の對）最明寺殿百人上臈（御鏡）「大納戸・小納戸・進物所・御膳番」

おほ-にし 大西 （名） 陰曆、十一月・十二月の風。畿内・中國の船人の詞。（物類呼稱）

おほ-には 大庭 （名） 家の前の廣き庭。（多く禁中にいふ）推古紀「大唐之國信物、置於庭中（オホニハ）」平治（合戰）「大庭には、馬ども多く引き立てたり」中庭・庭内（孝德紀）

おほ-にへ 大嘗 （名） （にへは贄の義）一欠條に同じ。おほなめ。天武紀「爲新嘗（オホニヘ）卜國郡也」名義抄「大嘗（オホニヘ）」二あらまき。つと。和名「苞苴（オホニヘ）」「苞苴（オホニヘ）、俗裹魚肉也」

おほにへ-まつり 大嘗祭 （名） だいじやうさい（大嘗祭）に同じ。おほなめまつり。

おほ-にれ （名） 【植】はるにれ（楡）の異名。

おほ-にんにく （名） 【植】にんにく（胡）の異名。

おほ-ぬ 大野 （名） 古語。おほの（大野）に同じ。萬「たまきはるうちの大野（オホ）に馬なめて、朝踏ますらむ其の草ふけぬ」

おほ-ぬき 大貫 （名） 【建築】貫（ヌキ）の大なるもの。杉材にして、長さ二間、幅四寸、厚さ一寸あり。

おほ-ぬきで 大拔手 （名） 水泳術の一法。水を蹴つつ、手にて水を切りて前進するもの。

おほ-ぬけ 大拔 （名） 昔の芝居茶屋の隱語。錢六十四文の稱。（小ぬけの對）（親睦新語）

おほ-ぬさ 大幣 （名） 祓（ハラヘ）の時用ふる大串につけたる幣帛（ヌサ）。祓へ畢へば、諸人之を引きよせて撫づるものなりと。（倭明）古今（戀四）「大ぬさの引く手あまたになりぬれば、思へどえこそ頼まざりけれ」能宣集「みそぎする川の瀾ごとに引く網を、大ぬさなりと人や見るらん」

おほ-ぬさ （副） 大やう。おほまか。寔（ホト）にしづか。古今（仮名序）「われをのみ思ふといはばあるべきを、いでや心は大ぬさにして」六帖「みな月のなごしの山のよぶこどり、大ぬさにのみ聲のきこゆる」

おほ-ぬすびと 大盜人 （名） 大仕掛の盜賊。又、人を罵る語。竹取「かぐや姫てふ、おほぬす人のやつが」

おほ-ぬ-ろ 大野 （名） 古語。おほの（大野）に同じ。おほぬ。萬「面かたの忘れむしだは、於抱野呂（オホヌロ）にたなびく雲を見つつ忍ばむ」

おほ-ね 大根 （名） 一【植】だいこん（蘿蔔）の古名。記「やましろめの、こ鍬もち打ちし淤富泥（オホネ）」和名「蘿蔔（大根）、一字、根正白而可食之。彙名苑云、蘿蔔。本草云、蘆菔。孟詵食經云、蘿蔔今呼菜菔爲蘆菔也。若並蘆菔物語「大根の雁股、口よりくわっと噴き掛くる」二太き矢の根。大磯虎稚物語「大根の雁股、口よりくわっと噴き掛くる」

おほ-ねばりたで （名） 【植】蓼（タデ）科、蓼屬の一年生草本。ねばりたでに似て大なり。高さ二乃至四尺。葉は披針形。其の他はねばりたでに同じ。我が國、各地に產す。

おほ-ねむし 蝗 （名） 【動】いなむし（稻蝗）の異名。和名「蝗（久佐波美）」

おほ-ねら （名） 大きなる鼠。おねら。風俗文選「鼠賦」「大ねら・小ねら、はた廿日鼠と名のり」

おほの 大野 （名） 廣大なる野。おほぬ。欽明紀「鉅野（オホノ）塡塵、平原瀰遍、人跡罕見」源氏物語「女郎花咲ける大野をふせぎつつ、心せばくやしめを結ふらん」

お-ほの （名） 古語。おもの（御物）に同じ。召し上がりもの。持統紀「御（オホ）膳飯

（オホ）」

おほ-のあざみ （名） 【植】菊科、薊（アザミ）屬の多年生草本。のあざみの變種。莖の高さ數尺に達し、長楕圓形、羽狀に深裂せる葉を有し、葉緣に刺多し。花は淡紫色にて大なる頭狀花序に排列し、夏日開く。我が國、各地の山野に自生す。

おほ-のか （副） 一大きやか。おほどか。おほらか。枕「車のうちかへされたるも、さるおほのかなる物は、所せく、久しくなどやあらんとこそ思ひしか」二おほまか。おほげさ。宇治拾遺「あさましうおほのかにもいふものかなと聞きて、ねいりぬ」

おほ-の-がひ 大野貝 （名） 【動】軟體動物、蝸螺類の一種。おほのがひ科に屬す。殼は楕圓形をなし、長さ二三寸、表面は暗灰色にして內面は白く、後端は前端よりも狹く、常に口を開き、呼吸管は互ひに結合して一本となり、伸長せる際は殼長の四倍に達し、收縮するも全部を殼內に收め難し。我が國、各地の沿海淡水の流入する河口に產す。

おほ-のきしのぶ （名） 【植】ほていしだの異名。

おほ-のさ （副） おほぬさに同じ。教訓抄「新樂は、おほのさにゆるゆると桴（ヒ）をあつ」

おほ-のみ 大飲 （名） 酒を多量に飲むこと。又、其の人。おほざけのみ。大酒家。

おほ-のみこみ 大呑込 （名） 十分に會得すること。すっかりのみこみをること。

おほ-ば 祖母 （名） ばば（祖母）に同じ。そぼ。

おほば 大庭 （名） おほには（大庭）に同じ。天武紀「盟于庭（オホバ）」

おほ-ば 大場 （名） 大きなる場所。おほばしよ。狂言（盲目）「ただ一人の下知によって、さばかりの大場なれども、一騎も殘らずたてかけたてかけ」

おほ-ば （名） 【植】ふき（蕗）の異名。本草和名「欵冬（ふき）、一名、蓋」

おほば-あさがら （名） 【植】薺墩果科、あさがら屬の落葉喬木。幹の高さ三四丈。葉は大なる楕圓形鋭頭にて、微鋸齒を有す。春季、白色の小花を開き、圓錐花序に排列す。果實は茶褐色の毛を有す。我が國、各地の山地に自生す。けあさがら。

おほば-いほたのき （名） 【植】木犀科、水蠟樹（イボタ）屬の落葉灌木。幹の高さ丈餘。葉は廣卵形鋭尖頭、全緣なり。五六月の頃、白色の小花を開き、總狀花序に排列す。我が國、各地の林野に自生す。おほいぼたのき。おほばのいぼた。

おほ-ばうし （名） 【植】次條の略。

おほばうし-ばな （名） 【植】鴨跖草（ボウセ）科、鴨跖草屬の一年生草本。鴨跖草の變種。大形にして、葉の長さ一寸五分乃至五寸、巾七分乃至一寸餘あり。夏秋の際、青紫色の美花を開く。我が國、各地に栽培せらる。おほばうし。

おほば-うまのすずくさ （名） 【植】馬兜鈴（ウマノスズクサ）科、馬兜鈴屬の多年生草本。蔓莖を有し他物に纏繞す。下部の葉は細長、葉脚擴がりて耳形を爲し、上部の葉は心臟形にして裏面に毛茸密生す。夏秋の候、黃色にて不整なる喇叭狀の花を葉腋に開く。我が國、各地の山地に自生す。

おほば-か 大馬鹿 （名） 甚しきばか。おほたはけ。又、人を罵る語。

おほば-がし （名） 【植】あかがし（血橿）の異名。

おほば-がらし （名） 【植】おほがらし（大芥）の異名。

おほば-さすみれ （名） 【植】菫菜科、紫花地丁（ツボスミレ）屬の多年生草本。短大なる地下莖と地上莖とを有す。葉は心臟形鋭頭、鈍鋸齒を有し、下部のには長き、上部のには短き葉柄を具ふ。夏日、黃色大形の花を葉腋に開く。我が國、各地の山地に自生す。

おほば-くさふぢ （名） 【植】豆科、蠶豆（ソラマメ）屬の多年生草本。攀緣莖を有す。葉は羽狀複葉、各小葉は楕圓形全緣なり。葉柄端は化して卷鬚となる。秋季、紫色の花を開き、穗狀花序に排列し、花序は葉腋に生ず。我が國、各地の山野に自生す。

おほば-ぐみ （名） 【植】まるばぐみの異名。

おほば-くり 大獨頭蘭 （名） 【植】春蘭（ランノ）の一種。

おほば-こ 車前 （名） 【植】車前科、車前屬の多年生草本。葉は根生葉にして叢生し、楕圓形又は卵形にして、長き葉柄を有し、葉身は五條の縱走せる著しき葉脈を具ふ。夏日、葉間より數本の花莖を抽出し、圓柱狀の穗狀花序を綴りて密生し、花色は淡紫色なり。我が國、到る處の原野路傍に自生す。葉は食用とすべく、種子は藥用となすべし。おんばこ。かへるば。しかみ。おほばこ。和名「車前子。一名、芣苢（フイ）」蒐字（ソウ）

おほば-こ-くわ 車前科 （名） 【植】顯花植物、雙子葉類の一科。草本なり。葉は根生、有莖種に於いては對生或ひは互生なり。花は完全、雜性又は單性にして、穗狀又は頭狀に排列し、稀には單生するもあり。蕚は四分し、下位にして永存性なり。花冠は合瓣鱗狀又は膜狀にて、緣邊四分す。雄蕊は四乃至二箇、花冠の筒部又は筒口に著生す。葯は丁字樣に著生し、子房は上位、一乃至二室、又は假りに三乃至四室をなす。花柱は絲狀にして單一なり。子房の各室には一乃至數箇の胚珠あり。蕚果又は堅果を結び、種子は肉質の胚乳を有す。本科に屬する植物は殊に溫帶地方に廣く分布し、有用なるもの少なし。しやぜんくわ。

おほば-こ-の-かみ 車前神 （名） 死したる蛙の上に、車前（オホバコ）の葉を置ひ置けば蘇生すといふより、其れを神に見たてていふ。（山陽遺響）蜻蛉日記「おほばこの神の助けやなかりけん、ちきりし事をおもひかへるは」

おほ-はし 大橋 （名） 大きなる橋。（小橋の對）萬「かたしは川のさに塗りの大橋（オホハシ）のへゆ」

おほ-はし-だな 大橋棚 （名） おほせいろうだな（大西樓棚）に同じ。

おほ-ばし-な （名） 【植】次條の略。

おほば-しなのき （名） 【植】田麻科、菩提樹（シナノキ）屬の落葉喬木。葉は斜めなる心臟形又はやや圓形にして、葉脚は斜めなる截形、鋭尖頭、表面は平滑、裏面には白毛密生す。七月頃、花を開き、聚繖花序に排列し、花梗は其の中央まで苞と癒着す。我が國、北海道の山地に自生す。おほばだいじゆ。しな。おほばだいじゆ。

おほば-じゆのひげ （名） 【植】百合科、沿階草（ヒゲ）屬の多年生草本。莖の高さ六七寸乃至一尺。葉は長線形。初夏、葉間より花莖を抽き、上部に總狀花序を綴り、淡

紫色の小花なり。我が國、各地の山野陰地に自生す。

おほ-ばしよ 大場所 (名) 〔廣き場所〕。おほば。〔東京兩國にて興行する、春・夏の大相撲〕。

おほば-しようま (名) 【植】〔水龍骨科、貫衆〕屬の多年生草本。地下に根莖を有し、之より一尺餘の葉を出だし、葉柄には茶褐色の鱗片を有す。葉身は二回羽狀に深裂し、各小裂片の中肋に沿ひて子嚢群の列を有す。我が國、各地の高山に自生す。〔きけんしようまの異名〕。

おほはし-りう 大橋流 (名) 御家流の書風の一派。江戸の人大橋長左衛門重政より始まる。

おほず-もの 大筥者 (名) 無頼者にて横著なるもの。なげやりもの。傾城色三味線「朝未明に宿をあけて、釜の下の塵も灰もないやうにしまうて立ち退きける。さやうの大筥者とも知らず、眞實と思ひ入り」

おほば-せんきゅう (名) 【植】〔繖形科、鹹草〕屬の草本。莖の高さ二乃至五六尺。葉は二回羽狀複葉、各小葉は卵狀披針形、鋭尖頭、重鋸齒を有す。夏日、白色の小花を開き、複繖花序に排列す。我が國、各地の山中溪澗の邊に自生す。

おほば-たけしまらん (名) 【植】おほばのたけしまらんの異名。

おほば-たちつぼすみれ (名) 【植】菫菜科、紫花地丁〔すみれ〕屬の多年生草本。地上莖を有し、之より尺餘に達することあり。葉は心臟狀圓形、最下葉は鈍頭、他はやや鋭頭、鈍鋸齒を有し、披針形全緣の托葉あり。夏の候、葉腋並びに莖頂より花梗を生じ、紫色の花を開く。我が國、北部の山野に自生す。

おほば-はだぬき 大肌脱 (名) おほはだぬぐこと。おほかたぬぎ。

おほば-はだぬぐ 大肌脱 (句) 著物をぬぎて肩肌をあらはす。吉野都女楠『父太郎大肌ぬぎ、棒ひっさげてつっと出で」

おほば-たねつけはな (名) 【植】十字花科、碎米薺〔ぺんぺんぐさ〕屬の一二年生草本。莖の高さ五六寸、多少横臥する傾きあり。葉は奇數にて羽狀複葉、各小葉は圓形、葉柄端の一小葉は特に大なり。六七月の候、白色の花を開き、總狀花序に排列す。我が國、各地山地の水邊に自生す。やまたねつけばな。

おほ-ばち 大蜂 (名) 〔蜂〕すずめばち〔雀蜂〕の異名。

おほば-ちどめぐさ (名) 【植】繖形科、石胡荽〔ぜにごけ〕屬の多年生草本。莖は匍匐し、處處より根を下ろす。葉は圓形、葉脚は心臟形、五乃至七淺裂し、鈍鋸齒を有し、長き葉柄を具ふ。花莖は一尺に達することあり、頂端に短き繖形花序を綴り、春夏の際、白色の細小花を開く。我が國、各地の山地に自生す。

おほば-ちどり (名) 【植】いたこかへでの異名。

おほば-つめくさ (名) 【植】いはつめくさの異名。

おほば-とねりこ (名) 【植】やちだものの異名。

おほ-はな (名) 【植】おにもみぢの異名。

おほばな-の-くさぼたん (名) 【植】毛茛科〔鐵線蓮〕屬の多年生草本。くさぼたんの縁種。花の大形なるもの。

おほ-はなれ 大放 (名) 取引所の語。今までの直段より、遙かに暴騰又は暴落あること。

おほ-はなわらび (名) 【植】瓶蕨小草科、陰地蕨〔ぢのみち〕屬の多年生草本。葉は一二三回羽狀に深裂又は全裂し、各小裂片は鋸齒を有す。莖は葉柄に抱かれて出で、其の上端分岐して、粟粒狀の子嚢を群生す。我が國、各地の山林に自生す。おほばはなわらび。

おほば-ぬすびとはぎ (名) 【植】豆科、山莖豆〔ぢまめ〕屬の多年生草本。山莖豆に似て、葉は莖の上部に於いて輪生するもの。我が國、各地の山野に自生す。

おほば-の-あまくさした (名) 【植】水龍骨科、蕨〔わらび〕屬の多年生草本。根莖を有し、之より葉を叢生す。葉は長大、數尺に達し、平滑長楕圓形、羽狀に全裂し、各裂片また羽狀に深裂す。實葉は小裂片の葉緣に沿ひて線形をなし、子嚢を著生す。我が國、暖地の山地に自生す。

おほば-の-いほた (名) 【植】おほばいぼたのきの異名。

おほば-の-くさぎけもも (名) 【植】うらしまつつじの異名。

おほば-の-しらかんば (名) 【植】樺木〔かば〕科、樺木屬の落葉喬木。樺木の變種。葉著しく大に、且つ葉緣の鋸齒粗にして、やや重鋸齒なるもの。我が國、各地の山地に自生す。

おほば-の-たけしまらん (名) 【植】百合科、たけしまらん屬の多年生草本。短き根莖を有す。地上莖は高さ一乃至三尺にして分岐す。葉は長楕圓狀披針形、鋭頭全緣、葉脚心臟形をなし、莖を抱き、平滑にして、裏面は稍白色なり。花は細き花梗上に著生し、夏日開き、帶黃白色なり。我が國、各所の山地に自生す。おほばたけしまらん。

おほば-の-ふりひぼし (名) 【植】ありどほし〔虎刺〕の異名。

おほば-の-やへむぐら (名) 【植】茜草科、猪殃殃〔やへむぐら〕屬の多年生草本。莖は長さ二乃至六尺、よく分枝し、他物に攀緣す。葉は輪生、各節五乃至六葉、稀に四葉を輪生し、各葉は狹卵形又は橢圓狀披針形、鋭頭葉脚に向かひて狹少となり、葉緣・中肋共に粗糙なり。夏季、白色の小花を開き、漿繖花序に排列す。我が國、各地の山野に自生す。

おほば-の-よつばむぐら (名) 【植】茜草科、猪殃殃〔やへむぐら〕屬の多年生草本。よつばむぐらに似て、葉は圓形かつ大なり。

おほば-の-ゐのもとぐら (名) 【植】水龍骨科、蕨〔わらび〕屬の多年生草本。莖は地中に存し、之より葉を生ず。葉は大形の羽狀複葉、各小葉は細長にして尖り、長さ四五寸に達す。子嚢群は小葉の裏面葉緣に沿ひて著生し、葉緣の反捲せるものに被はる。我が國、各地の山野に自生す。

おほ-はば 大幅 (名) 布帛の幅の大なるもの。普通木綿幅の二倍の幅。(中幅・小幅の對)一代女「帶は唐織のおほはば、緋ぢりめんの二のもの」井筒業平河内通「大幅繻子の後帶」

おほば-はなせきしやう (名) 【植】いはしやうぶの異名。

おほば-はなわらび (名) 【植】おほばはなわらびの異名。

おほ-はぶり 大祝 (名) 神職の名。信濃國諏訪神社などにあり。

おほば-ほたいじゅ (名) 【植】おほばしなのきの異名。

おほば-みねばり (名) 【植】樺木〔かば〕科、樺木屬の落葉喬木。幹の高さ三丈に達す。樹皮は灰色にして黑色の斑點ありて、一種の臭氣を有す。葉は廣卵形鋭頭、葉脚はやや心臟形、不整の鋸齒を有し、裏面の葉脈上に毛茸を有す。花は絲褐色にて單性、雌雄同株、芽翼花序に排列し、春季開く。我が國、各地の山地に自生す。よくそみねばり。〔やしやぶしの異名〕。

おほば-みみなぐさ (名) 【植】石竹科、卷耳〔みみなぐさ〕屬の多年生草本。莖の高さ四五寸乃至一尺。葉は卵狀披針形、莖・葉共に微毛あり。花は白色の小花にて、聚繖花序に排列し、夏日開く。我が國、北部の高山に自生す。たがそでさう。

おほば-みやますみれ (名) 【植】おほばやますみれの異名。

おほば-めぎ (名) 【植】小蘗〔めぎ〕科、小蘗屬の落葉灌木。幹の高さ四五尺。葉は節に叢生し、倒卵形なり。刺は分岐せず。花は黃色にて總狀花序に排列し、四五月頃開く。我が國、各地の山地に自生す。みやまへびのぼらず。

おほば-やく (名) 【植】褐色藻類、馬尾藻〔ふさもも〕屬の海藻。全體黃褐色、大形の藻類なり。極めて長き分岐せる莖部を有し、葉は大形披針形にして、長さ三四寸以上、幅五六分以上に達す。全緣鈍頭、多肉。下部のものは中肋明かなり。氣囊は球形なり。我が國、暖地の淺海に自生す。

おほば-やしやぶし (名) 【植】みやまはんのきの異名。

おほば-やどりぎ (名) 【植】槲寄生科、つぐみ屬の常綠灌木。他の種樹なる樹木、殊にしろだも・朴樹〔ほほがしは〕等に纏綿し、處處より吸根を出だして養分を奪ふ。葉は闊狀橢圓形、全緣多肉、葉の裏面及び幼枝に褐色の毛茸密生す。我が國、暖地に多し。

おほば-やなぎ (名) 【植】楊柳科、柳屬の落葉喬木。葉は長楕圓形にして銀齒あり、葉柄を有し、又托葉を具し、葉裏に毛茸を有す。花は單性、雌雄異株、五月頃、黃綠色の葇荑花序をなす。我が國、北海道其の他北部地方の河畔に自生す。おほしだれ。

おほ-はやり 大流行 (名) 甚だ流行すること。だいりうかう。

おほはら-ずみ 大原炭 (名) 山城國愛宕郡小原より出だす炭。小大君集「大原や炭のかしらのなはゆるせ、このめに涙、うかぶといふなり」

おほ-はらひ 大祓 (名) 次條に同じ。

おほ-はらへ 大祓 (名) 臣民一同罪穢を祓ふ神事。恒例と臨時との二あり。恒例のは毎年六月・十二月の晦日に行ふもの。現今にても、宮中を始め各神社にて之を行ふ。臨時のは大嘗祭・大神宮奉幣・齋王卜定其の他、事ある時に行ふ。おほはらひ。天武紀「四方爲大解除」祝詞式「今年六月晦之大祓」延喜式「祓給ひ清給事」神祇令「凡六月十二月晦日大祓」義解「謂廣者、東西文部上祓詞、訖、百官男女齋集祓所、中臣宣祓詞、卜部爲解除」

おほ-はらまき 大腹卷 (名) 普通のものより大きなる腹卷。長門平家八島「本「はらまきに左右の小手さいて」

おほはら-みこ 大原神子 (名) あづさみこ〔梓巫〕に同じ。下文を見よ。人倫訓蒙圖彙「今の大原みことといふは、京のかたほとりに住みて、人の忘れ時分にはありくなり。女は鈴を振れば、一荷のかますをかたげたる男、鈴を合はする太鼓の調子そなはって、一風あるなり」

おほはらめ 大原女 (名) 山城國愛宕郡大原村などより出づる婦女。薪などを頭上に乘せて市中を賣りあるく。おはらめ。

おほ-ばらん (名) 【植】ばらんの異名。

おほ-はるしやぎく (名) 【植】菊科、おほはるしやぎく屬の一年生草本。莖の高さ七八尺。葉は對生、線狀に細く深裂せり。秋の末、白・紅・紫等の、大形にして美麗なる花を數多莖頂に開く。近年舶載の觀賞用植物なり。こすもす。

おほば-わらせい (名) 【植】おほなるこゆりの異名。

おほば-をみなへし (名) 【植】まるばきんれいくわの異名。

おほ-はん 大判 大板 (名) 〔天正の頃より江戸幕府の末まで發行せられし楕圓板狀の大なる金銀貨。即ち、慶長大判金・元祿大判金・享保大判金・天保大判金・南鐐大判・桐大判銀・橘蕨大判銀の類。一枚を以て小判金十枚に當てたり。(小判の對)〔おほばんきん(大判金)の略。享保集成絲綸錄「大判の事は、元祿年中改められ候所も、慶長の大判に引きくらべ候に、其の品大きに下だり候にもあらず」〕紙の、通常のより寸法の大なるものの稱。

おほ-ばん 大番 (名) 〔殿上人の、殿上に當直すること。(小番の對)樋口祕記「殿上は昼雲寄のつめ所也。是れを大番といひ、豪盤所へつむるを小番と云ふ。今の外樣のつめ所小番乎」〕交替して宮城を護衛する役。王朝の頃よりあり。もと三年なりしが、源頼朝の時、六箇月となり、後また三箇月となれり。おほばんやく。著聞「そのころ東國の武士、大番にて京のぼりすとて」同「大番を承るほどの者にて、いかでかは我が氏をば存ぜざりける」明月記「天福元年十月三日」御法事夜、僧房之童、如二女姿一昇二堂上一、大番武士摺」〕おほばんぐみ(大番組)の略。

おほ-ばん 大鵜 (名) 〔動〕涉禽類に屬する鳥。形大きく、體色黑し。頭の毛は白くして短く、脚・趾共に青黑色なり。よく水邊に遊びて魚介を食ふ。骨頂。

おほばん-がしら 大番頭 (名) 〔鎌倉幕府の職名。大番〔〕の長。〕江戸幕府の制。大番組一隊の長。

おほばん-きん 大判金 大板金 (名) 大判の金貨。即ち、慶長大判金・元祿大判金・享保大判金・天保大判金・安政大判金の類。天保集成絲綸錄「近來、大判金、相場格別高直に相成り、如何之事に候」

おほばん-ぎん 大判銀 (名) 大判の銀貨。即ち、南鐐大判銀・桐大判銀・橘蕨大判銀等の類。

おほばん-ぐみ 大番組 (名) 江戸幕府の制。交替にて江戸城及び京の二條城、大阪城の警衛に任じ、又江戸府内を巡警する役。十二組に分かる。

おほばん-ぐみがしら 大番組頭 (名) 江戸幕府の職名。大番頭を佐けて、其の組の大番衆の布告・通達などを掌る。

おほ-はんけ (名) 【植】〔天南星科、半夏〕の多年生草本。地下に塊莖を有し、之より葉を叢生す。葉は大形にて全

く三つに裂けたり。初夏、白色にて、單性雌雄同株の花を開き、肉穗花序に排列し、雌花は下部に、雄花は上部に叢生す。花序は大形褐色の苞により包擁せられ、花軸の先端は延長して苞外に突出す。我が國、各地畦圃の間に自生す。有毒植物なり。

おほ-ばんし　大半紙（名）大判の半紙。主として土佐國より産す。

おほばん-しゅう　大番衆（名）大番をなす人人。砂石集「五條の橋に、大番衆とおぼしき武士、勢勢として行きあひぬ」

おほばん-せき　大番席（名）江戸幕府の制。旗本の格式の一。高二千石未満、廩米二百俵までのものの稱。

おほばん-やく　大番役（名）おほばん（大番）に同じ。著聞「ひちの撿按豐平とはこれがことなり。大番役にのぼりける時の事なり」

おほ-ひ　被（名）【植】うまごやし（苜蓿）の異名。和名抄「苜蓿。蘇敬曰、苜蓿是菜・薬根、並寒者也」

おほひ　被覆（名）おほふこと。物をおほふに用ふるもの。和名抄「稽（久毎波比）宇鎧「鞍甲（久良波比）」宇津保「蘭（みぞかけ）におほひして、御ふすまなど懸けたり」

おほひ-あみ　被網（名）水底に投下し魚類を被ひて捕る網。投網を主とす。

おほひ-がさ　覆笠（名）かぶりがさ（被笠）なるべし。夫木「世を捨てぬ人のさまかはおほひ笠、かけぬばかりはかどとなれども」

おほひ-がひ　覆貝（名）貝おほひに用ふる貝。隆平集「綱女に、おほひがひ乞はんと思ふに」

おほひ-がみ　覆髮（名）馬の額髮。風呂記「神馬にしてをつくる事。おほひがみ、又しみのかみ、又尾のあまおほひ、以上三所也」

おほ-ひき　大引（名）引合せ紙の大なるもの。

おほ-びき　大引（名）家の床下に渡して、床板を支ふる横木。をびき（尾引）。

おほ-ひきめ　大蓑目（名）蓑目（ミノメ）の箭の大なるもの。著聞「水に溺れて浮き上がりけるを、大ひきめにて射させられけり」

おほ-ひきりゃう　大引兩（名）ひきりやう（引兩）を見よ。

おほ-ひきわたし　大引渡（名）膳部の引渡しの略儀なるもの。國姓爺後日合戰「式三獻の本式の中略大引渡しに略しては、昆布・搗栗・熨斗」

おほ-ひけ　大髭（名）長く多き髭。宇治拾遺「大ひげをささげて、のけざまにふして倒れたり」

おほ-びけ　大引（名）一東京遊廓の語。午前二時の稱。中びけなどの對。二取引所の語。立會の終り。おほとん。三大條の略。

おほ-びけ-さうば　大引相場（名）次條に同じ。

おほ-びけ-ねだん　大引直段（名）取引所の語。立會中の最終の直段。大引。

おほ-びきし　大庇（名）ひろびさし（廣廂）に同じ。東鑑「四十八、正嘉三、兩國司被〻新大庇、其外著座于庭上東西」

おほ-ひざまづき　大跪（名）小膝をつくに對して、正しく跪くこと。盛衰記「觀音堂、陵王の祕曲を舞ひ盡くす。大ひざまづき・小膝突、入日を返す合掌の手」

おほ-びし　大菱（名）刀の柄の卷きやう。かたひねり（片捻）を見よ。

おほ-ひじり　大聖（名）德行、特にすぐれたる高僧。五代帝王物語「出家して、横河に閉ぢ籠もりて行ひしほどに、ゆゆしき大ひじりになりて」

おほ-びたひ　大額（名）昔、男子の鬢を小さく取りて額を廣く作ること。元和九年五月十五日御法度條條「一、大びたひの事」色道大鑑「額は大びたひに、百會の穴まで取りあげ、角を錐先の如く尖らせて拔き上ぐること」

おほ-ひちりさ　大筆簗（名）筆簗の大なるもの。宇津保「櫃「中納言横笛」櫃中納言大ひちりきと合はせて遊ばす」

おほ-ひづかき　大炊寮（名）おほひづかさ（大炊寮）に同じ。竹取「おほひづかきの飯かしぐ屋の棟の」

おほ-ひどの　大炊殿（名）食物を調理する所。源明「うしろのかたなる、大炊殿と覺しきやにうつし寒りて」

おほ-ひねり　大捻（名）菓子の、大きくひねりたるものをいふべし。

おほ-ひのかみ　大炊頭（名）大炊寮の長官。

おほ-ひのさくわん　大炊屬（名）大炊寮の主典。

おほ-ひのじょう　大炊允（名）大炊寮の判官。

おほ-ひのすけ　大炊助（名）大炊寮の次官。

おほ-ひのつかさ　大炊寮（名）おほひづかさ（大炊寮）に同じ。天智紀「大炊省（オホカサ）」

おほ-ひの-み（名）【植】うまごやし（苜蓿）の異名。本草和名「苜蓿和名宇萬古夜美」

おほ-ひば　覆羽（名）あまたの雁などの、翅を廣げて覆ふこと。萬「あま飛ぶやかりのつばさの覆羽（オホヒバ）の、いづこ洩りてか霜のふりけむ」

おほ-ひばり　大雲雀（名）【動】鳥類中、燕雀類の一種。形狀・羽色共に雲雀（ヒバリ）に少しも異なることなく、唯體の一層大なるのみなり。北海道以北に見る。

おほ-ひ-べ　大炊部（名）大炊寮の下官。

おほ-ひほ　大紐（名）ふとき紐。丹波興作「覆ひかけたる挾箱、濃い紅の大ひほを高高と結びしは」

おほ-ひみす　覆簾（名）格子の外に懸くる簾なりと。禁祕抄「二間、格子也。南間常不上、有覆簾（巻し）之」雅亮裝束抄「おほひみすといふは、柱のうへに、ひとへりをひきちがへて寸法をとるなり」

おほ-ひめぎみ　大姫君（名）貴人の長女の尊稱（おとひめぎみの對）大鏡「おほひめぎみは、今の中宮の權大夫殿の北方」

おほ-ひめごぜん　大姫御前（名）前條に同じ。宇治拾遺「大ひめごぜんの紅は奉りたると語りければ」

おほ-ひゃうし　大拍子（名）演劇にて、神樂堂などの所に用ふる囃子。鳴物には大太鼓を用ふ。劇場新話「大拍子。大太鼓・大拍子、神樂堂などにあり、三味線入りもあり」

おほ-ひやき　大樋燒（名）加賀國金澤より産する陶器。赤黄色の釉藥を用ひれう（大炊寮に同じ。天智紀「大炊省（オホカサ）」

おほ-ひ-べ　大炊部（名）大炊寮の下官。

ふ。天和中京都の人長左衛門、加賀國金澤大樋町に窯（ヨウ）を開きしに始まる。

おほ-びゃくえ　大白衣（名）袴をも著けず、唯白衣のみ身に著たること。平治「鎧「大白衣にて、這ふ這ふ仁和寺へ參り」

おほ-びゃくしゃう　大百姓（名）廣く田畑などを所有する百姓。豪農。冥途飛脚「大和新口村勝木孫右衛門といふ大百姓の一人子」

おほ-びゃくにち　大百日（名）芝居に用ふるかづらの一種。百日鬘の、殊に髮長くて大なるもの。

おほ-びら　大平（名）おほひらわん（大平椀）の略。

おほ-びら（副）むきだしにて物に頓著せざるさまにいふ語。

おほ-ひらた　大平田（名）ひらたぶね（平田船）を見よ。

おほひら-わん　大平椀（名）大きくひらたき椀。おほひら。

おほ-びる　大蒜（名）【植】にんにく（葫）の異名。和名抄「大蒜。本草云、葫（久保比）味辛温、除〻風者也」

おほ-ひるぎ　大蒜（名）【植】りうきうかうがいの異名。

おほ-ひれあざみ（名）【植】菊科、おほひれあざみ屬の二年生草本。莖の高さ三尺乃至一丈、多く分枝し、白毛にて被はる。葉は橢圓形鋭頭、缺刻及び齒牙を有し、刺多し。花は淡紫色にて、枝の頂端に頭狀花序に排列し、徑一二寸、總苞も亦小刺を具へ、夏季開く。歐洲の原産なり。

おほ-ひれう　大炊寮（名）古へ宮内省の被管の寮。諸國より運び來る春米・雜穀を收納し、之を諸司に分かち充つることを掌る。おほひのつかさ。おほひづかさ。

おほ-ひろ　大廣（名）一秦書紙の一種。縱一尺四寸餘、横一尺九寸餘のもの。三束を以て一行李とす。二杉原紙の一種。縱一尺一寸、横一尺五寸にて、一束五百枚なるもの。御上杉原。

おほ-ひろま　大廣間（名）一廣間の、最も大にして、造作の備はりたるもの。衆人會合の爲めに設く。播州佐川軍記「宇喜多は搦手より城へ入りて、頓て城中の人人同道にて中略大廣間へ出でられければ」二江戸時代、江戸城内にて、國主・外樣大名の列席せし所。

おほ-ひんがし　大東（名）まひがし。正栗。宇治拾遺「江冠者が家のおほひんがしにある、いもじが妻を」

おほ-ふ（名）おほふう（大風）に同じ。狂言「蓋」日本一の大ふのふばくちうちが來て、我が物と申すを」

おほ-ふ　覆被（他動四）一上に掛けふさぐ。遮り隱す。萬「あめのしたすでに於保比（オホヒ）てふる雪の、光を見ればたふとくもあるか」宇鏡「嵯峨「鳳雲日覆」二かうむらす。かぶす。きす。萬「玉くしげあれど我が名し惜しも」宇治拾遺「山くづれなば、うちおほはれて死にもぞする」三遍くつつむ。「德四海をおほふ」四かばふ。庇護す。「罪人をおほひかくす」五包み隱す。隱蔽す。

おほ-ふう　大風（名）驕り高ぶる風。尊大。おほふ。おほへい。

おほ-ふえ　大笛（名）笛の大なるもの。東鑑「建久三年「右近將監多好節、調進蓬和琴・太笛等」

おほ-ぶか　大深（名）きんどがき（三度笠）に同じ。

おほ-ふかし　大蒸（名）江戸時代、ふかしたる薩摩芋。ふかしいも。寛天見聞記「又、昔は燒芋と云ふ物無し。寛政のころより、おほふかしとして、さつまいもを蒸して賣りしを始めとす」

おほ-ふく　大服（名）次條の略。蔵口旬「大服や圓燈裏に席を作りつつ」

おほ-ぶく-ちゃ　大服茶（名）正月元日、茶の湯に梅干・山椒を入れて飲むもの。大晦の義に取りて、歳首の佳例とす。

おほ-ぶくろ　大袋（名）引負ひ。遣込み。監記「東寺文書抄「淸九郎依〻致〻大袋〻被〻行〻罪科〻之刻」

おほ-ぶさ　大總（名）一大きなるふさ。曾我「五人兄弟「大總の挾箱」二あつぶさ（厚總）に同じ。

おほ-ぶだ　大札（名）一大なる札。古事談「補「家主大札を先に持之將出けり」二芝居など、終日見物し得べき入場券。又は、大人の入場券。（小札の對）三芝居にて、營業・會計、一切の事をつかさどる人の稱。

おほ-ふで　大筆（名）大字を書くに用ふる大きなる筆。（小筆の對）

おほ-ぶと　大太（名）をぶと（緒太）の訛り。狂言「私の居ましたあたりには、大ぶとの金剛がござった」

おほ-ぶね　大船（名）大なる船。たいせん。もとぶね。大艦。巨艦。大船（こぶねの對）萬「於保夫禰（オホフネ）にまかぢしじぬき、海原を漕ぎでて渡る月ひとをとこ」名義抄「船（オホフネ）」

おほ-ぶねの　大船之（枕）大船は頼みに思はるれば、たのみにかけ、また船の綱にて、津・わたりにかけ、ゆらゆらと動くより、たゆたふ・ゆたふ・ゆくらゆくらにかけ、かぢとりといふ意にて、かとりにもかけていふ。萬「「大船之（オホフネノ）思ひたのみて」同「「大船之（オホフネノ）つもりがうらにのらむとは、まさしに知りて我が二人寢し」同「「大舟之（オホフネノ）わたりの山のもみぢ葉の」同「「大船（オホフネ）」たゆたふ見れば、なぐさもる心もあらず」同「「うなばらのみちにのれれや、わが慰ひをりて、大舟之（オホフネノ）ゆたにあるらむ人の子ゆゑに」同「「於保夫禰能（オホフネノ）ゆくらゆくらに、おもかげにもとな見えつつ」同「「大船（オホフネ）かとりの海に碇おろし、いかなる人か物思はざらむ」

おほ-ふばこ　大文箱（名）名筆の文などを入れて、墨棚に飾る箱。

おほ-ぶり　大降（名）雨などの、甚しくふること。（小降（コサメ）の對）心中刃氷剃「日「大降りがするならば、おつまがかたびら濡らさうより、八分ぐらゐで駕籠をかれ」

おほ-ぶり　大風（名）おほがた（大形）に同じ。（小風（コカゼ）の對）

おほ-ぶりそで　大振袖（名）振袖の大きなるもの。若風俗「おほふりそでの女に思ひ掛けられ」御所櫻堀川夜討「「大振袖の伊達模樣」

おほ-ぶるまひ　大振舞（名）盛大な

（跡）**大船に乗ったやう**　親船に乗ったやうに同じ。おやふね（親船）の條を見よ。

鞏山比翼塚「出尻が來たからは、こはいことはない。大船に乗ったやうに思はんせ」

おほ-ぶる-ぶし　大振節（名）振袖の大きなるもの。若風俗「おほふりそでの女に思ひ掛けられ」御所櫻堀川夜討「「大振袖の伊達模樣」

る宴會。大酒盛。大饗應。淀鯉出世瀧德 上「今宵曲輪の名殘りぢやと、井筒屋で大振舞」

おほぶろしき 大風呂敷 (名) ㈠大なる風呂敷。㈡身分不相應の大言をはなつこと。又、仕事を擴張して括りのつかぬ響へにいふ。「おほぶろしきをひろげる」

おほべ 大嘗 (名) だいじやうゑ(大嘗會)に同じ。

おほへい 大柄 (名) 傲慢。おほふう。わうへい(横柄)。甲陽軍鑑 西「十人の内九人は、おごりおほへいになり」

おほべし 大壓 (名) ㈠次條の略。㈡大べしみをつけたる能役者の、舞臺に現はるる時の囃子。

おほべしみ 大壓面 (名) 猿樂能の面の一。鞍馬天狗・善界などに用ふ。おほべし。

(おほべしみ)

おほべったう 大別當 (名) ㈠院の廳の長官。王朝時代の末に、院の別當を分かちて執事・執權とせしが、後に又大別當をおく。㈡社僧の役名。新編鎌倉志「等覺院の後に大なる谷あり。八正寺とて、昔八幡の大別當僧正の舊跡なり」

おほへびいちご (名) 【植】薔薇科、きじむしろ屬の多年生草本。莖の高さ二三尺。葉は五箇以上の小葉より成る複葉にて、各小葉は長楔狀、粗鋸齒を有す。花は黄色にて、聚繖花序に排列し、春開く。庭園に栽培せらる。

おほべや 大部屋 (名) ㈠大きなる部屋。ひろま。㈡劇場の樂屋の三階にある廣き部屋。演劇の稽古をなし、又、下等の俳優の雜居する處。又、其の俳優の稱。

おほほ (感) 女子などの、口をすぼめて笑ふ時の聲。ほほ。

おぼほ 鬱 (副) 古語。おぼほしきさまにいふ語。名義抄「鬱 オホホナリ」

おほぼうしよ 大奉書 (名) 大判の奉書紙。縱は一尺三寸、横は一尺八寸。四束また五束を以て一行李とす。

おほぼし 大星 (名) 鹿(カ)の皮の夏毛の星の、鮮かに大なるもの。おほまだら。庭訓往來 七月「大星(オホボシ)行縢」

おぼほし (形二) おぼおぼしに同じ。萬 五「國遠きみちのながてを、意保保斯久(オボホシク)戀ふや過ぎなむ、こととひもなく」 同 十七「あま少女いさりたく火の於煩保之久(オボホシク)、つぬの松原おもほゆるかも」

おほぼしさう (名) 【植】うりかはの異名。

おぼほす 溺 (他動四) 古語。おぼほるやうにす。溺れしむ。おぼらす。神武紀「何爲起波瀾以灌溺(オボホス)乎」

おぼほす 思 (他動四) おぼす(思)、又おぼしめす(思召)に同じ。源 桐壺「いよいよあかずあはれなるものにおぼほして」

おほほそみ (名) 【植】うらしまさう(虎掌)の異名。和名 廿「虎掌。陶隱居曰、虎掌(於保保曾美)四畔有二圓牙一、如レ看二虎掌一、故以名レ之」

おほぼっかい (副) 大まかに、ばっと心得たるさまにいふ語。俚言集覽

おほぼとけ 大佛 (名) 大なる佛像。だいぶつ。拾玉 七「是體如は東大寺なる盧遮那佛、げにあかがねの大佛かな」

おほぼねをる 大骨折 (句) 大きなる骨をりをなす。大なる努力をなす。狂言「某が内にあらうずる奴めが、姊糊・ただ糊のわけ齊別も知りをらず、大ぼねをらせ、大汗を流させる」

おほぼやし (名) 大きなるものの稱。傾城無間鐘「馬といふ大ぼやしは、背中に物を置くより外、一藝もござらぬゆゑ」

おぼほゆ 思 (他動下二) おもほゆ。おぼゆ。風雅 戀四「そこととなき恨みぞ常におぼほゆる、いかにぞ人のあらずなるころ」

おほほる 蒙 (他動四) 古語。覆ふ。かぶす。名義抄「蒙 オホホル。オホフ」

おぼほる 溺 (自動下二) ㈠おぼる(溺)に同じ。神代紀 下「兄自沒溺(オボホル)」 古今 長歌「難波の浦に立つ波の、波のしわにやおぼほれん」 後撰 離別「さらばよと別かれし時にいはませば、我れも涙におぼほれなまし」 漂溺 神代紀下 ㈡現心(ウツゴコロ)なくなる。本心を失ふ。おぼおぼしき狀なり。ぼける。源 帚木「むげに世を思ひ知らぬやうにおぼほれ給ふなんいとつらき、と恨みられて」 同 總角「思ひやり多かるみ心ばへを、今は限りに見奉りさしつることと、おぼほれあへり」 ㈢耽ける。はまる。名義抄「耽 オホホル。フケル」

おほほん 大本 (名) 大形の書籍。(小本の對)

おほま 大間 (名) ㈠廣き座敷。又、貴族の邸宅にて、奥向の廣き座敷。鎌倉年中行事 正月朔日「公方樣、大間へ御歸りあって、内之御椀飯始也」 ㈡おほまがき(大間書)の略。㈢きやうま(京間)に同じ。江次第 四、除目「大臣覽二筋、取二大間一」

おほまあらこ 大目麁籠 (名) 古語。目の麁きかご。めかご。神代紀 下「取二其竹一、作二大目麁籠(オホマアラコ)一」

おほまうけ 大儲 (名) 澤山のまうけ。大利得。

おほまうちぎみ 大臣 (名) おほいまうちぎみ(大臣)に同じ。萬 一「ますらをの鞆の音すなり、もののふの大臣(普通本の訓)楯たつらしも」

おほまか (副) おほやう。おほらか。おほのか。

おほまがき 大間書 (名) 除目の時用ふる文書。闕官をば、間をあけて書き置き、任官すれば書き入るるもの。おほま。江次第 四、除目「大間書一卷」

おほまがき 大籬 (名) 江戸遊廓にて、資格最も高き遊女屋。抱への遊女は皆太夫にて、且つ張見世をなさず。總籬。おほみせ。(半籬などの對)

おほまがとき (名) 暮方の薄暗き時の稱。おほまどき。

おほまき 大卷 (名) 海中の、砂の底にある貝を網にてとること。

おほまく 大幕 (名) ㈠幕の大きなるもの。今昔 廿一「布大幕を二重計り引き廻はし」 平家 七、一門都落「八條の燒跡に、大幕ひかせ」 ㈡近世、とまく(外幕)の異名。

おほましどころ 大座所 (名) おはしますところ。おましどころ。宇津保 藤原君「少將み寺に行きて、おほましどころとらす」

おほましいます 大座 (自動四) います・ましますの敬語。おはします。續紀 廿「朕御身都可良之久、於保麻之麻須(オホマシマス)爾依天」

おほまじめ 大眞面目 (名) きはめてまじめなること。きまじめ。

おほます 大枡 (名) 通常の枡より大なるもの。通常の三升入れを一升枡とす。

おほまた 大胯 (名) 兩足を廣く開くこと。おほあし。「大またにあるく」

おほまたぎ 大跨 (名) 大またにまたぐこと。雙生隅田川 四「大八文字の大またぎ」

おほまだら 大斑 (名) おほぼし(大星)に同じ。義經記 一、遮那王殿鞍馬出「吉次いまだ夜ふかきに京を出で中略大まだらのむかばき、鞍のおほひにして」

おほまちぎみ (名) おほまうちぎみ(大臣)の約。神武紀「侍臣(オホマチギミ)」 成務紀「大臣(オホマチギミ)」

おほまつよひぐさ (名) 【植】柳葉菜科、まつよひぐさ屬の多年生草本。莖の高さ四五尺。葉は長楕圓形。初夏、葉腋毎に、黄色四瓣大形の花一箇づつを開く。近年舶載の花卉なり。

おほまつりごとのおほまつぎみ 太政大臣 (名) 次條に同じ。和名 五「太政大臣 於保萬豆利古止乃於保萬豆岐美」

おほまつりごとのおほまへつぎみ 太政大臣 (名) だいじやうだいじん(太政大臣)に同じ。名義抄「大政大臣 オホマツリゴトノオホマヘツギミ」

おほまつりごとびと 參議 (名) さんぎ(參議)に同じ。和名 五「參議 於保萬豆利古止比止」

おほまと 大的 (名) 鎌倉時代以後、徑五尺二寸の的の稱。(小的の對) 戴恩記 上、細川玄旨法印「丸が田邊に逗留の比にも、久しく天下に斷絶せし大的とやらんを御催しありて、面白く見物を致し候ひき」

おほまどき (名) おほまがときに同じ。

おほまはし 大廻 (名) ㈠おほわたしくわん(大渡鐶)に同じ。㈡まへかけなは(前掛繩)に同じ。㈢船にて、遠く荷物を運ぶこと。東海道名所記「あきなひ物の宰領となり、おほまはしの船に乘りて、今度はじめて下だり」

おほまはしなは 大廻繩 (名) おほわたし(大渡)に同じ。

おほまはしやげんぞこのふね 大廻藥研底船 (名) 荷船の一種。

おほまはり 大廻 (名) ㈠道などを、遠くまはりて行くこと。大迂回。㈡能樂又は芝居の語。役者の、舞臺を渦狀に廻はること。又、大なる立まはり。

おほまへ 大前 (名) ㈠神また天皇の前の敬稱。みまへ。記 下「をむろがたけにししふすと、誰れぞ意富麻幣(オホマヘ)に白す」 ㈡射藝の語。的を射る時、最初の射手の稱。その最後の射手を關といひ、大前の次を大後(オホウシロ)、關の直前を關前(セキマヘ)といひ、是れに對して、關をまた關後(セキウシロ)といふ。此の四者を四角(ヨツカド)といひて、射藝の達人の位置とす。

おほまへつぎみ 大臣 (名) だいじん(大臣)に同じ。成務紀「大臣(オホマヘツギミ)」 萬 一「ますらをの鞆の音すなり、もののふの大臣(オホマヘツギミ)楯立つらしも」

おほまめ 大豆 (名) 【植】だいづ(黄大豆)の異名。本草和名「生大豆 於保末女」

おほまゆ 大眉 (名) 高眉を、ふとく大きくつくりしこと。太平記 二「よはひ二八ばかりなる小稚兒の、大眉にかね黑なり」

おほまゐり 大參 (名) 大ぜいのおまゐり。多人數の參詣。狂言 成上り「今日は、清水へ大參りでござる程に」

おほまんぢゅう 大饅頭 (名) 次條の略。

おほまんぢゅうじごろ 大饅頭鉦 (名) 兜のしころの、饅頭形に圓く高く盛りあがりたるもの。(小饅頭鉦の對)

おほまんてま (名) 【植】石竹科、むしとりなでしこ屬の一二年生草本。莖の高さ一二尺にて柔軟、やや横臥する性あり。葉は對生、廣橢圓形、上部に至るに從ひて細小となる。春夏に亘りて、淡紅色の美花を莖頂に開く。近年舶載の觀賞用植物なり。

おほまんどころ 大政所 (名) おほきたのまんどころ(大北政所)の略。康富記 應永八年六月七日「今日祇園祭也。大政所參詣、拜二神輿一」

おほみ 大使主 (名) 古語。使主(オミ)の中の頭だちたるもの。履中紀「圓大使主(オホオミ)」

おほみ 大身 (名) 天皇の御身。おほみみ。玉體。履中紀「天皇玉體(オホミ)不レ急」

おほみ 大忌 (名) をみ(小忌)を見よ。あらいみ。内裏式 中「大齋親王以下避レ座」 江次第 十五、大嘗會「大忌少納言召二公卿一」

おほみ 大御 (接頭) 〔大に御を添ふ〕物事を尊びていふに用ふる語。おほん。おほん。「おほみ代」「おほみ神」「おほみき」 源 常夏「おほみおほつぼとりにも、つかうまつりなん」

おほみあかし 大御燈明 (名) あかし(明)の敬語。孝德紀「燈二千七百餘燈(オホミアカシ)於朝庭内一」 和名 廿「燈明 於保美阿加之」

おほみあしぢ (名) 萬葉集卷十一の、岡のさき多未足道(タミアシチ)を人な通ひそ、ありつつも君が來まさむよぎ道にせむ、の中なる多未足道を、おほみあしぢと訓み誤ひたるもの。たむ(回)の條、たみたるみち(回道)を見よ。光經集「旅人や行きなやむらん、岡崎のおほみあしぢの春雨のころ」

おほみあそび 大御遊 (名) あそび(遊)の敬語。源 松風「月はなやかにさし出づるほどに、おほみあそび始まりて」

おほみあへ 大御饗 (名) ㈠あへ(饗)の敬語。天皇のきこしめす御食物。景行紀「獻二大御食(オホミアヘ)一」 ㈡宮中にて、群臣に賜はる酒饌。

おほみあるじ 大御饗 (名) 大ぶるまひ。大饗宴。宇津保 祭使「紀の守におほみあるじの事どもを、男方・女方、おましどころつらふこととつかうまつる」

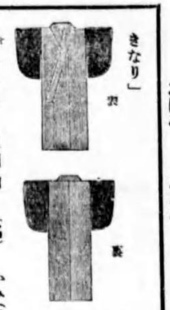
おほみいづ 大御稜威 (名) いづ(稜威)の敬語。

おほみうた 大御歌 (名) ㈠天皇御製の歌。㈡神樂歌・風俗歌を歌ふことなるべし。宇津保 祭使 中「おほみうたつかうまつるべき殿上人の、ただ今の上手どもみな召しつけつ」

おほみおや 大御祖 (名) 天皇の御祖先。皇祖。神功紀「吾被二神祇之教一、頼二皇祖(オホミオヤ)之靈一、浮二渉滄海一、躬欲二西征一」

おほみかど 大御門 (名) ㈠もん(門)の敬稱。萬 一「青かぐ山は日のたての大御門(オホミカド)に、春山としみさびたてり」 枕 八「大みかどはさしつや」 ㈡宮殿。皇居。萬 一「あらたへの藤井が原に、大御門(オホミカド)はじめ給ひて」 ㈢總構への大門。

おほみがはり 大身替 (名) 左右の片身・片袖を別の色にしたる衣服。若き人の著る物。貞丈雜記「又、身と袖とを別色にしたるもの。かたみがはり(片身替)」 貞孝筈書「大身がはりの袷は、晴れの時著まじ



おほみ-かみ 大御神 （名） かみ（神）の尊稱。おほかみ。萬「うしはきいます、もろもろの大御神たち」

おほみ-かむこ 大御巫 （名） 神祇官の八神の祭事を掌る巫女の稱。おほみかむのこ。祝詞式「大御巫」

おほみ-かむのこ 大御巫 （名） 前條に同じ。

おほみき 大御酒 （名） きけ（酒）の敬稱。記「よくすにかみし意富美岐」

おほみくさ （名） 【植】はしりどころ（萆宕）の異名。

おほみ-け 大御食 （名） 古語。け（食）の敬稱。天皇のきこしめすおもの。萬「於保美奈気につかへまつると、をちこちにいさり釣りけり」

おほみ-こころ 大御心 （名） 天皇の御心。叡慮。

おほみ-こと 大御言 （名） 天皇の御せ出ださるる御言。勅旨。神武紀「密旨」「勅旨」 孝德紀「天皇詔旨」 萬「勅旨に戴きもちて、もろこしの遠きさかひにつかはされ」

おほみことあち-の-つかさ 太宰府（名） だざいふ（太宰府）に同じ。皇極紀「筑紫大宰」「宰府」「太宰府」 和名「太宰府」

おほみ-しるし （名） ぎよじ（御璽）に同じ。

おほみせ 大店 （名） 一大なる店。二おほまがき（大籬）に同じ。

おほみそか 大三十日 大晦日 （名） おほつごもり（大晦）に同じ。おほとし。

おほみた 大御田 （名） 神領の田。新古今「おほみ田のうるほふばかりせきかけて、ゐぜきに落とせ河上の神」

おほみたいどころ 大御臺所 （名） 先代の御臺所。武家名目抄「寛永三年九月、江戸に於いて、大御臺所の御方御遊例」

おほみ-たから 大御寶 （名） 〔天皇の御寶として愛護し給ふ義〕國民。みたみ。おほんたから。神代紀「百姓」

おほ-みち 大道 （名） 一幅廣き路。おほぢ。 和名「大路」 二多くの道のり。平假名盛衰記「扨歩いたは、今日は大道。そちも草臥れ、おれや猶の事」

おほみづ 大水 （名） 暴雨などのため、河水など溢れて、陸地を浸すこと。洪水。字鏡「洪」「和泉式部日記」「おほみづの岸つきたるにくらぶれば深き心はなほぞまされる」

（諺）**大水を手で防ぐ** 力及ばざるに譬ふ。世話盡「大水を手で防ぐ」

おほ-みづこし 大水越 （名） 舵の小名。みづこしあな水越穴に同じ。

おほ-みづはこべ （名） 【植】はなみづはこべの異名。

おほみて 大御手 （名） て（手の敬稱。天皇の御手。萬「おほみ身に太刀とりおはし、大御手に弓とりもたし」

おほ-みと 大御床 （名） 古語。とこ（床）の敬稱。天皇の御寢所。綏靖紀「獨臥于大牀」

おほみなと 大湊 （名） 船の出入り多き湊。博多小女郎波枕「下の關とも名に高き、西國一の大湊」

おほみね-いり 大峯入 （名） 修驗者の修行のため、大和國吉野郡の大峯に分け入ること。熊野より入るを順といひ、吉野より入るを逆といふ。陰暦四月に入るを例とす。

おほみ-のやり 大身槍 （名） 刃の長大なる素槍。陸奥歌謠「若松の主ぞと誰れ白河の大身の槍」

おほみ-ふね 大御船 （名） ふね（船）の敬稱。天皇また皇后の召させらるる船。仁德紀「なには人鈴船とらせ、腰なづみ其の船とらせ、於朋瀰赴泥とれ」

おほみ-み 大御身 （名） 天皇の御身。おほみ。四時祭式「卜御體」

おほ-みま 大御馬 （名） うま（馬）の敬稱。天皇の召させらるる御馬。萬「大御馬の口おしとどめ」

おほみ-み 大御身 （名） 天皇の御身。おほみ。玉體。萬「大御身に大刀とりおはし、おほみ手に弓とりもたし」

おほ-みみ 大耳 （名） 一大なる耳。名義抄「聳」 二おろそかに聞くこと。寛大にして細事に行き渡らぬこと。「大名は大耳」 岩淵夜話別集「常常口癖のやうに云ふ事なれども、夫れを大耳に聞く心ゆゑ、唯今のやうなるわけもなき返答をする」

おほみ-めぐみ 大御惠 （名） めぐみ（惠）の敬稱。天皇のみめぐみ。續後紀「とがあれどなだめ給ひつ、譬ひなき御惠（みめぐみ）の、けに廣くおほましませば」

おほみ-もの 大御物 （名） しよくもつ（食物）の敬稱。おもの。供御。神代紀「以口女魚所以不進供御者」 續紀「常毛賜酒幣乃物平賜方有以天退退乃天奈御物」

おほ-みや 大宮 （名） 一内裏また神宮の稱。 記「憶富美夜」 萬「みよしぬのこのをとつはたて、隅かたぶけり」 宮室 宮・王居 二太皇太后また皇太后の稱。（中宮を宮といふの對）宇津保「うへも心しづかにも物し給はじ、大宮もいとおほけなくおはすれば」 源少「大宮はあかずあさましきことと、おぼしたるぞ、ことわりにいとほしかりける」 三母宮の稱。（若宮の對）榮華「大宮の御まかなひ」

おほ-みやすどころ 大御息所 （名） 天皇の御息所。皇后・中宮・女御・更衣・女官の稱。「おほみやすん所とていますかりける、いとこなりけり」

おほ-みやづかさ 大宮司 （名） だいぐうじ（大宮司）に同じ。

おほ-みやづかへ 大宮仕 （名） 〔大宮の事に仕ふる義〕大宮を造り奉ること。萬「藤原の大宮都加倍あれつげや、少女がともはしき召さるかも」

おほ-みやづくり 大宮造 （名） 神社・内裏など、大なる宮殿を造ること。辨内侍日記「ももしきの大宮づくり今日より」

おほ-みやどころ 大宮處 （名） 内裏。また内裏のある處。萬「ももしきの大宮處（おほみやどころ）見ればかなしも」 祝詞式「此乃敷坐大宮地」

おほ-みやばしら 大宮柱 （名） みやばしら（宮柱）の敬稱。新後撰「跡たれて神は幾代をまもるらん、おほみやばしら（おほどころ）今も朽ちせず」

おほ-みやびと 大宮人 （名） 禁中に仕ふる人。記「ももしきの淡富美夜比登」「ふせの浦をゆきてし見ては、ももしきの於保美夜比登（おほみやびと）に語りつぎてむ」

おほ-みやすみれ （名） 【植】菫菜科、紫地丁（ふ）屬の多年生草本。あかねすみれの變種。葉大にして毛茸多く、春夏に亘りて、淡紫色又は殆ど白色なる花を開くもの。我が國、各地の山地に自生。

おほみ-やり 大身槍 （名） おほみのやり（大身槍）に同じ。

おほ-みやう 大行 （名） ぎやうかう（行幸）に同じ。崇神紀「幸行之」「宇津保物語「神泉のおほみゆき、院のみかどもおはしまして、御遊びあるべかなるに」

おほ-みよ 大御世 （名） 天皇の御世の尊稱。めでたき御治世。萬「すめろぎの神の大御世に」

おほ-みら 薤 （名） 【植】らっきょう（薤）の古名。和名「薤」

おほ-みる 御見 （他動上） 古語。みる（見）の敬語。みそなはす。景行紀「望」「拜之日」

おほ-みるくさ （名） 【植】はしりどころ（萆宕）の異名。和名「芣蕗子」

おほ-む 臣 （名） 古語。おみ（臣）に同じ。字鏡集「臣」

おほ-む 大御 （接頭） おほみ（大御）の音便。おん。神代紀「不進御者」 仁德紀「神武紀」「元元」 仁德紀「鞋履」

おほ-むかう 大向 （名） 芝居の語。立見をする處。

おほ-むかし 大昔 （名） 昔だ古き昔。太古。上古。なかむかしなどの對）狂言「大むかし・中むかし・當風」というて、三段おじやるが」

おほ-むぎ 大麥 （名） 【植】禾本科、大麥屬の一二年生草本。莖の高さ三四尺、直立す。葉は細長、下部は葉鞘をなす。花は外下方に二筒の細長き穎を有し、花軸の周圍に六縱列に並び、長さ二三寸の穗狀花序に排列し、五月頃開く。殼には長き芒を具ふ。著名の栽培植物なり。種子は食用として缺く可からざるのみならず又麥酒を製す。桿は麥桿細工に用ふ。かちかた。和玉篇「麰」

おほ-むこと 大御言 （名） おほみことと（大御言）に同じ。神武紀「密旨」 皇言 御功 皇言紀 寶命紀

おほ-むこと-のり 大御言宣 （名） 前條に同じ。神功紀「不従皇命」

おほ-むしくひ （名） 【動】くわくこう（郭公）の異名。

おほ-むたから 大御寶 （名） おほみたから（大御寶）の尊稱。神代紀「是以百姓」 繼體紀「天生黎庶」 黎庶 和名「人民」 元元 黎元 億兆 元元蒼生 兆民 良人 黎德

おほ-むながきうけ-の-つむじ 大鞅受旋毛 （名） 馬の旋毛。いんじゅ（印綬）に同じ。

おほ-むね 大棟 （名） 【建築】すみ棟・くだり棟等に對して、水平なる棟の稱。

おほ-むね 大旨 （名、副） 一大體の趣意。たいし（大旨）。推古紀「三寶者中略四生之終歸、萬國之極宗」 二おほよそ。おほぼ。大略。大抵。名義抄「略」

おほ-むべ 大嘗 （名） おほにへ（大嘗）に同じ。おほんべ。仁德紀「鮮魚之菊苴」 神祇令「凡大嘗者、毎世一年、國司行事」 四時祭式「凡踐祚大嘗祭、爲大祀」 代始和抄「大嘗會は一代一度の大神事なり。今書にはおほむべと訓ぜり」

おほ-むべ-の-まつり 大嘗祭 （名） だいじやうさい（大嘗會）に同じ。

おほ-むま 御馬 （名） 古語。しやが（車駕）に同じ。天武紀「車駕」 齊紀上

おほ-むまぞひ 御馬副 （名） ぎよしや（馭者）の敬稱。雄略紀「天皇大怒、拔刀斬御者」 大津馬飼

おほ-むもの 大御物 （名） しよくもつ（食物）の敬稱。天皇の供御。神代紀「不進御者」 仁德紀「温飯」 「羹不酸鹹不易也」

おほ-むら 大村 （名） 戸數の多くある村。たいそん。（こむらの對）

おほ-むらじ 大連 （名） 上代の職名。大臣と並びて、後世の左右大臣の如く、朝政に參與せしもの。多くは、連、及び臣の姓の家より任ぜられたり。雄略紀「以大伴連室屋・物部連目爲大連」

おほ-むろ 大室 （名） 大なる窟。綏靖紀「會有手研耳命於片丘大窟中、獨臥于大牀」

おほ-むろ-や 大室屋 （名） 前條に同じ。記「おさかの意富牟盧夜」 「人さはにき入り居り」

おほ-め 大目 （名） 一大なる目。（ほそ目の對）「大目をむきだして叱る」 二百目を一斤とする稱。十六兩（六十匁）を大一斤とするより起これりといふ。 三寛大にすること。心中刃氷胡日「これほどまで遊らうて申すからは、身抜きのならぬ譯ありと、大目に見て下だされて」 四檢地などをなすに、其の地の景況を熟知して、大略の豫算を立つること。 五秤具。河船の舵の小名。

おほ-めいけつ （名） 【植】樹蒲科、樹槲屬の落葉喬木。葉はやや圓形又は圓狀

卵形、葉脚深狭にして心臓形、葉身は九乃至十一深裂し、各裂片は三角形、漸尖頭鋸齒あり。葉柄は葉身よりも短く、葉裏・葉柄・花梗みな毛茸あり。我が國、各地の山地に自生す。

おほめいけつさう (名) 【植】蓼科、蓼屬の多年生草本。いたどりに似て大なり。高さ六乃至八尺、太さ慳一寸に達するものあり。花は紅色なり。本邦、中部以南に産す。

おほめかし (名) いたくめかすこと。甚しく身の飾りをすること。

おほめかし (形) さだかならず。たしかならず。判然せず。枕「その方おぼめかしからぬ人二三人ばかり召し出でて」源夕顔「かかる御志のおろかならぬを見知れば、おぼめかしながら、頼みをかけきこえたり」同花宴「ただならず程へにけるを、おぼめかしくやとつましけれど」

おほめく (自動四) はきとせず。おぼつかなく思ふ。疑ひ思ふ。分明ならず。宇津保吹上「源氏に琴の御こと賜ひて遊ばす。つつむことなく、おぼめくことなし」源明石「浪のまぎれに、いかなることかあらんとおぼめく」後撰夏「時鳥はつかなる音を聞きそめて、あらぬもそれとおぼめかれつつ」

おほめぐり (名) 大廻。佛家にて、供養の時、大まはりにまはりて行道すること。榮華音樂「こなたかなたの御堂、おほめぐりにてやがてめぐれば」

おほめつけ 大目付 (名) 江戸幕府の職名。幕府の政務を監察し、及び諸大名の糺彈を掌る。おほよこめ。曾我虎磨「紅葉の間には大目付、梶原源太を始め、物頭の歴歴」

おほめのこ 大女子 (名) あねむすめ。雄略紀「以少女爲天皇人、以大女爲己人」

おほも (名) 【植】あまも(大葉藻)の異名。

おほもちあひ 大持合 (名) 相場の變動大ならざるに非ざるも、一高一低して、上放れも下放れもなきこと。

おほもちのき (名) 【植】やまぐるまの異名。

おほもっかう 大叅 (名) 芝居の語。つりあげ(釣上)に同じ。

おほもて (名) 大きにもてること。甚だ優遇さるること。

おほもと 大本 (名) 物事の第一のもと。たいほん。大根本。

おほもと (名) 古語。内裏。皇居。神功紀「皇居(おほもと)」仁德紀「天皇之御所(おほもと)」

おほもとゆひ 大元結 (名) 忌もとゆひ。髻元結に同じ。いれもとゆひ。

おほもの 大物 (名) 一大なるもの。重大なるもの。(小物の對) 二杉原紙の一種。縱一尺一寸、横一尺五寸。文政雜錄

おほものいみ 大物忌 (名) ものいみ(物忌)を見よ。儀式帳「大物忌、無位神主小清女」

おほものぐひ 大物食 (名) 大食すること。又、其の人。

おほものみ 大物見 (名) 軍陣の語。多くの兵を率ゐて斥候に出づること。又、其の人。東遷基業「あれ〳〵出でたる大物見は、定めて城主安房守ならん」

おほものはな (名) 【動】軟體動物、蝦蟇類の一種。さらがひ科に屬す。殼は一方尖りたる扁平卵形をなし、質薄く彫刻は密にして、殆ど平滑、表面・内面共に淡紅色にして、腹緣はやや淡く美なり。

おほもり 大森 (名) 大なる森。深林。爲忠百首「もみぢするこやのおほもり見渡せば、錦に見けるここちこそすれ」

おほもりざいく 大森細工 (名) 武藏國荏原郡大森より産する麥藁細工の稱。

おほもん 大門 (名) 一邸宅また城郭などの、第一の表門。正門。蜷川親元記寛正六年八月廿六日「大門并壁御修理」 二遊廓の入口の門。薗門松「太鼓は打たで大門に轟く馬の高嘶き」

おほもんぐち 大門口 (名) おほもん(大門)に同じ。曾我扇八景「大門口まで百度・ちたび、聲をあげて呼んでも見たく」

おほや 大屋 (名) 一おもや(母屋)。ほんや(本家)。 二店子より家主を稱する語。江戸職人歌合「大屋。六つきりのろぢのかぎさへ忘るまで、からだなかけてすめる月かげ」膝栗毛「大屋へ古借を濟ましたかはり、御關所の手形をうけとる」

おほや 大矢 (名) 矢束の、すぐれて長き箭。保元白河殿「爲朝中略件の大矢を打ち交ひ、只一矢に射落とさんと」平家五「富士川「君は實盛を大箭と思し召されん候にこそ。僻か十三束を之箭と仕り候へ中略大箭と申す條の者の、十五束に劣って引くは不レ候」

おほやう 大樣 (名・副) 一寛大にして、細事に拘はらぬこと。鼻動の落ちつきて、卑しき風なきこと。おほまか。おほどか。おほらか。平家一「清盛「重盛卿はゆゆしう大樣なる者かなとぞ、父の卿も宣ひける」 二ほんやりしたること。氣のきかぬこと。鈍なること。俗用。總領息子は大樣にて、父の前で、懷手物をいふにも返辭せず」 三おほかた。あらまし。大抵。八番抄「中のくぼさは、おほ樣、甲の外のあかにいきあふ程にすべし」徒然草「花の盛かり中略立春より七十五日、おほやうたがはず」

おほやうーけ 大樣氣 (副) おほやうらしさう。平家三「軍兵共をば一人も不レ被レ具、誠に大樣げにておはしたれば」

おほやうーさ 大樣 (名) おほやうなるさま。おほやうなる度合。

おほやうーらか 大樣 (副) おほらか。おほどか。大樣。愚祕抄「歌判詞などは、そと書くことにて中略ただ大やうらかに書きなすべきなり」

おほーやか 大 (副) 大いなるさま、又大やうなる意を表はす語。おほきやか。宇治拾遺「しとぎをせさせて、一折數とらせたれば中略大やかなるを腰についはさみたれば、胸にさしあがり」

おほやかず 大矢數 (名) 通し矢を射るに、前日の暮より始めて翌日の暮まで、一晝夜にて終はること。日中のみ射るを小矢數といふ。

おほやがら 大矢幹 (名) 【植】みくり(鬼三稜)の異名。

おほやげ 公 (名) 一朝廷。政府。官廳。崇神紀「官(おほやけ)無廢事、下無逸民」 二天武紀「收私兵器、悉納於司(おほやけ)」 三語「おほやけの宮仕へしければ、常にはえまうでず」 四大子また皇后を稱へ奉る語。竹取「いみじくしづかに、おほやけに御文奉り給ふ」 勢語「おほやけのみけしき惡しかりけり」榮華月宴「后の宮中略大かたのみ心ざま廣う、まことのおほやけとおはしまし」 同月蓮「品品わき給へるほどなど、げにおほやけとならせ給ひぬるは、こ

となるわざなりけり」 五國家。公共。世間。雄略紀「國家(おほやけ)情深、君臣義切」 天智紀「生則無務於軍國(おほやけ)」 枕「おほやけ・わたくし、おぼつかなからず、聞きよきほどに語りたる」 六表だちてのこと。祕密ならざること。「學說をおほやけにす」 七私有にあらざること。公有。共有。「おほやけのもの」 八私なきこと。偏らざること。公平。平等。「おほやけなる態度」

おほやけなる しうせんげふ 公周旋業 土地・家屋の貸借・賣買、其の他、商行爲にあらざる他人間の取引の媒介・周旋を目的とする營業。營業稅法第一條三公なる周旋業」

おほやけのうしろみ 一攝政。關白。 二朝政を輔佐すること。榮華月宴「皆とれつきつぎ、おほやけの御うしろみつかうまつるべし」

おほやけ-おほやけ-し (形シク) おほやけし(公)の重言。源夕顔「おほやけおほやけしき作法ばかりの事を、けうじ給ひしに」同浮舟「さえなども、おほやけおほやけしき方におくれずぞおはすべき」

おほやけ-がた 公方 (名) おほやごとに關する方。源若菜下「大將はおほやけがたは、やうやうおとなびめれど」

おほやけかた-さま 公方方 (名) おほやけごとのさま。榮華月宴「御法事、すべて司司の人みな居たちて、さるべきおほやけかたざまにしおきてさせ給ふ」

おほやけ-ごころ 公心 (名) 公平なる心。私なき心。おほやけに勤めんとする心。天武紀「公平面(コウヘイノオモテ)皆勤者」

おほやけ-ごと 公事 (名) 一公に仕ふること。政事。公務。更科日記「竹芝の男に生けらん世の限り、武藏の國を預け取らせて、おほやけ事もなさせじ」 二宮廷の儀式・節會等の稱。くじ(公事)。勢語「おほやけごとどもありければ、えさぶらはで」源紅葉「おほやけごと、多く奏し下だす日にて」 三定まりたる一通りの形式。官府むきの一般のしきたり。源帚木「くらづかさ・こくさう院など、おほやけごとにつかうまつれる、おろそかなることもこそと」

おほやけざた 公沙汰 (名) 表立つこと。官府の手を煩はすこと。公事沙汰。

おほやけざま 公方 (名) おほやけがた。一通りのこと。源須磨「限りある女御・みやす所にもおはせず、おほやけざまの宮仕へとおぼしなせり」

おほやけ-し 公 (形シク) おほやけめきたり。おもてだちたり。枕「是れはたおほやけしう、からめいてをかし」滝松「人聞きには中略おほやけしう仰せられて、御心のうちには」

おほやけ-づかひ 公使 (名) 官の使。輔親集「おほやけ使なれば、人人あまたづれて」更科日記「此のみこ、公使を召して」

おほやけ-どころ 公所 (名) 一内裏。官廳。官衙。枕「おほやけどころに入りたちする男、家の子などは、あるが中によからんみこそは、えりて思ひ給はめ」赤染衛門集「おほやけ處に、内にも外にもあまたゐて、物語して」 二宮有の所。源玉鬘「故朱雀院の御領にて、宇治の院といひし所中略おほやけどころなれど、人もなく心やすきをとて、見せにやり給ふ」

おほやけ-のーはぶじん 公法人 (名) 【法】こうはふじん(公法人)に同じ。

おほやけ-はら 公腹 (名) 直接、己れに關せざることなれど、おほやけ心よりの立腹。公憤。枕「らうたげに打ちなきてゐたるを、見捨てていきなどするは、あさましう、おほやけはらだちて、眷屬の心もいとうく見ゆべけれど」

おほやけ-びと 公人 (名) 官仕への人。大官人。官人。竹取「ここらのおほやけ人に見せて、はぢみせん」 枕「おほやけびと・すまし・をさめなどして、たえずいましめにやり」

おほやけ-まつり 公祭 (名) おほやけにて行ふ祭。大鏡「わが御ざうに帝・后宮立ち給ふものならば、おほやけ祭になさんと誓ひ奉りて」

おほやけ-みやづかへ 公宮仕 (名) 禁中の女房に奉仕すること。榮華月宴「先帝の御時に、おほやけ宮仕へに出だし立てたりければ、女なれど、まななどいとよく書きければ」

おほやけ-むき 公向 (名) おもてむき。官邊。

おほやけ-もの 公物 (名) 公有また官有の物。(わたくしもの の對) 應神紀「官船名枯野者中略久爲官用(おほやけのつかひ)功不レ可レ忘」大鏡「今さらに、私のものになり侍らば便なきこと、おほやけものにて候べきなり」

おほやけ-わざ 公業 (名) おほやけにてなすわざ。朝廷より行ふ事。源宿木「藤の花の宴中略おほやけわざにて、ある じの宮のつかうまつり給ふにはあらず」

おほやけ-わたくし 公私 (名) おほやけと、わたくしと。こうし(公私)。枕「ものに、おほやけわたくしおぼつかなからず、聞きよきほどに語りたる」源東屋「おほやけわたくしの人のたたずまひ」

おほやし 大八洲 (名) 次條の略。繪後紀「あまのはしだて蹈み歩み、あもりいましし大八洲(おほやし)あまつ日つぎの」源明石「深き御うつくしみ、おほやしまにあまねく」

おほやしまーぐに 大八洲國 (名) 大日本國の異稱。八は彌にて、多くの島より成りたる國の義なるべし。古事記及び日本紀には、大倭豐秋津洲(本土)・伊豫二名洲(四國)・筑紫九州)及び淡路・壹岐・對馬・隠岐・佐渡の八洲の總稱とせり。おほやしま。神代紀「大八洲國(おほやしまくに)之號」

おほやしろ-づくり 大社造 (名) 神社の建築法の一。出雲の大社に法りたるもの。正面は破風造、出入口・階段ともに、中央になくして側面などに設く。内部は、一間の内に半間仕切あり、其の奥に神體を安置す。神座は階段の方に向かはずして側面に向かふ。

おほやすみどの 大安殿 (名) だいごくでん(大極殿)に同じ。 同 おほあむどの。

おほやっか 大矢束 (名) 矢束の、すぐれて長きもの。北條五代記「昔、鎭西八郎爲朝は大矢束を引く、日本無雙の精兵なり」

おほやね 大屋根 (名) 屋根の大なるもの。二階建にて下屋・庇などの屋根に對して、二階の屋根の稱。(小屋根の對)

おほやはず 大矢筈 (名) 芝居に用ふるかつらの一種。やはずの大なるもの。

(字はヤ程お)

おほやま 大山 (名) 大なる山。又、山の美稱。萬「み雪ふるこしの大山(おほやま)

行きすぎて、いづれの日にか我が里を見む」

おほやかたはみ （名）【植】酸葉草（ウマスイ）科、酸漿草屬の多年生草本。根莖を有し、之より葉を出だす。葉は三小葉より成る掌葉にて、各小葉は倒三角形、上端僅かに缺刻あり、長き葉柄を具ふ。夏日、花梗を抽出して白色の花を著く。花梗は上部に近く、二箇の小苞を有す。果實は蒴なり。我が國、各處の山地に自生す。

おほやまと 大倭　大日本——（名）大日本國の古名。神功紀「向大倭（オホヤマト）啓」

おほやまと-とよあきつしま 大日本豐秋津洲（名）大日本洲島の古稱。神代紀「生大日本豐秋津島洲（オホヤマトトヨアキツシマ）」本朝世紀「日臨國」

おほやまはこべ （名）【植】石竹科、繁縷（ハコベ）屬の草本。莖の高さ二三尺、柔軟なり。葉は對生、披針形鋭矢頭、葉緣波狀に縮縮せることあり。七八月頃、白色の小花を開き、聚繖花序に排列す。我が國、各地の山地に自生す。つるはこべ。

おほやまふすま （名）【植】石竹科、のみのつづり屬の多年生草本。莖の高さ四乃至七八寸、纖弱にして毛茸多し。葉は長楕圓形鈍頭なり。花は白花にて、莖頂及び葉腋より生ずる花梗上に一二輪づつ生じ、春夏の候開く。我が國、各地の山地に自生す。

おほやまもり 大山守（名）山の番人。萬「さざなみの大山守（オホヤマモリ）は、たがためか山にしめ結ふ、君もまさなくに」堀河百首「つげの野の大山守がをさめる氷室ぞ、今もたえせざりける」

おほやまれんげ 天女花（名）【植】木蘭（モクレン）科、木蘭屬の落葉喬木。葉は廣倒卵形、表面は平滑、裏面には白毛密生す。五六月の頃、白色大形の下向せる花を枝頭に開く。我が國、各地の山地に自生す。

おほゆ （自動ヤ）似る。肖（ア）ゆ。宇津保「一院の女御の御髪におぼえ給へり」源「梅枝」「げに御かたち・ありさま、あやしきまでぞおぼえ給へる」

おほゆ 覺（他動ヤ）一心に悟り思ふ。思はる。履中紀「有非當之事」將助、以備兵持之」參語「京の人は、めづらかにやおぼえけん」二心に留む。忘れず。記憶す。枕「これに、ただ今おぼえんふるごと、一つづつ書けと仰せらるるに」酒壺「あこが、うせにしいもうとの顏はおぼゆや」三智ひ知る。教へられて知る。狂言文蛤「弓・鞠・庖丁・碁・雙六、馬の伏せおこし、やっとまねったを覺えました」同心「よう覺えさしめ」

おほゆかか 大床（名）一神社の床（ユカ）。（階段前なる小さき酒床の對）二ひろびさしし廣廂に同じ。武家時代の語。平家「祇園精舎」「聖をば大床に立て、我が身は庭に立つて、なくなく父の首を請け取り給ふぞあはれなる」

おほゆき 大雪（名）いみじく降る雪。萬「わが里に大雪（オホユキ）ふれり、大原のふりにし里にふらまくはのち」

おほゆな 大湯女（名）湯女（ユな）の年長けたる者。百合若大臣野守鏡「大湯女・小湯女多き中に、わけて名高き松が枝とて」

おほゆび 大指（名）手足の指の、最も太きもの。おやゆび。おほよび。本類字鏡「脹（ヒラ）乃大指」續古事談「白蟲を取り出だし、高欄の平げたにあてて、大ゆびして殺しけり」拇指。

おほゆみ 弩（名）〔大弓の義〕弓の甚だ大なるもの。數十人にて發するものといふ。和名抄「弩（ハシラノユミ）」

おほゆみ 大弓（名）だいきゅう（大弓）に同じ。本朝保元「自同月廿日、爲朝、件の大弓に、さき細の矢打ちつがひ」

おほゆみ-の-し 弩師（名）どし（弩師）に同じ。三代實錄十六「自鎮西」「置弩師（オホユミノシ）一員」

おほゆる 大緩（名）相撲の語。人氣、大きにゆるみたること。

おほゆる 大湯坐（名）古語。ゆゑ（湯坐）に同じ。記「取御母定大湯坐（オホユヱ）・若湯坐、宜日足奉」天武紀「大湯人（オホユヱ）迎」

おほよき 大夜著（名）大形の夜著（ヨギ）。文武五人男「あら熱や、面倒やと、大夜著ぐっと脇ぎしが」

おほよとめ 大横目（名）一おほめつけ（大目付）に同じ。國姓爺後日合戰「國廻りの大横目、廣間に伺候し」二おほじやうや（大庄屋）に同じ。

おほよせ 大寄（名）遊廓の語。客の、友達を數多誘引して行き、女郎を大勢よせて、一所に參會すること。（傾城買初會）女殺油地獄「タベタベの大寄せは、豐かなる代のいきをしなり」

おほよそ 大凡（名、副）一大夢。概略。蜻蛉日記「ほにいでていはじや更におほよその、酴くをばなにまかせても見ん」二物事を推し量りて、總べいふ語。おほよそ。大方。大抵。概概。概略。宇治拾遺「凡そけだかくしなしなし、をかしげなること、田舍人の子といふべからず」一通り。萬「凡（オホヨソ）に我れし思はば、したに著てなれにし衣を取りて著めやも」宇津保「一歳は、いたくおほよそにこそ面白し」見え給ひしか。のどかに今見給ふに、かゝる所なし」

おほよそ-の-ひと 大凡人　おほよそびと（大凡人）に同じ。源「御語」「さしもあるまじきおほよその人さへ、その頃は、風の音・蟲の聲につけつつ、涙おとさぬ人はなし」

おほよそ-ごろも （名）宮人の著る衣。おほよすがらを誤り用ひたる語といふ。梨沖一説、大裝ひ衣の義と。麗守古語拾遺「みや人の人の於保與須我良（オホヨスガラ）にいさとほし、ゆきのよろしも於保與須我良（オホヨスガラ）に今昔物語「みやびとの於保與須我良（オホヨスガラ）にしゆきのよろしも於保與須我良（オホヨスガラ）に」「宮人は神のいさむるうれたさに、おほよそごろもぬきぞ亂るる」

おほよそ-びと 大凡人（名）世間一般の人。ゆかりなき人。後撰「君が名のたつにとがなき身なりせば、おほよそ人になして見ましや」源「おほよそ人だに、今日の物見には、大將殿をこそは、あやしき山がつさへ見奉らんとすれば」

おほよつどめ （名）【植】みやまがまずみの異名。

おほよび 大指（名）古語。おほゆび（大指）に同じ。皇極紀「蟲中其大、如一頭指（オホビ）許」

おほよぶすまさう （名）【植】菊科、よぶすまさう屬の多年生草本。よぶすまさうの變種。莖の高さ二三丈に達し、宛然樹木の觀を呈するに至る。我が國、北海道の山地に自生す。

おほよみやく 大算役（名）江戸時代、銀座の役名。鑄造せる銀貨の額を數ふることを掌るもの。金銀御吹替次第

「算役」大算役」

おほよめ （名）兄の妻。あによめ。和名抄「嫂（ハハヨメ）、爾雅云、稚婦謂之長婦、爲嫂婦（ハハヨメ）」

おほよもぎ （名）【植】やまよもぎ（蓬蒿）の異名。

おほよろひ 大鎧（名）一甲冑通のもの。平治物語「信頼卿中務馬に乘らんと引きよせさせたれ共、太りせめたる大の男の、大鎧は著たり、馬は大き也、乘り煩ふうへ」二胴丸に對して、古制の鎧の稱。

おほらか 大廊下（名）江戸時代、江戸城本丸にありし座敷の名。上下に分かる。將軍の親族の大名など著座する所。

おほらか （副）量多く。たくさん。大鏡「火おほらかにうづみて、たき物大きに造りて、ふせご打ち置きて」宇治拾遺「卒堵婆に、血のおほらかに附きたりければ」同「飯・酒・薬物どもなど、おほらかにしてたべ」

おほらかす 溺（他動サ）おびれしむ。おぼらす。父子相迎「此の誤り、實をなす事深し。如何しておぼらかされぬ事あらん」

おほらりゅうせん 大龍仙（名）【植】おほしらびえ（大白檜曾）の異名。

おほりんてん 大輪轉（名）〔輪轉は順次に輪轉して敍爵せらるる義〕正月女敍位の時、女司・主殿女官・御手水女官・掌縫女官・闈司・主水・東豎の敍爵せらるること。（小輪轉の對）

おほる 溺（自動ラ）一水中に陷る。水中に沈みて死ぬ。おぼほる。著聞「池の面へ、七八尺ばかり投げすてたりければ、水におぼれて浮き上がりけるを」榮華「当殿はただ誤におぼれてぞ過ぐさせ給ふ」二心を奪はる。耽る。はまる。徒然草「名利におぼれて、先途の近き事を顧みねばなり」狂言「此の世の利慾・名聞におぼれて」

（**誘潮るるに及んで船を呼ぶ**　時機、後れたるに譬ふ。三國志「及潮呼船、悔之無及」

（**誘潮るる者は藻をも掴む**　危急にせまりては、常に顧みざりしものにも依賴するに譬ふ。

おほる （自動ラ）老いほるの約。ほく。堀河百首「歸りこんこともおぼれておもほえず、今日の別れを惜しむ涙に」

おほる-ずね 大留守居（名）るすゐがしら（留守居頭）に同じ。

おほる-ずり 大瑠璃（名）【動】鳥類中、燕雀類の一種。翼の長さ三寸内外、雄は上面一帶に瑠璃色を呈して甚だ美なり。喉胸部は黑く、腹部は白し。雌は羽色一般に褐欖色を帶び、腰部は黑茶色を帶ぶ。本邦、各地の山地に見る。娥歌加留多（小鳥）神の惠みの深き世に、大るり・小るり・つばくらめ」

（りるほお）

おほる-りさう （名）【植】紫草科、おほるりさう屬の草本。莖の高さ二三尺。葉は廣披針形、殆ど葉柄なく、莖・葉共に毛茸あり。夏日、青色の小花を開き、總狀花序に排列す。果實は小堅果にして、刺を密生す。我が國、各地の山地に自生す。

おほれ-じに 溺死（名）水に陷りて死ぬること。でくし。

おほれる 朧（自動ラ）おぼろになる。かすむ。吉野忠信「鐘の鳴る音も、なかばより冴えつゝ朧れつ、春近けれど」

おほれる 溺（自動ラ）おぼる（溺）の口語。

おほろ 大艪（名）水夫二人にて押す艪。四十挺立て以上の大船に用ふ。にんがかり。ふたりがかり。にんこぎ。ふたりこぎ。（小艪の對）

おほろ 大爐（名）茶道にて、常の爐より三寸大なるものの稱。

おほろ 朧（名、副）一きだかからぬこと。ほのかなること。ほんやりしたること。朦朧。參語「月のおぼろなるに」名義抄「朦朧（オボ）」源「帚木「春されば、きのこのくれの夕月夜、おぼろかなしも山際にして」二料理の一種。海老・鯛などの肉をすりつぶして粉とし、味を附けて煮たるもの。三おぼろどうふ（朧豆腐）の略。四おぼろこぶ（朧昆布）の略。五おぼろまんぢゅう（朧饅頭）の略。

おほろ-おぼろ 朧朧（副）前條一の重言。意を強めていふ。言纜集「見渡せばおぼろおぼろとたちくるも、消ゆるもわかぬ薄霧のそら」

おほろか （副）おぼろげ（朧氣）に同じ。仁德紀「いはの姫が飫朋呂伽（オホロカ）にきこさぬ、うらぐはの木」萬「この花のひとよのうちに、ももくさのことぞこもれる、於保呂可（オホロカ）にすな」

おほろ-かげ 朧影（名）おぼろなるかげ。ぼんやりしたるかげ。源氏十二段「長生殿臺「言ふ聲も淚に曇る朧影、面影ばかりしるべにて暮ひ行く」

おほろ-かご 朧籠（名）ぼんやりとしたる籠籠。幽靈の乘りたるなどにいふ。卯月潤色「手にも取られぬ朧籠」

おほろ-ぎん 朧銀（名）銀の器の表を梨子地にして光澤をつけたるもの。

おほろく 大六（名）鈴蟲などを入るる大形の籠。（ころくの對）

おほろ-くえう 朧九曜（名）紋所の名。（ほし（星）を見よ。

おほろ-ろくろ 大轆轤（名）大きなる木・石などを動かすに用ふる大形の轆轤車。しやち。

おほろ-げ 朧氣（副）一さだかならず。不分明に。源花「ふかき夜のあはれを知るも、入る月のおぼろげならぬ契りとぞ思ふ」名義抄「少（ヤガ）」字鏡集「細（オボ）」二なみ。一通り。なほざり。宇津保俊蔭「おぼろげにては、かく參りきなんや」同藤原「北の方、おぼろげならずのうきこえ給へば」三おぼろげならずの略。一通りのことにあらぬ。土佐日記「おぼろげの願ひによりてにやあらん、風も吹かずよき日出でて」

おほろ-こぶ 朧昆布（名）昆布を薄く削りたるもの。おぼろ。

おほろ-そめ 朧染（名）染色の名。寛文の頃、京都上京帖乘坊の辻子紺屋新右衛門の始めて染め出だしたるもの。蝶山姥「月は山より朧染の襠、ひらりと取って捨て」

おほろ-づき 朧月（名）春の夜などの、霞める月。おぼろなる月。今物語「月朧なりけるに中將此の朧月はいかがし候べきといひたりければ」

おほろ-づきよ 朧月夜（名）おぼろ月の夜。源「花宴「此のごろのおぼろ月よに、しのびてものせん」

おほろ-づくよ　朧月夜　（名）　前條に同じ。

おほろ-どうふ　朧豆腐　（名）　桶に盛りて、凝り固まらせたる豆腐。おぼろ。浮世風呂『はて朧豆腐の黒焼が、よかんべいと云ふ話りける』

おほろ-はないろ　朧花色　（名）　ほんのりとしたる花色。今宮心中『露にしみづく帷子、肩と裾とはおぼろ花色』

おほろ-ふじ　朧富士　（名）　編笠の一種。色三味線『朧富士といふ大あみ笠、ゆたかに著て』

おほろ-ぶね　朽廢して、水など侵入したる舟。落書露顯『おぼろ舟とは如何云云。是れは古舟の、水にしづみ又葦原などにうづもれぬる舟をいふ也。おぼれたる舟也』吳竹集『おぼろぶねとは朽ちたる舟の事なり。つなぎすてて汐や水の入りたるをいふ也。なには潟あしまの月のおぼろぶね、かすみて見ゆる春のあけぼの』

おほろ-まんぢゅう　朧饅頭　（名）　上の皮をむきたる饅頭。中の餡おぼろげに見ゆるよりいふ。

おほろ-よ　朧夜　（名）　おぼろづきよ（朧月夜）に同じ。玉葉『秋もたほ忍ばれぬべき光かな、花しく庭の朧夜の月』

おほろ-わ　朧輪　（名）　車の名所。ぎっしゃ（牛車）を見よ。和名『輜車輪郭曲木也』

おほわ-きさし　大脇差　（名）　脇差の大なるもの。甲陽軍鑑『諸道具一方むきによきと沙汰仕る人は中騎大脇差尤もと存じ候』若風俗「ぬきさめのおほわきざし、素足に草履はきて」

おほわ-ぐもの　大業物　（名）　刀劍の刃味（ハア）のすぐれたるもの。

おほ-わし　羌鷲　（名）　【動】猛禽類に屬する鷲の一種。嘴黄たり。勘察加・北海道邊に産し、冬期本州に渡り來たり、主として海岸に近き所に棲み、魚類等を捕らへて食ふ。

おほ-わた　大腸　（名）　だいちやう（大腸）に同じ。宇治「酡醨六月之頃大腸名義抄」

おほ-わだ　大曲　（名）　古語。何湖などの大きくめぐり入りて、水のよどみたるところ。萬『ささなみのしがの大和太（ウダ）淀むとも、昔の人に又もあはめやも』

おほ-わたし　大渡　（名）　【一】船具。帆の名所。【二】次條の略。盛衰記『緩内揃みをさしはづし、大渡しに渡して歸れけれ共、小次郎はたらかず』

おほ-わたしかけ　大渡懸　（名）　相撲の手の一。わたしかけ（渡懸）を見よ。おほわたし。盛衰記『内揃・外揃・大渡懸・小渡懸』中騎樣樣にこそもみたりけれ」

おほわたし-くわん　大渡鑷　（名）　帆の大渡（ワタシ）の鑷。おほまはし。

おほわたし-づくり　大和田作　（名）　船の舳（ヘサキ）の一種。おほわだぶね（大和田舟）を見よ。

おほ-わたばうし　大綿帽子　（名）　大形の綿帽子。孕常磐『せい高く色まつ黑なる老女、大綿帽子の額より、皿のやうな目を見出だし』

おほわだ-ぶね　大和田船　（名）　攝津國大和田の舟。耕作と通船とに用ふる小舟。其の制、舟側（ヘリ）をすぐに通して水押（ミヲシ）に作り、上樅（ウハ）を戸立（ヨロヒ）の外へ出たして横縫（ヨコ）にす。此の制を大和田作（ヨコ）にて用ふる桝。方四寸四分、深さ二寸、此の積三十八寸七二。（五合枡）

おほ-まく　まくら（枕）をいふ、幼兒の語。

おほけ-に　共れにつけ加へて。其の上に。

おほ-ましし　御座　（名）　主上又は尊貴の人の御座所。おましどころ。勢語『よるのおましの設けせさせ給ふ』宇津保『寢殿の南のひさしに、おましよそはす』

おほし-どころ　御座所　（名）　前條に同じ。宇津保『ここの御ましし所は、女御の君ぞ時時うちやすみ給ふ』源『げによろしきおまし所にもとて』

おほし-ます　御座　（自動）　おはします（御座）に同じ。おます。千載『白川院、花御覽じにおましましけるに』同『中院小倉』「いとかしこく、あはれがらせおましまして」

おほ-ます　御座　（自動）　【一】あり（有）又をり（居）の敬語。おはす。【二】ございます。京阪地方の方言。

おほ-ます　（他動）　參らす。遣る。與ふ。狂言『はつ酒をおましたわいの』

おほ-ます　（他動）　前條に同じ。狂言『すきなやうにしておませう』大藏『狂言八句』「褒美に、此れをおまするとぞ云ふことぢや」

おほ-ませる　（他動）　前條に同じ。

おほ-まち　御町　（名）　江戸時代、吉原へ通ふものの、吉原をさしていふ語。ちやう（町）。

おほまち-ぐるひ　御町狂　（名）　江戸時代の語。吉原ぐるひ。遊女ぐるひ。

おほまつり-さわぎ　御祭騷　（名）　祭の時の如く輕佻にさわぐこと。

おほと-ぶぎやう　御的奉行　（名）　武家時代の職名。弓始めのとき、矢員をしるすことを掌るもの。

おほな　（名）　さかな（肴）をいふ、女詞。

おほなはじめ　御學始　（名）　主上の御學問始め。

おほなし　御廁　（名）　すりばち（擂鉢）をいふ、女詞。

おほばり　（名）　飯の菜（オカズ）をいふ、女詞。おめぐり。海人藻芥『御菜をば、おめぐりと云ふ。常におまはりと云ふはわろし』

おほばり　御巡　（名）　じゅんさ（巡査）をいふ、女詞。おまはりさん。

おほばりさん　御巡樣　（名）　前條の敬語。

おほ-まへ　御前　（名）　【一】まへ（前）の敬語。宇津保『おまへなるさうの琴に、ひきならし給ひける』枕『つとめて、おまへに參りて啓すれば』源『おまへの橋も、役（だてて見え侍るに』【二】門徒宗の語。ぢぶつ（持佛）をいふ。

おほ-まへ　けいはく　御前輕薄　其の人の面前にて、追從すること。

おほ-まへ　つゐしょう　御前追從　前條に同じ。都氣質『高右衞門へのお前追從、一杯飲まるると、思ひ出しての腹立ち』

お-まへ　御前　（代）　【一】對稱の代名詞。もとは敬稱なりしが、今は同輩以下に用ふ。枕『例の、はひぶしにならはせ給へるおまへたちなれば』落洼『その縫ひさしたるは、おまへ（縫ひ給へ）』【二】敬稱に用ふる第三人稱の代名詞。枕『かけまくもかしこき、おまへを始め奉り』源『これはおまへに參らせ給へ』同『夕顏』おまへにこそ、わりなうおぼさるらめ」

おほ-まへ-ざた　御前沙汰　（名）　おほやけざた（公沙汰）に同じ。狂言『こなたは口不調法なほどに、御まへざたでは負けにはいませう』

おほ-まへ-さま　御前樣　（代）　おまへ（御前）の敬稱。狂言『何がさて、おまへさまへもって、成らしやれて下ださるならば』

おほ-まへ-さん　御前樣　（代）　前條の訛り。

おほ-まへ-しゅう　御前衆　（名）　次條に同じ。

おほ-まへ-ぶぎやう　御前奉行　（名）　ひろうぶぎやう（披露奉行）に同じ。

おほ-まち　御前町　（名）　社寺などの前にある町。天網島『天滿つ神の名をすぐに、天神橋と行き通ふ、所も神のお前町』

おほ-まへ-みさんしゅう　御前未參衆　（名）　鎌倉時代、政所及び問注所の寄人の稱。

おほ-まへ-らふそく　御前蠟燭　（名）　佛前にともす蠟燭。門徒宗の人の語。かうぐわんじろふそく（願寺蠟燭）。

お-まむき-さま　御眞向樣　（名）　〔常に眞むきになり居るよりいふ〕佛像また佛畫の稱。一代女『あらけなき所作にて、おまむきさまを動かし』

お-まもり　御守　（名）　まもりふだ（守札）に同じ。まもり。心中萬年草『お守よ、御符よと、御恩を受けた裕辨樣』

おまらす　（他動）　おますに同じ。まるらす。狂言『此の上下・小袖は中騎そなたにおまらするでもおりやらぬぞ』

お-まり　御鞠　（名）　だんご（團子）をいふ、伊勢國の方言。

お-まる　御虎子　（名）　〔古語くそまるなどの動詞まるの名詞となりたるもの〕便器。おかは。おほつぼ。

おほ-わらは　大童　（名）　【一】大人の、冠ものをつけぬ姿。古事談『長季は宇治殿若氣也。仍大童にて不加烏帽子首服』平治『侍單門』曹も落ちて大童になり給ふ』【二】髮の結び解けて亂れ垂るること。亂髮。

おほ-わらひ　大笑　（名）　【一】顔高く笑ふこと。【二】大に笑ふべきこと。甚しき笑ひぐさ。

おほわりちがひ-ちゃうじ　大割交丁子　（名）　紋所の名。

おほわり-づた　大割蔦　（名）　紋所の名。

おほわれ-ほたん　大割牡丹　（名）　紋所の名。

おほ-ぬ　（名）　【植】ふとゐ（莞）の異名。おほゐぐさ。和名『莞。唐韵云、莞草似蒲而可以爲席者也』靈『編』

おほぬ-ぐさ　（名）　【植】前條に同じ。おほゐ。萬『かみつけのいならの沼の於保爲具左（ヲヲヰグサ）、よそに見しよは今こそまされ』

おほぬ-の-つかさ　大炊寮　（名）　おほひのつかさ（大炊寮）の訛りなるべし。和名『大炊寮豆加佐』

おほ-ゑみ　（名）　【植】なるこゆり（黄精）の異名。和名『黄精於保乎美』

おほ-ゑんじゅ　（名）　【植】いぬゑんじゅ（槐槐）の異名。

おほ-を　大峯　（名）　おほきなるみね。記『こもりくの初瀬の山の、憶富峯（オホ）にはははたりだて』

おほ-を　大緒　（名）　鷹の足革をゆひ附くる緒。せきを。和名『五雜『鷹』條於保緒』

おほ-をぢ　（名）　祖父母の兄弟。從祖父。

おほ-をとこ　大男　（名）　身體の大なる男。巨漢。柳樹『おほをとこ總身に智慧がまはりかね』

おほ-をとこ-しんがり　（諺）大男のしんがり　身體のみ大きくして、却りて人後に落つる譬へ。

おほ-をとり　大踊　（名）　多人數のをどり。

おほ-をば　（名）　祖父母の姉妹。從祖母。和名『從祖母於保』注『從祖母於保乎波』

おほ-をんな　大女　（名）　身體の大なる女。おほがらの女。

お-ほん　（感）　氣どりてせきばらひする聲。えへん。七個人『表の方にてせき拂、おほん』

おほ-ん　御　（接頭）　〔大御（オホ）の音便なりと〕【一】尊び敬ふ意を表はす詞。「おほん神」「おほん歌」仁德紀『鞋屢（オホン）』後撰『二西院の后おほんぐしおろさせ給ひて』【二】おほん何何といふを、下の物名を略して、おほんとのみ用ふ。大和物語『これも内のおほん（御歌の略）』源『對の上のおほん（御香の略）は、三種ある中に』

おほ-んかた　御方　（名）　おんかた（御方）に同じ。榮華『そのおほん方の女房、小姫君の御方など』同『鶴』もうへも、おほん方に渡らせ給ひて」のおほを」

おほ-をそどり　大嘘鳥　（名）　古語。鳥を罵りていふ語。萬『鳥とふ於保乎曾杼里（オホヲソドリ）の、まさてにも來ささぬ君をころくとぞ鳴く』靈異記『鳥と云ふ於保乎曾止利（オホヲソドリ）の、ことをのみ共にと云ひてさきだちいぬる』

おほ-をぢ　（名）　祖父母の兄弟。從祖父。

おほ-をば　（名）　祖父母の姉妹。從祖母。

おほ-をんな　（感）　おほがらの女。

おほ-をんな　大女　（名）　身體の大なる女。

おほ-ん　（感）　氣どりてせきばらひする聲。えへん。七個人『表の方にてせき拂、おほん』

おほ-ん　御　（接頭）　〔大御（オホ）の音便なりと〕【一】尊び敬ふ意を表はす詞。「おほん神」「おほん歌」仁德紀『鞋屢（オホン）』後撰『二西院の后おほんぐしおろさせ給ひて』【二】おほん何何といふを、下の物名を略して、おほんとのみ用ふ。大和物語『これも内のおほん（御歌の略）』源『對の上のおほん（御香の略）は、三種ある中に』

おほ-んかた　御方　（名）　おんかた（御方）に同じ。榮華『そのおほん方の女房、小姫君の御方など』同『鶴』もうへも、おほん方に渡らせ給ひて」

おまん 御饅 (名) まんぢゅう(饅頭)をいふ、幼兒の語。

おまん-が-あめ 阿萬飴 (名) 〔俗謠の、鵲の小萬に擬したるにや〕江戸時代、流行したる飴賣の一。女裝して、女の聲色をつかひて呼びあるきたり。

おまん-が-とき (名) おほまがときの訛り。

おまん-が-べに (名) ゆふやけ。あまがべに。

おまん-ずし 阿滿鮓 (名) 昔ありし鮓の一種。下文を見よ。後は昔物語「おまん鮓は實暦の頃よりと覺ゆ。京橋中橋おまんがべにといふより、居所の地によりておまん鮓といひたるなるべし」

おまんぶ (名) まもりぶくろ(守袋)、又にきんちゃく(巾著)をいふ、幼兒の語。浮世風呂「是れは何。おぜ袋ッ」

おまんま 御飯 (名) めし(飯)をいふ、幼兒の語。

おみ 臣 (名) 〔大身の約〕 ㊀君に仕ふる人。「しん(臣)。臣下。祝詞式(神祇部)「神禮自利、臣(オミ)禮自利、恐(カシコ)恐(カシコ)毛天津次(ノ)神賀吉詞白賜(ヘ)奏」 ㊁姓(カバネ)の名。上代、大臣(オミ)の職に選ばるべき上流の名族なりしが、大化改新以來、第六等の姓となれり。雄略紀「臣(オミ)連・伴造・國造」

おみ の をとこ 臣男 君に仕ふる年若き男。萬「もののふの臣之壯士(オミノヲトコ)は、おほきみのまけのまにまに聞くとふものぞ」

おみ の をとめ 臣少女 君に仕ふる年若き女。記「みなそそぐ潯美能袁登賣(オミノヲトメ)」

おみ 使主 (名) 上代の姓(カバネ)の名。雄略紀「根使主(オミ)」

おみ 御身 (名) 古語。おほみ(大身)に同じ。みみ。おんみ。記「恐我大神、有宇都志意美(オミ)者不覺、白而」

おみ (名) 〔植〕もみ(樅)の古名。萬「臣(オミ)の木も生ひつぎにけり」

おー-み 御身 (代) おまへ。そなた。おてまへ。汝。浮世風呂「番頭、これ、お身はいろいろの事をいふの」

おー-み 大御 (接頭) 〔おほみ(大御)の略〕尊敬の意を表はす語。「おみ帶」「おみ足」 狂言(佳)「おみぐしをけづり、お手を剃み」浮世風呂「あのお子樣は、少し見申さぬうちに、おみ大きくおなりなさいましたれ」

おみ-あかし 大御明 (名) おほみあかし(大御明)に同じ。四谷怪談「どれや、おみあかしでも上げやうか」

おみえ-くわん 御見環 (名) うちこみくわん(打込環)に同じ。

おみ-おつけ (名) みそしる(味噌汁)をいふ、女詞。

おー-みき 大御酒 (名) みき(御酒)の敬語。神に供ふる酒。大鏡(狂言當)「御神酒でござる」

おみき-どくり 御神酒德利 (名) 神酒を容れて、神前に供ふる德利。

おみきどくり の やう 御神酒德利樣 御神酒德利は左右同じ形なるより、兄弟などが同じやうなる服裝などしたる譬へ。

おー-みくじ 大御鬮 (名) みくじ(御鬮)に同じ。

おー-みこし 御神輿 (名) みこし(神輿)に同じ。

おみこし を すゑる 据御神輿 腰をおちつけて、容易に立ち去らず。

おみ-さま 御身樣 (代) おみ(御身)氏の敬語。あなたさま。おまへさま。國姓爺後日合戰「お身樣も、ただ一人の子を敵になされうか」

おみ-すかし 大御透 (名) かたびら(帷子)をいふ、女詞。

おー-みそ 御味噌 (名) ㊀みそ(味噌)をいふ、女詞。 ㊁ざふすゐ(雜炊)をいふ、宮女の詞。(宮女詞)

おみ-そう (名) ざふすゐ(雜炊)をいふ、女詞。大上臈御名之事「女房詞。一、ざふすゐ、おみそう」

おー-みそそうづ 雜炊 (名) 前條に同じ。

おみ-とり (名) ひと(もの(單物))をいふ、女詞。

おみな (名) おむた(嫗)に同じ。神代紀「有(ヒ)一老公與一老婆(オミナ)」宇鏡「娘(オミナ)」

おみなん 御末男 (名) おすゑしゅう(御末衆)に同じ。

おみ-ぬぐひ 御身拭 (名) 山城國嵯峨清涼寺にて、除暦三月十九日釋迦の像を、寺僧等が白ききぬにて拭ふ儀式。

おみ-のこ 臣子 (名) おみ(臣)に同じ。記「おほきみの心をゆらみ、潯美能古(オミノコ)の、やへのしば垣入りたたずあり」

おー-みま 御見閒 (名) 禁中の御居閒の名。天皇方違ひの時に住ませ給ふ處。

おー-みみ (名) ざふすゐ(雜炊)をいふ、女詞。

おー-みや (名) 〔みやはみやげの略〕みやけ(土產)に同じ。小兒の語。狂言(雷蛙)「おつつけ下向致しまして、目出たうおみやを進じませう」

おみやう-じ 陰陽師 (名) おんやうじ(陰陽師)の習慣讀。

おみやけ-にんぎゃう 御土產人形 (名) 〔江戸時代、諸侯また其の家臣が上洛の際、土產物として持ち歸りたるよりいふ〕人形の一種。裸體なる幼童に腹卷などさせたるもの。

おみる (自動) 〔おみきのおみを活かす〕酒に醉ふ。

おむ 臣 (名) 古語。おみ(臣)に同じ。名義抄「臣ム」

おむ 面 (名) 古語。おも(面)に同じ。靈異記「赫然(カガヤキ)面天(オモテ)」

おむ 怖 (自動) おそる。おづ。おめる。臆す。辨內侍日記「やり水に落ち入りて侍りしを、おめたる鬼とて人人笑はせ給ふ」砂石集「兒どもは、それ體におめぬがよきぞといふ」

おめず おくせず 次條に同じ。大鏡(狂言)「先祖の祖父、おめず臆せず御前へ出で」

おめず おそれず ひるまず怖れず。おめずおくせず。國姓爺後日合戰「怯めず恐れぬ振舞に、雛組の上下舌を卷き」

おむが (形) 古語。喜ばし。うれし。おもかし。

おむがしーさ (名) 古語。おむがしくあること。おむがしくある度合。日本紀竟宴歌「いさをしく正しき道の潯牟迦斯佐(シヤウ)、とてぞわが名も君は賜ひし」

おむがしみ (名) 古語。おむがしと思ふこと。喜ばしく思ふこと。神功紀「深(ヒ)憙(オムガシミ)君王」回「相見欣感(オムガシミ)」

おむがしむ (自動) 古語。うむがしむに同じ。

おー-むし (名) みそ(味噌)をいふ、女詞。膝栗毛「四角にした連木でおむし搗らんすなら、大かた擂鉢も四角ぢやあろわいな」

おむしゃる (他動) おもしゃるの訛り。おゆ申しゃる。狂言(附子)「お目にかからいで歸ったと、おむしゃってたもう」

おー-むす 御娘 (名) 〔むすはむすめの略〕人の娘の敬稱。おむすめご。本朝三國誌「ならおむすたち」博多小女郎波枕

上「おむすが著るものに、有り合はせた綴子三本、縞子五本」

おー-むつ (名) 〔むつはむつぎの略〕おしめ(御襁)の異名。

おむな 嫗 (名) 老いたる女。老女。おうな。おみな。雄略紀「老女(オミナ)和名阿乎美奈」 ㊁「嫗(ヲミナ)老女稱也」老婆記(同)「代老嫗(ヲミナ)者女記」

おむな-かづら 芎藭 (名) 〔植〕をんなかづら(芎藭)に同じ。和名抄「芎藭、唐韵云芎藭(ヲミナカヅラ)香草也。根曰芎藭、苗曰靈蕪」

おむ-のこ 臣子 (名) おみのこ(臣子)に同じ。おみ。おむ。天武紀「作(ル)八色之姓(中略)六日臣(オミノコ)」

おむ-ひとり (名) 古語。おもほてりに同じ。靈異記「目(漂)酒青面赦(赫)然(ヒカリ)天(ヲ)驚恐而隱」

おむみらく 以爲 (副) 〔おもみるの延轉〕おもひみるには。おもへらく。おもふには。將門記「彼介心中以爲(ヲモミラク)」

おむ-もの 佩物 (名) おびもの(佩物)の音便。和名抄「玉珮、唐韻云、珮(ハイ)佩(ヲビモノ)玉珮也(中略)佩帶也」名義抄「佩(オム)」

おむ-もの 追物 (名) 〔おひものの音便〕獸などを射んとして、其の逃ぐるを追ふこと。和名抄(騎射)「騎射(ウマイ)、騎射(ヲムモノ)、馳射(ハセイ)、馳射(ハセイ)、馳逸(ハセヒ)」

おー-むら (名) 〔むらはむらさきの略〕

おむれつ (名) 〔勁〕(鮮)をいふ、女詞。

おむれつ (名) 〔英 Omelet〕西洋料理の一。平鍋を強き火にかけ、中に脂を引き、卵のほぐしたるを入れ、其の燒けたるものを二つに折りて、其の內部に牛鳥肉・玉葱などの細かにしたるを入る。おむれつと。

おめ 御目 (名) 〔め(目)の敬語。㊁おめだま(御目玉)に同じ。「おめをもらふ」

おめ が いく 御目行 おめにいる(入御目)に同じ。おきに入る。大鏡(狂言)「御目がいたならば御見參ぢあらず、又御目が行かずば、五日も十日も逗留することであらうほどに」

おめ が まゐる 御目參 おめにいる(入御目)に同じ。おきにいる。狂言(文相)「御目見えをしやれ。御目がまゐったら當分に御げんざうであろ、又御氣に入らずば逗留のあることがあらう」

おめ に いる 入御目 おきに入る。おきにめす。おめがいく。おめにまゐる。狂言(文相)「御目見えをしやれ、御めに入ったら、そのまま御げんざうであろ、又御氣に入らずば逗留があらう」

おめ に かかる 遇ひ奉る 御面會になる。狂言(附子)「明日御めにかからう」

おめ に かく 見せ奉る。大鏡(狂言)「御目にかくる分は、苦しうござらぬ」

おめ に かける 前條に同じ。狂言(附子)「易いこと、御めにかけませう」

おめ に とまる 留御目 おめにつく。御注意をひく。

おめ にぶらさがる お目にかかるをしやれていふ語。遇ふ。面會す。長町女腹切「太郎內にか、四五日お目にぶらさがらぬ」

おめ もらふ 御目貰 お目玉を頂戴す。叱らる。御伽名代紙衣「とてもお目貰ふものなら、手をよう、女房ながら叱られてのけう」

おめ-あし (名) 古語。脚の膓れふくるること。こむあし。和名抄「慂。毛詩注云、膓是曰慂(足偏色立膓云)、古比」

おー-めいく 御影供 (名) 陰暦十月十三日の日蓮上人の忌日。他宗の御影供(ミエ)といふに紛るる故に、影(エ)をめいと呼びかへていふ。おめいこう(御命講)。おろしき御會式。

おめいこう 御命講 (名) 〔おみえいく(大御影供)の訛り〕 ㊀みえいく(御影供)をいふ、一向宗の語。 ㊁前條をいふ、法華宗の語。

おめ-おめ (副) 恥を知らず平然と。平氣に。のめのめ。著聞「力及ばずして、おめおめと女の行くに隨ひて行くに」砂石集「返事にも及ばず、おめおめと馬より おりて具して參りぬ」聖德太子繪傳記「母をおめおめ敵に奪はれ」

おめおめし (形) おめおめとしてあり。榮華(玉鬘)「あはあはしく人中に出でてきて、かやうに物などきこゆる、いとおめおめしくあることなれど」

おめかし (名) めかすこと。又、その人。おしやれ。

おめ-かづら (名) 〔植〕あけび(通草)の異名。宇鏡「通草(ヲメカヅラ)」

おめ-がはり (名) おもがはり(面變)に同じ。古へ東國の方言。萬「まけ柱はめて造れる殿のごと、いませ母とじ、於米加波利(ガハリ)せず」

おめぐり (名) ㊀飯のさいの敬語。宮女詞。おまはり。海人藻芝「御菜をばおめぐりと云ふ。常におまはりと云ふほわろし」 ㊁すりこぎ(擂粉木)をいふ、女詞。

おめざ (名) 〔おめざめの略〕幼兒が眠りさめたる時與ふる菓子の類。浮世風呂「朝、起き起きしたら、お目覺(ザ)にお薩をやらうよ」

おめし 御召 (名) ㊀めす(召)の敬語。お召寄せ。御用。雙生隅田川「早う出ませい出ませいと、お召し重なる白洲の上」 堀河波鼓「御めしの駒も乘換へも」 ㊁人の衣服の敬稱。川中島合戰「此の小袖は將軍義輝公のおめし」 ㊂おめしちりめん(御召縮緬)の略。

おめしうま あづかり 御召馬預 (名) おうまあづかり(御馬預)に同じ。

おめしかへぶね 御召替船 (名) ござふね(御座船)を見よ。

おめし-かん 御召艦 (名) 高貴の乘りたまふ軍艦。

おめし-ござふね 御召御座船 (名) ござふね(御座船)を見よ。

おめし-ちりめん 御召縮緬 (名) 〔貴人御召しの料の義〕縮緬に似て、更に上等なるもの。

おめし-なんど 御召納戶 (名) おめしちりめんに、おなんど色を掛けたるもの。奥女中袖鏡「御便番・おなかね、夏冬とも染色、おめしなんど一品のこと」

おめし-ぶね 御召船 (名) ござふね(御座船)に同じ。

おー-めだま 御目玉 (名) 叱責せらるること。

おめでたう 御目出糖 (名) 菓子の一種。いり種に砂糖と少許の紅とを加へてばらばらにし、これに甘納豆を交じへたるもの。祝儀の赤飯の代りとして、配り物に用ふ。

おめほ 思 (他動) おもふ(思)の活用。思への訛り。古へ東國の方言。萬十「わろ旅は旅と於米保(オメホ)ども、慰にして、こめち痩すらむ我が身かなしも」

おめみえ 御目見 (名) めみえ(目見)の敬語。狂言記「御白砂まで出て、お目見えを召され」

おめみえいか 御目見以下 (名) おめみえいじやう(御目見以上)を見よ。

おめみえいし 御目見醫師 (名) 江戸時代、諸侯又は民間の醫師にして、幕府の奥醫或ひは番醫となりたるもの。

おめみえいじやう 御目見以上 (名) 江戸時代、幕府の臣にして、將軍に謁見することを得る資格。以上。旗本。又、謁見することを得ざる資格を御目見以下、略して以下、また御家人といふ。

おめみえきやうけん 御目見狂言 (名) 俳優が、其の地に於いて始めて演ずる芝居。

おめ-むし (名) 【動】わらぢむし(草鞋蟲)の古名。和名抄「蠶蟲。一名、蟉蟘(ムシ)」

おめもじ 御目文字 (名) おめにかかること。女詞。蜆山姥「御用とは何ならん、おめもじさまにとゆふ顔の」

おめら-かす (他動四) すべらす。雅亮裝束抄「殿上人はおめらかして、五へも三へも紅葉重ねなどにしても出だす」

おめる (自動下) 次になる。下になる。下だる。劣る。建武年中行事「三位中納言は大納言の末におめり、三位の宰相は中納言の末におめる也」

おめる 怖 (自動下) おむ(怖)の口語。

おも 母 (名) ①はは(母)。仁賢紀「於母(モ)赤兒、於吾赤兒(於母兒是赤兒是兒是赤兒)」萬十「我がかづのいつもと柳いつもいつも、於母(モ)が慰すな、なりましつつも」②乳母。萬十「みどり兒のためこそおもは求むといへ、乳飲めや君が於毛(モ)求むらむ」

おも 面 (名) ①かほ。顔面。萬十「さぬ山に打つやをのとの遠かども、ねもとか子ろが於母(モ)に見えつる」②おもて。つら。うはべ。表面。萬十「なら山のこのてがしはのふた面(モ)に、かにもかくにもねじけ人のとも」古今雜下「水のおもに生ふるさ月の浮草の、うき事あれや根をたえてこぬ」源帚生「あさぢは、庭のおもも見えず茂り」表。

おも 重 (名・副) ①おもきこと。「おも過ぎる」和名「重下之毛(ヲモ)」②最も必要なること。又、其のもの。肝要。「健强がおもだ」「おもな話を忘る」③狂言のしての、はじめの稱。

おも 重 (接頭) おもなる意を表はす語。「おも役」「おもだつ」「重足の義か」くびす

おも-あし (名) (踵)に同じ、

おも-あど (名) 狂言にて、主たるあど。あどを見よ。

おも-あはせ 面合 (名) 物を襲ね合はするに、表の方を内になすこと。(うらあはせの對)雅亮裝束抄「おもあはせにせて、うらあはせに疊みて出だすべし」

おも-あら 面荒 (名) 馬などの顔の、猛く荒荒しきこと。曾丹集「よそに見しおもあらの駒も草なれて、なつくばかりに野はなりにけり」

おも-いり-し 思入師 (名) 前途の見込みをつけて賣買する相場師。

おも-いれ 思入 (名・副) (おもひいれの約) ①おもひいれ(思入)に同じ。膝栗毛「おもいれ見倒してやらうぢやあねえか」②前途に見込みをつくること。

おもいれさんぢゆう 思入三重 (名) 三重(サンヂウ)の一。俳優がおもいれをなしたる時、幕を引くをりの三味線の相方。

おも-うし (名) もてなし。心中宵庚申「今日のおもうしも、亀相ほど御意に入る」

おも-おもし 重重 (形ク) ①おどそかなり。郷重なり。「おもおもしき儀式」②おちつきて居り。沈著なり。威厳あり。(かるがるしの對)枕「受領もさこそあめれ、あまた國に行きて大貳や四位などになりて、上達部になりぬればおもおもし」

おもおもしけ 重重氣 (副) おもおもしさう。

おもおもしさ 重重 (名) おもおもしき度合。おもおもしきさま。

おも-がい 面繋 (名) (おもがきの音便)馬具の名。馬の頭上より轡にかけて飾りにしたる紐。おしかけ(押掛)を見よ。著聞「高遠落ちざまに國文が馬のみづつきを取りて、ひざまづき立ちけるを、國文とりもあへず、己れが馬の手綱・おもがいをおしはづして、平頸を打ちてけり」

おもがい-だすけ 面繋助 (名) 轡の名所。たちぎき、立聞(ニ)に同じ。

おも-がき 面繋 (名) 馬具の名。おもがい(面繋)に同じ。宇鏡集「鉄(おもがきはみ)」

おも-がくし 面隠 (名) ①おもてのかくること。夫木「ねくたれの朝顔の花朝霧に、おもがくれして見せぬ君かな」定頼集「もみぢばの散りつむ時ぞうちはへて、拂はぬ庭のおもがくれなる」

おも-かけ 面影 (名) ①夢覺と目さきに見ゆる姿。樣子。かたち。萬十「大船のゆくらゆくらに、於毛可宜(オモカゲ)にもとな見えつつ」勢語「人はいざ思ひやすらん玉かつら、おもかげにのみいとど見えつつ」源桐壺「けはひ・かたちの、おもかげにつと添ひておぼさるるも」②香の名。實は伽羅。香ひ隠奢に似て、火末は薄し。名目錄 ③おもかげづけ(面影附)の略。

おもかけ-ぐさ 面影草 (名) 【植】やまぶき(棣棠花)の異名。下文を見よ。藏玉「ふるさとの面影草の夕ばへや、とめし鏡の名殘ならまし。昔、男女あかずして別かれ侍りける時、鏡に面影を互ひにうつして、此の鏡を埋み畢んぬ。其の所より山吹生ひ出でけると中略巨細、忌衣の物語にあり」

おもかけ-づけ 面影附 (名) 連句の附句に、朧げに故事を含ませること。おれなるか、あへる時さへ面隠(オモカクシ)せず」萬代茎「もみぢばの散りつむ時ぞうちはへて、拂はぬ庭のおもがくしなる」②はづかしさをまぎらすこと。源宿木「宮もなまはしたなきに、こまやかなることなどはふともえ言ひ出で給はず、おもがくしにや」

おも-がくす 面隠 (自動四) ①恥ぢらひて顔をかくす。正面に向かはず。萬十「あひ見ては面隠流(オモカクシ)石橋ものからに、つぎて見まくのほしき君かも」②うはべをかくす。表面を覆ふ。枕「雪中眺あやしきしづの屋もおもがくして」

おも-がくれ 面隠 (名) おもてのかくること。夫木「ねくたれの朝顔の花朝霧に、おもがくれして見せぬ君かな」定頼集「もみぢばの散りつむ時ぞうちはへて、拂はぬ庭のおもがくれなる」

おも-かげ 面影 (名) ①夢覺と目さきに見ゆる姿。樣子。かたち。萬十「大船のゆくらゆくらに、於毛可宜(オモカゲ)にもとな見えつつ」勢語「人はいざ思ひやすらん玉かつら、おもかげにのみいとど見えつつ」源桐壺「けはひ・かたちの、おもかげにつと添ひておぼさるるも」②香の名。實は伽羅。香ひ隠奢に似て、火末は薄し。名目錄 ③おもかげづけ(面影附)の略。

おもかけ-ぐさ 面影草 (名) 【植】やまぶき(棣棠花)の異名。下文を見よ。藏玉「ふるさとの面影草の夕ばへや、とめし鏡の名殘ならまし。昔、男女あかずして別かれ侍りける時、鏡に面影を互ひにうつして、此の鏡を埋み畢んぬ。其の所より山吹生ひ出でけると中略巨細、忌衣の物語にあり」

おもかけ-づけ 面影附 (名) 連句の附句に、朧げに故事を含ませること。お

もかげ。

おもかし (形シク) 古語。おむがしに同じ。宇鏡「偉慶(ヰモカシ)又心勝(ヲモカシ)」

おも-かた 面形 (名) 顔のかたち。かほつき。おもざし。萬十「於毛可多(オモカタ)の忘れむしだは、大ぬるにたなびく雲を見つつしぬばむ」

おも-かぢ 面舵 (名) ①船首を右へ向けんとする時の、舵のとりかた。(とりかぢの對)爲重集「戀ひ戀ひて今日とり向くるおもかぢに、おひてをいそぐ天の川船」幸若舞曲「おもかぢを强くとり、とりかぢを弱くとって、わい櫓をたて」②右の舷。右舷。

おも-がつ 面勝 (自動四) 古語。人に對ひて怖れず。記「與伊牟加布神(ニ)面勝(ガツ)神」

おも-かに 面皮 (名) おもくさに同じ。醫心方「面皮(オモカニ)」

おも-がはり 面變 (名) おもざしのかはること。顔つきのかはること。萬八「逢はしたる今日をはじめて、鏡なすかがし常見む、於毛我波利(オモガハリ)せず」源蜻「東宮見奉らでおもがはりせんこと、あはれにおぼさるれば」

おも-がへり 面返 (名) 能樂にて、三番叟の鈴の段の内、扇を片方へ除けてはあちこち見廻はす所作。

おも-がろし 面輕 (形シク) あらあらしからず。おとなし。騎射祕抄「いかにも乘り心安く、おもがろき馬を好むべし」

おもき (名) 丸木船の、襷(ヲモ)の上の横(ヨコ)の一種。

おもぎ-づくり 重造 (名) 船の制(ツクリ)。ほくこくぶね(北國船)を見よ。

おもき-やまひ 重病 (名) 平癒し難き病。ぢゆうびやう(重病)。難病。天武紀「若有難死病(オモキヤマヒ)不得集者」竹取「かぐや姫は、おもきやまひをし給へば」

おもぎらひ 面嫌 (名) 小兒の、人みしりすること。宇津保(俊蔭)上「犬宮は中略男をばおぢず、おもぎらひをもせず」源若菜「ただちどのおもぎらひせぬ心地して」

おも-くさ 面草 (名) 古語。面に生ずるかさ。にきびの類。宇鏡集「吁(オモクサ)」

おも-くす 重 (他動四) おもんず(重)に同じ。徒然草「詩歌にたくみに、絲竹にたへなるは、陶玄の道、君臣これを重くすとはいへども」

おも-くる し 重苦 (形シク) おもさうなり。おもおもしげなり。「おもくるしき口のききかた」

おも-くるし-け 重苦氣 (副) おもくるしきやう。おもくるしさう。

おも-くるし-さ 重苦 (名) おもくるしきこと。おもくるしき度合。

おも-くれる 重 (自動下) おもたげなり。おもくるしげなり。三河物語「一番手はざる處を、餘りにおもくれ面、手ればく候間」一代女「常なる著物の下がへに綿を含ませ、その委おもくれて」

おも-くろし 面黑 (形シク) おも白しを戲れに打ち反していふ。おもしろしといふに同じ。季吟句「霧はれて鈴馬の蟌おもくろし」膝栗毛「こいつおもくろいと、彼の下駄をはきて湯の中へはいり」

おも-け 重氣 (副) おもさう。重くあるさま。おもたげ。後拾遺「いかならんこよひの雨に、とこなつの今朝だに露のおもげなりつる」

おも-さ 重 (名) 重き度合。おもたさ。狂言記「慰風の來ては袂にかいもつれての、袖のおもさよ」

おも-ざし 面差 (名) 顔つき。顔だち。おもやう。吉野都女補「見ればおもざし・顔のかかり」

おもさま 思樣 (副) おもふさま(思樣)の略。

おもさるかぐ 面猿樂 (名) さまざまの面相をして、人を笑はすること。(繪屋軍記)行宗集「いかにせん橘食ひに負けぬれば、おもさるがくをするぞうたてき」

おもし 重石 (名) ①物を抑へつくるために置くもの。壓(ヅ)にする物。宇治拾遺「石橋の下に多くの年をすぐして中略昨日おのれがおもしの石を蹈み返し給ひしに、助けられて」鎌歌加留多「おもしに壓されてひしやげし亡者」②はかりのおもり。和名抄「權(於毛之乃)」③人をおさへ鎭むる威力。源紅葉「世のおもしとものし給へるおとどの」

おもし 重 (形シク) ①目方多し。輕からず。神代紀「清陽者薄靡而爲天、重濁者淹滯而爲地」萬十「重(オモ)馬荷に、らは荷うつといふ事のごと」②貴し。高し。宇津保(藤壺)「德いとかしこく、世におもく思はれ、人にゆるされたる學士なりしかば」源桐壺「よせおもく、疑ひなきまうけの君と、世にもてかしづき聞こゆれど」③苦し。大なり。容易ならず。雄略紀「疾彌甚(オモシ)矣」繼體紀「吾之罪過必應重(オモシ)矣」竹取「風いと重き人にて」④大切なり。必要なり。砂石集「おもき主、なつかしき次に志を盡くし」⑤おちつきあり。おもおもし。輕率ならず。源紅葉「いみじうあだめいたる心ざまにて、そなたにはおもからぬを」⑥浮き立たず。沈みてあり。迫まず。ふさぐ。「氣がおもい」

おもし 重 (形シク) 古語。おもおもし(重重)に同じ。續紀「天皇御世重(オモシ)、於母自鼓(オモヒ)入乃氏門止、慈賜止上賜來貴家爲利」

おもしやる (他動四) (御申しあるの約) 仰せある。おむしやる。御所櫻堀河夜討「昌俊がわけておもしやる段段のことわり、今日に限ってなぜ聞き入れぬ」

おも-しる 面知 (自動上) 顔を見知る。萬十「かみのごと聞こゆる濃の白波の、面知(オモシ)君が見えぬ此のごろ」同回「みづぐきの岡のくず葉を吹きかへし、面知(オモシ)らが見えぬころかも」

おも-しろ 面白 (名) おもしろきこと。又、おもしろし(面白)の語幹。古語拾遺「阿波禮阿那於茂志呂(オモシロ)」忠見集「みなかみのここら流れてゆく水に、いとどなごしの神樂おもしろ」大和物語「あなおもしろの玉の歌よみやとなんのたまうける」

おもしろ-がる 面白 (自動四) おもしろく思ふ。興がる。宇津保(上)「いふかひなげなる姿したる者も、あはれがりおもしろがりゐたり」

おもしろ-げ 面白氣 (副) おもしろさう。

おもしろ-さ 面白 (名) おもしろきこと。おもしろくある度合。

おもしろ-さう 面白相 (副) さもおもしろきやう。おもしろげ。大藏狂言「蔡大波」「まづは面白さうな事ぢやが」

おもしろ-しろし 面白 (形シク) よろこばし。樂しむべし。興多し。趣味多し。齊明紀「山こえて海渡るとも、於母之樓枳(オモシロキ)いまきの内は忘らゆましに」萬十「於毛思路伎(オモシロキ)ぬをはな燒きそ、ふる草にひ草まじり生ひはおふるがに」可怜紀上字鏡「怜(名義抄)」

おもしろ-づく 面白づく (名) おもしろさにまかせてすること。諸國物語「幾野石衞門殿にそそのかされて、面白づくのどれあひ女夫と成りて」

おもしろぶ （他動）古語。めづ。もてあそぶ。賞玩す。名義抄「賞ヲモシロブ」

おもしろみ 面白味 （名）おもしろきあぢはひ。おもしろきこと。

おもしろ-をかし 面白可笑 （形シク）いかにもおもしろし。狂言「盗人」「おもしろをかしう申しわけを仕らう」同「太郎」「扨も扨も面白をかしい事かな」

おもすみ （名）山の端をいふ。俗語

おもだか 澤瀉 （名）【植】澤瀉科、慈姑（クワイ）屬の多年生草本。地下に小なる球莖を有し、之より葉を出だし、葉は葉柄長く、くわねに似て小なる狹き戟形なり。夏日、葉間より花莖を抽き、圓錐花序を綴り、白色三瓣の花を開く。我が國、各地の池溝・水田に自生す。なまゐ。はなくわゐ。本草和名「澤瀉（ヲモダカ）」枕「おもだかも名をかしきなり。心あがりしけんと思ふに」慈姑花（クワイ）。野茨菰。

（一かだもお）

（二かだもお）

澤瀉　澤瀉根　澤瀉丸　澤瀉向

長門澤瀉　水澤瀉　澤瀉花

（三かだもお）

澤瀉　大澤瀉　澤瀉丸　澤瀉花

（四かだもお）

㊀蘇の一種。澤瀉の形したるもの。㊁紋所の名。いつつはおもだか・おほぜきおもだか・おもだかきり・おもだかのまる・だきおもだか・ちがひおもだか・ながとおもだか・みづおもだか・むかひおもだかなど種種あり。曾我九人兄弟「紋尽」中國に揚羽の蝶・牡丹・海鉢・澤瀉」

おもだか-さきゃう 澤瀉桔梗 （名）紋所の名。

おもだか-ぎり 澤瀉桐 （名）紋所の名。おもだか（澤瀉）を見よ。

おもだかくわ 澤瀉科 （名）【植】顯花植物、單子葉類の一科。水生又は沼生の草本。多くは平滑にして、鱗根と長き葉柄を有する根生葉及び花莖とを有す。花は總狀又は圓錐花序に排列し、整齊完全、又は單性、雌雄同株或ひは異株。花梗は輪生して苞を具ふ。花托は扁平又は凸出せり。萼片は三箇、永存性にて、花瓣も亦三箇、大にして早落性なり。雄蕋は六箇又は多數。子房は多數、稀に少數なるもありて、一室にして一胚珠を藏し、多くは瘦果を結び、種子には胚珠無し。本科に屬する植物は熱帶及び温帶地方に分布し、食用に供すべきものあり。さじおもだかくわ。たくしやくわ。

おもだかくわゐ 澤瀉慈姑 （名）おもだかの球莖をいふなるべし。

おもだかずり 澤瀉摺 （名）古へ布に澤瀉をすりたるもの。

おもだかのまる 澤瀉丸 （名）紋所の名。おもだか（澤瀉）を見よ。

おもだかぶた （名）古語。頭を上げて歩む斑毛の馬。古義「一說、ぶたは驛路の荷を負ふ馬なりと。萬十「おのれ故のらえて居れば、あしげ馬の面高夫駄（オホヲ）に乘りてくべしや」

おもだか-わちがひ 澤瀉輪違 （名）紋所の名。

おもだか-をどし 澤瀉縅 （名）鎧の縅の名。色色の絲にて、上狹く下廣く、おもだかの葉の形にをどしたるもの。平治（物語）「朽葉の直垂に、澤瀉とて、澤瀉縅にしたる重代の鎧に、白星の冑を著」

おもたけ 重氣 （副）おもたさう。おもきやう。おもげ。枕「きちやうに打ちかけたる袴の、おもたげにいやしう」

おもたさ 重 （名）おもたくある度合。おもさ。

おもたし 重 （形）㊀おもし（重）に同じ。狂言「やあいかうおもたいと思へば、身共が方（ばかり）寄せておいた」㊁おもし（重）に同じ。用明天皇職人鑑「造りし鄙のおもたきを」

おもたせ 御持 （名）持たせ來たりたる贈物の敬語。春花五大力「鯛の濱燒に鮪の樽煮、これはきびしいおもたせぢや」

おもた-たし 面立 （形）面目あり。保元（物語）「おほやけにまじらはんに、おもだたしく侍るべき」枕「內侍のすけなどいひて、中將祭の使などに出でたるも、おもだたしからずやはある」

おもだたしげ 面立氣 （副）おもだたしさう。面目ありげ。蜻蛉日記「參りつるよしきこえよとて歸りぬと聞くも、おもだたしげなりつる」

おもだたしさ 面立 （名）おもだたしくある度合。落窪「老いのはて死にのはてのおもだたしさは、おのれにまさる人よもあらじ」

おもだち 面立 （名）かほつき。おもざし。おもわ。おもだて。宇治拾遺「馬のふるまひ、おもだち・尾さし・足つきなどの」

おもだつ 重立 （自動）かしらだつ。主となる。

おもだて 面立 （名）おもだち（面立）に同じ。諸曲「もとの姿は變はれども、さすが見馴れて面だてを」

おもたるぎ 主樋 （名）ぢだるき（地樋）に同じ。

おもちち 母父 （名）母と父と。ちちはは。萬十「ちはやぶる神のみさかにぬさまつり、いはふ命は意毛知知（オモチ）がため」

おもちづつ-がしら 御持筒頭 （名）江戸幕府の職名。將軍の鐵砲を預かり、又戰時、與力・同心を率ゐて、將軍の旗本を警衛するもの。

おもちや （名）小兒のもてあそびもの。もちやすび。玩具。

おもちやや （名）おもちやを賣る家。

おもちやゆみ-がしら 御持弓頭 （名）江戸幕府の職名。將軍の弓を預かり、又戰時、與力・同心を率ゐ、旗本を警衛するもの。

おもづく 面就 （自動）目につく。關沖一說、其の面に似つく。驛解萬十「あたらしきまだらの衣面就（オモヅク）て、われにおもほゆ、いまだきねども」

おもづら 纐頭 （名）おもがい（面繋）に同じ。一說、おもがいとは別にして、馬の鼻の上にかくるもの。裝飾又は率くに便なる爲めとす。鼻革。和名十「纐頭。唐韻云、纐（馬絡頭也）纐（馬絡頭也）」字鏡「纐頭（馬頭也）」名義抄「羈（ヲモヅラ）」

おもづら-ひけ （名）ほほひげ（頬髭）に同じ。

おもて 面 （名）㊀かほ。つら。おも。皇極紀「をばやしに我れをひきれてせし人の、於謀提（オモテ）も知らず、家も知らずも」名義抄「顔（ヲモテ）」㊁おもてがた（面形）の略。假面（メン）。爲尹千首「今はは神樂おもてのならぶかな、庭火しろくともよほさせつつ」㊂めんぼく（面目）に同じ。乘仁紀「何與面目（ヲモテノヲモ）莅天下耶」源「いづこをおもてにかは、又も見え奉らん」

おもて-おく 面置 はづかしくて顔むけ出來ず。源（蜻蛉）「おもておかん方なくおぼえ給ふや」大鏡「なかなかおもておかん方なく」

おもて-おこす 面起 ㊀顔をあぐ。ふむく。㊁面目を施す。名譽となる。宇津保（俊蔭）「此の子は我がおもておこしつべき子なり」名義抄「面目（オモテオコス）」

おもて-しろ 面白 おもしろ（面白）に同じ。諸曲「おもしろや、おもてしろやと、覺えず岩戸を少し開いて感じ給へば」

おもて-つれなし 恥ぢを知らずして平氣なり。薄情なり。平治（物語）「一軍だにせずして、我が身も滅び人をも失ふこそ、おもてつれなう物をのたまふものかな」諸曲「面つれなき心とは、我れだに知らでは づかしや」

おもて-にどろ-を-ぬる かほにどろをぬるに同じ。かほ（顔）の條を見よ。

おもて-に-まく 面負 相手を畏れ憚りて、對抗する顔色なし。先方に氣を呑まる。盛衰記（八橋）「若しおもてにまけて、委しくいはぬこともぞあるとて」

おもて-の-なみ 面浪 顔によるしわ。教長集「年よれるおもてのなみも忘られて、心はわかの浦にかへりぬ」

おもて-はづかし 面恥 恥かしくて、面も赤むやうなり。おもはゆし。宇津保（國讓）「あな物ぐるはしや、人聞きこそやきしけれ。御方のおとどや、かやうの事聞き給ふらんと思ふこそおもてはづかしけれ」

おもて-ふす 面伏 おもてをふす（伏面）に同じ。宇津保（國讓）「子どもあまたもて侍れど、まことにはくやしうおもてふすべきは侍らねど」

おもて-ほてる 面熱 顔赤くなる。赤面す。恥かし。おもはゆし。名義抄「靦（ハヅカシ）」

おもて-も-ふらず あたりをふりむきもせず。傍見もせず。平治（物語）「敵五百騎が中へ、面も振らず割って入る」

おもて-を-かきに-す （論語陽貨篇の、其猶正面墻而立（より出づ）。墻に向かひて立つ如く、先の見えぬ、物の分からぬ譬へにいふ。千載「これを學びたづさはらざるは、面をかきにして立てらんが如し」

おもて-を-こす 越面 先を越す。諸曲「誰れに面を越され、誰れに劣る振舞のなき世語に」

おもて-を-さらす 曝面 ㊀わが顔を、衆人の前に少しも隱さずあらはす。㊁あらはに恥かしめを受く。はぢをさらす。諸曲「東のはてまでも、かやうに面をさらすこと、前世の報いと云ひながら」

おもて-を-ならぶ 並面 ㊀顔を互ひにならぶ。顔を合はす。赤染衛門集「ただならずよき道しつることこそあれ、面並ぶる今日はうれしな」㊁同等なり。傍輩なり。著聞「人こそあらめ、おもてをならべたる者に心うつして、ねたき目見するに」

おもて-を-ふす 伏面 ㊀うつむく。㊁面目を失ふ。不名譽となる。宇津保（國讓）「心と世の中に住みはふれて、みかど・后の御おもてをふすることのたまふなれば」源（若菜）「たき親のおもてをふせ、かげをはづかしむるたぐひ」

おもて-を-をかす 犯面 意に逆らふを憚らずに諫む。直諫す。

おもて 表 （名）㊀そとがは。外部。表面（うらの對）夫木「鶯鶯の居る池の氷のますゑ鏡、おもてにうらも見ゆるなりけり」狂言「札のおもてに附いて參っておぢやる」同「抜足」「織りたる布は何何中將布の子のおもて」㊁一家の表口。そと。狂言「表からはいられまい、うらへまはらう」同「末廣」「おもてに案內がある、誰れぢや知らぬまでい」㊂家屋の內にて、客の接待などする處。（奧の對）㊃江戸幕府の政廳の稱。㊄同きたる方。方面。神代紀「分巡國柱（同會）一面（ヲモテ）」源（若菜）「南おもてにおろして」保元（物語）「春日表の小門」㊅ところ。許（ココ）。地方。「長崎おもて」「江戸おもて」㊆おほやけ。私の對）「おもてむき」「おもて沙汰」㊇うはべ。見え。狂言「蕎麥」「おもてに中將殿入を致さうと存ずる」㊈しるし。大原問答「惡を制し妄を破るをもって安心の表とし、そかうの罪を恐れしむべけんや」十先（本曾我）「遙かに參らず候ひつる恥かしさに、十郎をおもてに立て參り候」㊉水夫の語。おもてのま（表間）に同じ。㊋おもてうち（表流）の略。㊌述懷同じ。㊍疊の上側につくる縁。及び下駄などの表面。

おもて-いなづま 表稲妻 （名）模樣の名。

おもて-うし 母調子 （名）いちこつ（ないてもお）

おもて-うた 表歌 （名）面目ある歌。すぐれたる歌。無名抄十「御詠の中には何れかすぐれたりとおぼす中略これをなん、身にとりておもて歌と思ひ給うるといはれしを」

おもて-うち 面討 （名）御術にて、表よりうちむこと。諸曲「磨針太郎兄弟は面討には並びなし」

おもて-おこし 面起 （名）おもてを

（ないてもお）

につくるたたみ。「おもてつきの下駄」心中刃氷朝日十「あとは火をかへ、水をかへ、表もかゆる備後町」

（謚表木綿の裏甲斐絹 木綿表の衣服に甲斐絹の裏地をつくること。見えざる所に贅澤をなす譬へ。

おもて-で 重手 （名）手重き創。いたで。ふかで。重傷。諸曲「次第次第に重手は負ひぬ」武家名目抄（職官部）「敵方より打ちける鐵砲にて、村上理右衛門重手を負ひ」

おもて-あみ 表編 （名）編物の編み方の一種。

おもて-あゆみ 表歩 （名）和船の名所。あゆみ（歩）を見よ。

おもて-いうひつ 表右筆 （名）江戸幕府の職名。書記の職にて、表右筆組頭の下役。

おもて-いうひつ-くみがしら 表右筆組頭 （名）江戸幕府の職名。幕府の命達を草し、日記方・家督方・分限方・吟味方の職掌を分擔す。奧右筆に比ぶれば輕く、機密には預からず。

おもて-おこし 面起 （名）おもてを

おもてかねはぬ（「おもてかねはぬ」の対）面目を施すこと。（おもてをふさぐの対）面目・何郷

おもてしらず 表知（名）表だって世に出ること。

おもてしらずのおもて 面面（名）表だって世のおもて。おのおの。

おもてしらずのうきぶね 表御座船（名）（浮足船）に準ずる。

おもてしらずのうきぶね 表御座船（名）（浮足船）を見よ。

おもてしらずのうきぶね 表御殿（名）せいしんの正殿に同じ。

おもてしらず 表道（名）刀にそなえる（小刀）を表にさしこむ用意。「表道・裏道」

おもてのちから 表座敷（名）家の表の方にある座敷。（裏座敷の対）

おもてのちから 表沙汰（名）①おもてだたること。おもてむき。②おもてむきの沙汰。おほやけ沙汰。正式沙汰。公沙汰

おもてしゅ 表師（名）船の表の間で働く水夫。

おもてしゅ 表敷（名）和船の底板。

おもてじき 表都（名）和船の名所。

おもてしるべ 表船（名）和船の名所。

おもてしるべ 表面白爪（名）（黒月毛の馬の爪）

おもてだち 表墓（名）船の出立。

おもてだち 重手代（名）かしらだつ家の者。

おもてだいどころ 表台所（名）江戸幕府の職名。奥向の事頭を統べ家の表の事。

おもてだち 表道具（名）①日・月・星・時・日・月・星・時・日・月・星・時・

おもにくし 面憎 (形) つらにくし。枕「帳台の夜、行事の蔵人いときびしうもてなして、かいつくろひ二人、童より外は入るまじとて、おさへて、おもにくきまでいへば」

おもねる 阿 (自動四) 人の意を迎へて媚ぶ。へつらふ。追従す。神代紀上「此神侯(オモネ)媚於大己貴神」比・及三年八月「不報聞」霊異記中「親屋(オモネ)媚」面従。

おーもの 御物 (名) 一主上の聞こしめす。武烈紀「角鹿之鹽、爲天皇所食(オモノ)」源氏賢木「大床子のおものなどは、いとはるかにおぼしめしたれば」二いんしょくぶつ。飲食物の敬称。宇津保祭使「よさりの御物、御まうどにまゐる」枕三「あはせものを皆食ひつれば、おものは不用なりと見るほどに」三武家時代、将軍の服御の称。四おものぶぎょう(御物奉行)の略。蜻川親俊記天文七年正月十一日「御参内、御供中略御出奉行松田丹後守・諏方甚左衛門、御物奉阿」

おーもの 珮 (名) おむもの(佩物)に同じ。

おものけ 御物笥 (名) 御物(オモノ)を容るる笥(ケ)。内匠寮式「御飯笥(オモノケ)一合[略]」

おものさたーしゅう 御物沙汰衆 (名) 将軍・御台所等の服御物を管するもの。東鑑寿永元年九月廿六日「御物沙汰衆就奉公懃厚、賜御物」

おものーし 御物師 (名) 一禁中に仕ふる縫物師。二一般に、裁縫師の称。一代女「手の利きければ、おものし役の勤めをせしに」世間手代氣質「おものしは黒繻子の帶持って出で」

おものーだい 御物臺 (名) 御物(オモノ)を載する臺。宇津保菊上「御かた物の数をとりの〜飾り盛りたり。御ものだい九よろひ」

おものーだな 御物棚 (名) おものを載する棚。御膳棚。枕「みづし所のおものだなといふものに、香おきて」

おものーぢゃし 御物茶師 (名) 江戸時代、宮中及び幕府の御用茶師。

おものなかもちーぶぎゃう 御物中持奉行 (名) 室町時代の職名。将軍家の出で行かるる時、衣冠・刀剣などを納めし唐櫃をあづかりて、事を辨ずる職。

おものながもちーぶぎゃう 御物長持奉行 (名) 前條に同じ。

おものーぶぎゃう 御物奉行 (名) 室町時代の職名。将軍參内の時、御物を納めし長櫃にそひて行列に列なり、禁内には直廬に候ひて装束のことに從事す。また、御物中持奉行、及び櫃奉行をもいふ。

おものーやどり 御膳宿 (名) 禁中のおものを納めおく所。紫宸殿の西の廂にあり。枕「おものやどりの北によりたる間に、しとねさし出でてする人たり」

おものやどりのーとじ 御膳宿刀自 (名) おものやどりを掌る女官。紫式部日記「おものやどりの刀自を呼び出でたるに」

おもーばかり 思量 (名) 〔おもひはかりの略〕おもんばかり。名義抄「慮(オモヒバカリ)」新六帖「目に見えぬ心のとがのおもばかり、かからん後の世をなげくかな」

おもーはかる 思量 (他動四) 〔おもひはかるの略〕おもんばかる。名義抄「恕(オモヒハカル)」

おもはく 思 (名) 〔次條の名詞となりたるもの〕一おもふ所。かんがへ。思慮。狭衣四「うたねと用意したるすまひ・おもはくども、おのおのをかしう見ゆるを」二其の人に對する、他のかんがへ。氣うけ。三河物語「上の御目之御前又は諸傍輩之おもはく」三投機などにて、前途に利益ある見込みを立つること。思惑。四思ひをかくること。懇ひ慕ふこと。又、其の人。情人。關八州繁馬「渡邊が妻岩藤を初めとして中略四人づれ、言はねどしるき四天王の思はくたち」平家女護島「中略濡れた袖にあの姫島はなに、たが思はくのゆかりぞとな、神のかぶろに言問へば」色道大鑑「おもはく中略逢ひ馴れて後の詞にはつかはず、しかれども、みづからいふ言にあらず、推量して、其方は誰れにおもはくさうなと云ふ詞也」

おもはく 思 (他動) おもふ(思)の延。萬「おくれにし人を思久(オモハク)しでのさき、ゆふとりしてて行かむとぞ思ふ」

おもはくーがひ 思買 (名) 相場の騰貴を見込みて買ふこと。

おもはくーし 思師 (名) 思はく買をなす人。おもいりし(思入師)。おもはくすぢ。

おもはくーすぢ 思筋 (名) 前條に同じ。

おもはくーちがひ 思違 (名) おもはくのちがふこと。考への相違すること。おもひちがひ。世間娘氣質「そなたと我れ等とは、大分の思はくちがひ」

おもはくーばなし 思話 (名) 思ふ所ありての話。柗狩劍本地「姫君の心を掛んでの思はく咄」

おもはし 思 (形シク) 一思ふべくあり。二好しと思はる。のぞましく思はる。面白く考へらる。枕「ただなるだに、いとしもおもはしからぬ人の、にくげどとしたる」著聞「夜もすがら語らひなぐさぶに、おもはしき事限りなし」

おもはしーけ 思氣 (副) 思はしさう。このもし人に思ふやう。榮華「いとおもはしげに打ちゑみ見やりきこえさせ給へるもをかしう思ふ」

おもはしーさ 思 (名) 思はしくある度合。思はしきさま。宇治拾遺「ゆゆしく心うくおぼえて、娘の思はしさもうせぬ」

おもはしら 主柱 (名) 〔建築〕袖柱などに對して、大柱の稱。

おもはーず 不思 (副) おもひがけなく。思ひの外。意外。土佐日記「此のわらは中略かくはいふものか、うつくしければにやあらん、いとおもはずなり」宇津保祭使「きのふ思はずなりしかば、うしろめたくやとぞ」源氏若菜「たがふべくもあらぬ心のしるべを、思はずにもおぼめい給ふかな」

おもはーずしらず 不思不知 おもはず(不思)に同じ。狂言「我がまやで隣の牛の子を生みて、思はず知らず牛の子を取る」

おもはずがほ 不思顔 (名) おもはずげなる顔つき。意外らしき様子。出觀集「しのびねの思はずがほやしるからん、君がけしきのただならぬかな」

おもはずーけ 不思氣 (副) 思ひがけぬさま。意外げ。著聞「近くよりてあひしらふに、此の人思はずげに思ひて、ひきしのぶを」平家「小一門の人人、皆思はずげにぞ見給ひける」

おもはせーびと 令思人 (名) 人に慕はるる人。望みを嘱せらるる人。思儘日記「中務の親王常代の宮にて、世のおもはせ人のもてなし知ふこと限りなし」

おもはせーぶり 令思振 (名) 人に、其れならんと思はする擧動をなすこと。釋迦如來誕生會「しみじみと、好い中中の思はせ振り」

おもはくそ 面黒子 (名) 古語。顔のはくそ。面にできたるほくろ。和名三類抄「黡(ハクソ)面黒子也」

おもはぶ (他動上) 思はる。一說、思ひ合ふの約。古義 萬「しほぶねのへこそ白波、にはしくもおふせたまほか、於母波弊(ハベ)なくに」十訓「大臣・大將にのぼらず、其れをおもはへて公任卿申さるるか」

おもはゆ 思 (他動上) 古語。思はる。萬「はろばろに於忘方由流(オモハユ)かも、白雲の千へに隔てる筑紫の國は」

おもはゆ 面映 (名) おもはゆし(面映)の語幹。謡知章「おもなや、おもはゆや、はづかしや、あさましや」同定家「おもなや、おもはゆの有様やな」

おもはゆーげ 面映氣 (副) おもはゆさう。はづかしさう。四十二物語「侍從まことに、おもはゆげなるけしきに見えさせ給ふ」

おもはゆーさ 面映 (名) おもはゆき度合。おもはゆくあるさま。

おもはゆし (形シク) 〔面映(オモハユ)しの義〕面を合はすることまばゆく思はる。恥かし。面伏せなり。盛衰記六八「子ながらも、さすがあの顔に、物の具して相向かはん事おもはゆくや思はれけん」

おもはれる 重瞳 (自動下) 顔など、重げに瞳る。世間娘氣質「涙をこぼし中略不瞬、目のはたおもはれて、好かぬ事と」

おもーひ (名) みもひに同じ。みづ(水)をいふ、宮女の語。赤染衛門集「小船にをのこ二人ばかり乗りて澄ぎわたるを、何ゐるぞと問へば、冷やかなるおもひを汲みに、沖へまかるぞといふ」

おもひ 思 (名) 一おもふこと。考へ。思慮。所存。神代紀上「有思慮(オモヒバカリ)之智」二ねがひ。希望。源橋姫「耳かしがましき川のわたりにて、静かなるおもひにかなはぬ方もあれど」三いつくしむこと。懇ひ慕ふこと。戀愛。萬「まそ鏡清きつく夜のゆつりなば、念(オモ)はやまじ、戀こそまさめ」竹取「限りなきおもひに燒けぬかはごろも、袂かわきて今日こそは見め」勢語「さる間に、おもひはいやまさりにまさる」四愛ひ。もものおもひ。心配。萬「遊ぶうちのたぬしきには、梅柳折りかざしては意毛比(オモヒ)なみかも」宇津保忠こ「此の殿人は、泣きわぶることも知り給はず、ことなるおもひなき人の」五おしはかり。推量。神武紀「出其不意(オモヒモヒ)」勢語「おもひのほかに、御ぐしおろし給ってけり」六怨み。執念。一念。「人の思ひが祟る」七喪にこもること。又、その間。喪中。繰靖紀「諒闇(オモヒ)」古今哀傷「母がおもひにてよめる」同詞「女の親のおもひに侍りける頃」

おもひ なかば に すぐ 思過半 考へて、自ら得る所多し。易經繫辭「知者觀其彖辭則思過半矣」

おもひ の いへ 思家 〔思ひのひを火にかけていふ〕くわたく(火宅)を見よ。拾遺哀傷「世の中に牛の車のなかりせば、おもひの家をいかで出でまし」

おもひ の いろ 思色 一〔思ひの**ひ**を火にかけていふ〕紅の色。古今雜體「耳無の山のくちなしえてしがな、おもひの色の下ぞめにせん」二思ひたる色目。思ひたるやうす。長町女腹切「心くらべのつれびきに、思ひの色を忍び駒」

おもひ の かすみ 思霞 思ひの濃りたるを、霞の空をおほふにたとへていふ語。源氏十二段長生島臺「情を受け、もはや思ひの霞もはれ」

おもひ の きづな 思絆 人の心の情につながるること。心のほだし。情緒。謡天鼓「生生世世も、いつまでの思ひのきづな長き世の、くるしみの海に沈むとかや」

おもひ の けぶり 思烟 〔おもひの**ひ**を火にかけていふ〕思ひこがるるを火にはしくも譬へて、其の烟。拾遺恋「空に満つおもひのけぶり雲ならば、ながむる人の目にぞ見えまし」

おもひ の そこ 思底 思ひの最も深き處。夫木「今はとて鳴はたつなり秋の夜の、思ひのそこに露は殘りて」

おもひ の たけ 思丈 思ひのありたけ。意中にある限り。「思ひのたけをくどきたつ」

おもひ の たね 思種 心配の種。苦勞のもと。忍音物語「ほのかに見奉る人の、あぢきなき思ひの種となるは、ことわりぞかし」

おもひ の つな 思綱 おもひのきづな(思絆)に同じ。六帖「限りなき思ひのつなのなくばこそ、まさきのかつらよりもなやまめ」

おもひ の つま 思端 思ひを起こす緣。思ひを起こす端緒。

おもひ の ひ 思火 心の中の、燃えたつ如く苦悶すること。謡天鼓「孔子は鯉魚に別かれて、思ひの火を胸に焚き」

おもひ の ふち 思淵 思ひを河海に譬へて、其の最も深き處。深き思ひ。大神宮法樂千首「わたつみも深き限りはありつべし、思ひの淵ぞそこ知られず」

おもひ の みち 思道 深く思ひ入るを道にたとへていふ語。夫木「ゆく末のをだえの橋は聞くもうし、おもひの道の奥も知られて」

おもひ の やま 思山 思ひのつのりたるを山にたとへていふ語。夫木「あはれ我がおもひの山を築きおかば、富士の高ねもふもとならまし」

おもひ の やみ 思闇 思ひの爲めに、思慮の暗くなること。謡元服「雲井の鶴は月影のさやけき空と思へども、それも子をのみ思ひの闇に、摩をかはして鳴くとかや」

おもひ も かけ ず おもひがけず(思不懸)に同じ。おもふ(思)の條を見よ。後拾遺春上「梅がえを折ればつづれる衣手に、思ひもかけぬ移りがぞする」

おもひ も よら ず 思ひよらず。思ひつかず。思ひがけず。源東屋「にはかにかく、おぼしたばかるらんとはおもひもよらず」

おもひ を かく 懸思 一思ひを其の方に向く。おもひかく。爲忠百首「夜もすがらよそにながめし言の葉に、つゆも思ひをかけぬまぞなき」二心配をかく。謡船遊「情ある者ならば、自らが名をもくたし、母御に思ひをかけ申す事よもあらじ」

おもひ を たく 〔思ひの**ひ**を火にかけていふ〕胸をこがす。煩悶する。保憲女集「ある時に胸におもひをたきて灰に書きつくれば、烟となりて雲とともに亂るる」

おもひーあかす 思明 (他動四) 思ひつつ夜を明かす。枕「いでまことにうれしき事のよべ侍りしを、心もとなく思ひあかしてなん」

おもひーあがる 思上 (自動四) 心けだ

かくなる。たかくとまる。おもひのぼる。源桐壺「初めより我れはとおもひあがり給へる御方方、めざましきものにおとしめそねみ給ふ」大和物語「いといたう人人けさうじけれど、おもひあがりて、男などをせでなんありける」

おもひ-あく 思厭（他動四）心に厭く。いやに思ふ。源帚木「などて、見るめにより人をもおもひあき、又さるまじきに心をもまどはすべきぞ」

おもひ-あたる 思當（他動四）げにと思ひ合はさる。思ひつかる。考へつかる。狂言「一つ二つ云うて見ませう、思ひあたったら、答へさっしやれえ」

おもひ-あつ 思當（他動二）かんがへあつ。思ひつく。源夕顔「いとしるく思ひあてられ給へる御そばめを見すぐさで」

おもひ-あつかふ 思扱（他動四）一心に入れて世話す。源手習「よき君たちを聟にして思ひあつかひけるを」二思ひわづらふ。思ひなやむ。源總角「いかで人人しうも見なし奉らんと、思ひあつかふをこそ」曾丹集「のどかにて涼しかりけり夏の日も、思ひあつかふこともなき身は」

おもひ-あつむ 思集（他動下）かずかず思ふ。種種の事を思ふ。蜻蛉日記「つくづくと臥して、思ひあつむることどもを、いなきまで多かるを」源紫「ことら思ひあつめ給へるつらさも消えぬべし」

おもひ-あて 思當（名）思ひあつること。推しあて。あてずゐりやう。宇津保埋木「もしそれにやあらんと、思ひあてに、傳へ聞くやうなんめりし」

おもひ-あてる 思當（他動下）おもひあつ（思當）の口語。

おもひ-あなづる 思侮（他動四）大事と思はず。輕蔑す。枕「車中縣寄せておるべきものと、思ひあなづりたるに」

おもひ-あはす 思合（他動下）此れと彼れとによりて思ひつく。考へつく。源夕顔「少將も見つけて、われなりけりと思ひあはせば」同手習「ものけもさこそ云ふなりしかと、おもひあはするに」

おもひ-あはせる 思合（他動下）前條の口語。

おもひ-あふ 思合（自動四）一相思ふ。互ひに思ひ慕ふ。砂石集「男女の中らひ、思ひあへるばかりを、敬愛なんと思ひならはし侍り」二偶然、考へが一致す。狂言三人百姓「これは思ひあうた事ぢや。身共のみたちも是れぢやは」

おもひ-あまり 思餘（名）思ひあまること。玉葉「身のうきに思ひあまりのはてはては、親さへつらきものにぞありける」

おもひ-あまる 思餘（自動四）思案にあまる。思案につきる。萬「思賺（オモヒ）いともすべなみ、玉だすき畝傍の山に我がしめゆひつ」勢語「昔男、ふして思ひ起きておもひ、思ひあまりて」

おもひ-あらたむ 思改（他動下）おもひをあらたむ。考へなほす。源總角「いとよくきこえさすれど、さはえおもひあらたむまじき」

おもひ-ありく 思ひつつ過ぎ行（自動四）く。源紅葉「此の宮をだにけぢかくも見奉らばやと、おもひありくに」

おもひ-あわつ 思周章（自動下）心にあわつ。榮華「いかなるべき事にかと、思ひあわてたり」

おもひ-いこふ 思息（自動四）おもひやすむ（思息）に同じ。萬「人みなの念息（オモヒ）て、つれもなくありしあひだに」

おもひ-いそぐ 思急（自動四）心いそぐ。氣がせく。源紅葉「内參りや何やと、我が方ざまをのみ思ひいそぐやうなるも心ぐるし」

おもひ-いだす 思出（他動四）おもひいづ（思出）に同じ。發心集「一心に信仰しける時、此の水瓶を思ひ出だして」

おもひ-いたづく 思勞（他動四）心配す。苦勞す。源浮舟「さばかり、うへの思ひいたづききこえさせ給ふものを」

おもひ-いたり 思至（名）おもひいたること。源總角「あまたの人の親になり給ふままに、思ひいたり深く、ものをこそのたまひなりにたれ」

おもひ-いたる 思至（自動四）心ゆきわたる。思ひ及ぶ。源帚木「もとより思ひいたらざりけることにも、いかでこの人のためにはと、無き手を出だし」

おもひ-いづ 思出（他動下）前にありし事を再び思ひ起こす。忘れたる事を考へつく。おもひいだす。萬「思出（オモヒ）時はすべなみ、とよ國のゆふ山雪のけぬべくおもほゆ」古今戀四「思ひいでて戀しき時は、初かりの鳴きて渡ると人知るらめや」

おもひ-いで 思出（名）思ひいづること。おもひで。澤松「后をばかけても知らせで、ただゑうしうのうちにある下臈などのやうにて見せ聞かせて、わが身の思ひ出でに思はせんとおぼし定めぬ」續古今雜上「ながらへば我が世の春の思ひいでに、語るばかりの花櫻かな」

おもひ-いでがほ 思出顔（名）思ひ出でたるやうの樣子。枕「すすき中縣昔おもひ出でがほになびきて」

おもひ-いでぐさ 思出種（名）おもひいでとなるべき種。忠岑集「春の野は生ひぬものなく見ゆれども、思出草はなき世なりけり」

おもひ-いとなむ 思營（他動四）心にかけて世話をなす。ねんごろに經營す。源柏木「おもひいとなみつかうまつる御うぶやの儀式、いかめしうおどろおどろし」

おもひ-いらる 思苛（自動下）いらいらしく思ふ。心にいらつく。源夕顔「程へにけるが、思ひいられ給はぬにしもあらぬに」

おもひ-いり 思入（名）思ひ入ること。又、思ひ入りたる人。思ひ人。今宮心中「なぜに女房持ちやらぬ。但し、どこぞに、思ひ入りがな有るかいの」

おもひ-いる 思入（自動四）深く思ひ込む。一途に考へこむ。心にかかる。勢語「昔男、京をいかが思ひけん、ひんがし山に住まんとおもひいりて」宇津保俊蔭「今は限りに思ひ入りにし山路を、今更に思ひ給へ歸らんそらもはづかしう侍るべき」枕「いたく思ひ入りたるけしきにて」

おもひ-いる 思入（自動下）前條に同じ。源夕顔「つらきもうきも、かたはらいたき事も、思ひ入れたるさまならで」同總「この度の司召しにももれぬれど、いとしも思ひ入れず」月清集「皆人の世にふるさまぞあはれなり、思ひいるるも思ひいれぬも」

おもひ-いれ 思入（名、副）一思ひ入ること。心をかくること。世間娛氣質「もとより娘は、芝居者に思ひ入れあっての男僧みたれば」二演劇の語。無言の間に、情意を表示する俳優のしぐさ。三

思ふさま。思ふ存分。おもいれ。

おもひ-う 思得（他動下）思ひつく。考へ出でく。枕「かへし中縣よく思ひえたらんに、いひにくし」源帚木「わが心とおもひうることなく、ふかきいたりなからんは」

おもひ-かる 思浮（自動下）心そらになる。源橋姫「今はじめてかはり給ふにもあらず。年頃思ひうかれ給ふさま、聞きわたりても久しくなりぬるを」

おもひ-うた 思歌（名）思ひを述べたる歌。天網島「「思ひ思ひの思歌」

おもひ-うたがふ 思疑（他動四）心に疑ふ。疑はしく思ふ。勢語「男、こと心ありてかかるにやあらんと、思ひうたがひて」

おもひ-うづむ 思埋（自動四）思ひ込む。持統天皇歌軍法「其の時の戀しさが魂に凝り固まり、思ひ埋み雪折れ竹」

おもひ-うつる 思移（自動四）心、他へ移る。源總角「さればよ思ひうつりにけりと、うれしくて」赤染衛門集「何にかは心もとらんすまひ草、思ひうつるにかたこそあるらめ」

おもひ-うとむ 思疎（他動四）うとく思ふ。うとんず。疎外す。宇津保藤原君「我が住めらんに、めす忘たらば思ひうとみなんとのたまひて、待ちおはしますに」

おもひ-うむ 思倦（他動四）いやに思ふ。心にあく。おもひうんず。新拾遺哀鬼「今日とてもいそがれぬかな、なべて世を思ひうみにしたなばたの絲」

おもひ-うらがる 思裏枯（自動下）心にさびしく思ふ。萬「わがせこに我が戀ひをれば、わがやどの草さへ思浦萎（オモヒウラガレ）にけり」

おもひ-うらぶる 思ひわぶ。萬（自動下）「ぬえ鳥のうらなけしつつ、した戀に於毛比宇良夫（オモヒウラブ）」

おもひ-うんず 思倦（自動變）心倦む。いやに思ふ。宇津保彦「まじらひのついでにも、ことなき人なれば、思ひうんずべき事もあらじ」勢語「世の中を思ひうんじて」

おもひ-える 思得（他動下）おもひう（思得）の口語。

おもひ-おき 思置（名）思ひおくこと。思ひ殘し。傾城反魂香「藤野が「ああいまいまし、老木の末の思ひおきはよしなやな」

おもひ-おきつ 思掟（他動下）心に定む。

おもひ-おく 思置（他動四）一心に定めおく。源帚木「ものまめやかに靜かなる心の趣きならんよるべをぞ、つひのたのみ所にはおもひおくべかりける」二あとに心を殘す。思ひ殘す。拾遺戀二「つゆばかりたのむる事もなきものを、あやしや何に思ひおきけん」新古今雜「思ひおく人の心にしたはれて、露わくる袖のかへりぬるかな」

おもひ-おくる 思後（自動下）心劣る。源若紫「古（より）ほい深き道にもたどり薄かるべき女方にだに、皆おもひおくれつつ」

おもひ-おこす 思起（他動四）一强ひて心を奮ひ起こす。思ひ立つ。竹取「からうじて思ひおこして、弓矢とりたてんとすれども」枕「稻荷に思ひおこして參りたるに」二おもひいだす。考へだす。

おもひ-おこす 思遣（他動下）おもひやる（思遣）に同じ。源鈴鹿川「やそせの波に濡れぬれず、伊勢までたれか思ひおこせん」

おもひ-おごる 思驕（自動四）心おごる。心高ぶる。源紅葉「わが御願君たちを、人に劣らじとおもひおごれど」

おもひ-おとす 思貶（他動四）劣れりとなす。思ひくたす。見さげる。宇津保菊宴「かんつけの御子など。思ひおとし給へるをなん、ねたくおもほゆる」枕「あまたあるが中に、この君をば思ひおとし給ひてや、憎まれ給ふよなど、あらぬかにいふ」

おもひ-おとる 思劣（自動四）自ら劣れりと思ふ。卑下す。源紅葉「さりとて、思ひおとり、ひげせんもかひなかるべし」

おもひ-おもひ 思思（副）各の思ひのまま。こころごころ。てんでん。各自。宇津保俊蔭上「秋中縣おもひおもひの蟲の聲」同國上「今は限りなめりとて、おもひおもひに渡り給ひしなかに」

おもひ-およぶ 思及（自動四）思ひを及ぼす。考へつく。源行幸「宮仕へはさるべきすぢにて、上も下も、思ひおよび出でたつこそ心だかきことなれ」

おもひ-かかる 思掛（自動四）心がよる。心がかかる。夫木「花の色はためしもなきを、いかにして思ひかかれる峯の白雲」

おもひ-かぎる 思限（他動下）おもひきる。心を絶つ。源手習「今はかかる方におもひかぎりつるありさまになん」

おもひ-かく 思懸（自動下）心をかく。思ひよる。宇津保藤原君「思ひかくまじき人に、ものきこえなどして」勢語「むかし男、おもひかけたる女の、え得まじうなりてのよに」

おもひけ-なし 思懸無（形）かねて思ひ居らず。おもひまうけず。おもかけず。意外なり。

おもひ-かしづく 思傅（他動四）心にかけて大切にかしづく。源橋姫「是れを限りなくあはれと思ひかしづき聞こえ給ふに」

おもひ-かたむ 思固（他動下）心にしかと定む。固く決心す。六百番歌合「逢ひ見しを思ひかたむる中なれや、かく解けがたき下紐の關」發心集「諫めけれど更にゆるぎなく、思ひかためたる事と見えければ」

おもひ-がなし 思悲（形）心悲しく思ふ。萬「旅なれば思ひたえてもありつれど、家にあるいもし於母比我奈之（オモヒガナシ）も」

おもひ-かぬ 思兼（他動下）一堪へがたく思ふ。萬「いもを思ひいの寢らえぬに、秋の野にさをしか鳴きつ、つま於毛比可禰（カネ）て」萬「戀ひつつも居らむとすれど、ゆふま山かくれし君を於母比可禰（カネ）つも」二思ひつかず。考へ及ばず。萬「しらぎへか家にか歸るゆきの島、行かむたどきも於毛比可禰（カネ）つも」

おもひ-がは 思川（名）思ひの深き、又暫くもやむことなきを、川に准らへていふ語。後撰戀二「思ひ川たえず流るる水の泡の、うたかた人にあはで消えめや」

おもひ-かはす 思交（自動四）互ひに心をかよはす。思ひ合ふ。勢語「むかし男女、いとかしこく思ひかはして、こと心なかりけり」枕「思ひかはしたる若き人の中に、せくかたありて、心にしもまかせぬ」

おもひ-かはる 思變（自動四）心變は

る。源浮舟「我れは年ごろ見る人をも、皆おもひかはりぬべきここちなんするとの給ひしを」同夕顔「かれがれにとだえおかん折りこそは、さやうにおもひかはることもあらめ」

おもひ-がひ 思甲斐（名）心配したるしるし。思ひたるかひ。萬代巻五「れたし我れよそにのみ見ん櫻花、おもひがひなくこぞも散りにき」

おもひ-かぶ 思替（他動ハ下二）思ひなほす。考へをかふ。玉葉巻三「さびしさを世のうきかたに思ひかへて、み山の月をひとり見るかな」

おもひ-かへし 思返（名）一おもひかへすこと。天鄰島巻五「をなごは我れ人、一むきに思ひ返しのないもの」二おもひざしに對して返盃すること。曾我八巻「結「軸經盃おもひがへしとて、十郎にさしたりければ」

おもひ-かへす 思返（他動四）考へなほす。前の思ひを改む。枕六巻「よしなよしなの關こそ、いかにおもひ返したるならんと、いと知らまほしけれ」源巻五「をかしきさまを見え奉りても、何にかはなるべきなど、おもひかへすなりけり」

おもひ-かへる 思返（自動四）思ひがもとへかへる。考へがもとの如くになる。後撰巻六「人をいひわづらひて、こと人にあひ侍りてのち、いかがありけん、はじめの人に思ひかへりて、程へにければ」

おもひ-がほ 思顔（名）思ひたる顔つき。枕「さすがになどてかはと、思ひがほにえ去らぬは、憎ささへ添ひぬ」

おもひ-かまふ 思構（他動ハ下二）心にくはだつ。計畫す。源玉鬘「いみじきことをおもひかまへて出でたつ」

おもひ-かろむ 思輕（他動ハ下二）かろく思ふ。大切に思はず。新六帖五「命だに思ひかろめてすぐす身に、名の立つことの何かうらみん」

おもひ-きって 思切（副）斷然と心を定めて。狂言「しどろ方聟「許すほどに、思ひきって呼うで見よ」

おもひ-さほふ 思競（自動四）互ひに負けじとおもふ。源蜻蛉「われもいかで、人よりさきに深き心ざしを御覽ぜられんとおもひきほふ」

おもひ-き-や （句）豫ねて思ひがけやうや、思ひがけず。豫期せざりき。乘仁紀「豊期（オモヒキヤ）、獨凌巻「更向本土乎」古今雜下「忘れては夢かとぞ思ふ、思ひきや雪踏みわけて君を見んとは」

おもひ-さゆ 思消（自動ハ下二）心も消えんとするばかりに思ふ。古今冬「白雪のふりて積もれる山里は、住む人さへやおもひきゆらん」

おもひ-きり 思切（名）思ひ切ること。斷念。あきらめ。聖德太子繪傳記「「とくとく首を刎ねられよと、敵の詞に隙かゆ薄、穂にあらはれて思ひ切り」浮世風呂「思ひ切りのわるい」

おもひ-きる 思切（他動四）一思ひを絶つ。あきらむ。斷念す。新六帖「かたの木こるたつきの斧の柄を弱み、思ひきられぬ世こそつらけれ」生玉心中「「思ひ切れとは死ねとの事か」二斷然と志を定む。決心す。保元「「中略ひたひたと打ち乘って、喚いて驅け入れども」砂石集「たとひいかなる恥ぢがましき事ありとてもいかにせんぞと、思ひきりて」

おもひ-ぐさ 思種　思草（名）一思ひの種を、草に寄せていふ語。萬十「道のべのをばながもとの思草（オモヒグサ）、今さらさらに何か思はむ」二思ひ人。思ひもの。傾城島原蛙合戰「「更科とて桔梗がもとの大夫職、七草四郎が思ひぐさ」

おもひ-ぐさ 思草（名）（植）一なんばんぎせる（野菰）の異名。二をみなへし（女郎花）の異名。行宗集「女郎花。をみなへし同じ野邊なるおもひ草、いま手枕にひき結びてん」藏玉「思草。女郎花。たれか折る嵯峨野の原の思ひ草、われなきならば花は咲くらん」三すすき（芒）の異名。藏玉「思草中略天智天皇草名異名に」四しをん（紫苑）の異名。藏玉「思草中略天智天皇草名異名に」五さくら（櫻）の異名。藏玉「思草中略又櫻をも能因法師は詠ぜり」六りんだう（龍膽）の異名。定家卿「ちがや（茅）の異名。藏聖草」八なでしこ（撫子）の異名。藏聖草」九つゆくさ（鴨跖草）の異名。藻鹽草「思草は露草をいふよし、八雲御抄に見えたり」十たばこ（烟草）の異名。丹波巻作「「相合ぎせる、思ひ草思ひし甲斐も夏の蛾」

おもひ-くす 思屈（自動四）おもひくつす（思屈）に同じ。狭衣「日どろよろづに思ひくしたりつる人人も、打ちやすみて心ゆるびしたる夕ぐれの程に」

おもひ-くだく 思碎（自動ハ下二）種種に思ひ亂る。いろいろに考へらる。宇津保俊蔭「ちぢにおもひくだくれど、の給ふべき人しなければ、心にこめてありへ給ふ」狭衣「「ここらの年ごろ、わが思ひくだけつるすぢは、はるかなるにこそはとうち思ふは」

おもひ-くだく 思碎（他動四）種種に思案す。氣をもむ。源柏木「つひにかくかけとどめ奉り給へるものをなど、とりあつめて思ひくだくに中略え忍ばぬ折り折りもありきかし」

おもひ-くたす 思腐（他動四）わろく思ひなす。心にけなす。思ひおとす。宇津保俊蔭「くちをしきしなに思ひくたし給ふとも、ことわりのがれどころなくこそあらめ」源巻五「それしかあらじと、そらにいかがは推しはかりおもひくたさん」

おもひ-くつ 思朽（自動ハ上二）思ひつつ朽ちはつ。思ひを表はさずして終はる。續後拾遺巻「「くちなしの下ぞめごろも下にのみ、いはでやつひに思ひくちなん」

おもひ-くつす 思屈（自動四）おもひよわる。心むすぼる。おもひくんず。源椎本「いかにうひうひしくふるめきたらんなど、思ひくつし給へり」

おもひ-くづほる 思崩（自動ハ下二）思ひ屈す。失望落膽す。源桐壺「宮仕へのほい必ず遂げさせ奉れ、我れなくなりぬとて、くちをしう思ひくづほるな」

おもひ-ぐま 思隈（名）心のすみずみまで行きとどくこと。おもひやり。濱松「「おもひぐまありて、心ぐるしうものせさせ給ふべきなりとて」夫木「「おもひぐまの人はなかなかなきものを、哀れに犬のぬしを知りぬる」

おもひぐま-な 思隈無（名）次條の語幹。宇津保俊蔭「「との給へば、おもひぐまなとて、あぜちの君に、山のありつるやうなど、御物がたりし給ふ」

おもひぐま-なし 思隈無（形）一心過ぐ行き渡らず。思ひやりなし。枕「「おもひぐまなく惡しうしたりなど、例の女のやうにいはんとこそ思ひつるにとて」源竹川「櫻ゆ五風に心のさわぐかな、おもひぐまなき花と見る見る」二思ひびがひなし。千載秋上「「おもひぐまなくても年のへぬるかな、物いひかはせ秋の夜の月」

おもひ-くゆ 思悔（自動ハ上二）悔い思ふ。後悔す。萬十「さねぬ夜は千夜もありとも、わがせこが思可悔（オモヒクユベキ）心は持たじ」

おもひ-くらし 思暮（名）思ひくらすこと。古今雜五「今こんといひて別かれしあしたより、思ひくらしのねをのみぞなく」

おもひ-くらす 思暮（他動四）思ひつつ日を暮らす。萬十「あひ思はぬいもをやもとな、すがの根の氷き拳びを念晚（オモヒクラセ）む」

おもひ-くらぶ 思比（他動ハ下二）くらべて考ふ。源賢木「さやうにおもひくらぶる心も、ことになくて」

おもひ-くる 思暮（自動ハ下二）思ひつつ月日暮る。夫木五「思ひくれなげきあかしの濱に寄る、みるめ少なくなりぬべきかな」

おもひ-ぐるし 思苦（形シク）心苦し。心やましく。萬四「ありぎぬのさゑさゑしづみ、家のいもに物いはず來にて於毛比具流之（オモヒグルシ）も」

おもひ-くるぶ 思狂（自動四）思ひ亂る。ものぐるほしきまで思ふ。宇津保豊「あさましき心つきて、よるひるいへど見知らぬやうにて侍れば、思ひくるひて」

おもひ-くんず 思屈（自動サ変）おもひくつす（思屈）に同じ。枕五「むげに思ひくんじにけり、いとわろし」

おもひ-けがす 思穢（他動四）思ひおとす。さげすむ。盛衰記「六代「「成經を預け置き給はずば、二心有る者と思し召すにこそ。後聞き者ぞと思ひ穢され奉りて世に立ち廻はりては、何の面目か有るべき」

おもひ-けす 思消（他動四）次條に同じ。雪女五枚羽子板「「今の悲しさ忘れ草、思ひくゆらせ思ひ消し」

おもひ-けつ 思消（他動四）しひて忘る。思ひやむ。源蜻「今日はこの御事もおもひけちて、あはれなる雪のしづくにぬれぬれ行き給ふ」

おもひ-ご 思子（名）かはゆく思ふ子。愛子。宇津保俊蔭「「父母のおもひ子にて、かた時も見え給はねば、おぼしさわぎ給ふ子なり」

おもひ-こがる 思焦（自動ハ下二）あこがれ思ふ。深く思ひ込む。宇津保俊蔭「母君わびしきこといやますまでおぼえて、子のおやにさへなりて思ひこがるるに」

おもひ-こがれる 思焦（自動ハ下二）前條の口語。

おもひ-こす 思越（他動四）越えて先を思ふ。續古今秋上「いでぬまの山のあなたをおもひこす、心やさきに月を見るらん」

おもひ-こぶ 思纏（他動ハ上二）心にかけて懇ひ慕ふ。萬十「心には火さへ燃えつつ、於母比孤悲（オモヒコヒ）いきつき餘り」

おもひ-こほる 思零（自動ハ下二）思ひに堪へかねて表へ現はる。當流小栗判官「しばし詞も無かりしが、思ひこぼれてつっと寄り」

おもひ-こみ 思込（名）おもひこむこと。おもひこみたること。

おもひ-こむ 思込（自動四）深く思ひ入る。因く心に決す。曾我五人兄弟小袖「「「

て忘れず。深く思ひ込む。宇津保蔵開「いかに見給ふらんなどおもほしいりて、とばかり思ひしみ給ひて」枕「少將といひける人の、年ごとに舞人にて、めでたきものに思ひしみけるに」

おもひ-しむ 思染 (他動下) 深く心にしみこます。源蜻「昔よりおもひしめきこえてし心の思ひなしにや、さまことにいみじうねびまさり給ひにけるかな」同夕「思ひしめてしことは、更に御心に離れねど」

おもひ-しめる 思濕 (自動四) 思ひしづむ。愁へにしづむ。源若菜上「衛門督は、いといたく〳〵おもひしめりて」同少女「女御の、世の中おもひしめりてものし給ふを、心ぐるしう胸いたきに」

おもひ-しる 思知 (他動四) 一心に覺る。知る。古今雜名「散りぬればのちはあくたになる花を、思ひしらずもまどふ蝶かな」同秋下「み山よりおちくる水の色見てぞ、秋は限りと思ひしりぬる」源宮木「世の中をまだ思ひしらぬほどよりは、ざればみたる方にて」二覺えておく。考へて其れと思ひ當つ。源桜蔭「其れは御中の恨み解けざりしほど、思ひしれとにこそありけめ」平家「藤王「此の事、殿下に思ひ知らせ奉らでは、えこそ有るまじけれ」

おもひ-しをる 思萎 (自動下) おもひしなゆ。おもひくんず。源賢木「せうそこなどもせで久しく侍りしに、むげに思ひしをれて心ぼそかりければ」續古今秋上「何事をしのぶの岡のをみなへし、思ひしをれて露けかるらん」

おもひ-すぐ 思過 (他動上) おもひすごす(思過)に同じ。萬廿「朝よひごとにたつ霧の、於毛比須疑」

おもひ-すぐし 思過 (名) おもひすぐすこと。おもひすごし。

おもひ-すぐす 思過 (他動四) おもひすごす(思過)に同じ。萬廿「雲ゐなす心もしぬに、たつ霧の於毛比須具佐」

おもひ-すごし 思過 (名) おもひすごすこと。考へすごすこと。おもひすぐし。過慮。

おもひ-すごす 思過 (他動四) 一一通りに思ひつつ過ごす。冷淡にすごす。萬「こすげろの浦吹く風のあとすすか、かなしけ子ろを於毛比須吾佐」二保分の事まで考ふ。考へすごす。

おもひ-すつ 思捨 (他動下) 見捨つ。心を離す。源少女「かかる人をも、人は思ひすて給はざりけり」後撰雜三「うけれども悲しきものを、ひたぶるに我れをや人の思ひすつらん」

おもひ-すてる 思捨 (他動下) 前條の口語。

おもひ-すます 思澄 (他動四) 一一静かに思ふ。おちつきて考ふ。源賢木「いみじき物の上手の、心の限り思ひすまして、しづかに書き給へるは譬ふべきかたなし」二俗世を離れて、行ひ澄ます。源蜻「世を思ひすましたる尼君たちの見るらんも、はしたなければ」

おもひ-そぶ 思添 (自動四) おもふ上になほ思ふ。夫木三「秋風に波しばの野のよるよるは、思ひそふとや鹿の鳴くらん」

おもひ-そむ 思初 (他動下) 心にかけはじむ。思ひ始む。萬廿「一もとのなでしこ植ゑしその心、たれに見せむと於母比曾米」けむ」古今雜四「あすか川淵は瀬となる世になりとも、思ひそめてん人は忘れじ」

おもひ-そめる 思初 (他動下) 前條の口語。

おもひ-たゆ 思絶 (他動下) おもひたゆ(思絶)の口語。

おもひ-たがひ 思違 (名) おもひたがふこと。おもひちがひ。考へちがひ。

おもひ-たがふ 思違 (他動四) おもひあやまる。考へちがひをなす。

おもひ-たがふ 思違 (他動下) 前條に同じ。萬俊集「なほき鳴けいまださつきぞ時鳥、思ひたがへて山へ歸るな」新後撰雜三「いはざりきわが身ふるやの忍草、思ひたがへて種を蒔けとは」

おもひ-たがへ 思違 (名) おもひたがひ(思違)に同じ。

おもひ-たがへる 思違 (他動下) おもひたがふ(思違)の口語。

おもひ-たけぶ 思哮 (自動四) たけく思ふ。勢ひこむ。萬十「ますらをの思多雄備」をして隱せるその妻、あめつちに通り照るともあらはれめやも」

おもひだし-わらひ 思出笑 (名) 前にありし事を思ひ出だして、獨り笑ふこと。

おもひ-だす 思出 (他動四) おもひいづ(思出)に同じ。狂言じ「昔が思ひだされて悲しいに」

おもひ-ただよふ 思漂 (自動四) 思ひ定まらず。心おちつかず。濱松「風さわぐ浪のうへなる船よりも、思ひただよふ何ゆゑにそも」

おもひ-たち 思立 (名) 思ひ立つこと。思ひつき。決心。狂言相「ふん、これは善い思ひたちでござる」一新たに考へを起こす。思ひつく。發意。古今離別「朝なげに見べき君としたのまねば、思ひ立ちぬる草枕なり」源帚木「尼になりぬかし。おもひたつほどはいと心すめるやうにて、世にか〳〵り見すべくも思へらず」二志を定む。決心す。源夕霧「猶世にへじと深うおもひたちて、尼になりなんと思ひむすぼほれ給ふめれば」

おもひ-たつ 思斷 (他動四) おもひきる。あきらむ。斷念す。

おもひ-たのむ 思賴 (他動四) 心に賴む。たのみに思ふ。萬五「人となり出でて、惡しけくもよけくも見むと、大船の於毛比多能無」に」

おもひ-たはる 思戲 (自動下) 心うちとけて戲る。戲れ事をなす。古今秋上「百草の花のもとく秋の野に、思ひたはれん人な咎めそ」

おもひ-たむ 思溜 (他動下) 心に多くたくはへて思ふ。後拾遺雜五「みちのくのあだちのま弓、君にこそ思ひためたることは語らめ」

おもひ-たゆ 思絶 (他動下) 思ひきる。あきらむ。おもひたつ。萬廿「旅なれば於毛比多夢」てもありつれど、家にあるいもし思ひがなしも」後撰雜三「今はただおもひたえなんとばかりを、人づてならでいふよしもがな」

おもひ-たゆむ 思弛 (自動四) 心に油斷す。心ゆるぶ。金葉雜上「いつをいつと思ひたゆみて、かげろふのかげろふほどの世をすごすらん」

おもひ-たわむ 思撓 (自動四) 思ひしをる。思ひしたゆ。萬十「見に行かむよしの無ければ、ますらをの心はなしに、たわやめの念多和美」てたもとほり我れはぞ戀ふる、船梶をなみ」

おもひ-ちがひ 思違 (名) 思ひちがふこと。思ひちがひ。

おもひ-ちがふ 思違 (他動四) おもひたがふ(思違)に同じ。

おもひ-ちがふ 思違 (他動下) おもひたがふ(思違)に同じ。

おもひ-ちがへ 思違 (名) おもひちがひ(思違)に同じ。思違。おもひたがへ。

おもひ-ちがへる 思違 (他動下) おもひちがふ(思違)の口語。

おもひ-づ 思出 (他動下) おもひいづ(思出)に同じ。記中「もとへは君を於母比傳」なれど、末へはいもを於母比傳」、いらなけくそこに於母比傳」、かなしけくここに於母比傳」

おもひ-つき 思附 (名) 思ひつくこと。考へ。工夫。俗耳鼓吹「俄は思ひなんだなんだと問はれて、思ひつきの事をいふ是れなり」

おもひ-つく 思附 (他動四) 一一考へ起こす。心づく。「よい事を思ひつく」二前ありし事に想ひ及ぶ。思ひ中つ。三慕ふ心つく。心を寄す。萬十三「藤波の思ひまつはし、若草の思就」にし君がめに」宇津保俊蔭「あはれにいみじく心細げなるけしきを見給ひしより、思ひつきにしを」

おもひ-つく 思附 (他動四) 前條に同じ。右京大夫集「枕にも人にも心思ひつけて、なこりや何と君ぞいひなす」

おもひ-つくす 思盡 (他動四) 十分に思ふ。風雅雜三「思ひつくす心よ行きて夢に見ゆな、そをだに人の厭ひもぞする」

おもひ-つける 思附 (他動下) おもひつく(思附)の口語。狂言雜「いや、思ひつけた事がござる」

おもひ-つづく 思續 (他動三) 絶えず思ふ。引きつづき思ふ。源賢木「心えぬすぐせ打ち添へりける身を思ひつづけて」

おもひ-つづける 思續 (他動下) 前條の口語。

おもひ-づま 思妻 (名) 一大切に思ふ妻。かはゆく思ふ妻。記下「なかさだめる於母比豆麻」あはれ」萬十「奥山のいはもとすげの根ぶかくも、おもほゆるかも、わが念妻」は」二大切に思ふ夫。諸人物語「思はぬ人を思ひづまの、あとを慕ひてのぼり瀬の」

おもひ-つむ 思積 (自動四) 思ひかさなる。萬三「筑波れのよけくを見れば、長きけに念積」こし憂ひはやみぬ」

おもひ-つむ 思詰 (他動三) 一極度まで思ひ込む。勢語「いかでものごしに對面して、おぼつかなくおもひつめたる事、少しはるかさんと云ひければ」二思ひ込みて決心す。曾我扇八景「おお、思ひ詰めたる御心體」

おもひ-つめる 思詰 (他動下) 前條の口語。

おもひ-つもり 思積 (名) 思ひ積むこと。かずかず思ふこと。續千載雜下「年をのみ思ひつもりの沖つ浪、かけても世をば恨みやはする」

おもひ-つよる 思强 (自動四) 思ふ心いよいよ强くなる。落窪「思ひつよりておき居て、内へ參るべき日みせ」

おもひ-つらぬ 思列 (他動下) 種種の事をならべ思ふ。古今秋上「うきことをおもひつらねてかりがねの、鳴きこそわたれ秋のよなよな」

おもひ-で 思出 (名) 一前ありし事を思ひ出だして、自ら感むること。又、其の物事。古今春上「散りぬとも香をだに殘せ梅の花、戀しき時のおもひでにせん」同雜「わがよはひ君が八千代にとりそへて、とどめおきてば思ひでにせん」二思ひのとどくこと。心ゆくこと。(後の心を豫めいふ)狭衣「それをだに、この世の思ひでにし侍らん」保元上三條「只今昇殿仕って、冥途の思ひ出にせん」

おもひで-ぐさ 思出草 (名) おもひいでぐさ(思出草)に同じ。

おもひ-でる 思出 (他動下) おもひづ(思出)の口語。

おもひ-とく 思解 (他動四) 考へて疑ひを解く。心に諦る。枕十「人の上云ふ中略思ひ放つまじきあたりはいとほしなど思ひとけば、念じて云はぬをや」相模集「いざやまたさかしきことの見えぬ世に、夢をばいかが思ひとくべき」

おもひ-どち (名) 互ひにおもひ合ひたるどうし。おもふどち。源桜蔭「うへも限りなき御思ひどもにて」

おもひ-とぢむ 思綴 (他動下) おもひやむ。思ひとまる。鴨長「人のたえはてんさまを見はてて思ひとぢめんも、今すこし人わらへにこそあらめ」

おもひ-とどこほる 思滯 (自動四) 思ひきってなすを得ず。源帚木「出家の志はもとより物し給へるを、はかなき事に思ひとどこほり」

おもひ-とどまる 思止 (他動四) 考へてやむ。あきらむ。おもひとまる。

おもひ-とどむ 思止 (他動下) 思ひやむ。思ひ定む。源帚木「此の人をとまりにとも、思ひとどめ侍らず」

おもひ-とほす 思通 (他動四) 常に思ひつつ通す。山家集「うき世とも思ひとほさじおしかへし、月のすみける久方の空」

おもひ-とまる 思止 (他動四) 思ひとどまる。あきらむ。源帚木「見そめつる契りを捨てがたくおもひとまる人は、物まめやかなりと見え」詞花雜上「さびしさに家出しぬべき山里を、こよひの月におもひとまりぬ」

おもひ-どり 思取 (名) 思ふ所ありて、さされたる盃を受くること。(おもひざしの對)曾我六「朝比奈と「その盃思ひどり申さんとて」同六「虎盃を十「その盃義秀飲みて面に下だし、思ひざし・思ひどり、その後は亂舞になる」

おもひ-とる 思取 (他動四) 心にさとる。考へなす。源帚木「世の道理を思ひとりて、恨みざりけり」新古今雜上「ひと方に思ひとりにし心には、なほそむかるる身をいかにせん」

おもひ-ながす 思流 (他動四) 一其れから其れへと思ひつづく。つきつぎにおもふ。源蜻「この世の外の事まで思ひながされ、おもしろさも、あはれさも、殘らぬをりなれ」同夕霧「こよひのあらたなる月の色には、げになほ、わが世のほかまでこそ思ひながさるれ」二思ひを流しすつ。思ひあきらむ。大磯虎稚物語「今かかる身の憂きつらさ、父母の御ためと思ひ流せば悔みもなし」

おもひ-なぐさむ 思慰 (自動三) 心をなぐさむ。新古今雜上「ぬる夢にうつつのうさも忘られて、思ひなぐさむほどぞはかなき」

おもひ-なげく 思歎 (自動四) 悲しみ思ふ。竹取「此の春より思ひ歎き侍るなり」源帚木「いといたく思ひなげきて、はほさじおしかへし、月のすみける久方の空」

おもひ-とる 思取 (他動四) 心にさとる。考へなす。源帚木「世の道理を思ひとりて、恨みざりけり」新古今雜上「ひと方に思ひとりにし心には、なほそむかるる身をいかにせん」

おもひ-ながす 思流 (他動四) 一其れから其れへと思ひつづく。つきつぎにおもふ。源蜻「この世の外の事まで思ひながされ、おもしろさも、あはれさも、殘らぬをりなれ」同夕霧「こよひのあらたなる月の色には、げになほ、わが世のほかまでこそ思ひながさるれ」二思ひを流しすつ。思ひあきらむ。大磯虎稚物語「今かかる身の憂きつらさ、父母の御ためと思ひ流せば悔みもなし」

おもひ-なぐさむ 思慰 (自動三) 心をなぐさむ。新古今雜上「ぬる夢にうつつのうさも忘られて、思ひなぐさむほどぞはかなき」

おもひ-なげく 思歎 (自動四) 悲しみ思ふ。竹取「此の春より思ひ歎き侍るなり」源帚木「いといたく思ひなげきて、は

かなくなり侍りしかば」

おもひ-なし 思做 (名) おもひなすこと。源宮鳥「似かよひたるも、おもひなしにや、あはれなり」同明石「雨などふり、そらみだりたる夜は、思ひなしなることはさぞ侍る」

おもひ-なす 思做 (他動四) 一其れと思ひ定む。心に思ふ。心を其れへ向く。古今物名「人目ゆ𪜈のちにあふひのはるかくば、わがつらきにや思ひたされん」勢語「身をやうなきものに思ひなして」源紫編「女はさこそ忘れ給ふを、うれしきにおもひなせど」二推し量りて其れと定む。源帚木「更にあさくはあらじと思ひなせど」

おもひ-なずらふ 思準 (他動下) 比較して考ふ。おもひよそふ。源若紫「天に生まるる人の、あやしき三つの途にかへるらん、一時におもひなずらへて」

おもひ-なだむ 思宥 (他動三) 次條に同じ。拾玉「身のうさを思ひなだむるかひもなく、さわぎ出でぬる我が涙かな」

おもひ-なだらむ 思宥 (他動三) なだらかに思ひなほす。源若菜上「昔の心ならましかば、うたて心劣りせましを、今は世の中を皆さまざまに思ひなだらめて」

おもひ-なほし 思直 (名) 思ひなほすこと。思ひなほしたること。

おもひ-なほす 思直 (他動四) 考へ改む。考へなほす。枕草子「書きてやりつるのち、もじ一つ・二つなど、おもひなほしたる」源明石「わが思ひのかなふにはあらめなど、おもひなほす」

おもひ-なほる 思直 (自動四) 心改まる。おもひかはる。枕草子「さてのちに袖几帳など取りのけて、思ひなほり給ふめりし」源帚木「つらき心をしのびて、思ひなほらんをりを見つけんと」

おもひ-ならむ 思惱 (自動四) いろいろ考へに苦しむ。思ひわづらふ。狭衣「ひと方になりなばさてもやむべきを、など二みちに思ひなやます」

おもひ-ならふ 思習 (自動四) 一思ひ得。習ひ曉る。勢語「君によりおもひならひぬ、世の中の人はこれをや戀といふらん」二習慣となる。源宮木「また二つなくて、さるべきものにおもひならひたる、ただ人の中こそ」

おもひ-なる 思成 (自動四) 其の考へになる。その心になる。源桐壺「今は亡き人とひたぶるに思ひなりなんと、さかしうのたまひつれど」

おもひ-なる 思慣 (自動下二) 思ふことを習慣となる。新後撰雜中「物をのみ思ひなれたる老いが身に、ねざめせられぬ曉もがな」

おもひ-ね 思寢 (名) 物を思ひながらねること。古今雜三「君をのみおもひねにねし夢なれば、わが心から見つるなりけり」後撰雜三「思ひねの夜な夜な夢にあふことを、ただかた時のうつつともがな」

おもひ-ねざめ 思寢覺 (名) 思ひねのさめたること。新古今哀傷「物をのみ思ひねざめの枕には、涙かからぬ曉ぞなき」

おもひ-ねんず 思念 (他動サ変) 一心に祈る。源桐壺「おのづから若宮などおひ出で給はば、さるべきついでもありなん、命長くとこそ思ひねんぜめ」二心にこらふ。

おもひ-のこし 思殘 (名) おもひのこすこと。おもひおき。

おもひ-のこす 思殘 (他動四) 心を殘す。おもひおく。未練をのこす。源若菜「かかる所に住む人、心におもひのこすことはあらじかしとのたまへば」

おもひ-の-たま 念珠 (名) 〔念珠の字の訓譯〕ねんず(念珠)に同じ。ずず(數珠)。新拾遺雜三「人知れぬおもひの玉のをたえなば、何してあはぬ數をとらまし」

おもひ-の-つゆ 思露 (名) 一なみだ(涙)をいふ。二人の思想を、露にたとへていふ語。風雅序「おのおの、おもひのつゆ光をみがきて、玉をつらね」夫木三「人どとの戀のちくさもかずかずに、おのが思ひの露やかはらん」

おもひ-のどむ 思和 (他動下二) なだらかに思ひなほす。おもひなだらむ。源夕顔「今少しみづからも思ひのどめ、また靜まり給ひなんに參りこん」榮華衣珠「今までとは思ひ侍らざりしを、しばし、いみじき程すぐして、念佛・讀經をも心清くて、思ひのどめ侍りしほどなり」

おもひ-のぶ 思延 (他動下二) 心をゆるぶ。心を和ぐ。萬四「いきどほる心のうちを思延(オモヒ)」

おもひ-の-ほか 思外 (名・副) 一意外なること(歌に多く、思ひのひを火にかけていふ)。景行紀「侍門下「備」非常(オモヒノホカ)」」竹取「なごりなく燃ゆと知りせばかはどころも、おもひのほかにおきて見ましを」二思ひしにはづれて。あてがはづれて。案外。意外。宇津保藤壺「すずろに、思ひのほかなる所にありて」勢語「思ひの外に、御ぐしおろし給うてけり」

おもひ-のぼる 思上 (自動四) おもひあがる。源幾夕「かぐや姫の此の世の濁りにもけがれず、はるかに思ひのぼれる契り高く」

おもひ-の-ま 思儘 (副) 心に思ふ通り。思ふさま。古今雜三「限りなきおもひのままにはるもこん、夢ぢをさへに人はとがめじ」源東屋「いと思ひのままならん人は、今までもたちとまるべくやはある」

おもひ-ば 思羽 (名) 鴛鴦又は孔雀・鴨・雉などの尾の、兩脇にある羽。いてふの形したるよりいてふぼともいふ。つるぎば。曾我五「鴛鴦飛び上がり、思羽にて王の首を掻き落とし中略それよりして、思羽を劍羽と申すなり」雪女五枚羽子板「情も何も鴨のはね、雉子の風切り、思ひ羽や、思ひの數を」

おもひ-ばかいかず 思いかず (句) 思ふやうに遂げず。重井筒「必ず妻子ある人と末の約束せぬ事ぞ。男の閒男同前にて、思ひばかいかぬものぞとよ」

おもひ-ばからふ 思量 (他動四) おもひはかる(思量)の延。砂石集「顯密の聖教を學びて、出離の要道を思ひはからふに」

おもひ-はかり 思量 (名) おもひはかること。おもんばかり。發心集「境界を離れんための思ひはかりなれば、それにつけても有りがたきためしに言ひおきけり」

おもひ-はかる 思量 (他動四) 心に考へはかる。思ひめぐらす。おもんばかる。竹取「よき人にあはせんと思ひはかれども」大和物語四「わがさまの、いといとらなくなりにける を思ひはかるに、いとはしたなくて」

おもひ-はぐくむ 思孚 (他動四) 心にかけてそだつ。大切に養育す。源若菜「を

さなからん御娘のやうに、思ひはぐくみ奉り給ふ」

おもひ-はげむ 思勵 (自動四) 心をはげます。奮勵す。源帚木「おくれたるすぢの心をも、なほくちをしうは見えじと思ひはげみつつ」

おもひ-はじむ 思始 (他動下二) おもひそむ。考へ起こす。源若菜「何にかく、あながちなる事を思ひはじめて、心ぐるしくおぼしなやますらん」

おもひ-はじめる 思始 (他動下一) 前條の口語。

おもひ-はつ 思果 (他動下二) 思ひきる。思ひやむ。宇津保忠こ「されど、我れをあひ思はぬやうに聞こゆれば、おもひはつまじくなんある」源帚木「むしんに、心づきなくてやみなんと、思ひはてたり」

おもひば-つつみ 思羽包 (名) 拜領したる香(ウチ)などを入れ置く包み。

(おもひばつつみ)

おもひ-はなつ 放 (他動四) 思ひすつ。思ひはなるるやうにす。源帚木「さりとも、たえて思ひはなつやうはあらじと思ひ給へて」

おもひ-はなる 思離 (自動下二) 心離る。念が絶つ。古今雜上「あはれてふことこそうたて、世の中を思ひはなれぬほだしなりけれ」後撰雜三「あぢきなくなどか松山浪こさん、ことをば更に思ひはなるる」

おもひ-はね 思羽根 (名) おもひば(思羽)に同じ。浦島年代記龍宮七「比翼の鳥の思ひ羽根」

おもひ-はかる 思惟 (他動四) 惟りふ。思ふ。遠慮に思ふ。源東屋「よろづ多く思ひはかる事のあるを」

おもひ-はらから 思同胞 (名) むつまじき兄弟姉妹。宇津保藤壺下「大納言殿の北の方は、いづれとも、もとよりいみじき思ひはらからにて」

おもひ-はる 思晴 (自動下二) 心はれやかになる。雲葉集冬「さまざまにたえぬこの葉の音よりも、思ひはれたる松の風かな」

おもひ-はるく 思晴 (他動下二) 心をはらす。源夕霧「人はえまほにも見ず、例のけしきなる今朝の御文にもあらざめれど、なほえおもひはるけず」

おもひ-びと 思人 (名) 慕ひ思ふ人。こひびと。愚管抄三「新院の御思ひ人の、鳥丸殿とてありし」世繼曾我五「大磯の虎御前、化粧坂の少將とて、兄弟が思ひ人」

おもひ-ひらく 思開 (自動四) 心のどかになる。思ひなくなる。おもひむすぼるの對)夫木「春はまづ賴む南のみ山より、思ひひらけて匂ふ梅がえ」

おもひ-ふす 思臥 (自動四) 思ひつつ臥す。おもひねにねる。枕五「おきていぬべかりけるなど思ひふしたるに」

おもひ-ふす (他動下二) おもひおほす。信ず。新六帖五「わがものと思ひふせたる人妻は、もとへはやらじただは戀ふとも」

おもひ-ぶり 思振 (名) 其の人の爲めを思ひたる如きそぶり。きのふはけふの物語「いろいろさまざまのおもひぶりの御文章のうちに」

おもひ-ふる 思舊 (自動四) 思ひつつ久しくなる。新勅撰雜三「よそにのみ思ひふりにし年月の、むなしき數ぞつもるかひなき」

おもひ-へだつ 思隔 (他動下二) 心に隔てをおく。疎外す。源蜻蛉「われをおもひへだてて、あこの御けさう人を奪はんとし給ひけるが」同夕顔「右近はこと人なりければ、おもひへだてて」

おもひ-ほく 思惚 (自動下二) おもひほる(思惚)に同じ。源夕顔「むげにおもひほけたるさまながら、もの打ちいひたるけしき・用意くちをしからず」

おもひ-ほこる 思誇 (自動四) 自慢に思ふ。萬四「さならべる麿はなけむと、心には於毛比保許里(オモヒホコリ)て、ゑまひつつ」

おもひ-ほどく 思解 (他動四) おもひとく。心に悟る。砂石集三「漸く事の道理を思ひほどきて」續古今雜下「うしとても思ひほどけば、夢の世を厭ふ人のさめぬなりけり」

おもひ-ほる 思惚 (自動下二) 心ぼんやりす。心ほく。宇津保藤壺「おとど心まどひて中略と思ひほれてゐ給へり」

おもひ-まらく 思設 (他動下二) 豫め考へおく。かねて豫悟す。豫期す。枕「歌などよむにやあらん、兵衛佐かへし思ひまうけよなど笑ひて」

おもひ-まうける 思設 (他動下一) 前條の口語。

おもひ-まがふ 思紛 (他動下二) おもひたがふ。源明石「ふるさとの池水におもひまがへられ給ふに」

おもひ-まじる 思雜 (自動四) 同時に種種の事を思ふ。源帚木「あなくちをしや、思ひまじる方なくて見奉らましかば、めづらしくうれしからまし」

おもひ-ます 思增 (自動四) 思ふ心加はる。萬四「わが命のまたけむ限り忘れめや、いや日にけには念益(オモヒマス)とぞ。」勢語「葉べより滿ちくるしほのいやましに、君に心を思ひますかな」

おもひ-まず 思優 (他動四) まさりてよしと思ふ。古今雜下「待てといふに散らでしとまるものならば、何を櫻におもひまさまし」拾遺雜四「おもひまず人しなければます鏡うつれるかげとねをのみぞ泣く」

おもひ-まつはす 思纏 (他動四) 始終心を離れず。しふれくつきまとふ。萬四「藤波の思纏(オモヒマツハ)、若草の思ひつきにし君がめに」源帚木「わづらはしげにおもひまつはすけしき見えましかば」

おもひ-まどふ 思惑 (自動四) 心迷ふ。心配す。萬三「朝霧の思惑(オモヒマド)て、杖たらず、やさかのなげきなげけども」源藤「足をそらにおもひまどふ人多かり」

おもひ-まはす 思廻 (他動四) おもひめぐらす(思廻)に同じ。宇津保俊蔭「女思ひまはして」枕四「思ひまはす程もなく、せめまどはせば」

おもひ-みだる 思亂 (自動下二) 種種に思ひなやむ。思ひ煩ふ。萬四「逢はむ日のかたみにせよと、たわやめの於毛比美多禮(オモヒミダレ)て縫へるころもぞ」古今雜「かりこもるおもひみだれて我が戀ふと、妹知らるめや人し告げずば」

おもひ-みだれる 思亂 (自動下一) 前條の口語。

おもひ-みる 惟 (他動下一) つらつら思ふ。思ひまはしてみる。おもんみる。顯宗紀「惟(オモヒミ)」萬三「梓弓引きみゆるべみ思見(オモヒミ)て、すでに心は寄りにしものを」

おもひ-むすび 思結 (名) 一緒の結び方の一種。二しんのほうじゆむすび(眞寶珠結)に同じ。

(おもひむすび)

おもひ-むすぶ 思結 （他動四） 心に含む。心につつみ持つ。 允恭紀「結（オモヒムスビテ）之意裏、乘馬者爾无禮」

おもひ-むすぼる 思結 （自動二） 次條に同じ。 源夕霧「なほ世にへじと深う思ひたちて、尼になりなんと思ひむすぼほれ給ふめれば」

おもひ-むすぼる 思結 （自動二） 心解けずあり。思ひ開けず。心鬱結す。 萬八「などえの苔のねもごろに於母比牟須保禮（オモヒムスボレ）、なげきつつあが待つ君が」

おもひ-むせぶ 思咽 （自動四） 思ひとどこほりて解けず。思ひむすぼる。 源夕霧「世になく、なまめかしうまばゆきこちすれば、おもひむせびつる心の闇もはるるやうなり」

おもひ-むつぶ 思睦 （自動上） むつまじく思ふ。親しみ思ふ。 源夕顔「したしくおもひむつぶるすぢは、又なくなんおもほえし」

おもひ-めぐらす 思廻 （他動四） 種種に考ふ。おもひまはす。熟考す。 竹取「天竺にある物ももてこぬものかはと、思ひめぐらして」 枕「とくとく、ただおもひめぐらさで中略とせめさせ給ふに」

おもひ-もの 思者 （名） 一情人。戀人。用明天皇職人鑑三「某が在俗の思ひ者が來たったり」 蜉丸三「蜉丸様の思ひ者、直姫と申す者なるが」 二愛妾。孕常磐三「清盛入道みづからに心を懸け、思ひものにせんといふ」 おなめ 東海道膝栗毛「物思ひ」

おもひ-やすむ 思息 （自動四） なほざりに思ふ。一とほりに思ふ。おもひいこもなくありしあひだに」

おもひ-やすらぶ 思休 （自動四） 心ためらふ。躊躇す。 源夕顔「いさよふ月に、ゆくりなくあくがれんことをば、女はおもひやすらひ」

おもひ-やむ 思病 （自動四） 思ひ思ひて病となる。思ひわづらふ。 萬十「玉づさの使もこねば、憶病（オモヒヤム）わが身一つぞ」

おもひ-やむ 思止 （他動四） 思ひとまる。思ひとどむ。 萬二「人はよし念息（オモヒヤム）とも、玉かつらかげに見えつつ、忘らえぬかも」 竹取「色好みといはるる限り五人、おもひやむ時なく、よるひる來けり」

おもひ-やり 思遣 （名） 一おもひやること。推察。想像。 枕三「おどろおどろしき思ひやりなど、うとましきを」 源若菜下「父の年老い、物むつかしげにふとりすぎ、せうとの煩にくげに、思ひやり異なることなきねやのうちに」 二人の身につきての察し。同情。 源常生「物の思ひやりも、まして添し給ひければ」

おもひ-やり-ごと 思遣事 （名） おもひやる事。想像。 源藤袴「人の心より外なるおもひやりごとして、物ゑんじなどし給ふよ」

おもひ-やる 思遣 （自動四） 思ひはる。心慰む。 萬十「わがせこを見つつし居れば、於毛比夜流（オモヒヤル）こともありしを」

おもひ-やる 思遣 （他動四） 一思ひ及ぼす。思ひを馳す。 勢語「その川のほとりにむれゐておもひやれば、限りなく遠くもきにけるかなとわびあへるに」 土佐日記「おもひやる心は海を渡れども、ふみしなければ知らずやあるらん」 二推し量りて思ふ。推量す。想像す。 古今雜上「おもひやるこしのしら山知られども、一夜も夢にこえぬ夜ぞなき」 名義抄「想像（オモヒヤル）」 三人の身の上を推し量りていたはる。同情す。 宇津保俊蔭「あひ見んことのかたき道に出でたつ。父母・俊陰悲しび思ひやるべし」 源若紫「さすがに我が見すてん後をさへなんおもひやり、うしろみたりし」

おもひ-ゆづる 思讓 （自動四） 情愛減ず。 源東屋「若き人人あまた侍れど、思ふ人具したるは、おのづからと思ひゆづられて」

おもひ-ゆるす 思許 （他動四） 心にゆるす。宥恕す。 源螢「さまざまに罪おもき御心をば、僧都におもひゆるしきこえて」 新六帖「われだにもうけくにつらき身の程を、あはれと誰れか思ひゆるさん」

おもひ-よす 思寄 （他動下） よせて思ふ。擬へて思ふ。 源若菜下「もてはなれたる事をも思ひよせて疑ふも、をかしとおぼせど」 大和物語「ゆゆしとて忌むとも今はかひもあらじ、うきをばこれに思ひよせてん」

おもひ-よせる 思寄 （他動下） 前條の口語。

おもひ-よそぶ 思準 （他動下） なぞらへて思ふ。おもひなずらふ。 源若菜「猫中略らうたげにうち鳴くも、なつかしく思ひよそへらるるぞ、すきずきしきや」 拾遺夏「たが袖に思ひよそへて時鳥、花橘の枝に鳴くらん」

おもひ-より 思寄 （名） 思ひよること。おもひつき。ぞんじより。 狂言「人「まづ御亭主から、思ひよりを仰せられ」

おもひ-よる 思寄 （他動四） おもひあたる。思ひつく。考へつく。 枕「いとおもひよりがたく、あらがひたりと」 源若菜下「こ君には、ひるよりかくなんおもひよれるとの給ひ契れり」

おもひ-よわる 思弱 （自動四） 思ふ心弱くなる。思ひしをる。 萬十「おもひつよるの對（ツヨキ）」 源藤袴「渡り給ひてはまさるべしとのみいへば、思ひよわりにたり」 新後撰雜三「つれなさのためしに引かん梓弓、思ひよわらぬ心づよさを」

おもひ-わかる 思分 （自動下） 心に辨ふ。分別す。 源空蟬「あさましく、おぼえて、ともかくもおもひわかれず」

おもひ-わく 思分 （他動四） おもひさだむ。分別す。 源若菜下「などかはさてもとおぼゆる折りから、ときどきおもひわかぬばかりの心にては」 千載雜三「忘らるるうき名はさても立ちにけり、心の中は思ひわけども」

おもひ-わける 思分 （他動下） 前條ノ口語。心中刃氷鋸日「その返事は、私が身になり代はって、どうなりとも思ひわけて下だざりませ」

おもひ-わする 思忘 （他動下） 心に忘る。萬二「たきのみみふねの山はかしこけど、思忘（オモヒワスム）と時も日もなし」

おもひ-わたす 思渡 （他動四） 考へ及ぼす。おもひやる。 源紅葉賀「そこをのみなん、かかる程よりあけくれ見し。さればおもひわたさるるにやあらん、いとよくこそおぼえたれ」

おもひ-わたる 思渡 （自動四） 思ひつつ過ぐ。萬四「心には思渡（オモヒワタル）どよしをなみ、よそのみにしてなげきぞ我がする」 古今戀二「伊勢の海のあまのつり縄うちはへて、くるしとのみや思ひわたらん」 勢語「つれなき人を、いかでとおもひわたりければ」

おもひ-わづらふ 思煩 （他動四） おもひなやむ。萬三「見つつあれば心はもえぬ、かにかくに思和豆良比（オモヒワヅラヒ）ねのみし泣かゆ」 源帚木「をさなきものなどもありしに、おもひわづらひて」

おもひ-わぶる 思侘 （他動上） 思ひわづらふ。わびしく思ふ。 萬十「塵ひぢの數にもあらぬ我れゆゑに、於毛比和夫（オモヒワブ）らむ、いもがかなしさ」 同「ますらをの思和備（オモヒワブ）とつつ、たびまねくなげくなげきをおほぬものかも」

おもひ-わぶる （他動上） おもひうらぶる。萬十「たちかへり泣けどもあれはしるしなみ、於毛比和夫（オモヒワブ）てぬる夜しぞ多き」

おもひ-をり 思居 （他動四） 考へて居る。勢語「さりともと思ふらんこそかなしけれ、あるにもあらぬ身を知らずして、おもひをり」

おもふ 思 （他動四） 一物事の條理を分別するために心をはたらかす。考ふ。思慮す。思案す。 記「さねむとは、あれは意母閇（オモヘ）と」 同「きもむかふ心をだにか、あひ淤母波（オモヘ）ずあらむ」 二過去の事を考へおこす。回顧す。追憶す。名義抄「顧（オモフ）」 三心に忘れず。神代紀上「吾若懷（オモフ）不善」 四ねがふ。のぞむ。希望す。神代紀上「思欲（オモフ）以吾身元慮合汝身之元慮」 五憐れむ。いつくしむ。慕ふ。こひしがる。 記「こはた少女を、爭はず寢しくをしぞも、うるはしみ意母布（オモフ）」 神代紀下「有憶（オモフ）鄉之情」 萬五「營のまちがてにせし梅が花、散らずありこそ、意母布（オモフ）子がため」 六愛ふ。心配す。「身をすてて國を思ふ」 竹取「かの都の人はいとけうらにて、老いもせずなん、思ふこともなく侍るなり」 七おしはかる。推量す。想像す。

おもふ たつぼ 思壺 おもふつぼ（思壺）に同じ。重井筒「四つのかねてより、思うたつぼへあたりしと」

おもう たり かなう たり ねがうたりかなうたりに同じ。ねがふ（願）の條を見よ。

おもは ざる ほか 不思外 おもひの外。おもひがけず。 諸國噺「思はざる外に、一人子を人前人に誘はれて」

おもは ぬ ほか 不思外 前條に同じ。 謠「思はぬ外の獄きかな」

おもひ あへ ず 不思敢 一思ふに堪へず。古今長歌「拾ひ集めとれりとすれど、たまの緒の短き心思ひあへず」 二思ひよらず。思ひがけず。 源東屋「まだおもひあへぬほどなれば、心さわぎて、いかなる事にかあらんといひあへり」

おもひ あへ なく 前條に同じ。 萬六「奥山のいはに苔むし、かしこくも問ひ給ふかも念不堪國（オモヒアヘナク）」

おもひ おもは る 我れ彼れを思ひ、我れまた彼れに思はる。女殺油地獄上「小菊を思ひ思はれたさに」

おもひ おもふ 思思 思ひたるうへにも思ふ。かさねがさね思ふ。 拾遺戀三「年をへて思ひ思ひて逢ひぬれば、月日のみこそわれしかりけれ」

おもひ かけ ず 思不懸 思ひよらず。心づかず。おもひがけなく。 枕「ぬかづき蟲中略思ひがけず暗き所などにほとめきたる、聞きつけたるこそをかしけれ」

おもひ たら ず 〔思ひてあらずの約〕 考へて居らず。勢語「女の目には見ゆるものから、男はあるものかとも思ひたらず」 枕「人をば人とも思ひたらず」

おもひ より ず 不思寄 思ひがけず。おもひもよらず。意外に。徒然草「わりご中略思ひよりよき所にうづみおきて、中略思ひよらぬさまして」

おもふ かた の かぜ 思方風 順風。 源松風「おもふかたの風にて、限りける日たがへず入り給ひぬ」

おもふ つぼ 思壺 豫期したる處。津國女夫池三「某が思ふ壺にあたるところ」

おもふ どち 互ひに思ひ合ひたる仲間。仲よき間柄。おもひどち。 萬五「梅の花今盛かりなり、意母布度知（オモフヅチ）かざしにして、今盛かりなり」 同廿「いや年のはに於母布度知（オモフヅチ）かくし遊ばむ、今も見るごと」

おもふ なか 思中 互ひに思ひあふ間柄。 古今戀四「天の原ふみとどろかしなるかみも、思ふなかをばさくるものかは」

おもふ ひ 思日 命日に當たりて、その人を思ひ出だす日。忌日。 諸佛原「今日は思ふ日に當たれり。御經を讀み、佛事をなしてたび給へ」

おもふ ひと 思人 一心のあひたる人。 萬八「鶉なくふりにし里の秋萩を、思人（オモフ）どちあひ見つるかも」 二心に思ふ人。戀人。情人。 萬十「念人（オモフ）こむと知りせば、やへむぐらおほへる庭に玉しかましを」 枕「思ふ人とうづもれふして聞くに」

おもふ ゑ 古語。思ふ故。 萬廿「於毛布惠（オモフヱ）に逢ふものならば、しましくもいもが目かれてあれ居らめやも」

（諺）思ひ立つ日が吉日 事を爲すには躊躇すべからざること。 諸歌舞「今一度對面申さんと、思ひ立つ日を吉日と、船の纜とき初め」

（諺）思ふ子に旅をさせよ かはいい子には旅をさせよに同じ。かはいいの條を見よ。

（諺）思ふ中には垣をせよ 親しき間柄にも、相當の禮を盡くすべし。世話盡「思ふ中の垣」 犬子集「思ふ中の垣する花の八重霞」

（諺）思ふ中の小いさかひ 相思のものは、膝じき餘り、却りて小さき爭ひをなすものなりとの意。

（諺）思ふ中は涼しい 意氣相投ずる間柄は、互ひの心中清く爽やかなり。

（諺）思ふ念力岩をも通す 心をこめて爲せば成らざることなし。

（諺）思へばのろふ 人を思ふこと深ければ、却りて詛ふに至ることあり。たはれ草「思へば詛ふといへるは卑しき諺なれども、面白き言葉にや。人主をして此の心を知らしめば、誹謗・妖言なりとて、忠直の人を害ひ給ふことはあらじ」

おもふ-おもふ 思思 （副） 思ひつつ。思ひながら。 源椎蕈「などりなうつろふ心の、いとかろきぞやとは思ふ思ふ、猶心げさうはすすみて」 同若菜下「くるしと思ふ思ふ參りぬ」

おもふ-ぶき 趣 （名） おもむき（趣）に同じ。

おもふ-ぶく 趣 （他動下） おもむく（趣）に同じ。崇神紀「尊民之本、在於教化（オモフブク）」 續紀十「教賜、於毛夫氣（オモフ）賜」

おもふ-ふくら 面脹 （名） 頬の、圓く肥えて、細麗かなること。名義抄「豐下（オモフ）」

おもふ-げ 趣 （名） おもむくること。おもむき。崇神紀「未習王化（オモフ）之教」 國語「つれなき人を、いかでとおもひわたりければ」

おもひ-わづらふ 思煩 （他動四） おも

とりて、思ふさまならずとなげく人」源朝石「いつしかいかで、おもふさまにて見奉らん」㊁心に思へる限り。思ふ存分。おもいれ。著聞集「これを大事と、思ふさまいきづみて、ひられんを期にひらせ給へ」

おもぶせ 面伏（名）おもてぶせ（面伏）に同じ。不面目。落窪三「忠頼をぴんなしと思ひおきたるにや、又おもぶせなり」

おもぶに 思惟 顧（接）考へてみるに。思ひめぐらすに。

おもぶはかり 思計（名）おもんばかり。思慮。保元（新院御所五位尉）「数長卿思ふ計りなくて」

おもぶさま 思儘（副）おもふさま。思ふ通り。宇津保俊蔭「おもふままに答へたる對策のふみども、おもしろく興ありて」狂言法師「これはいかなこと、思ふさま打擲をした、堪忍ならぬ」

おもぶやう 思様（副）おもふさま。おもふままま。宇津保藤原上「大將いと思ふやうなるここちし給ふ」落窪三「男君、思ふやうにおはすめりと見あへり」

おもぶり 思（名）おもむき（趣）に同じ。徹書記物語「定家と家隆と、本歌とりやう、おもぶり、いささかかはりたるなり」

おもぶる 徐（副）古語。おもむろ（徐）に同じ。神代紀下「從容（オモブ）語曰」名義抄「舒（オモブシヤカリ）・徐（オモブ・シヅカ）」同「徐（オモブ・シヅカ）・舒（オモ）」

おもへらく 以爲 謂（副）（思へるの延）思へるには。思ふには。舒明紀「蝦夷以爲（オモヘラク）、軍衆猶多」

おもへらひ （名）古語。次條の延。雄略紀「神色（オモヘラヒ）不變」

おもへり （名）古語。顔つき。顔色。應神紀「有不悅之色（オモヘリ）」續紀三「無驚怪面貌（オモヘリ）無入」

おもほえず 不思（副）おぼえず。不意に。萬三「不所念（オモホエズ）きませる君を、さほ川の蛙聞かせず歸しつるかも」

おもほす 思（他動）（おもほすの延）おもほすには。神功紀「皇后、傷（オモホ）天皇不（オモホ）從（オモホ）神教」而早崩」以爲（オモホ）」」續紀三「天皇朝（オモホ）暨而罷退」聞看而」於母富佐久（オモホ）」

おもほし 思（形シク）おもはし（思）に同じ。萬廿「ま使もやるよしもなし、於母保之伎（オモホシ）ことつてやらず」

おもほしめす 思召（他動サ四）おぼしめす（思召）に同じ。思ひ給ふ。萬廿「遠くあれば、ひと目ひと夜も思はずてあるらむものと於毛保之賣須（オモホシメス）な」同廿「みを寸國は榮えむものと、かむながら於毛保之賣之（オモホシ）て」

おもほす 思（他動サ四）おぼす（思）に同じ。おぼしめす。萬十「あひ見ては月もへなくに戀ふといはば、をそろと我れを於毛保爽（オモホ）かも」同廿「くがねかも樂しけくあらむと於母保之（オモホ）て、したなやますに」

おもほてり 面熱（名）おもほてること。神代紀上「忽然作色（オモホテリ）曰」靈異記上「赫（オモホテリ）」

おもほてる 面熱（自動ラ四）かほあつくなる。かほ赤くなる。曾然（歌舞伎「鬼揃雲」）思はる。宇鏡「曾然（歌舞伎「鬼揃雲」）思はる。思ひ得。

おもほゆ 思（自動ヤ下）齊明紀「あすか川みなぎらひつつゆく水の、あひだもなくも於母保喩屢（オモホユ）かも」萬廿「今のごと戀ひしく君が於毛保要（オモホエ）ば、いかにかもせむ」

おもほゆらく （自動）おもほゆの活用、おもほゆるの延。萬廿「よし惡しも戀ひじとすれど、ゆふま山越えにし君が所念良國（オモホユラク）」

おもほる 溺（自動ラ四）おぼほる（溺）に同じ。伊勢集「さらばよと別かれし時にいはませば、われも涙におもほれなまし」

おもみ 重味（名）重くある度合。おもくあるさま。おもさ。

おもみる 惟（他動ヤ上）おもひみる（惟）に同じ。おもんみる。名義抄「意者（オモミル）」

おもむき 趣 赴（名）㊀おもむくこと。「風のおもむきがかはる」㊁わけ。意味。趣意。躬恢集「是れも題のおもむきによる」㊂やうす。ふりあひ。事情。源帚木「中のしなになん、人の心心、おのがじしのたてたるおもむきも見えて、わかるべきこと、かたがた多かるべき」同行幸「政のおもむきを、したため知らんことは」保元（新院御所五位尉）「左府すなはち、合戰の趣き計らひ申せと宣ひければ」同物事につきての感興。雅致。趣味。源少女「水のおもむき、山のおきてを改めて、さまざまに御かたがたの御願ひの心ばへを造らせ給へり」

おもむく 趣 赴（自動カ四）（面向くの義）㊀其の方に向く。竹取「此の吹く風は中國よりぞ吹くなり」㊁其の方に向かひて行く。神武紀「步趨（オモムク）」龍田こ 源明石「やがて馬ひきすて、おもむきぬべく思ず」向日紀「歸」㊂從ふ。歸す。宇津保藤原「いかなる佛神に大願をたてて、なでふことのたばかりをしてか、女のおもむくべきとのたまふ」源玉鬘「同じ心に、いきほひをかはすべきことなどかたらふに、二人はおもむきにけり」

おもむく 趣 赴（他動カ四）おもむかしむ。向かはしむ。從はしむ。宇津保藤原「わが大事のひじりの君、この事おもむけしめ給へ」源少女「はづかしげなる御しきなれば、しひてもえ聞こえおもむけ給はず」

おもむけ 趣 赴（名）おもむくること。仕向け。景行紀「未染王化（オモムケ）」源藤袴「ただ大殿の御おもむけのことなるにこそあなれ」

おもむろ 徐 舒（副）しづか。ゆるやか。從容として。おもぶる。

おもめ-はぶたへ 重目羽二重（名）羽二重の、日方重きものの總稱。（輕目羽二重の對）

おももち 面持（名）おもかげ。かほつき。顔色。枕三「所え、いみじきおももちして、事を行ひなどするに」源紅葉「同じ舞の足ぶみ・おももち、よに見えぬさまなり」

おもや 母屋 主屋（名）㊀家の中央の部分。もや（庇・廊下などの對）竹取「おもやの内には、女ども番にをりて守らす」㊁住居に用ふる家。ほんや。物置・長屋などの對）

おもや（名）古語。おもわ（面輪）に同じ。萬八「わがせこをいつぞ今かと待つなへに、於毛也（オモヤ）は見えむ、秋風の吹く」

おもやう 面様（名）顔のやうす。かほだち。おもざし。枕三「額髪長やかに、おもやうよき人の」

おもやか 重（副）おもく。たふとく。おごそか。

おもやく 重役（名）重き役目を勤むる人。ぢゅうやく。

おもやなぎ 面柳（名）襲の色目の名。表は濃き青、裏は薄き青。

おもやる 思（他動ラ四）（おもひやるの約）思ひなさる。思ふ。同輩又はその以下に用ふ）狂言靱「法問ばし、してもみやうとおもやるか」同六人「それほどにおもやらば、死んでいらざること」

おもゆ 重湯（名）極めて淡き粥。飯を煮たる汁。保元（新院御所）「重湯などをぞ進め奉りける」

おもよろひ 重鎧（名）札（オモ）厚く作りて、重き鎧。太平記八（山徒）「山徒心は武しと雖も、歩立ちに力疲れ、重鎧に肩を被引、片時が間に疲るべし」

おもら 母良（名）伊勢神宮に奉仕する女。子良（ウラ）よりも年まさりたるもの。月經の間は籠もり居て、身潔くなりて復、出で仕ふ。

おもらか 重（副）㊀重き狀。おもさう。おもげ。おもりか。增鏡「小さき唐櫃の金物したるが、いとおもらかなるを參らせたり」㊁おもおもしさう。かるがるしからず。十訓「すべて人のふるまひは、おもらかに言葉ずくなにて」

おもり 重（名）㊀ものの重さを增さんがために附け加ふるもの。㊁秤の具。物品の重さと平均を保たしめて、輕重を量る爲めに用ふるもの。分銅。釋迦如來誕生會「秤の皿に打ち込んで、おもり繰り寄せ目を數へ」

おもりか 重（副）㊀おもさう。おもげ。おもらか。源末摘花「つつみに、ころも箱のおもりかに古代なる打ちおきて、おし出でたり」㊁おもおもしさう。かろがろしからず。源末摘花「わかびたる聲の、ことにおもりかならぬを、人づてにはあらぬやうにきこえなせば」

おもり-づさん 重頭巾（名）さはのじようばうし（澤之丞帽子）に同じ。榮花「音筋より上ばかりに入る物十六品あり中略おもり頭巾・留針」四季ばなし「御所染のおもりづきん、淺く火燈びたひをとりひろげ」

おもり-はうし 重帽子（名）前條に同じ。

おもる 重（自動ラ四）㊀目方重くなる。風雅秋上「うちしめりすすきのうれ葉おもりつつ、西吹く翁になびくむらさめ」㊁病彌留しくなる。危篤になる。敏達紀「病彌留（オモ）」源桐壺「日日におもり給ひて、ただ五六日のほどにいと扇うなれば」

おもわ 面輪（名）おも（面）。おもて。萬十「もち月のみてる面輪（オモワ）に、花のごとゑみてたてれば」

おも-わすれ 面忘（名）顔を見忘ること。萬廿「面忘（オモワスレ）いかなる人のするものぞ、われはしかねつ、つぎてし思へば」

おもんず 重（他動サ変）かろしめず。たふとぶ。おもおもしきものとす。狂言生國「我が君は、しんきやうの禮をおもんじる給へば」

おもんばかり 思量 慮（名）おもひはかること。おもひはかり。おもばかり。

おもんばかる 思量 慮（他動ラ四）おもんばかる成り給ひたりとても宥め申しがたし。且は景迹（オモカル）も有るべし」

おもん-みる 惟（他動ヤ上）おもひみる（惟）の音便。名義抄「惟（オモミル）」謠百萬「げにやおもん見れば、何くとても住めば宿」

おや 親（名）㊀一親等たる直系尊屬。即ち、父・母・養父母の稱。萬五「朝霧のけやすきわが身、人國にすぎがてぬかも、意夜（オヤ）の目をほり」㊁古昔、父母に限らず、幾世にても、先祖まで通はしいふ稱。神代紀上「遠祖（オヤ）」同下「皇祖（オヤ）高産靈尊」萬八「清きその名を、いにしへゆ今のをつつに、ながきへる於夜能子（オヤ）どもぞ」夕霧阿波鳴渡「親の子とてしほらしい、六つや七つで馬に乘る」

おやの つかさ 祖司 祖先以來、世襲の官職。萬廿「あかき心をすめらべにきはめ盡くして、仕へくる於夜能都可佐（オヤツカサ）とことたてて」

おやの まもり 親守 親の、子を守ること。古今別「たらちねの親のまもりとあひ添ふる、心ばかりはせきなとどめそ」

おや はない か 人の技藝などを譽めあぐる時いふ語。斯の如き堪能の藝を、親居らば嬉しく見るならんといふ意。鷹筑波「親はないか舞はいたいけな胡蝶哉」

（諺）親に似ぬ子は鬼子 父母に似ざる子は、人の子にあらず。大鑑狂言二千「昔から、親に似ぬ子は鬼子ぢやと云ふが、似たも道理よな」

（諺）親の因果が子に報ゆ 親のなしたる惡業、子に報い來たる。一盃綺言「親は越中の國の狩人、殺生の報いによって、あの樣な片端に生まれました。あれ見なされや、親の月果が子に報ゆ」

（諺）親の恩は子でおくる 父母に養育せられし恩は、子を養育して之に報ず。

（諺）親の恩より師匠の恩 師恩の甚だ重きをいふ語。

（諺）親の心子知らず 親の思ふ心を子は察せずして行動す。義經記七（静と宜と津一）「あはれや、殿、親の心を子知らずとて、人の心は知りがたし。自然の事あらば、後悔さきに立つ可からず」大塔宮曦鎧（曙身代り）「御身代りと思ひこむ、親の心を子は知らず、手ふり、袖ふり、踊ぶり」

（諺）親の臑（ヒ）かじる 相當の年齡となりても、なほ親に扶養せらるる子を嘲りていふ。柳樽「親の臑かじる息子の齒の白さ」怪談模模夢字彙「のうらく息子は商賣の事に疎く、若い身そらでのらくらとして、ずんと働きのなき化物

なり。わが手で稼いで食ふことを知らず、常に年よりたる親父の痩せた腦をかじり、身の膏をなめて飼食とす、悪むべく戒むべき化物なり。古人桑楊庵光のざれ歌に、母の乳父のすねこそ慰しけれ、獨りで食らふ事のならねばといへるも、この化物の事なるべし」

(諺)親の光は七光　親の餘光は限りなし。聞耳世間猿「名を大津屋四茂八と改めて、世をうらやすに暮らすのも、親の光は七光、大津八町の勝劣散とて、近年の仕出しなる由」

(諺)親の目はひいき目　親の慾目に同じ。槍權三「格別よい子になりやった中略親の目はひいき目、他人が證據」

(諺)親の持たする子心　親の仕向けによりて、子の心は如何様にも變ずとの意。毛吹草「親の持たする子心」

(諺)親の慾目　親は其の子を實際より以上に評價するものなりとの意。

(諺)親は無けれど子は育つ　世の中の事は、如何様にかなり行くものなり。世間胸算用「親はなけれど子は育つ。打ち殺しても死なぬものは死にませぬぞ」

おや　(感)　意外の事物に出遇ひたる時など、出だす聲。まあ。や。

おや おっかない　おやと、驚かるるばかりおそろし。用明天皇職人鑑「正月七日に神前において、おやおっかない、起請を書く」

おや-いぬ　親犬　(名)　親の犬。親たる犬。(子犬の對)　狂言鶴上「えのころが親犬になり上がります」

おや-いびり　(名)　親をいびること。親をいぢめること。又、その人。

おや-いも　親芋　(名)　芋の根の塊。(子芋の對)　芋魁。

おやうし　親牛　(名)　親の牛。(子牛の對)　狂言附子「親牛も子も、皆引かせてやった」

おや-おもひ　親思　(名)　親を大切に思ふこと。又、其の人。

おや-おや　(感)　(おやの重言)　驚き、又著膳したる時などに發する聲。

おや-かうかう　親孝行　(名)　親に孝を盡くすこと。(親不孝の對)　諸小唄「終ひにはその名を留めなば、兄弟親孝行のためしにならんうれしさよ」

おや-がかり　親掛　(名)　親の保護を受け居る身分。「やずみ。傾城反魂香「親がかりや、お主持の、戀路の闇の、一寸先見えぬ所を」

おやかす　(他動四)　おやけるやうにす。

おや-かぜ　親風　(名)　(一)親の身分・位置を鼻にかくること。(二)子に對して、親の威を振ふこと。「親風を吹かす」

おや-かた　親方　(名)　(一)恩義を蒙りて、親として仰ぐべき人。親の如くに心を懸けて世話する人。源氏物語「例のかろらかなる御心さまに、物思はせんこそ心ぐるしかるべけれなど、親方になりてきこえ給ふ」　曾我「道理を持ちながら、おやかたに向かひ意趣をこめんことは詮なし」　(二)主人として仕ふる人。又、職人などの頭。親ぶん。かしら。頭分。若風俗「あきびとの手代、其のおやかたをだしぬき」　五十年忌歌念佛「親方に恥ぢ掻かせ」

おや-かた　親形　(名)　あに(兄)をいふ。備前國の方言。

おやがたち　親形　(名)　あに(兄)をいふ。土佐國の方言。

おやかたぶん　親方分　(名)　(一)親方たる身分。鎌田兵衛名所歌「客ぶり出して酔うてたべ。まづ亭主なり、親方分」　(二)親方に準ずること。

おやかたもち　親方持　(名)　親方のあること。又、その人。主人持。丹波與作「そっちもこっちも親方持」

おや-がひ　親甲斐　(名)　親たるかひ。親たる冥利。菅原傳授手習鑑「親がひに座が高い」

おや-かぶ　親株　(名)　こかぶ(子株)を見よ。おや。

おやがほ　親顔　(名)　おやらしき顔つき。おやのやうなる樣子。

おやかましら　(句)　人と話などなし終はりて、わかれを告ぐる時にいふ語。さやうなら。

おや-かみ　祖神　(名)　うぢがみ。先祖の神。

おや-がる　(自動四)　親めく。親らしくふるまふ。源氏物語「おやがりたる御ことばも、いと憎しと見給ひて」　同行幸「心もとなうおぼえ給へど、ふとしか受けとり、おやがらんもびんなからん」

おやぎ　親木　(名)　接木をするに、臺となるべき木。臺木。浦島年代記「白牡丹の臺に、紅牡丹の穂を接ぐに中略元の親木の紅牡丹、色香をたがはず咲き出づる」

おや-ぎみ　親君　(名)　おや(親)の尊稱。宇津保藤原忠雅「めもこそ二つあれ、一ところをおやぎみと頼み奉る」

おや-ぎんかう　親銀行　(名)　【商】資金の融通・再割引等、種種の便宜を與ふる中央銀行外の大銀行の稱。(子銀行の對)

おやく　御役　(名)　つきやく(月役)をいふ、女詞。月經。

おや-くさ　親芋　(名)　【植】くさてそつの異名。

おやくしょ　御役所　(名)　えどまち

どしより(江戸町年寄)に同じ。

おやくそく　御約束　(名)　藝妓の揚代。京都の遊廓の語。

おやけ　親氣　(名)　親らしき樣子。源行幸「人のおやげなく、かたはなりや」

おやける　親子　(自動四)　陰莖勃起す。

おやこ　親子　(名)　おやと子と。しんし(親子)。宇津保忠乞「男はただ今三十餘、女は五十餘ばかりなり。よきほどなるおや子ばかりなる中にも」

(諺)親子は一世(セイ)　親子の關係は此の世だけなりとの意。(夫婦は二世、主從は三世の對)　保元(略)「親子は一世の契りと申せども、來世は必ず一つ蓮に參りあふやうに御念佛候べし」

(諺)親子は一世、師は三世　親子の緣より、師弟の緣は深しとの意。毛吹草「親子は一世、師は三世」

(諺)親子は三界の首枷　子は三界の首かせに同じ。こ(子)の條を見よ。諺天鼓「親子は三界の首枷と、聞けば、誠に老心、別れの涙の雨の袖」

おや-ご　親御　(名)　人の父の敬稱。尊大人。狂言連歌「おやごよりも生まれ上がらっしやれたことでござる」

おやこ-がき　親子垣　(名)　建仁寺垣の竪の竹を、大小うち交へて結ひたるもの。

おやこ-がめ　親子亀　(名)　紋所の名。

おやこ-ぐさ　親子草　(名)　【植】しだ(商柴)又ゆづりは(交讓木)の異名。藏玉「親子草、しだ又はゆづり葉。年ごとに此のごろおつるおやこぐさ、人にしたしき人や知るらん」　小町踊春三神代より墓ふや禮義親子草」

おやこ-けんくわ　親子喧嘩　(名)　親と子とのいさかひ。天神記「かけも構はぬ親子喧嘩に出しやばって」

おや-ごころ　親心　(名)　(一)親として子を思ふ情。親らしき心。源氏帚木「打ちとくべき御親心にはあらずやありけん」　(二)親になりかはりて思ふこと。源氏賢木「今はまた見ゆづる人もなくて、親心にかしづきたてて見きこえ給ふ」

おや-ごさま　親御樣　(名)　おやご(親御)に同じ。大蘆狂言武惡「こなたの親御樣に、お目にかかりましてござる」

おや-ごぜ　親御前　(名)　おやご(親御)に同じ。心中刃氷朝日「親ごぜが、殿樣の御祕藏のお麿をそらし」

おや-こづき　親子月　(名)　陰曆十二月の異名。莫傳抄「十二月。我れ人のみたまをまつるおやこ月、松や命のためしなるらん」

おや-こどんぶり　親子丼　(名)　料理の一種。どんぶりに吸かなる飯を入れ、雞肉と雞卵との煮たるものをかけたるもの。おやこめし。

おや-こなか　親子中　(名)　親子の間のなからひ。親子の如き親しみの間柄。大蘆狂言鳴「親子中の心安いは、ろくに居て、五服も七服もお參りやれ」

おや-こなべ　親子鍋　(名)　料理の一種。雞肉と雞卵とを鍋にて煮たるもの。

おや-こなんばん　親子南蠻　(名)　雞肉と雞卵と葱とを入れたる汁蕎麥。

おや-こまめ　親子豆　(名)　蠶豆と豌豆とを煮合はせたるもの。

おや-こめし　親子飯　(名)　おやこどんぶり(親子丼)に同じ。

おや-ころし　親殺　(名)　親を殺すこと。又、その人。五十年忌歌念佛「主殺、親殺」

おや-ざと　親里　(名)　己れが親の居る里。又、其の家。おやもと。狂言(略)「わらはが親ざとへ云うてやって、やうやう調へました」

おや-ざま　親樣　(名)　おやの如くにたのむ人。源氏夕顔「うけばりたる親ざまにはきこしめされじと、院をつつみきこえ給ひて」

おやじ　同　(形)　古語。おなじ(同)に同じ。天智紀「橘はおのが枝枝なれども、玉にぬくとき於野兒(オヤ)をにぬく」萬竹「妹も吾れも、心は於夜自(オヤ)たぐへれど」

おや-しほ　親潮　(名)　北海道及び本州の東岸に沿ひて流るる寒流。

おや-しらず　親不知　(名)　(一)次條の略。毛吹草「姥櫻はゆる若ばや親しらず」　(二)生まれて間もなく他人に養はれ、又孤兒となりて、父母の顔を見知らぬ子。波うちぎはなどの危險なる場所。

おやしらずは　親不知歯　(名)　三十二枚の齒の中、最も遲く生ふる奥の四枚の齒の稱。おやしらず。

おや-しろ　親代　(名)　親に代はりて養育すること。又、其の人。盛衰記「家安親代と成りて、夜は胸にかかへ奉りて通夜勞はり、晝は肩にのせ終日に育み奉り」

おやす　(他動四)　おやけるやうにす。おやかす。きのふはけふの物語「馬めが、彼の物をおやしてをりけるを」

お-やすみ　御休　(名)　やすみ(休)の敬語。ぎよしん(御寢)。おしづまり。

おや-そん　親孫　(名)　親の後繼たるに恥ぢざること。毛吹草「聲よきは親孫なれや郭公」

おやだから　親寶　(名)　親を尊重していふ語。(子寶の對)

おやだつ　親立　(自動四)　親らしくあり。和泉式部集「思はずに心うき事ありければなん、心もゆかぬと、おやだつ人の

いひたるに」

おや-だま　親玉　(名)　(一)球數の内の大なる玉。だつま。(二)かしらだつ人。頭領。主人。浮世風呂「おらが親玉めと一緒に、酒をくらって居やあがるが」　(三)義人などを賞讃していふ語。

おやだんな　親旦那　(名)　父親たる主人。おほだんな。(若旦那などの對)　薩摩歌「お家の若旦那中略親旦那御同道で、只今はお江戸に」

おや-ぢ　親仁　(名)　(一)他人に對して、我が父の稱。(二)おきな。ぢぢい。老人。問上手「寄合辻番のおやぢが、菊を造り」　(三)かしら。親方。おやぶん。博多小女郎波枕「我れ我れが相手になる、おやぢ一人心もとない」

おやぢ-がた　親仁形　(名)　芝居にて、老翁に扮する役。吉野忠信「いま少し親父形勤めたら候へども、腰が痛くてなり申さず」

おやぢ-かづら　親父鬘　(名)　おやぢがたに扮する時、附くる假髪。

(らづかぢやお)

おやぢ-さま　親仁樣　(名)　人の父の敬稱。御親父樣。傾城島原蛙合戰「おやぢ樣の勘當にて、逢ふ潤も便りも絶えしをりしも」

おやぢ-ひと　(名)　次條に同じ。大蘆狂言武惡「身共が、此の世に居てこそ、親ぢや人の五十年忌も百年忌も弔へ」　淀鯉出世瀧德「恥かかせて意見せよと、おやぢや人の遺言か」

おやぢ-もの　(名)　親なる者。おやや。伊勢家禮式書「主・貴人の前にて、親の名をいうたるよりは、ただ親ぢや者といふがよきなり」　狂言(略)「親ぢやものの手もと、其が手もとと似たと云ふか」

おやぢゅうだい　親重代　(名)　父祖より、代代傳來したること。又、其の物。重代。守武千句「寶りぬるはしやうたいなしの刀にて」　親重代の秋の夕ぐれ」

おやつ　御八　(名)　(昔の八つ時頃に用ふるよりいふ)　午後二三時頃になす間食。

おや-づき　親月　(名)　(親の墓に詣づる月の義)　陰曆七月、御ち盂蘭盆のある月。和爾雅「親月七月此月諸人、詣親墳墓、故曰親月」

おや-つぶ　親粒　(名)　親鮫の皮の、つぶだちたるをいふなるべし。長町女腹切「醒が井の親粒も、まだ入れてやるまいな」

おや-どり　親鳥　(名)　鳥の親。(子鳥の對)

おやとり-ことり　親取子取　(名)　小兒の遊戯の一。鬼一人、親一人、他を子とし、子は親の後に附き從ひて鬼に捕らへられじとし、親は子を庇ひて鬼を禦がんとする遊び。おやとろことろ。

おやとろ-ことろ　親取子取　(名)　前條に同じ。

おや-なし　親無　(名)　親を失ひたる子。みなしご。孤兒。推古紀「しなてるや片岡山に、飯に丞て、こやせる其のたびと、あはれ於夜那斯(オヤナシ)に、なれ成りけめや」　源東屋「おやなしと聞きあなづりて」

おやなし-ご　親無子　(名)　親を失ひたる子。みなしご。一代女「さては昔、血おろしをせしおやなしごかと悲し」

おや-になひぼし　親荷星　(名)　さんくわう(三光)を、いふ。關西の方言。

おや-ねずみ　親鼠　(名)　鼠の親。(子鼠の對)　壽門松「親鼠・身鼠」

おや-ばか　親馬鹿　(名)　愛に溺れて、子の惡しきを知らぬ親。浮世風呂「小波が力彌に惚れたばっかりで、親の本藏が命

を捨てて夫婦にして貰ふの、親馬鹿とはよく云った譬へさ」

おやばしら 親柱 (名) 【建築】欄杆の端にある太き柱。

おやばち 親罰 (名) 親の恩を忘れなどしたるため、受くる罰。平家女護島「此の賤しい蟹の身で耕の袴とは、おやばちかぶること」

おやばら 親腹 (名) 母と子とを娶りたる時、其の母の方に生まれたる子。其の子の方に生まれたるを娘腹といふ。榮華初花「おや腹の御子をば五の宮」

おやはん 親判 (名) 證文に、親の立ち合ひて押す印。領城買二筋道「十三で賣られて、おやはんさ」

おやひと 親人 (名) おやたる人。おやぢやひと。繪本太功記十「おやひとの仰せに任かせ」

おやぶ 親歩 (名) 田地などの總段別。

おやふかう 親不孝 (名) 親に不孝なること。(親孝行の對)

おやふね 親船 (名) ㊀もとぶね(本船)に同じ。(傳開船の對) ㊁いせぶね(伊勢船)に同じ。

(誹)親船に乘ったやう 心丈夫に思ふ譬へ。

おやぶん 親分 (名) ㊀假りの親。㊁親として親む人。頭領として戴く人。おやかた。かしら。毛利家記「甲州は長門殿の親分と云ひ、位階と云ひ、長門より打ち上がって居給ふ」

おやほね 親骨 (名) 扇の兩端にある最も太き竹。五十年忌歌念佛「閻の扇は班女が親骨にせかれ」

おやま (名) ㊀いうなよ(遊女)の稱。生玉心中「今のおやまが、今日一日、奥の客に身を賣りながら」㊁芝居の女形の稱。

おやまき (名) 人をののしりていふ詞。著聞十二「力者法師聞きとがめて、おやまきの聖覺やなどねめつつ」

おやまぐるひ (名) 遊女狂ひ。天網島「女房・子供の身の皮はぎ、その金でおやま狂ひ」

おやまけ (名) おやまきに同じ。著聞十八「榮性法眼め、おやまけおやまけと大聲にていひて」

おやまさり 親優 (名) 子の、親よりまされること。又、そのもの。國姓爺後日合戰「その筍の親まさり」

おやまさ-にんぎやう (名) 女の委したる人形。

おやまの-ゑんどう (名) 【植】豆科、れんぶくさう屬の多年生の莇だ低き草本。葉は羽狀複葉にて、長毛を有す。花は紫色にて、花莖上に二箇づつ生じ、夏日、開く。我が國、中部以北の山地に自生す。

おやまりんだう (名) 【植】龍膽(ゲンチヤ)科、龍膽屬の多年生草本。莖の高さ一尺許り。葉は對生、披針形鋭頭、葉柄無し。花は青紫色の筒狀花にして、八月頃開く。我が國、各地の山地に自生し、又、觀賞用として栽培せらるることあり。

おやまを (名) 遊女を書きたる繪。百日曾我(虎少將)「武者繪のたけき武士も、心やはらぐおやま繪や」

おやまん (名) おやまに同じ。遊女。膝栗毛「なんぢやあると、おやまんの有りたは出さんせ」

おやめく (自動四) 親の如くふるまふ。源氏十八「まことにおやめきてあつかひ給ふ」

おやもじ 親文字 (名) ㊀所書にて、同じ頭字の語彙の始め毎に書き出だした文字の稱。㊁西洋の文章にて、一文章の始めの語、又は固有名詞等の始めの大文字。はなもじ。㊂活版の字母の稱。

おやもと 親元 (名) おやざと(親里)に同じ。

おやゆづり 親讓 (名) 「おやより讓り受けたること。又、其の物。

おやゆび 親指 (名) ㊀おほゆび(大指)に同じ。小町踊春上「えとを先づくる親指よ年の春」㊁しゆじん(主人)またはていしゆ(亭主)の隱語。

おやわん 親椀 (名) 大なる飯椀。

おやんなさいやし (名) 江戸時代、乞食の一種。浮世風呂三「ああやかましい、通らっせえ。おやんなさいやしが來たやうだ」

おゆ 老 (自動上) ㊀齡つもる。年寄る。年取る。記下「ひけたの若くるす原、わかくへに、ゐ寢てましもの、淤伊(イ)にけるかも」㊁衰ふ。よわる。萬集「秋深みまだきにおゆる菊の花、たちかへれとも告げにやらばや」㊂時候未になる。ふく。宇津保藤原「おゆる春をもてあそぶと、歌の題に書かせ給ひて」

おいしりぞく 老退 年老いて、官職を辭す。塵添壒囊抄「致仕(ヲイリゾク)」

おいずしなずのくすり 不老不死藥 之を飲めば、老いもせず死にもせずといふ仙藥。不老不死の藥。古今長歌「頭は白くなりぬとも、音羽の瀧の音に聞く、老いずしなずの藥もが」

おいせずしせぬくすり 前條に同じ。謠曲島「月日を此の箱に疊み かくして、年なみの老いせず死せぬ藥を籠めて」

おいせぬかど 不老門 ㊀和漢朗詠集の不老門前日 遲の句より出でて、宮門を祝ひていふ語。㊁壽命の長久を壽ぎていふ語。嘉應二年實國躰家歌合「いづくにもおいせぬ門をたてたらば、あけん年をもいとはざらまし」繪門葉集「鏡小松老いせぬ門にうつし植ゑて、ちとせの色は君ぞ見るべき」

おいせぬくすり 不老藥 いつまでも年老いざる藥。長方集「長月の菊の下水汲みくれば、老いせぬ藥誰れかたづねん」

(誹)老いたる馬は路を忘れず ㊀經驗を積みたるものは、よく其の行くべき所を忘れず。韓非子說林「春往冬還、迷惑失道。管仲曰、老馬之智可用也。仍放老馬而隨之、遂得道」㊁譬代愚顧の者は故主を慕ふ心失せず。盛衰記四十二、會稽「東國の人ども誰れか君の重代の御家人にあらざる。されども今一旦の恩を蒙るに依りて、平家の方人に似たれども、いかでか昔の好みを忘れ奉るべきなれば、終ひには皆參るべし。老いたる馬は路を忘れず、古人は言ひ誤りなし、必ず思ひ合はすべし」

(誹)老いたるを父母 年長けたるものには、之に事ふること父母の如くせよとの意。和漢古誡「老いたるを父母、若きを子弟」俗つれづれ「總じて老いたるをば父母の思ひをなせとあるに、今の世間を見るに、眞實の親にさへ、終日無禮のみに暮らす」禮記曲禮「年長以倍則父事之」

(誹)老いては子に從へ 老年に及びては、何事も子に委ぬべし。和歌民のかまど「老いては子に從へ」心中二腹帶「御老體の養ひが大事、先づお休みなされませ。ほう、老いては子に從へとは得手勝手の誡。然らばいってねるほどに、追っ附けまどろみめされい」大智度論

「一切女身、無所繫屬、則受惡名。女人之體、幼則從父母、少則從夫、老則從子」

(誹)老いては益壯なるべし 老年に至らば益壯者を凌ぐ意氣なかる可らず。後漢書馬援「丈夫爲志、窮當益堅、老當益壯」

(誹)老いて再び稚子となる 老年に及び、理解力など衰へて、再び小兒の如きさまとなる。曾呂利狂歌咄「入道して道二とぞいひける。老いて再び兒となるといふ事を思ひて、後に道兒とぞつきける」

おゆ (自動上) おやけるに同じ。きのふはけふの物語「松たけのおゆるをかくす吉田殿、わたくし物と人や云ふらん」

おゆどの 御湯殿 (名) ㊀ゆどの(湯殿)の敬稱。又、其處に給仕する女。長秋記元永元年五「洗御髮雜事、稍取出自御湯殿」丹波與作「由留木殿の御湯殿の子、しらべの姫」㊁次條に同じ。

おゆどのの-うへ 御湯殿上 (名) ㊀禁中、清涼殿の間の名。御湯殿の事を掌る女官の居る所。一說、御茶の湯など、常にしかけてある所。おゆどの。徒然草「雜・松茸などは、御湯殿の上にかかりたるもくるしからず中略中宮の御方の御湯殿の黑み棚に、雁の見えつるを」㊁室町將軍の大奥にて、御次の間の名。御茶の湯など沸かし置く所。

おゆどのの-にようくわん 御湯殿女官 (名) 前條に奉仕する女官。御臺盤所其の他の御用をも勤む。著聞廿「建保の頃、御湯殿の女官高倉が子に、七歳になるあこ法師といふ小童子ありけり」

おゆび 指 (名) ゆび(指)に同じ。および狂言(鬼)「香藥を透頂香ほど取り出だし、おゆびの腹にまんまと塗り」

おゆびぐ (名) 人之體、幼則從父母、少則從夫、老則從子。

およぎ 泳 游 (名) およぐこと。およぐ術。水泳。

およぎを かく 掻泳 およぐ(泳)に同じ。今昔三「片手を以て子を提げて、片手を以て游ぎを掻きて岸ざまに來て」

およぎ-ぶね 泳舟 (名) およぎに用ふるふね。

およぐ 泳 游 (自動四) ㊀肢體を働かして、水上に浮かび行く。類字鏡「泳・遊(遊術古曰泳同也)・游(村宇加夫又云游泳)」宇津保菊宴「いさごの浪をうちおよぎ、悲しき鳥につきにけり」源手習「池におよぐいを、山に鳴く鹿」㊁處世に巧みなり。地位・官職を失はず。

およし 老 (名) 古語。老いし人。眞淵次條を見よ。

およしを (副) 古語。しをの約そにて、およそその義。記神一說、およしは老いし人。眞淵 萬五「憶余斯遠(シオ)は、かくのみならし」

およずく (自動上) ㊀兒童の、年齡のわりに早く智慧づく。ませる。おとならしくなる。おとなしくなる。おとなめく。宇津保藤原「一の宮のわか宮の、今はおよずけて、きんひかまほしうし給ふに」源梅枝「此の御子の、およずけもておはする御かたち・心ばへ、ありがたく」㊁巧者らしくあり。大鏡下「院にならせ給ひて、都離れたる所なればといふこそ、餘りにおよずけたれ」㊂ちみにてはてならず。徒然草「畫は事そぎおよずけたる樣にてもありなん、夜はきらやかに花やかなるさうぞくいとよし」

およずけ (名) およずくること。又、其の人。榮華玉「東宮は二十三にぞおはしましける。とよなきほどの御およずけなり」

およずけ-もの (名) およずけたる人。およずけ。著聞廿「道良はおよずけたるものなり」

およそ 凡 (名、副) 〔およそその約〕㊀おほよそ(凡)に同じ。大鏡狂言石「かやうの大事の諸ひを、およそにしては叶はじと」㊁すべて。おしなべて。一般に。著聞廿「およそ君と臣とは水と魚との如し」

およづれ 妖 (名) 古語。次條の略。

およづれ-ごと 妖言 (名) 古語。怪異言。いつはりごと。えうげん(妖言)。

およづれ-びと 妖人 (名) 妖術をなし、妖言を放ちて、人を迷はす人。

およなが 御夜長 (名) ㊀女詞。禁中にて、御膳のおろしを、女中の夜食にくふこと。㊁やしよく(夜食)をいふ、女詞。

およはず-ながら 乍不及 (副) 及ばずとは思ひながら。不十分ながら。(謙遜)「及ばずながら盡力せん」

および 指 (名) ゆび(指)に同じ。和名三「指(由比奈岐天手指也)」勢語「そこなりける岩に、およびの血して書きつけける」

お-よび 御呼 (名) ㊀呼ぶことの敬語。おめし。㊁他人より招かることの敬語。おまねき。

および 及 (名) 及ぶこと。比ぶること。源紅葉「御輿の内も思ひやられて、いとど及びなきここちし給ふ」同明石「かくおよびなき心を思へる親たちも」

および 及 (接) ならびに。また。榮華(ぬひ)「五月十一日にぞ、左大將天下及び百官施行といふ宣旨くだりて」奥儀抄序「奈良の御時の萬葉集をはじめて、拾遺および金葉集に至るまで」

および 指 (名) ゆび(指)に同じ。和名三「指(由比奈岐天手指也)」勢語「そこなりける岩に、およびの血して書きつけける」

および-かかる 及掛 (自動四) 近よりかかる。近づきかかる。新六帖「ななそぢにおよびかかれる杖なれば、すがりてのみぞ足も立ちける」徒然草「人のうしろにさぶらふは、さま惡しくもおよびからず」

および-ぐるし 及苦 (形二) および難し。およびにくし。夫木三「山道やみのひろぎぬ織るはたの、およびぐるしき戀もするかな」

および-こし 及腰 (名) 居たるまま、體を屈めて手を延べ、物に及ぼさんとする態。續歌加留多(中宮藏)「横笛飛び立つ嬉しさの、女中おしのけ及び腰」炭俵集「卯の花やくらき柳の及びごし」

および-つく 及著 (自動四) 行きつく。とどく。達す。拾玉三「波の上に一つに見ゆる雲までは、及びつきぬる我が心かな」

および-ぬき 指貫 (名) ゆびぬき(指貫)に同じ。和名廿「鎖(於賀比)指沓、所以縫衣具也」名義抄「鎖(ヒヒヒヒ)ヒヒヒヒ。」

およぶ 及 (自動四) ㊀到る。とどく。

ゆきつく。達す。萬葉「ももへにも來及(ゆきつ)かもと思へかも、君が使の見れど眼かざらむ」宇津保(藤原)「岩の上にならびて生ふる松よりも、雲ゐにおよぶ枝もありなん」**二**手などを延ばして、とどくやうにす。さし出でてなす。遍昭集「女郎花の見えしを、およびて折りし程に」枕「枕がみなる扇を、わがもちたるして、およびて掻きよするが」清少納言集「遠くゐるたらん人の、さしおよびていふべきにもあらねば」**三**行き渡る。遍くとどく。源(帚木)「まして心のおよばんにしたがひては、何事もうしろみきこえんとなん思ひ給ふ」新六帖「さすがなる春のめぐみやおよびけん、三笠の森の藤の末葉に」**四**其れと比ぶ。しく。肩をならぶ。源(帚木)「なにがしがおよぶべきほどならねば、上が上は打ちおき侍りぬ」同(賢木)「すぐれて疵なき方の選らびにこそおよばざらめ、さる方にて捨てがたきものをば」**五**追ひかく。追ひつく。「悔ゆとも及ぶべからず」源(紅葉賀)「引きはなちて出で給ふを、せめておよびて」**六**終ひに其れとなる。「戰爭に及ぶ」「落城に及ぶ」**七**叶ふ。成る。新勅撰(戀二)「朝な朝なあまの棹さすうらふかみ、及ばぬ戀も我れはするかな」**八**必要なり。いる。著聞「御よるなれば、此の御文參らするに及ばず」

およぼし　(名)　かぶり物の一種。下文を見よ。長崎歳時記「一向宗御正忌とて、男子は肩衣を著し、女子は晒木綿或ひは布。西洋布の類を以て頭にかづき、是れをおよぼしといひ、俗にすみ手拭また角(つの)かくしと異名す」

およぼす　及　(他動サ)　及ぶやうになす。とどかす。到らす。關係す。字津保(俊蔭)「木中藤三分に わかちて、上の品は三寶よりはじめ奉りて、竹利大までにおよぼさん」

おより-こう　御寄講　(名)　一向宗の語。衆人寄り合ひて、舞ひ遊ぶ會。

お-よる　御夜　(名)　寢(ね)ぬことの敬語。おやすみ。辨内侍日記「御所もいまだ御よるにもならせおはしまさず、御手習などありて」中務内侍日記「いまだ御所は、御よるのほどにすべりて」

お-よる　(自動ラ)　いぬ(寢)の敬語。おやすみになる。御寢なる。著聞「月をも御覽ぜでおよるなれば、此の御文參らするに及ばず、もし急事ならば明日もて參れといはせて」

およろひ-ざ　御鎧著　(名)　主君の鎧を著けて供奉する役。主君の命ある時は脱ぎて之を奉る。

およん-なる　(自動ラ)　いぬ(寢)の敬語。およる(おひんなるの對)

おら　己　(代)　下等の人の用ふる自稱の代名詞。われら。おいら。狂言(山伏)「なんのかのとおっしゃれても、おらが畫飯はよそへずい」

おらぶ　(自動バ)　古語。悲しみて聲を放つ。啼き叫ぶ。雄叫ぶ。啼哭す。垂仁紀「叫(おらび)哭而自死之」孝德紀「啼(ていこく)叫(おらび)」萬「い仰ぎてさけび於良婢(おらび)」哭聲記(下號記)

おられかぜ　(名)　東或ひは東北の方より吹き來る颶風。肥前國平戸の方言。(松屋筆記)

おらんだいちご　(名)　【植】薔薇科、しろばなのへびいちご屬の多年生草本。莖は横臥し、纖細枝となる。葉は三箇の小葉より成る複葉にして、各小葉は楕圓形、著しき鋸齒を有す。春季、花軸を葉間より抽出し、白色の五瓣花を著け、總狀花序に排列す。果實は夏季に至りて肥大赤熟し、美味なり。近年舶載せる栽培草本なり。せいやういちご。いちご。

おらんだ-おしろい　和蘭白粉　(名)　白粉の一種。白粉・硫酸ばりうむ・を調合して製したるもの。

おらんだ-かいう　野芋　(名)　【植】天南星科、野芋屬の多年生草本。地下莖を有し、之より葉を生ず。葉はやや箭形、ばせうに似たる葉脈を有し、長き葉柄を具ふ。花莖は地下莖より生じ、長さ一尺餘。花は單性、雌雄同株、肉穗花序に排列し、雌花は下部に、雄花は上部に叢生し、一枚の大形白色の苞にて包擁せられ、八月頃開く。亞弗利加洲原産の草本にして、地下莖に毒を有すれども、觀賞用として栽培せらる。いしいも。くはずいも。

おらんだ-がらし　(名)　【植】みづたがらしの異名。

おらんだ-さじかくし　(名)　【植】まつばうど(石刃柏)の異名。

おらんだ-さゃうばいはふ　和蘭競賣法　(獨 Holländische Auktion)　(名)　【商】競賣法の一。賣手より代價を申し出でて、買手のあるまで漸次其の代價を引き下げ行ふもの。

おらんだ-けんげ　(名)　【植】しろつめくさの異名。

おらんだ-ごしつ　(名)　【植】うしたきさうの異名。

おらんだ-さう　和蘭草　(名)　【植】はこねさう(石長生)の異名。

おらんだ-せきちく　(名)　【植】あんじゃべるの異名。

おらんだ-ぜり　(名)　【植】繖形科、いぶきぜり屬の二年生草本。莖の高さ二尺。葉は羽狀複葉、各小葉は各三深裂し、齒牙を有す。花は淡綠色にて、複總花序に排列し、六七月開く。歐洲の原産にして、一種の芳香を有し、若き葉、殊に下部の葉及び根を食用とす。

おらんだ-せんにち　(名)　【植】菊科、おらんだせんにち屬の一年生草本。莖の高さ一二尺。葉は對生卵形、微鋸齒を有す。花は淡黄色にて、莖頂に頭狀花序に排列し、夏日開き、蕾は紅色を帶ぶ。東印度の原産にして、觀賞に供せらる。せんにちぎく。

おらんだ-たんさり　(名)　ずぼうとうに同じ。

おらんだ-な　(名)　【植】はぼたん(甘藍)の異名。

おらんだ-なでしこ　(名)　【植】あめりかなでしこの異名。

おらんだ-はくか　(名)　【植】唇形科、薄荷(はくか)屬の多年生草本。根莖を有す。莖は綠色にして平滑、葉は對生、卵形鋭頭、葉柄を有す。花は唇形花にて、輪繖花序に排列す。歐洲の原産なり。

おらんだ-びゆ　(名)　【植】はこし(破胡紙)の異名。

おらんだ-ふうろ　(名)　【植】毬牛兒苗科、おらんだふうろ屬の一年生草本。莖の高さ四寸乃至一尺、軟毛を有し、やや粘氣あり。葉は羽狀複葉、各小葉は又羽狀に分裂す。夏日、帶紫色の花を葉腋に生じ、繖形花序に排列す。歐洲の原産にして、近年舶載せる花卉なり。

おらんだ-へうじゅん　和蘭標準　(名)　課稅又は賣易の爲めに定めたる、砂糖の色合の標準。

おらんだ-まき　和蘭卷　(名)　菓子の名。紅梅餅の一種。

おらんだ-みづたがらし　(名)　【植】みづたがらしの異名。

おらんだ-みつば　(名)　【植】繖形科、おらんだみつば屬の二年生草本。莖の高さ二尺。葉は羽狀複葉、各小葉は各三深裂し、齒牙の裏を用ふるもあり。(服飾部類)

おり-あを　織襖　(名)　白き織物の狩衣。裏も白き平絹なるべし。諸大夫には練貫の裏を用ふるもあり。(服飾部類)　雅亮裝束抄「おりあを・うすあを中藤これらはみな白きすずしうらなり」

おり-いだす　織出　(他動サ)　織りて製出す。おりだす。新勅撰(秋上)「白露のおりいだす萩の下もみぢ、ころもにうつる秋はきにけり」

おり-いづ　織出　(他動ダ)　前條に同じ。新六帖「秋のかりつらも亂れずおり出でて、染めなす春の水の色かな」

おり-いと　織絲　(名)　織物の材料の絲。

おり-いる　織入　(他動ラ)　織りこむ。くみ入る。狂言(百姓)「汝等が名をおりいれて、三人して一首よめ」

おり-いろ　織色　(名)　**一**絲を染めて織りたる織物の名。甲斐絹・めくらじまの類。(染色の對)　**二**緋(ひ)絲と綠(みどり)絲と、色を替へて織りたるもの。紅梅・濃色・葡萄などの類。**三**淺黄色の濃きもの。近代の稱。(守貞漫稿)

おり-らすもの　織薄物　(名)　織色二の色淡きものなるべし。雅亮裝束抄「おりうす物といふは、くら人などもきる物なり」

おり-えび　織葡萄　(名)　赤と紫との絲にて織り出だしたるえび色。枕草子裝束抄「織葡萄は、經赤、緯紫」

おりおん　(英 Orion)　(名)　【天】星座の名。馭者星座の南方に位し、赤道の兩側に跨がりて、最も美麗なるもの。俗に三つ星と稱する三星は此の中に屬す。

おり-かく　織懸　(他動カ)　織りて引きわたす。金槐集「晉羽山もみぢ散らし、逢坂の關のを川に錦おりかく」續古今春上「けさ見れば霞のころも織りかけて、しづはた山に春はきにけり」

おり-かさね　織重　(名)　ふたへおり(二)重織に同じ。持統天皇歌軍法「織重ねの錦の帶」

おり-かふ　織變　(他動ハ)　變へて織る。織りて變はらす。國姓爺(九)「鑾輿・屬車の手車も、萬の錦に織りかへて」

おり-かへす　織返　(他動サ)　織りなほす。後撰(秋下)「秋風のうち吹くからに山も野も、なべて錦におりかへすかな」

おり-かも　織氈　(名)　織りたるかも。天武紀(下)「氈(かもせ)」羅氈記(紀明)

おり-かりぎぬ　織狩衣　(名)　織物の狩衣。雅亮裝束抄「おりかりぎぬ、ねりうらは附けぬことなり」

おり-きん　織金　(名)　きんらん(金襴)に同じ。

おり-こ　織子　(名)　はたやの、はたを織る人。

おり-こむ　織込　(他動マ)　模樣などを織り入る。

おり-こん　織紺　(名)　織物の一。經・緯共に木綿の紺絲にて織りたるもの。足袋の表などに用ふ。めくらじま。

おり-さま　織樣　(名)　織り方。織りやう。源(紅葉賀)「色もおりざまも、よのつねならず心ことなるを」

おり-じり　織尻　(名)　布帛など、織りゆきたる最後の部分。

おり-しりがい　織鞦　(名)　鞦の一種。しりがき(鞦)を見よ。坂東しりがい。馬具寸法記(鞍)「つづら切附の事。何にても紋をかきて可被用候中略然者、おりしりがいにてあるべし」

おり-すぢ　織筋　(名)　ねりぬきの一種。横に筋を太く織りたるもの。しま。運歩色葉「織筋」驢鹿明倫「小袖は織筋海板が、古へより本に著るもの。染小袖は略儀也」

おり-ぞこ　織底　(名)　經に細き絲、緯に頗る太き撚絲を用ひて、刺子の如く織りたる、堅牢なる綿布。晒らし、或ひは染めて足袋の底に用ふ。石底。

おり-だす　織出　(他動サ)　おりいだす(織出)に同じ。內大臣殿歌合「白露のおりだす萩の唐錦、鹿のよるよるころもなりけり」

おり-たつ　下立　(自動タ)　**一**下り行く。宇津保(吹上上)「舟どもに、めのこどもおりたちて、染めくさ洗へり」源(葵)「袖ぬるることのみづからぞうき」　**二**親しく事を行ふ。立ち入りて事を爲す。宇津保(藤原中)「右大將おりたちて、まつりごとし給ふ」源(夕顏)「人にも洩らさじと思ひ給ふれば、これみづからおりたちて」

おり-たび　織足袋　(名)　足袋の一種。下文を見よ。毛吹草(諸國名產)「摂津國津村木綿、同織足袋(足袋の)」

おり-ぢ　織地　(名)　織物の下地。海人藻芥「香袈裟は緞井びに織地也」

おり-つく　織附　(他動カ)　織りなして附く。織り出だす。圓融院扇合「沈の骨に、くちゝ葉の織物を張りて、それに例の扇の歌書くやうに、かなにおりつけたり」

おり-つぐ　織次　(他動ハ)　つづいて織る。織ることをやめず。萬七千名には人は云ふとも織次(つぎて)、わがはたものの白麻ごろも」

おり-つけ　織附　(名)　**一**織りつくること。織り出だしたること。又、其の部分。**二**布帛の織り始めの部分。

おり-つける　織附　(他動ヲ)　おりつく(織附)の口語。大藏狂言(法師)「我が宿の背戸の窓に打ち向かひて、六よみ布を織りつ

け」

おり-づまり 織詰 (名) 織物を織る時、經絲と織り上がりたる布帛との長さの差。

おり-て 織手 (名) 機を織る人。中務省式「織部司四十八人(職手四)」宇津保吹上「ここは織物の所、はた物ども多くたてて、おりて廿人ばかりゐたり」

おり-ど 織戸 (名) をりど(折戸)を見よ。庭訓往來三月「遣戸・妻戸・織戸」

おり-どの 織殿 (名) 機(ハタ)を織る殿舎。新任辨官抄「績麻織殿(在殿)」

おり-な 下名 (名) 敍位の時、四位以下に敍せらるる人の姓名を書きて、中務・兵部二省の丞に下だすこと。西宮記三月「上卿著議所、召二省丞一給二下名一」江次第「七「若又有二追敍人一者、内辨令二藏人申下下名一、令二入眼參議書入一」

おり-のこし 下貽 (名) 雙六の類なるべし。撮壤集「圍碁・將棋・雙六・下貽(オリコシ)・重碁」

おり-のべ 織延 (名) おりのべぎぬ(織延絹)の略。平家四「織延べを一きれも得ぬ我れ等さへ、薄恥をかく數に入るかな」

おりのべ-ぎぬ 織延絹 (名) 北國に產する絹織物。普通の織物よりは寸尺長きものなるべし。平家四、殿上闕官「北國の織延絹三千匹」

おりのべ-ごろも 織延衣 (名) おりのべぎぬにて造りたる衣。平家四「山法師織延衣薄くして、恥をばえこそ隱さざりけれ」

おり-のぼり 下上 (名) 一おりのぼること。下だることと上ぼることと。土佐日記「みな人舟のとまる所に、子をいだきつつおりのぼりす」二街道の往復。博多小女郎波枕三「貴買ひのため、筑前へは毎年のおりのぼり」

おり-のぼる 下上 (自動四) 下り又上ぼる。上下す。昇降す。宇津保俊蔭「高き山、深き谷を、おりのぼりまかりありきて」

おり-のり 下乘 (名) 一降ることと乘ることと。あがりおり。「馬のおりのり」二身のやりば。身の處置。三世相錦繡文章「それより大事の阿園がおりのり」

おり-は 下際 (名) おるる場合。おるる機會。淀鯉出世瀧徳三「鯉も瀧へ登って、今ではどうもおりはがない」

おり-ば 下場 (名) おるる場所。

おり-はへ 織延 (副) 織り延べて。引きつづけて長く。彼方より此方にわたりて。おりはへて。師尹千首「浦遠き雜波のみつの鹽がれに、おりはへあさるあまの少女ど」夫木十「旅人のたち野の原の唐錦、おりはへさらす秋萩の花」續拾遺雜十「たつた姫今やこずゑの唐錦、おりはへ秋の色ぞしぐるる」

おりはへ-て 織延 (副) 前條に同じ。古今雜上「たがみそぎゆふつげ鳥か唐衣、たつたの山におりはへてなく」續後拾遺雜中「雲のたて霞のぬきにおりはへて、花は錦の名にぞ立ちける」

おり-ひとへ 織一重 (名) 古への裝束にて、紅・蘇芳・女郎花などの色に織り出だしたる單衣。著聞十「女郎花の織りひとへを、なまじひに打ちかけられける」

おり-ひめ 織姫 (名) 一はたを織る姫。著聞「われは秘樂世界の教主なり、織姫は我が左の脇の弟子觀世香也」二次條に同じ。川中島合戰四「そなたは織姫、此の橋は二人が中の烏鵲の橋」

おりひめ-ぼし 織女星 (名) たなばた(棚機)に同じ。しょくぢょせい。

おり-ぶ (名) 【植】おれーぶ(阿列布)の異名。

おり-べ 織部 (名) 一ござ包の乘物。二次條の略。料理物語「玉子酒中略玉子一つに、酒を織部に三盃入れてよし」三おりべやき(織部燒)の略。

おりべ-さかづき 織部盃 (名) おりべやきの大杯。貞德獨吟百韵「當世おりべ盃としてあり。近來の事ながら、天下通用にしていふより取り用ふ」

おりべ-づかさ 織部司 (名) おりべのつかさ(織部司)に同じ。和名五「織部司(豆乎利倍乃つかさ)」

おりべ-の-かみ 織部正 (名) 織部司の長官。拾芥抄「織部正(オリノカミ)」百寮訓要和歌「織部正」

おりべ-の-さくわん 織部令史 (名) 織部司の主典。

おりべ-の-じょう 織部佑 (名) 織部司の判官。

おりべ-の-つかさ 織部司 (名) 古へ大藏省被管の司。織物・染物などのことを掌る。新六帖五「ももしきや大内山のうしとらに、おりべのつかさあや奉る」

おりべ-ぼん 織部本 (名) 天保年間、觀世織部の印行したる謠本。

おりべ-やき 織部燒 (名) 陶器の一種。古田織部正の創めて燒き出だしたるもの。

おりべ-りう 織部流 (名) 茶道の流派の一。古田織部正より傳來したるもの。

おり-まず 織交 (他動下二) 交ぜて織りこむ。百合若大臣野守鏡「柏に根笹織り交ぜ」

おり-まぜ (名) 七月の末ごろ吹く風の稱。

おり-まぜる 織交 (他動下一) おりまず(織交)の口語。

おり-みだす 織亂 (他動四) おりみだるやうにす。百合若大臣野守鏡「萩と薄を織り遊べ、織り遊べ、織り亂したるその中に」

おり-みだる 下亂 (自動下二) 亂れて下る。玉藻集三「白雲はゆふべの山におりみだれ、なかば消えゆく峯のむらさめ」

おり-みだる 織亂 (他動四) こみ入れて織る。枕四「えび染めいと濃きさしぬきに、藤の折枝ことごとしくおりみだりて」後撰秋上「秋くれば野もせに蟲のおり亂る、聲のあやをば誰れかきるらん」

おり-め 織女 (名) はたおりをんな。

おり-め 織子。

おり-め 織目 (名) 織りたる筋。織物の地合。

おり-もの 織物 (名) 櫻(ハタ)にかけて織りたる布帛の總稱。欽明紀「七織(オリ)帳」和名三「綺一云詮利毛能又、似錦而薄者也」竹取「いとをもしろくあやら綾おり物に繪をかきて」

おり-もの 下物 (名) 一つきやく。つきのもの。月經。二產の時のあとさん。

おりもの-いと 織物絲 (名) 織物に織る絲。(織絲の對)

おりもの-し 織物師 (名) 機織を業とする人。

おりもの-せうびぜい 織物消費稅 (名) 我が國の消費稅の一。織物に課するもの。非常特別稅法(昭三條項四號)「織物消費稅」

おり-もん 織紋 (名) 紋柄を織り出だしたるもの。建武式目追加「禁制中略おりもんの小袖」

おり-や 織屋 (名) 機織を業とする家。はたや。

おり-ゆ 下湯 (名) 入浴する湯。保元(鳥羽)「温疾大切の間、古き湯屋を借りて、常に下り湯をぞしける」

おりる 降下 (自動上一) おる(降)の口語。

おり-ぬ 下居 (名) おりゐること。謠(野宿)「車宿り・馬留め、爰より花車、おりゐの衣は磨湯」

おりゐの-みかど 下居帝 (名) 位を退き給ひし帝。上皇。太上皇。源若菜「御たうばりのごふなどこそ、みな同じごと、おりゐのみかどにひとしく定まり給へれど」

おりゐの-みや 下居宮 (名) 上皇の御所。仙洞御所。

おりゐる 下居 (自動上一) 一下におりて居る。下にさがりて居る。敏達紀「下(オリ)泊瀨中流」萬二「朝ぐもり日の入りゆけば、みたたしし島に下座(オリ)てなげきつるかも」祝詞式(祈年)「白雲(櫻)隱坐(オリ)向伏限」二位を退き給ふ。宇津保(藤原)「その時のみかどもおりゐ給ふ」源(葵)「其の夜、齋院もおりゐ給ひて、后ばらの女三宮ゐ給ひぬ」

おる 降下 (自動上一) 一高きより低きへ移り行く。上より下へさがる。くだる。さがる。土佐日記「よする波うちもよせなん、わが戀ふる人わすれ貝おりてひろはん」枕二「きんなども、天人おるばかりひきて」二貴人の御前より退出す。御前をたつ。參語「曹司におり給へれば」枕「車の入らざりつることいひ侍ると申しておりぬ」三位を退く。職を罷む。枕三「藏人おりたる人」大鏡十「帝おりさせ給ふと見ゆる天變ありつるが」四降・霜などを降る。ふる。

おる (自動下二) おろかなるさまなり。源少女「かしこがり給へど人の親よ、おのづから、おれたる事こそ出でてくべかめれ」同夕霧「かく翁のなにがしまもりけんやうに、おれまどひたれば、いとぞ口をしき」

おる 織 (他動四) 一絲を機(ハタ)にかけ、經(タテ)・緯(ヨコ)に組み合はせて布帛などを造る。仁德紀「めとりが於瑠(タテ)かなはた」古今雜下「霜のたて露のぬきこそ弱からし、山の錦のおれがかつ散る」二蒔・竹などを、細き物を編みて、筵などを造る。三人を交じへて組みたつ。組み合はす。

おり きる 織著 衣物に織りて著る。萬三「ひたさをを、もには織服(オリ)て」

おるがん (英 Organ) (名) 西洋の樂器。內部に金屬製の笛を裝置し、踏板を踏み鞴を動かして、氣流を吹き入れて發音せしむるもの。學校・教會などにて奏樂の時に用ふ。風琴。

おれ 己 (代) 一自稱の代名詞。多く、同輩又は其の以下に對しいふ詞。われ。著聞三「おれが母にて候ものこそ、姉よりも好く候へ」二狂言(酒)「おのれは、おれを見知ったか」三對稱の代名詞。賤しめていふ詞。なんぢ。記上「遙望呼二中略是奴也一」神武紀「虜爾所造屋、稱二自居之處一云云」枕十「ほとときすよ、おれよ、かやつよ、おれ鳴きてぞ、われは田にたつ」

おれーぶ 阿列布 【植】木犀科、阿列布屬の常綠喬木。幹の高さ一丈五尺。葉は披針形或ひは長楕圓形、全綠、淡綠色。花は春季開き、小形にて白色、圓錐花序に排列す。楕圓形の核果を結び、一箇の種子を藏す。果實は食用とし、又之より油を搾りて阿列布油と稱す。おりぶ。

おれーぶゆ 阿列布油 (英 Olive oil) (名) おれーぶの果實より採取したる油。食用・藥用また石鹼を製する原料などとす。おりーぶ油。橄欖油。

おれいん-さん (名) 【化】$C_{18}H_{34}O_2$ ぐりせりんえすてる・となりて脂肪及び油類の一成分をなすものにて、常溫に於いては油狀をなす不飽和の有機酸。

おれう 御寮 (名) 〔お寮人の略〕びくに・比丘尼の稱。狂言比丘尼「此の御れうな、皆おあんおあんと仰せらるる程に」同鬚「身共にお日かけらるるおれう樣に、目出度い、ぶっきな御方がござる」

おれ-おれし (形) おろかなるさまなり。おれたり。源手習「おれおれしき人の心にて、えさかしくしひてものたまはず」

おれ-さま 己樣 (代) おのれ自らを尊びていふ語。津國女夫池千壽(其世)「誰れさまと、己れさまと」

おれ-れれ (名) 一何やかや。彼れ此れ。傾城酒呑童子三「人のおれそれ、世の中の義理・仁義を知るが最期、貧乏神がのりうつる」二お屋敷さまへ上げておきますと、おれそれが何處か違って參ります」

おれっ-ち (代) おれ(己)の複數。おれたち。

おれ-もの (名) おれたるもの。愚なる人。蜻蛉日記四「わが一人のおれものにて向かひ居たれば、むげにくんじはてにたりと見えけん」源(夕霧)「ふかきらうなく見ゆるおれものも、さるべきにて、書き打つたぐひも出でくれど」

おれら 己等 (代) われ。われら。讃岐典侍日記「御前のおはして、いざいざ、黑戶の道をおれら知らぬに、教へよと仰せられて」

おれんじ (英 Orange) (名) 【植】みかん(柑)の異名。

おろ (接頭) 一聊か・少しなどの意を表はす語。今昔三「三日計りを隔てて、杖目おろ愈ゆる程に、前の所に將行きて、亦同じ樣に贈物に寄せて、本の杖目打ければ」二たしかならぬ意を表はす語。おろおろ。「おろおぼえ」

おろ-おぼえ (名) ぼんやりと記憶し居ること。ふたしかなる記憶。丹波與作上「父樣が殿樣のお氣に違うて國をお出でなされたは、三つの時で、おろ覺え」

おろ-おろ (副) 一物事の十分ならざる意にいふ語。不十分ながら。覺束なくは あれど。宇治拾遺「さきの翁よりは、天骨もなく、おろおろかなでたりければ」古事談三「笛や吹くと令問御ければ、おろおろ吹き候」二まばらなる狀にいふ語。宇治拾遺三「翁の髮もはげて、白きとても、おろおろある頭に、袋の名ぼしをひきいれて」

おろ-おろ (副) 涙もろき狀、又泣聲のうるむ狀にいふ語。檜樹三上「睨む眼の內おろおろと、女は涙脆かりし」

おろ-おろ-ごゑ (名) おろおろと泣く時の聲。うるみたる聲。

おろ-おろ-なみだ (名) おろおろ泣きて涙を流すこと。生玉心中上「おろおろ涙の腹立聲」

おろか 愚 (名・副) 一智能のにぶきこと。理解の心を欠しきこと。ばか。あはう。宇鏡「闇(ウツケナリ)」名義抄「頑(オロカ)」宇鏡集「蠢(オロカナリ)」宇津保(藤原上)「この香を聞くに、おろかなるものは忽ちに心さとく明かなり」あんたー・あんだら(京)・あんがう・せいぶ(伊勢)だらけ(紀中)だらず(因幡)だぼう(備後)

ぐだま（豊州をうかましい豊州おごさ 豊州物類呼称）二劣る、又わろき意を表はす語。四十二物「春と秋とは、いづれおろかはあらねども」

おろか （副）一おろそか。おほろか。一通り。なみ。萬一「於呂可（オロカ）にぞ我れは思ひしをふの浦の、ありそのめぐり見れど厭かずけり」竹取「御門の御使をば、いかでかおろかにせん」古今序二おろかなる涙ぞ袖に玉はなす、われはせきあへず、たぎつ瀬なれば」二いふに足らず。いふまでもなく。物の數ならず。國姓爺竹本「虎はおろか、象でも鬼でも一捻ぎ」

おろか-おひ （名）古語。ひつぎ（櫬）に同じ。和名「櫬（於路加波比）、俗自生稻也」

おろか-け 愚氣（副）おろかなるやうかおろかさう。

おろかさ 愚（名）おろかなる度合。おろかなること。國姓爺「謀反の胸を固めしと、知らし召されぬ愚かさよ」

おろか-し 愚（形）おろかなり。愚鈍なり。名義抄「愚（ヲロカニ）」黒住吉「主計の介とて七十餘りなる翁の、目うちたただれおろかしきが侍るなり」

おろか-びと 愚人（名）おろかなる人。ぐどん。允恭紀「帝位者鴻業也中略豈下愚（ヲロカビト）之任乎」

おろか-もの 愚者（名）おろかなるもの。愚物。ぐどや。

おろく 阿六（名）次條の略。

おろく-ぐし 阿六櫛（名）昔、信濃國木曾にて、おろくといふ女の始めて作り出だしたる櫛。

おろけ （自動）古語。心うつく。おろかになる。景行紀「失意（ヲロケ）如醉」名義抄「托（オロケリ）」

おろし 下（名）一おろすこと。おろしたること。二擦りくづすこと。すりくだくこと。又、其の物。「大根おろし」「わさびおろし」三神佛の供物のおさがり、又は祭き人の飲食物の殘り、又、使用後の物品。おさがり。おのこり。おすべり。古今雜上「瓶を持たせて、后の宮の御方に、おほみきのおろしと聞こえに奉りたりけるを」枕「我れは生まれさせ給ひしよりいみじうつかうまつれど、まだおろしの御ぞ一つ賜はぬぞ」四新しき品の用ひ始め。五高き處より吹きおろす風。山家集「おぼつかな伊吹おろしの風さきに、あさづま舟はあひやしぬらん」夫木竹「けさ見ればたつた川原の川おろし、さそふ紅葉を波ぞ織りける」蹴。六おろしどし（蹴子）の略。新羅社服忌令「下子（オロシ）三箇月（以前七月）四箇月（以後七月）」七おろしうり（卸賣）の略。卸。

おろし-あし 下足（名）馬の左の前後の足を一度にはとび、次に右の前後の足を一度にはこぶこと。

おろし-あゆみ 下歩（名）徐かに練りあるくこと。傾城反魂香「太夫職中略おろし歩みの道中は、花の立ち木のその儘に、ぬめり出でたる如くなり」

おろし-うま 下馬（名）おろしあしをする馬。

おろし-うり 卸賣（名）生産者又は輸入者より、一時に多額の商品を仕入れて、これを小賣商人に賣り渡すこと。又、其の人。おろし。（小賣の對）營業稅法第二「物品の卸賣又は小賣を爲す者」

おろしうりし-やう 卸賣商（名）卸賣をなす商業。又、其の商人。

おろしうりし-やうけふ 卸賣商業（名）卸賣をなす商業。卸賣商。

おろしうりし-やうにん 卸賣商人（名）卸賣商業を營む人。卸賣商。民法第百七十「卸賣商人」

おろしうりし-にん 卸賣人（名）前條に同じ。阿片法第五乃至第七條「卸賣人」

おろしうり-ねだん 卸賣値段（名）卸賣商が小賣商に賣り渡す値段。小賣値段より、幾割か廉價なるを常とす。卸値段。卸値。（小賣値段の對）

おろし-え 下枝（名）切りおろしたる枝。千載春上「中院にありけるを、又の年二月ばかり、花咲きたるおろし枝に結ひつけて」

おろし-えだ 下枝（名）前條に同じ。行宗集「梅のおろしえだ、一とせとりて植ゑたるが」

おろし-がね 下印（名）牛馬の飼育地。宗五大雙紙「馬をよそへ遣はし候狀に中略先づ本印（ホンヰン）を書きて、同じく下印を書くべし」

おろし-ぐすり 墮藥（名）墮胎せしむる爲めに用ふる藥。用明天皇職人鑑「おろし藥を飲ませしに、かへって平産しけるは」

おろし-ご 墮子（名）だたい（墮胎）、又はうざん（流産）に同じ。籠中抄「おろしご、四月より後は三十日、三月よりさきは七日」

おろし-ごむ 下籠（他動）格子など、皆おろしてたてこむ。宇津保「廣き家に、やども多かるに、人はみな住みあさりてこそ侍りしか、人音もせず、おろしこめて、草木ばかりぞありつる」源夕顔「かいまみせしさうじの穴も思ひ出でらるれば、寄りて見給へど、この中をばおろしこめたればいとかひなし」

おろし-ごめ 下米（名）おろしの米。おさがりの飯。宇治拾遺「大髮のおろし米とて、給仕したる怪勤の者どもの食ひけるなり」

おろし-ざく 卸作（名）こさく（小作）に同じ。地方凡例錄「小作のことを下作・入作・請作・捻作・卸作とも唱へ、國所の俚語にて種種に云ひ習はすといへども、何れも小作のこと。直小作・別小作・名田小作・永小作などと、色色の定め方に遣ひあり」

おろし-だいこん 下大根（名）大根を、わさびおろしにてすりたるもの。

おろし-なみ 卸並（名）商品の賣値の、卸賣と同樣なること。

おろし-ね 卸値（名）おろしうりねだん（卸賣値段）の略。おろしねだん。

おろし-ねだん 卸値段（名）前條に同じ。

おろし-の-うま 下馬（名）おろしうま（下馬）に同じ。

おろし-の-かぜ 嵐風（名）おろし（下）五に同じ。萬三「君が見む其の日までには、やま下之風（オロシノカゼ）な吹きそと」元良親王集「うらみつつなげきのかたき山ならば、おろしの風のはやく忘れね」

おろしまわく （名）【植】木本科、山竹（ヤブ）屬の多年生草本。ねざさの變種。高さ僅かに數寸にて細し。葉は小にして密集し、淡色なり。花を生ずること極めて稀なり。我が國、各地の庭園に栽培せらる。

おろし-もの 下物（名）神物の供物、又は饗膳などのおさがり。内匠寮式「下食（オロシモノ）」侍中群要「下物（大盤・子所・檢案・奏名・御膳）」

おろしもの の うつは 下物器（名）おろしものを入るる器。江次第六三「盃、其西立入下物器（其雜物）」

おろしもの-の-つかさ 監物 下物職（名）けんもつ（監物）に同じ。持統紀「監物（ヒトリノカミ）」續紀三大寶元年「詔始任下物職（オロシモノノツカサ）」

おろしや 下矢（名）低き方へ向かひて射おろす矢。おとしや。盛衰記廿八敎「兵共、櫓より下し矢に射る」

おろす 下（他動）一高きより低きに移す。下へ遣る。くだす。神代紀「以天之瓊矛指下而（オロシ）探之」竹取「集まりてとくおろさんとて」二乘れ下ぐ。さぐ。枕「神おどろおどろしう鳴りたれば、物も覺えず、ただおろしておろす」三投げ入れて、沈ましむ。宇津保祭使「御前の池に網おろし、鵜おろして鯉・鮒とらせ」拾遺雜賀「みそぎある今日からさきにおろす網は、神のうけひくしるしなりけり」四陸より水に移す。伊勢集「中務の宮の家の池に、舟をつくりて、おろしはじめて遊びけるに」五切りおとす。切り裁つ。萬三「青柳の枝きり於呂之（オロシ）ゆたね蒔き、ゆゆしき君に戀ひわたるかも」宇治拾遺「猪を、生けながらおろしけるを見て」六剝り去る。剝る。源若菜「かしらもおろし侍りにけるを」大和物語「御ぐしおろし給ひければ、やがて御ともにかしらおろしてけり」七高き處、又上手より吹きくだす。千載冬下「みむろ山おろすあらしのさびしきに、妻とふ鹿の聲たぐふなり」八位を退かしむ。官位を低くす。九まからす。退去せしむ。源帚木「皆しもやにおろし侍りぬるを」十擦りくづす。すりくだく。「おろしにてわさびをおろす」「藥研にて藥をおろす」宇治拾遺「一件の金を取りて、袖に包みて家に歸りぬ。おろして見ければ、きらきらとして、まことの金なりければ」十一新しき品を用ひ始む。取り出だして使用す。「筆をおろす」宇津保礼儀「来は西の御藏に三百石積まれたり。おろして使はる」同藤原「みづからの料には、三合のよねおろして食ひつつ」十二墮胎をせさす。元輔集「男の人の國にまかるほどに、見をおろしてける女の」十三神佛の供物、又は祭き人の飲食物の殘り、又使用したる物品を拜領す。おさがりをいただく。宇津保礼儀「ここにておろしをものせよとて、おろさせ給ふ」源藤裏「なにがしがおろしてもてまからん、見るかひも侍らじかし」十四人にまかせて爲さしむ。うけおはせす。「おろして小作にす」十五おろしうりに賣る。十六咎む。いひ貶す。制止す。源少女「おほなおほなかはらけ取り給へるを、あさましうとがめ出でつつおろす」同夕顔「ここにても又おろしのしるものどもありてめざまし、けれど、少しも臆せず讀みはて給ひつ」十七神おろしをなす。砂石集「大明神をおろしまゐらせて、御託宣を仰ぐべし」

おろす 織（他動）古語。織らす。織り給ふ。記「めどりの我がおほきみの渚呂須（オロス）機、誰がたねろかも」

おろ-すう （他動）古語。おろしすう。萬十一「雜波津にみ船於呂須（オロス）やそかぬき、今は漕ぎぬといもに告げこそ」

おろせ （名）一次條の略。京阪の遊里の語。色道大鑑「おろせ。是れも駕乘物の事なり」二駕籠を昇くもの。かごかき。壽門松「おろせ・揚屋の附け屆け」色里案内鳥屋「卸せとは、此の里の籠かき也。揚屋・茶屋など、銀拂ひの請合するものなり」

おろせ-かご （名）駕籠。京阪の遊里の語。風流曲三味線「おろせかごにも乘らず、足を宙にして宿へ歸り」

おろせ-やど （名）駕籠かきの詰め居る所。風流曲三味線「浮世小路のおろせ宿の勘吉」

おろ-そか 疎（名、副）一なほざり。かりそめ。あらあらしく。疎略。不行屆。乘仁紀「微細未探其源根、以粗（オロソ）留於枝葉」源桐壺「おほやけごとにつかうまつれる、おろそかなる事もこそと」蜻蛉加留多「奉公において、露ほどもおろそかの無い横笛」二寡大なり。細密に渉らず。宇鏡「恢恢（豊也広き貌）」三揖し。よからず。宇治拾遺「前生の運おろそかにして、身に過ぎたる利生にあづからず」

おろ-なく （自動）おろおろ泣く。盛衰記「入道は口説き立てられて、おろ泣き色にはおはしけれども、猶へらぬ體にて」

おろぬく （他動）うろぬくに同じ。

おろね-ぶる （自動）かりそめに眠る。宇治拾遺「足を打ちひろげておろねぶりたるを」

おろ-ぶり （名）おろふること。小雨。微雨。

おろ-ふる （自動）少しづつふる。夫木「ながむれば春ならねども霞みけり、雪おろふれる遠き野の里」

おろ-もの 愚者（名）おろかなるもの。愚人。

おろ-よし （形）一少しくよし。やや可なり。町人襲「おろよし。少しよきをいふ。おろかによしといふことにや」二わろし（惡）をいふ、備前及び九州の方言。膝栗毛「客共に向かって、あんがいおろよいことぬかいて、よかばいものか」

おわし （名）御足（ヲアシ）の訛り。錢。

おわたし 御渡（名）でんがく（田樂）をいふ、女詞。

おわたし-がき 御渡書（名）江戸時代、老中・若年寄より申渡しの書附。

おわりよ （感）負はれよう。背負はれたし。一代女「子供の面影、九十五六ほども立ちならび、靡のあやぎれも無く、おわりよ、おわりよと泣きぬ」

おわれ 御我（代）對偶の代名詞、われ（我）の敬語。汝。君。見聞集「おわれの里の左衞門四郎殿、御經宗にておはするか」

おわ-ねど 御居處（名）しり（臀）をいふ、女詞。

おわ-ねさ 御會式（名）ゑしき（會式）の敬語。おめいく（御影供）。

おわ-をりぶぎやう 御折奉行（名）おさかづきだいおをりぶぎやう（御盃臺御折奉行）に同じ。

おん 恩（名）めぐみ。いつくしみ。なさけ。朗詠「心爲恩恵、命依義輕」宇津保俊蔭「母のおんのかなしく、乳ぶさの戀しさになん、ゐて參りつる」禮記「喪祭之禮、所以明臣子之恩」史記老莊申韓傳「其極慘礉少恩」

おん にうける 受恩 恩として身に受く。恩に思ふ。恩にきる。傾城反魂香「葛城が遣手になって出て、請け返答をしてたも、恩に受けうと云ひければ」

おん に かく 掛恩 恩を施したるをほこる。

おん に きす 著恩 恩にかく。堀河狂歌集「路の字を露と名附けし烏帽子親は、雨かむりをや恩にきすらん」

おん に きせる 著恩 前條の口語。

おん に きる 著恩 おんにうける受恩に同じ。春花五大力「一生の御恩にきますほどに、皆さんの手前は、今お頼み申したやうに、譯の有る體に見せて下ださりませ」

おん をうける 受恩 前條に同じ。孕常磐「一人の靡は屆かぬさうな、同音に申してくれ、恩をうけう、頼むといへば」

（諺）恩の死にはせねども義理の死にはする 次條に同じ。大織冠「恩の死にはせねども、義理の死にはするといふ」

（諺）恩の死にはせねども情の死にをする　恩を報ぜんとて死するものは少なけれども、人情の爲めには命を捨つ。毛吹草「恩の死にはせねども情の死にをする」

（諺）恩の主より情の主　恩人よりも、情をかけたる人を思ふこと深しとの意。

（諺）恩の腹は切らねど情の腰は切る　恩の死にはせねども情の死にをするに同じ。世話盡「恩の腹は切らねど情の腰は切る」

（諺）恩を仇　恩に報ゆるに仇を以てすること。報ゆる道にたがふ譬へ。源氏冷泉節「仇を恩にて報ずるとこそはいへ、恩を仇にて報ずるとは、何の道にかあるべきぞ」

おん　一音　（名）　一【理】物體の振動に依りて起こる、聽官の感覺。おと。音響。二漢字の字音。調の對。職員令「大學博士二人（掌教）」三音聲。こゑ。「大音に呼ぶ」四軍純なる音聲。「拗音」「清音」五韵の調子。ねいろ。

おんの　そくど　音速度　【理】音波の波及する速度。一秒間九七一千一百尺。

おんの　つよさ　音強　【理】音の大小。振幅の大小に關係し、同一發音體にては、其の距離に關係す。

おんの　てうわ　音調和　【理】振動の極めて簡單なる二つ以上の發音體より同時に發する音が、互ひに相調和して、聽官に愉快なる感覺を與ふる現象。

おんの　はきふ　音波及　【理】發音體の振動が、空氣其の他、發音體を圍繞する媒介物に疎密波を傳播すること。

おんの　はんしゃ　音反射　【理】音波が或る物體に衝突するとき、投射角に等しき反射角を以て反射する現象。山彦の類。

おん　一蔭　（名）　父祖の遺勳によりて位階を賜ふこと。選叙令「凡授位者（中略）唯以蔭出身、皆限年廿一以上」

おん　（感）　啞者などのうめく聲。おお。おお。大鏡狂言「三人（流）「何ちや、高札の表について來た啞ちや。おんおん」

おん　御　（接頭）　竹取「御身のけさう、いといたくして」同「御返りごと申すやう」宇津保俊蔭「あやしく、などか、御さまの例ならずおはします」

おん-あい　一恩愛　（名）　めぐみ。いつくしみ。取替「おんあいの思ひといふも、佛だにたけき事に說き給へるに」漢書「恩愛寢薄」

おん-あびらうんけん　一唵阿毘羅吽欠　（句）　次條の略。諸安「熊野權現の御獄を當たらん事、立ちどころに於いて疑ひあるべからず、唵阿毘羅吽欠と數珠さらさらと押しもめば」

おんあびらうんけん-そばか　一唵阿毘羅吽欠娑婆呵　（句）　〔唵は歸命、阿毘羅吽欠は地水火風空、娑婆呵は善說の義と〕大日の眞言。呪文のことば。諸安「唵呼嚕呼嚕呼嚕旋茶利摩登枳、唵阿毘羅吽欠娑婆呵」

おん-いる　御入　（自動）　あり。御座る。諸八「旅人は都の人にて御入り候が」

おん-かい　一音階　（名）　一定の音程の間に排列したる標準音の階段。

おん-かう　一恩降　（名）　古昔、慶賀・祥瑞・災異等ある時、全國の死囚を、本刑より一等減降すること。

おん-かうぐすり　御河藥　（名）　おんかはぐすり（御河藥）に同じ。

おん-がく　一音學　（名）　一漢字の音韻を研究する學問。二おんきやうがく（音響學）に同じ。

おん-がく　一音樂　（名）　一樂器又は肉聲より發する樂音を、美的に調和せしめて、人の情想を表はし、又聽覺に訴へて、美感を起こさしむるもの。後漢書「更乞和親」並請「音樂」二笛・簫・樂などにて奏する樂。公事根源「試樂は中の まづ音樂を整へ試むる心なり」

おんがく-か　一音樂家　（名）　音樂の專門の人。音樂に長じたる人。

おんがく-がくかう　一音樂學校　（名）　音樂に關する理論及び技術を教授する學校。

おんがく-し　一音樂師　（名）　次條に同じ。

おんがく-しゃ　一音樂者　（名）　おんがく（音樂家）に同じ。

おんがく-たい　一音樂隊　（名）　吹奏樂器及び聲樂器を用ひて音樂を奏する團體。樂隊。

おんがく-だう　一音樂堂　（名）　音樂を奏する爲めに設けたる堂。樂堂。

おん-かた　御方　（名）　一きよしよ（居處）の敬語。源澪「たち出でて、御かたに入り給へれば」同少女「各干に餘り給ひて後は、御方異にて」二きじん（貴人）の敬稱。落窪「きんだちともいはず、御方とはましていはせ給ふべくもあらず」

おんかた-ごしょ　御方御所　（名）　おかたごしよ（御方御所）に同じ。

おん-かはぐすり　御河藥　（名）　古昔、主上の御沐浴の時に奉る藥。白米なりともいひ、或ひは薫藥なりともいふ。おんかうぐすり。江次第「十五・十二「承保供御河藥（入土器）」日中行事「御湯（中略）四あしにする御かはぐすりを取りてまゐらせて」

おん-かふ　一恩狎　（名）　したしみ狎れること。なじみ。劉峻廣文「莫不締恩狎」

おん-がへし　恩返　（名）　受けたる恩をかへすこと。おんはうじ。報恩。

おん-がましし　（形二）　恩あるらし。情らしし。きのふはけふの物語「我れ等に寺を讓らうとて、恩がましく申され候へども」

おん-かん　一恩閑　（名）　人より遣はされたる書翰の敬稱。下學集「恩閑」

おん-がん　一恩顏　（名）　いつくしみある御顏。諸小「我恩顏を拜せねば、御戀しさも一つ」

おん-ぎ　一恩義　恩誼　（名）　恩愛のあつきこと。詩經「恩義之顯、亦韓韓然」曹植詩「與君初婚時、結髮恩義深」

おん-ぎ　一音義　（名）　一音語の、音と意義と。隋書「禮記音義隱一卷、謝氏撰」同「魏志音義一卷、盧宗道撰」二一音ごとに有する意味。

おんぎ-がく　一音義學　（名）　音語の音の意義につきて研究する學問。

おんぎ-せつ　一音義說　（名）　國語の音の意義に、一一固有の意義ありといふ說。

おん-きふ　一恩給　（名）　一恩賞として、祿などを給はること。保元「恩給に申し替ふるとも、たとひ我が身を捨つるとも、いかでか是れを救はざらん」東鑑「治三年八月八日「自鎌倉殿（頼朝）非恩給之所、何以令致押領乎」二一定の條件を具備して、官職を退きたる官吏に、政府が一定の金額を終身給與すること。又、その金額。官吏恩給法「恩給」

おんきふ-がく　一恩給額　（名）　恩給の金額。殊に一箇年間に於ける恩給の金額の稱。官吏恩給法第十一「退官現時の俸給前後相同しからざるときは前官年數を後官の年數に通算し後官に對する恩給額と前の恩給額とを比較し其多き方を給す」

おんきふ-きょく　一恩給局　（名）　內閣所屬の官廳の一。恩給及び扶助料を受くべき資格・權利の審査・裁決、並びに其の支給に關する事項を掌るもの。局長・審査官・屬の職員を置く。內閣所屬職員官制第一條「恩給局」

おんきふきょく-しんさくわん　一恩給局審査官　（名）　恩給局の職員。恩給局の事務を掌る奏任官。內閣所屬職員官制第一條「恩給局審査官」

おんきふきょく-ちょう　一恩給局長　（名）　恩給局の長官。內閣總理大臣又は內閣書記官長の命を受けて、恩給局の事務を掌理し、所屬職員を監督する勅任官。法制局長官をしてこれを兼ねしむ。內閣所屬職員官制第三條「恩給局長」

おんきふ-きん　一恩給金　（名）　恩給として支給せらるる金。

おんきふ-けん　一恩給權　（名）　一定の條件を具備せる官吏が、退官の後、恩給を受くる權利。陸軍地方幼年學校條例十四條「恩給權を得たる陸海軍將校及同相當官の孤兒」

おんきふ-しょうしょ　一恩給證書　（名）　恩給權を證明する文書。恩給局にて作成し、本屬廳を經て、本人居住地の地方廳より、恩給權を有する者に交付す。官吏恩給法施行規則第六條「恩給證書」

おんきふ-せいきうしょ　一恩給請求書　（名）　始めて恩給を受くる權利を得たる者が、恩給の支給を請求するために差し出だす文書。官吏恩給法施行規則第二「恩給請求書」

おんきふねんがく-けいさんしょ　一恩給年額計算書　（名）　恩給の請求を受けたる各廳長官が、査覈の上、請求の理由ありと認めたるとき、請求者の恩給の年額を計算して、內閣總理大臣に差し出だす書面。官吏恩給法施行規則第五「恩給年額計算書」

おん-きゃう　一音響　（名）　おと。ひびき。音響。古詩「上有絃歌聲、音響一何悲」傳休奕詩「昔我與君兮、音響相和」

おん-きゃう　一隱形　（名）　法術を施して、わが身を隱すこと。愚管抄「靡ばかりにて行ひ給ひて、身は人に見え給はざりけり。隱形の法など成就したらん人はかくやと覺えけるは」

おんきゃう-がく　一音響學　（名）　【理】物理學の一科。音に關することを研究するもの。

おんきゃう-しんかう　一音響信號　（名）　海上の衝突を豫防するために、船舶が、汽笛・汽角・號鐘・發砲等の發音によりてなす信號。

おんきょうじ-てんそう　御凶事傳奏　（名）　古（へ）天皇崩御の時、御大葬に關する事を執奏するもの。

おん-ぎょく　一音曲　（名）　一うたひもの。二琴・三味線などに合はせて、謠ふ俗曲。狂言「おんぎょくとは、うたひの事でござりまする」

おんぎょく-し　一音曲師　（名）　寄席に出づる藝人の一。淨瑠璃以外の俗曲のみをうたふもの。

おん-きん　一恩金　（名）　人の惠みによりて借りたる金。

おん-ぐう　一恩遇　なさけをかけて待遇せらるること。優遇。後漢書「是時列侯惟高密・固始・膠東三侯、參議國家大事「恩遇甚厚」

おん-くらべ　恩比　（名）　恩をくらべあふこと。薩摩歌「十月の宿に貸しはせね、恩くらべをして見たい、本母御前からつりを取る」

おん-くわう　一恩光　（名）　〔恩惠の廣大なるを、日の光に譬ふ〕めぐみの光。保元「恩光に照らされ、德澤に潤ひ、國も富み、民も安かりき」

おん-くん　一音訓　（名）　一字音と、字義と。晉書「邈博强記、尤長音訓、辯析之」北史「博聞强記、正五經音訓、學者宗無疑」二漢字の音と、我が國語にあてたる讀方と。

おん-けい　一恩惠　（名）　一めぐみ。なさけ。左傳「施舍已貫」杜注「恩惠命勞役、止逋責」二英 Grace【哲】しんけい（神惠）に同じ。

おんけい-さけん　一恩惠期限　（名）　〔法〕恩惠として、已に期限の到來せる債務の履行を猶豫する期限。恩惠期日。猶豫期日。

おんけい-さじつ　一恩惠期日　（名）　前條に同じ。

おんけい-び　恩惠日　恩敬日　（名）　〔商〕手形の滿期日後、支拂の猶豫を與へられたる日數。卽ち、三日間。あいきやうび。

おん-けん　一隱劍　（名）　〔懷中に隱す劍の義〕くわいけん（懷劍）に同じ。大內問答「脇差の事は隱劍と申して、人に見せざる樣に、自然さされ候か」

おん-けん　一恩眷　（名）　目をかけていつくしみあつかふること。めぐみを蒙ること。北史「司文東觀、綱紀恩眷」

おん-けん　一恩言　（名）　めぐみある言。なさけをかくる言。明月記「文曆三年十月二日「只不遇」此のあたりに見馴れ申さぬ御事なり」

おん-こと　一恩顧　（名）　〔植〕いちね（一位）の異名。

おん-こと　なさけにあづかること。ひいき。十訓「主人は中略不用の輩には、恩顧施し難し」太平記「本間山城左衛門は、多年大佛奥州貞直の恩顧の者にて」舊唐書「貴妃久承恩顧の者」韓愈詩「坐蒙恩顧」

おん-ごと　御事　（名）　一こと（事）の敬語。源少女「春宮の御事をも、おぼしかけためれ」二賞人の逝去せられること。東鑑「五月廿六日「宮又於光明山鳥居前、有御事」新後撰雜下「後嵯峨院の御事の後」玉葉「同じ院の御事に、世をそむきてよめる」三おかた。御人。おんかた。諸「此のあたりに見馴れ申さぬ御事なり」

おん-ごと　御事　（代）　あなた。そなた。おとど。源少女「御ことにより、內のおとどの、ゑんじて物し給ひにしかば」同蜻蛉「御事をのみこそ、あたらしう心ぐるしうかなしきものに思ひ聞こゆるを」

おんこまの-けもん　御駒解文　（名）　古（へ）八月駒牽の折り、馬の毛色等を一一注して、國より奏上する文書。けつけ（毛附）。江次第「八月駒牽」「外記進「御馬解文」入「於上卿」」

おんころころ-せんだり-まとうぎ　一唵呼嚕呼嚕旋茶利摩登枳　（句）　藥師如來に祈る眞言の詞。諸安「唵呼嚕呼嚕旋茶利摩登枳、唵阿毘羅吽欠娑婆呵」

おん-ごん　一慇懃　（名）　いんぎん（慇懃）に同じ。諸歌「釋迦大師の慇懃ごゑの教へを忘れ」

おん-さ　一音叉　（名）　【理】音の標準を計るに用ふる具。鍛鍊せるU字形の鋼鐵棒に足を附し、木函の上に取り附けたる

裝置。擽り又打ち鳴らして、音響の振動数を驗す。

おん-ざう-の-かむり　御幘冠　（名）天皇の、神事の時に附けさせ給ふ冠。無紋にて、平纓を巾子の上より前へ引き越さしめ、上へ折り返し、白絹にて結ぶ。

（りもかのくさんぶ）

おんざる　御座在　（自動）ござる。御座在に同じ。おんじやる。膝栗毛「はいはい、これでおんざりまする」

おんし　御師　（名）おし（御師）に同じ。狂言「これは伊勢の御師でござる」

おんし　一陰子　（名）蔭位を受くべき子。いんし。

（きんお）

おんし　恩師　（名）恩ある師。めぐみ深き師匠。

おん-し　一恩賜　君主よりの御下賜。皆家後又、其の物。

おん-し　一恩賜　めぐみて賜はること。草「恩賜御衣今在此、捧持毎日拜餘香」唐書李昌「晟與馬遂皆在朝、毎宴樂恩賜使者、相衙於途」

おん-じ　一音字　（名）音の記號として用ふる文字。我が國の假名の如き是れなり。音標文字。

おん-しう　一恩讎　（名）恩仇と讎と。韓愈詩「往取將相酬恩讎」

おん-じき　一飲食　のみものと、くひものと。いんしよく。宇津保俊蔭「いを中略百味を備へたる飲食になりぬ」

おん-しゃ　一恩赦　天皇が恩惠を以て、罪を赦し又は刑を免ずること。年中行事歌合「恩赦。みことのりくだしもあへず赦すなり、罪あるをだにすてぬ惠みに」韓愈詩「前日遇恩赦、私心喜還憂」

おん-しゃう　一恩賞　主君より、其の行爲を賞して、物をめぐみ賜はること。又、其の物。東鑑十五建久六年「千葉介常胤中略連連被加恩賞訖」後漢書劉寵「寵又自以與耿祝俱有重功、而恩賞並薄、數遣使要誘況」

おん-しゃう　一恩奬　恩を加へて褒奬（ほめ）むること。江淹文「不能恩流遐照、遂乃徒洽恩奬」

おん-じゃう　一恩情　（名）なさけある心。恩愛の心。吳少微詩「如何嬌所恨、長夜泣恩情」

おん-じゃう　一音聲　（名）一おんせい（音聲）に同じ。おんざう。平家「羽判官光長は中略音聲を揚げて」二次條の略。「參りおんじやう」

おんじゃう-がく　一音聲樂　（名）雅樂にて、管絃の樂の總稱。宇津保俊蔭「三年掘れる谷に、天女音聲樂をして植ゑし木なり」

おんしゃう-かた　恩賞方　（名）おんしやうぶぎやう（恩賞奉行）に同じ。建武中興の時より置かる。

おんじゃう-にん　一音聲人　（名）音聲樂を奏する人。內藏寮式「內教坊音聲人」

おんしゃう-ぶぎやう　一恩賞奉行　（名）將士の勳功を論じ、恩賞を議定するもの。又、披露奉行の事に當たる者あるより、御前奉行・御前衆などの名あり。恩賞方。

おん-しやく　一恩借　人のなさけによりて、金錢又は物品を借り受くること。又、其の金錢・物品。庭訓往來五月「凡帳・翠簾、被恩借者、以人夫可送賜之」

おんしやく-きん　一恩借金　（名）恩借せる金。

おんしゃ-けん　一恩赦權　（名）【法】恩赦を行ふ天皇の憲法上の大權。

おんじゃる　御座在　（自動）ござる（御座在）に同じ。おんざる。丹波與作「日だたぬ樣に物蔭へ寄って、ちょこちょこちょこちょこ濡れたがよくおんじゃる」

おん-しゅ　一隱首　（名）古書、戶籍簿に逸して無かりし人民が、自ら申し出づること。令義解考課「隱首謂無今戶貫、隱首自出者也」續紀年十月詔「伊勢國言。當土之民、浮宕部內、差科之日、偽夫數少、精加檢括、多獲隱首」

おん-しゅ　一恩主　（名）恩ある主人。

おん-じゅ　一音儒　（名）おんはかせ（音博士）の略。

おん-じゅ　一飲酒　酒を飲むこと。佛教の五戒の一。諸惡莫作、飲酒（おんじゅ）は佛の戒めなり。狂言「位に負けたらば、其方は賣子になるか。おんでもない事、どちらなりとも賣子にならうず」

おん-じゅつ　一恩恤　めぐみあはれむこと。元史「恩恤之厚如此」

おん-じゅ　一恩敍　特恩にて敍留せらるること。名目抄「恩敍（おんじゅ）」

おん-しょく　一音色　（名）【理】種類の異なる發音體より發する音の特質。發音體に依り、振動の有樣を異にするに依りて生ず。ねいろ。

おん-しらず　恩不知　（名）人より恩をうけて、報ゆることを知らざること。又、その者。井筒業平河內通「まま母根性、恩知らずの成り上がり」

おん-しん　一恩信　（名）あはれみ深く、信（じつ）あること。漢書賈誼傳、延壽恩信、周二十四縣」

おん-しん　一音信　おとづれ。たより。

おん-じん　いんしん。

おん-じん　一恩人　（名）我れに恩をかけたる人。

おんす　一ヲンス（英 Ounce）（名）めーとる法の衡の名稱。ぽんど・の十六分の一。度量衡法施行令第一「おんす」

おん-すもじ　御す文字　（名）おすもじ（御す文字）に同じ。孕常磐「待つ身よりも待たるる身の、千千の思ひを御すもじ」

おん-せい　一音聲　（名）人類の發する聲。喉喉內の聲帶の振動によりて發す。おんじやう。おんさう。登徒子文「好色賦「潔齋俟今惠音聲」

おん-せう　一恩詔　（名）なさけある仰せ言。晉書羊祜「伏聞恩詔、拔臣使同台司」

おん-せう　一恩詔　（名）ありがたきみことのり。

おん-ぜう　一恩詔　（名）「せう（詔）はぜうと濁るを故實とす」前條に同じ。大神宮式「凡彌宜・內人・神部・祝等、恩詔位記者、式部省依數送於神祇官」名目抄「恩詔」

おん-せつ　一隱截　國司が、除かに官物を盜み取ること。式部省式「凡條隱截事、解却國司・醫師已上名帳、別卷欽署」倉庫令「隱截貨物直者、同不限在任去任、納京」同「剝取交易物直者、同隱截罪」

おん-ぞ　御衣　（名）一きぬ（衣）の敬語。みぞ。宇津保藤原「うかれめ廿人ばかり、琴ひき歌うたひて、御ぞ賜はれり」二とのゐもの（宿直物）の一名。よぎ。

おん-そう　一音奏　禁中にて、時の奏。問藉「依有伊勢幣、散齋二日、致齋一日、當日朝夕御膳不聲聲、內慰不音奏」禁祕抄「公卿勅使、齋宮群行殊神事也、止音奏聲聲」

おん-ぞくかく　一音續覺　（英 Phoni-sm）（名）【心】他の或る感官に刺激を受け、聽覺には何等の刺激なきに音の感覺を起こすこと。視官を刺激して起こるものを視覺性音續覺、觸官を刺激して起こるものを觸覺性音續覺といふ。

おん-そん　一蔭孫　（名）蔭位を受くべき孫。

おん-たく　一恩澤　（名）めぐみの澤。めぐみ。東鑑十五建久六年「早存日之際、浴恩澤」詩經「泰蕭廢、則恩澤乖矣」史記律書「恩澤加海內」

おんたく-ぶぎやう　一恩澤奉行　（名）鎌倉幕府の職名。勳功の大小を勘へて、領地を賜はる事などを掌る。東鑑世古九月「長尾三郎兵衛尉光景、雖致度度勳功、未賜恩賞事中略屬恩澤奉行後藤大夫判官基綱、頭執申之」

おんたけ-けう　御嶽教　（名）みたけけう（御嶽教）に同じ。

おんたけ-とう　御嶽講　（名）美濃國の御嶽山（登山する人人の講中。路傍に居たる犬を追ひ出だして、犬追物の如く射ること。東鑑十世四七月廿日「先於門前、射追出犬、其箭誤而、入于三浦會所簾中」

おん-だし-もの　追出物　（名）追ひ出だしたる獸など。今川大雙紙「野山にて小牛又は犬などを中略射る事あり。これをば、おんだしものを射るなどと談ぐべし」

おん-だす　追出　（他動）おひだす（追出）の音便。

おん-たて　（名）【植】裏（ゐ）科、おんたて屬の多年生草本。莖は高さ一乃至三四尺。葉は廣卵形又は圓形。花は複總花序をなし、七八月頃、枝の先端に密生して開く。本邦、中部以北の高山に產す。いはたて。

おんたのもそうぶぎやう　御憑總奉行　（名）室町幕府の職名。七月晦日、八月朔日・三日に、諸家より幕府へ物を進ずる式ありて、その返禮の物を取り扱ふもの。

おんたのもぶぎやう　御憑奉行　（名）室町幕府の職名。諸家へ返し物を賜はるべき御內書を調ぶるもの。

おん-たらし　御執　御弓　（名）【たらしは執らしの轉】大將の弓の稱。平家「たとひ千疋・萬疋にかへさせ給ふべき御たらしなりと申すとも」

おんたらし-の-そう　御弓奏　（名）古昔、正月七日、白馬節會の時、十七日の射禮の爲めに、兵部省より天子の御弓を奉れるを、內辨とりつぎて奏すること。江次第「兵部省御弓奏」

おん-ち　一恩地　（名）動功によりて臣下に賞與せる土地。東鑑世四十三「以御恩地、不可賣買之由、治定訖」

おん-ち　一隱地　（名）隱蔽して年貢を納めざる土地。大內家壁書「爲御扶持、聞出隱地、可賞中之由、被仰附之處」

おん-ちのひと　御乳人　（名）おちのひと（御乳人）に同じ。おち。諸國「頼みの奉り候人の若子の、御乳の人に御座候」

おん-ちゅう　一隱忠　（名）自分の君ならぬ者に忠義だてをすること。東鑑二治十三月「桐生六郎、爲顯隱忠、斬主人、而馳深山」

おん-ちょう　一恩寵　（名）一めぐみある寵愛。二英 Grace）【哲】しんけい（神惠）に同じ。

おん-つう　一音通　一五十音圖中、同じ行又は列の音の轉換すること。例へば、たけやぶ（竹藪）をたかやぶ、けぶり（烟）をけむりといふ類。二俳諧の語。同じ韻又は行の音の語が重なること。例へば、古池やかはづ飛びこむ水の音の、や・か・年寄のほくほくと行くかすみ哉の、く・かの類。

おん-づまり　とどのつまり。おんづめ。最終。終局。結局。

おん-づめ　前條に同じ。仁勢物語「目くら中略おんづめは檢校に成りて」

おん-てい　一音程　（名）【理】二音間の高低の差。振動數の比を以て表はすもの。卽ち、二つの樂音の振動數の比。

おん-てう　一音調　（名）一【理】音の高低の稱。發音體の振動數多ければ調子高く、少なければ調子低し。一秒時間に二百五十六振動する音を、學術上は調の一と定む。二詩文の語路。又は、音曲のふし。

おん-で-ない　（句）次條に同じ。狂言六名「やいやい。こなたの事でござまするか。おんでないこと」

おん-で-も-ない　（句）いふまでもなし。勿論なり。狂言春蘭「位に負けたらば、其方は賣子になるか。おんでもない事、どちらなりとも賣子にならうず」

おん-てん　一恩典　（名）めぐみを施すこと。めぐみの御沙汰。韓琦文「被恩異之特優、顧人言而甚愧」

おん-でん　一隱田　（名）隱蔽して年貢を納めざる田地。おんで。かくしだ。類聚國史百五十九太宰府言。薩伎多嶋兩島、校出隱田一百冊町」東鑑七九建元五年「下野國中泉庄、有隱田一百冊町」之由」

おんでん-ひゃくしやう　一隱田百姓　（名）隱田（ゐんでん）を耕作する百姓。「隱田百姓作り取り」

おん-と　一音吐　（名）聲の出だしかた。ものいふ聲。こわね。音聲。「音吐朗朗」南史曹景宗「少美容止、遇退音吐、甚有令譽」

おん-ど　一音頭　（名）一おんどう（音頭）の略。唐船噺今國姓爺「綱手に老若、芥子頭、音頭の唐人、團扇をかざし口拍子」二大勢にて、唄ひ踊ること。「伊勢音頭」

おんど　を　とる　取音頭　音頭を示す。調子をとる。諸百題「あらわるの念佛の拍子や候、わらは音頭を取り候べし」

おん-どう　一音頭　（名）數人にて、唱歌また樂樂などする時、一人先づ聲を發して調子をとること。おんど。樂家錄「先頭取之鳳笙、一管吹出之、而復餘笙少退吹。注頭取亦謂音頭、以主其聲音名之」太閤記七六「石を緞子などにて包み、木やりのおんどう取り、異形の出立ちにものし、引きければ」

おん-とく　一恩德　（名）恩と德と。めぐみ。諸書「鳥類・畜類も、主威の恩德のがれぬ身ぞとて」漢書高帝「施恩德、賜民爵」

おん-どく 一音讀 一漢字を、字音のまに讀むこと。(訓讀の對) 二辭を出だして讀むこと。(默讀の對)

おんど-とり 音頭取 (名) 一音頭をとる人。發聲者。持統天皇歌軍法「こりやおんど取りのやうに、この扇も取りおけ」號頭。二物事の主唱者。

おん-とたぶら 御殿油 (名) おほとなぶら(大殿油)に同じ。宇津保俊蔭「御となぶらも參らざりければ、晴うて見えねば」

おん-とのごもり 御殿隱 (名) おんとのごもること。おほとのごもり。

おん-とのごもる 御殿隱 (自動四) おほとのごもる(大殿隱)に同じ。宇津保藤原君「その夜寺のこに御とのごもりて」同俊蔭「こよひはただ一ところ御遊びし給ひつつ、御とのごもらずなりぬ」

おん-ども 己共 (代) 〔おれどもの訛り〕我れら。われ。博多小女郎波枕「おんどもが二十七の年、薩摩者と喧嘩した咄、嘘ぢやなかばん、聞かっしやれ」

おん-とり 音取 (名) 笛・篳篥を合奏すること。

おん-ない 恩愛 (名) おんあい(恩愛)の連聲の轉。

おんなかたち 御仲立 (名) なかゐ(仲居)に同じ。

おんなじ 同 (形日語) おなじ(同)の音便。傾城買二筋道「わたしの著物が、いつでもおんなじなりで居いすを云ふことでおすとさ」

おん-ぬすびと 恩盜人 (名) 人より恩を受けて報いざる人を罵る語。恩知らず。國姓爺後日合戰「日本の恩を受けて、恩を知らぬ恩盜人」

おんの (感) 古語。おのれに同じ。やあ。名義抄「喻ヲノレ」

おん-のじ 御字 (名) よき人。よきもの。世の人心「今の世の御の字の客中略今も俗に、よきものを稱して御の字といふ」

おん-のつまり (名) おんづまりに同じ。とどのつまり。

おん-は 一恩波 (名) めぐみを蒙ること。恩澤。平家七鹿谷「家門繁昌の古へは、其の恩波に依りて私を顧みき。何ぞ今其の芳恩を酬はざらんや」阮咸文讃「調鼎之功、未施於毫髮、登俎之美、屢浹於恩波」

おん-ば 一音波 (名) 【理】音の波及に依りて、媒介物中に起こる波動。

おんば 御乳母 (名) 〔おうばの轉〕めのと。乳母。浮世風呂「おんばどのが、大體ではございませんね」

おんば 一隱婆 (名) さんば(産婆)に同じ。

おん-ばう 御坊 (名) 一はかもり(墓守)に同じ。節用集大全「御坊ゴボウ墓守之名、世俗ニ寺番ト云」二火葬に死骸を焚く人。おんば。うやき。おんぼ。おんぼやき。若風俗「浮世の人の驚く烟たちて、おんばうの住める一つ庵をながめ」隱坊。

おん-はうじ 恩報 (名) 恩を報ゆること。おんがへし。娥歌加留多「御恩報じ、罪ほろぼし、出家・沙門ともなりはせず」

(諺)**恩報じは出世の相** 恩を忘れざるほどの人は必ず立身すべしとの意。北條氏直時分諺留「恩報じは出世の相」

おんばう-やき 御坊燒 (名) おんばう(御坊)に同じ。

おん-はかせ 音博士 (名) 古へ大學寮の博士の一。經書の訓點・平・上・去・入の四聲を正し、漢音・呉音を辨へて、素讀を教ふることを掌るもの。職員令大學「音博士二人掌教」續紀八「音博士(オンハカセ)從五位下賀晉卿」

おんばこ (名) 【植】おほばこ(車前)の訛り。

おん-びき 音引 (名) 漢字の字書を、漢字の音にて索引し得るやうに編纂したるもの。

おん-びん 一音便 (名) 語調の便に隨ひ、音を變へていふこと。寒しを寒い、をみなををうな、衝き裂くをつんざく、去りてを去ってといふ類。

おん-ぷ 一音符 (名) 音樂の語。音の長短を示す記號。𝅝 𝅗𝅥 ♩ ♪ 等。

おんぶ (名) 一背負はること。幼兒の語。浮世風呂「坊はおとっさんにおんぶだから、能いの」二人にたよること。費用など、人に負擔せしむること。

おん-ぶ 一音部 (名) 高音部及び低音部の總稱。

おんぶさがう 一音部記號 (名) 西洋樂譜の五線の左端に記す一種の記號。と字記號・へ字記號・は字記號等あり。各條を見よ。

おん-ぶつ 一恩物 (英 Gift) (名) 〔幼兒に恩賜せられたる物の義〕幼稚園にて、兒童の遊戲又は作業に用ふる具。獨逸のふれーべる氏の創めしもの。之を以て幼兒の活動欲を善導し、又智・情・意の發達を助くるを目的とす。

おんべ 御贄 (名) おほにへ(大嘗)の音便。

おん-べい 御幣 (名) どへい(御幣)に同じ。甲陽軍鑑「我れ等の指物・おんべいは、又小幡入道日意の指物を乞ひ取り、さし申すは」

おんべう-もじ 一音標文字 (名) おんじ(音字)に同じ。

おんべ-かつぎ 御幣擔 (名) どへいかつぎ(御幣擔)に同じ。

おんべ-つかさ 織部司 (名) おりべのつかさ(織部司)に同じ。

おんべ-の-つかさ 織部司 (名) 前條に同じ。

おんべ-もち 御幣持 (名) どへいもち(御幣持)に同じ。

おんべ-ほ 一恩補 恩賞として職に補すること。太平記十三鹿王院「回心一人、僅かに本領一所の安堵を全うして、守護恩補の國を被召返事」

おん-ほ 御坊 (名) おんばう(御坊)に同じ。

おんぼ-やき 御坊燒 (名) 前條に同じ。

おん-まつり 御祭 (名) 除暦、十一月廿七日の春日若宮の祭。華實年浪草「若宮祭禮、十一月廿七日也。是謂御祭」

おん-まはす 追廻 (他動四) おひまはす(追廻)の音便。國姓爺「蒙古の軍兵、割り立て、おん廻はし、無二無三にきりいれば」

おん-み 御身 (代) やや敬意を含める對稱の代名詞。あなた。諸山「御身つ故郷と承る。筑紫をも見ん候なり」

おん-み-さま 御身樣 (代) 前條の敬稱。あなたさま。飢陣八島「自かやうになる上は、御身樣も、いかならんやどとなき御方へ、おっつけ往かせ給ふべし」

おん-みつ 一隱密 一祕密にすること。信玄家法「障人者、不可許容。但以隱密開扃、翫味尤之事」檜權三「譯知らぬ下下にも、一言句聞かせまい。隱密隱密」二江戸時代、探偵の稱。かくしめつけ。しのびめつけ。(藤屋密の沙汰は高くいふ 祕せんと欲することは、却りて世に洩れ聞こゆ。

おんみ-やう-じ 陰陽師 (名) おんみやうじ(陰陽師)に同じ。宇津保藤原君「おんみやうじ・かんなぎ・ばくち・京わらはべ・おきな・おうな召し集めて」

おん-むん 諺文 (名) 朝鮮の國字。二十八字より成る。現時は二十五字なり。おんもん。

おん-めい 一恩命 (名) ありがたき命。めぐみあることば。程鉅夫詩「恩命往天台、萬壑千峯總絳臺」

おん-めん 一恩免 なさけによりてゆるさるること。

おんも (名) 〔おも(面)の訛り〕家の外をいふ。幼兒の語。

おんも-さ 重 (名) おもさ(重)の訛り。狂言「恋風が來ては袂にかいもとれて、なう、おう、袖のおんもさよ」

おん-もと 御許 (代) おもと(御許)に同じ。

おん-もの 佩物 (名) おむもの(佩物)に同じ。

おん-もの 追物 (名) おむもの(追物)に同じ。

おんもの-い 追物射 御物射 馳射 (名) 射藝の名。馬上にて、獸を追ひ廻はして射ること。盛衰記「小笠「立ち上がらんとする所を、御物射にもする候」

おん-もん 諺文 (名) おんむん(諺文)に同じ。

おん-もん 一恩問 他人の訪問せられたることを敬ぶ語。おたづね。庭訓往來二月「欲自是令申之處、遮而預恩問」

おん-もん 一音問 おとづれ。たより。陶潛詩「欵襟或遠、音問其先」

おん-やう 一陰陽 (名) 一いんやう(陰陽)に同じ。二おんやうだう(陰陽道)又、おんやうじ(陰陽師)の略。文德實錄元年「陰陽寮「並藤善「陰陽推步之學」」徒然草「太衝の太の字、點うつうたずといふこと、陰陽のともがら相論の事あり」

おん-やう-け 一陰陽家 (名) おんやうじの家柄。又、おんやうじ。傾城島原蛙合戰「陰陽家には、せんきうの蛙、息を吐いて虹となると沙汰せり」漢書藝文「陰陽二十一家、三百六十九篇、陰陽家者流、蓋出于義和之官」

おん-やう-じ 一陰陽師 (名) 古へ陰陽寮に屬して、占筮及び相地の事を掌る職。おんみやうじ。おみやうじ。勢語「おんやうじ・かんなぎ呼びて」宇津保忠乞「おんやうじ・かんなぎを召し集め、せぬわざわざをし給へども、しるしなし」

(諺)**陰陽師身の上知らず** 陰陽師は、人の吉凶のみ卜して、我が身の上の事は知らず。百合若大臣野守鏡「ああ然ればこそ、陰陽師身の上知らず」

おん-やうじ-ぶみ 陰陽師文 (名) 陰陽道の文。宇津保俊蔭「くすしぶみ・陰陽師ぶみ・人相するふみ」

おん-やう-せい 一陰陽生 (名) 古へ陰陽寮にて、陰陽の術を習ふもの。

おん-やう-だう 一陰陽道 (名) 古へ陰陽寮の學科の一。占筮・相地のことを教へしもの。榮華初花「いみじう御才かしこうおはする餘りに、陰陽道も醫師の方も、よろづにあさましきまで見らはせ給へり」

おん-やう-の-かみ 陰陽頭 (名) 陰陽寮の長官。うらのかみ。文德實錄五年「陰陽寮の長官。文德實錄五年「陰陽頭」並藤中將天長中將九年二月中將爲陰陽頭」宇津保俊蔭「おんやうのかみ、御はら(物)してつかうまつる」

おん-やう-の-さくわん 陰陽屬 (名) 陰陽寮の主典。

おん-やう-の-じょう 陰陽允 (名) 陰陽寮の判官。

おん-やう-の-すけ 陰陽助 (名) 陰陽寮の次官。文德實錄元年「並藤中將天長二年留爲陰陽助」

おん-やう-の-つかさ 陰陽寮 (名) おんやうれう(陰陽寮)に同じ。和名「陰陽寮(ヲンヤウレウ)」

おん-やう-はかせ 陰陽博士 (名) 陰陽寮に屬せる官。陰陽生を教ふる事を掌る。持統紀「陰陽博士沙門法藏」

おん-やう-れう 一陰陽寮 (名) 古へ中務省に屬せる寮。天文・曆數を考へ、日月・星辰の變・風雲の氣色を候ふことなどを掌る。頭・助・允・屬の職員を置く。うらのつかさ。おんやうのつかさ。天武紀「陰陽寮」增鏡「陰陽寮の守護神の社もまろびぬ」

おん-よう 一音容 (名) こゑとかたち。謝靈運詩「巖壑寓耳目、歡愛隔音容」

おん-よる 御寢 (自動四) およるに同じ。ぎょしんなる。

おん-ら 己等 (代) 〔おれらの訛り〕われら。おいら。博多小女郎波枕「おんらが在所はの、奥山のててうちの」

おん-らい 一恩賚 (名) みたまのふゆ(恩賚)に同じ。三代實錄十八貞觀十三「自諸司六位官人、並諸衛府駕輿丁・衛士皆預恩賚」

おん-らん (名) おいらん(花魁)の訛り。讃嘲記「なるほどおんらんなり」

おん-り (名) おりる(下)ことをいふ、小兒の語。浮世風呂「さあ下りりしな」

おん-りつ 一音律 (名) 音樂の調子。漢書「藝文志」協音律、作詩樂」

おん-りゃう 一音量 (名) 音の大小の分量。

おん-ろく 一恩祿 (名) 君より受くる祿の敬稱。

おん-ゐ 御井 (名) 神供を炊ぐ所。又はみたらしの所にある井。

おん-ゐ 一恩威 (名) 恩惠と威光と。

おん-ゐ 一蔭位 (名) 父祖の蔭により て得たる位階。

おん-ゐき 一音域 (名) 人又は樂器の、發し得る音の區域。

おん-ゐん 一音韻 (名) 〔おん(音)は字の讀み聲。ゐん(韻)は音のひびき〕こゑとひびきと。漢字の音又は韻。宋書「謝靈運傳」「一節之內音韻盡殊、兩句之中輕重悉異」白居易詩「獨琴本性賞、楚絲音韻清」

おん-ゐん-がく 一音韻學 (名) 漢字の音韻を研究する學問。

か

五十音圖にて第六、卽ち加行・阿列の假名。伊呂波歌にては第十四の假名。

字體 【萬葉假名】加・迦・伽・架・嘉・家・河・何・賀・訶・呵・可・軻・珂・箇・柯・哿・歌・箇・哥・介・個・芽・甘・奇・寄・鹿・蚊・日・香・歟。【平假名】か・が・カ(加より出づ)。う・

ム(可より)。賀(歌より)。芳・義(哥より)。淫(謌より)。多(閑より)。多(香より)。嘉(家より)。【片假名】カ・力・カ・か(可より)。イ(何より)。コ(可より)。

表はす音　加・迦・伽・架・嘉・家・河・何・賀は漢音カ、訶・呵・可・柯・珂・簡・柯・哥・歌・軻・哥は漢吳音カ、介は漢音カイ、閑・汗は漢音カン、甘は漢吳音カム、奇は漢吳音キ古音カ、鹿・蚊・日・香・歟は訓カたり。此れ等を假りてカの音を表はせり。現今かの表はす音は、

一、表音的假名遣にては　(イ)子音kと母音アとより成る音節。子音kは咽喉より鼻腔への通路を閉ぢ、舌の後部を高めて軟口蓋に密著せしめて作りたる閉鎖を、聲帶の振動を帶びざる氣息を以て打ち破る際に發する騷音にして、聲音の分類上より云へば、喉音(軟口蓋音・舌本音とも云ふ)に屬する一の無聲破裂音なり。聲音學にてはkを以て之を表はす。kは種種の母音と結合して加行濁音を構成す。但し、其の結合する母音の異なるに從ひ、kを發音する際軟口蓋と舌との接觸する位置に多少の差異あり。殊に、きゃけの場合は、其の位置著しく前方にあり。(ロ)一語中にて、かの直下にあ又はーを附したるものは、子音kと母音アの長音とより成る音節を表はす。「かあかあ鳴く」「かーど」の如し。

二、歴史的假名遣にては　(イ)一の(イ)に同じ。(ロ)一の(ロ)に同じ。但し、かーは用ひず。(ハ)一語中にて、かの直下にう又はふが來たるときは、兩者合してコーと發音す。「かうぞ」(冠)「かふ」(甲)の如し。但し、かふのふが動詞の活用語尾なる時は、カウと發音するを普通とす。此の音の變遷につきてはう及びふを見よ。

かの濁音の假名。

字體　【萬葉假名】賀・何・荷・我・餓・俄・峨・鵝・蛾・駕・宜。【平假名】が、其の他かの清音の平假名に濁音符を附したるもの。【片假名】ガ、其の他かの清音の片假名に濁音符を附したるもの。但し、平假名・片假名ともに濁音符なくして濁音の假名に用ふることあり。

表はす音　賀・何・荷は吳音ガ、我・餓・俄・峨・鵝・蛾は漢吳音ガ、駕は漢音ガ、宜は漢吳音ギ古音ガなり。此れ等を假りてガの音を表はせり。現今がの表はす音は、

一、表音的假名遣にては　(イ)がの語(但し、助詞を除く)の最初にあるものは子音gと母音アとより成る音節をあらはす。「がいせい」(學生)「がい」(害)「がん」(雁)の如し。子音gは、咽喉より鼻腔への通路を閉ぢ、舌の後部を高めて軟口蓋に密著せしめて作りたる閉鎖を、聲帶の振動を帶びたる氣息を以て破る際に發する騷音なり。聲音の分類上より云へば、喉音に屬する一の有聲破裂音にして、k に對する有聲音(聲帶の振動を有する音)なり。聲音學にてはgにて之を表はす。gは種種の母音と結合して加行濁音を作る。其の際、結合する母音の種類によりて、軟口蓋と舌との接觸する位置に差異あること、kの場合と同じ(かの條一のイを見よ)。東北地方には、此の語頭のgをngと發音する處あり(ngがの一語の中間又は最後にある時は、助詞は語頭にある時も)。子音ngと母音アとより成る音節を表はす。「ながれ」(流)「はいが」(拜賀)「梅が香」の類。子音ngは舌の後部を高めて軟口蓋に密著せしめ、以て咽喉より口腔への通路を閉ぢ、聲帶の振動を帶びたる氣息を鼻腔に通じて發する樂音にして、聲音の分類より云へば、喉音鼻音に屬す。聲音學にてはgを以て之を表はす。此のガ音を、前項のガ音(gとアとより成る音節)と區別せんため、が・ガ又はが・ガを以て表はすことあり。九州・四國・中國の大部分には此の音なくて、前項のがと同じく發音す。此の音は後世に至りて生じたるものにして、古代には前項のがと同音なりとの說あれど、未だ詳かならず。(ハ)一語中にて、がの直下にあ又はーを附したるものは、がの表はす音節中の母音アの長音なるものを表はす。「がーぜ」の如し。

二、歴史的假名遣にては　(イ)一の(イ)に同じ「がくもん」(學問)「が」(賀)の如し。(ロ)一の(ロ)に同じ。「あがる」(上)「くが」(陸)の如し。(ハ)一語中にて、がの直下にう又はふが來たるときは、語頭にあるものは、「がうけつ」(豪傑)の如く、gとオの長音とより成る音節に發音し、語中又は語尾にあるものは、「ふがう」(符號)「いちがふ」(一合)の如く、gとオの長音とより成る音節に發音す。

か　**香**　(名)　一、嗅官にて覺り得べき物の氣。聲ばしきにも、臭きにもいふ。かをり。にほひ。履中紀「墨江飼部等歸之氣」　古今春上「月夜にはそれとも見えず、梅の花をたづねてぞ知るべかりける」(龍澤)　二、みそ(味噌)をいふ、女詞。

か　(名)　古語。かち(楫)の略。神代紀下「楫取」　萬「なにはづにみ船おろすゑ、やそ加ぬき今は漕ぎぬといもに告げこそ」

か　**蚊**　(名)　【動】昆蟲類中、雙翅類の一種。小蟲にして體細く、口器は吸收に適し、雌に於いて殊に大なり。雌の觸角は簡單なれども、雄のものは羽狀をなす。雌は體やや肥大にして、好みて人畜の血液を吸收す。卵は水面に產み、孵化したる幼蟲は俗に子子(ボウフリ)と稱し、凡そ一二週間にして成蟲となり、夏日盛んに發生して人畜を刺す。和名抄「蚊、小飛蟲、夏月夜噬人者也」

かがなく　蚊鳴　小聲にものをいふ。

かのくふほどにもおもはず　少しも痛痒を感ぜず。甌山姥「日本國がおこつても、蚊の食ふ程にも思はばこそ」

かのこゑ　蚊聲　蚊の羽音の如き、極めてかすかなる聲。榮華盛衰「すべてただ、蚊の聲ばかりぞ通はせ給ふに」

かのすね　蚊脛　蚊の脚の如く細き脛。よわよわしき脛。天神記「やあしやらな、蚊の脛ほきほき折つて捨てんず」

かのなみだ　蚊淚　次條に同じ。

かのまつげ　蚊睫　極めて輕微なるものの譬へ。枕「大藏卿ばかり耳とき人なし。誠に蚊のまつげの落つるほども、聞きつけ給ひつべくこそありしか」夫木「目に見えぬ鳥も世にふるみの程は、かのまつげにも巢は造るなり」

かのまゆ　蚊眉　前條に同じ。

かのもちつき　蚊餅搗　夏、軒端などに、蚊の群の飛びかふこと。かばしら。

(**蚊の眉に國郡を立つ**　不可能なることに譬ふ。六帖「蚊の眉に國郡はたてつつも、人の心をいかが縫まん」

(**蚊坊主**　蚊若衆に蚊坊主の略。はへ(蠅)の條を見よ。

か　**鹿**　(名)　【動】しか(鹿)の本名。和名抄「鹿、陸詞切韻云、鹿斑獸也」　拾遺雜下「かをさして馬といふ人ありければ、かもをもをしと思ふなるべし」

かかー　一、河　(名)　かは(河)に同じ。

かかー　二、可　(名)　好しとしてゆるすこと。よろしきこと。江次第十八踏「費可字返」論語里仁「朝聞道夕死可也」

かもなくふかもなし　無可無不可。　一、言行に過不及なく、中道を得たり。論語微子「我則異於是、無可無不可」　二、轉じて、自己の定見なし。

か　**佳**　(名)　よきこと。美しきこと。陶潛詩「山氣日夕佳」

か　**加**　(名)　一、くははること。增すこと。增加。　二、よせざん。加算。又、加へて得たる數値。

か　**架**　(名)　物を載するだい。たな。韓愈詩「鄭侯家多書、插架三萬軸」

か　**暇**　(名)　一、いとま。ひま。　二、古官より給はるいとま。假寧令「凡職事官、遭父母喪、並解官、自餘皆給暇」

か　**假**　(名)　實ならざること。かり。(眞の對)

か　**彼**　(代)　かれ(彼)に同じ。記「迦(ヲ)もがと我が見し子ら、かくもがとあが見し子に」萬「いきづき人と共にし摘めば、たぬしくもある迦(ヲ)」萬「くるしくもふりくる雨可(ヲ)みわの崎さぬのわたりに家もあらなくに」古今春上「淺みどり絲よりかけて白露を、玉にもぬける春の柳か」同冬上「うつせみの世にも似たるか櫻花、さくと見しまにかつ散りにけり」　三、呼びかくる辭。江戸時代上流の語。浮世風呂「彌壽か宮のなどの呼ぶやうに、所なれども此の彌はいとおだやかな屋敷の呼ぶせなれば、やすか彌壽かと、かつ發音の呼ぶなり」

か　**歟**　**乎**　(助)　一、疑問の意を表はす語。記「筑波を過ぎて、幾夜か寢つる」萬「いづくに可(ヲ)ふなではすらむ、あれのさき漕ぎたみ行きしたななし小舟」　古今春下「春雨のふるは涙か櫻花、散るを惜しまぬ人しなければ」　二、問ひかくる意を表はす語。古今秋上「秋の月山べさやかに照らせるは、落つる紅葉の數を見よとか」　勢語「白玉か何ぞと人の問ひし時、露と答へてけなましものを」　後撰雜三「わがためにをぎにくかりしはしの間、人の手にありと聞くはまことか」　三、反動の意を表はす語。かは。古今雜上「老いぬとてなどか我が身をせめぎけん。老いずは今日にあはましものか」　後撰雜三「かくてのみやむべきものか、ちはやぶる賀茂の社の萬代を見ん」

か　(助)　形容詞の語尾のくに、助詞のはの連なりて約まりたる語。檜樓三「恠氣者とも法界とも、云ひたか云へ」

か　**日**　(助數)　一、日・一霎夜を數ふる語。記「かがなべて、夜には九の夜、日には十加(ヲ)を」　古今春上「かすが野の飛ぶ火の野守出でて見よ、今いくかありて若菜つみてん」

が　一、箇　個　个　ケ　(助數)　物事を數ふるに用ふる語。典藥寮式「稱一箇」　文德實錄五「嘉祥元年「便於大極殿、限三箇日」轉讀大般若經」　尺素往來「倒式之差樓一個(ヲ)」　書經泰誓「若有一个臣」　曾鞏詩「旁坐竹相望、疎疎翠千箇」

が　**荷**　(助數)　一、人に荷なふべき分量の荷物を數ふる語。かけ。大嘗祭式「以二籠爲一荷」　宇津保藤原「わりご五十荷」

が　(**接頭**)　語調を整ふるために、或る語に冠らする語。萬「みなのわた迦(ヲ)黑き髮に、いつのまか霜のふりけむ」同「たばなれも、をちも可(ヲ)やすき」同「秋の田の穗田のかりばか香(ヲ)寄りあはば、そこもか人のわをことなきむ」

(**接尾**)　或る語に添へて、場所の意を表はす語。成務紀「百姓安居(カヲ)」　萬「つね知らぬ國の奥迦(ヲ)を、ももへ山越えて過ぎゆき」同「しがの山いたくなきりそ、あらをらが、よす可(ヲ)の山と見つつしぬばむ」

か　**家**　(接尾)　名詞に添へて、其の道の人なるを示す語。「醫家」「醫家」「はなしか」

が　一、**我**　(名)　一、がい(我意)の略。わがまま。「我を通す」「我を張る」　論語子罕「勿意勿必、勿固勿我」　二、哲(じ)が(自我)を見よ。

がはる　我張　意地がはる。曾我五人兄弟「翁しも戀に我が張りて、あつばれ我が殿御人の下には附けまいものと」

がへげる　我げる　我(ヲ)の念減ず。

がにたつ　我立　我(ヲ)を立て通す。浦島年代記「えん情ない親仁、構はぬといふ我を我に立て、目前我が子の討たるるを見捨つるか」

がを　**たつ**　立我　一、己れの思ふことを立て通す。　二、おのれとおのれの氣を引き立つ。大原問答青葉笛「萬づの病も心から。心で心を取り直し、是非に思ふ我を立つれば、おのづからよきものぞ」

がを　**はる**　張我　意地を張り通す。雙生隅田川「負けるな劣るな、名を下とすな、我を張る、威を張る、弓張の」

がを　**をる**　折我　我意を曲ぐ。心を折る。曾我會稽山「我を折り烏帽子・立て烏帽子」

が　**賀**　(名)　一、祝ふこと。ことぶくこと。「新年の賀」　後漢書「每月朔歲首爲大朝、受賀」　二、がのいはひ(賀祝)を見よ。古今雜「さだときのみこのをばのよそぢの賀を、大井にてしける日」　同「さだやすのみこの、后の宮の五十の賀奉りける御屏風」　同「藤原三善が六十賀によみける」　三、香の名。

が　一、**駕**　(名)　馬にてひく乘車。のりもの。「駕を迎ふ」

がをまぐ　枉駕　訪ひ來るの敬語。わうが。　獨志「此人可(ヲ)就見、不可(ヲ)屈致也。將軍宜(ヲ)枉駕(ヲ)之。由是先主遂詣」亮、凡三往乃見」

が　一、**雅**　(名)　一、正しく善きこと。みやびなること。けだかきこと。おくゆかしきこと。史記「予並論次、擇其言尤雅者」　二、さつぱりとして、愛すべき趣きあること。風雅。　三、支那上代、詩の六義の一。りくぎ(六義)を見よ。　四、純正なる音樂。正しき歌謠。太平記「郷樂雅を亂る、故に一唱三歎の曲にあらず」

が　一、**牙**　(名)　がき(牙旗)の略。大將の旗。南史「帝建(ヲ)牙於軍門」

が　一、**芽**　(名)　草木などのめ。司馬光詩「江導牛巻葉、石蕨乍舒芽」

が 一鵞（名）【動】がてう（鷺鳥）の異名。和名抄「鵝形如雁、人家所畜也」 榮華物語「烏帽子形如雁」

が 一蛾（名）【動】動物學上の用語。昆蟲類中、鱗翅類の二大亞目の一にして、蝶類と相對す。其の觸角の桿棒狀ならざること、靜止の時兩翅を屋狀に置くこと、並びに夜間多く飛翔すること等は、蝶類と分かつべき重なる點なり。種類甚だ多く、概ね害蟲なり。ひむし。なつむし。

が （接）だが。然れども。大鏡狂言「朝比奈と聞いたらば責めまいものを。が、朝比奈と聞いて責めねば、地獄の名折れぢや」 同人「馬に乘せう中略が、乘りつけぬ馬に乘れば、必ず落つるものぢや」

が （感）希望の意を表はす語。がな。記「かも賀と我が見し子ら、かくも賀と、あが見し子に」 同「板にも賀とあせを」 萬八「わが宿のをばなが上の白露を、けたずて玉にぬくものにも我と」

が （助）一主格を表はす語。記「あを山にひ賀と泣かさまく」 同「うなかぶし、な賀と泣かさまく」 同「いづもたける賀とはける太刀」 二事物と事物との關係を表はす語。記「そめき賀と汁にしめどころもを」 萬「まひしつつ君がおほせるなでしこ我と、花のみとはむ君ならなくに」 同「三島江の玉えのこもをしめしより、おの我とぞ思ふ、いまだ刈らねど」 古今「此の歌は或る人のいはく、柿本の人丸が歌なり」 枕「今上一の宮、まだ童にておはしますが御をぢにて」 三にあるの意を表はすもの。「蝦夷が千島」 四といふの意を表はす語。「佐渡が島」「赤間が關」 五上の句を受けて、しかしながら又さうではあるもののなどの意を表はす時用ふる語。「雨はやみたるが風はやまず」「咲ねば行きしが逢はず」

かーきー （英 Khaki）（名） 黃褐味ある土色。近時、陸軍の軍服などに用ふ。

がーぜ （獨 Gase）（名） 織目粗き織物。木綿製のものは、消毒して外科用とす。

がーたーくんしきゅう （英 Order of the Garter）（名） 西曆一千三百四十四年、英國王えどわーど三世の創設せられたる英國最高の勳章。幅凡そ一吋の青色の天鵞絨にて造りたる脚絆を主要部分とし、其れに星章・頸飾等を加へたるもの。始めは國王を加へて廿六の數に限られたりしが、後には其の數を增加し、外國の君主にも贈呈するに至り、明治卅九年こんのーと親王を派遣せられ、我が明治天皇にも贈呈せり。

かーど （英 Card）（名） 一厚紙の小ふだ。紙票。 二かるた。骨牌。

かーど-しき （英 Card system）〔——式〕（名） 一簿記の方式の一。各箇の口座を、各箇のかーど・に記載して勘定整理するもの。 二かーど・に記載して整理すること。

かーねーしょん （英 Carnation）（名） 〔植〕あんじゃべるの異名。

かーばいど （英 Carbide）（名） 〔化〕かるしうむかーばいど・とを稱すべきもの。石灰とこーくす・とを原料として製し、あせちれん瓦斯發生用に供す。

かーぶ （英 Curve）（名） 一曲線。 二野球・庭球にて、打ち又投げたる球が、進行中方向を轉ずること。

かーみん （英 Carmine）（名） 次條の略。

かーみんれーき （英 Carmine lake）（名） 〔化〕こちにーる色素と水酸化あるみにうむ・との化合物なる顔紅の顏料。こちにーる蟲の煮出し液に、炭酸加里と明礬とを加へて得る沈澱物。洋紅。

かあ （名） 鳥などの鳴く聲。かう。

かーあい （形） 一かはゆし。愛らし。 二あはれむべく、ふびんなるさまにいふ。國姓爺後日合戰「大國の武將となる氣象を持たぬか、可哀や」

かあい-こかし （名） かはゆさを口實にすること。津國女夫池「可愛ごかしに粹が身を食ふ、根引・身請は金が輻する」

かあいさ （名） かはゆさに同じ。天神記「可愛さに捨つる此の子なれば」

かあ-かあ （名） 〔かあを重ねたる語〕 一鳥の鳴聲。 二〔動〕からす（烏）をいふ、幼兒の語。

かあちゃん （名） はは（母）をいふ、幼兒の語。

かーあを （名） 〔かは接頭〕古語。あを（青）に同じ。萬「香青なる、玉も沖つも」

かい 梭（名） 古語。ひ（杼）に同じ。神代紀「居齋服殿中略以梭傷身」

かい 櫂 楫（名） 一船具。眞直なる棒の上端に撞木（モクタ）をつけ、半ばより上を丸く、末の方を平たく削り、鮫（パナ）にかけ、水を搔き分けて船を進むるもの。かぢ。萬「このゆふべ降りくる雨は、彥星のはや漕ぐ舟の賀伊（イ）の散るかも」 和名「棹（匡謨切韻加伊）櫓（魯古切韻加伊）」 二紋所の名。さんぼんがい・みつぐみが（さんぼんがい みつぐみがい みつをりがい）

（い　か）

かい 一咳（名） せき。せきばらひ。「咳一咳していはく」

かい （副） 甚だ。非常。關東の方言。「雪女五枚羽子板（物類呼稱）此方の御壽命、語るべいなら」 膝栗毛「がいにえいといふでも、おざりましない」

がいあく 一害惡（名） 世の害となる惡事。

かいあん 一艾安 久安 よく治まり安らかなること。增鏡「海內艾安之世、城北花開之春」 史記封禪書「方內艾安、民人醫疾」

かいい 一介意（名） 心に介（カイ）むこと。氣にかくること。列子黃帝「雖傷破於前、不用介意」 後漢書度尚「所傳少少、何足介意」

かいい 一解頤（名） おとがひを解くこと。大に笑ふこと。漢書匡衡「諸儒語曰、無說詩匡鼎來、匡說詩解人頤」 蘇軾詩「京國自携手、同途欣解頤」

かいい 一痒（形口語） かゆし（痒）の口語なる、かゆいの音便。持統天皇歌軍法「隅隅までも氣をつけて、かいい所へ手廻はりの」

がいい 一害意（名） 人を害せんとする意思。惡意。

かいいん 一海印（名） 佛語。澄みわたりて靜かなる海の萬象を映すが如く、宇宙の一切を覺得したる佛者の智。

かいいん 一改印 印形を改めかふること。

かいいん 一拐引 僞計・誘惑等の手段によりて、人を他所につれゆくこと。かどはかし。衆議院議員選擧法第八十八「選擧人に暴行脅迫を加へ（若は之を拐引したる者）

がい 一該（代） その。この。「がい事件」「がい書籍」

がい 一咳（名） せき。せきばらひ。「咳一咳していはく」

がい （副） 甚だ。非常。關東の方言。「雪女五枚羽子板（物類呼稱）此方の御壽命、語るべいなら」 膝栗毛「がいにえいといふでも、おざりましない」

がいあく 一害惡（名） 世の害となる惡事。

がいあん 一艾安 久安 よく治まり安らかなること。增鏡「海內艾安之世、城北花開之春」 史記封禪書「方內艾安、民人醫疾」

かいい 一介意（名） 心に介（カイ）むこと。氣にかくること。列子黃帝「雖傷破於前、不用介意」 後漢書度尚「所傳少少、何足介意」

かいい 一解頤（名） おとがひを解くこと。大に笑ふこと。漢書匡衡「諸儒語曰、無說詩匡鼎來、匡說詩解人頤」 蘇軾詩「京國自携手、同途欣解頤」

かいい 一痒（形口語） かゆし（痒）の口語なる、かゆいの音便。持統天皇歌軍法「隅隅までも氣をつけて、かいい所へ手廻はりの」

がいい 一害意（名） 人を害せんとする意思。惡意。

かいいん 一海印（名） 佛語。澄みわたりて靜かなる海の萬象を映すが如く、宇宙の一切を覺得したる佛者の智。

かいいん 一改印 印形を改めかふること。

かいいん 一拐引 僞計・誘惑等の手段によりて、人を他所につれゆくこと。かどはかし。衆議院議員選擧法第八十八「選擧人に暴行脅迫を加へ（若は之を拐引したる者）

かーい 一同じ。

がーい 一該 同じ。

かーいう 一海宇（名） かいだい（海內）に同じ。顏延之々「曠彼琅邪、實惟海宇」 陳傳良詩「海宇正無塵、草木亦煥赫」

がーいう 一歌 詩歌・琴書又は山水等の遊び。

かーいうせい 一下遊星（名） 【天】ないうせい（內遊星）に同じ。「上遊星の對」

かーいうん 一海雲（名） 海上にある雲。謝靈運「南西は海雲漫漫として、萬古心の中なり」 杜甫詩「爲農山澗曲、臥病海雲邊」

かいーうん 一海運（名） 海上に於ける運輸。海上運送「陸運の對」「海運の便」 東南粟「由海道、以給京師」

かーいーうん 一開運 運の開くること。「開運の守札」 あはせの好くなること。

かいーうん 一海運行政（名） 【法】海運に關する行政。

かいーうん-ぎょうせい 一海運貨物（名） 海上運送の目的たる貨物。

かいーうん-くわぶつ 一海運業（名） 海上による運送業。

かいーうん-けふ 一海運業者（名） 海運業を營む人。

かいーうん-けふ-しゃ 一海運協同（名） 【商】海運業者が、競爭による損害を避けんために、相互間に締結する經濟上の協同。

かいーうん-けふどう 一海運政策（名） 【經】海運に關する國家の政策。

かいーうん-せいさく 一改衣（名） こころもがへ（更衣）に同じ。故實拾要「改衣エ」

かいーえ 一孩嬰（名） えいがい（嬰孩）に同じ。

がいーえい 一概要（名） あらましのこと。

かーいー 一蚬（名） 【動】あぶらむし（油蟲）の異名。 二あくた（蚊蟲）の異名。和名抄「蚊蟲、唐韵云、蚊、人腹中長蟲也。病源論云、蚊蟲加以支云、蚊名出蟯、今驗、多在人腹中、飲白酒、食生果等所成也」 釗字

かい 一戒（名） 一いましむること。いましめ。訓戒。 二佛語。人を戒めて非を防ぎ過ちを止むるおきて。いましめ。後撰「京極のみやす所尼になりて、戒受けんとて仁和寺にわたりて」 源手習「いむことの中に、やぶる戒は多からめど、智度論「佳在佛家、以戒爲本」 三人をいましめ訓ふる漢文の一體。

かい 一階（名） 一きざはし。きだはし。あがりだん。段。朗詠「下樓娃袖顧階鑣」 著聞「階隱の間に立ち入りて、階に尻をかけて、しばしはれまを待たれける程に」 禮記曲禮「客若降等、則就主人之階」 二位の上下の分ち。從五位の上、從五位の下の上下の類。きざみ。等級。階段。式部省式「降一階敍」 宇津保藤原女「かうぶり一かい越えて」

かい 一楷（名） かいしょ（楷書）の略。

かい 一海（名） うみ。なだ。論語分治長「乘レ桴浮ニ于海一」

かい 一界 堺（名） 一さかひ。區域。 二なかま。社會。「學者界」「實業界」 三した（下繪）なるべし。類聚雜要「秀壺筥一雙中略堺料百疋十疋」 四けい（野）に同じ。圖書寮式「鹿毛筆二管堺料」 同「其裝裁者界之外、上一寸一分、下一寸二分、總得九寸五分」 宇治拾遺五四卷經書き奉るべき紙、經師に打ちつがせ、鬠かけさせ

（註）櫓は三年、櫨は三月　櫨の使用法の、繪より困難なること。

かい （名） をけ（桶）をいふ、肥前國の方言。

かい 一蚬（名） かゆ（粥）の訛り。

かい （名） 【動】 一あぶらむし（油蟲）の異名。 二あくた（蚊蟲）の異名。和名抄「蚊蟲、唐韵云、蚊、人腹中長蟲也。病源論云、蚊蟲加以支云、蚊名出蟯、今驗、多在人腹中、飲白酒、食生果等所成也」 釗字

かい 一戒（名） 一いましむること。いましめ。訓戒。 二佛語。人を戒めて非を防ぎ過ちを止むるおきて。いましめ。後撰「京極のみやす所尼になりて、戒受けんとて仁和寺にわたりて」 源手習「いむことの中に、やぶる戒は多からめど、智度論「佳在佛家、以戒爲本」 三人をいましめ訓ふる漢文の一體。

かい 一階（名） 一きざはし。きだはし。あがりだん。段。朗詠「下樓娃袖顧階鑣」 著聞「階隱の間に立ち入りて、階に尻をかけて、しばしはれまを待たれける程に」 禮記曲禮「客若降等、則就主人之階」 二位の上下の分ち。從五位の上、從五位の下の上下の類。きざみ。等級。階段。式部省式「降一階敍」 宇津保藤原女「かうぶり一かい越えて」

かい 一楷（名） かいしょ（楷書）の略。

かい 一海（名） うみ。なだ。論語分治長「乘レ桴浮ニ于海一」

かい 一界 堺（名） 一さかひ。區域。 二なかま。社會。「學者界」「實業界」 三した（下繪）なるべし。類聚雜要「秀壺筥一雙中略堺料百疋十疋」 四けい（野）に同じ。圖書寮式「鹿毛筆二管堺料」 同「其裝裁者界之外、上一寸一分、下一寸二分、總得九寸五分」 宇治拾遺五四卷經書き奉るべき紙、經師に打ちつがせ、鬠かけさせ

おほよそ。概略。

かい-えき 〔改易〕 ㊀改め易ふること。㊁其の官職を停めて他に代はらしむること。平家三[注]「天台座主明雲大僧正公請を停止せらるる上、藏人を御使にて、如意輪の御本尊を召し返して、御持僧を改易せらる」東鑑六文治二年「令改易其職」甲陽軍鑑「人に應外仕る者を御成敗候歟、改易と仰せ附けられ尤かと、先づ内藤修理は存じ奉る」漢書[賈誼]「改易大臣」㊂江戸時代、罪により、士人の名籍を除き、領地・邸宅を没収すること。盤居より重く、切腹より輕し。御定書百箇條「一、改易（大公儀し置（相續し）夫れより第二立願（申し候）但家屋敷取上、家財無構」

かい-えん 〔海燕〕 (名)【動】㊀ちどり（千鳥の異名。[嘉祐]「沉水羅紋海燕かへる」李群玉詩「沉水羅紋海燕回、柳條牽恨到荆臺」㊁いとまきひとで（蘚卷人手）の異名。

かい-えん 〔開演〕 口演又は演戲等をはじむること。

かい-おう 〔海鷗〕 (名) 海のかもめ。唐書[風俗]「客獻海鷗賦」以諷」

かい-おん 〔開音〕 (名) かいこうおん（開口音）の略。

かい-か 〔階下〕 (名) きざはしのもと。あがりだんのした。左傳[莊公]「石之紛如死人于階下」江淹文「鳥赴齋上、水臣階下」

かい-か 〔改嫁〕 あらためて嫁ぐこと。後漢書[烈女]「許升妻中[黽]榮父積忿長升、乃呼榮欲改嫁之」隋書[列女]「王歆[黽]其妻焚其妻而求改嫁」

がい-か 〔崖下〕 (名) がけのした。絶壁の下。宋史[賈黯]「射萬年州廳于崖下、逢拔之」同[王貞]「自投崖下而死」

がい-か 〔凱歌〕 (名) 凱旋の時に奏する歌。かちどき。東遷基業[凱歌をあぐべき時にあらず]周禮[春官]「凡軍大獻、教凱歌、遂倡之」

かい-かい (副) 雷の鳴り轟く聲のさまにいふ語。[詩]「[雷]、かいかいたる雷の光、せいくを萬天の間に飛ばし」

かい-かい 〔憒憒〕 (副) 心亂るるさまにいふ語。莊子[大宗]「彼父惡能憒憒、然爲世俗之禮、以觀衆人之耳目哉」

かい-かい 〔喈喈〕 (副) 鳥の和らぎ鳴く聲にいふ語。詩經[國風]「黄鳥于飛、集于灌木、其鳴喈喈」

がい-がい (副) さうざうしきさま、やかましきさまにいふ語。がやがや。唐船噺「今國姓爺「はて、がいがいと喧しい」

がい-がい 〔皚皚〕 (副) 一面に白きさまにいふ語。劉禹錫詩[中秋月]「霜氣何皚皚」

かい-かう 〔海港〕 (名) 海岸にある港の稱（河港・湖港の對）海港檢疫法[第一條]「檢疫を施行すべき海港」元史[文宗紀]「山東丁壯萬人、守禦益嚴、帶海港」

かい-かう 〔戒香〕 (名) 持戒の德積みて、人をして敬虔の念を起こさしむるを、薰香のしみじみと匂ふに譬へていふ語。榮華[玉藻]「戒香の匂ひしみかをりて」觀無量壽經「戒香薰修」

かい-かう 〔開校〕 學校にて、授業を開始すること。公立私立專門學校規程[第一條]「開校年月」

かい-かう 〔開港〕 ㊀港を開きて、外國との通商を許すこと。又、其の港。關稅法[第十]「外國貿易船開港に入港したるとき」㊁潮汐の出入を節すべき開門を備へざる港。

かい-かう 〔開講〕 講義を始むること。北齊書[儒林]「昇高座開講」北史[賈逵]「孝武帝釋奠開講」玄奥・溫子昇・魏季景・李業興、並爲講初句」

かい-かう 〔開坑〕 鑛山にて、横坑・竪坑等を開鑿して、採鑛の準備をなすこと。

かい-がう 〔改號〕 ㊀稱號を改むること。春秋[莒]「荆始改號曰楚」王禹偁詩「其家本開封、改號一何尊」㊁年號を改むること。改元。明治元年九月布告「先例之通、被爲改年號候、就いては、是れ迄吉凶之衆兆に隨ひ、屢改號有之候得共、自今御一代一號に被定候」

かい-かう-けんえき 〔海港檢疫〕 (名) 傳染病豫防のために、海外の諸港及び臺灣より來る船舶に對し、内務大臣指定の海港にて行ふ檢疫。「海港檢疫法」

かい-かう-けんえきくわん 〔海港檢疫官〕 (名) 海港檢疫所の職員。海港檢疫所長の命を承け、檢疫を掌る奏任官。明治三十二年四月勅令第百三十七號海港檢疫所官制[第三]「海港檢疫官、專任一人、奏任」同[第五]「海港檢疫官は所長の命を承け檢疫を掌る」

かい-かう-けんえきじょ 〔海港檢疫所〕 (名) 明治三十八年以前、内務大臣の管理の下に、海港檢疫に關する事務を掌りし官廳。所長・海港檢疫官・海港檢疫醫官・海港檢疫醫官補・海港檢疫醫官補・調劑手・書記の職員を置く。明治三十二年四月勅令第百三十七號海港檢疫所官制「海港檢疫所」

かい-かう-しき 〔開校式〕 (名) 開校につきて行ふ式。

かい-かう-しゃ 〔偕行社〕 (名) 師團・旅團等の所在地に設けある、陸軍將校の集會所。

かい-かう-おうう 〔開港場〕 (名) 外國との通商を許したる港。開港。かいかうば。

かい-かう-ば 〔開港場〕 (名) 前條に同じ。

かい-かう-もんじ 〔蟹行文字〕 (名) 〔蟹の如く横へ行く義〕よこもじ。歐米の文字。

かい-かく 〔海角〕 (名) 陸地の、海中に突き出でたる端。みさき。さき。「喜望峯のかいかく」游宦紀聞「今之遠官及遠服賈者、皆云天涯海角、蓋談遠也」

かい-かく 〔介殼〕 (名)【動】動物學上の用語。軟體動物の外套膜より分泌・形成せられたる硬き部分。おもに炭酸石灰より成る。構造は三層より成り、最外層なる表皮は、種類により彩色・斑紋を異にし、中層は稜柱層にて、數多の六角柱の集合せるものより成り、最内層は眞珠層と稱し、菲薄なる透明板狀の重疊せるものより成りて、眞珠色を帶ぶ。一般に瓣鰓類にては左右二枚より、腹足類にては螺狀に卷旋せる中空圓錐體より成り、頭足類にては體壁中に隱在するもの多し。かひ。かひから。

かい-かく 〔改革〕 ㊀すべて、物事の不完全なる所を改めて、更に善良なる有樣に變ずること。㊁憲法の範圍を超えず、國家の基礎を動かさざる程度にてなす、政治上又は社會上の變更。（革命の對）

かい-かく 〔改格〕 (英 Reduction) 三段論法の第一格以外の推論式を、第一格に改むること。改造。

かい-かく (副) おほよそ（物の概數をいふ語）。廉添壻囊抄[三]「物の分濟を云ふ時、かいかく幾程と云ふは何事ぞ。かいかくとは片言也。外梯なるべし」

かい-がく 〔海嶽〕 (名) 海と山と。恩恵などの深く且つ高きに譬へていふ語。唐書[車駕]「毫挹者祭、海嶽之服也」羅隱詩「恩如海嶽、何時報、恨似烟花、觸處生」

かい-かく-がく 〔介殼學〕 (名)【動】動物學の一分科。軟體動物に於ける介殼の形狀・色彩等を研究するもの。

かい-かく-るゐ 〔介殼類〕 (名)【動】かいかくるゐ（介甲類）の異名。

かい-がけ 〔皆掛〕 名 貨物を、風袋（つゝみ）と共に秤（はかり）に掛くること。うはめ（上目）。みながけ。

かい-かしこまる 〔搔畏〕 (自動) かしこまる（畏）に同じ。著聞集「此の僧かいかしこまりて」

かい-かた 〔搔肩〕 (名) 矢工の語。するもぎの異名。

かい-がね 〔搔肩〕 (名) 背の肩の下の兩傍に、骨の高くなれるところ。卽ち、肩胛骨のところ。和名「胛（加伊）肩之下也」名義抄「胛（カイ）（カタモ）（カタガネ）」

かい-がね 〔搔金〕 (名) 古語。かきがね（繫金）の音便。字鏡集「鍵（カイガネ）（カギガネ）」

かい-かぶ 〔搔甲〕 (名) 蟹の甲（こう）。

かい-かぶ 〔搔蛤〕 (名)【動】はまぐり（文蛤）の異名。

かい-かぶ 〔開闔〕 ㊀開くことと閉づることと。老子「愛民治國能無爲乎、天門開闔能無雌」㊁職名。進退用捨の意にて、一局の事務を擔任するもの。記錄所・院文殿・内御書所・和歌所などに置かる。武家にても侍所開闔・引付開闔等あり。

かい-かぶ-おん 〔開合音〕 (名) 開口音と合口音と。

かい-かぶ-るゐ 〔介甲類〕 (名)【動】節足動物の甲殼類の一目。微小なる種類を含む。體の構造簡單にして、左右一對の扁平なる介殼狀外皮にて包まれ、恰も小蝦蟹類の如し。後方より尾を出だし、前方の缺刻部より二對の觸角を出だしこれを以て游泳す。腹部は甚だ退化せり。

かい-かん 〔開函〕 ㊀郵便の開函時刻。

かい-がん 〔海岸〕 (名) 陸地の、海に接したる境處。うみぎし。海邊。朗詠「海岸孤村日霽時」晉書[食貨]「河濱海岸、三丘八藪」

かい-がん 〔開眼〕 かいげん（開眼）に同じ。

かい-がん 〔蟹眼〕 茶釜の湯の煮えたぎること。

かい-がん 〔解顏〕 笑ひ顏すること。列子[黄帝]「五年之後、夫子始一解顏而笑」錢起詩「倘寄相思字、愁人定解顏」

かい-がん-えうさい 〔海岸要塞〕 (名) 軍港・要港又は兵略上重要なる港灣に設けたる要塞。

かい-がん-きょく 〔海岸局〕 (名) 無線電信機を裝置する陸上の通信官署。卽ち、船舶局と無線電報の送受をなす所。無線電報規則[第三]「海岸局」

かい-がんきょく-れうさん 〔海岸局料金〕 (名) 海岸局にて、無線電報の送信又は受信の取扱を爲すことに課する料金。無線電報規則[第四]「海岸局料金」

かい-がんこうけき-かん 〔海岸攻擊艦〕 (名) 海防艦の一。主として、敵國海岸の攻擊に供せらるるもの。

かい-がんせん 〔海岸線〕 (名)㊀〔地〕陸と海との境界線。海岸線の長き處には良好の港灣多く、從って人文の發達を助くること尠なからず。沿海線。㊁海岸に沿ひて敷設せる、汽車などの線路。

かい-がん-たう 〔海岸島〕 (名) 大陸の一部、分離して島となりたるもの。多く大陸の附近に在り。

かい-がん-づ 〔海岸圖〕 (名) 海岸の航海に用ふる海圖。

かい-がん-はう 〔海岸砲〕 (名) 海岸砲臺に備へ附くる火砲の總稱。

かい-がん-ばうぎょ 〔海岸防禦〕 (名) 海岸を防ぎ守ること。又、其の備へ。

かい-がんばうぎょ-かん 〔海岸防禦艦〕 (名) 海防艦の一。主として、自國の海岸防備に供せらるるもの。

かい-がんばうだい 〔海岸砲臺〕 (名) 海岸防禦のために設けたる砲臺。

かい-がんばうろう 〔海岸望樓〕 (名) かいぐんばうろう（海軍望樓）に同じ。

かい-がん-れう 〔海岸料〕 (名) 本邦の海岸局にて、送信又は受信の取扱をなす外國無線電報の料金。外國無線電報規則[第三]「海岸料」

かい-き 〔甲斐絹〕 海氣 (名) 精練したる練絲にて緻密に織りたる絹布。質平滑にして光澤あり。縞・玉蟲・繪等の種類あり。

かい-き 〔海氣〕 (名) 海の氣。海邊の空氣。陳子昂詩「海氣侵南郡、邊風掃北平」韓愈詩「海氣昏昏水拍天」

かい-き 〔皆既〕 (名) かいきしょく（皆既食）の略。左傳[昭公]「日有食之既。杜注皆既者、正相當而相侵開疏也」

かい-き 〔開基〕 ㊀もとゐを開くこと。基礎を建つること。後漢書[光武]「背韓信破歷下、以開基」㊁佛寺を創建すること。又、その人。開山。開祖。

かい-ぎ 〔海技〕 (名) 海員に必要なる技術。

かい-ぎ 〔開議〕 議事を開くこと。衆議院規則[第八十]「開議の動議」

かい-ぎ 〔解義〕 しやくぎ（釋義）に同じ。

がい-き 〔咳氣〕 (名) 風邪などにて咳の出づる病。しはぶきやみ。榮華[頭注]「がいきなどいふことをせさせ給ひて」年中行事祕抄[三月]「安元二年九月三日、主上依御咳氣無御浴殿」

かい-ぎう 〔海牛〕 (名)【動】㊀哺乳類中、游水類の一種。體形鯨に類し、長さ六尺乃至一丈に達す。齒を具へ、皮膚に粗毛あり。尾は水平に廣がりて篦形なり。熱帶地方の海中に住す。㊁うみすずめ（海雀）の異名。

かい-き-けっしょく 〔皆既月食〕 (名)【天】地球の影が、月の地球に面せる表面全部に投ぜられたるとき生ずる現象。此の時は月の表面は直接に少しも太陽の光を受けざれども、空氣が太陽より來たる光を屈折して其の方向を變ぜしめ、之に依りて月を照らす爲め、月は闇黑とならずして赤銅色を呈す。

かい-き-しょうばう 〔開基勝寶〕 (名) 次條の略。

かい-きしょうばう-せん 〔開基勝寶錢〕 (名) 淳仁天皇天平寶字四年、打ち延べて造り出だしたる鑄造に非ず黄金錢。面に開基勝寶の文あり。徑は八分、重量は三匁一分强。一を以て太平元寶錢の十に當てたり。開基錢。大日本貨幣史「開基勝寶錢」

かい-き-しょく 〔皆既食〕 (名)【天】皆既日食及び皆既月食の總稱。

かいき-せん 〔開基錢〕（名）かいきしようはうせん（開基勝寶錢）の略。

かいき-にっしょく 〔皆既日食〕（名）【天】太陽により生ずる月の影が地球表面に投ぜらるれば、地球の其の部分に於いては太陽の光は全く月の蔽ふ所となりて、亳も之を望むこと能はざる現象の稱。

かいきぶ 〔戒急〕（名）佛語。智慧を研くを後にして、戒を持するに專らなること。榮華を棄て、或ひは棄念の人、或ひは戒念のもの、行ひのしなじなに隨ひて、極樂の迎へを得たり」

かいきぶ 〔階級〕（名）一きざはしのたん。二地位の高下。しな。くらゐ。等級。後漢書「讓天授逸才、聰明賢智、階級名位亦宜超然」 呉志「臣聞、有國有家者、必明嫡庶之錯、異尊卑之禮、使高下有差、階級遝遝」

かいきぶ-せい 〔階級制〕（名）一世襲なる身分及び職業を基礎として、人の社會上の地位の區別を立つる制度。二監獄制度の一。分房制と雜居制とを折衷せるもの。即ち、始めに分房制に基き、一定の期限を經たる後、雜居制に從ふもの。

かいきぶ-たいへいせいど 〔階級代表制度〕（名）【法】歐洲中世の封建時代に行はれたる議會制度。貴族其の他の階級の利益を代表する議員によりて、議會を組織するもの。

かいきぶ-てすうれう 〔階級手數料〕（名）【法】同性質の公務中、數種の事情によりて種別を設け、其の種別に從ひて金額を異にする手數料。

かいき-めんじゃう 〔海技免狀〕（名）海運信官により、試驗を受けて合格し、且つ海技免狀原簿に登錄を受けたるもの、或ひは海軍艦船艇に乘り組み、運航若しくは機關運轉に從事し、又は商船學校全科卒業證書を有して、運信大臣が海員試驗規程に合格すと認めたる者に、運信大臣の授與する船舶職員の免狀。甲種船長・甲種一等運轉士・甲種二等運轉士・乙種船長・乙種一等運轉士・乙種二等運轉士・丙種船長・丙種運轉士・機關長・一等機關士・二等機關士・三等機關士の十二種に分かつ。船舶職員法第三章「海技免狀」

かいきめんじゃう-げんぼ 〔海技免狀原簿〕（名）運信省に備へおき、海技免狀を授與したる者の氏名・族籍・生年月日及び海技免狀の番號・種類等を登錄する原簿。船舶職員法第五章「海技免狀原簿」

かいきゃう 〔契經〕（名）佛語。きやう（經）に同じ。

かいきゃう 〔戒行〕佛語。よく佛戒を持して、行ひを正しくすること。保元（平安末期）「十善の戒行重きに依って、打ち勝ち給ふ處に」 北史「並出家爲尼、成存戒行」

かいーきゃく 〔諧謔〕（かい（諧）はかなふ、きゃく（謔は戲れ言）人の意に投じ、おもしろく感ぜしむる戲言。おどけ。しやれ。滑稽。晉書「慢之好諧謔、人多愛狎之」

かいきゃくーか 〔諧謔家〕（名）諧謔をなす人。滑稽家。

かいーぎょ 〔海魚〕（名）海に產する魚の總稱。戰國策「有請者、曰臣請三言而已、中略客趨而進曰、海大魚」 古今注「鯨魚者、海魚也、大者長千里」

かいき-よく 〔海氣浴〕（名）海上の清新なる空氣に浴すること。

かいきり （名）小袖・雜袋などの、肩及び裾の稱。貞丈雜記

かいーきる 〔搔切〕（他動四）かききる（搔切）の音便。用明天皇職人鑑「むかうから、こっちの首をかいきって」

かいーきん 〔皆勤〕一年或ひは一箇月・若しくは或る一定の期間に、休日の外、一日も缺かさず勤めたること。

かいーきん 〔戒禁〕戒しめ禁ずること。禁止。禁戒。

かいきんしゃくーくわ 〔海金砂〕（名）【植】かにくさ（海金砂）の異名。

かいきんしゃくーくわ 〔海金砂科〕（名）【植】かにくさくわ（海金砂科）の異名。

かいーく 〔戒懼〕戒しめおそるること。左傳（僖公二年）「百官於是乎戒懼、而不敢易紀律」

かいーぐ 〔皆具〕（名）一一通り物の具はりたること。 增鏡「女房の裝束かいぐ、いろいろにいと清らなる十具中略おくらる」 二鞍・鎧など、馬具一式具はりたること。 雍州府志「凡倭俗所、被馬之物、全備謂皆具」 當流小栗判官「つひに召されぬ馬ならば、鞍かい具も候はじ、はだせに乘って見せ申さん」

かいーぐ 〔戒具〕（名）在監の犯罪人又は刑事被告人の、逃走・暴行等を警戒するために用ふる器具。監獄法第十九條「在監者逃走暴行若は自殺の虞あるとき又は監外に在るときは戒具を使用することを得」

かいーく 〔街衢〕（名）ちまた。まち。街。北齊書「于是風俗更始、私枉路絕、乃勝于街衢」 「內則街衢洞達」

かいーぐら 〔海隅〕（名）海のすみ。津津浦浦。書經「帝光于天、下至于海隅蒼生」 李白詩「楊宰穆清風、芳聲滿海隅」

かいーくむ （他動四）包む。ひきかぶる。ひきかづく。枕「髮はくびのもとにかいくくみて」同五「かいくくみて臥しぬるのち」

かいーぐる 〔搔潛〕（自動四）くぐる（潛）に同じ。源氏鳥帽子折「言ふより早く搔潛り、棲取りして跳ね返し」

かいくじん （名）【動】おっとせい（膃肭臍）の異名。慶長年錄（十五年）「當月上旬比、えぞの松前（伊豆駿府江戸）へ出仕、大御所日はく、かいくじんといふ魚を調進、此の魚を食すれば長命なりと。此の魚むかふに鰭あり、身に毛あり、長一尺、横四五寸と中略おっとせいともいふなり」

かいくび 〔搔首〕（名）かきくび（搔首）の音便。用明天皇職人鑑「つひ具足著ていって、かいくび切って來てたも」

かいくらみ-どぎ 〔搔暗時〕（名）ゆふがた。たそがれ。 著聞「かいくらみどきに、小六條にて相撲をとらんとて」

かいーぐり 〔搔繰〕（名）一かいぐること。 二手を、ちがひざまに輪の如くまはす幼兒の戲れ。

かいーぐり （名）かちぐり（搗栗）に同じ。物類呼名「搗栗名、紀國俗、賀國俗、芝者曰、ちぐり」 「あるもの手まさぐりに、かいぐりをあふこ二つにして（かいぐりに、かいぐりをあふひにして 狂言）」 類聚雜要「大菓子小麥粉・蒸菓子・餅・餡・芝麻・小柑子・蒸栗・蒸・豆・蒸・蒸・蒸

法會議の一。臨戰・合圍の戒嚴間にのみ設け、其の臨戰・合圍の地に在る佐官以下の軍人・從軍當人及び海軍の用に供する船舶乘組員の罪を犯したるもの、並びに海軍刑法を以て論ずべき罪を犯したるものを審判し、又其の特別權として、合圍地境内に於ける軍事に係る民事、及び普通刑法内の特定犯罪に係るものを審判し、若し其の地境内に裁判所なく、又其の管轄裁判所と通路斷絶せしときは、總べての民事・刑事をも審判する所。明治三十七年勅令第二十五號「海軍合圍地軍法會議」

かいぐん-かんけいしけんじょ 〔海軍〕艦船の模型を以て、その速力に關する試驗を行ふ所。所長・所員・主計長・書記・技手の職員を置く。海軍艦型試驗所條例「海軍艦型試驗所」

かいぐん-かんごく 〔海軍監獄〕（名）特別監獄の一。各軍港に置き、海軍大臣監督の下に、懲役・禁錮又は拘留の執行を受くる現役、若しくは召集中なる豫備役・後備役の海軍軍人・軍屬、海軍所屬の學生・生徒、死刑の言渡しを受けたる者及び刑事被告人を拘禁する所。現行法にては懲役監・禁錮監・拘置監及び拘留場の四種に分かつ。各條を見よ。海軍監獄令「海軍監獄」

かいぐん-かんごく-くわん 〔海軍監獄〕（名）海軍監獄の職員。卽ち、海軍監獄長・海軍監獄看守長・海軍監獄看守の總稱。

かいぐん-かんごく-ちゃう 〔海軍監獄〕（名）海軍監獄看守長・同相當官・准士官・書記・技手の職員を置く。海軍艦政本部條例「海軍艦政本部」

かいぐん-かんせん 〔海軍艦船〕（名）海軍所屬の艦船。其の使用の目的により、軍艦・驅逐艦・水雷艇・潛水艇・運送船・病院船・工作船・雜役船の八種に分かち、其の役務によりて、在役艦・在役驅逐艦・在役艇及び豫備艦・豫備驅逐艦・豫備艇に分かつ。建造中に係るものは未成艦・未成驅逐艦・未成艇といふ。海軍艦船條例「海軍艦船」

かいぐん-きうへい 〔海軍歸休兵〕（名）海軍の歸休兵。ききうへい（歸休兵）を見よ。

かいぐん-きくわんがくかう 〔海軍機關學校〕（名）海軍艦政本部長の管轄に屬し、海軍機關官となすべき生徒を教育する學校。校長・副官・教頭・教官・監事長・監事・軍醫長・主計長・海軍中・少軍醫及び中・少主計の職員と、海軍機關兵曹長並びに准士官・下士卒・判任文官とを置く。海軍機關學校條例「海軍機關學校」

かいぐん-きくわんぐん 〔海軍機關〕（名）海軍に關する軍務に從事する海軍高等武官。卽ち、海軍機關中將・機關大佐・機關中佐・機關少佐・機關大尉・機關中尉・機關少尉の總稱。

かいぐん-きくわんじゅつれんしふじょ 〔海軍機關術練習所〕（名）明治四十年四月以前の海軍工機學校の稱。明治三十年九月勅令第三百二十四號海軍機關術練習所條例「海軍機關術練習所」

かいぐん-きくわんせうさ 〔海軍機關少佐〕（名）海軍機關官の一。海軍機關中佐の次に位する海軍少佐相當官。

かいぐん-きくわんせうしゃう 〔海軍機關少將〕（名）海軍機關官の一。海軍機關中將の次に位する海軍少將相當官。

かいぐん-きくわんせうゐ 〔海軍機關少尉〕（名）最下級の海軍機關官。海軍少尉相當官。

かいぐん-きくわんせうゐこうほせい 〔海軍機關少尉候補生〕（名）一定の學術修了の後、海軍機關少尉たるべきもの。海軍機關學校の全學科を卒業したるものと、私費を以て外國に留學し、相當の學術を修め卒業したる海軍出身志願者にして、身體檢査及び採用試驗に合格したるものとより採用す。海軍高等武官補充條例第四條「海軍機關少尉候補生は左に掲くる者より採用す」

かいぐん-きくわんたいさ 〔海軍機關大佐〕（名）海軍機關官の一。海軍機關少將の次に位する海軍大佐相當官。

かいぐん-きくわんたいゐ 〔海軍機關大尉〕（名）海軍機關官の一。海軍機關少佐の次に位する海軍大尉相當官。

かいぐん-きくわんちゅうさ 〔海軍機關中佐〕（名）海軍機關官の一。海軍機關大佐の次に位する海軍中佐相當官。

かいぐん-きくわんちゅうじゃう 〔海軍機關中將〕（名）最高級の海軍機關官。海軍中將相當官。

かいぐん-きくわんちゅうゐ 〔海軍機關中尉〕（名）海軍機關官の一。海軍機關大尉の次に位する海軍中尉相當官。

かいぐん-きくわんへいさう-ちゃう 〔海軍機關兵曹長〕（名）海軍機關兵曹の一。機關に關する軍務に從事するもの。一等・二等及び三等の三級に分かつ。

かいぐん-きくわんへいさう 〔海軍機關兵〕（名）海軍機關に關する軍務に從事する兵曹長相當の海軍武官。

かいぐん-きしゃう 〔海軍旗章〕（名）海軍艦船及び海軍所屬の諸官署に揭揚して、表章となす旗旒。第一種旗章及び第二種旗章とに分かち、第一種旗章は天皇旗・皇后旗・皇太子旗・皇族旗・海軍大臣旗・大將旗・中將旗・少將旗・代將旗・先任旗・司令旗・長旗の十二種とし、第二種旗章は軍艦旗・艦首旗・當直旗・運送船旗・工作船旗・白地赤十字旗の六種とす。各條を見よ。海軍旗章條例「海軍旗章」

かいぐん-きじゅつくわいぎ 〔海軍技術會議〕（名）軍艦の構造・兵器及び其の諸機關並びに砲銃・水雷・彈藥・劇發藥の設計・考案、其の他技術に關する事項につきての海軍大臣の諮問機關。明治二十六年五月に設け、同三十六年十一月廢せられたり。明治二十六年五月勅令第五十三號海軍技術會議條例、同三十六年十一月勅令第百五十九號「海軍技術會議」

かいぐん-きゃう 〔海軍卿〕（名）明治十八年十二月、官制改革前の海軍大臣の稱。明治十四年十二月布告第七十號海軍刑法第一「海軍卿の命令」

かいぐん-く 〔海軍區〕（名）海軍の必要より設定したる、海岸及び海面の區劃。現時我が國にては四區に分かち、各區に軍港を設け、各軍港には鎭守府を置きて之を管理せしむ。明治三十六年勅令第五號「海軍區」

かいぐん-くわんしょ 〔海軍官署〕（名）海軍に關する官署。海軍治罪法第一條・第二項「海軍官署」

かいぐん-くんい 〔海軍軍醫〕（名）一海軍の大軍醫・中軍醫・少軍醫の總稱。二かいぐんぐんいくわん（海軍軍醫官）に同じ。

かいぐん-ぐんいがくかう 〔海軍軍醫學校〕（名）海軍軍醫官に高等の學術を教授し、兼ねて新に採用したる海軍軍醫・海軍藥劑士・海軍少軍醫候補生及び海軍少藥劑士候補生をして、海軍軍醫官及び海軍藥劑官たるに必要なる學科及び職務を練習せしむる學校。校長・副官・監事・教官・主計長・書記及び技手の職員を置く。海軍軍醫學校條例「海軍軍醫學校」

かいぐん-ぐんいくわん 〔海軍軍醫官〕（名）病傷者の診斷・治療其の他衞生に關する軍務に從ふ海軍高等武官。卽ち、海軍軍醫總監・軍醫大監・軍醫中監・軍醫少監・大軍醫・中軍醫及び少軍醫の總稱。海軍高等武官補充條例第九條「海軍軍醫官」

かいぐん-ぐんいさうかん 〔海軍軍醫總監〕（名）最高級の海軍軍醫官。海軍中將又は少將相當官。

かいぐん-ぐんいせうかん 〔海軍軍醫少監〕（名）海軍軍醫官の一。海軍軍醫中監の次に位する少佐相當官。

かいぐん-ぐんいたいかん 〔海軍軍醫大監〕（名）海軍軍醫官の一。海軍軍醫總監の次に位する大佐相當官。

かいぐん-ぐんいちゅうかん 〔海軍軍醫中監〕（名）海軍軍醫官の一。海軍軍醫大監の次に位する中佐相當官。

かいぐん-ぐんが 〔海軍軍衙〕（名）かいぐんぐんばふくわいぎ（海軍軍法會議）に同じ。捕獲審檢令第三十四條「檢定の執行に關し海軍軍衙の援助を求め」

かいぐん-ぐんがくし 〔海軍軍樂師〕（名）海軍准士官の一。軍樂に關する軍務に從事するもの。

かいぐん-ぐんがくしゅ 〔海軍軍樂手〕（名）海軍下士官の一。軍樂に關する軍務に從事するもの。一等・二等及び三等の三級に分かつ。

かいぐん-ぐんがくちゃう 〔海軍軍樂長〕（名）軍樂に關する軍務に從事する海軍兵曹長相當官。

かいぐん-ぐんじん 〔海軍軍人〕（名）海軍高等武官・准士官・下士及び卒の總稱。海軍刑法第八條「海軍軍人」

かいぐん-ぐんせい 〔海軍軍政〕（名）海軍に關する軍事行政。海軍省官制第一條「海軍大臣は海軍軍政を管理し」

かいぐん-ぐんぞく 〔海軍軍屬〕（名）海軍の勤務に服する海軍文官・同待遇者及び官費規則により官費による雇員・傭人の總稱。海軍刑法第十一條「海軍軍屬」

かいぐん-ぐんぱふくわいぎ 〔海軍軍法會議〕（名）軍法會議の一。海軍刑法を適用すべき被告人を裁判する所。判士長・判士・主理若しくは主理試補及び錄事を以て構成し、東京軍法會議・鎭守府軍法會議・艦隊軍法會議・高等軍法會議及び合圍地軍法會議の五種に區別す。各條を見よ。明治三十三年法律第十三號第二條「海軍軍法會議」

かいぐん-ぐんれいぶ 〔海軍軍令部〕（名）海軍上の國防及び用兵に關する事を掌る所。部長・次長・副官・參謀・海軍編修・海軍船匠長・船匠師・書記・編修書記及び技手の職員を置く。海軍軍令部條例「海軍軍令部」

かいぐんぐんれいぶ-ちゃう 〔海軍軍令部長〕（名）海軍軍令部の長官。親補にて、天皇に直隸し、帷幄の機務に參し、また軍令部の部務を統理し、戰時には、大本營海軍幕僚長となり、國防・用兵に關する事を參畫し、親裁の後、これを海軍大臣に移すもの。海軍軍令部條例第二條「海軍軍令部長」

かいぐん-けいさ 〔海軍警査〕（名）常設海軍法會議の職員。軍法會議及び法廷の警衞・令狀の執行、書類の送達、被告人の護送及び看守に任じ、且つ主理の命によりて犯罪の搜索に從事する判任官待遇の吏員。明治三十二年勅令第百四十五號「海軍警査」

かいぐん-けいりがくかう 〔海軍經理學校〕（名）海軍主計官及び少主計候補生に必要なる學科を教授し、兼ねて職務を練習せしめ、また海軍上等筆記・廚宰・一二三等主廚及び筆記となすべき卒をして、實務を練習せしむる所。校長・監事・教官・軍醫長・主計長及び海軍兵曹長・同相當官・准士官・下士卒及び判任文官の職員を置く。海軍經理學校條例「海軍經理學校」

かいぐん-けいりがくかう-がくせい 〔海軍經理學校學生〕（名）海軍經理學校に在て修習する准士官以上及び候補生の稱。甲種・乙種・丙種・選科の四種に分かつ。海軍經理學校條例第九條・第十條「海軍經理學校學生」

かいぐん-けいりがくかう-れんしふせい 〔海軍經理學校練習生〕（名）海軍經理學校にて修習する下士卒。甲種・乙種・丙種に分かつ。海軍經理學校條例第九條・第十一條「海軍經理學校練習生」

かいぐん-けいりぶ 〔海軍經理部〕（名）各軍港に置き、其の地の鎭守府に屬して、會計・經理、造兵・造船の材料物件にあらざる通常物品・港灣防禦用品及び艦船繫留用品の購買・供給、鎭守府所管一般及び其の所屬艦船團並びに軍港境域内にある其の他の諸官衙の會計事務の監督、管區内にある艦船團其の他各部・諸官衙の金櫃・物件及び帳簿の監査を掌り、兼ねて衣服・糧食の準備・保存・供給の事と、官有財産・建築の事とを掌る所。第一課・第二課・衣糧科・建築科を設けて其の事務を分掌せしめ、部長・課長・課員・科長・科員・海軍兵曹長・同相當官・准士官・下士卒及び書記・技手の職員を置く。海軍經理部條例「海軍經理部」

かいぐん-けいりくぼふ 〔海軍教育本部〕（名）海軍全般の軍事教育に關することを規畫し、其の統一進歩を計り、且つ教育圖書に關する事を掌る所。第一部・第二部及び第三部を置き、各其の所管の事務を分掌せしめ、本部長・副官・各部長・部員・海軍編修の職員と書記・海軍編修書記とを置く。海軍教育本部條例「海軍教育本部」

かいぐん-けいりくぼふ-ちゃう 〔海軍教育本部長〕（名）海軍教育本部の長官。海軍大臣に隸し、部務を總理し、海軍大學校・海軍兵學校・海軍機關學校・海軍砲術學校・海軍水雷學校、及び海軍工機學校を管轄するもの。海軍教育本部條例第四條・第五條「海軍教育本部長」

かいぐん-けんえつ 〔海軍檢閱〕（名）

海軍に關する諸般の檢閲。即ち、鎮守府・艦隊・艦團、其の他各部に就き、軍紀・風紀の張弛、教育・訓練の精粗、醫務・衛生の適否、作戰準備の整否、事務の擧否、服務の勤惰等を檢査・閲視するもの。海軍檢閲條例「海軍檢閲」

かいぐん-けんさつ 〔海軍檢察〕（名）海軍に關する犯罪を搜査し、證憑を收集すること。海軍治罪法第四「海軍檢察」

かいぐんけんさつ-くわん 〔海軍檢察官〕（名）海軍檢察の事務を掌る官。艦船臀副長・分隊長・生徒隊司令官・生徒分隊長・學校監事・衛兵司令・軍法會議の主理及び主理試補を以て之に充つ。海軍治罪法第三十「海軍檢察官」

かいぐん-こうさがくかう 〔海軍工機學校〕（名）海軍教育本部長の管轄に屬し、機關術其の他の技術・工藝を教授し、且つ其の改良・進歩を圖る學校。校長・副官・教官・分隊長・軍醫長・主計長・其の他海軍機關尉官・軍醫・主計・機關兵曹長・船匠長・准士官・下士卒及び判任文官等の職員を置く。海軍工機學校條例「海軍工機學校」

かいぐんこうさがくかう-がくせい 〔海軍工機學校學生〕（名）海軍工機學校にて修習する海軍機關中尉又は實役停年一箇年以上を經たる海軍機關少尉、及び特に機關術又は其の他の技術・工藝を修習せしむる必要あるか、又は其の修習を志願する海軍機關佐尉官・機關兵曹長・船匠長・上等機關兵曹及び船匠師につき、海軍大臣或ひは在籍鎮守府司令長官これを命ず。海軍工機學校條例第十六「海軍工機學校學生」

かいぐんこうさがくかう-れんしふせい 〔海軍工機學校練習生〕（名）海軍工機學校にて修習する下士卒。普通科掌機・高等科掌機・普通科掌電機・高等科掌電機・掌工・船匠に分かつ。海軍工機學校條例第十七「海軍工機學校練習生」

かいぐん-こうさい 〔海軍公債〕（名）我が國の國債の一。海軍軍備の費途に充つるために、一千七百萬圓を限り、明治十九年より三箇年間に漸次募集せられたる公債。利率は年五分、償還期限は證書發行の年より五箇年据置き、其の翌年より向かう三十箇年とす。

かいぐんこうさいしょうしょ 〔海軍公債證書〕（名）海軍公債に對して發行せし公債證書。千圓・五百圓・百圓の三種に分かつ。海軍公債證書條例「海軍公債證書」

かいぐん-こうしゃう 〔海軍工廠〕（名）各軍港に置き、其の鎮守府に屬して、海軍艦船及び兵器の製造・修理・艤裝、並びに兵器の保管・供給に關する事を掌り、又艦船需品の調辦・供給を掌る所。造兵部・造船部・造機部・會計部・兵器庫及び需品庫・砲熕部・水雷部・製鋼部・火藥試驗所（機關部・需品部・水雷部・製鋼部・火藥試驗所は海軍工廠に屬する）を設けて其の事務を分掌せしめ、廠長・副官・檢査官・部長・部員・副部員・所長・所員・課長・課員・主管・庫員・軍醫長・軍醫官及び海軍兵曹長・同相當官・准士官・下士卒・書記・技手の職員を置く。海軍工廠條例「海軍工廠」

かいぐん-こうほせい 〔海軍候補生〕（名）海軍高等武官の補充に充つる奏任待遇の現役海軍軍人。即ち、海軍少尉候補生・機關少尉候補生・少軍醫候補生・少藥劑士候補生・少主計候補生及び水路少技士候補生等の總稱。

かいぐん-こんきょち 〔海軍根據地〕（名）海軍が根據として、諸般の設備をなしたる地。また艦隊が一時設定して、其の應急の修理・供給等をなす所。

かいぐん-さいたんじょ 〔海軍採炭所〕（名）海軍大臣の指定する海軍炭山を管轄し、石炭の採掘を掌る所。所長・軍醫長・主計長・技師・看護手・書記・技手の職員を置く。海軍採炭所官制「海軍採炭所」

かいぐん-さいばんしょ 〔海軍裁判所〕（名）かいぐんぐんばふくわいぎ（海軍軍法會議）に同じ。

かいぐん-さうさう 〔海軍葬喪〕（名）海軍現役軍人及び召集中の海軍豫備役・後備役軍人が死亡したるとき行ふ儀式。半旗・分時砲・分時銃・儀仗隊・葬送・弔砲・弔銃・表喪等あり。各條を見よ。海軍葬喪令第十「勳三等若しくは功三級以上の勳章を帶ふる海軍軍人死亡したる時は中將以上の海軍葬喪を行はしむることを得」

かいぐん-さうせんくわん 〔海軍造船官〕（名）造船に關する軍務に從ふ海軍高等武官。即ち、海軍造船總監・造船大監・造船中監・造船少監・造船大技士・造船中技士・造船少技士の總稱。海軍高等武官補充條例第九「海軍造船官」

かいぐんさうせんこう-れんしふじょ 〔海軍造船工練習所〕（名）横須賀海軍造船廠に屬し、海軍造船職工を教育せし所。明治四十年廢止せられたり。海軍造船工練習所條例「海軍造船工練習所」

かいぐん-さうせんしゃう 〔海軍造船廠〕（名）鎮守府艦政部に屬し、海軍艦船の製造・修理を掌りし所。明治三十六年十一月廢止せられたり。海軍造船廠條例「海軍造船廠」

かいぐん-さうせんせうかん 〔海軍造船少監〕（名）海軍造船官の一。海軍造船中監の次に位する少佐相當官。

かいぐん-さうせんせうきし 〔海軍造船少技士〕（名）最下級の海軍造船官。海軍少尉相當官。

かいぐん-さうせんそうかん 〔海軍造船總監〕（名）最高級の海軍造船官。海軍中將又は少將相當官。

かいぐん-さうせんたいかん 〔海軍造船大監〕（名）海軍造船官の一。海軍造船總監の次に位する大佐相當官。

かいぐんさうせんだいぎし 〔海軍造船大技士〕（名）海軍造船官の一。海軍造船少監の次に位する大尉相當官。

かいぐん-さうせんちゅうかん 〔海軍造船中監〕（名）海軍造船官の一。海軍造船大監の次に位する中佐相當官。

かいぐん-さうせんちゅうぎし 〔海軍造船中技士〕（名）海軍造船官の一。海軍造船大技士の次に位する中尉相當官。

かいぐんさうへいくわん 〔海軍造兵官〕（名）兵器の製造・修理に關する軍務に從ふ海軍高等武官。即ち、海軍造兵總監・造兵大監・造兵中監・造兵少監・造兵大技士・造兵中技士及び造兵少技士の總稱。

かいぐん-さうへいしゃう 〔海軍造兵廠〕（名）海軍の兵器の製造・修理・購買、火藥の審査・研究及び其の請負・製造の監督、其の他造兵事業に關する事を掌る所。製造部・火藥部・會計部に分かち、廠長・部長・軍醫長・檢査官・部員・副部員・同相當官・准士官・下士卒・判任文官の職員を置く。海軍造兵廠條例「海軍造兵廠」

かいぐんさうへいしゃうちゃう 〔海軍造兵廠長〕（名）海軍造兵廠の長官。海軍艦政本部長に隷し、廠務を總理する

もの。

かいぐん-さうへいせうかん 〔海軍造兵少監〕（名）海軍造兵官の一。海軍造兵中監の次に位する少佐相當官。

かいぐん-さうへいせうきし 〔海軍造兵少技士〕（名）最下級の海軍造兵官。海軍少尉相當官。

かいぐん-さうへいそうかん 〔海軍造兵總監〕（名）最高級の海軍造兵官。海軍中將又は少將相當官。

かいぐん-さうへいたいかん 〔海軍造兵大監〕（名）海軍造兵官の一。海軍造兵總監の次に位する大佐相當官。

かいぐん-さうへいだいぎし 〔海軍造兵大技士〕（名）海軍造兵官の一。海軍造兵少監の次に位する大尉相當官。

かいぐん-さうへいちゅうかん 〔海軍造兵中監〕（名）海軍造兵官の一。海軍造兵大監の次に位する中佐相當官。

かいぐん-さうへいちゅうぎし 〔海軍造兵中技士〕（名）海軍造兵官の一。海軍造兵大技士の次に位する中尉相當官。

かいぐん-さくわん 〔海軍佐官〕（名）海軍大佐・中佐・少佐の總稱。

かいぐん-さんとうかし 〔海軍三等下士〕（名）海軍三等兵曹・三等信號兵曹・三等軍樂手・三等船匠手・三等機關兵曹・三等看護手・三等筆記及び三等廚宰の總稱。

かいぐん-しうりこうぢゃう 〔海軍修理工場〕（名）各要港に置き、當該要港部に屬して、海軍艦船・兵器の小修理をなす所。主管・下士卒・書記・技手の職員を置く。海軍修理工場條例「海軍修理工場」

かいぐん-しくわん 〔海軍士官〕（名）海軍尉官及び同相當官の總稱。

かいぐん-じくわん 〔海軍大臣官〕（名）海軍省の職員。海軍大臣を佐けて省務を整理し、各局部の事務を監督する勅任官。

かいぐんしぐわんへい 〔海軍志願兵〕（名）海軍兵役に服せんことを志願し、認可を得て、海軍志願兵籍に編入せられたる者の稱。海軍志願兵條例「海軍志願兵」

かいぐん-しゃう 〔海軍省〕（名）各省の一。海軍大臣の統轄の下に屬して、其の所管事務を取り扱ふ所。大臣官房の外、軍務・人事・醫務・經理・司法の五局を設け、大臣・次官・參事官・局長・局員・祕書官・書記官・屬の外、副官・海軍文庫主管・編修及び編修書記・技手・錄事の職員を置く。海軍省官制「海軍省」

かいぐん-しゃうかう 〔海軍將校〕（名）軍務に從事する海軍高等武官。即ち、海軍の將官・佐官及び尉官の總稱。海軍將校分限令第一「海軍將校」

かいぐん-しゃうくわん 〔海軍將官〕（名）海軍大將・中將及び少將の總稱。海軍將官會議條例第三「海軍將官」

かいぐん-しゃうくわん-くわいぎ 〔海軍將官會議〕（名）海軍將官を以て組織し、東京に置き、海軍に關する重要の事項を審議する所。海軍將官會議條例「海軍將官會議」

かいぐん-じゃうちゃうくわん 〔海軍上將官〕（名）海軍佐官及び其の相當官の總稱。

かいぐん-じゃうとうきくわんへいさう 〔海軍上等機關兵曹〕（名）海軍准士官の一。機關に關する軍務に從事するもの。

かいぐん-じゃうとうしんがうへいさう 〔海軍上等信號兵曹〕（名）海軍准士官の一。信號に關する軍務に從事するもの。

かいぐん-じゃうとうひっさ 〔海軍上等筆記〕（名）海軍准士官の一。諸給與に關する軍務に從事するもの。

かいぐん-じゃうとうへいさう 〔海軍上等兵曹〕（名）海軍准士官の一。戰鬪に關する軍務に從事するもの。

かいぐんしゃう-れい 〔海軍省令〕（名）海軍大臣の發したる省令。

かいぐん-しゅけいくわん 〔海軍主計官〕（名）會計及び給與に關する軍務に從ふ海軍高等武官。即ち、海軍主計總監・主計大監・主計中監・主計少監・大主計・中主計・少主計の總稱。海軍高等武官補充條例第十「海軍主計官」

かいぐんしゅけいくわん-れんしふじょ 〔海軍主計官練習所〕（名）明治四十年四月以前の海軍經理學校の稱。明治三十二年五月勅令第百九十三號海軍主計官練習所條例「海軍主計官練習所」

かいぐん-しゅけいせうかん 〔海軍主計少監〕（名）海軍主計官の一。海軍主計中監の次に位する少佐相當官。

かいぐん-しゅけいそうかん 〔海軍主計總監〕（名）最高級の海軍主計官。海軍中將又は少將相當官。

かいぐん-しゅけいたいかん 〔海軍主計大監〕（名）海軍主計官の一。海軍主計總監の次に位する大佐相當官。

かいぐん-しゅけいちゅうかん 〔海軍主計中監〕（名）海軍主計官の一。海軍主計大監の次に位する中佐相當官。

かいぐん-じゅひんこ 〔海軍需品庫〕（名）各軍港に置き、艦船需品の準備・保存及び供給を掌らしめし所。明治三十六年に設け、同三十六年に廢せられたり。明治三十三年五月勅令第二百三號海軍需品庫條例「海軍需品庫」

かいぐん-じゅひんこ 〔海軍需品支庫〕（名）軍港外、所要の港灣に置き、艦船臨時の需用に供せし所。明治三十六年廢せられたり。

かいぐん-じゅんしくわん 〔海軍准士官〕（名）海軍士官の下、下士官の上に位する海軍武官。即ち、海軍上等兵曹・上等信號兵曹・上等機關兵曹・軍樂師・船匠師・看護師・上等筆記の總稱。海軍准士官下士任用進級條例第一「海軍准士官」

かいぐん-じょせいきん 〔海軍助成金〕（名）有事の日に若干の船舶を徵發して補助軍艦たらしむる條件の下に、特定の海運業者又は特定の構造の船舶を有する者に下附する保護金。英吉利國・北米合衆國に行はる。

かいぐん-しんかうへいさう 〔海軍信號兵曹〕（名）海軍下士の一。信號に關する軍務に從事するもの。一等・二等及び三等の三級に分かつ。

かいぐん-じんじぶ 〔海軍人事部〕（名）横須賀・吳・佐世保及び舞鶴軍港に置き、其の地の鎮守府に屬して、在籍兵曹長・同相當官・准士官の人事を掌り、また下士卒の兵籍を主管し、徵募・補充及び召集に關することを掌る所。部長・部員及

び兵曹長相當官・准士官・下士・書記の職員を置く。海軍人事部條例「海軍人事部」

かいぐんすゐらいがくかう 雷學校 (名) 〔海軍水〕海軍教育本部長の管轄に屬し、水雷術及び通信術を教授し、且つ其の改良・進歩を圖る學校。校長・副官・教官・分隊長・軍醫長・主計長・海軍・尉官・軍醫・主計の外、海軍兵曹長・同相當官・准士官・下士卒及び判任文官の職員を置く。海軍水雷學校條例「海軍水雷學校」

かいぐんすゐらいがくがくせい 軍水雷學校學生 (名) 〔海〕海軍水雷學校にて修習する准士官以上の生徒。普通科・高等科・特修科の三種に分かつ。海軍水雷學校條例第十五條・第十六條「海軍水雷學校學生」

かいぐんすゐらいがくかうれんしふせい 〔海〕海軍水雷學校練習生 (名) 海軍水雷學校にて修習する下士卒。普通科水雷術・高等科水雷術・普通科通信術・高等科通信術の四種に分かつ。海軍水雷學校條例第十五條・第十六條「海軍水雷學校練習生」

かいぐんすゐらいじゅつれんしふじょ 〔海〕海軍水雷術練習所 (名) 明治四十年四月以前の海軍水雷學校の稱。

かいぐんすゐろくゐん 〔海〕海軍水路官 (名) 水路に關する軍務に從ふ海軍高等武官。即ち、海軍水路大技士・水路中監・水路少監・水路大技士・水路中技士及び水路少技士の總稱。海軍高等武官補充令第十條「海軍水路官」

かいぐんすゐろせうかん 〔海〕海軍水路少監 (名) 海軍水路官の一。海軍水路中監の次に位する少佐相當官。

かいぐんすゐろせうさし 〔海〕海軍水路少技士 (名) 最下級の海軍水路官。海軍水路少尉相當官。

かいぐんすゐろたいかん 〔海〕海軍水路大監 (名) 最高級の海軍水路官。海軍大佐相當官。

かいぐんすゐろだいさし 〔海〕海軍水路大技士 (名) 海軍水路官の一。海軍水路少監の次に位する大尉相當官。

かいぐんすゐろちゅうかん 〔海〕海軍水路中監 (名) 海軍水路官の一。海軍水路大監の次に位する中佐相當官。

かいぐんすゐろちゅうさし 〔海〕海軍水路中技士 (名) 海軍水路官の一。海軍水路大技士の次に位する中尉相當官。

かいぐんせうぐんい 〔海〕海軍少軍醫 (名) 最下級の海軍軍醫官。海軍少尉相當官。

かいぐんせうぐんい・こうほせい 〔海〕海軍少軍醫候補生 (名) 一定の學術修了の後、海軍少軍醫たるべきもの。醫師免許證若しくは醫術開業免狀を有し、身體檢査及び採用試驗に合格したるものより採用す。海軍高等武官補充條例第五條「海軍少軍醫候補生は醫師免許證若は醫術開業免狀を有し」

かいぐんせうさ 〔海〕海軍少佐 (名) 海軍中佐の次に位する海軍將校。

かいぐんせうしふ 〔海〕海軍召集 (名) 豫備又は後備役にある海軍軍人の召集。充員召集・演習召集及び號令・點呼の三種に分かつ。各條を見よ。海軍召集條例「海軍召集」

かいぐんせうしゃう 〔海〕海軍少將 (名) 海軍中將の次に位する海軍將校。

かいぐんせうしゅけい 〔海〕海軍少主計 (名) 最下級の海軍主計官。海軍少尉相當官。

かいぐんせうしゅけい・こうほせい 〔海〕海軍少主計候補生 (名) 一定の學術修了の後、海軍少主計たるべきもの。海軍經理學校の生徒にして其の業を卒へたる者と、私費を以て外國に留學し相當の學術を修め卒業したる海軍出身志願者にして身體檢査及び採用試驗に合格したる者と、官公立中學校若しくは之と同等以上と認むる學校を卒業し、且つ法律學及び經濟學を修めたる者にして身體檢査及び採用試驗に合格したる者とより採用す。海軍高等武官補充條例第七條「海軍少主計候補生は左に掲くる者より採用す」

かいぐんせうやくざいし 〔海〕海軍少藥劑士 (名) 最下級の海軍藥劑官。海軍少尉相當官。

かいぐんせうやくざいし・こうほせい 〔海〕海軍少藥劑士候補生 (名) 一定の學術修了の後、海軍少藥劑士たるべきもの。藥劑師の免狀を有し身體檢査及び採用試驗に合格したる者より採用す。海軍高等武官補充條例第六條「海軍少藥劑士候補生は藥劑師免狀を有し身體檢査及び採用試驗に合格したる者より採用す」

かいぐんせうゐ 〔海〕海軍少尉 (名) 最下級の海軍將校。

かいぐんせんしゅうし 〔海〕海軍船匠師 (名) 海軍准士官の一。船匠に關する軍務に從事するもの。

かいぐんせんしゅうしゅ 〔海〕海軍船匠手 (名) 海軍下士の一。船匠に關する軍務に從事するもの。一等・二等及び三等の三級に分かつ。

かいぐんせんしゅうちゃう 〔海〕海軍船匠長 (名) 船匠に關する軍務に從事する兵曹長相當の海軍武官。

かいぐんそく 〔海〕海軍屬 (名) 海軍の諸官廳の屬官。侍從武官府官制第九條「侍從武官府に陸軍屬及海軍屬各二人を附す」

かいぐんそくざこ 〔海〕海軍測器庫 (名) 各軍港に置き、測器及び航海に關する圖書・並びに教育圖書の準備・保存・供給を掌り及び氣象觀測を行ふ所。主管・書記・技手の職員を置く。海軍測器庫條例「海軍測器庫」

かいぐんそう 〔海〕海軍卒 (名) 海軍下士の下位にある海軍軍人。水兵・信號兵・軍樂生・木工・機關兵・看護・主廚の七種に分かつ。各條を見よ。海軍兵。海軍卒進級條例「海軍卒」

かいぐんだいがくかう 〔海〕海軍大學校 (名) 海軍教育本部長の管轄に屬し、海軍の將校及び同相當官に高等の學術を教授する學校。校長・副官・教頭・教官・主計長及び判任文官の職員を置く。海軍大學校條例「海軍大學校」

かいぐんだいがくがくせい 〔海〕海軍大學校學生 (名) 海軍大學校にて修習する海軍將校及び同相當官。甲種・乙種・專修・機關・選科の五種に分かつ。

かいぐんたいぐんい 〔海〕海軍大軍醫 (名) 海軍軍醫官の一。海軍軍醫少監の次に位する大尉相當官。

かいぐんたいさ 〔海〕海軍大佐 (名) 海軍少將に次ぐ海軍將校。

かいぐんたいしゃう 〔海〕海軍大將 (名) 最高級の海軍將校。

かいぐんたいしゅけい 〔海〕海軍大主計 (名) 海軍主計官の一。海軍主計少監の次に位する大尉相當官。

かいぐんたいじん 〔海〕海軍大臣 (名) 各省大臣の一。海軍軍政を管理し、海軍

軍人・軍屬を統督し、所轄諸部を監督するもの。海軍省官制第二條「海軍大臣」

かいぐんだいじん・き 〔海〕海軍大臣旗 (名) 海軍旗章の一。海軍大臣が公務を帶び、艦船に來乘するとき大檣頭に揭げ、又軍隊の司令權を有する海軍官廳に來臨するとき其の旗竿に揭げ、又端舟に乘るとき舟首の旗竿に揭ぐるもの。海軍旗章條例第二條「海軍大臣旗」

かいぐんだいじん・くわんばう 〔海〕海軍大臣官房 (名) 海軍省の大臣官房。海軍省に於ける機密、官吏の進退・身分、海軍大臣の官印・者印の管守、公文書類・成案文書の接受・發送、統計・報告の調製及び文書類の編纂・保存に關する事項を掌る。

かいぐんだいやくざいし 〔海〕海軍大藥劑士 (名) 海軍藥劑官の一。海軍藥劑少監の次に位する大尉相當官。

かいぐんたいね 〔海〕海軍大尉 (名) 海軍少佐につぐ海軍將校。

かいぐんたんざん 〔海〕海軍炭山 (名) 海軍所屬の炭山。

かいぐんちゅうさし 〔海〕海軍治罪法 (名) 海軍に關する治罪法。

かいぐんちゅうぐんい 〔海〕海軍中軍醫 (名) 海軍軍醫官の一。海軍大軍醫の次に位する中尉相當官。

かいぐんちゅうさ 〔海〕海軍中佐 (名) 海軍大佐の次に位する海軍將校。

かいぐんちゅうさい 〔海〕海軍廚宰 (名) 海軍下士の一。廚事に關する軍務に從事するもの。一等・二等及び三等の三級に分かつ。

かいぐんちゅうしゃう 〔海〕海軍中將 (名) 海軍大將の次に位する海軍將校。

かいぐんちゅうしゅけい 〔海〕海軍中主計 (名) 海軍主計官の一。海軍大主計の次に位する中尉相當官。

かいぐんちゅうやくざいし 〔海〕海軍中藥劑士 (名) 海軍藥劑官の一。海軍藥劑士の次に位する中尉相當官。

かいぐんちゅうゐ 〔海〕海軍中尉 (名) 海軍大尉に次ぐ海軍將校。

かいぐんちょうへい 〔海〕海軍徴兵 (名) 兵役義務者より徴集して、海軍の軍隊に服務せしむる兵卒。(海軍志願兵の對) 明治二十九年九月勅令第三百二號「海軍徴兵現役中」

かいぐんていきしょくこう 〔海〕海軍定期職工 (名) 海軍の諸工廠にて、一定の期間服業することを契約する職工。海軍定期職工條例「海軍定期職工」

かいぐんにとうかし 〔海〕海軍二等下士 (名) 海軍二等兵曹・二等信號兵曹・二等看護手・二等筆記及び二等廚宰の總稱。

かいぐんはう 〔海〕海軍砲 (名) かんはう(艦砲)に同じ。

かいぐんはうじゅつがくかう 〔海〕海軍砲術學校 (名) 海軍教育本部長の管轄の下に海軍砲術を教授し、且つ其の改良・進歩を圖る學校。校長・副官・教官・分隊長・軍醫長・主計長、其の他海軍尉官・軍醫・主計及び海軍兵曹長・同相當官・准士官・下士卒・判任文官の職員を置き、修學者を分かちて學生及び練習生の二とす。海軍砲術學校條例「海軍砲術學校」

かいぐんはうじゅつれんしふじょ 〔海〕海軍砲術練習所 (名) 明治四十年四月以前の海軍砲術學校の稱。明治三十六年十二月勅令第二百七十四號海軍砲術練習所條例「海軍砲術練習所」同三十年九月勅令第三百二十號海軍砲術練習所條例「海軍砲術練習所」

かいぐんはうろう 〔海〕海軍望樓 (名) 沿岸の要所に置き、所在海軍區を管する鎮守府(要港部警備區內にては當該要港部)の管轄の下に、海上の見張り及び通信を掌り、兼ねて氣象觀測を行ふ所。望樓長・望樓手の職員を置く。海軍望樓條例「海軍望樓」

かいぐんはぶが 〔海〕海軍法衙 (名) かいぐんぐんばふくわいぎ(海軍軍法會議)に同じ。海軍刑法第一條「海軍に於て死刑を執行するときは海軍法衙を管轄する長官の定むる場所に於て銃殺す」

かいぐんひっき 〔海〕海軍筆記 (名) 海軍下士の一。諸給與に關する軍務に從事するもの。一等・二等及び三等の三級に分かつ。海軍筆記任用令「海軍筆記」

かいぐんひっきちゃう 〔海〕海軍筆記長 (名) 給與に關する軍務に從事する兵曹長相當の海軍武官。

かいぐんびゃうゐん 〔海〕海軍病院 (名) 各軍港に置き、其の鎮守府に屬して、治療並びに治療品の準備・供給、被服・糧食・藥品等の衛生試驗、傳染病消毒及び看護手・看護の教育を掌る所。院長・副長・海軍看護長・准士官・下士卒及び書記の職員を置き、必要に應じて軍醫官・藥劑官を置く。海軍病院條例「海軍病院」

かいぐんぶぎゃう 〔海〕海軍奉行 (名) 江戸幕府の職名。元治元年七月に初めておき、海軍の事務を掌るもの。

かいぐんぶぐわん 〔海〕海軍武官 (名) 海軍將校・同相當官及び海軍准士官・海軍下士の總稱。海軍武官官階表「海軍武官」

かいぐんぶんこしゅくわん 〔海〕海軍文庫主管 (名) 海軍省の職員。海軍少佐を以て之に補し、上官の命を承けて圖書保管に關する事務を掌るもの。海軍省官制第三條第二項「海軍文庫主管」

かいぐんへい 〔海〕海軍兵 (名) かいぐんそつ(海軍卒)に同じ。

かいぐんへいがくかう 〔海〕海軍兵學校 (名) 海軍教育本部長の管轄に屬し、海軍將校となすべき生徒を教育する學校。校長・副官・教頭・教官・監事長・監事・軍醫長・軍醫官・主計長・大主計及び海軍兵曹長・同相當官、並びに准士官・下士卒・判任文官の職員を置く。海軍兵學校條例「海軍兵學校」

かいぐんへいがくれう 〔海〕海軍兵學寮 (名) 明治九年以前の海軍兵學校の稱。

かいぐんへいきしゃう 〔海〕海軍兵器廠 (名) 各軍港に置き、兵器の準備・保存・供給・修裝及び修理に關する事を掌り、また必要の場合には、海軍大臣の命により兵器の製造をもなしし所。明治三十三年五月に設け、同三十六年に廢せられたり。明治三十三年五月勅令第二百二號海軍兵器廠條例「海軍兵器廠」

かいぐんへいさう 〔海〕海軍兵曹 (名) 海軍下士の一。戰鬪に關する軍務に從事するもの。一等・二等及び三等の三級に分かつ。

かいぐんへいさう・ちゃう 〔海〕海軍兵曹長 (名) 戰鬪に關する軍務に從事する少尉相當の海軍武官。

かいぐんへいびひん 〔海〕海軍兵備品 (名) 海軍の軍用に供すべき諸品。即ち、兵器・祕密圖書・軍事教育圖書・水路測器・水路圖誌・艦營需品・被服・糧食・治療品・港務防禦用品・艦船繫留用品の類。海軍兵備品會計規則「海軍兵備品」

かいぐんへんしう 〔海〕海軍編修 (名) 海軍省・海軍軍令部・海軍教育本部・海軍水路部等に置き、海軍の編修・飜譯及び編

纂の事務を行ふ高等官。海軍軍令部條例第九「海軍編修」

かいぐんやくざいくわん 官（名）調劑に關する軍務に從ふ海軍高等武官。即ち、海軍藥劑大監・藥劑中監・藥劑少監・大藥劑士・中藥劑士及び少藥劑士の總稱。海軍高等武官補充條例第十九條「海軍藥劑官」

かいぐんやくざいし（名）一海軍藥劑士。前條に同じ。海軍軍醫學校條例第一條「海軍藥劑士」

かいぐんやくざいしせうかん 劑少監（名）海軍藥劑官の一。海軍藥劑中監の次に位する少佐相當官。

かいぐんやくざいたいかん 劑大監（名）一海軍藥劑大佐相當官。海軍藥劑最高級の海軍藥劑官。

かいぐんやくざいちゅうかん 劑中監（名）海軍藥劑官の一。海軍藥劑大監の次に位する中佐相當官。

かいぐんよびへい（名）一海軍豫備兵。海軍の豫備役に編入せられたる兵卒。

かいぐんよびゐん（名）一海軍豫備員。戰時・事變其の他、必要ある場合に、勤務又は教育のため、召集に應ずる義務ある豫備役の海軍武官。上長官・士官・准士官・下士に分かち、別に候補生を置く。海軍豫備員條例「海軍豫備員」

かいぐんりくせんたい（名）一海軍陸戰隊。陸上の戰鬪に當たるため、海軍軍人を以て編制したる軍隊。

かいぐんれいしき（名）一海軍禮式。即ち、海軍禮砲・登桁禮式・登舷登索禮式の類。海軍にて行ふ定規の禮式。

かいぐんれいはう（名）一海軍禮砲。軍艦及び海軍砲臺にて行ふ禮砲。皇禮砲、帝國文武官に對する禮砲、外國及び其の文武官に對する禮砲及び答砲の種類あり。明治三十年勅令第六號「海軍禮砲條例」

かいぐんれんたんせいざうしよ（名）一海軍煉炭製造所。山口縣下に置き、海軍艦政本部に屬し、長門海軍炭山を管轄し、採炭並びに煉炭の製造及び供給に關することを掌る所。本部・採炭部・煉炭部を置き、本部には所長・軍醫長・主計長と、必要に應じ軍醫・主計、採炭部及び煉炭部には部長・部員の職員を置き、外に海軍兵曹長・同相當官・准士官・下士卒及び書記・技手を置く。海軍煉炭製造所條例「海軍煉炭製造所」

かいぐんわくわん（名）一海軍尉官。海軍大尉・中尉・少尉の總稱。

かいぐんゐたくがくせい 學生（名）一海軍委託學生。海軍にて、帝國大學其の他の專門學校の學生に毎月一定の金額を給し、該校にて指定の學科を修めしむるために該校に委託したる學生。

かいぐんゐたくせいと 徒（名）一海軍委託生。海軍にて、官立高等專門學校生徒中、海軍出身を志願する者より採用して、一定の手當を給し、該學校にて指定の學科を修めしむる生徒。即ち、海軍造船生徒及び造兵生徒の類。

かいけ 搔筒（名）一風呂などにて、湯などかくるに用ふる小桶なるべし。海人藻芥「湯屋風呂にて進退の事。湯を汲み、搔筒懸くる所へ添左手、手に湯を添へて懸くる也」二かたてをけ（片手桶）をいふ、加賀國の方言。物類稱呼

かいけ 改悔（名）一佛語。さんげ（懺悔）に同じ。

がいけ（名）一咳氣。病の名。氣管枝粘膜の加答兒（カタル）。

かいけいし（名）一蓋擎子。はふた、けいし（擎子）は臺。青瓷に蓋をして、臺の附きたるもの。禁中にて供膳の時用ふ。江次第（御膳）「於内膳、海藻・物有蓋擎子」同抄「蓋擎子。蓋青瓷之蓋也、擎子青瓷之尻居也」建武年中行事「かはらけばかりとりて、かいけいしをば本の如く盤にすゑてかへし給へば」

かいけいるゐ 一介形類（名）【動】かいかふるゐ（介甲類）の異名。

かいけう（名）一海嶠。海邊に聳ゆる高く峻しき山。謠曲「圍闌として海嶠を離れ、冉冉として雲衢を出づ」宋之問詩「余負海嶠情、自昔微尚然」

かいけう かいけつ 搔消（他動）一開教。布教を始むること。かきけす（搔消）に同じ。大和物語「逢ひて物も云はんと思ひて行きければ、かいけつやうにうせにけり」

かいけつ（名）一解決。解釋して決定すること。

かいけつ（名）一改血。家畜の體質を改良する爲めに、血緣遠きものを交尾せしむること。

かいけつ（名）一海月。海上の空に澄む月。海上に浮かべる月影。謠曲「山の端の月と共に、海月も入りにけり」張說詩「楚雲眇縹褰、海月伴行舟」

かいけつにきやう（名）一開結二經。佛語。經文の前後に附屬せる二つの經。即ち、法華經にては無量義經と觀普賢經とをいふ。太平記十一「書寫」法華經一部八卷、並びに開結二經、細字に書きたるなり」

かいけぶ（名）一海峽。【地】海の、陸と陸との間にはさまり狹くなりたる處。

かいけぶ（名）一開業。一事業を始むること。史記秦紀「昔我穆公中興爲霸、後世以業甚光美」二醫業を開始すること。開店すること。商法第四十「會社は其本店の所在地に於て登記を爲すに非ざれば開業の準備に著手することを得ず」三醫業をなしつつあること。開店しあること。

かいけぶい 開業醫（名）醫師免許證を得て、醫業を營むもの。開業醫師。醫師。明治十五年三月内務省乙第十四號達「從來開業醫の子弟にして其助手と相成居醫業を以て家名相續致度輩は年齡當明治十五年六月滿二十五年以上の者に限り從來開業醫と看做不」要」試驗」開業許可の證を與へ不」苦候」

かいけぶい 開業醫師（名）前條に同じ。明治十七年六月六日衞生局より府縣への通牒「假開業を願ふものは曾て開業醫師に就き其補助等をなしたる者」

かいけぶしき 開業式（名）一醫業を始むるとき、祝ひとして行ふ儀式。

かいけぶめんじやう 開業免狀（名）行政官廳が、法令の定むる特別の場合に、特定の人に對して、一般に許さざる醫業の開始を許可する證書。「醫術開業免狀」

かいけもん 改悔文（名）一眞宗にて信者が、佛に安心立命を託することを誓ひたる假名交りの法語。蓮如上人の作。

かいけん 改元（名）一年號を改むること。改號。保元（崩御）「明くる四月廿七日、改元ありて保元とぞ申しける」明治元年九月八日詔書「詔體太乙而登位、膺」寶命」以改」元、洵聖代之典型也、萬世之標準也。朕雖」否德」幸賴」祖宗之靈、祇承」鴻緒」躬親」萬機之政」乃改」元、欲」與」海内億兆」更始一新」其改」慶應四年」爲」明治元年」自」今以後、革」易舊制」一世一元以爲」永式」主者施行」中說「改」元立」號非」古也」

かいけん 戒嚴（名）一きびしく警戒すること。晉書「褙裕之制、未」詳」所」起、近世凡車駕親」戎、中外戒嚴服」之」唐書「吐蕃」寇」天武功」京師戒嚴」正字通「凡强敵將至」設」備曰」戒嚴」二【法】戰時若しくは事變に際し、兵備を以て全國若しくは一地方を警戒すること。此の區域内にては、常法を停止し、行政權及び司法權の一部若しくは全部を軍事處分に委ねるもの。大日本帝國憲法第十一條「天皇は戒嚴を宣告す」戒嚴令「戒嚴」

かいけん かいし【戒嚴解止】【法】戒嚴の施行を解除すること。戒嚴令第十一條「戒嚴解止の日より地方行政事務司法事務及び裁判權は總て其常例に復す」

かいけん たいけん【戒嚴大權】【法】戒嚴を宣告する天皇の大權。

かいけん（名）一解嚴。戒嚴を解くこと。

舊唐書「湯陰縣」警」戎務解嚴」

かいけん（名）一開關。朝廷より命じて、或る期間、關所の固めを解くこと。かいくわん。名目抄「開關（カイクワン）國禁（ヲクニノ）」

かいけん（名）一開眼。（新たに佛像の眼を開く義）一佛像出來上がりて、始めて安置する法事。續紀十八天平勝寶四年四月乙酉「盧舍那大佛像成、始開眼」宇治拾遺「地藏菩薩を一體造り奉りたりけるを、開眼もせで樹にうち入れて」二眞如一實の理をさとること。祕藏寶鑰「佛法存故、人皆開眼」大凡に目をとほすこと。大體の觀察。

がいけん（名）一概見。

がいけんこと（名）一概言。大略を述ぶること。

かいけんこく（名）一海權國。海上權を掌握せる國。

かいけ ちやう【戒嚴地境】【法】戒嚴の宣告によりて、警戒せられたる地域。臨戰地境と合圍地境とに分かつ。各條を見よ。戒嚴令第十一「戒嚴地境内に於ては司令官左に列記の諸件を執行する權を有す」

かいけん てんそう 改元傳奏（名）傳奏の一。改元の時に置かれたる臨時の職。

かいけん れい（名）一戒嚴令。

かいこ（名）【法】戒嚴を宣告する勅令。

かいこ 解雇（名）一やとひを解くこと。雇傭契約の解除。解傭。

かいご 改寤（名）一さとりあらたむること。漢書「時君終不」改寤」

かいご 開悟（名）一迷ひを開きさとること。史記秦「吾說」公以」帝道」其志不」開悟」矣」

かいご 解悟（名）一悟ること。氣がつくこと。北史「解悟捷疾、爲」同輩所」尙」

かいご（名）一切弟子衆。開即解悟」

かいご 戒護（名）一いましめまもること。二【法】在監者の逃走、及び獄則違反の行爲を防ぎ、破れて其の生命・身體の安全に必要なる取締をなすこと。監獄法第四「戒護」

かいご（名）一註誤。失錯。漢書「太」祝」註誤之臣」思」黃髮之言」

かいこう 戒功（名）一佛語。佛戒をたもちたる功。平家「三「我れ十善の戒功に依りて、今萬乘の寶位を保つ」

かいこう 邂逅（名）一不意にであふこと。期せずして會すること。詩經「邂逅相遇、適」我願」兮」

かいこう 開口（名）一口をあきて笑ふこと。口を開きて物いふこと。莊子「開口而笑者、一月之中不」過」四五日而已」

がいこつ（名）一骸骨。一からだの骨。鬼貫句「がいこつの上をよそひて花見かな」二肉がうせて、骨のみとなりたる屍。むくろ。死骸。井筒業平河内通「佛壇に一連一具の骸骨」史記秦「墓」骸骨於中野」

がいこつ を とふ（名）乞骸骨。「君に捧げたる身を乞ひ受くる義」仕官を退くことを願ふ。致仕を乞ふ。漢書「後漢」廣爲」大傅」兄子受爲」少傅」廣謂」受曰、吾聞知」足不」辱、知」止不」殆。即日乞」骸骨」上許之」

がいこづむ（自動）一こづむに同じ。著聞「馬のさし繩のさきを、むずとふまへけり。ふまへられて、かいこづみて、やすやすととまりにけり」同「くぼみたる所に雪のふりつみたるを知らせ給はで、殿下の御馬をうち入れさせ給ひたりければ、かいこづむ所にて、御隨身教時・有長、穴ありと申したりけるを」

かいごのはな 解語花（句）一言語を解する花の義。びじん（美人）の稱。開元天寶遺事「大液池白蓮圃、明皇謂」妃子」曰、何如」此解語花」

がいこみ がみ（名）一馬の頭の毛を刈り込みたるものなるべし。宇治拾遺「黑栗毛なる馬の中間かいこみ髮なれば、額のもちりのやうにて白く見えければ」

かいこむ 搔込（他動）一脇の下へかかへこむ。謠曲「案のうち物、小脇にかいこんで」

かいこよう（名）一解雇傭。かいこ（解雇）に同じ。

かいこん（名）一開墾。一山林・原野を開拓して耕地となすこと。かいほつ（開發）。宋史「詔」民、能樹藝開墾者不」加」征」齊民要術「章乾即放」火、至」春而開墾」二【法】第二類の有租地、即ち、池沼・山林・牧

場・原野・雜種地に勞刀・費用を加へて、第一類の有租地、卽ち、田・畑・郡村宅地・市街宅地・鹽田・鑛泉地となすこと。地租條例第三、第二類地に勞費を加へ第一類地と爲すものを開墾と謂ふ」

かいこん-せいけんち 【開墾制限地】(名) 開墾をなすに制限ある土地。絕對に禁ずるものと、許可を得て後なすを得るものとの二あり。

かいこん-ち 【開墾地】(名) 開墾したる土地。又、開墾すべき土地。地租條例第十六項「前項の開墾地は開墾著手の年より十年目に其成功の部分に對し地價を修正す」

かい-さ 【開鎖】一とざしたるを開くこと。二開くことと、とざすことと。あけたて。開閉。

がい-ざ 【蓋座】(名) 煎茶の席に用ふる蓋置。

かい-さい 【改歲】(名) あらたまること。新年。改年。朱子詩「改歲風日好、出門欣得朋」

かい-さい 【開歲】(名) かいれき(改曆)に同じ。馮衍文「開歲發春令、百卉含英」老學菴筆記「自開歲宴遊至是而止」

かい-さい 【海菜】(名) 【植】あさくさのり。紫菜の異名。

かい-さい 【皆濟】みな濟むこと。殘りなく返濟又は納入すること。「借金の皆濟」「年貢の皆濟」

かい-さい 【介在】開にはさまりをること。左傳僖公三年「以敝邑介在東夷、誦仇讎、寡君若礬君是望」

がい-さい 【涯際】(名) はて。かぎり。際涯。易經繫辭「欲以言論變化之理、不知涯際」風俗通「況者葬也、言其平望莫莫無涯際也」

がい-さい 【睚眥】(名) (がい(睚)はにらむ、さい(眥)はまなじり)にらむ目つき。にらみあふこと。史記魯仲連傳「一飯之德必償、睚眥之怨必報」

かい-さう 【海草】(名) 【植】海中に生育する植物。其の大部は海藻類にして、外に僅少の顯花植物を含む。

かい-さう 【海藻】(名) 【植】植物學上の用語。海中に自生する下等植物。殊に紅色藻類・褐色藻類・綠色藻類の總稱。然れども通俗には此れ等の外、また海產顯花植物、例へば大葉藻(ウズ)の如きものをも併せ稱す。常磐姬物語「青のり・あまのり・とつさかのり、よろづのかいさう喰ひたやな」

かい-さう 【改葬】一旦葬りたる屍を、改めて他處に葬り埋むること。著聞集「建長五年の比、改葬せんとて墓を掘りたりけるに」左傳僖公五年「改葬惠公」

かい-さう 【海象】(名) 【動】せいうち(海象)の異名。

かい-ざう 【改造】一あらためつくること。改作。宋史道傳「請改造新曆」二かゝかく(改格)に同じ。

かい-ざう 【海藏】一海中に秘藏すること。諸祖師語「海藏の御寶も、意の如くなるべし」二藏經を納めたる寶藏。遠羅天釜「深く海藏の底をさぐって、五千餘卷の金文を五度まで究め給ひ」

がい-さう 【鎧裝】電氣の漏洩を防ぐために、電線の上を覆ひ包むこと。又、其のもの。

かい-さう-ばひ 【海藻灰】(名) 荒布・昆布などの褐色の海藻を乾かし、蒸燒にして得たる灰。沃度の原料とす。

かい-さく 【改作】あらためて作ること。つくりかへ。改造。

かい-さく 【開作】かいこん(開墾)に同じ。庭訓往來「有開作之地、招居農人、令開發之」山などを切り開くこと。周禮「山之阞、則開鑿之」

かい-さぐる 【搔探】(他動四) かきさぐる(搔探)の音便。源氏「かいさぐり給ふに、息もせず」

かい-さつ 【開札】入札などの時、箱を開き札をあらたむること。ふだをあらたむること。「停車場にてかいさつをなす」

かい-さつ 【改札】切符を檢査すること。

かいさつ-ぐち 【改札口】(名) 改札をなす出入口。

かいさつ-しょ 【改札所】(名) 改札をなす所。

かい-ざめ 【海鮫】(名) 【動】さかたざめ(鮫頭鯊)の異名。

かい-ざを (名) 能樂の小道具の一。傘平・鵜などにて、船をやる時に用ふる竿に似せたる竹。大鑑狂言記「後向きにて肩を抜き、かいざを一本づつ持つ」

かい-さん 【海產】(名) 海に產すること。又、その物。樺太漁業令第三條「海產乾場」

かい-さん 【海參】(名) いりこ(煎海鼠)に同じ。

かい-さん 【開山】一始めて山を開きて寺院を建立し、又宗派を創めたる人。開基。開祖。增鏡「かの泉涌寺の開山のひじりの名をぞ、懿かに仰せられたりける」二始めて基を開きたること。「日の下開山」北條五代記「件の兩將は前代未聞、弓矢の中古開山、權化の名大將」

かい-さん 【解散】一集會・結社を解きて、其の存在に終りを告げしむること。民法第三編第三章第三節、法人の解散」治安警察法第八條、警察官は屋外の集會又は多衆の運動若は群集を制限禁止若は解散し又は屋內の集會を解散することを得」民法第六百八、組合の解散」二議員全般の資格を其の任期滿了前に消滅せしむること。大日本帝國憲法第七「衆議院の解散」同第四十條第四項、「衆議院解散を命せられたるとき」府縣制第百三條「府縣會の解散」郡制第百十二條「郡會の解散」

かい-さん 【改刪】改め直すこと。刪正。

かい-ざん 【改竄】(ざん(竄)は改め易ふる義)文字・語句などを改めなほすこと。添削。晉書「見籍據、按醉眠、使者以告、籍便寫、按使寫之、無所改竄」

がい-さん 【概算】あらましの計算。おほづもり。

がいさん-おくりじゃう 【概算送狀】(名) (商)假送狀の一。未著の貨物、殊に重量を標準として代價を定むる貨物を賣却せんとするとき、假りに作成する送狀。これによりて、賣手は其の金額の八九割位を受け取り、買手に船荷證券を渡しおき、貨物到著の上本送狀を作りて、其の差額代金を受け取るもの。

がいざん-せい 【碍竄性】(名) 【理】物質の性質と見るべきことにて、二物質が同時に同一の場處を占有すること能はざること。不可入性。

かいさん-ひれう 【海產肥料】(名) 海產物を肥料としたるもの。

かいさん-ぶつ 【海產物】(名) 海に產するもの。卽ち、魚介・海藻の類。海產。

がいさん-わたし 【概算渡】(名) 後の精算を豫期して、見積りに從ひ拂ひ渡す

こと。會計法第三條「法律勅令に依り前金渡概算渡繰替拂を爲したる場合に於ける追納金」

かいし 【字鏡】(名) 【動】古語。わし(鷲)の異名。字鏡「韓(和名加伊之)又」

かい-し 【介士】(名) 甲冑を著けたる武士。よろひむしゃ。漢書「安世奏、贈印綬、送以輕車介士」

かい-し 【海市】(名) しんきろう(蜃氣樓)に同じ。三齊略記「海上蜃氣、時結樓臺名海市」隋唐遺事「張昌儀恃寵請託如市、李淑曰、此海市蜃樓也耳」蘇軾文「海市序」予聞登州海市、鬼奚、父老云、常出于春夏」

かい-し 【界紙】(名) すぢをひきたる紙。けいし(罫紙)。

かい-し 【芥子】(名) 芥(ケシ)などの種子。

かい-し 【戒師】(名) 戒(ケイ)を授くる法師。盛衰記「御戒師は圓城寺の前大僧正覺忠」心地觀經「應請戒師佛菩薩」

かい-し 【開士】(名) 佛語。ぼさつ(菩薩)に同じ。釋氏要覽「輕中多呼菩薩爲開士」

かい-し 【開始】はじむること。はじまること。民法第四編第五章、後見の開始」

かい-し 【開示】へさとすこと。後漢書馬援「援於帝朝、乘禦往來、山谷、指畫形勢、開示衆軍所從、道生路」鎌倉文覺「臣又手書申驗、開示」

かい-し 【改尸】(ヒ)を改むること。たとへば、宿禰を朝臣と改むる類。名目抄「改尸」

かい-し 【海事】(名) 海上に關する事。

がい-し 【孩子】(名) がいじ。同じ。

がい-し 【碍子】(名) 【理】電線を支柱に取り附けるに用ふる絕緣體。主として陶器製なり。

がい-じ 【孩兒】(名) (がい(孩)はいとけなき義)みどりご。をさなご。嬰兒。書經康誥「若保赤子、惟曰若有赤子」

がい-じ 【崖寺】(名) 山ぎしにある寺。諸寺集「愁ひは崖寺のふるに破れ、魂は山行の深きに傷ましむ」杜甫詩「神傷山行深、愁破崖寺古」

かい-じう 【海獸】(名) 海に住む獸の總稱。盧肇磨海約の類。宋史五行「廣西海壖有海獸、如馬、蹄鬣皆丹」

かい-しき 【搔敷】(名) かいしきがみ(搔敷紙)の略。類聚雜要「盛菓子六種、已上各從、以搔敷」同上「搔敷は、かしはの上に、酒ゆふを敷く」狂言「鬼瓦」深草土器に南天ぢくのかいしきを敷き」

かい-しき 【解式】【數】計算の順序を、一定の記號方法によりて記載したるもの。

かい-しき 【皆式】【皆色】(副) みな。悉く。殘らず。天神記「日は疎けれど、皆式目くらのやうにもなし」

かいしき-がみ 【搔敷紙】(名) 古へ食物を盛る器物に敷く木の葉。多く南天の葉などを用ふ。かいしき。類聚雜要「打敷一帖中務同中倍上紙十八枚」

かいじ-さく 【海事局】(名) 遞信大臣の管理に屬し、船舶職員及び水先人の試驗、船舶の測度檢査、其の他法令の定むる所に從ひて管海官廳の事務を掌る所。局長・事務官・技師・書記・技手の職員を置く。海事局官制「海事局」

かいじ-さく-じむ-くわん 【海事局事務官】(名) 遞信大臣の管理に屬し、船舶職員及び水先人の試驗、船舶の測度檢査、其の他法令の定むる所に從ひて管海官廳の事務を掌る所。局長・事務官・技師・書記・技手の職員を置く。海事局官制「海事局」

かいじ-くわん 【海事官】(名) 明治三十九年十二月以前の海事局事務官の稱。

かいじ-こくさいこうはふ 【海事國際公法】(名) 海上平時公法及び、海上戰時公法の總稱。

かいじ-こくさいしはふ 【海事國際私法】(名) 海事國際法の一。船舶の所有、船長・船員の組織、航海免狀、船舶の賣買、傭船契約、衝突事件、海損事件、海上保險等に關するもの。

かいじ-こくさいはふ 【海事國際法】(名) 海上の交通に關する國際法。海事國際公法と海事國際私法とに分かつ。各條を見よ。

かいじ-だいぐわんにん 【海事代願人】(名) 他人の委任により、管海官廳に對して、海事に關する申請其の他の手續をなすを業務とするもの。海事代願人取締規則「海事代願人」

かいじつ 【海日】(名) 海上の日。神異經「大荒之東極、至鬼府山、臂沃椒山、脚巨洋海中、昇載海日」

がいし-て 【概】(副) まとめて。一くるめにして。總括して。「概していへば」

かいし-でい 【芥子泥】(名) 一種の藥。芥子の粉末に水を加へて泥の如くしたるもの。紙などに塗りて皮膚に貼る。假死・神經痛等に効あり。

かいし-のぎ 【櫂鎬】(名) 刀劍のしのぎの作りの一。稜立たずして少しく闊みあるもの。かひしのぎ。

かいし-や 【解社】社をとくこと。組合を解散すること。

かいし-ゃ 【海蛇】(名) 【動】うみへび(海蛇)の異名。

かいし-ゃう 【海相】(名) かいぐんだいじん(海軍大臣)の異稱。

かいし-ゃう 【海商】(名) 【法】海上に於ける商業。海船の航行によりてなさるる商行爲。(陸商の對)商法第五編「海商」

かいし-ゃう 【海上】(名) かいじゃう(海上)に同じ。

かい-しゃう 【介性】(名) かひある性質。物事に凝る性質。乳母の草紙、かいしゃうらしく物縫ふさまを知らざれば、見にくきものにて候」

かい-しゃう 【海床】(名) 【地】海底の深き溝。「たすかるらの海床」

かい-しゃう 【改姓】かいせい(改姓)に同じ。名目抄「改姓シヤウ」

かい-しゃう 【開敞】(英 Exposure) 港灣の、外海より風浪をうくること。

かい-じゃう 【海上】(名) うみのうへ。海面。海中。著聞集「題社頭雪、海上眺望、逸懷、かくぞありける」史記孟嘗君傳「臣嘗游海上、見安期生」同封禪書「秦始皇幷天下、至海上」

かい-じゃう 【階上】(名) きざはしの上。階段の上。保元主上遷幸「只今昇殿仕つて、冥途の思出にせんとて、押して階上へ昇りければ」

かい-じゃう 【街上】(名) ちまた。みちばた。

かい-じゃう 【芥城】(名) 佛語。芥子の充滿すといふ廣大なる城。其の芥子を取り盡くすといふ、無限の年代に譬ふ。下文を見よ。榮華譬喻「芥城縱盡、不退之輪長轉」祖庭事苑「有一比丘尼、問佛言、幾何名劫。佛言、我雖能說、汝不能知、當以譬喻可解。有方百由旬城、滿芥子。有長壽人、遇百歲、持一芥子去、芥子都

盡、劫猶未盡」

かいじゃう 〔開城〕 籠もれる兵を引き上げて、城を明くること。城を明け渡して降伏すること。「勢州軍記」「信孝勢衰、任秀吉意、開城岐阜」

かいじゃう-うんそう 〔海上運送〕 海船による運送。海運。（陸上運送の對）

かいじゃう-きしゃう-はうこく 〔海上氣象報告〕（名）内國及び外國航船の船長より、毎月海上氣象表を作り、中央氣象臺に報告すること。明治二十一年内務省令第十一號「内外國航船に係る海上氣象報告方」

かいじゃう-きしゃう-へう 〔海上氣象表〕（名）内國及び外國航船の船長が、中央氣象臺に報告するために、毎月作る海上の氣象に關する表。明治二十一年内務省令第十一號「明治十九年遞信省令第四號第六條に掲くる内國航船外國航船に限り來明治二十二年一月一日より左の雛形に據り毎月海上氣象表を製し中央氣象臺に報告す可し」

かいじゃう-さんむ 〔海上勤務〕（名）艦船に乘り組み服務すること。海軍高等武官進級條例第八條「海上勤務とは艦船に乘組み服務するを謂ふ」

かいじゃう-くわんせいけん 〔海上管制權〕（名）かいじやうけん（海上權）に同じ。

かいじゃう-けいさつ 〔海上警察〕（名）【法】海上航行の危險を防止し、其の安全を計るを目的とする警察。船舶警察。

かいじゃう-けん 〔海上權〕（名）通商航海上並びに軍事上、海上を管制する實力。海上權力。海上管制權。制海權。

かいじゃう-けんりよく 〔海上權力〕（名）前條に同じ。

かいじゃうしようとつ 〔海上衝突〕（名）海上に於ける船舶の衝突。海上衝突豫防法「海上衝突」

かいじゃうせんじこうはふ 〔海上戰時公法〕（名）【法】海事國際公法の一。海上戰鬪力・海上戰鬪區域・敵船拿捕・商船捕獲・海上中立關係・戰時封鎖・戰時禁制品・中立違犯・航海・海上赤十字條約等に關するもの。

かいじゃうせんとうりよく 〔海上戰鬪力〕（名）海上にて、國家の戰鬪力を代表するもの。即ち、軍艦・水雷艇の類。

かいじゃうだんそう 〔階狀斷層〕（名）【地】階段狀をなせる斷層。地層中に數箇の裂罅相接して起これる場合、地層の、これら裂罅に沿ひて順次に辷り落ち階段狀をなせるもの。

かいしゃうち 〔開墾地〕（名）【兵】展望に障害なき土地。

かいじゃうどき （名）あけ方。狂言「舅太夫聟」「あしたとは、かいじやう時」

かいしゃうはふ 〔海商法〕（名）【法】商法の一部。海商に關する權利關係を定むる法規。

かいじゃうはふ 〔海上法〕（名）【法】かいはふ（海法）に同じ。

かいじゃうはふえうぎ 〔海上法要義〕（名）西暦一千八百五十六年四月十三日、佛蘭西國巴里にて、塡地利・佛蘭西・英吉利・普魯西・露西亞・土耳古・さるじにやの諸國が調印せし、局外中立國と交戰國との、海上に於ける國際關係を定めたる宣言書。我が國も明治十九年十月三十日加盟せり。「ぱりーせんげん」「巴里宣言」。明治二十六年三月廿四日勅令「海上法要義」

かいしゃう-ひん 〔醢醬品〕（名）魚貝類の肉・腸等を鹽漬とし、自然に醱酵せしめて一種の味を成さしめたる製品。

かいじゃう-へいじこうはふ 〔海上平時公法〕（名）【法】海事國際公法の一。領海の關係、公海自由の原則、船舶の國籍・賣捨、旗章の種類・權利、軍艦と商船との區別、公海及び領海にての軍艦及び商船の法律上の地位、海賊の取締、船舶の衝突豫防、漁業及び海底電線の保護、檢疫、水難救助等に關するもの。

かいじゃう-ぼうえき 〔海上貿易〕（名）海による貿易。

かいじゃう-ほくわく 〔海上捕獲〕（名）【法】交戰國の一方が對手國の戰鬪力を減殺するために、公海又は領海にて、敵國の船艦及び其の載貨、又は中立違犯の實蹟若しくは嫌疑等ある場合に、中立國の船艦及び其の載貨を捕獲すること。

かいじゃう-ほくわくはふ 〔海上捕獲法〕（名）【法】海上捕獲の手續及び處分に關する法規。

かいじゃう-ほけん 〔海上保險〕（名）損害保險の一。航海に關する事故によりて生ずべき損害の塡補を目的とするもの。

かいじゃうほけん-くわいしゃ 〔海上保險會社〕（名）海上保險の業務を營む會社。

かいじゃうほけん-けいやく 〔海上保險契約〕（名）【法】海上保險を成立せしむる契約。商法第六百十三條「海上保險契約」

かいじゃうほけん-しようけん 〔海上保險證券〕（名）海上保險者が、被保險者の請求により、法定の事項を記載して交付する契約書。其の保險價額の確定せると未定なるとにより、確定保險證券と豫定保險證券とに分かち、また被保險利益の種類によりて船體保險證券と積荷保險證券とに分かつ。各條を見よ。商法第六百六十一條「海上保險證券」

かいじゃうれいしき 〔海上禮式〕（名）軍艦等が、海上にて禮砲又は旗章を以て行ふ禮式。

かいしゃく 〔解釋〕 一ときあかし。説明。行政裁判所處務規程第七條「法規の解釋に付判例を變更せんとするとき又は法規の解釋を一定するの必要あるとき」 二もつれたる事件を處理すること。解決。

かいしゃく 〔介錯〕 一世話すること。介抱すること。又その人。かいぞへ。後見。「弁内侍日記」「中納言のすけ殿よく御かいしやくして、下すだれにてとかくまぎらはして」 保元「後白河院御幼少の時」「死出の山、三途の河をば、誰れかは介錯申すべき」 二古へ切腹の時、傍に附きそひて首を斬ること。又、其の人。阿州將裔記「太刀振り上げたりしが、兜にささはり介錯ならず」

かいしゃく 〔海若〕（名）かいしん（海神）に同じ。莊子「秋水」「海若曰、井龍不可以語於海者、拘於虛也」

かいしゃく-てきさてい 〔解釋的規定〕（名）【法】にんいてきさてい（任意的規定）に同じ。

かいしゃく-にん 〔介錯人〕（名）介錯（かいしゃく）をする人。

かいしゃくはふ 〔解釋法〕（名）きよようはふ（請容法）に同じ。

かいしゃくろん 〔解釋論〕（名）【法】法律の意義を確定する方法。强制的解釋と學理的解釋とに分かつ。各條を見よ。（立法論の對）

かいしゆ 〔芥子油〕（名）芥子の實より製したる揮發油。

かいしゆ 〔皆朱〕（名）朱又は辰砂を混じて、全部赤色に塗りたる漆塗。擬武者物語「昔より皆朱の槍、珉珣の槍は、武功重ねたる武士ならでは免さざること」

かいしゆ 〔改鑄〕 改め鑄造すること。ふきかへ。かいちう。

かいしゆう 〔改宗〕 宗旨を改むること。

かいしゆう 〔海絨〕（名）かいめん（海綿）に同じ。

かいしゆつ 〔開出〕 【植】植物學の用語。平開して出づること。

かいじゆつりう 〔械術流〕（名）戰にて槍を折られたる時、その石突を鋒に利用して戰ふ術を傳へたる一派。

かいしゅん 〔開春〕（名）開くる春。はつはる。樂元帝纂要「孟春曰上春・初春・開春」 九章「開春發歲兮、白日出」之悠悠」

かいしゅん 〔改春〕（名）改まりたる春。新年。

かいしゅん 〔改悛〕 前非をあらたむること。改心。刑法第三十「懲役又は禁錮に處せられたる者改悛の狀あるとき」

かいしよ 〔楷書〕（名）漢字の書體の一。古への隷書より轉化して、形方正なり。支那、晉の王次仲の創作なりといへど詳かならず。楷。しん（眞）。しんしよ（眞書）。路史「今人楷書亦有數體、有古字楷書・有今字楷書」 書斷「八分、本謂之楷書・楷者法也、式也、模也」

かいしやう 〔改稱〕 名稱をあらたむること。改名。

かいじよう 〔楷乘〕（名）【數】一より順次に完全數を乘じたる積。1・2・3・4・5……nはnの階乘なり。n! 又は[n]を以て之を表はす。

がいしよう-めいだい 〔概稱命題〕（名）【論】命題の主辭が、大概の又は概して等の語により制限せらるるもの。例へば、大概の人は廉恥心を有す。概して日本人は勇敢なり等の如し。（英 Quantative proposition）

かいしよく 〔解職〕 其の職務より去らしむること。職を解くこと。免職。小學校令第四十「市町村立小學校長及教員の解職」 市制第百三十九「總て解職せられたる者は自己の所爲に非ずして職務を執るに堪へざるか爲解職せられたる場合を除く外退隱料を受くるの權を失ふものとす」 宋書「贈不能違、解職隨從」 任昉文「表求解職、有詔不許」

かいしよく 〔戒飭〕 かいちよく（戒飭）の誤り。

かいしらぶ 〔搔調〕（他動）かきしらぶ（搔調）の音便。源「榊葉」「心やましくかいしらべ、ほのかにほころび出でたる物の音など、聞きどころあるが多かりしかな」

かいしろ 〔垣代〕（名）一とばり。孝德紀「其葬時帷帳等用白布」 二青海波の舞の時、樂屋の外に出て、列なり立ち笛吹き拍子とりなどするもの。左右近衛の官人或ひは院の北面・瀧口・所衆等を用ふ。源「紅葉賀」「こだかき紅葉の蔭に、四十人のかいしろ、いひ知らず吹き立てたる物のねども」 江次第「八月相撲」「官人並舞人相撲長、爲垣代」 體源抄「青海波には箏垣代にたつ事なければ、樂屋にてひくなり」

かいしん 〔海神〕（名）海の神。わたつみの神。三齊略記「始皇于海中作石橋、非人功所建、海神爲之竪柱」

かいしん 〔戒心〕 心に油斷せぬこと。用心。魯戒。孟子「公孫丑」「當上在薛也、予有戒心」

かいしん 〔戒慎〕 戒めつつしむこと。禮記「曲禮」「君子戒慎、不失色於人」 中庸「君子戒慎乎其所不睹、恐懼乎其所不聞」

かいしん 〔改新〕 一改めて新しくなること。新しくすること。革新。 二年の始め。

かいしん 〔改心〕 あしき心を改むること。心を入れかふること。改悛。

かいしん 〔改進〕 一物事の改まり進むこと。 二舊弊を改めて、文明に進ましむること。

かいしん 〔開申〕 申しひらくこと。上申。

かいしん 〔開進〕 隊伍が、縱隊より横隊に移ること。

かいじん 〔海人〕（名）あま（海人）に同じ。謠「浦には海人（ジヤウ）さまざまの、漁父の船影數見えて」

かいしん 〔害心〕（名）他に害をなさんとする心。害意。惡心。八犬傳「八輯」「害心ある者妨害ありとは、かかる事をや云ふべからん」 法苑珠林「猶如獵師見彼鹿起、極有害心」

かいす 〔解（他動）〕 解（と）く。解釋す。會得す。「人語を解す」 晉書「載記」「時有丞傳廻、讀書而不解其義」

がいす 〔害（他動）〕 一きずつく。殺す。そこなふ。竹取「龍をとらへたらましかば、又こともなく我れは害せられなまし」 宇津保「吹上上」「親をがいする罪より、まさる罪や侍らん」 左傳「昭公廿年」「齊晉又交輔之、將以害楚」 二さまたげ。邪魔をなす。左傳「襄公六年」「三時不害而民和、年豐也」 三忌む。そねむ。史記「屈原賈生列傳」「寵而先害其能」

がいす 〔慨（他動）〕 なげく。うれふ。憤慨す。

がいすう 〔海嘔〕（名）海邊にある片なか。韓愈「交「歲暮」未、而遷逐侶蟲蛇於海陬」 歐陽修詩「樓閣夜氣奉烟浮、玉輪東來從海陬」

がいすくふ 〔搔掬〕（他動）すくふ（掬）に同じ。しやくふ。狂言「笠の下」「胴の深き桶生をすくはんと思し召し、錫杖をおつ取つて、かいすくうてぼったり、ひつすくうてぼったり」

がいすむ 〔搔澄〕（自動）閑かになる。しんとなる。落窪「こののじりて出で給ひぬれば、かいすみて心細げなれど、我が君と打ち語らひゐるほどに」

がいすれる-くわん （英 Geissler's tube）〔——管〕（名）【理】稀薄氣體を封入せる硝子管。其の電極を感應こいる。の兩極に結びて放電せしむれば、美麗なる微光を放つ。殊に管内に螢光を放つ液體などを入れ、或ひは管を特種の硝子にて種種の奇形をなさしむる時は、頗る美觀を呈す。獨逸人がいすれる氏の初めて實驗せる處なるを以て此の名あり。又、封入せる氣體の種類によりて多少光の色を異にし、分光器を透かして見れば氣體に特有のすべくとるを表はすにより、瓦斯のすべくとるを分析をなすにも用ひらる。

かいすゐ 〔海水〕（名）海洋にたたふる水。うみのみづ。しほみづ。韓非子「說林」「失火而取水於海、海水雖多、火必不滅矣」 史記「吳王濞」「海水爲鹽」

かいすゐ-よく 〔海水浴〕（名）衞生のため海水にて沐浴又は游泳すること。

かいせい 〔諧聲〕（名）一調和する聲。 二漢字六書の一。形象と聲音とより成るもの。例へば、江・河の字の如く、氵の形

象により其の意義を表はし、工・可の音により其の音を示したるが如きもの。形聲。象聲。

かい-せい 〔蓋世〕（名）〔かい（蓋）は おほふ義〕氣象の盛んにして、一世を蓋ふこと。功名の盛んなること。「蓋世の英雄」史記項羽本紀「力拔山氣蓋世」獨志諸葛亮傳「府君以蓋世之才、豈可附垂亡之主」

かい-せい 〔解性〕（名）（英 Understanding）こせい（悟性）に同じ。

かい-せい 〔改正〕あらためただすこと。改良すること。漢書谷永傳「無所改正」禮記經解「今當改正不得、猶追逃已之邪事也」

かい-せい 〔改姓〕姓をあらたむること。苗字を易ふること。かいしやう（改姓）。

かい-せい 〔解制〕僧の安居（アン）を終ふること。解夏（ゲ）。有智節用「解制七月五日（本文夏）」

かい-せい 〔皆濟〕かいさい（皆濟）に同じ。下學集「皆濟（カイサイ）」

がい-せい 〔慨世〕（名）世を憂へなげくこと。「がいせいの士」

かいせい-そう 〔海成層〕（名）【地】海底に沈澱して出來たる地層。

かいせい-でんぱう 〔改正電報〕（名）電報の發信人が、既に差し出だしたる電文の改正のために差し出だしたる電報。改正せらるべき電報發信の時より七十二時間以内に、改正すべき字數又は語數に應じたる料金を納め、其の發信局所に請求すべきものとす。電報規則第百二十條「改正電報にして其の原信配達後著信局所に到達したるときは其の事由を受信人に通知すへし」

かいせい-ぶつ 〔海生物〕（名）海中に生ずる動物及び植物。

かい-せう 〔海嘯〕（名）地震、火山の爆裂、海上の暴風等のために、波浪急に高まりて海邊を襲ふもの。つなみ。

かい-せう 〔解消〕從來存續せる關係を解きけすこと。民法（第百五十九條）婚姻解消」

かい-せう 〔改嫁〕改めて他によめいりすること。再緣。

かい-せう-るゐ 〔海鞘類〕（名）【動】ほやるゐの異名。

かい-せき 〔解析〕ときわけ、理論によりて研究すること。南史（梁武帝）「性朴拙、無風采、及解析經理、甚有精致」

かい-せき-さかがく 〔解析幾何學〕（名）【數】幾何學的量を坐標の函數として表はし、其の性質を攻究して、圖形の性質を研究する科學。

かいせき-こ 〔海跡湖〕（名）【地】海底の隆起するとき、其の低窪の地の殘存して湖沼となるもの。霞が浦・北浦の如きこれなり。

かい-せつ 〔開設〕新たに設くること。

かい-せつ 〔開說〕とき明かすこと。說明。史記（孟軻荀卿傳）「欲有所言復飲之醉而後去、終莫得開說」以爲常」

かい-せつ 〔解說〕說きあかすこと。說明。左傳（僖公十年）「賈侯殺里克以說」杜註「自解說不立」

がい-せつ 〔劃切〕（副）よく當てはまること。適切。唐書（韋貫之傳）「微展盡底蘊、無所隱、凡二百餘奏、無不劃切當帝心者」

かいぜる-ひげ 〔海船〕（名）【地】海底の地の殘存して湖沼となるもの。霞が浦・北浦の如きこれなり。

かい-せん 〔開戰〕戰爭行爲を始むること。干戈を交ふること。

かい-せん 〔海戰〕海上にて戰ふこと。（陸戰の對）

かい-せん 〔改錢〕錢貨を改鑄すること。西宮記（臨時）「改錢事。建武元年三月廿八日有御沙汰」

かい-せん 〔改選〕或る職に在る者を更任する爲めに行ふ選擧。市制（第十六條）議員は名譽職とす其任期は六年とし毎三年各級に於て其半數を改選す」同（第十七條）「議員中闕員あるときは毎三年定期改選の時に至り同時に補闕選擧を行ふ可し」

かい-せん 〔階前〕（名）階段の前。

かい-せん 〔改善〕改めて善くすること。

がい-せん 〔凱旋〕（がい（凱）は戰勝の時に奏する樂。せん（旋）はかへる義）戰ひ勝ち凱歌を唱へて旋（カヘ）ること。宋之問詩（軍中聞道凱旋來）騎入看君走馬見芳菲」蘇軾文「陛下可得而知者、凱旋捷奏」

がい-ぜん 〔慨然〕（副）心を奮ひおこす貌。やっきとなるさま。いきどほりなげく貌。禮記（雜記）「既葬慨然如不及」後漢書（和熹鄧皇后紀）「登車攬轡、慨然有澄清天下之志」

がい-ぜん 〔駭然〕（副）驚くさまにいふ語。愕然。

かい-せん-うんが 〔海船運河〕（名）海船の通航に供ふる運河。

かいぜん-くわん 〔改善觀〕（英 Meliorism）（名）【哲】厭世觀と樂天觀との中間に在る人生觀。即ち、此の世界は最惡なるものにもあらず、又最善なるものにもあらず、人類の力によりて、漸次改善せられ得るものなりとの信仰。

がいぜん-せい 〔蓋然性〕（英 Probability）（名）【哲】全く信ずるほど確實なるものにもあらざれども、亦全く疑ふべきものにもあらず、事物の大體の傾向より見れば、寧ろ信じ得べき性質。然有り得るならんと思はるる性質。

かいせん-ちゅう 〔疥癬蟲〕（名）【動】節足動物、蜘蛛類の一種。體軀微細なれども、その成熟せるものは肉眼にて認むることを得。全體灰白紅色にて、雌は雄より少し大きく、孰れも前肢二對、後肢四對あり。他物に附著せん爲め、特に吸盤を具ふる肢あり。好みて薄弱なる皮膚の部分に寄生し、上皮の表層を圓形に穿通して發痒す。これ即ち疥癬なり。ひぜんのむし。

がいぜん-てき 〔蓋然的〕（英 Probable）（哲）總べて、蓋然性を有する事物を形容する場合に用ふる語。

がいせん-もん 〔凱旋門〕（名）凱旋の歡迎また記念として建設する門。

かい-そ 〔開祖〕（名）宗門をひらきたる人。開山。

かい-そ 〔海租〕（名）海産物に課する租稅。漢書食貨志「馱薪芻以給海租三倍、天子從其計」

かい-そ 〔海鼠〕（名）【動】なまこ（海鼠）の異名。

かい-そう 〔海葱〕（名）【植】百合科、綿棗兒（ボウ）屬の多年生草本。莖は高さ三尺餘、地下に鱗莖有り。葉は披針形、平行脈を有す。花莖は葉間より抽出し、上部に白色・小形の花を繖形に排列す。地中海沿岸の原產なり。鱗莖は藥用に供す。

かい-そう 〔咳嗽〕せきをすること。魏志（華陀傳）「便苦咳嗽、欲臥不安」

かい-そう 〔劾奏〕官吏の罪過を擧げて奏上すること。漢書（韋元成傳）「以元成實不病、勤奏之有詔勿劾」

かい-そく 〔他動〕（名）削り取る。削る。字鏡集「剝（カイソク）」

かい-そく 〔海賊〕（名）一海上にて往來の船を劫し、若しくは沿岸に上陸して、貨財を奪ふ盜人。土佐日記「海賊むくいせんといふなることを思ふうへに、海のまたおそろしければ」魏志（倭人傳）「東征海賊」呉志（孫權傳）「會海賊胡玉等、從鮑里上、掠取賈人財物」二「法」國家の認可又は命令によらずして、公海にて暴行又は掠奪を行ふもの。及び、航海中暴動をなして船舶の指揮權を掠奪し、若しくは指揮者を迫害して、暴行又は掠奪を行ふもの。明治三十一年一月海軍省達第二號軍艦職員勤務令（第三十條）「艦長は、海賊（國際法上の海賊）を發見したるときは直に逮捕して便宜の港に引致し電信を以て海軍大臣に申報し其指令を待て之を處分すへし」明治三十一年五月海軍省達第八十五號軍艦外務令（第三十一條）「本令に於て海賊と稱するは海洋に於て左に掲くる二項の一に該るへき行爲あるものを謂ふ。一、何れの主權にも屬せず又は何れの主權者よりも免許を得ずして暴行掠奪を爲すもの。二、交戰國雙方より特許狀を得て捕獲を爲すもの」三近古、かいぞく（海賊）の稱。明德記「船に乘ったる人人には（中略）海賊梶原八郎左衛門を始めとして、已上六十三人」

（諺）海賊が山賊の罪をあぐ 利害關係なければ、同類にても相助けざるをいふ。則。略則。

がい-そく 〔概則〕（名）あらましの規

かいぞく-しゅう 〔海賊衆〕（名）ふなてしゆう（舟手衆）に同じ。

かいぞく-せん 〔海賊船〕（名）一海賊の使用する船舶。二近古、海賊（ボウ）の船艦。又、ぐんかん（軍艦）の稱。

かいぞく-たいしゃう 〔海賊大將〕（名）ふなてしゆう（舟手衆）に同じ。

かい-そふ 〔掻添〕（自動）寄り添ふ。添ふ。源（紫式部）「渡殿の口にかいそひて、かくれ立ち給へれば」

かい-そふ 〔掻添〕（他動）かいそふやうにす。そはす。榮華（花山）「御ぐし長く美しうて、かいそへて供させ給へり」

かい-そへ 〔介添〕（名）〔かいそへ（掻添）の義〕一つき添ひて世話をなす人。かしづき。うしろみ。手傳ひ。介錯。太平記（十二卷右馬）「藤房卿（中略）かい副への侍二人」二女を嫁せしむる時、添へて遣る下婢。艶狩側本地「嫁入りの行列（中略）その外介副へ・衣被・長刀・傘、ざんざめいたる供先」三笠懸・犬追物等の時、射手を助けて事を行ふ人。

かい-そん 〔海損〕（英 Average）（名）〔法〕航海中、異常の事故により、船舶及び積荷に對して生じたる損害及び費用。共同海損・單獨海損及び小損害の三種に分かつ。各條を見よ。商法（第四編第四章）「海損」

がい-そん 〔街村〕（名）【地】人家密接すれども、街道に沿ひて只一線に發達したる村落。

かいそん-さようたくさん 〔海損供託金〕（英 Average deposit）（名）【商】共同海損分擔額の支拂を擔保するため、關係者の供託する金額。通常、船主及び其の他の關係者の共同名義にて銀行に預け入れ、清算完了の後、其の過不足を返却又は追徵するものとす。

かいそん-けいやくしょ 〔海損契約書〕（英 Average bond; average agreement）（名）【商】荷主が、共同海損の分擔額を支拂ふべきことを承諾したる契約書。

かいそん-せいさんしょ 〔海損精算書〕（英 Average statement）（名）【商】船長・船主若しくは荷主の依頼によりて、海損精算人の作成する精算書。

かいそん-せいさんにん 〔海損精算人〕（英 Average adjuster）（名）【商】海損額の算定、及び海損關係者の分擔の精算をなす人。

かい-た 〔海田〕（名）厚紙の一種。周防また廣島の產。（紙譜）

がい-だ 〔咳唾〕（名）せきしてつばをはくこと。又、其の吐きたるもの。莊子（徐無鬼）「勿待於下風、幸聞咳唾之音」李白詩「咳唾落九天、隨風生珠玉」

（諺）咳唾玉をなす かりそめに口をついて出づる言葉も、自ら金玉の句なり。晉書「江淹曰、咳唾成珠玉、吐氣作虹霓」

かい-たい 〔解體〕一解け離るること。ばらばらに離るること。左傳（成公八年）「信不可知、義無所立、四方諸侯、其誰不解體」二かいぼう（解剖）に同じ。「解體新書」

かい-たい 〔懈怠〕一おこたり。怠慢。けたい（懈怠）。民事訴訟法（第七十六條）「即時抗告の提出を懈怠したるとき」民法（第四編第五章）「債權者か故意又は懈怠に因りて其擔保を喪失又は減少したるとき」二「法」自分の行爲によりて生ずべき惡結果を豫想し、且つこれを防止し得る地位にあるに關らず、これを避くる策を怠りたるため惡結果を生じたること。横著なる懈怠。舊刑法（第百五十條）「看守又は護送者其懈怠に因り囚徒の逃走を覺らざる時」同（第三百四十七條）「疎虞懈怠又は規則慣習を遵守せず過失に因て人を死に致したる者」

かい-たい 〔解隊〕軍隊又は艦隊を解散すること。陸海軍將校分限令（第四條第三項一號）「解隊」

かい-たい 〔改替〕（大安治三年二月廿三日）「爲不忠逆臣、所職改替之身也」

かい-たい 〔拐帶〕〔法〕委託を受けたる物品を、自己の利益に消費・處分せんため、其の物品並びに自己の居所を不明ならしむること。もちにげ。舊刑法（第三百九十五條）「受寄の財物借用物又は典物其他委託を受けたる金額物件を費消したる者は一月以上二年以下の重禁錮に處す。若し騙取拐帶其他詐僞の行爲ある者は詐欺取財を以て論す」

かい-だい 〔海內〕（名）四海の內。一國內。莊子（天道）「聖道運而無所積、故海內服」史記（高祖紀）「威加海內兮、歸故鄉」

かい-だい 〔解題〕（名）書物の著者・出版の年月、及び著作に就きての由來、又は其の書の內容などの說明。「國書解題」

かい-だい 〔改題〕題號をあらたむること。名稱を易ふること。「書物の改題」

かいたい-ざい 〔拐帶罪〕（名）〔法〕舊刑法により區別せる犯罪の一。拐帶により成立するもの。詐僞取財罪と同一に處罰せらる。

かいたい-さうしゃうざい 〔懈怠創傷罪〕（名）〔法〕舊刑法により區別せる

罪名。懈怠によりて、人を創傷したるにより成立するもの。

かいたい-ちしざい 〔懈怠致死罪〕（名）〔法〕舊刑法により成立するもの。懈怠によりて、人を死に致したるに

かいたい-はんけつ 〔懈怠判決〕（名）〔法〕缺席判決の一。民事訴訟にて、當事者の一方が口頭辯論の期日に出頭せず、又出頭すれども辯論をなさず、或ひは任意に退廷したるとき、相手方の申立てによりてなす裁判所の判決。此の判決を受けたる當事者には、何等の理由を具備するを要せず、常に故障の申立てを許し、其の判決の基礎を覆すことを得るものとす。

かい-たう 〔海島〕（名）海中の島。史記田單傳「横慢」誅、興其徒屬、居海島中」

かい-たう 〔戒刀〕（名）佛家にて用ふる小刀。又、剃刀をも稱すといふ。

かい-たう 〔海道〕（名）〔一〕うみち。ふなぢ。海路。唐書賈躭傳「海道商船始至」〔二〕海つきの地方に通ずる街道。（山道の對）國姓爺「海道の港をさして落ちよ落ちよ」〔三〕とうかいだう（東海道）の略。曾我扇八景「大磯中略海道一の遊女町」〔四〕かいだう（街道）に同じ。「本海道」狂言「上下の海道へいて、好ささうな者が來たらばかか〳〵てこい」

かいたう-くだり 海道下　東海道を東國へ下だること。「絲竹初心集」おもしろの海道下だりや」

かい-たう 〔海堂〕（名）〔植〕薔薇科、梨（ナシ）屬の落葉喬木。幹の高さ丈餘。葉は簇生し、長卵形又は廣披針形、鋸齒あり。繖葉は赤味を帶びて美なり。春季、開花し、繖形花序に排列し、紅色にして美なり。重瓣なるもの多し。我が國、各地の庭園に栽培し觀賞せらる。

がい-たう 〔該當〕　よくあてはまること。適合すること。秉燭談「正字通該字の注に、俗借爲該當之稱」言宜也、凡事應如此日該」

かいだう-ぐち 海道口（名）東海道の通路の口。曾我虎磨「今度の御狩りに、鎌倉のお留守番の仰せを蒙り、海道口を請け取って」

かいだう-すぢ 海道筋（名）海道（ミチ）の道すぢ。通りすぢ。椿樹三「海道筋の旅籠屋・馬次・舟場を詮索し」

かいだう-とほり 街道通（名）【動】みちしるべ（班鑑）の異名。

かいだう-ほけ （名）【植】くわりん（木瓜）の異名。

かい-たく 〔開拓〕〔一〕荒れた地を新たに開墾すること。山野を開きて田畑などを作ること。「開墾」李嶠文「欲開拓宅北」更起新第」〔二〕領土をおし廣むること。高適詩「漢家能用武、開拓窮異域」

かいたくし 〔開拓使〕（名）明治二年七月に創設して、北海道並びに屬島開拓の事務を總轄せし官廳。明治十五年一月廢せられたり。明治二年七月太政官第六百二十二號「開拓使」

かいたくししゃうさんだくわんしょうけん 〔開拓使正金兌換證券〕（名）次條に同じ。

かいたくし-しょうけん 〔開拓使證券〕（名）明治五年正月北海道開拓使が、北海道開拓の資金として、總額二百五十萬圓を限り三井組に命じて發行せしめし兌換紙幣。拾圓・五圓・壹圓・五拾錢・貳拾錢・拾錢の六種あり。五拾錢・貳拾錢・拾錢の三種は明治六年十二月より、其の他は同八年五月三十一日より通行を廢せられたり。開拓使正金兌換證券。開拓使兌換證券。

かいたくしだくわんしょうけん 〔開拓使兌換證券〕（名）前條に同じ。

かい-たけ 〔開茸〕（名）醃物の名。北條五代記「我れ三年以前男と離れ、其の年より何とも知らざる醃物出來たり。ひそかに醫師に尋ねければ、是れは開茸と名附け、女の身にある病也と聞く」

かい-たす 〔掻出〕（他動ド）汲み出だす。「水をかいだす」

かい-たつ 〔垣栢〕（名）かきたつ（垣立）に同じ。

かい-たて 〔垣栢　掻栢〕（名）栢を立て並べて如くにせるもの。平治（義朝板）「答「五條橋をこぼちよせ、垣栢に掻（大菊雜）いて待つ所に」盛衰記「橋水」「懸橋引き落として、西の大門に垣栢かき」

かい-たぶ 〔解答〕〔一〕とき明かして答ふること。〔二〕〔數〕解法の結果。こたへ（答）。

かい-たま （名）〔かい打ちの玉か〕ぶりぶりの玉。大ぬさ（大遺歌）ぶりぶりにかい玉」

かい-たゆし （形ク）たゆし（弛）に同じ。

かいたをり 〔掻手折〕（名）かいたをること。屈折。十訓「牛の逸物にて、辻のかいたをりなどを、面白くありきまはりければ」

かい-たをる 〔掻手折〕（自動ル）折れ曲がる。海道記「粟田口の堀道を、南にかいたをりて」

かい-たん 〔海膽〕（名）【動】うに（海膽）の異名。

かい-たん 〔戒壇〕（名）佛語。僧徒に戒法を授くる式場。度僧の道場。孝謙帝の時、東大寺に設けしを始めとし、筑前の觀音寺、下野の藥師寺と三所なりしが、後に延曆寺一所と爲れり。玄蕃寮式「戒壇十師并沙彌等供料」宇治拾遺「觀山の戒壇を、人夫かなはざりければ、えつかざりけるころ」砂石集「鑒眞和尚中略南都の東大寺、鎭西の觀世音寺、下野の藥師寺、三の戒壇を建て給ひ」

かい-たん 〔階段〕（名）〔一〕登降用に設けられたる段段の構造物。はしごだん。きざはし。階段中に、足の乘る直面を蹈面（ツラ）といひ、其の直角なる垂直面を蹴込（ケコミ）といふ。〔二〕等級。段階。

かい-たん 〔街談〕（名）道路のうはさ。世評。風說。十訓「かかれば街談巷說の中にも、必ずとるべき事ありといへり」漢書藝文「小說家者流蓋出于稗官、街談巷語道聽塗說者之所造也」張衡文西京「街談巷議彈射臧否」

がい-たん 〔骸炭〕（名）こーくす。に同じ。

がい-たん 〔慨歎〕　うれへなげくこと。なげきいきどほること。王昌齡詩「主人就我飲、對我還慨歎」

かいだんせき 〔階段席〕（名）多人數を收容するため、後方に至るに從ひて漸漸高くなりて、階段の狀をなす席。

かいだんせき 〔戒壇石〕（名）律宗・禪宗等の寺院の門前に建つる石標。多くは不許葷酒入山門」の句を刻す。結界石。

かいだんだう 〔戒壇堂〕（名）戒壇を設けある堂舍。山門堂舍記「戒壇院中略葺檜皮方五間戒壇堂一宇」

かいだんめぐり 〔戒壇廻〕（名）佛堂の內陣の周圍に當たる緣の下に設けある

暗き通路を一周すること。その時、手が本尊の下に通ずる入口にある錠に觸るれば功德ありとし、又心正しからざる者は種種の怪異起こるものとす。信濃國善光寺のもの最も名あり。

かいだんねん 〔戒壇院〕（名）かいだんだう（戒壇堂）に同じ。元亨釋書「乃於大殿西」構戒壇院」

かい-ち 〔開地〕（名）開墾せる土地。續紀「十五年十五月乙丑」如聞、墾田依養老七年格限滿之後、依例收授、由是農夫怠倦、開地復荒」

かい-ち 〔改置〕　改めおくこと。おきかふること。國語「二三子、其改置、以代圉也」周書武帝「改置宿衛官員」

かい-ちう 〔介冑〕（名）〔かい（介）はよろひ、ちう（冑）はかぶと〕よろひ・かぶと。又、其れを著くること。甲冑。武裝。禮記曲禮「介冑則有不可犯之色」史記樗里傳「介冑之士不拜」

かい-ちう 〔改鑄〕　かいじゆ（改鑄）の習慣音。かいじゆ（改鑄）を見よ。

がい-ちう 〔鎧冑〕（名）かいちう（介冑）に同じ。甲冑。唐書吐蕃「其鎧冑精良」

かい-ちく 〔改築〕　改め築（ツ）くること。造り易ふること。公羊傳「主王姬者、必爲之改築」史記廢世「昭王爲陳改築宮而師事之」

かい-ちゃう 〔開帳〕　廚子（ヅシ）の戶帳を開きて、其の內に安置したる佛像を衆人に親しく拜せしむること。二水記「永正十八年三月八日「早旦、詣木屋藥師堂中略從去月開帳也」舊雜譬喻經「夫人出手開帳、令人得見」

かい-ちゃう 〔開廳〕　官廳の執務を開始すること。裁判所構成法「第百三十五條」「裁判所及檢事局の開廳時間」

かいちゅう-くわざん 〔海中火山〕（名）〔地〕かいていくわざん（海底火山）に同じ。

かい-ちょ 〔刈除〕　刈（カリ）除（ノ）ること。除き去ること。「雜草を刈除す」「惡人を刈除す」

かい-ちょ 〔解除〕〔一〕ときのぞくこと。はらひ去ること。易林「憂患解除、喜至慶來」〔二〕〔法〕已に生じたる責任又は法律關係を解くこと。民法「第三編第二章」「契約の解除」會計法「第三十二條」「責任解除の判決」

かい-ちょく 〔戒飭〕　氣をつけてつつしむこと。かいしよく。

かい-ちょ-けん 〔解除權〕（名）〔法〕當事者の一方が、相手方に對する意思表示によりて、契約を解除し得る權利。契約又は法律の規定より生ずるものとす。民法「第九百四十條」「契約又は法律の規定に依り當事者の一方か解除權を有するときは其解除は相手方に對する意思表示に依りて之を爲す」

かいちょ-でうけん 〔解除條件〕（名）〔法〕條件の一。法律行爲の效力の消滅を、不確實なる將來の事實に繫らしむるもの。民法「第百三十一條」條件か法律行爲の當時既に成就せる場合に於て其條件か停止條件なるときは其法律行爲は無條件とし解除條件なるときは無效とす」

かいちょてうけん つき はふりつかうゐ 解除條件附法律行爲。【法】解除條件を附したる法律行爲。民法「第百三十一條」「解除條件附法律行爲は條件成就の時より其效力を失ふ」

かい-ちゃう 〔開陣〕　籠もれる兵を引き上げて、陣營を明くること。大內義隆記「天文三年十一月に悅び旗をあげ、屋形は長府を御開陣」

かい-ぢん 〔凱陣　歸陣〕　戰ひに勝ちて、我が陣營に歸ること。甲陽軍鑑「歸陣（ヂン）ありて」天正記「廿五日「六月十日坂本の城へかい陣す」

がい-ぢん 〔凱陣〕　前條に同じ。「凱陣八島」

かいづ 〔海圖〕（名）【動】黑鯛（ヂビ）の幼きもの。

がいづ 〔海圖〕（名）【地】洋海の有樣を表はす地圖。數字を以て海の深淺を示し、別に符號により海底の性質、岩礁の位置等、海洋の狀態を表はす。

かい-つう 〔開通〕　道路などを開きてとほすこと。又、ひらけ通ること。「鐵道の開通」禮記月令「季春之月中略命司空中略開通道路毋有障塞」

かい-つかむ 〔掻摑〕（他動ム）〔一〕手にてつかむ。〔二〕かいつまむ。概括す。

かい-つく 〔掻附〕（自動ク）とりすがる。とりつく。宇津保「藏開下」「婚取す中略逢はせし夜よりかいつきて、あはれにいみじき契りをす」枕「引きゆるがすに、危がりて、猿のやうにかいつきて居るもをかし」

かい-つくばふ 〔掻蹲〕（自動ク）つくばふ（蹲）に同じ。「凱陣八島」「こけ猿・小猿が雨にそぼ濡れて、ひ、ひっくばうて、かいつくばうて」

かい-つくろひ 〔掻繕〕（名）〔一〕かいつくろふこと。〔二〕かしづき（傳）に同じ。枕「かいつくろひ二人、わらはより外は入るまじとおさへて」榮華物語「こよひかいつくろひ、いづかたなりしぞ」

かい-つくろふ 〔掻繕〕（他動ク）〔一〕つくろふ（繕）に同じ。整飭。砂石集「一事も虛誕なしと、事うるはしくかいつくろひて、人に向かひて申すやうに云ひければ」

かい-つばた 〔燕子花〕（名）〔一〕〔植〕かきつばた（燕子花）に同じ。〔二〕裝束の色目

の名。かきつばた(燕子花)に同じ。雅亮裝束抄三之夏「かいつばた」

かいつぶり 鸊鷉 (名) 【動】游禽類に屬する鳥類。體は長さ約七寸。嘴は堅硬にして尖銳、基根は黄綠色なるも先端は黑し。背は黑褐色にして、腹は灰色を帶ぶ。兩翼は短小、尾は殊に短し。脚は尾端に出でて、毎趾に板狀の蹼あり。游泳巧みにして、水中を潛りてよく魚類を捕らへ食す。その巣は水面に浮遊す。むぐり。にほ。いよめ。伊勢參宮名所圖繪「鳰鳥中略俗にかいつぶりと云ふ」

かい-つぼる (他動ラ四) つまをる。かいどる。望一千包「武藏野やうららに雨のふるわらぢ、裾かいつぼり歸る草刈」

かい-つまむ 掇撮 (他動マ四) とりつまむ。摘拾す。

かいつむり 蝸牛 (名) 【動】かたつむり(蝸牛)に同じ。

かい-つもる 掻積 (自動ラ四) つもる(積)を强めていふ。集まる。風雅集下「かいつもる藻くづのみして、あるかひもなきさに寄する和歌の浦波」

かい-つらぬ 書列 (他動ナ下) かきつらぬ(書列)に同じ。

かい-つらぬ 掻列 (他動ナ下) つらぬ(列)に同じ。連れだつ。勢語「昔男、逍遙しに、思ふどちかいつらねて、和泉國へ二月ばかりにいきけり」

かいで 楓 (名) 【植】かへで(楓)の轉。

かい-てい 海底 (名) 海のそこ。平家十八「雲上の龍くだって、海ていの魚となり給ふ」拾遺記「乘槎舟而至、舟形似螺、沈海底、而水不浸入」

かい-てい 海程 (名) 海上のみちのり。海程。

かい-てい 階梯 (名) 一 升降の階段。きざはし。はしご。二 進むべき手引。物事の初步。易經繫辭「亂之所生也、則言語以爲階。疏梯梯也、言、亂之所生、則由言語、以爲階。疏梯梯也」韓愈詩「將上擧汝愈尤、以爲己梯梯」 三 機械體操の具。斜めに立てかけたる梯子。又、その梯子によりて行ふ體操。

かい-てい 階底 (名) 階段の下。きざはしのもと。朗詠「甕頭竹葉經春熟、階底薔薇入夏開」

かい-てい 改定 (名) あらためさだむること。大日本帝國憲法前文「條章を改定するの必要なる時宜」改めただすこと。

かい-てい 改訂 (名) 法廷を組織し、裁判を開くこと。又、其の法廷。裁判所構成法第三條「開廷は裁判所又は支部に於て之を爲す」同第百二條「廷丁は開廷に出頭せしめ」

かい-てい 解停 (名) 停止をとくこと。(新聞・雜誌などに)いふ。

かい-てい 孩提 (名) あか兒。みどりご。をさなご。孟子盡心上「孩提之童、無不知愛其親也」

かい-てい 豈弟 愷悌 人柄のよきこと。和らぎ樂しむこと。詩經周風「齊子豈弟」同小雅「既見君子、孔燕豈弟、宜兄宜弟、令德壽豈」

かいてい-くわざん 海底火山 (名) 【地】海底に噴出する火山。海中火山。(英 Submarine cabio)

かいてい-けーぶる 〔海底——〕 (名) 【理】海洋を隔てたる地と電信・電話等を交換するために、海底に布設するけーぶる。

かいてい-すゐらい 海底水雷 (名) 海底に接して沈め置く水雷。

かいてい-せん 海底線 (名) いでんせん(海底電線)に同じ。

かいてい-でんしん 海底電信 (名) 海底電線によりて送受する電信。

かいてい-でんせん 海底電線 (名) 海洋を隔てて電氣通信をなすために、海底に布設する電線。完全に絶緣し、堅牢なる被覆をなし、且つ容易に切斷することの無きやうにせるものにして、自己の重さによりて海底に沈降せしむ。

かいてい-でんぱう 海底電報 (名) 海底電線によりて送受する電報。

かいてい-でんわ 海底電話 (名) 海底電話線による電話。

かいてい-でんわせん 海底電話線 (名) 海底に沈設したる電話線。

かいてい-とくぎしょう 改訂特許證 (名) 特許の改訂を出願したる者に、特許局長より更に交付する證書。

かいていめいさいしょ 改訂明細書 (名) 特許の改訂を出願する時、其の改訂の點を記して差し出だす書面。

かい-てう 海潮 (名) うしほ。海水。舊唐書李蒐「奏於楚州置常豐堰、以禦海潮」

かい-てう 海鳥 (名) うみのとり。莊子至樂「昔者海鳥止於魯郊」

がい-てう 害鳥 (名) 【動】動物學上の用語。直接・間接に人類に害を及ぼす鳥類の總稱。穀物を食する雀、家畜を害する鷲の類。(益鳥の對)

がいてきーしゅだん 害敵手段 (名) 【法】敵國に損害を與ふる手段。陸戰の法規慣例に關する規則第二十二條「交戰者は害敵手段の選擇上無限の權利を有することなし」

かい-てふ 戒牒 (名) 度牒の後、受戒せし者に授くる牒書。夜鶴庭訓抄「出家して戒牒と申すものあり。四月十一日にあり。檀紙下繪あり。三枚おくに比丘と云ふ所をば、必ず三行に書くべし。端の行よりは少し引き上げて高く書く。座主の判所眞に可書」

かい-てん 開展 一 ひらきのぶること。仲春龍詩「庭草有餘姿、園蕷復開展」 二 事物の發達・進步すること。發展。

かい-てん 開店 (名) 開業。みせびらき。商店を開くこと。

かい-でん 皆傳 藝術の師より、奥義を殘りなく傳へられて、人の師範たるを許さるること。初步を初段といひ、稍進みたるを目錄といひ、更に進みて過半の傳授を受くるをゆるし、又免許・傳授といふ。皆傳は其れより一段上達したるもの。奥ゆるし。

かい-でん 開田 (名) こんでん(墾田)に同じ。續後紀十二承和九年八月丙子「邊要之地、爲有警虞、延曆年中、特立制文、不許開田」而比年頗有墾開之事」望請、依延曆三年四月廿六日符、一從停止、許之」

かい-と 垣外 (名) 一 垣のそと。曾丹集「山里はかいとゆききてのみ道も見えぬまで、秋のこの葉にうづもれにけり」 二 こつじき(乞食)をいふ。大阪の方言。物類稱呼

がいど (英 Guide) (名) 通譯をなして、外國人の案内を業とするもの。案内業者。

がい-とう 街頭 (名) まちのほとり。街上。杜甫詩「街頭酒價常苦貴、方外酒徒常醉眠」

がい-とう 街燈 (名) 夜間、街頭にともす燈火。

がい-どう 孩童 (名) をさなき兒。孩兒。孩提。

がいどーゐぇーん (英 Guide vane) (名) 【理】たーびん・を見よ。

がいどうーけ 海藤花 (名) 蛸の卵を素乾(ゾ)又は鹽漬にしたるもの。二三寸

ばかりの絲の如きものに、粒粒相連なり著きて、藤の花の如し。色は黄白。殿物などに加ふ。播磨國明石の產。

かい-どく 解毒 (名) げどく(解毒)に同じ。

がい-どく 害毒 (名) 一 いためそこなふこと。 二 健康をそこなふもの。善良をそこなふもの。

かいどく-やく 解毒藥 (名) げどくやく(解毒藥)に同じ。

かいと-ばん 垣外番 (名) 江戸時代、非人の中より選ばれて、毎坊に一人晝夜番をなす者。大家にては戸口を守らするもあり。守貞漫稿

かいと-もし 掻燈 (名) 古へ禁中にて、油火の御燈(ミアカシ)の稱。夜のおとどにとぼすもの。徒然草「夜の御殿のをば、かいともしとうよなどいふ、又めでたし」日中行事「夜のおとどのかいともし、御手水の間より内侍持ちて參りて、四つの隅のとろにともす」

かい-ともす 掻燈 (他動サ四) 燈の心を掻きあげて、能くともるやうにす。しんをかきあげてともす。

かい-とり (名) かぢとり(楫取)の音便。持統紀、挾抄(カイ)八人」

かい-とり 鑰取 (名) 〔かいはかぎの音便〕 一 てんやく(典鑰)に同じ。持統紀「典鑰(カイ)置始多久」 二 國府・社寺等にて、鍵の保管を掌る者。聽闕斯餘「鑰取(カイ)勇、虎賁(ブカル)の鑰(カギ)を取(セリ)り」

かい-とり 掻取 (名) 〔打ちかけたる小袖のつまの開くを、手にてかいとる義〕うちかけ(打掛)に同じ。かけ。簾中舊記「繪縫物召して、織物御かいとり御沙汰候。御かいとりの上に胸の守り御懸け候」

かいとり-ぐさ (名) 【植】かきどほし(連錢草)の異名。

かいどり-すがた 掻取姿 (名) かいどりたる姿。徒然草「ひきしろひて逃ぐるかいどりすがたのうしろで、毛生ひたる細脛のほど、をかしくつづきし」

かいどり-づま 掻取褄 (名) 衣の褄をかいどりたること。狂言法師「ただ一人、かいどり褄にて行かぬよなら」

かいどり-はしょり 掻取端折 (名) かいどりの裾を高くかかげて、しどきにて締めたること。

かい-どる 掻取 (他動ラ四) 衣の裾又は袖先をかかぐ。文安田樂能記「此の御小袖をかいどりて、是れは西近江眞野のあたりに住む、數ならぬ貧女にて侍ふと申して」東海道名所記「禿・遣手に送られ、長きも裾をかいどり、八文字に蹈んで行く後影の」

かいな (名) 一 植 こぶなぐさ(蕨草)の異名。 二 かりやす(青芝)に同じ。和名十四巻「黄草加伊奈乃多久佐」

かい-ない 海内 (名) かいだい海内)に同じ。

かい-なづ 掻撫 (他動ナ下) かきなづ(掻撫)に同じ。神代紀上「童一少女、撫(カイナ)而哭之」

かい-なで 掻撫 (名、副) かきなで(掻撫)の音便。源氏梅花「よきにはあらねど、かうやうのかいなでにだにあらましかば、かへすがへすくちをし」濱松「らうたげなるけしき、かいなでの人とおぼえず」

かい-なぶ 皆納 租稅などを、殘りなくをさめをはること。皆濟。古語。かきまはしてこねる。

かい-なやす 掻悩 (他動サ四) 字鏡「撹加伊奈夜須」同「撓撹加伊奈須」

かい-ならし 掻平 (名) 〔かきならしの音便〕とかき(梨)に同じ。

かい-なん 海南 (名) 南方の海に沿へる地。

かい-なん 海難 (名) 航海中の危難。嘴稅法第三「海難其の他止むを得ざる事故に由り入港したる船舶には嘴稅を課せず」

かいなん-しょうめいしょ 海難證明書 (名) 〔商〕海難の事實を證明して、管海官廳より其の船舶に交付する文書。

かいなん-しょうめいりょう 海難證明料 (名) 海難證明書を受けたる船舶が納むる手數料。

かい-なんぷう 海軟風 (名) 〔地〕海岸に於いて、晝間海上より陸上に吹く微風。晝間、陸は海に比し熱せらるること早く、比較的溫暖なるに由る。海風。

かいにぶ-けん 介入權 (獨 Eintrittsrecht) (名) 〔法〕支配人・代理商・合名會社の社員、合資會社の無限責任社員・株式會社の取締役・株式合資會社の無限責任社員にて、例へば許諾を得ずして自己又は第三者のために、主人・本人又は會社の營業の部類に屬する商行爲をなし、或ひは同種の營業を目的とする會社の無限責任社員となるが如く、不行爲の義務に違反して爲したる行爲あるとき、主人・本人又は會社等が之を自己のために爲されたるものと看做すことを得る權利。

かい-にん 改任 (名) 或る任務にある者を解き、他の者を改め任ずること。非訟事件手續法第六十一條「不在者か置きたる管理人は其改任を命じたる裁判に對して即時抗告を爲すことを得」

かい-にん 解任 (名) 任務を解かること。陸軍將校分限令第四條「滿期解任」商法第七十七條「取締役は何時にても株主總會の決議を以て之を解任することを得。但任期の定ある場合に於て正當の理由なくして其任期前に之を解任したるときは其取締役は會社に對し解任に因りて生じたる損害の賠償を請求することを得」

かいにん-さう 海人草 (名) 【植】まくり(鳥蘚苔)の異名。海藻草。海仁草。

かいにん-じゃう 解任狀 (名) 使節を解任して召還する本國政府が、其の使節を經て、駐劄國の君主又は大統領に捧呈する文書。

かいにんじゃう たふかん 〔解任狀答翰〕解任狀に答ふる文書。我が國にてはかかる文書を與へずして、勳章を贈るを通例とす。

かい-ねづ 掻捩 (他動ナ上) ねづ(捩)に同じ。ねぢる。宇治拾遺「突かんとせん手を取りて、かいねぢてかみざまへ突かば、肩の骨はかみざまへ出でてねぢられなまし」

かい-ねり 掻練 皆練 (名) 一 練りたる絹。練らざる生(キ)の絹の對。宇津保上俊蔭「唐綾のかいねり一重ね」源氏初音「光なく黑きかいねりの、さびさびしく張りたる」同紅葉賀「清げなるほそながども、白きかいねりなど」 二 襲の色目の名。表・裏共に打ちたる紅。或ひは裏は張りたる紅。火色に同じ。襲色目 冬より春まで用ふ。一說、火色に異なり。表は打ちたる濃紅、裏は張りたる濃紅にて、中重なきもの。後園生院殿裝束抄 源氏賀「人人もあざやかならぬ色の山吹・かいねり・濃きぎぬ・青にびなどを著かへさせ」

かいねり-がさね 掻練襲 (名) 前條二に同じ。宇津保藤花中「織物のなほし・さしぬき、かいねりがさねの下がさね入れて包みたり」枕「冬はつつじ・かいねりがさね」

かい-ねん 〔名〕改年　改まりたること。新年。〔庭訓往來正月「改年吉慶被二任御意一候之條、先以目出度覺候」〕

かい-ねん 〔名〕開年　前條に同じ。新年。〔庚信文「開年寒盡、正月遊春」〕

かい-ねん 〔名〕艾年　〔禮記の曲禮に五十曰艾「年齡五十歲の稱。

がい-ねん 〔名〕概念　〔英 Concept〕〔哲〕同〕種類に屬するあらゆる箇體に共通なる要素を抽き出だし、之を統一・結合したる普汎的の表象。

がいねん-てき-くわがく 〔名〕概念的科學　〔英 Conceptual science〕客觀的事實には毫も關係することなく、全く主觀の造り出だせる概念を基とし、之より演繹・推理することのみを主とする學問。數理學の類。〔對象的科學の對〕

がいねん-ろん 〔名〕概念論　〔英 Conceptualism〕〔哲〕普遍と箇體との關係に關する哲學說。普遍は實在なれども、箇體を離れて存在するものにあらずして、箇體の內に存す。而して箇體の外に在りては、そは唯概念として存在するのみとする說。卽ち、名目論と實念論とを綜合・折衷したるもの。

かい-の-くち 〔名〕開口　通口　船にて、舳・艫の左右にある出入口。

かい-のごふ 〔名〕掻拭　〔他動四〕のごふ(拭)に同じ。枕「かいのごひたるやうに、やめ奉りしかば」

かい-の-し 〔名〕戒師　出家する人に戒を授くる師。戒師。源下「御戒の師、いむ事のすぐれたるよし佛に申すにも榮華玉「御戒の師も、やがてこの僧都ぞつかうまつり給ひける」

かいは 〔名〕海波　海上にたつ波。〔蘇軾詩「道子實雄筆、時如二海波翻一」〕

かい-は 〔名〕海馬　〔動〕一たつのおとしごの異名。二じゅこん(儒艮)の異名。

かい-はい 〔名〕改廢　改むることと廢すること。

かいば-いか 〔名〕柏烏賊　鳥賊の肉に山椒味噌を包みて蒸したるもの。

かい-はう 〔名〕海堡　海上に築造せる砲臺。

かい-はう 〔名〕開方　〔數〕かいはふ(開法)に同じ。

かい-はう 〔名〕介抱　一たすけいだくこと。世話すること。保護すること。冥途飛脚「後家妙閑の介抱故、商ひ功者」二病人などを看護すること。看病。大鑑狂言止動「夫れへ參って、御介抱申したうは御座れども」

かい-はう 〔名〕開放　一あけ放すこと。二禁制を解きて、交通の自由を許すこと。三次條に同じ。書經「開二放無非之人一」

かい-はう 〔名〕解放　解き放すこと。捕縛また監禁せられたるものを赦し放つこと。朱子語類「將二馬箭刀刃之屬一盡投二于井一馬亦解放。但自乘二一馬一而去」

かい-ばう 〔名〕海防　海岸の防備。

かいばう-かん 〔名〕海防艦　主として自國海岸の防備及び敵國海岸の攻擊に供せらるる軍艦。速力及び石炭の積載量大ならず、且つ喫水淺く建造せらるるもの。海岸防禦艦と海岸攻擊艦とに分かつ。各條を見よ。

かいばう-しふ 〔名〕開放市邑　〔英 Open defended town〕敵の侵入を防禦する準備なき市邑。

かいはう-にんじん 〔名〕〔植〕あしたば(蘯草)の異名。

かいばう-ひ 〔名〕海防費　海防の設備に要する費用。

かい-はく 〔名〕掃帚　〔他動四〕はく(掃)に同じ。掃除す。源蜻蛉「つややかにかいはきなどする人もなし、腦はつもれども」

がい-はく 〔名〕該博　〔がい(該)は兼ぬ〕學問などに、廣く通ずること。廣くゆき渉ること。博覽。博識。搜神記「經書醇二不二該博一」宣和書譜「羊欣該二博經史一、尤長二於隸書一」

かいばけ 〔名〕海馬牙　海馬の牙。〔代〕細工物にて象牙の代用品とす。

かい-はさむ 〔他動四〕掻挾　一はさむ(挾)に同じ。崇峻紀「弛二弓挾一矢」敗、向二山走去一」宇治拾遺「子をば、死にたれども脇にかいはさみて」二古語。せめぐ(問)に同じ。名義抄「問ヒ問ヒ問ヒ

設く。海兵團條例「海兵團」

かいへいはふ 〔開平法〕（名）【數】或る數又は代數式の平方根を求むる算法。

かい-へう 〔界標〕（名）土地又は水面の疆界を標示すべき物。民法第二百三十四條の設置及び保存の費用」

かい-へう 〔海豹〕（名）【動】あざらし（海豹）の異名。

かい-へう 〔開票〕投票函を開き、投票の結果を點檢すること。衆議院議員選擧法第六十「開票及開票所」

かい-べう 〔海錨〕（名）船舶の航海中、暴風・激浪に遭ひて進退を失し、暫く其の位置に漂泊し居らんとする時、錨の作用をなさしむる裝置。材木を組み、帆布を張り、索を附け、船首に繫ぎて海中に沈めしむ。

かいへうき 〔解俵機〕（名）ばうせききかい（紡績機械）を見よ。

かいへうく 〔開票區〕（名）一開票所を設くべき土地の區域。衆議院議員選擧法第五十「開票所は郡市の區域に依る」

かいへうくわんりしゃ 〔開票管理者〕（名）開票に關する事務を指揮・管理する人。衆議院議員選擧法第五十「郡市長は開票管理者となり開票に關する事務を擔任す」

かいへうじょ 〔開票所〕（名）開票を行ふべき場所。衆議院議員選擧法第五十一條「開票所は中略開票管理者の指定したる場所に之を設く」

かいへうたちあひにん 〔開票立會人〕（名）開票に立ち會ひ、其の監視をなす人。衆議院議員選擧法第五十一條「地方長官は中略開票立會人を選任し開票に立會はしむべし」

かいへうろく 〔開票錄〕（名）開票に關する一切の顚末を記載せる記錄。衆議院議員選擧法第六十「開票管理者は開票錄を作り開票に關する顚末を記載し」

かい-へき 〔海壁〕（名）海岸の水際に築く石垣など。波よけ。

かい-へん 〔海邊〕（名）うみのほとり。うみべ。謠曲「ここは海邊にても無きに、汐汲みとは誤りたるか廚殿」菅書夏侯「或至海邊拘鯨蜺以資養」李紳詩「海邊佳樹生奇彩、知是仙山取得栽」

かい-ほう 〔改封〕諸侯の領地をかふること。くにがへ。左傳昔「申始封亦在周興之初、宣王時、申伯以王舅改封于謝」

かい-ほう 〔解剖〕一病原等を探究するため、動物の身體全部又は一局部を解き剖きて、骨・筋・臟・腑等の狀態を調ぶること。ふわけ（腑分）。二事物の條理を細密に分解すること。「文法上の解剖」

かいほう-がく 〔解剖學〕（名）醫學の一部分。解剖につきての學問。

かいほう-じゅつ 〔解剖術〕（名）解剖に關する技術。

かい-ほす 〔掻乾〕（他動サ）水を汲み盡くして涸らす。

かい-ほそる 〔掻細〕（自動サ）ほそる（細）に同じ。源少女「出で給ひぬるやうにて、しのびて人に物のたまふとて立ち給へりけるを、やをらかいほそりて出で給ふ道に」

かい-ほつ 〔開發〕新たに地を開き發（ホツ）して、田畠などとなすこと。開墾。東鑑四、元暦元年八月廿三「當庄根本者、開發領主散位俊成」庭訓往來三月「布可開作之地者、招居農人（令）開發之」

かい-ほぶ 〔戒法〕（名）佛語。佛教にて制定したる律法。即ち、五戒・十戒等の稱。浮世子「三歸五品・戒法兩科」池又は堀などの水をせきて、汲み乾すこと。

かい-ほり 〔掻堀〕（名）佛法にて、布薩戒を授くる僧の稱。續紀廿、天平寶字元年閏八月「勅曰、如聞、護持佛法、無尙木叉、勸導戶羅、實在施禮、是以、官大寺別永置戒本師田十町、自今已後、每爲布薩、恆以此物、量用布施、庶使怠慢之徒日厲其志、精勤之士彌進、其行宜告僧綱知朕意焉」

かい-ほし 〔戒本師〕（名）佛法にて、布薩戒を授くる僧の稱。續紀廿、天平寶字元年閏八月「勅曰、如聞、護持佛法、無尙木叉、勸導戶羅、實在施禮、是以、官大寺別永置戒本師田十町、自今已後、每爲布薩、恆以此物、量用布施、庶使怠慢之徒日厲其志、精勤之士彌進、其行宜告僧綱知朕意焉」

かいほし-でん 〔戒本師田〕（名）ふさつかいほんでん（布薩戒本田）に同じ。前條を見よ。

かい-まき 〔掻卷〕（名）薄絹を入れたる小さき夜著。よぎ。

かい-まく 〔掻卷〕（他動カ）まく（卷）に同じ。かいまきて、滿れたる方を上にして持ちて參りぬ」同「ま男の裸なるを、むしろにかいまいて」

かい-まくる 〔掻捲〕（他動カ）まくり揭ぐ。まくる。枕「直衣・うへのきぬ・狩衣も、袖かいまくり、よろづさし入れ、帶つよく結ぶにくし」

かい-まさぐる 〔掻弄〕（他動カ）まさぐる（弄）に同じ。手に弄ぶ。枕「さう東したるずず、かいまさぐり、手まさぐりにし」

かい-まどふ 〔掻惑〕（自動ハ）まどふ（惑）に同じ。さまよふ。宇治拾遺「曉ごとに地藏見奉らんとて、ひとよかい（一世界を）まどひありくに」

かい-まはる 〔掻廻〕（自動ラ）まはる（廻）に同じ。めぐる。著聞「御車中略辻をかいまはりける所を、牛殊によく引きたりければ」

かい-みー 〔垣間見〕（名）かいまみること。のぞき見ること。かいばみ。神代紀上「知天孫親其私屏（カイマミルヤツコ）」宇津保中篇「西の對におはせし時、かいまみをなんしたりしかば」枕「屏風もおし明けつれば、かいまみの人、隱れ蓑取られたるこちして」

かいみ-みる 〔垣間見〕（他動ハ）一（かきまみるの音便）物の透間より、竊かにのぞき見る。かいまむ。竹取「閤の夜に出でても、穴をくじり、ここかしこよりのぞきかいまみ、まどひあへり」勢語「此の男かいまみてけり」

かい-むー 〔垣間見〕（他動ハ）前條の轉。大和物語「さてかいまめば、われにはよくて見えしかど」更科日記「たちぎきかいまむ人のけはひして」

かい-みづをけ 〔掻手桶〕（名）かたてをけ（片手桶）をいふ、越前國の方言。物類稱呼一受戒に由りて得たる名。義經記七、判官北國落「もとより法師なれば、御邊たちはかいみずうせずとも苦しかるまじ」二死者に附くる名。大原問答「青葉笛」「戒名を附け、過去帳に寫し、回向して得させん」

かい-みゃう 〔改名〕かいめい改名に同じ。名目抄「改名（カイミヤウ）」拾芥抄中末「改名所所部」

かい-む 〔海霧〕（名）海上にたつきり。沉約詩「分空臨海霧、披遠望滄流」李白詩「陣解星芒盡、晉空海霧消」

かい-むー 〔皆無〕一つもなきこと。皆になること。二殘らず。みな。悉く。

かい-むー-しょ 〔海務署〕（名）海事局管轄區域內、須要の地に置き、海事局の事務を分掌せしむる所。海事局官制第九條「海務署」

かい-むる 〔掻群〕（自動ラ）むる（群）に同じ。うちむる。落葉「同じやうにさうぞきつつ、かいむれかいむれて出できて」

かい-めい 〔改名〕（名）【動】さかたさめ（聖頭鯨）の異名。本草啓蒙「聖頭鮪（カイ）」名を改むること。改めて名をつくること。かいみやう。保元（正安本）「忠員と改名せられけり」白居易詩「山逕移色、江隨地改名」

かい-めい 〔解明〕ときあかすこと。

かい-めい 〔開明〕人智進歩して文物の開けたること。文明開化。

かい-めい 〔晦冥〕くらやみなること。暗黑。史記「晦冥無畫見、風雨晦冥」漢書「是時、雷電晦冥」

かいめつ-ぜんそん 〔皆滅全損〕（英Absolute total loss）（名）【商】海上保險の目的たる船體・貨物等が、海蝕により全く滅失したること。

かい-めん 〔海面〕（名）海のおもて。うみづら。海上。鮑溶詩「東方昇空海面平」曾齊己詩「海面雲生白、天涯墮晚光」

かい-めん 〔海綿〕（名）【動】海綿動物の、沐浴海綿の骨格のみとなりたるもの。うみわた。

かいめん-き 〔開綿機〕（名）紡績機械の名。綿の纖維を整齊して捲綿を作るに用ふるもの。

かいめん-しつ 〔海綿質〕（名）骨の內部を構成する質。粗鬆の小骨片網狀に組織す。

かいめんじゃう-はくきん 〔海綿狀白金〕（名）【化】白金鹽化水素酸又は其のあんもにうむ鹽を熱するとき成生するもの。黑色海綿狀にして、硫酸製造の觸媒として用ひらる。白金黑。

かいめん-どうぶつ 〔海綿動物〕（名）【動】動物界の下級に屬するもの。體形に圓筒形・壺形・樹枝形等あり。一端に吐水孔、其の側壁には數多の吸水孔を有し、又所所に鞭毛室あり、これにより水中の小動物、又は腐敗せる有機質を捕食す。その層は外・中・內の三層より成立し、中層に種種の骨格を含む。骨格には、石灰質・硅石質・角質等の別あり。これにより石灰海綿・針骨海綿・玻璃海綿・硅角海綿・角質海綿等に分類す。

かい-もく 〔皆目〕（副）全く。殘らず。皆式。一切。膝栗毛「わしらにやあ、はい、かいもくに知れ申さぬ」

かい-もたせ 〔櫂架〕（名）船具。河船の舵（ヂ）の小名。

かい-もち 〔掻餅〕（名）一かいもちひ（掻餅）に同じ。節用「掻餅（カイ）」類聚往來「其羹名者付煎點中略夾食（カイ）」正章千句「新發意をそそのかしぬるうき藏主、煖め酒も過どすかいもち」二そばねり（蕎麥煉）をいふ、山形地方の方言。物類稱呼

かい-もち-がき 〔掻餅〕（名）【動】みづすまし（鼓蟲）の異名。

かい-もちひ 〔掻餅〕（名）「掻煉（カイ）」の餅の義）飯の餅。ぼたもち。かいもち。宇治拾遺「僧たちよひのつれづれに、いざ、かいもちひせんといひけるを」徒然草「一獸にうちあはび、二獸にえび、三獸にかいもちひにてやみぬ」

かい-もつれる 〔掻縺〕（自動下）もつる（縺）に同じ。からまる。狂言「懸風が來ては袂にかいもつれての、袖のおもさよ」

かい-もと 〔垣下〕（名）ゑんが（垣下）に同じ。

かい-もと-あるじ 〔垣下饗〕（名）垣下（ゑんが）の座に就きて饗應を受くること。源少女「おほしかいもとあるじ、甚だひざうに侍りたうぶ」

かい-もとれる 〔掻縺〕（自動下）かいもつれる（掻縺）の訛り。狂言「懸風が來ては袂にかいもとれて、なう、おう、袖のおんもさよ」

かい-もん 〔戒文〕（名）佛教の戒律を記したる條文。

かい-もん 〔海門〕（名）かいけふ（海峽）に同じ。せと。舊唐書「以舟師五千人、由海門、揚威武、至申浦而還」李昌齡詩「霜天起長望、殘月生海門」

かい-もん 〔開門〕門を開くこと。代始和抄「則ち開門を仰すれば、關司座に著く」後漢書「異等開門、奉牛酒迎」張說詩「剖竹守窮邊、開門對奇域」

かい-やう 〔海洋〕（名）廣き海。大海。

かいやう-がく 〔海洋學〕（名）海洋の生因・變化・現象・性質等を研究する學。

かいやう-てき-さこう 〔海洋的氣候〕（名）【地】海岸又は島地の氣候。即ち、雨量多く、寒暑の差少なき氣候。これ、水面は熱を得ることも又失ふことも緩にして、溫度の昇降甚しからざればなり。

かい-やく 〔解約〕一契約を解除すること。二取引所市場にて取り組みたる賣買を、其の受け渡し期日前に、當事者雙方合意の上、取引所に屆け出でて解除すること。

がい-やくば 〔街役場〕（名）街長が、其の事務を取り扱ふ所。重罪輕罪控訴豫納金規則第三、其廳又は支廳又は街庄社役場法院所在地より三里以外に在るとき」

かいやく-わりもどし-ほけんれう 〔解約割戾保險料〕（名）【商】保險會社が、契約期間の終了前、被保險人より解約の申込みを受けたるとき、其の拂込金の年數に應じて、被保險人に返還する金額。

かい-やざま 〔掻矢閂〕（名）「かいは垣の音便」我が方を敵に見透かされぬ爲めに墻を作りて、それに小さき穴を穿ち、其の穴より敵を射るやうにしたるもの。

かい-やる 〔掻遣〕（他動ハ）一かきやる（掻遣）の音便。源若紫「いはけなくかいやりたる額つき・かんざし、いみじう美し」二やる。狂言「をがせを酒手の賃にかいやり」

かい-よ 〔海芋〕（名）【植】みづばせう（觀音蓮）の異名。

かい-よう 〔海容〕海の物を容るるが如く、度量の寬大なること。

かい-よう 〔解傭〕やとひをとくこと。解雇。明治十年三月布告第二十七號「外國人を雇入候節は中略繼傭解傭共其時時外務省へ通知すべし」

かいよう-せきけん 〔海用石鹼〕（名）海水に用ひてよく溶解する石鹼。

かい-らい 〔芥癩〕（名）らいびやう（癩病）に同じ。法華經品「水腫乾瘠、疥癩癰疽」

かい-らう 〔海老〕（名）【動】えび（蝦）に同じ。海道記「かいらうは浪に泳ぎ、愚老は汀に漂ふ。共に老いて腰かがまる」

かい-らう 〔偕老〕夫婦、年老ゆるまで睦まじくつれそふこと。夫婦閨の睦まじきこと。本朝文粹「偕呼爲女郎、閨名戲欲契偕老、恐惡衰翁首似霜」盛衰記十五「譬ひ偕老の幸なりとも、あだにはかなき世の中は、兔も斯くてもありぬべし」詩經國風「死生契闊、與子成說、執子之手、與子偕老」

かい-らう 〔開朗〕廣く開け渡ること。拾遺「船從口入、初極狹、行數十步、豁然開朗」

かいらう-どうけつ 〔偕老同穴〕（名）一生きては偕老に老い、死しては穴を同じくして葬らるる義」夫婦の契りの變はらぬこと。保元法皇「偕老同穴の御契り淺からざりし法皇も」二動海綿動物、玻璃海綿の一種。形狀長き圓筒形の籠狀をなし、生時淡銀紅色を呈して甚だ美なり。中に多く雌雄一對の小蝦を共住せしむ。これ幼時に入りたるものが、成長後肥大となりて出づる能はざるが爲めなり。骨骼は凡べて硅石質。本邦、相模及び駿河の外洋百尋乃至數百尋の海底に產す。どうけつかいめん。

かいらう-びと 〔海老尾〕（名）えびを（蝦尾）に同じ。

かいらぎ 梅華皮 鰾（名）一硬き粒狀凸起ある鮫類の皮。刀劍の鞘・柄を卷き、又は裝飾に用ふ。さめかは。貞治六年「記四十七中「鰾御會記」「かいらぎの金作りの太刀」二かいらぎづくりの刀。賀古教信七墓廻「此方の家に置いて來た、かいらぎ欲しい鑢欲しい」

かいらぎ-さめ （名）【動】さかたざめ（犂頭鮫）の異名。

かいらぎ-づくり 梅華皮作（名）刀の鞘を梅華皮（かいらぎ）にて包みたるもの。津國女夫池「かいらぎづくりのなが刀」

かいらく 偕樂（名）衆人と偕（ともに）樂しむこと。孟子「梁惠王上」「古之人與民偕樂、故能樂也」

かい-らく 〔開落〕花のひらくことと散り落つることと。劉詠「南枝北枝之梅、開落已異」徐賓詩「光陰蘇太促、開落一何頻」陳子良文「山花開落、隴月盈虧」

かいらけ （名）かいらぎ（梅華皮）の訛り。

かい-らぶ 〔戒鼎〕（名）ほふらふ（法蔔に同じ。

かい-らん 〔解纜〕泊まりたる船の、纜（ともづな）を解きて出帆すること。江淹詩「解纜候前侶、還望方鑾陶」劉孝綽詩「岸廻知舳轉、解纜覺船浮」

かいり 〔海狸〕（名）【動】哺乳動物、齧齒類の一種。體の長さ二尺餘。尾は稍扁平にて、大部分は鱗を被る。後肢に蹼を有し、前肢と共によく水中の游泳を助く。常に河湖の邊に生息し、巧みに樹枝を組み合はせて巢を作る。樹皮及び木質を食す。體より芳香を有する膠質を出だし、皮毛は特に貴重なり。北歐洲及び北米に產す。

かい-り 〔海里〕（名）【數】就海里程の單位。英國にては六千八十呎、米國にては六千八十六呎を一海里とす。我が國にては十六町九七五即ち約十七町。浬。

かい-り 〔解離〕一解け離るること。解きはなすこと。二化物質が狀況の變化によりて其の成分に分かるるも、狀況を復するときは再び舊物質を成生する分解。鹽化あんもにうむ・を熱すればあんもにあ・と鹽化水素とに分解し、冷ゆれば再び鹽化あんもにうむ・となる類。

かい-りう 〔海流〕（名）【地】海中にて、河流の如く常に一定の方向に流るるもの。風が常に一定の方向に吹くとき、海洋表面の水の、之に伴はれて流動するにより起こる。赤道地方より極地へ向かふものを赤道流といひ、極地より赤道地方へ向かふものを極流といふ。洋流。

かいりき 戒力（名）かいりよく（戒力）に同じ。諸運本「此の身は逢ふとも、戒力（かいりき）に引かれば、などか佛道ならざらん」

かい-りく 〔海陸〕（名）うみとをかと。水陸。洛陽伽藍記「海陳珍產方丈于前」李尤文「涯浦零中以窮海陸」

かいりく-ぐん 〔海陸軍〕（名）海軍と陸軍と。陸海軍。

かいりく-ぐんじん 〔海陸軍人〕（名）海軍軍人と陸軍軍人と。じんれば條約の原則を海職に應用する條約第八「艦船內に在る海陸軍人の傷者病者」

かいりく-れんらく-ぼうえき 〔海陸聯絡貿易〕（名）貨物が、港灣の媒介により、海上の運輸と陸上の運輸と連絡運送せられて貿易せらるること。

かいりつ 〔戒律〕（名）佛語。佛の示されたる戒と律と。榮華「此の方を立つる人人は、いとど戒律を守りて」翻譯名義集「以魏嘉平至離陽立羯磨受法、中夏戒律始也」南史「博涉群書、專精釋典、僧有違戒律者、集衆佛前、作羯磨而笞之」陳師道詩「功名逸壯志、戒律負前身」

かいりつ 〔介立〕一他を恃まずして、已れ一人の力にて事をなすこと。たすけなきこと。ひとりだち。後漢書「恢性廉直介立、行不合己者、雖貴不與交」張衡文「何孤行之煢煢兮、子不群而介立」二中間に立つこと。物と物との間にはさまること。

かいりつ-しゅう 〔戒律宗〕（名）佛教の宗派の一、佛の戒律を實踐躬行することを宗とするもの。律宗。

かいりど 〔解離度〕（名）【化】溶液中に入りたる溶質の解離する度あひ。溶けたる溶質の全量の解離せる量に對する比を以て之を表はす。

かいりぶ 〔開立〕（名）【數】或る數又は代數式の立方根を求むること。

かいりふ くく 開立九九（數）基數を三乘せるものにして、開立法に用ひらるる九九。

かいりふ 〔介立〕かいりつ（介立）に同じ。

かいりふ-はふ 〔開立法〕（名）【數】或る數又は代數式の立方根を求むる算法。

かい-りやう 〔海量〕（名）海の如く、大なる度量。

かい-りやう 〔改良〕從來の缺點を改めて良くすること。改善。

かい-りやう-しゅ 〔改良種〕（名）改良を加へて新たに出來たる品種。

かいりやう-ばんし 〔改良半紙〕（名）かうぞ又みつまたの皮をさらして漉きたる紙。その色最も白く、質密にして滑かなり。

かいりやう-ひ 〔改良費〕（名）いうえきひ（有益費）に同じ。

かいりやう-ふく 〔改良服〕（名）從來の衣服に改良を加へたるもの。

がい-りやく 〔概略〕おほよそ。あらまし。たいがい。

かいりやう-わう 〔海龍王〕（名）りゆうじん（龍神）に同じ。源氏「かいりゆうわうの后になるべきいつき娘なり」

かい-りよく 〔戒力〕（名）戒律を守りたる力。かいりき。大鏡「前生の戒力に、國王の位を捨てて給へる功德」十訓「前生の戒力少なくして、畜生と生まれたれども」

かい-りん 〔介鱗〕（名）甲殼とうろこと。又、龜・蟹の類と魚類と。淮南子「介鱗生鮫龍、蛟龍生鯉鯉」

かいる （名）【動】かへる（蛙）の訛り。狂言枕「青き鬼とは得ならずとも、青きかいるともならばや」

かい-れき 〔改暦〕一暦法を改むること。明治五年十一月布告第三十七號「今般改暦之儀別紙詔書の通被仰出候條依旨相達候事」史記「漢改」暦、以正月爲歲首」二かいねん（改年）に同じ。「改暦之御慶目出度申し納め候」

かいれつ 〔開裂〕れっかい（裂開）に同じ。

かいろ （名）鹿の啼く聲。五十年忌歌念佛「我れは秋鹿つまを戀ひ、かいろとなくと知らせたや」

かいろ （名）【動】かへる（蛙）の訛り。

かいろ 〔海路〕（名）ふなぢ。うみぢ。航路（陸路の對）無名祕抄「海路を隔つる戀といふ題に」五代史「鄧始由海路入貢京師」李白詩「歸飛海路遠、獨宿天霜寒」

かいろ 〔薤露〕（名）古へ支那にて、柩を挽く時うたひし歌。搜神記「挽歌辭有薤露蒿里二章、漢田橫門人作橫自殺門人傷之悲歌、言人如薤上露易晞滅」後漢書「繼以薤露之歌、坐中聞者皆爲掩涕」

かいろ 〔海鱸〕（名）【動】あしか（葦鹿）の異名。

がいろ 〔街路〕（名）市街の道路。街道。白居易詩「街路雖長君不憂」

かいろく 〔海陸〕（名）ろくは陸の字の異音）かいりく（海陸）に同じ。諸問布「海陸（かいろく）の隔てなかりしに」

がいろ-ぢゃ 〔街路園〕（名）街路の交叉點などに、樹木を植ゑ泉石等を設けて、美觀を添へたる所。

がいろん 概論（名）概括して述べたる論說。

かい-わい 〔界隈〕（名）ほとり。あたり。近所。炭俵集「此のかいわいの小鳥みな寄る」

かい-わう-せい 〔海王星〕（名）【天】星の名。太陽系の中にて、最も外界にある惑星。太陽よりの平均距離凡そ十一億一千七百萬里。

かい-わがぬ 〔搔綰（他動）〕わがぬ（綰）に同じ。大和物語「いとかうばしき紙に、きれなる髮を少しかいわがねて包みたり」

かい-わぐむ 〔搔綰（他動）〕わぐむ（綰）に同じ。わがぬ。宇津保「頭中將の朝臣は、したのはかまを著て、みなかいわぐみて」

かい-わじゃう 〔戒和尙〕（名）佛語。戒を授くる僧。

かい-わん 〔海灣〕（名）海の陸地に入り込みたる所。いりうみ。灣。李白詩「漢下玉關道、胡窺青海灣」

かいね 〔階位〕（名）階級と位階と。しなくらゐ。

かい-ね 〔解頤〕おとがひを解きて笑ふこと。あごをはづさんとするほどの大笑ひ。

かい-ぬん 〔海員〕（名）一船長以外の船舶乘組員。船員法第三「海員とは船長以外の一切の乘組員を云ふ」二海技免狀を有する者。即ち、船舶乘組員の總稱。海員懲戒法「海員」

かい-ぬん 〔開院〕（名）「開院の當日」の略。

かいぬん-しき 〔開院式〕（名）一帝國議會開會の儀式。「開會の當日貴衆兩議院の議員を貴族院に集め、天皇親臨し、又は國務大臣を御使として開會の勅語を賜はり、貴族院議長其の勅語書を拜受して式を終はるもの。議院法第五「兩議院成立したる後勅命を以て帝國議會開會の日を定め兩院議員を貴族院に會合せしめ開院式を行ふべし」二院の名稱ある公私の團體・機關・營造物等の事務又は業務を開始する儀式。

かいぬん-しけん 〔海員試驗〕（名）せんばくしょくゐんしけん（船舶職員試驗）に同じ。明治二十九年四月法律第六十八號船舶職員法第六「左に記載する事項に該當する者は海員試驗を受くることを得ず」

かいぬん-しんぱんじょ 〔海員審判所〕（名）海技免狀を有する者の懲戒事件を審判する所。地方海員審判所と高等海員審判所とに分かつ。各條を見よ。海員懲戒法「海員審判所」

かいぬん-ちょうかい 〔海員懲戒〕（名）一海技免狀を有する者が、其の職務を行ふにあたり、海員懲戒法に定めたる非行・過失あるとき、海員審判所の裁決を經て加ふる懲戒。免狀行使の禁止、免狀行使の停止（三年以下）及び譴責の三種とす。海員懲戒法「海員懲戒」二海員が、上長に對して尊敬・從順の道を失ひ、又は其の職務を怠り、其の他、船中の秩序に反する行爲をなしたるときに、船長の加ふる懲戒。監禁・上陸禁止・加役・減給の四種に分かつ。各條を見よ。

かいぬん-めいぼ 〔海員名簿〕（名）一船長が、其の船中に備へ附くることを要する書類の一。海員（船長を除く）の氏名・船員手帳の番號・職務・雇入期間・給料等を記載するもの。海員法第二十「海員名簿」二明治三十八年三月以前の海技免狀原簿の稱。船舶職員法附則「此の法律施行前海員名簿に登錄せられたる者は海技免狀原簿に登錄せられたる者と看做す」

かい-をる 〔搔折（自動）〕道路など、折れ曲がる。かいたをる。著聞「偸りに走りける程に、二條油の小路を南へ（かいをりける時、築地の角に走りあたりて」

かいをれ-くぎ 〔搔折釘（名）〕頭部少しく折れて鉤の狀をなせる、長さ三寸乃至一尺程の大釘。

かい-をん 〔海溫〕（名）海水の溫度。

かいをん-けい 〔海溫計〕（名）海水の溫度を計る器。

かう （名）鳥の啼き聲。枕「鳥のいと近くかうと鳴くに、打ち見あげたれば、ひるになりたる、いとあさまし」續詞花「逢ふことはかた劣りする山鳥、今はかうとぞれは泣かれける」

かう （名）かみ（長官）の音便。「かうの君」「かうの殿」

かう にまる 他人の惑を借りて人を侮る。笠にきる。大磯虎稚物語「御使をかうに著て、慮外をする事、侍の法なるか」傾城反魂香「その山三めをかうにきて、のさばりまはる四郎二郎」

かう （名）博奕の語。大織冠「よみとかうとに、屋財・家財負けほほけ」

かう 〔香（名）〕一か。かをり。にほひ。二沈香・伽羅・栴檀などの材の、薰きて香ひあるもの。又、種種の香料を煉り合はせて作りたるもの。たきもの（薰物）。ねりかう（煉香）。宇津保「俊蔭上」「さまざまのかうどもの、かにしみたる風吹くたびごとに、かうばしきめであやしむ」枕「心ときめきする」「かしら洗ひ、けさうじて、かうにしみたるきぬ著たる」三かうあはせ（香合）又、かうだら（香道）の略。四かういろ（香色）の略。枕「かうの薄ものふたあゐのなほし」五織色の名。經は香色、緯は白色にて織る。老人の著用。三條家「六」裏の色目の名。表は濃き香色に裏は紅なるもの。七

みそ(味噌)の異名。見聞雑記 **八**やくみ(薬味)の異名。倭訓栞 **かうのからびつ** 香唐櫃　香を納れる唐櫃。源氏物語 此の人人の、かうのからびつにいれたりけるが」

かう 〔孝〕(名) 善く父母に事ふること。孝行。(不孝の対) 枕草子「孝ある人の子」 書経君陳「惟孝、友于兄弟、克施有政」 爾雅「善事父母、爲孝」 **(諺)孝は百行の本** 孝行は諸の善行の甚。白虎通「孝道之美、百行之本也」

かう 〔考〕(名) 一かんがふること。源氏冷泉節「流石の法眼手も震ひ、浮・中・沈の三考も中品右に有るやら、左やら」 二古へ官吏の、執務の成績、及び操行・才能の如何を調査して、其の優劣を考へ定むること。又、その考へ定めたる優劣の等級。かうくわ(考課)を見よ。考課令「凡官人景迹功過、應附考者、皆須實錄」 同「加一分」國郡守、各進考一等」 三父を其の死後より稱する語。亡父。先考(此の対) 易経上経「幹父之蠱、意承考也」 爾雅「父爲考、母爲妣」

かう 〔講〕(名) 一かう(講)ずること。 二こう(講)に同じ。 神佛の信者などの組合。

かう 〔行〕(名) ゆくこと。たびゝ。旅立。出立。六帖 狂言入間「千里の行も一歩より起こると」 宋史琴道「寶坐既興、鳳輿戒行」

かう 〔効〕(名) しるし。きき。効能。「藥のかう」 韓詩外傳「月有成、而歲有効也」

かう 〔亢〕(名) 二十八宿の一。此の星に當たる日は服藥・種蒔等に吉なりといふ。あみぼし。

かう 〔爻〕(名) 易の卦の一畫。其の最下位にあるを初爻といひ、其れより次第に上へ二爻・三爻・四爻・五爻と呼び、第六位即ち最上位にある上爻といふ。けは(卦)を見よ。易經繫辭「爻者言乎變者也」

かう 〔交〕(名) あはひ。あひだ。「三四月の交」

かう 〔郊〕(名) 町はづれの野。市外。禮記王制「大學在郊」

かう 〔校〕(名) 一がくかう(學校)の略。「わが校、卒業の式を行ふ」 二かうせい(校正)の略。

かう 〔幸〕(名) さいはひ。しあはせ。幸福。(不幸の対)「幸か不幸か」

かう 〔項〕(名) 一法律・文章などの箇條。 二(算)算表の一區分。即ち、歳内の小區分。會計法第六「歳入歳出の總豫算は之を經常臨時の二部に大別し各部に於て之を款項に區分すべし」 三(數)代數式に於いて、加減の符號が+なれば之を正項(プラス)、−なれば之を負項(マイナス)と云ふ。

かう 〔稿〕(名) さうかう(草稿)に同じ。したがき。「稿を改むること數回」 唐書高士廉「士廉有奏議輒焚稿」

かう 〔更〕(名) 一夜を五つに分かたる稱。戌の時を初更、亥の時を二更、子の時を三更、丑の時を四更、寅の時を五更とす。とき(時)を見よ。杜荀鶴詩「一更更盡到三更」 **かうたく** 更闌　夜ふく。諸水經「更闌けて夜靜かに」

かう 〔硬〕(名) かたきこと。強く剛きこと。(軟(ナン)の対)

かう 〔膏〕(名) 一動物より取りたる油。「かうを燒いて日につぐ」 二かうやく(膏藥)に同じ。

かう 〔巧〕(名) たくみなること。(拙の対) 黄庭堅文集「弄巧成拙、爲蛇添足」

かう 〔衡〕(名) 目方を量る標準。貫を基本とす。

かう 〔庚〕(名) 一十干の一。かのえ。 二よはひ。年齢。癸辛雑識「張神鑒晉而隸、每談一命、則旁引同庚者數十、皆歷歷可聽」

かう 〔綱〕(名) 一つな。おほづな。大づくり。綱領。「綱擧がり目張る」 二生物分類上の名稱。脊椎動物中、哺乳類の綱を設け、なほ其の下に目を置く類。

かう 〔梗〕(名) 【植】くわかう(花梗)に同じ。

かう 〔夏雨〕(名) 夏ふる雨。説苑「吾不能以夏雨雨人、吾窮必矣」 梁簡文帝文「含生欣欣、若和氣逢夏雨」

かう 〔河盂〕(名) 河の流れに沿ふ陸地。流域。

かう 〔耕〕 たがへすこと。耕作。

かう 〔降〕 降參すること。降服。平治六波羅「必ず高祖の臣となり、敢へて以て楚に降することなかれ」 著聞集「村人おほゐ子に、降を乞ひて」

かう 〔斯〕(副) かく(斯)の音便。雄略紀「東西(カウヤウマウ)」 竹取「此の人人の、年月を經て、かうのみいましつゝ、のたまふことを思ひ定めて」

かう 〔皎〕(副) 白く見えわたるさまにいふ語。「皎として月星の如し」 詩經月出「月出皎兮、佼人僚兮」 飲中八仙歌「皎如玉樹臨風前」

がう 〔號〕(名) 一名。となへ。名目。名稱。春秋莊荆始改、號曰楚」 二名、又は字(アザナ)の外に設くる稱。後村題跋「上用圓角印、其文爲墨釋、豈摩詰別號耶」 三物の順序を追ひて附する標記。番。「雑誌第七號」「六號活字」「號を改めて記さん」 回船などの稱呼に用ふる語。

がう 〔剛〕(名) つよきこと。たけきこと。「柔よく剛を制す」 平治北面「大力の剛の人なれば」 易經上経「柔來而文剛、剛故亨」 論語陽貨「好剛不好學、其蔽也狂」 後漢書馮衍傳「變性剛、有高義」

がう 〔毫〕(名) 一け(毛)。淮南子「深閎廣大不可爲大、析毫剖芒不可爲内」 二ふで(筆)。杜甫詩「朝罷香烟携滿袖、詩成珠玉在揮毫」 三秤目、又は尺度などにて、一盞の十分の一の稱。まう(毛)。

がう 〔壕〕(名) ほり。みぞ。濠を穿つ」

がうあく 〔強惡〕 甚しく惡しきこと。猛惡。兇惡。

がうあつ 〔高壓〕 一強力にて壓すること。強き壓力。 二(理)電壓の大なること。法令上にては直流六百ヴォルトと以上、交流三百ヴォルトより三千五百ヴォルトと迄の電壓をいひ、夫れ以上を特別高壓といふ。高壓の電流は極めて危險にして、人畜之に觸るれば忽ち斃る。電氣事業取締規則第五「高壓と稱するは低壓の制限を超過して」

かうあつしゅだん 〔高壓手段〕(名) 壓制を加へて行ふ手段。

かうあつでんき 〔高壓電氣〕(名) 低壓の制限を超過し、三千五百ヴォルトを超過せざる電壓を有する電氣。

かうあつぶ 〔高壓部〕(名) 高氣壓の部分。

かうあはせ 〔香合〕(名) 種種の香料を薫き、其の香をかぎて優劣を評し、又は其の香の名の適否を判じて勝負を定むる遊戯。人を左右兩方に分かつこと、即ち、五月雨日記「香合せといふこと、古へより傳へて、代代の君もすて給はず」

かうあん 〔考按〕(名) かんがへ。くふう。

かうあんぐわ 〔考按畫〕(名) いしやうぐわ(意匠畫)に同じ。

かうい 〔更衣〕(名) 一ころもがへ。夫木「更衣」 二古昔、後宮に奉仕して、天皇の御ころもがへの事を司る女官。後、天皇の御寵に奉仕するに至り、女御の下に位す。宇津保俊蔭「后の宮よりはじめ奉りて、多くの女御・更衣まうのぼり給へるにも」 源氏帚木「女御・更衣あまたさぶらひける中に」

かういい 〔高意〕(名) たかくすぐれたるこころ。孟郊詩「高意合天制、自然狀無窮」

かうい 〔好意〕(名) 深切なる心。蘇軾詩「歸來還受一大錢、好意莫違黄髮叟」

かうい 〔降意〕(名) 降參する意思。

かうい 〔校醫〕(名) がくかうい(學校醫)に同じ。

かうい 〔號衣〕(名) かんばん(看板)に同じ。

かういう 〔交友〕(名) ともだち。朋友。友人。禮記儒行「其交友有如此者」 魏志華佗傳「交帝在東宮、深敬器焉、待以交友之禮」

かういう 〔校友〕(名) 一同じ學校に學べる友。同窓の友。 二學校より、卒業生に對する一の稱呼。

かういう 〔孝友〕(名) 父母に孝行にして、兄弟に友愛なること。書經君陳「惟孝友于兄弟」 詩經小雅「侯誰在矣、張仲孝友」 爾雅釋訓「善父母曰孝、善兄弟曰友」

かういう 〔幸祐〕(名) さいはひ。しあはせ。幸福。庭訓往來八月「四海泰平、一天靜謐事、人人攘災、所所幸祐也」

かういう 〔香油〕(名) かうゆ(香油)に同じ。

かういう 〔交遊〕 まじはること。又、其の人。ともだち。交際。朋友。禮記曲禮「交遊稱其信也」 史記伯夷「朋友交遊、久不相見」

かういう 〔遨遊〕 豪遊　さかんに遊ぶこと。莊子列禦寇「飽食而遨遊、汎若不繫之舟、虛而遨遊者也」

かういうくわい 〔校友會〕(名) 校友の團體、又は其の集會。

かういた 〔格板〕(名) 【建築】格天井(ガウテンジ)の格(コマ)の間にある板。

がういつ 〔豪逸〕 がうはう(豪放)に同じ。豪藩。圖畫寶鑑「宋王元逸工山水、師李成、爲人豪逸、每畫寛大呼奇奇數聲、乃得意筆也」 梅堯臣詩「或多窮苦語、或特事豪逸」

かういばら 〔更衣腹〕(名) 更衣(カウイ)より生まれたること。母の更衣なること。又、その人。源氏若菜上「物はかなき更衣ばらにて物し給ひければ」

かういろ 〔香色〕(名) 薄赤くして黄ばみたる色。香(カウ)。砂石集「驚きて見れば、白御小袖、能の形附きて香色に焦がしてけり」

かういん 〔好音〕(名) かうおん(好音)に同じ。詩經周南「雖將西歸、懷之好音」 杜甫詩「隔葉黄鸝空好音」

がういん 〔郷印〕(名) 古へ郷(ゴウ)の官署にて用ひし印。拾芥抄下末「印寸法中務郷印一寸」

がういん 〔豪飲〕 はげしく酒をのむこと。大酒。金史隱逸「劇談豪飲、傍若無人」 楊載詩「興盡方豪飲、篇終不浪吟」

がういん 〔强淫〕 がうかん(强姦)に同じ。

かうう 〔膏雨〕(名) 〔かう(膏)はうるほひ、滋養の義〕植物などのうるほひになる、好き雨。よきしめり。左傳襄公十九「小國之仰大國、也如苗之仰膏雨也」 唐書儒學「有葉無根、膏雨所不能活也」

かうう 〔香芋〕(名) 【植】なんきんまめ(落花生)の異名。

かうう 〔降雨〕 雨ふること。ふる雨。

かうう 〔豪雨〕(名) つよくふる雨。大雨。

かうう 〔高運〕(名) すぐれてよき運。徒然草「道の冥加なり高運なりなど、ことごとしく記しおかれ侍るなり」

かうう 〔行雲〕(名) 動き行く雲。

かううん りうする 〔行雲流水　行く雲と流るる水と。移りかはりて滯らざるに譬ふ。宋史蘇軾「行雲流水、初無定質」

かううん 〔耕耘〕 たがやし〳〵さぎること。農作。杜甫詩「曠野自耕耘」 李商隱詩「子孫相約事耕耘」

かううん 〔幸運〕 好運　幸ひなる運(ウン)。好き仕合せ。

かううんじ 〔幸運兒〕(名) 幸運なる人。しあはせよき人。

かううんたい 〔行雲體〕(名) 詠歌の名。幽玄體の一。薄雲の月を蔽ひたるさまに、言外に餘情のかすかなること。三五記

かうえ 〔香衣〕(名) 香染(カウ)の僧衣。

かうえい 〔高詠〕 一屠たかくうたふこと。高吟。晉書王羲之「雖不能興言高詠、衛杯引滿、語田里所行、故以爲撫掌之資」 江總詩「獨酌一樽酒、高詠七哀詩」 二調の高き詩歌。又、他人の詩歌の敬稱。王儉文選「仰南風之高詠、餐東野之祕寶」

かうえい 〔幸榮〕 幸福にして榮譽あること。さいはひ。

かうえき 〔交易〕 互ひに品と品とを易へて商なふこと。財貨を交換すること。互市。庭訓往來四月「交易合期、公私潤色、何事如之哉」 易經繫辭「日中爲市、致天下之民、聚天下之貨、交易而退」 ために用ふる船。貿易船。

かうえきぶね 交易船　(名) 交易の

かうえつ 〔校閲〕 しらべけみすること。書籍・文書をしらべ正すこと。檢閲。魏書大宗「校閲守宰貲財、非自家所、貲、悉簿爲贓」

かう-えつ 〔嗄咽〕〔かう(嗄)は塞がる、えつ(咽)はのどの義〕悲しみてむせび泣くこと。

かう-えぶ 〔香葉〕（名）【植】しきみ(榊)の異名。

かう-えん 〔香鹽〕（名）あんもにや性の化粧品の一。

かう-えん 〔香烟〕（名）香ばしき烟。香(カウ)をたく烟。

かう-えん 〔講筵〕（名）講義をなす席。陳書(宋史)「梁簡文(見)毎自昇座說經、正見嘗預講筵(講決疑義)」

かう-えん 〔講演〕講義また演說をなすこと。

〔講演〕字治拾遺「をりふしの僧膳、寺の講演しげく行はせければ」

がう-えん 〔剛緣〕強緣（名）權門の緣を恃みて、我がままをふるまふこと。太平記(左衛門督)「政道のために怨みあるものは中務剛緣(ガウエン)・内奏さては不直の奉行なり」下學集(下)「强緣(ガウエン)」

がう-おく 〔剛臆〕（名）性質の强きと弱きと。剛勇と臆病と。勇怯。太平記(廿九、卅)「人に剛臆なく、氣に進退あり」

がうおく の ざ 剛臆座　陣中の座席に、剛勇の者と臆病の者とを區別すること。盛衰記(四十二、金鳥)「昔八幡殿の奥州を被責るにこそ、剛臆の座をば被分けれ」後三年記「つはものどもの心をはげまさんとて、日毎に剛臆の座をなん定めける」

かう-おん 〔高恩〕（名）高大なる恩德。厚恩。鴻恩。諺(佐氏)「高名極むるならば、汝をば高恩に誇らすべし」津國女夫池(三)「七世の父母の恩より、今御兩所の御高恩、土くれに須彌、比べても比べ難けれども」

かう-おん 〔孝恩〕（名）孝を以て父母の恩に報ゆること。諺(本朝)「たとひ老後の愚なりとも、孝恩の心なからんや」

かう-おん 〔高音〕（名）調子高き音。即ち、物體の振動の急劇なる時起こる音。（低音の對）

かう-おん 〔好音〕（名）一好き音色。詩經(雅)「食(ジキ)我豪鄙、懷我好音」陸機詩「蕙草饒淑氣、時鳥多好音」二よきおとづれ。よきたより。

かう-か 〔高價〕（名）あたひの高きこと。よきねうち。高きねだん。高直。〈廉價の對〉韓非子(五蠹)「粟飯菽羹、而不貴耕戰之士、則耿介之士寡、而高價之民多矣」天中記(自入市肆)「高價買物」後漢書(逸)「章(環)偉之高價」

かう-か 〔高廈〕（名）たいか(大廈)に同じ。

かう-か 〔校歌〕（名）其の學校の校風又は特長などを舉げたる歌。

かう-か 〔高架〕高くかけ渡すこと。又、其の物。

かう-か 〔高歌〕高き聲にて歌ふこと。舊唐書(楚度)「高歌放言、以詩酒琴書自樂」

かう-か 〔降嫁〕皇女又は王女などの、臣下の家に嫁ぐこと。「和宮御降嫁」文獻通考「有帝姬降嫁之儀」

かう-か 〔降下〕下だること。さがること。

かう-か 〔耕稼〕かうさく(耕作)に同じ。

かう-が 〔江河〕（名）一大なるかは。江(コウ)と川と。諺(寄)「若年の昔より、江河に漁って、其の罪深し」二支那にて、楊子江と黃河と。莊子(外篇)「江河合水而爲大」

かう-が 〔高雅〕高尙にして風雅なること。爾雅「江河淮濟爲四瀆」

かう-が 〔豪家〕（名）富める家。勢力ある家。ものもち。たいけ(大家)。がうけ。朗詠「香衫細馬豪家郎」史記(呂不韋)「子楚夫人、趙豪家女也」後漢書(馬援)「少與鄭康成俱事馬融、融外戚豪家多、列女倡歌舞于前」

がう-が 〔聲牙〕〔がう(聲)は語の耳に入らぬこと、が(牙)は齒正しからぬこと〕文字・語句の、穩濫にして讀み惡きこと。韓愈文(潮州)「周誥殷盤、佶屈聲牙」

かう-かい 〔江海〕（名）川と海と。書經(禹貢)「沿于江海、達于淮泗」莊子(列禦寇)「此江海之士、避世之人」戰國策(楚)「楚舊因是以游乎江海」

かう-かい 〔港界〕（名）港の經界。開港港則(第一條)「横濱の港界は十二天より燈船まで」

かう-かい 〔航海〕海上を航行すること。商法(十五、六)「船舶の航海」

かうかい-へんかう 〔航海變更〕【法】船舶が、出發地又は其の到達の目的地を變更すること。

かう-かい 〔更改〕一前の狀態を改めかふること。二【法】舊債務にかへて、新たなる債務を負ふこと。民法(五百十七條)「更改に因りて生じたる債務」

かう-かい 〔耿介〕（副）節を守りて、世俗と相容れざること。韓非子(五蠹)「耿介之士寡、而高價之民多矣」宋玉文(九辯)「獨耿介而不隨兮、願慕先聖之遺教」

かう-がい 〔笄〕（名）〔かみかき(髮搔)の音便〕一古へ男女共に髮を搔き上ぐるに用ひし細長き具。宇津保(藤原)「白き蓮の花に、かうがいのさきして、かく書きつけて奉る」源(桐壺)「柱のひわれたるはざまに、かうがいのさきしておし入れ給ふ」大鏡(中)「御ぐし、かうがい具し給へりける、とり出でてつくろひなどして」二後世婦人の頭髮に插して裝飾とするもの。金屬・鼈甲・蒔繪等にて造り、種種の形あり。ほせ(海道記)・(御材)二刀劍の具。金屬にて作り、刀の差表(オモテ)に插し置き、髮を掻き上ぐるに用ふ。表差(オモテ)。又、近世、割笄(ワリガウ)として、二本に割れる物を作り、簪の用にも供ふ。今昔(廿四)「鞘より割刷(ガウ)を取り出でて」回紋所の名。かうがい車　丸に違界　丸に一界

(一いがらか)

(二いがらか)

(三いがらか)

かう-がい 〔沈瀣〕（名）海氣。一說、露の氣。楚辭(遠遊)「餐(サン)六氣而飲沈瀣(ケイ)兮」

かうがい の はい 沈杯　露を盛りたる杯。仙人の飲物。諺(世說)「天のこんづやかうがいのはい」

かう-がい 〔梗概〕（名）〔かう(梗)がい(概)共におほむねの義〕あらまし。大抵。大略。大要。左思文(吳都賦)「粗爲貧言其梗概、如此」

かう-がい 〔慷慨　忼慨〕國事又は世事をいきどほりなげくこと。憂ひなげくこと。史記(項羽記)「項王乃悲歌忼慨」後漢書(賈逵)「性剛毅慷慨」

かうがいか 〔慷慨家〕（名）國事又は世事につきて慷慨し、又其の爲めに奔走する志士。

かうがい-かなもの 笄金物（名）幅狹く長くして、笄の形したる金物の稱。鎧の胸板などにも附く。

かうがい-かほう 〔航海加俸〕（名）航行の役務に服する海軍艦船に乘り組む軍人・軍屬に對し、其の普通の俸給以外に支給する俸給。海軍給與令(第三條)「航海加俸」

かうがい-ぐさ （名）【植】かうがいぜきしやうの異名。

かうがい-ぐる 笄曲（名）明暦の前後に多く行はれたる婦人の髮の結ひ方。かうがいの周りに毛を巻き附けたるもの。かうがいわげ。かうがいまげ。我衣「下女はかうがいぐるなり」

かうがい-ぐるま 笄車（名）紋所の名。

かうがい-けいやく 〔更改契約〕（名）【法】更改(カイ)を內容とせる契約。

かうかい-しや 〔航海者〕（名）航海を業とする人。

かうかい-しやうれいきん 〔航海奬勵金〕（名）明治四十三年以前の航海補助金の稱。明治二十九年三月法律第十五號航海奬勵法「航海奬勵金」

かうかい-じゆつ 〔航海術〕（名）航海の技術。

かうかい-しようしよ 〔航海證書〕（名）船舶の航海を許可する證書。即ち、甲種船舶檢査證書・適航證書・回航認可證書の總稱。

かうがい-せぎしやう （名）【植】燈心草(科)。燈心草屬の一年生草本。莖の高さ一尺許り。葉は細長にして尖れり。花は莖頂に生じ、數花づつ密集して漿織狀に排列し、五六月の候、淡綠褐色を呈す。我が國・各地の原野・水濕の地・水田等に自生す。いぬぜきしやう。かうがいぐさ。かがしら。

かうかい-ちやう 〔航海長〕（名）在役艦の職員の一。艦長の命を受け、航路及び水路嚮導に關する事を掌り、主管の器具・物品を整頓し、艙內貯積の方法を監掌するもの。海軍艦船條例(第十一條)「航海長」

かうかい-づばぶ 〔航海圖法〕（名）【地】ゑんちゆうとうえいはふ(圓柱投影法)に同じ。方位を正確に示しあるため、航海者の常に此の圖法を用ふるより名づく。

かうかい-につし 〔航海日誌〕（名）船長が、其の船中に備へおくことを要する書類の一。航海中に生じたる一切の事故を記載する日誌。船員法(六條)「航海日誌」

かうがい-びる 笄蛭（名）【動】蠶形動物。扁蟲類の一種。體は長さ三四寸にて細長なれども、先端は恰も扇子狀に擴がり、この部に依りて觸感を司る。多くは黑色なれども、淡黃色にて暗褐色の縱線を存するものあり。總べて濕地に產す。あまびる。

かうかい-ほけんしようけん 〔航海保險證券〕（名）【商】船舶の、甲港より乙港に航海する間に生ずべき危險を擔保したる場合に、保險者より發行する海上保險證券。航路保險證券。

かうかい-ほじよきん 〔航海補助金〕（名）政府が歐洲航路・北米航路・南米航路・濠洲航路の定期航海に從事する汽船に下付する補助金。この補助金を受くる汽船は、日本臣民の所有、又は日本臣民のみを社員若しくは株主とする運送業を營む商事會社の所有に屬し、日本の船籍に登錄し、三千噸以上の總噸數、一時間十二海里の最强速力を有し、主務大臣の定むる造船規程に合格し、且つ船齡十五年以內の鋼製なることを要す。遠洋航路補助金法(第一條)「航海補助金」

かうかい-まげ 笄髷（名）かうがいぐる(笄曲)に同じ。

かうかい-やき 笄燒（名）菓子の一種。小麥粉に砂糖・水飴を加へ捏ね伸ばして、長さ三寸・幅三分位に切り、てんぱん鍋に載せて燒きたるもの。

かうかい-ようせんけいやく 〔航海傭船契約〕（名）【商】一定の航路に對して爲す全部傭船契約。航路傭船契約。

かうかい-れき 〔航海曆〕（名）航海に用ふる曆。天體の運行を記したるもの。

かうがい-わげ 笄髷（名）かうがいぐる(笄曲)に同じ。獨吟百首「神かけてうそのあるほど雪ひけんの句　笄わげの心つめたし」

かうかう （名）かうのもの。つけもの。

かうかう 〔硬膏〕（名）常溫度にては硬く、體溫に逢ひて粘著力を現はす骨藥。水銀硬膏・英法絆創膏の類。「絆膏の對」

かうかう 〔孝行〕善く父母に事ふること。孝の行ひ。諺(敎王)「親の敵を討つ事も、孝行深き故により、名を末代に留めけり」說苑「孝行成于內而嘉號布于外」

かうかう 〔航行〕船舶にて、水上を行くこと。

かうかう 〔航行檢査法〕（名）政府が歐洲航路・北米航路・南米航路・濠洲航路の定期航海に從事する汽船を航行する帆船」同(三)「船舶を日本船舶として初めて航行の用に供するとき」

かうかう 〔郊行〕野にあそぶこと。郊外の散歩。

かうかう 〔考校〕考へ調ぶること。調査。考課。令(依法)合除免官當者、不在考校之限」禮記(學記)「比年入學、中年考校」

かうかう 〔抗衡〕相對抗して下だらざること。左傳(昭公六年注)「楚子自此遂盛、終於抗衡中國」

かうかう 〔行行〕次第に進み行くこと。行き行くこと。朗詠「行行重行行、明月峽之曉色不盡」

かうかう 〔神神〕（副）〔神(カウ)の音便〕神さびて。かうがうしく。

かうかう 〔斯斯〕（副）斯斯(カウカウ)の音便。勢語「かうかうなん思ふといひければ」宇津保(俊蔭)「ありしやうはかうかうと云ふ」同(忠こ)「かうかうの事ありとは、しろしめしたるや」

かうかう 〔皜皜〕（副）とどろき響く音にいふ語。「轟轟。嫗山姥(謠)「鐘かうかうと物凄じく」

かうかう 〔浩浩〕（副）廣く瀰漫したるさまにいふ語。書經(堯典)「湯湯洪水方割、蕩蕩懷山襄陵、浩浩滔天」

かうかう 〔皓皓　皎皎〕（副）白く見ゆるさまにいふ語。「月色皎皎」平家(九、老)「登れば白雪皓皓として、攀ぢ、下だれば青山峨峨として岸高し」詩經(國風)「揚之水、白石皓皓」同(小雅)「皎皎白駒」

かうかう 〔杲杲〕（副）日の光などのあきらかなるさまにいふ語。詩經(國風)「其雨其雨、杲杲出日」

かう-かう 一耿耿 (副) 一心安んぜざるさま、憂ふるさまにいふ語。詩經風「耿耿不寐、如有隱憂」 二明かなるさまにいふ語。朗詠「耿耿殘燭背壁影」蘇舜欽詩「星河耿耿秋還廻、樓觀澄澄夜更高」

かう-かう (副) とどろき響く音にいふ語。かうかう。轟轟。

かう-かう 一嗷嗷 (副) 口やかましきさま、聲かまびすしきさまにいふ語。吉記「平家時代十二遠忠「世間事人口嗷嗷之外、忘餘念了」平家「問答」遠忠「縱ひ天下を靜むる迄こそ無からめ、剩さへ嗷嗷なる體にて、朝家を可奈恨と聞こし召すは何事ぞ」詩經小雅「鴻雁于飛、哀鳴嗷嗷」

かう-かう 一囂囂 (副) かまびすしきさまにいふ語。詩經小雅「鶴鳴「之子于苗、選徒囂囂」同前

かう-かう-がほ 一孝行顔 (名) 孝行らしき顔つき。孝行を裝ふこと。百合若大臣野守鏡「親の看病孝行顔」

かう-かう-さかん 一航行期閉 (名) 船舶が航行するを許されたる期間。船舶檢査證書若しくは假證書に記入せらるるもの。即ち汽船に在りては三箇月以上一箇年以内、帆船に在りては六箇月以上三箇年以内とす。船舶檢査法第三條「航行期間」

かう-かう-し 一神神 (形) ものさびて尊く感ぜらる。尊くおごそかなり。神さびてあり。枕「かうがうしうしたてて、うちふるひ祈る事どもいとさかし」源「くろきの鳥居どもは、さすがにかうがうしく見えわたされて」

かうがうしけ 一神神氣 (副) かうがうしきやう。かうがうしさう。庚衣「御

かう-がん 一抗顔 (名) 對ふこと。顔向け。 二鏡面皮。「抗顔人の師となる」

かう-がん 一向顔 顔を向き合はすること。面會。諸小雅「久しく參らず候程に、向顔のため」

かう-がん 一强姦 暴行・脅迫其の他不法の手段によりて、婦女を姦淫すること。强淫。和姦の對 刑法第二百三十一條「强姦婦女を强姦したるとき」

かう-がん 一剛悍 (副) たけくあらあらしきこと。國姓爺後日合戰「心剛悍貪戾にして、一門、一家の親しみの道も離れし芝の庵」

かう-がん 一傲岸 (副) おごりたかぶりて人に下だらぬこと。晉書郭璞傳「傲岸榮悴之際」李白詩「崔生何傲岸、縱酒復談玄」

かう-がん-ざい 一强姦罪 (名) 【法】十三歳以上の婦女を强姦し、又は十三歳に滿たざる婦女を姦淫するによりて成立する親告罪。刑法第百七十七條「暴行又は脅迫を以て十三歳以上の婦女を姦淫したる者は强姦の罪と爲し二年以上の有期懲役に處す十三歳に滿たざる婦女を姦淫したる者亦同し」

かう-がん-じ 一仰願寺 (名) かうぐわんじ「仰願寺」を見よ。

かう-がん-しんけい 一交感神經 (名) 【醫】脊柱の兩側に在り、鎖狀をなせる節狀索と之より出づる末梢部とより成る。節狀索は多數の神經節を有し、胸脊髓神經と連絡す。此の神經は不隨意運動及び腺の分泌を司る。

かう-かん-けい-けいとう 一交感神經系統 (名) しようかんしんけいけいとう(植物性神經系統)に同じ。

かう-き 一香氣 (名) か。かをり。にほひ。走湯山緣起「或有聞香氣、或有見光曜」

かう-き 一綱紀 (名) 「き(紀)は小綱の義」物事のしめくくり。國家の大法。國家の政事。紀綱。詩經大雅「勉勉我王、綱紀四方」同雅「張之爲綱、理之爲紀」白虎通「大者爲綱、小者爲紀」

かう-き 一衡器 (名) はかり(秤)に同じ。度量衡法施行令第三「衡器」

かう-き 一降旗 (名) 降意を表示する旗。日本武尊吾妻鑑五「降旗を立て、弓弦を外し、兜を脫ぎ、降參の意を盡くし」陳師道詩「來須堅百戰、當即建降旗」

かう-き 一校規 校紀 (名) 學校の規律。

かう-き 一好機 (名) よき機會。よきしほ。「好機逸すべからず」

かう-き 一好期 (名) よき時期。

かう-き 一交椅 (名) きようろく(曲彔)に同じ。

かう-き 一高貴 (名) 一官位の高く貴きこと。 二價高きこと。

かう-ぎ 一高誼 (名) 一かうぎ(高義)に同じ。漢書董仲舒「子大夫明「先聖之業、習俗化之變、終始之序」講聞高誼」之日久矣」 二他人の交誼の敬稱。

かう-ぎ 一交誼 (名) 交際のよしみ。朋友としての情誼。樂論詩「臨」別提斯語、少盡「交朋誼」

かう-ぎ 一好誼 (名) よきよしみ。深切なる情誼。

かう-ぎ 一巧伎 巧技 (名) 巧みなる伎藝、又は技術。(拙伎の對)

かう-ぎ 一高義 (名) 道義の高き行ひ。莊子盜跖「聞「將軍高義」、敬再拜謁者」史記田單「滕所以自附爲婚姻者、以公子之高義、爲能急人之困」

かう-ぎ 一高議 (名) 他人の議論の敬稱。

かう-ぎ 一巧僞 (名) 巧みに僞(ぎ)ること。莊子「巧僞人孔丘、非邪」

かう-ぎ 一巷議 ちまたの議論。うはさ。世評。巷說。史記「人則心非、出則巷議」蘇軾文「巷議臆度不足取信」

かう-ぎ 一講義 書籍また學說の意義を解きあかすこと。講釋。北齊書「講義兩行得中郎」唐書「天子視學、皇太子齒胄、則講義釋奠、執經論議」

かう-ぎ 一抗議 一反對の意見を主張すること。 二【法】甲國が、乙國の所爲に反對なる旨を、正式に通知すること。

かう-ぎ 一拷木 (名) 拷問にかくる木。縛り附ける木。孕常磬「椙の立木を其の儘に枝を打ちて、科人のがう木の柱と定めらる」

かう-ぎ 一拷器 (名) 罪人を拷問するに用ふる具。保元「五位以上の者、拷器に寄せらるること先例稀なり」徒然草「犯人をしもとにて打つ時は、拷器によせてゆひつくるなり」

かう-ぎ 一號旗 (名) はたじるし。旗幟。

かう-き 一豪氣 壯快なる意氣。豪邁なる氣質。魏志「許汜曰、陳元龍湖海之士、豪氣不除」

かう-き 一剛氣 剛勇なる意氣。禮記

敵(つかまつりて、神書やかにさしつるに、いとかがうしげなるを見るにも」きこと。かがうしき度合。

かうかう-てん 一降交點 (名) 【天】惑星・彗星及び衛星等が、北より南に運行して黃道面を通過する點。

かうかう-はじめ 孝行始 (名) 孝行のしはじめ。川中島合戰「今日より我れも母と頼み、子となるしるしの盃中略孝行始の給仕・配膳」

かうかう-りき 一孝行力 (名) 孝行を盡くさんとする念力。天神記「父を悲しむ十六夜が魂、親の頭を守って、百人力の孝行力」

かうかう-をさめ 孝行納 (名) 孝行のしをさめ。生玉心中「迚も死ぬ身の嘉平次中略是れ一生の孝行納めと觀念し」

かう-かく 一高閣 (名) 一棟の高き建物。後漢書「其所起廬舍、皆有重堂高閣」 二高き棚。「高閣に束ぬ」

かうかく-につかぬ 東高閣 高き棚の上にたばね置きて用ひず。晉書「殷浩才名冠世、翼弗之重也曰、此輩宜束之高閣」俟「天下太平、議其任可也」韓愈詩「春秋三傳束高閣、獨抱遺經究終始」

かう-かく 一行客 (名) 道を行く人。旅行の客。旅人。朗詠「山遠雲埋行客跡、松寒風破旅人夢」

かう-かく 一香革 (名) 芳香を含ませたる革(ぎ)。

かう-かく 一考覈 かんがへしらぶること。晉書「默起家祕書郎、考覈舊文、刪省浮穢」

かう-がく 一高嶽 (名) 高きたけ。高き山。高山。

かう-がく 一高額 (名) 價額の高きこと。高價。

かう-がく 一好學 (名) 學問を好むこと。「好學の士」論語公冶長「敏而好學」

かう-がく 一講學 學問を講究すること。禮記學記「講學以講之」左傳昭公元年「孟僖子病レ不レ能レ相レ禮、乃講學之」唐明皇詩「講學試論論、評陌勸排桑」

かうがく-いうびんかはせ 一高額郵便爲替 (名) 郵便爲替の一。豫め一等郵便局長又は在外郵便局長の認可を受けおき、通常郵便爲替によりて定期又は無定期に、郵便爲替金の一般の制限額以上の金員を送附するもの。高額爲替。

かうがくいうびんかはせ-れう 一高額郵便爲替料 (名) 高額郵便爲替の料金。通常郵便爲替料と同一の割合によりて之を定む。

かうがく-かはせ 一高額爲替 (名) かうがくいうびんかはせ(高額郵便爲替)の略。明治三十六年遞信省令第六號「高額爲替」

かう-かけ 一首懸 (名) 馬具の一。馬の首の上に横にわたして掛くる革。

かうかけ-ばし 一高架橋 (名) 高く架したる橋。

かうかけ-ぶね 一航河櫂 (名) 河川通航の權利。

かうかこ-とう 一航河工 (名) 河の水深を增し、又は航行に便ならしむるために、河川中に堰を設くる工事。

かうかさ-だう 一高架索道 (名) かくうさくだう(架空索道)に同じ。

かうかさすじんしゅ 高加索人種 (名) 次條に同じ。

かうかしあん (英Caucasian) (名) 人種の名。皮膚白く、毛は柔かにして、色は主に紅く、鼻狹くして高し。歐羅巴の大部分、亞弗利加の北部、及び亞細亞の西南部に分布す。かうかさす人種。

かうかつ-もの 交割物 (名) 一寺院の寶物。唐土にて、寺の住持かはる時、竹の剌符を合はせて、什寶を前住より後住に交與する故にいふ。禪家 二家に久しく持ち傳ふる物。禪林 流行狂言 八「扱扱、是れは堅い鍋ぢや。是れは身共がかうかつ物に致さう」

かうかつ-てつだう 一高架鐵道 (名) 都市繁榮の地區にありて、普通の鐵道を布設するは危險にして且つ人・車・馬等の交通を防ぐる恐れある場合に、石臺又は鐵製の棧橋を設け、其の上に軌條を布設して、市中遠距離の交通を謀り、或ひは其の市を終點とせる各鐵道を連絡するもの。

かうかの-さ (名) 【植】がふかのき(合歡木)に同じ。六帖「ひるは咲きよるはこひぬるがうかの木、君のみ見んやわけさへに見よ」夫木「山ふかみいつよりねぶと名をかへて、がうかの木には人まどふらん」

かうか-はっかはぶ 一高價發行法 (名) 【經】公債募集方法の一。高價無減少免許の方法にて公債を發行するもの。其の利率は普通より高きを例とす。(低價發行法・平價發行法の對)

かう-かぶ 一香合 (名) 香料を盛る器。漆塗・蒔繪・堆朱・陶器等種種あり。かうばこ。香盒。

かう-がぶ 一交合 男女の交接。房事。

[illegible]剛氣不怒、柔氣不懾」　世說植「下延之爲上虔令、有剛氣」

がうき 〔剛毅〕　窟志强固にして物事に屈せざること。氣力健くして事に耐ふる性質。論語子路「剛毅木訥近仁」

がうき 〔啾議〕　衆勢を恃みて無理を言ひ張ること。太平記十五「闘鶏」「三塔啾議を以て中殿御願をやめける間」

がうざ 〔副〕　勢ひ烈しく。すばらしく。甚しく。浮世風呂三「あがうざと男湯が騒騒しいぜ」膝栗毛三「いつの間にやら、がうざに來たぞ」同三「がうざに薄い醪だ」

がうさあつ 〔高氣壓〕　(名)　四周より大なる氣壓。即ち四周の氣壓に比しての稱なれども、普通氣壓の度が七六〇ミリめートルの水銀柱の重さより大なる時の稱。溫度低く水蒸氣少なき場合には高氣壓を生ず。空氣は高氣壓の部分より低氣壓の部分に向かひて流動するものなり。(低氣壓の對)

がうさう 〔講究〕　講求　しらべきはむること。研究。左傳襄公十一「武子歸而、講求典禮、以脩晉國之法」宋史食貨志「神宗講求方田利害、作法而推行之」

がうさう 〔考究〕　考へて研究すること。

がうざう 〔耕牛〕　(名)　耕作に使ふ牛。

がうさう 〔號叫〕　聲をあげて大にさけぶこと。

がうさうーぎ 〔航球儀〕　(名)　航海中に、其の針路又は航程を知る器械。

がうーさき 〔香閨〕　(名)　香をかぐこと。

がうーさくわい 〔好機會〕　(名)　よき機會。好機。

がうぎーしき 〔講義式〕　(名)　教授の形式の一。發問など設けず、主として教師のみ働きて教授するもの。

がうぎーしょ 〔講義所〕　(名)　一講義をなすところ。二基督教などにて、未だ教會の組織をなさず、信者の集會して講義・說教など僅す所の稱。

がうきーしん 〔好奇心〕　(名)　新奇の事物、又は未知の事がらに就きて、興味を有する心。奇を好む心。

がうきつ 〔香橘〕　(名)　【植】てねんぼ(香橙)の異名。

がうきーてん 〔交軌點〕　(名)　【天】かうてん(交點)に同じ。

がうきてん-けつ 〔交軌點月〕　(名)　【天】月が交軌點を發して地球を一周し、再び其の交軌點に達するに要する時間。其の長さは二十七日五時五分三十五秒なり。

がうーぎは 〔髮際〕　(名)　〔かみぎはの音便〕頭髮のはえぎは。宇治拾遺「額・眉の間の程に、かうぎはによりて、二寸計り疵あり」岡本記「馬に手綱をさして、二人してひきて出づる時は、手綱のはしをかうぎはに打ちかけて」

がうーさぶ 〔高級〕　(名)　階級の高きこと。上級。

がうさぶ 〔高給〕　(名)　高額の俸給。多額の給料。

がうさぶ 〔號泣〕　聲をたててさけび泣くこと。禮記檀弓「子之事親也、三諫而不聽、則號泣而隨之」孟子離婁「舜往于田、號泣于旻天」

がうーさやう 〔耕境〕　(名)　【經】かうさくげんかい(耕作限界)に同じ。

がうーさやう 〔剛强〕　つよきこと。たけきこと。信長記十五「信長、君臣無道にして剛强を恣にし」莊子在宥「淳約柔乎剛强」廉劍彫琢」漢書寫野「剛强堅固、確然亡欲、大鴻臚野王是也」

がうさやうーち 〔耕境地〕　(名)　【經】かうさくげんかいち(耕作限界地)に同じ。

がうさゆう 〔强弓〕　(名)　ひくに强き力を要する張りの强き弓。又、其の弓をひく人。つよゆみ。保元(鎌倉御所)「大力の强弓、矢つぎ早の手利なり」文德實錄五「天安元年八月「河成本姓余、後改二百濟一長一於武猛、能引二强弓一」

がうーさよ 〔考據〕　(名)　考へを附くべき手がかり。

がうさよ 〔高距〕　(名)　海面又は地面より計りたる高さの差。

がうさよ 〔抗拒〕　手むかひ拒むこと。はりあひ拒むこと。刑法第百七十八條「人の心神喪失若くは抗拒不能に乘じ又は之をして心神を喪失せしめ若くは抗拒不能ならしめて猥褻の行爲を爲し又は姦淫したる者」齊書張融「高談鮮能抗拒」

がうーさよ 〔江魚〕　(名)　江にをる魚。川にすむ魚類。雪女五枚羽子板「汨羅に沈んで江魚の腹中に葬られん」

がうーさよ 〔香魚〕　(名)　【動】あゆ(鮎)の異名。

がうーさよ 〔儀倨〕　きょがう(倨傲)に同じ。

がうーさよく 〔硬玉〕　(名)　【鑛】そぢうむ及びあるみにうむ・の硅酸鹽類。微品質にして細かき纖維狀なり。可成り硬く、白色又は綠色にて。吹管にて熱すれば熔けて玻璃となる。

がうーさよく 〔鋼玉〕　(名)　【鑛】次條の略。

がうぎよくーせき 〔鋼玉石〕　(名)　【鑛】酸化あるみにうむ・より成る六方柱形の鑛物。酸類に侵されざるを特徴とす。比重三・九乃至四・二。硬度金剛石に次ぐ。透明にして無色なるもあれど、多くは藍・紅・黃・綠・紫等の色を帶びたるものを最上とし、寶石として珍重す。淡藍・勤・褐・黑色にして透明ならざるを次位とし、砂狀をなして磨砂に用ふるを最下とす。

がうさよーざい 〔抗拒罪〕　(名)　【法】公務員の職務を執行するにあたり、暴行又は脅迫を以て之を妨害する罪。

がうさーよぬ 〔硬鰭類〕　(名)　【動】魚類分類の一目。硬骨魚類の一。他類と異なる要點は、腹鰭は胸部に位し、腹鰭並びに背鰭の鰭刺中、無節の硬棘より成るものを有するにあり。鱞は食道に通ぜず。多くは海產にして、魚類中最も多くの種類を含む。すずき・べら・こち等の類。

がうざーらく 〔講義錄〕　(名)　講義の記錄。

がうーさん 〔高金〕　(名)　大なる金高。高價。「高金の品」

がうーさん 〔咬筋〕　(名)　咀嚼筋の一。下顎を前上方へ牽引するもの。

がうーざん 〔高吟〕　高聲に詩歌を吟ずること。高詠。

がうーざん 〔剛吟〕　强吟　つよぎん(剛吟)に同じ。

がうさん-もつ 〔好禁物〕　(名)　病氣によりて禁ずべき食物と好き食物と。禁好物。

がうーぐ 〔香具〕　(名)　一薫物・匂ひもの材料とする沈香・丁子・白檀・麝香等の總名。ト養狂歌集「若きかうぐや參り、いろいろのかうぐを出だしけるに」二香道に用ふる道具。かうだうぐ。

がうーぐ 〔校具〕　(名)　學校にて、專ら教授の用に充つる器具。又は學校に備へ附くるを必要とする物件の稱。小學校令第九十三「小學校に於ては校舍校地校具及體操場を備ふべし」

がうーぐ 〔耕具〕　(名)　耕作に使用する道具。農具。

がうぐーうり 〔香具賣〕　(名)　一香具を賣るを業とするもの。かうぐし。二香具を賣る傍、ひそかに男色を賣るもの。一代男「十五六なる少人、かのこじゆすのうしろ帶、中脇差・印籠巾著もしをらしく中略髮つとずくなに髻を大きに高く結はせて、續きて桐の挾箱のうへに、小帳・そろばんをかさね、利口さうなる男の行くは、是れなんかうぐ賣と申す」

がうぐーし 〔香具師〕　(名)　一前條に同じ。二やし(野師)。浮世床三「香具師のいひぐさを、よく覺えたぜ」

がうーぐみ 〔格組〕　(名)　【建築】木を縱横に組みたるもの。

がうぐーや 〔香具屋〕　(名)　香具を賣る家。又、其の人。ト養集「若きかうぐや參り、色色の香具を出だしけるに、燒ものに、仙人・黑方・若草といふなり」

がうーくら 〔鄉藏〕　(名)　田舍にて、年貢米を入れ置く藏。鄉藏を藏に同じ。

がうくわ 〔硬貨〕　(名)　金貨・銀貨・銅貨等の金屬貨幣の稱。(紙貨の對)

がうくわ 〔考課〕　古へ文武官が、每年其の部下の官員の、一年間に於ける執務の成績、及び操行・才能等の如何を考へ、又は貢人の學藝を試驗し、並びに其の優劣の等級を定めて上申すること。令義解「考課令第十四」

がうくわ 〔硬化〕　一弱き意見を持したる人が、强硬の說を取るやうに變ずること。二取引所の語。賣屋が賣屋に變はること。

がうーくわ 〔高臥〕　世を避け、心を高く持して、山野などに隱居すること。晉書謝安「躬耕巢遯、朝旨高臥東山」

がうーくわ 〔豪華〕　おごりはでやかなること。驕奢。奢侈。南史劉穆之「都下少年遂爲口實、見何豪華、人相戲曰」謝靈運文「生自豪華、家贏金帛」

がうーくわ 〔剛果〕　剛膽にして決斷あること。後漢書馬援「其剛果任情、皆如此也」北史宇文泰「性剛果、多武藝」

がうーくわい 〔講會〕　(名)　こうくわい(講會)を見よ。

がうーくわい 〔香會〕　(名)　香道の會合。香合せの集會。

がうーくわい 〔狡猾〕　かうくわつ(狡猾)に同じ。史記高祖本紀「江湖之間、謂小兒多詐狡獪爲無賴」神仙傳「吾老矣、不喜復作如此狡獪變化也」

がうーくわい 〔郊外〕　(名)　都會を離れたる地。まちはづれ。王維詩「郊外誰相送」

がうぐわい さんぽ 〔郊外散步〕　郊外に出でて遊ぶこと。

がうーぐわい 〔校外〕　(名)　學校のそと。

がうぐわい けうじゅ 〔校外教授〕　兒童を學校外に引率して、人事・自然の實際を觀察せしむること。

がうーぐわい 〔港外〕　(名)　港の外。

がうーぐわい 〔號外〕　(名)　一新聞・雜誌等の、定まりたる號數の外に、臨時に發行するもの。二定まりたる數の外のもの。

がうぐわい-せい 〔校外生〕　(名)　通學はせざれども、通信などによりて其の學校の教育を受くる生徒。

がうーくわく 〔耕穫〕　耕して收獲をはかること。易經上經「不耕穫、不菑畬、則利有攸往」

がうくわ-どむ 〔硬化護謨〕　(名)　えぼないと・に同じ。

がうくわ-せいど 〔硬化制度〕　(名)　【經】硬貨、殊に金銀貨のみを貨幣として用ふる制度。

がうくわつ 〔狡猾〕　わるがしこきこと。詐り多く奸智に長けたること。荀子非十二「可謂二妖怪狡猾之人一矣」左傳昭公廿「奬二順天法一無助二狡猾一以從二先王之命一」

がうくわ-はぶ 〔鋼化法〕　(名)　【化】鋼鐵を得る一法。鍛鐵を炭火中にて長く熟し、炭素が多少鐵中に溶け込みたるとき之を灼熱し、ろーる・に懸けて組織一樣の鋼鐵となすもの。

がうくわん 〔高官〕　(名)　高き官職。論衡「名生二于高官一而毀起二于卑位一」

がうくわん 〔交換〕　更換　一とりかふること。ひきかふること。二【法】金錢の所有權以外の財產權の移轉を目的とする契約。民法第三百八十二「交換」

がうくわん 〔交驩〕　交歡　相共に打ちとけ樂しむこと。史記魯周公世家「吾戲易二吾言一、君何不交驩大陽」

がうくわん 〔交還〕　返し渡すこと。返還。

がうくわん 〔睾丸〕　(名)　男子の生殖器の主要なるものの一。陰囊の中にありて精液を分泌する肉核。きんたま。

がうぐわん-えん 〔睾丸炎〕　(名)　睾丸の腫れ痛む病。淋毒・梅毒・結核・外傷或ひは膿毒症・痘瘡等によりて起こり、又流行性耳下腺炎と併發することもあり。その甚しきものに至りては、陰囊外方に破潰して睾丸脫出す。

がうくわん-かかく 〔交換價格〕　(名)　貨幣と財貨との交換比例による價格。即ち、貨幣の購買力。流通價格。市價。

がうくわん-がかり 〔交換係〕　(名)　【商】銀行の出納課に附屬し、又は之と關聯する一分課にて、專ら手形交換所に於ける手形の交換に關する事務を掌るもの。

がうくわん-かち 〔交換價値〕　(名)　【經】價値の一。財貨と財貨とが、互ひに交換せらるる利益の程度。(利用價値の對)

がうくわん-きょく 〔交換局〕　(名)　でんわかうくわんきょく(電話交換局)の略。

がうくわん-けいやく 〔交換契約〕　(名)　【法】かうくわん(交換)に同じ。

がうぐわん-じ 〔仰願寺〕　(名)　かうぐわんじらふそく(仰願寺蠟燭)の略。

がうくわん-じょ 〔交換所〕　(名)　一でんわかうくわんじょ(電話交換所)の略。二てがたかうくわんじょ(手形交換所)の略。

略。

かうぐわんじ-らぶそく 一仰願寺蠟燭 (名) 〔延寶頃江戸京橋越前屋九右衛門〕淺草仰願寺の院主の囑によりて製したればいふ。一説、駒込の江岸寺の囑なりと。佛前などにともす小さき蠟燭。

かうくわん-じり 交換尻 (名) 手形交換所にて、各組合銀行が交換したる手形・小切手の精査表に上ぼりたる借越し及び貸越しの總金額。此の借越し及び貸越しは中央銀行に於ける各組合銀行當座預金の振替へによりて決濟せらるるものとす。

かうくわん-せつ 一交換說 (名) 【理】物體が輻射のえねるぎーを發射すると共に、又之を吸收することを述べたる說。ぷれぼーの定說(Prevost's theory of exchanges)によれば、總べての物體は絕えず各方に向かひて輻射のえねるぎーを發射し、同時に又、之に投射する輻射のえねるぎーを吸收するものなりと。

かうくわん-せへへう 交換添表 (名) 【商】手形交換所にて、組合銀行が、互ひに交換すべき手形・小切手に添へて受授する表。其の手形・小切手の金額及び枚數を記載するもの。

かうくわん-どうめい-ぎんかう 一交換同盟銀行 (名) 【商】手形交換所に加盟せる銀行。

かうくわん-の-はぶそく 一交換法則 (名) 【數】二つ或ひは二つ以上の數に施せる算法の結果が、これ等の數の順序に關係せざるときの算法。$a+b+c=c+b+a$ 又は $abc=bac=cba$ などの類。

かうぐん 一行軍 戰場以外に於ける軍隊の行進。又學生などの、其れに擬して旅行などすること。

かうけ 一高家 (名) ㊀武家の名族。盛衰記(寛七頃)「高家には秩父・足利・三浦」庭訓往來(五月)「關東下向大名・高家之人人、以路次之便可打寄之由」 ㊁江戸幕府の職名。朝廷への使節、伊勢・日光への代拜、勅使の接待及び營中に於ける諸禮の事を掌る役。丹波與作「東の高家入間殿より、御養子分の約束にて」

かうけ 一香花 香華 (名) 佛前などに供ふる香と花。かうばな。榮華(榮)「以香花・燒唄・洪鐘(中略)七珍百寶、供養之」法華經「香華伎樂、常以供養」

かうけ 一高下 ㊀たかきとひくきと。上下。高低。莊子(齊)「東西跳梁、不避高下」 左傳(宣公十五年)「諺曰、高下在心」 ㊁勝れることと劣れることと。好きと惡しきと。優劣。室町千疊敷「斯う三人は昨日まで、高下もない御寵愛」 ㊂貴賤と下落と。あがりさがり。「一・二十錢方の高下に過ぎず」

かうけ 一豪家 (名) ㊀豪族の家。權勢ある家。宇津保(俊)「身のざえもなくて、がうけを頼み」 ㊁他の威を借ること。頼み。口實。源(葵)「大將殿をぞ、がうけには思ひ聞こゆらん」宇治拾遺「あやまちどもかたはしより問ふに、ただ老いをがうけにていらへをる」

かうけい 一好景 (名) よき景色。佳景。蘇軾詩「一年好景君須記、正在橘黃橘綠時」

かうけい 一絞刑 (名) 絞首の刑罰。

かうけい 一行徑 (名) こみち。逕路。小徑。

かうけい 一講藝 學藝を講究すること。類延之詩(元文)「禀道儀德、講藝立言」

かうけいき 一好景氣 (名) よき景氣。(不景氣の對)

かうけいし 一笠の名。ばいじり(螺尻)に同じ。(遊藝)

がうけ-がまし (形) がうけめきてあり。權勢あるさまなり。山家集「通る船の、此の綱に當たりぬるをば、かこちかかりて、がうけがましく申して、むつかしく侍るなり」

かうけ-きもいり 高家肝煎 (名) 高家の古參にて、四位少將に任ぜられたるもの。

かうけぢ 一纈纈 交纈 (名) 古への染方の一種。いたじめ板締に同じ。四時祭式上「物忌一人料、夾纈帛三丈五尺」盛衰記(廿九重)「纈纈の袋に入れたる琵琶一面」

かうけつ 一膏血 (名) 人のあぶらと血と。あぶらあせ。唐書(食貨)「農桑廢、手足呼二膏血竭一、而管搥」 皮日休文「紆二大君之組綬、食二生人之膏血、苟不仁而位、是不レ稱二于祿食一也」

かうけつを しぼる 絞膏血 人の刻苦して得たるものをしぼりとる。(苛稅を課することなどにいふ) 宋史(王禹)「錫生民膏血、以奉二無用之土木一」

かうけつ 一高潔 (副) けだかくていさぎよきこと。漢書(馬宮)「師丹薦、官、行能高潔、遷二廷尉平一」 歐陽修文「風霜高潔」

かうけつ 一白くいさぎよきこと。

かうけつ 一皎潔 (副) けがれのなきこと。謝惠連文(雪賦)「繽紛繁驚之貌、皓汗皎潔之儀」

かうけつ 一江月 (名) 江の上にある月。謠(錦)「難波江に江月照らし、松風吹き」

かうけつ 一皓月 皎月 (名) 明かなる月。冴えわたりたる月。朗詠「夜宿二極浦一之波、青嵐吹分皓月冷」 謠(山巻)「皎月照らし、巽香薫ずる」 楮亮詩「層軒登二皎月一、流照滿二中天一」

かうけつ 一豪傑 (名) 智勇などの衆人にすぐれたること。又、其の人。孟子(盡心)「若夫豪傑之士、雖レ無二文王一猶興」 莊子(列禦)「以二忠聖士一爲レ鐔、以二豪傑士一爲レ夾」 淮南子(泰)「智過二百人一者謂二之豪一、千人者謂二之傑一」

かうけつ-つくゑ 香花机 (名) 佛前に据ゑる机。上に花瓶を置くを以て花机(ハエ)ともいふ。

かうけ-ばる 豪家張 (自動) がうけらしくあり。がうけらしくなる。狂言(八橋)「おお、がうけばったる御人かな」

かうけふ 一耕業 (名) たがへすわざ。耕作する業。農業。

かうけふ 一豪俠 (名) 心たけく男ぎあること。又、其の人。をとこだて。漢書(遊俠)「張建素豪俠、賓客爲二姦利一」

かうけ-ぬん 一香華院 (名) だんなでら(檀那寺)に同じ。

かうけん 一効驗 (名) 結果の現はること。しるし。ききめ。功能。庭訓往來(四月)「修驗行者、効驗貴僧」 潛夫論(論)「士必定二於素行一、毀譽必參二於効驗一」

かうけん 一高見 (名) けだかい識見。又、他人の意見の敬稱。

かうけん 一狡犬 (名) 狡猾なる犬。こざかしき犬。曾我會稽山「狗は獸を追うて殺し、人は其處を指し示す。今諸軍

は狡犬なり」

かうけん (名) 咸光。今宮心中「是非とも親のかうげんに、在所の男持てならば、己れや死ぬるが合點か」心中萬年草「親のかうげん是非なうて、どうなりともと言ひました」

かうけん 一郊原 (名) のはら。のべ。の。朗詠「朝有二紅顏一誇二世路一、夕爲二白骨一朽二郊原一」 太平記(元相模入戸を爭ふに似たり」 蘇子瞻詩「郊原共超遠、林野雜依菲」

かうけん 一高原 (名) 【地】土地一般に高くして、且つ平坦なる所。(平原の對) 王維詩「山下孤烟遠樹、天邊獨鳥高原」

かうけん 一巧言 詞をかざりて、巧みにいふこと。口まへのうまきこと。侯辯。詩經(大雅)「巧言如レ簧、顏之厚矣」 論語(學而)「巧言令色、鮮矣仁」

かうけん 一高言 誇りたかぶりたる言。大言。慢罵。太閤記(三)「一揆ばらを、ことの外高言して」 謠(安宅)「是れぞ最期の高言と、鎧ふんばり大音上げ」

かうけん 一抗言 おしはりて物言ふこと。さからひていふこと。晉書(周芝)「鍾陳以之抗言、元皇所二爲留一慈」

かうけん 一獒犬 (名) たけき犬。猛犬。曾我虎膠「獒犬の聲、せこ鼓」

かうけん 一剛健 心などの、こはくたけきこと。易經(上)「大哉乾乾乎、剛健中正、純粹精也」

かうけん 一剛堅 こはくかたきこと。管子「杰士之次曰二五穀一、鹽之狀、彊力剛堅」

かうけん 一豪健 强くたけきこと。後漢書(董卓)「減戶殄二豪健一」

かうけん-じゅ 一好堅樹 (名) 佛經にある想像の大木。太平記(十八)「好堅樹は地の底に有つて芽百圍をなし、頻伽羅は卵の中に有つて聲衆鳥に勝ぐれたり」 智度論「譬如有樹名二好堅一、是樹在二地中一百歲、枝葉具足、一日出生高百丈」

かうけんばふ 一硬憲法 (英Inflexible constitution) (名) 【法】憲法の分類の一。通常の立法手續によりて改廢するを得ざる憲法。(軟憲法の對)

かうこ 一江湖 (名) ㊀かはと湖と。水の廣く漠くたるところ。莊子(齊)「今子有二五石之瓠一、何不レ慮二以爲一大樽一而浮二乎江湖一」 ㊁世間。地方。「江湖の士」陶潛詩「良才不二隱世一、江湖多二貧賤一」 朗詠「昔爲二京洛一華客、今作二江湖一漁倒翁」

かうこ 一好古 (名) 古への物事を好むこと。漢書(楚元)「魏文侯最爲二好古一」 孔安國文(魯)「若二好古博雅君子一、與レ我同レ志、亦所レ不レ隱也」

かうこ 一考古 (名) 古代の遺物によりて、其の時代の事物を考究すること。

かうご (名) かっぱ(河童)をいふ。備前國の方言。(博言集覽)

かうご 一香壺 (名) 薫物を入れ置く壺。源(若菜)「かうご・すりの箱」同(鬘)「御櫛の箱、打亂りの箱、かうごのはことも」

(こうか)

かうご 一高戶 (名) 酒をよく飲む人。じやうご(上戶)。西宮記(七)「酒馬」外記注(御酒勅使等名)「授二參議一(左右各一人)」

かうご 一行伍 (名) たいご(隊伍)に同じ。史記(李斯)「程不レ識、正二部曲行伍一、營陣擊二刁斗一」 漢書(鄭崇傳)「顯二足行伍之間一而拔起阡陌之中一」

かうご に同じ。

かうご 一巷語 (名) かうせつ(巷說)

かうご 一交互 たがひちがひ。かはるがはる。後漢書(左通)「自レ是、選代交互、令長月易」 京房易傳「陰陽交互」

かうご 一向後 (副) こののち。いご。きやうご。盛衰記(五、高綱)「されども今命を助けられ奉りぬれば、向後深く憑み奉り候」 岑參詩「却使二黃鷹翻向一後一」 皮日休詩「以前雖レ被二愁將去一、向後須教二酒領來一」

かうご 一豪語 豪壯なる言語。大言。壯語。

かうご-いし 神籠石 (名) 山頂の宏大なる區域を周らしたる一重の石垣。古代祭祀を行ひし遺跡なりと。

かうこう 一港口 (名) 船舶の出入りする港の口。みなとぐち。

かうこう 一江口 (名) 川の海に注ぎ入る所。かはぐち。

かうこう 一降紅 (名) 煎茶に用ふる火箸の稱。火筯(クワ)。

かうこう 一交媾 からがふ(交合)に同じ。

かうこうがい 一硬口蓋 (名) 【醫】口腔の上壁前半、鼻腔の下底をなすもの。上顎骨の一部及び口蓋骨の一部より成り、强厚の粘膜にて口腔面を包む。粘膜は血管に富み、又粘液腺を有す。

かうこう-らうちゆう 一考功郎中 (名) しきぶたいふ(式部大輔)の唐名。

かうこく 一抗告 【法】司法裁判所の裁判、又は行政廳の命令・處分に對し、其の上級官廳に、不服の申立てをなすこと。刑事訴訟法(第五編)「抗告」

かうこく きかん 一抗告期間 【法】抗告裁判所に抗告をなし得べき期間。

がうこく 一號哭 聲をあげてさけびなげくこと。號泣。 史記(管蔡)「子產病死、鄭民號哭」

かうこく-さいばんしょ 一抗告裁判所 (名) 【法】抗告を審理すべき裁判所。刑事訴訟法(第五編)「抗告裁判所」

かうこく-じやう 一抗告狀 (名) 民事事件につき、抗告人が抗告をなすために、其の不服の裁判をなしたる裁判所、又は裁判長の屬する裁判所に差し出だす書狀。民事訴訟法(第四百三十七條)「抗告は不服を申立てられたる裁判を爲したる裁判所又は裁判長の屬する裁判所に抗告狀を差出して之を爲す」

かうこく-しん 一抗告審 (名) 【法】抗告に對する裁判所の審理。民事訴訟法(第六百八十)「第六百七十三條及ひ第六百七十四條の規定は抗告審にも亦之を準用す」

かうこく-にん 一抗告人 (名) 【法】抗告をなし得る權利者。即ち、民事訴訟にては、裁判によりて不利益を受けたる訴訟當事者又は利害關係人、刑事訴訟には、檢事・被告人・證人・鑑定人。民事訴訟法(第四百六十)「抗告人」

かうこく-ぢつしたてしょ 抗告申立書 (名) 【法】刑事事件につき、抗告申立人が抗告をなすために、不服の裁判をなしたる裁判所又は豫審判事に差し出だす書狀。刑事訴訟法(第二百八十六條)「抗告申立書」

かうこく-ぢつしたてにん 抗告申立人 (名) 【法】刑事訴訟にて、抗告を申立つる人。刑事訴訟法(第四編二項)「抗告裁判所の裁判に對しては抗告申立人より更

に抗告を爲すことを得す」

かうご-けいさん 一交互計算 (名) 【商】商人間、又は商人と商人にあらざる者との間の取引にて、一定の期間内に生じたる債權・債務の總額につき、相殺をなして、其の殘額のみの支拂をなすこと。期間は契約を以て定めざる時は六箇月とし、此の期間内は、契約を解除して其の殘額の支拂を請求する外、債權の請求又は讓渡しをなすを得ず。商法第三編第三章 交互計算」

かうごけいさん-けいやく 一交互計算契約 (名) 【法】商事契約の一。商人と商人との間、又は商人と商人に非ざる者との間に平常取引をなす場合に、一定の期間内の取引より生ずる債權・債務につき相殺をなし、其の殘額の支拂をなすべきことを約するもの。

かうごけいさん-しょ 一交互計算書 (名) 【商】交互計算の勘定書。

かうごさよう 一交互作用 (英Interaction) (名) きうせい(相制)を見よ。

かうこじ 高巾子 (名) 巾子(こ)を高くし、かざしの綿とて、白き綿にてつつみたる冠。蹈歌の節に、六位の舞人の著くるもの。西宮記三巻「別又召御巾子造、仰可奉高巾子二口之由」源氏物語「かうこじの世ばなれたるさま」

かうこつ 一硬骨 (名) 【動】一骨骼の硬(こわ)きこと。硬き骨。(軟骨の對) 二強硬の意見を持して屈せざること。「硬骨の男子」

かうこつ-ぎょ 一硬骨類 (名) 【動】魚類分類の一目。骨骼の大部分、硬骨より成るもの。鰓は櫛商狀にて鰓蓋を有す。鱗は圓板狀又は櫛商狀。魚類の大部分を占む。細別して、硬鰭類・因類類・軟鰭類・喉鰾類・總鰾類の五亞目とす。

かうこ-へき 一好古癖 (名) 古器物などを弄ぶ癖。古癖。

かうさ 一巧詐 たくみに詐(いつわ)ること。「韓非子説難「衣食之業絶、則民不得」無飾巧詐」」 說苑雜言「巧詐不如拙誠」」

かうさ 一交叉 すぢかひになること。うちちがひ。ぶっちがひ。 隋書音樂「其車輪解合交叉、即爲馬槍」」

かうさ 一考査 けいさ(稽査)に同じ。

かうざ 一高座 (名) 一高き位置の席。上座。世說「尚二高座者」」 二講義又は說法の時、僧侶の上がり著く座。 齊明紀「設二仁王般若之會」」 枕三「朝座の講師清範、かうざの上も光みちたるここちして、いみじくぞあるや」」 江次第「法興寺「講堂內佛面間、東西間高座各一脚」」 三高座にて說經すること。 增鏡「高座はててのち、樂人酒胡子を奏す」」 四ししのとこ(獅子床)に同じ。

かうざ 一講座 (名) 一講義の座席。二講義すべき學科につき、特に定めたる教授の事務。帝國大學令第十「各分科大學に講座を置き教授をして之を擔任せしむ」同第十八條「講座の種類及其の數は別に勅令を以て之を定む」

かうさい 一高才 高材 (名) すぐれたる才能。けだかき人物。 後漢書賈逵傳「令逵自撰公羊嚴顏諸生高才者二十人、教以左氏」」 同蘇竹傳「高才武略、有魏尙之風」」

かうさい 一幸齋 (名) 演劇に用ふるかづらの一種。かしらの禿げたるもの。

かうさい 一交際 (さい(際)は接する義)交はり。つきあひ。 孟子萬章下「敢問、交際何心也」」

かうさい 一絞罪 (名) 生命刑の一。首をしめて生命を絶つこと。けうざい。 侍所沙汰篇「一斬罪事、獄令・流刑・獄令」」

かうさい-か 一交際家 (名) 交際に巧みなる人。

かうさいき 一嚙碎機 (名) 鐵石を碎く機械。

かうさい-くわん 一交際官 (名) 大使・公使・書記官等、外國に駐在して、外交の事務に從ふ官職。外交官。明治十九年七月勅令第四十九號交際官並領事費用條例「交際官」」

かうさい-こく 一交際國 (名) 互ひに通商・交際する國家。

がうざい-っぽ (名) 【がうざいは在鄕を逆さにしたもの】田舍人を嘲る語。ざいごっぽ。

かうさい-なで 幸齋撫 (名) 演劇に用ふる拳の一種。髮を後へ撫で下げたるもの。醫者・軍學師・劍術の師などに扮する時に用ふ。

かうさい-ひ 一交際費 (名) 一交際に要する費用。つきあひの入りよう。二職務上、交際を要する特種の官吏に、其の費用として官より給與する金錢。

かうさう 一香草 (名) 香氣ある草。香よき草。左傳僖公五年「一薰一蕕、十年尚猶有二臭一」杜注「薰香草」」

かうさう 一高相 (名) 高貴の人相。宇治拾遺「汝やんごとなき高相の夢見てけり」」

かうさう 一行裝 (名) 旅行の支度。いでたちのさま。旅裝。漢書南粵王太后、飭二治行裝重寶一、爲二入朝具一」」 岑參詩「回風馳二別酒一、細雨濕二行裝一」」

かうさう 一靠槽 (名) 馬の、胸前の下にある旋毛(つむじ)。

かうさう 一抗爭 はりあふこと。逆らひ爭ふこと。

かうさう 一降霜 霜のふること。漢書禮樂「中木零落、抵冬降霜」司馬相如文長門賦「望中門之鶴鶴兮、若季秋之降霜」」

かうさう 一高燥 土地の、高くして濕氣少なきこと。漢書賈誼傳「廼行營高燥地、令旁可置萬家者」」

かうざう 一香象 (名) 深き河海をもかち渡りすといふ、極めて大なる想像上の象。太平記十四「宋幢寫眞」香象の波を蹈んで大海を渡らん勢の如く」 涅槃經「如二彼駛河、能漂二香象一」義楚六帖「香象爲二象名一、香象渡河、則欲底截流」」

かうざう 一更造 あらためつくること。改造。 左傳僖公廿年「皆更造之文也」」

かうさう 一豪爽 氣性の、すぐれてさわやかなること。 晉書王濟傳「溫豪爽有風槩」」

かうさう 一豪壯 元氣のつよく盛んなること。はなやかに盛んなること。 陸游詩「前年膾鯨東海上、白浪如山寄豪壯」」

かうざ-さぶ 一講座給 (名) 講座の受持に對し、本俸に附加して特に給與する俸給。

かうさく 一視告朔 (名) 【視の字よまざるを例とす】古へ毎月朝日に、百官の行事・上日(ノボリ)を記したる文を、天皇の御覽ぜらるる儀。後、毎月の制廢されて、正月・四月・七月・十月の月始めにのみ行ふ。天武紀上「九月丙寅朝雨、不二告朔一」」 北山抄三「十月朝日視告朔事」」

かうさく 一高作 (名) 人の詩文などをいふ敬語。御作。

かうさ-さく 一交錯 彼れ此れ入れちがふこと。入り交じること。錯綜。詩經小雅「猷酬交錯」 史記司馬相如「交錯糾紛、上干青雲」」

かうさく 一耕作 田畠を耕して、穀物・野菜を作ること。砂石集三「時料の爲めに耕作なんどせさすること、さすが由なく、罪深く思ひける」 韓非子五蠹「耕作而食之、鑿井而飲之」 韓愈文送韓侍御序「邊軍皆不知耕作、開口望二哺」」

かうざく 警策 (名) きやうざく(警策)に同じ。 宇津保俊蔭「かの御あるじの、になくかうざくなりつれば」 同初秋「せんかうのをしきどもに、香いとかうざくにし出だされたり」 源東屋「御心はいみじくかうざくに、おもおもしくなんおはしける」」

かうさく-けんかい 一耕作限界 (名) 【法】耕作地の生產額が、其の生產費と等しくして殘餘なきに至れる境界。耕境。

かうさくげんかい-ち 一耕作限界地 (名) 【經】耕作限界にある土地。即ち、現在の耕作地中、生產力の最も劣等なる土地。耕境地。

かうさく-にん 一耕作人 (名) 耕作をなす人。農夫。 狂言瓜盜「籠り出でたるは、此のあたりの耕作人でござる」」

かうさく-のう 一耕作農 (名) 耕作を專業とする農。

かうさ-けっこん 一交叉結婚 (名) 異なれる種族の、互ひに結婚すること。(親族結婚の對)

かうさ-じ 香匙 (名) 香道具の一。組香の本香などをすくひ取るに用ふる匙。

かうざ-せい 一講座制 (名) 大學などにて、各講座を教授の基本として組織する制度。

かうさつ 一高札 (名) 一昔時、法度・捉書等を記して、町中などに高く揭げたる板札。二他人の書札の敬稱。

かうさつ 一高察 他人の推察の敬語。御察し。 庭訓往來八月「不二遑二秀筆一、只仰二高察一而已」」

かうさつ 一考察 考へ察すること。 漢書朱買臣傳「考察不從二教令一」」 杜預文「弘宣六典、以詳二考察一」」

かうさつ 一絞殺 縊(くび)り殺すこと。

かうさつば 高札場 (名) 高札を揭ぐる場所。

かうさ-てん 一交叉點 (名) 交叉する部分。又、其の地點。

かうざま 一格狹間 (名) げんしやう(眼象)に同じ。

かうざま 一斯樣 (副) かくのさま。此のやう。かくさま。 雄略紀「東西(カウサマ)」」 源御堂「かうざまの事は、親などにも、さわやかに、わが思ふさまとて、語り出でがたき事なれど」」

がうざむらひ 郷侍 (名) がうし(郷士)に同じ。井筒業平河內通「官軍は郷侍・野武士を集めて、御勢三百餘騎」」

がうざ-ゆのみ 高座湯呑 (名) 寄席藝人が、高座にて用ふる湯呑茶碗。

かうざ-さん 一降參 戰ひに負けて、敵に降だること。降服。保元白河殿攻落「弓を伏せて降參仕れ」 太平記十九「宮方敵國「山門より降參したりし大館左馬助氏明」」

かうさん 斯樣 (副) かうざま(斯樣)の訛り。

かうし 一江山 (名) 川と山と。山川。莊子山木「彼其道遠而險、又有二江山一」」

かうざん 一高山 (名) たかきやま。たかやま。 詩羽獵「萬里の高山に雲忽ちにおこり、一樓の明月に雨はじめて霽れたり」」 詩經頌「天作、高山、大王荒之」」 書經禹貢「覃二高山大川一」」

かうざん 一高山流水 高き山と流るる水と。高尙・括潛なる趣味に譬へていふ語。

かうざん-しょくぶつ 一高山植物 (名) 【植】植物學上の用語。高山に自生する植物の總稱。高山は氣候常に寒冷にて暖期甚だ短き爲め、植物は形矮小にして、夏期に至れば一時に花を開き實を結び、紅白一時に散りたる觀を呈す。岩高蘭(イハカウラン)・いはひげ・岩梅(イハバイ)・つがざくら・越橋(コモモ)・たうやく・龍膽(リンダウ)等の類。

かうざん-やき 江山燒 (名) 伊豫國より產する陶器の一。樂燒・南蠻燒の花瓶置物に類す。

かうし 庚申 (名) かうしん(庚申)の略。(閻魔名物考)

かうし 格子 (名) 一寢殿造の建具の一。細く角なる木を縱橫に組み合はせて作りたるもの。柱と柱との間にはめ、上下二枚にして、上なるをば釣り上げ、下なるをば立て置くを常とす。竹取「かうしどもも、人はなくしてあきぬ」」 宇津保樓上「寢給へる間に當たるかうしを打ち叩きて」」 源帚木「かうしをあげたりければ」」 二、建築)細き木又は竹を、縱橫に間を透かして組みたるもの。窗などに取り附く。 三ねりぬきの一種。恭盤の目の如く、竪橫に筋を織りたる織物。續古事談「ふたあるのかうし、ぬののかりばかま」」 增鏡「松がさね・白かうし・浦山吹」」 條條聞書「女中衆も、かうしの織物うちまかせては、えめし候はず候」」 四大夫の次、局女郎の上なる遊女。大格子の內を部屋に構へ居るよりいふ。格子太夫。傾城酒呑童子「近い內、格子へ出す、太夫にすとの用意を聞けば」」

かうし のつぼ 格子坪 格子の、骨と骨とのすきま。格子の目。枕「かうしのつぼなどに、さと、きはをことさらにしたらんやうに、こまごまと吹き入りたるこそ、荒かりつる風のしわざともおぼえね」」

かうし 一孝子 (名) 善く父母に事ふる子。孝行の子。十訓「忠孝一の事なれば、孝子の振舞此の內に侍るべし」」 詩經大雅「孝子不二匱、永錫二爾類一」」 禮記祭稱「孝子孝孫、喪稱二哀子哀孫一」」

かうし 一孝志 (名) 孝行を盡くす心。保元上「御憂愁之後、抱二萬事一致二追善孝志一」」

かうし 一高士 (名) 節操たかき人。高潔の人。又、世を遁れたる隱者。史記伯夷「吾聞、魯仲連先生、齊國之高士也」」 後漢書逸民傳「此必南州高士徐孺子也」」

かうし 一好士 (名) すぐれたる人。文雅の士。庭訓往來三月「花鳥風月好士所學、詩歌管絃嘉齡延年方也」」 毛吹草「一人の好士より三人の愚者」」

かうし 一講師 (名) 本官にあらざれども、學校の囑託を受けて或る學科を教授する人。

かうし 一嚆矢 (名) 【かう(嚆)はさけびよぶこと、嚆矢は鳴り矢の義】古へ支

那にて、戰爭の始めに、嚆矢を射出だしたるより、物事の始めをいふ。莊子在宥篇「知曾史之不幸爲禁跖嚆矢也」

かう-し 香脂 (名) 動物の脂肪等を製し、芳香を入れて固めたるもの。こすめちっく・の類。

かう-し 嚆齒 (名) 白き齒。美人などにいふ。韓非子說難篇「曼理嚆齒、悅情而損精」漢書司馬相如傳「嚆齒粲爛」

かう-し 考思 かんがへ思ふこと。思案。

かう-し 考試 しけん(試驗)に同じ。禮記眞「視學、謂考試學者經業」漢書王莽傳「下大夫博士平當等考試」

かう-し 郊祀 支那にて、郊野にて王者の天を祭ること。孝經「昔者周公郊祀后稷以配天」史記武帝紀「陛下肅然郊祀、上帝報享」

かう-し 更始 (名) 更(アラ)まり始まること。あらため始むること。禮記三年「在天地之中者、莫不更始焉」

かう-し 行使 つかふこと。用ふること。刑法第百四十八「僞造變造の外國の貨幣紙幣又は銀行券を行使し又は行使の目的を以て人に交付し若くは輸入したる者」

かう-し 行死 死に行ふこと。死刑に處すること。太平記三三人斬首「行死定まりて後三奏すといへり」

かう-じ 勘事 (名) 一勘當。宇津保蔵開中「みけしき惡しければ、かうじ許さるるまでなん」後撰雜上「父母侍りける人の娘に、忍びて通ひ侍りけるを聞きつけて、かうじせられ侍りけるを」二拷問。宇治拾遺「身を働かさぬやうにはりつけて、七十度のかうじを

かう-じ 柑子 (名) (かんしの音便) 一植芸香科、柑(コウ)屬の落葉喬木。柑(コウ)の一品種。果實に酸味多く、果皮薄きもの。かうじみかん。二植みかん(柑)の異名。宇津保蔵開中「梨・かうじ・橘・あらまきなどあり」三かうじいろ(柑子色)の略。狩鏡「紫のにほひ・山吹・青にび・かうじ」四襲の色目の名。表・裏共に朽葉色の濃きもの。源氏紫上

かう-じ (名) 一植からたちばな(百兩金)の異名。二やぶかうじ(紫金牛)の異名。

かう-じ 講師 (名) こうじ(講師)を見よ。

かう-じ 好事 (名) よき事。めでたきこと。よき行ひ。善事。(惡事の對)周禮內小「后有好事于四方、則使往」五代史周本紀「當與公等、作好事以報上天」

(誹)好事魔多し 好きことには妨害入り易し。通俗編「好事多魔」

(誹)好事も無きにしかじ 惡事ならずとも不急の事は、徒らに手數を煩はすのみなれば、無き方優るべし。北條時分諫留「好事不如無」信長記十三淨土宗勢「好事も無きにはしかじ。急ぎ無事を整へよ」碧巖集「好事不如無」

(誹)好事門を出でず 善行あるも、其の譽れの傳はるや甚だせまし。(惡事千里を行くの對) 誡齋「好事門を出でず、惡事千里を行けども、子を忘れぬ親心なるに」北夢瑣語「好事不出門、惡事行千里」

かう-じ 行事 (名) 事を行ふこと。

かう-じ 香餌 (名) 一味よき餌(エサ)。三略「軍讖曰、香餌之下必有懸魚、重賞之下必有勇夫」二人に啗(クラ)はす利益。

かう-し 郷司 (名) さとをさ(里長)に同じ。東鑑四月仁治二年「古庄郷司近藤太」

かう-し 郷士 (名) 田畠を所有して其の地に土著せる武士。がうざむらひ。

かう-じ-あかけ 柑子赤毛 (名) かうじくりげ(柑子栗毛)に同じ。

かう-し-あげおろしやく 格子上下役 (名) かうしばん(格子番)に同じ。東鑑四月仁治元年十二月廿九日「御格子上下役」

かう-しいはひ 格子祝 (名) 古へ遊里にて、遊女が客の來たらぬ時、近邊などを散歩して客の來たるまじなひとすること。大阪地方の語。重井筒「餘り餘所が賑さに、格子祝に出ました」

かう-じ-いろ 柑子色 (名) 黃色の黑ばみたるもの。十訓「いまだいろなりければ、かうじ色の袴著て、にぶ色のきぬどもきて」名目抄「柑子色(カウジイロ)」

かう-じ-ぐ 剛柔 (名) こはきことと、やはらかきことと。易經上繫「剛柔始交而難生」左傳昭公廿年「剛柔・遲速・高下」

かう-しう-いも (名) 一植じゃがたらいも(馬鈴薯)の異名。

かう-しう-うやく 衡州烏藥 (名) 一植防己科、木防己(ツヅラフジ)屬の直立する落葉灌木。葉は互生、長楕圓狀披針形、鋭頭にして全緣、葉柄を有し、花は圓錐花序に排列す。我が國、琉球の庭園に栽培せらる。ごめごめじん。

かう-しう-ざぬ 杭州絹 (名) 清國浙江省杭州府より產する緞子・壽綢等の絹物。

がう-しう-まい 江州米 (名) 近江國より產出する米。近江米。

かう-しおろし 格子下 (名) 格子女郎の客少なきものを、一階下ろして散茶女郎となすこと。細可亭「江戸新道」商ひのない里は時雨れて松淋しの句格子おろしの夢ぞはかなき」吉原つれづれ草「角町の但馬は格子おろしにて、座附大やう、古への形殘りてやさしき女郎なり」

かう-し-がくれ 格子隱 (名) 人に見られじとて、暫くかくること。隱言集覽

かう-じ-かは 柑子革 (名) かうじ色に染めたる革。

かう-じかはをとし 柑子革緘 (名) 鎧の札を柑子革にて包みたるもの。

かう-じ-かひ 柑子買 (名) 柑子を買ひ集めて賣るを業とする人。狂言柑子「いつもの柑子買がのぼったによって、柑子を皆賣って」

かう-しき 香敷 (名) 香を薰くとき、火の上に敷く具。方七八分許りの雲母の薄片に金銀の箔を附けたるもの。古代のは銀の薄片なりしより銀葉(ギンヨウ)ともいふ。ひしき。

かう-じき 好時期 (名) よきをり。佳期。

かう-し-くさり 格子鎖 (名) 格子の形に編みたる鎖。

かう-しくさび 格子鍬 (名) 農具。すかしの孔ある鍬。まどぐは。すかしぐは。

かうじ-くりげ 柑子栗毛 (名) 馬の

毛色。栗毛のかうじ色を帶びたるもの。かうじあかげ。庭訓往來六月「馬者連錢葦毛・柑子栗毛」

かう-しこ 格子子 (名) 格子を組み立つる縱橫の細き木。

かう-じこう 好時候 (名) よき時候。

かう-しさん 硬脂酸 (名) 【化】すてありん酸に同じ。

かう-し-じま 格子縞 (名) 格子の形したる縞がら。天網島「かぶる蒲團の格子縞」

かう-しすぢ 格子筋 (名) ごばんじま(非盤縞)に同じ。

かう-し-だいふ 格子太夫 (名) (格子の中を部屋に構へて居るより云ふ)江戸時代、娼妓の一。太夫より下、つぼね女郎より一段高きもの。格子女郎。洞房語園雜部「かうしだいふの名、京都の天神に同じ」

かう-じ-たちばな 柑子橘 (名) 【植】かうじみかん(柑子密柑)をいふなるべし。榮華物語御車「かうじ橘、ごき一つばかりを丸袋にいれて」

かう-しち 一香室 (名) 佛語。佛堂の稱。釋氏要覽「西方名佛堂爲健陀俱眠、此云香室、不稱佛堂佛殿者、蓋不欲親觸塗漆故」

かう-し-ぢょらう 格子女郎 (名) かうしだいふ(格子太夫)に同じ。冥途飛脚「格子女郎衆の手前もあり」洞房語園雜部「太夫の次を格子女郎といふ」

かう-しつ 一膠漆 (名) にかはと、うるしと。親密にして離れ難きことに譬ふ。韓非子說難篇「親無膠漆之約、於當世」

かう-しつ 一香室 (名) 佛語。佛堂の稱。釋氏要覽「西方名佛堂爲健陀俱眠、此云香室、不稱佛堂佛殿者、蓋不欲親觸塗漆」

かうし-ぢょらう 格子女郎 (名) かうしだいふ(格子太夫)に同じ。冥途飛脚「格子女郎衆の手前もあり」洞房語園雜部「太夫の次を格子女郎といふ」

かう-しつ 一膠漆 (名) にかはと、うるしと。親密にして離れ難きことに譬ふ。韓非子說難篇「親無膠漆之約、於當世」

かうし-はいていしき 一高次方程式 (名) 一鎌倉幕府の職名。警中に宿直して、格子の開閉を掌る。かうしあげおろしやく。東鑑四月十三、建暦元年四月三日「御格子番事」

かう-しぶ 一講習 學業を修めならふこと。易經下經「麗澤兌、君子以朋友講習」

かうし-ぶくわい 一講習會 (名) 學問・技藝を講習する爲めに設けたる會。「夏期講習會」

かうし-ぶ-じょ 一講習所 (名) 學藝を講習する所。學び習ふ所。

かうじ-みかん 柑子蜜柑 (名) 【植】かうじ(柑子)の異名。

かう-しゃ 一香車 (名) 香木にて作りたる車。太平記天文大塔宮「華軒香車の外を出でさせ給はぬ御事なれば」

かう-しゃ 一絞車 (名) しゃち(車地)に同じ。

かう-しゃ 一郊社 (名) 支那にて、天地及び土地の神を祭ること。中庸「郊社之禮、所以事上帝也」

かう-しゃ 一校舍 (名) 學校の建物。學校。小學校令第二十「校舍」後漢書明帝紀「明帝爲功臣子孫四姓末屬、別立校舍、搜選高能、以授其業」

かう-しゃ 一絳紗 (名) 紅色の紗。浦島年代記「入しやかつら龍王、通天の冠・絳紗の袍・碧玉の圭を正しうして、白玉の床に就き」

かう-しゃ 一向斜 (名) 【地】地殼褶曲の結果、生ずる凹狀部。(背斜の對)

かう-しゃ 一巧者 物事に熟練したること。物事に巧みなること。又、其の人。上手。老練。別所長治記「大力の巧者を組打ちに打取り」狂言吟賦「六郎兵衛樣とて、何もにかうしやなお方がござるほどに」莊子「巧者勞而、知者憂」唐書高崇文傳「擧羯帑藏百工之巧者、皆自隨」

がう-しゃ 一豪奢 おごりてはでやかなること。奢侈。驕奢。張正見詩「聊持自娛樂、未是聞豪奢」

かう-しゃう 一好尚 (名) このみ。嗜好。

がう-しゃう 一行障 (名) ほしやう(步障)に同じ。醫術「內匠寮式「小行障四具料和名抄「行障六具」

かう-しゃう 一巧匠 (名) 巧みなる大工。庭訓往來四月「巧匠・番匠」史記扁鵲傳「巧匠不ト斲兮、孰察其揆正」

かう-しゃう 一降將 (名) 降參したる將帥。

かう-しゃう 一交床 (名) かましき(釜敷)に同じ。煎茶に用ふるにいふ。

かう-しゃう 一綱掌 (名) 法會の式をつかさどる僧の役名。僧綱職令「綱掌、法師也。上には袍、下には袴袴、白色也。菊之赤色の小五帖袈裟掛也」榮華音樂「綱掌といふもの出できたり」

かう-しゃう 一行商 店舗を定めず、諸處を巡行して貨物を賣買すること。又、其の人。ぎやうしやう。市制第九十「店舗を定めざる行商」賣藥規則第七「賣藥營業者及び請賣者に於て自ら行商し又は賣子を派出して行商を爲さしめんと欲するときは其由を管轄廳へ屆出行商鑑札を願受け行商する時は必ず之を所持すべし」

かう-しゃう 一行賞 賞與すること。「論功行賞」禮記月令「孟夏之月中略迎夏于南郊、還反行賞、封諸侯」

かう-しゃう 一高唱 聲高くとなふること。西京雜記「後宮嬪、首高唱」

かう-しゃう 一高翔 空高くかけること。

四日太政官布告「鄕社」

がう-しゃ なること。奢侈。驕奢。張正見詩「聊持自娛樂、未是聞豪奢」

かう-しゃう 一好尚 (名) このみ。嗜好。

がう-しゃう 一行障 (名) ほしやう(步障)に同じ。醫術「內匠寮式「小行障四具料和名抄「行障六具」

かう-しゃう 一巧匠 (名) 巧みなる大工。庭訓往來四月「巧匠・番匠」史記扁鵲傳「巧匠不ト斲兮、孰察其揆正」

かう-しゃう 一降將 (名) 降參したる將帥。

かう-しゃう 一交床 (名) かましき(釜敷)に同じ。煎茶に用ふるにいふ。

かう-しゃう 一綱掌 (名) 法會の式をつかさどる僧の役名。僧綱職令「綱掌、法師也。上には袍、下には袴袴、白色也。菊之赤色の小五帖袈裟掛也」榮華音樂「綱掌といふもの出できたり」

かう-しゃう 一行商 店舗を定めず、諸處を巡行して貨物を賣買すること。又、其の人。ぎやうしやう。市制第九十「店舗を定めざる行商」賣藥規則第七「賣藥營業者及び請賣者に於て自ら行商し又は賣子を派出して行商を爲さしめんと欲するときは其由を管轄廳へ屆出行商鑑札を願受け行商する時は必ず之を所持すべし」

かう-しゃう 一行賞 賞與すること。「論功行賞」禮記月令「孟夏之月中略迎夏于南郊、還反行賞、封諸侯」

かう-しゃう 一高唱 聲高くとなふること。西京雜記「後宮嬪、首高唱」

かう-しゃう 一高翔 空高くかけること。

と。曹植詩「願爲二比翼鳥一、施レ翮起高翔」

かう-しゃう 〔高尚〕 ㊀志操のけだかきこと。卑俗ならざること。易經上繫「不レ事二王侯一、高二尚其事一」 ㊁學術などの、高く深きこと。程度高くして解し易からざること。

かう-じゃう 〔綱常〕 〔かう(綱)は三綱、じゃう(常)は五常〕人の履むべき道。さんかう(三綱)及びごじゃう(五常)を見よ。宋史董槐傳「正二綱常一、以勵二所レ學」」元史許衡傳「綱常不レ可二一日而亡一於天下一」

かう-じゃう 〔交情〕 交際のよしみ。交友の情誼。朗詠「淡水交情老始知」漢書鄭當時傳「一死一生、廼知二交情一」

かう-じゃう 〔好情〕 よき感情。好意。

かう-じゃう 〔高聲〕 かうせい(高聲)に同じ。宇治拾遺「上人高聲に云ふやう」謠曲「高聲に下知すれば」

かう-じゃう 〔江上〕 河のうへ。呂氏春秋「伍員至二江上一、欲レ涉」吳均詩「露下寒霞中、風起秋江上」

かう-じゃう 〔考狀〕 考課を記して官に上つる書。考課令「凡應考之官、犯罪案成者、考日卽附二考狀一」

かう-じゃう 〔膏壤〕 地味肥えたる地。膏腴の土壤。沃埴。

かう-じゃう 〔向上〕 ㊀上に向かひて進むこと。道歩。莊子人間世「無二以道一者、言更無向上者也」 ㊁より上。以上。朗詠「幸逢二堯舜無色化一、得レ作二犧皐向上人一」 ㊂最上。最高。諸侯下「さて向上の一路は如何」 甲陽軍鑑「他國に進ひ、武田の弓矢向上也」 回英 Aspiration)【哲】現在の狀態、若しくは位地を不完全又は不滿足として、更に高尚・善美なる理想を望み、之に向かひて專心努力すること。 ㊃【宗】我欲の念を絶ち、邪を去り、德を修め、深き信仰によりて神と調和せんことを希ふこと。

かう-じゃう 〔豪商〕 富豪なる商人。富み榮えたる商人。

かう-しゃう 〔强將〕 强き大將。きやうしやう。猛將。武陰叢話「天正十五年三月秀吉公筑紫へ御動座、中略島津は元より强將なり」

かう-じゃう 〔强情〕 意地の强きこと。强愎。

かう-ざん 〔高盛山〕 兜の鉢の形の名。少し鋭くして高きもの。かうしやうざん。

かう-しゃう-ぎん 〔行賞賜金〕 國家の事件に對し、特別の功勞ある人人に賜ふ金圓。明治三十九年八月勅令第二百十二號「行賞賜金」

かう-じゃう-しゅぎ 〔向上主義〕 【哲】向上 ㊁によりて、ますます自己を發展せしめんとする主義。

かう-しゃう-たい 〔行商隊〕 たいしやう(隊商)に同じ。

かう-じゃう-だか 〔高聲高〕 (名・副) こわだか。狂言長光「私は田舍者で、何を申せども高聲だかにござるによって」

かう-しゃう-にん 〔行商人〕 行商をなす人。ぎやうしやうにん。行商。

がう-じゃう-もの 〔强情者〕 强情なる人。がにはりもの。

かう-しゃ-がん 〔硬砂岩〕 砂岩の一種。堅硬・緻密にて、色は綠また綠灰等なり。鉛石などに用ふ。

かう-しゃく 〔講釋〕 ㊀義理を說き明かすこと。心中二枚繪草紙「おやまをよねと云ふ、今講釋がきこえた」 ㊁ぐんだん(軍談)に同じ。 ㊂次條の略。貞丈五人兄弟「謠ひ・講釋・辻放下・まひまひ・讀賣りさまざまに」

かう-しゃく-し 〔講釋師〕 ぐんだんし(軍談師)に同じ。淑田問答「今の講釋師を、昔は太平記よみと申して」

かう-しゃく-ば 〔講釋場〕 講釋をする席。最明寺百人上臈「當代和歌に名を得たる河內守光行が、光源氏の講釋場」

かう-しゅ 〔校主〕 學校の持主。

かう-しゅ 〔絞首〕 ㊀首をしめて殺すこと。 ㊁死刑執行の方法の一。刑法第十條「死刑は監獄內に於て絞首して之を執行す」

かう-しゅ 〔耕種〕 田畑を耕し種(う)うること。莊子讓王「春耕種、形足二以勞動一」漢書食貨志「善田者受二田百畝一、學二耕種養苗法一」

かう-しゅ 〔行酒〕 饗宴にて、列座の人人に酒をつぎめぐること。桃華蘂葉「讀樣事中略行酒(ぎやうしゅ)」

かう-しゅ 〔交手〕 さす(叉手)に同じ。

かう-しゅ 〔巧手〕 たくみなること。又、その人。上手。巧者。手練。

かう-じゅ 〔高壽〕 (名) 長生の者。高年。高齡。宋史孝宗紀「其閒父子怡愉、同享二高壽一」

かう-じゅ 〔香薷〕 (名) 【植】なぎなたかうじゅ(香薷)の異名。

かう-じゅ 〔講授〕 學藝などを教授すること。漢書儒林傳「勝每二講授一、謂二諸生一曰、士病不レ明二經術一」後漢書皇甫嵩傳「王莽末、因住二東海一、立二精舍一講授」

がう-しゅ 〔鄉主〕 (名) 一鄉の長。鄉主家忠日記元龜二年七月廿五日「遠州濱名の鄉主」

がう-しゅ 〔强酒〕 酒を飲むに强きこと。多量に酒を飲むこと。大酒。

がう-しゅく 〔亢宿〕 (名) かう(亢)に同じ。

かうしゅ-たい 〔絞首臺〕 (名) 絞罪執行に使用する臺。

かう-じゅん 〔孝順〕 父母の心にさからはず、能く事ふること。國語「孝順以納二之忠信一以發二之一」

がう-しゅん 〔豪俊〕 才智の衆人にすぐれたること。又、其の人。史記樂生傳「時問二邑中賢士豪俊一」漢書董仲舒傳「選二豪俊一、講二文學一」

かう-しょ 〔高書〕 (名) 人の書翰又は著書の敬稱。

かう-しょ 〔行署〕 (名) 太政官の史生の唐名。

かう-しょ 〔校書〕 (名) げいぎ(藝妓)の異名。事文類聚「元微之元和中使二蜀籍妓薛陶一者有才色、府公嚴司空知之、遣陶往侍焉。嘗賦二校書一、贈之詩曰、萬里橋邊薛校書、枇杷花下閉門居、洛陽才子知多少、管領春風盡不知」

かう-しょ 〔巷所〕 (名) 洛外の居家をいふなるべし。運歩色葉「巷所(京中小路の仮居家をいふなり)」

かう-しょ 〔講書〕 書籍を講義すること。宇津保田鶴「此の史記のかうしよも、今までつかうまつり侍らず」

がう-しょ 〔綱所〕 (名) ㊀そうがうしよ(僧綱所)に同じ。玄蕃寮式「凡任二僧綱一者中略於二綱所一、設二衆僧並勅使・參議及少納言・弁官・式部・治部寮等坐一」 ㊁そうがう(僧綱)に同じ。海人藻芥「綱所・威儀師、令レ奉二行法會一、是任二總法勝一給故也」

かう-しょう 〔高蹤〕 (名) けだかき行跡。

かう-しょう 〔講誦〕 書物・詩歌などを講ずること。朗詠「春花面面隔二入酣暢之筵一、曉鼎鼎歷豫二參講誦之座一」史記樂毅傳「高皇帝誅二項籍一、聚二兵圍一魯、魯中諸儒尙講誦、絃歌之音不レ絕」

かう-しょう 〔講頌〕 歌會の時、歌を吟詠する役。真治六年中殿御會記「次講頌の人を召す(序を讀ませんために、別紙にてこれを召ゐる)」

かう-しょう 〔考證〕 物事の說明の爲めに、文書を考へ、證據を求むること。

がう-しょう 〔號鐘〕 (名) 相國の鐘。

かう-しょう-がく 〔考證學〕 (名) 漢學の一派。博く古書に徵して古義を考へ、經書の眞相を解かんとする學問。

かう-しょう-くわん 〔高勝鐶〕 (名) 兜の鉢の後にある鐶。總角(アゲマキ)又は笠印(カサジル)を附く。笠標の鐶。ほろつけ。

かう-しょう-ぜん 〔高勝山〕 (名) かうしやうざん(高盛山)に同じ。

かう-しょく 〔好色〕 (名) ㊀女色を好むこと。いろごのみ。大織冠「親は忠義に命を捨つる、子は好色に身を寶し」論語子罕「吾未レ見二好レ德如二好レ色者一也」 ㊁美しき顏色。又、其の女。諸國話中に祇王は好色の其の名にめでて、參殿の始めよりも色深く、比翼連理の其の契り」大學「如二惡惡臭一、如二好レ好色一」 ㊂色好みの女。遊女など。東鑑寶治元年十月廿九日「於二下下馬橋西頗好色家一、有二酒宴・龜舞會一」廻國雜記「大磯の宿といへる所は、古へ虎といひける好色の住みける所となん」

かう-しょく 〔耕殖〕 田をたがやし、穀をううること。耕作。史記律書「率二牛・率者耕也。言地雖レ凍能耕而生也。牛者耕殖、種萬物一也」陶潛文「辭去家貧、耕殖不レ足二以自給一」

かう-しょく 〔耕織〕 田をたがやすこと。機(ハタ)を織ること。

かう-しょく 〔交織〕 木綿・絹絲・毛等をまぜて織ること。又、其の織物。まぜおり。

かうしょく-か 〔好色家〕 (名) 色ごのみの人。すきもの。

かうしょく-かん 〔好色漢〕 (名) 好色なる男。

かうしょく-ぼん 〔好色本〕 (名) 小說の一種。主として男女の情事を描きたるもの。元祿時代前後に多く行はる。

かうしょく-もの 〔好色者〕 (名) こうしょくか(好色家)に同じ。鎌歌加留多「濃口と云ふ好色ものに伴ひ、浮名を流す左京の遊」

かう-じる 〔高(自動)〕 かうず(高)の轉。「病がかうじる」「響りがかうじる」

かう-しん 〔庚申〕 (名) ㊀えと(干支)の一。かのえさる。宇津保菊宴「二月の中の十日、年のはじめのかうしん出で來るに」 ㊁かうしんまち(庚申待)の略。枕「庚申せさせ給ひて女房に歌よませ給へば」拾芥抄上本「庚申。人腹中有二三尸一、爲二人大害一、常庚申之夜、上昇二天童一、記二人罪過一、絕二人生一。鎭二庚申之夜一、不レ寢、則不レ得二上天一」諸經要集 ㊂かうしんしやうめん(庚申青面)の略。

かうしん のなないろ 庚申七色 庚申に供ふる七色の菓子。

かう-じん 〔孝心〕 (名) 孝行の心。孝志。川中島合戰「勸介入道道鬼が孝心を美賞し、數百駄の鹽を送られし心入れ」禮記祭義「喪之朝也、順死者之孝心也、其哀離其室也」

かう-しん 〔抗心〕 (名) 反抗せんとする心。

かう-しん 〔幸臣〕 (名) 寵愛せられたる臣下。寵臣。韓非子「此幸臣之所以得二狀主成一私者也」

かう-しん 〔衡振〕 (名) 陣立の名。大友興廢記(伊藤三位入道「鉾先をとらば衡振を取るべし」

かう-しん 〔更新〕 ㊀あらたまり、又あらたむること。改新。革新。唐書儒學傳「陛下制詔曰、常赦不レ免皆原之、此非二直赦一、有詔二亦與二天下一更新辭也」 ㊁【法】前の法律關係が、滿期により消滅せんとする場合に、同一の當事者が、更に之と同一の法律關係を繼續すること。民法第二百五十六條三項「更新」 ㊂杯葉の語。現代の森林を伐採して、次代の森林を養成すること。

かう-しん 〔行進〕 ㊀しんかう(進行)に同じ。 ㊁前進する隊伍の運動。

かう-しん 〔亢進〕 昂進 たかまり進むこと。「神氣亢進」

かう-しん 〔向進〕 むかひ進むこと。前進。

かう-じん 〔行人〕 (名) ㊀道行く人。旅行する人。旅人。朗詠「巴猿三叫、曉霜二行人之袂」諸國話「佛神の御加護や有りけん、行人安穩に、布帆恙もなく渡唐仕りて候」易經上繫「行人得二牛、邑人災也」 ㊁使者。周禮秋官「大行人掌二大賓之禮一、及大客之儀、以親二諸侯一」

かう-じん 〔高人〕 (名) 身分高き人。用明天皇職人鑑「或る時は貴人・高人の執權・お使なんどと僞って」

かう-じん 〔降人〕 (名) かうにん(降人)に同じ。

かう-じん 〔鮫人〕 (名) 想像の魚の名。其の淚は珠玉なりといふ。かうじんのたま(鮫人玉)を見よ。謠曲「我れは鮫人といへる魚の精なり」

かうじん のたま 鮫人玉 鮫人晉で陸に上ぼりて人家に寄寓す。去るに臨みて主人に器を求め、泣いて珠を出だして盤を滿たすといへる支那の故事。用明天皇職人鑑「怒れる淚はらはらと、鮫人が玉を貫けり」

かう-じん 〔幸甚〕 ありがたしといふこと。何よりのしあはせ。(書狀の末などにいふ)雲州消息「改年之後、當貴萬福、幸甚幸甚」史記晉世家「二子頓首曰、幸甚幸甚」

がう-しん 〔毫鍼〕 (名) 鍼治に用ふる鍼。はり。

がう-じん 〔拷訊〕 がうもん(拷問)に同じ。保元「七十五度の拷訊を致す」

かう-しん-いうぎ 〔行進遊戲〕 (名) 種種の步法によりて遊戲するもの。

かうしん-うんどう 〔行進運動〕 (名) 前條に同じ。

かうしん-かう 〔降眞香〕 (名) 香料の名。琉球・支那・暹羅等に產する木より製するもの。

かうしん-かぜ 〔庚申風〕 (名) 庚申のある日ひく風邪。よくかかり易きものなりといふ。俚言集覽

かうし-しゃうめん 一庚申青面 (名) 庚申待に祭る神。

かうし-じゅつ 一降神術 (名) 神おろしの術。

かうし-だう 一庚申堂 (名) 庚申青面を祀りたる堂。冥途飛脚「頼まば頼めかのえ申、庚申堂よと伏し拜み」

かうし-づか 庚申塚 (名) 道路の邊などに、庚申を祭りたる塚。多くは三猿の形を刻みたる石などを立つ。奴師勞之「木曾道中には廿三夜と庚申塚の石表多し」

かうし-づき 庚申月 (名) 庚申のある月。

かうし-てき-せきるゐはふ 一向進的積累法 (名) 【論】次條に同じ。

かうし-てき-れんさはふ 一向進的鎖法 (英 Progressive sorites) (名) 【論】一つの三段論法の前提のみを掲げ、其の斷案を略して、直に他の三段論法の前提を繋ぎ合はせ、一つの命題の賓辭が、次に來る命題の主辭となり、かくて最後の命題、即ち斷案に於いては、最初の主辭が主辭となり、斷案の直ぐ前の命題が賓辭となる複雜なる三段論法。例へば、甲は乙なり、乙は丙なり、丙は丁なり、丁は戊なり、故に甲は戊なりの類。向進的積累法。

かうし-ばら 月季花 (名) 【植】薔薇(ラ)科、薔薇屬の常綠灌木。幹の高さ四五尺。葉は羽狀複葉、各小葉は楕圓形、鋸齒ありて平滑、光澤を有す。莖・葉共に刺を生ず。四季絶えず枝端に開花し、紅・白、單瓣・重瓣等種種にして美なり。我が國、各地の庭園に栽培し觀賞用とす。いさこひばら。いばらぼたん。うしざきばら。しきざきいばら。ちやうしゅん。ぼたんいばら。長春花。寶相花。

かう-じんぶつ 一好人物 (名) 一心の善き人。善人。二わるぎのなき人。おとよし。結構人。

かうし-まち 庚申待 (名) かのえさるの日に三猿の像を掛けて、庚申青面又は猿田彦命等を祭ること。當夜寢ぬれば三尸蟲、禍をなして命を短くすといふ迷信ありて、信者は夜を守りて寢ねず。東海道名所記「月まち・日まち・庚申まち、婚とり・嫁とりなどに參りて」

かうしん-やす 庚申安 (名) 庚申の日は米價下落すといふ迷信。

かうしん-ゑ 一庚申會 (名) かうしんまち(庚申待)に同じ。

かう-す 航 (自動ㅅ) 船にて渡る。北齊書「船之雖萬里而作限、聊一葦可航」

かう-す 抗 (自動ㅅ) はりあふ。爭ふ。抵抗す。反抗す。「抗して下だらず」宋史王耳年少乃與丈人抗乎」

かう-す 膠 (自動ㅅ) 〔かう(膠)はにかは〕物に拘泥す。史記「王以名使、若膠柱而鼓瑟耳」

かう-す 幸 (自動ㅅ) みゆきす。行幸せらる。唐書「帝南幸、使鎭長安」

かう-す 幸 (他動ㅅ) 寵す。愛す。

かう-す 校 (他動ㅅ) 一くらぶ。かんがふ。二校正をなす。圖書寮式「校生一人」

かう-す 較 (他動ㅅ) くらぶ。比較す。

かう-ず 好事 (名) 奇異なる物事を特に好むこと。ものずき。

かう-ず 降 (自動ㅅ) 敵に降參す。平治「必ず高組の臣となり、敢へて以て楚に降ずることなかれ」

かう-ず 高 (自動ㅅ) 高ぶる。つのる。增長す。こうず。曾我五人兄弟「山へ上ぼれば學問せず、惡さばかり高ずるは」

かう-ず 講 (他動ㅅ) 一文書・學說の意義を解き明かす。二詩又は歌合せなどにて、詩・歌を讀み上ぐ。披講す。源花草「ふみなど講ずるにも、源氏の君の御をば、講師もえよみやらず、句ごとにずしのしる」千載集「詩歌講じ侍りける」禮記「春蒐、夏苗、秋獮、冬狩、皆於農隙以講事也」四和解す。媾和す。討議す。史記「樓里與魏講罷兵」

かう-ず 勘 (他動ㅅ) 拷問す。宇治拾遺「よひ曉に、此の殿へ出で入ることわびし。これ立て籠めてかうぜんといふことを、集まりていひ合はせけり」

かう-ず 號 (自動ㅅ) 一名稱となす。なづく。太鼓「狂言禁獄、雉子を土中に突き込み、神にいはひ、雉子の宮と號し」二いひたつ。いひふらす。となふ。資治通鑑「頂羽兵四十萬、號二百萬一」

かうず-か 好事家 (名) ものずきの人。

かうず-すくび 香匙 (名) 香を盛るさじ。きやうじ(香匙)。

かうず-しゃ 好事者 (名) かうずか(好事家)に同じ。

かうず-すゐ 香水 (名) 一かをりよき水。白居易詩「洞房門上挂二桑弧一、香水盆中浴二鳳雛一」二化粧品の一。香料を酒精に溶解したるもの。

かう-すゐ 河水 (名) 大河のみづ。河の流れ。楚辭「令二沅湘今無波、使二江水兮安流一」

かう-すゐ 硬水 (名) 【化】かるしうむ及びまぐねしうむの鹽類などの鑛物質を溶合せる水。石鹼水を加ふれば白濁を生じて、泡を生ぜず。且、石鹼をして洗濯作用を失はしむ。

かう-すゐ 交綏 敵味方ともに疲れ退くこと。左傳「文公十二年」「晉人從二秦師一於河曲、交綏」

かう-ずゐ 香水 (名) 佛前に供へたる水。宇津保物語「四十九壇の修法に、加持したるかうずゐを硯の水にて、あて宮に」

かう-すゐせん 一高水線 (名) かうすゐね(高水位)に同じ。

かうすゐ-りゃう 一降水量 (名) うりやう(雨量)に同じ。

かう-すゐゐ 一高水位 (名) 河又は海にて、洪水・上潮などの爲めに、平均の水位以上に達せし水位。

かう-せい 一好生 (名) 慈悲心深くて、殺生を行はぬこと。

かう-せい 校生 (名) 校正をなす役。圖書寮式「校生一人」

かう-せい 高聲 (名) たかごゑ。こわだか。大聲。かうじやう。(低聲の對)

かう-せい 一硬性 (名) 物の性質の硬きもの。(軟性の對)

かう-せい 一行星 (名) 【天】いうせい(遊星)に同じ。

かう-せい 一校正 (名) 一文字の誤りを比べて正すこと。校合。二印刷物を原本に照らし合はせて、其の誤りを正すこと。

かう-せい 一更正 改めただすこと。改正。不動產登記法「第六十四條」「登記の更正」

かう-せい 一更生 (英 Regeneration) 【哲】ぢゆうせい(重生)に同じ。

かう-せい 一降生 かうたん(降誕)に同じ。

かう-せい 一降世 前條に同じ。

かう-せい 一好晴 空の好く晴れたること。「天氣好晴」

かう-せい 一剛性 (名) 【理】形狀の變化に抗する物體の性質。

かう-せい 一强盛 つよく盛んなること。東鑑「文治元年十一月廿五日」「御信心彌强盛」太平記「大塔宮二月廿五日」「慾心强盛の八荒司共」

かう-せい 一强勢 つよきいきほひ。甚しきこと。はげしきこと。がうぎ。十輪經「倚二特强勢一劫二奪他一」

かうぜい-がみ 行成紙 (名) 〔藤原行成卿の筆なる歌書の料紙に擬したるもの〕薄き鳥の子紙を種種の色に染め、雲母にて細紋を型置きにしたるもの。浮世風呂「金紙だの、行成紙だのと、益にもたたぬことに切りこまざいて、遣ひ捨てまするし」

かうせい-けんぽふ 一硬性憲法 (名) 〔法〕かうけんぽふ(硬憲法)に同じ。

かうせい-とうき 一更正登記 (名) 登記に錯誤又は遺漏あるとき、其の登記の申請をなしたる者の申請によりて、改正を加ふる登記。

かう-せき (名) こわいろ(聲色)に同じ。

かう-せき 一行迹 (名) 一きやうせき(行迹)に同じ。行狀。後漢書「馬融傳」「考二列行迹一、以爲二臯后本紀一」二行きたるあと。あしあと。足跡。韋應物詩「落葉滿二空山一、何處尋二行迹一」

かう-せき 一衡石 (名) はかり(秤)に同じ。韓非子「八說」「人之不二事一衡石一者、非二貞廉而淳利也一、石不二能一爲二人多少一、衡不二能一爲二人輕重一」史記「秦始皇紀」「至二于以衡石一量二書一」

かう-せき 一講席 (名) 一講義の席。二和歌又は詩などの披講の席。著聞集「諸人の歌おきて後、これを置きて逐電して、講席の座にねざるとかや」

かう-せき 一考績 (名) 官吏の所務の成績を考ふること。

かう-せき 一拷責 がうもん(拷問)に同じ。

かう-せきうん 一高積雲 (名) せきけんうん(積叢雲)に同じ。

かう-せきかう 一硬石膏 (名) 【化】せきかう(石膏)に同じ。

かう-せきけん 一硬石鹼 (名) せきけん(石鹼)に同じ。硬くして水に溶けざればいふ。

かう-ぜち 一講說 かうせつ(講說)に同じ、源鈔「かうぜちの折りは、大方の鳴りをしづめて、のどかに物の心も聞きわくべき事なれば」

かう-せつ 一高節 (名) 高きみさを。すぐれたる節操。左思文「蜀都賦」「蓋端委之所彰、高節之所興」陳子昂詩「箕山有二高節一、湘水有二清源一」

かう-せつ 一高說 (名) 他人の說の敬稱。おせつ。

かう-せつ 一巷說 (名) 坊間のうはさ。世間の風說。巷語。十訓「かかれば、街談・巷說の中にも、必ずとるべき事ありといへり」曹植文「街談巷說、必有可采」

かう-せつ 一巧拙 (名) 巧みなることと拙きこと。うまきこととまづきこと。莊子「達生」「齊五日、不敢懷二非譽巧拙一」韓愈文「爾雅」「登明選公、雜二進巧拙一」魏文帝文「至二于引氣不一齊巧拙有二素、雖一在二父兄一、不能以遺二子孫一」

かう-せつ 一硬節 (名) 圍碁の話。石の、横に二つならびたること。

かう-せつ 一講說 講義し、說明すること。又、其の主意。文同詩「草堂寺」「中含二我再講說、座上不一容二人俗話一」

かう-せつ 一交接 一交際。漢書「賈誼傳」「爲人廉靖樂二道、不一交二接世俗一」二男女の交合。房事。

かう-せつ 一降雪 雪ふること。ふる雪。

かう-せつ 一强竊 (名) がうせつたう(强竊盜)の略。庭訓往來「六月」「至二强竊黨類一者、尋二搜同意盜屑之徒黨一、可二被一搦捕一也」同書「山海兩賊、强竊二盜徒黨一」

かうせつ-しへんけい 一交截四邊形 (名) 【數】二邊が交截する四邊形。

(いけんへしつせうか)

かうせつ-たう 一强竊盜 (名) 一强盜と竊盜。舊刑法「第三百九十九條」强竊盜の贓物なることを知て之を受け又は寄藏故買し若くは牙保を爲したる者」

かうせつ-っぽ (名) がうざいっぽの訛り。

かう-せつ 一交涉 (名) 一かかりあひ。二關係。

かう-せみ (名) 【動】かはせみ(河蝉)の訛り。

かう-せん 一香煎 (名) 一大唐米のこがしに陳皮・山椒・茴香・薏苡仁等の香料を細末にして和したるもの。白湯の上に撒きて飲む。こがし。卜養狂歌集「或る人の許より、かうせんのおこしけるに、中に匙を入れておこし」二むぎこがし(麥焦)をいふ。奥州・總州・肥州の方言。

かう-せん 一香錢 (名) かうでん(香奠)に同じ。一說、香奠の補助として贈る物。勅修百丈清規「主香餞不得二互用一」

かう-せん 一香饌 (名) せもつ(施物)に同じ。布施。

かう-せん 一鋼線 (名) 引き伸ばしたる鋼鐵の線。普通徑一吋の四分の一を超えざるもの。編蝙傘の骨、時計の心棒などに用ふ。

かう-せん 一鋼船 (名) 主要の材料に鋼鐵を用ひて造りたる船。

かう-せん 一航船 (名) 航行中の船。

かう-せん 一交戰 (名) 相戰ふこと。干戈を交じふること。對戰。合戰。明治三十一年一月海軍省達第二號軍艦職員勤務令「第十八條」「戰鬪後再ひ交戰の準備を爲さんかを爲」二「法」交戰主體が、互ひに兵力を以てする敵對行爲の稱。刑法「第九十一、四條」外國交戰の際局外中立に關する命令に違背したる者」

かう-せん 一抗戰 張り合ひて戰ふこと。

かう-ぜん 一皓然 皎然 (副) 白く、又明かにかがやくさまにいふ語。白居易詩「皓然質、無人自芳馨」

かう-ぜん 一耿然 (副) 明るきさまに

いふ語。謝霊運「六窗いまだ明けざるに、耿然たる一天虚明なる内に」高適詩「適越嶲有以出關終耿然」

かう-ぜん 一浩然 (副) ひろびろとしたるさまにいふ語。

かうぜん-の-き 浩然氣 天地の正氣を受け、道義を根柢とし、屈せず撓まざる剛健・正大の德。孟子公孫丑上「我善養吾浩然之氣」

がう-ぜん 一傲然 (副) おごりたかぶるさまにいふ語。

がう-ぜん 一囂然 (副) かまびすしきさまにいふ語。

かうせん-ぐん 一交戰軍 (名) 戰地に派遣せられたる軍隊の稱。留守軍の對。陸戰の法規慣例に關する規則第五十、交戰軍に屬する軍隊を其の版圖内に收容したる中立國」

かうせん-けん 一交戰權 (名) 【法】交戰の目的を達するために、敵國及び中立國に向かひて行ふ國際公法上の權利。

かうせん-こく 一交戰國 (名) 一交戰の當事者たる國家。陸戰の法規慣例に關する規則第三、交戰國の兵力は戰鬪員及び非戰鬪員を以て之を編制することを得」二敵國。

かうせん-さく 一鋼線索 (名) 數條の鋼線を撚り合はせたるもの。船艦の綱等に用ふ。

かうせん-しゃ 一交戰者 (名) 一【法】交戰の當事者たる國家又は團體。二かうせんぐん(交戰軍)に同じ。陸戰の法規慣例に關する規則第三條「交戰者は害敵手段の選擇上無限の權利を有することなし」三交戰軍を組織する人。陸戰の法規慣例に關する規則第三條「交戰者」

かうせん-しゅたい 一交戰主體 (名) 【法】交戰權を有する一者。卽ち、主權國家及び交戰團體の總稱。

かうせん-だんたい 一交戰團隊 (名) 【法】主權國家にあらずして、國際法上の交戰權を有する團體。

かうせん-てらき 一交戰條規 (名) せんじこくさいこうはふ(戰時國際公法)を見よ。

かうせん-とう 一交閃燈 (名) 循環して、一定の時に異なりたる色の光を放たしむる裝置の燈明。

かうせん-はう 一鋼線砲 (名) 大砲の一種。砲身に鋼線を纏繞せしめて、砲彈の發射力を增加せしめたるもの。西曆一千八百五十五年、英國人ろんぐりっぢ之を創作す。

かう-そ 一高祖 (名) 一已れより五世前の祖父。卽ち、祖父母の祖父母。東鑑九月廿日「相盛中將彼高祖正盛朝臣」二せんぞ(先祖)に同じ。書經畢命「肆上帝將復我高祖之德、亂我家」左傳周公十年「且昔而高祖孫伯黶、司晉之典籍」同十七年「我高祖少皞摯之立也、鳳鳥適至」

かう-そ 一酵素 (名) 【化】蛋素を含む有機化合物にて、自ら變化することなくして、他物の化學變化を促進しむるもの。ちあすたーぜ・はは澱粉を砂糖に變ずる一種の酵素なり。

かう-ぞ 一楮 (名) 【植】桑科、楮屬の落葉灌木。幹の高さ一丈。葉は稍心臟形、鋸齒を有して粗糙なり。花は淡黃綠色、小形にして單性、雌雄異株、雄花は穗狀に排列し、雌花は球形に集合し、春開く。我が國、各地の山野に自生すれども、通常栽培せらる。樹皮は日本紙製造の原料として貴重なり。かうぞばな。かみぞ。かみのき。こそのき。著聞「如法經書かんとて、かうぞをこなして、料紙すきける時」

かう-ぞ (名) 【植】茅草科、蔗屬の多年生草本。莖の高さ一尺許り、稍叢生す。葉は細長。花は單性、雌雄同株、穗狀花序に排列し、三四箇の雌花穗と一箇の雄花穗とを莖頂に生じ、各細き柄を有し、初夏、綠褐色を呈す。我が國、各地水濕の地に自生す。

かう-ぞ 一嗷訴 强訴 徒黨を組みて訴ふること。東鑑文治三、衆徒聞此事、忽以蜂起、擬及嗷訴」

かう-ぞ 一拷訴 罪ある者を、荒荒しく責めつくること。謠自然居士「舟より御おりなくば、拷訴を致さう」

かう-そう 一高僧 (名) 一智德の高き僧。朗詠「登老高僧首楞嚴」盛衰記世二、仁安「東寺・天台兩門の貴僧・高僧」舊唐書僧傳「諸高僧等、入住慈恩寺」二官位貴き僧。

かう-そう 一高層 (名) 層の高き所。上方の層。

かう-そう 一航送 航路により運送すること。

かう-そう-びん 一航送便 (名) 郵便物を船にて遞送する法。

かうぞ-うり 一楮賣 (名) 楮を賣る人。持統天皇歌軍法「や楮賣の風月か、扱も久しう見えなんだ」

かう-そく 一高足 (名) 一たかあし(高足に同じ。二かうそくのていし(高足弟子)の略。三舞にて、高く足を上ぐること。(下足の對)謠百番高足・下足の舞の手を盡くし」

かうそくのていし 高足弟子 學藝の優れたる門人。世說「鄭玄在馬融門下、三年不得相見、高足弟子傳授而已」

かう-そく 一校則 (名) 學校の規則。

かう-そく 一港則 (名) 港灣を取り締まる規則。明治三十一年勅令第百三十九號「開港港則」

かう-そく 一高測 (名) 陸地の高低を比較する測定法。

かう-そく 一梗塞 ふさがること。秦觀文「道途梗塞、物價翔踴」

かう-そく 一高速 速度の高きこと。

かう-ぞく 一豪族 (名) 勢力ある一族。財産多き家。

がう-ぞく 一强賊 (名) きやうぞく(强賊)に同じ。

かうぞくりょく 一航續力 (名) 船艦が一回石炭を滿載し、補充せずして航海を續け得る力。

かうぞだか 一楮高 (名) 江戸時代、楮に課する稅。

かう-そつ 一降卒 (名) 降參したる兵卒。

かうぞつな 一楮綱 (名) 楮の皮にて作れる綱。しらくち。

かうぞ-ばな (名) 【植】かうぞ(楮)の異名。

かう-そふ 一高祖父 (名) 曾祖父母の父。祖父母の祖父。

かう-そほ 一高祖母 (名) 曾祖父母の母。祖父母の祖母。

かう-ぞめ 一香染 (名) 丁子を濃く煎じ出だして、其の汁にて染めたるもの。丁子染。枕

「かうぞめのひとへ」同「かうぞめの扇うちつかひ」源氏末摘花「もやのきはに、かうぞめの御几帳など、ことごとしきやうに見えぬ物を立てて」

かう-ぞり 一髮剃 (名) 【かみそりの音便】一かみそり(髮剃)に同じ。多武峯少將物語「御もとどりを、手づから、かうぞりして切り給ひにければ」二戒師が、出家する人又は死者に戒を授けて髮を剃ること。佛門に入る式と云ふ。三僧侶が在家の俗人の頭に剃刀をあて、剃髮のさまに擬して、佛門に歸依したる證とする一種の式。

かうぞり-な 毛蓮菜 (名) 【植】菊科、毛蓮菜屬の二年生草本。莖の高さ二三尺。葉は披針形にして鋭き鋸齒を有し、莖・葉共に硬毛を散生す。初夏、黃花を開き、頭狀花序に排列し、のち白色の冠毛を有する瘦果を結ぶ。我が國、各地の原野に自生す。きたんぽ。きたんぽぼ。

かう-そん 一孝孫 (名) 一孝行なる組先を祭る時、自ら稱する語。禮記祭統「稱子孝子・孝孫、喪稱哀子・哀孫」二報以介福」二孝孫。詩經小雅「孝孫有慶、報以介福」二

かう-そん 一江村 (名) 河つきの村。謠曲「江村の漁火、愁へに對して人人眠ればよき際ぞと」謝朓詩「朦朧江村見、離離海樹出」

がう-そん 一郷村 (名) むらざと。王維詩「鬲風首邦族、庶訓延鄉村」

かう-たい 一交態 (名) 交際の狀態。漢書傅喜傳「一貧一富、廼知交態」

かう-たい 一交代 交替 互ひに代はりあふこと。入れかはり。書經畢命「參觀交代」漢書賈誼傳「及秦之敝、諸侯交代」同紀「交代之際」

かう-たい 一更代 かはること。かふること。かはりあふこと。書經微子「汝君爲德、更代修道、其所不及」舊唐書蘇瓌傳「掌選多所發擿更代」

かう-だい 一高臺 (名) 一高きうてな。土を高く築きあげたる所。左傳昭公元年「高臺・深池、撞鐘舞女」李白詩「且須飲美酒、乘月醉高臺」二高き足の附きたる椀、又は茶碗。

かう-だい 一香臺 (名) 一香爐を載する臺。二婦人の尻つきをいふ。下文を見よ。色道大鑑「尻臺・香臺。是れも同じく女の尻附のことなり。香爐にても其の外の器物にても、すわりのよきが、盆にても臺にても載せて見よき故に、香臺つきの、よきの、惡しきのなどいふ」

かう-だい 一好題 (名) よき題目。適切なる題目。

かう-だい 一交題 (名) 俳諧にて、四季の題を取り交ぜてよむもの。混題。亂題。

かう-だい 一高大 たかく大なること。易經下經「地中生木、君子以順德、積小以高大」

がう-たい 一剛體 (名) 【理】如何に大なる力を加ふるも、形及び體積を變ぜざる物體。斯かる物體は只假想上のものにして、多くの場合には普通の固體を剛體として取り扱ふ。

かうたい-し 一交替使 (名) 古(官員の交替の時、事故あれば發遣せらるる使。類聚三代格天長三年「檢稅交替中略等使、並准詔使之例」

かうたい-しき 一交代式 (名) 【數】式中の二つの文字を交換するとき、其の符號を變ずる代數式。例へば、(a−b)×(a−c)(a−c)はaとb、aとc、bとcとを交換するときは、其の符號を變ず、故にa・b・cの交代式なり。

かうたい-しんげう 一交代神教 (名) (英 Henotheism) 數多の諸神が互ひに交代して、其の中の或る者が、かはるがはる最高權を有すとなし、又各地方・各民族・各國民毎に特別の神あり、各其の神を信奉すべしとなす教へ。

かうたい-ほんゐ 一交代本位 (名) (英 Alternative standard) 【經】ふくほんゐ(複本位)に同じ。複本位制にては、本位貨幣たる二種以上の貨幣が、其の法定比價と市場の價格と一致する間のみ相並びて流通すれども、多少の差違ある時は市價の騰貴せる貨幣のみ流通するによりていふ。

かうたい-よりあひ 一交代寄合 (名) 江戸時代、三千石以上の旗本の非役の者、地方に居住して、隔年江戸に參覲交代をするもの。

かうたいよりあひ-さもいり 交代寄合 肝煎 (名) 職名。交代寄合を支配するもの。五人を定員とす。

がうたいりきがく 一剛體力學 (名) 【理】力學の一。剛體の運動を研究するもの。

かうたい-れう 一交替料 (名) 古(國司交替の時に給する人夫及び馬。續紀世六、寶龜十一年八月旅中「停交替料」

かう-たう 一高島 (名) 高潮に遇ひても、水に淹はれぬ島。

かう-たう 一高蹈 一遠く行き去ること。左傳哀公元年「不覺使我高蹈」二官位に戀綿たらず、俗間を遠ざかりて氣高く身を處すること。顏延之文陶徵士誄「賦詩歸來、高蹈獨善、亦既超驥」

かう-たう 一浩蕩 (副) 廣く大なるさまにいふ語。

かう-だう 一孝道 (名) 孝行の道。漢書文帝紀「永思孝道」

かう-だう 一香道 (名) 香をたきて賞翫するわざ。香合せ・薰物合せ等の類。

かう-だう 一行道 (名) 通路。道を行くこと。孟子滕文公上「行道之人弗受」とほりみち。

かう-だう 一坑道 (名) 一鑛山・炭山にて、坑内の通路。二軍用の語。要塞戰にて、地下に掘開したる道。

かう-だう 一講堂 (名) 一こうだう(講堂)に同じ。二學校にて、多人數の生徒を集めて講話などをなし、又儀式を行ひなどする室。後漢書禮儀志、養三老五更於辟雍講堂」

かう-だう 一校堂 (名) 學校の建物。校舍。

かう-だう 一高堂 (名) 一高き堂。壯麗なる家屋。漢書馬融傳「常坐高堂、施絳紗帳前授生徒」二他人の家、又その家の人をいふ敬語。

がう-たう 一强盜 (名) 暴行又は劫迫の手段によりて人の財物を奪ひ取るもの。おしこみ。おしいり。竊盜の對。枕「がうたう」著聞「西國の方にて海賊をし、東國にては山だちをし、京都にては强盜をし、邊土にてはひきはぎをして」宋史黃溍傳「强盜異他盜」

がう-たう 一豪宕 性質の疎豪にして、常規を逸すること。陸游詩「時時抱清泚、筆墨助豪宕」金史張萱傳「性豪宕、不拘細行」

がうたう-がうかんざい 一强盜强姦

罪（名）【法】結合罪の一。強盗が婦女を強姦したるによりて成立する犯罪。

かう-だうぐ 一香道具（名）香道に要する道具。

がうたう-さい 一強盗罪（名）【法】墓行又は脅迫を以て、他人の財物を強取したるによりて成立する犯罪。刑法第二百三十六条「竊盗及ひ強盗の罪」

がうたう-さっしゃう-ざい 一強盗殺傷罪（名）【法】結合罪の一。強盗が人を殺傷したるによりて成立する犯罪。

がうたう-さつじん-ざい 一強盗殺人罪（名）【法】結合罪の一。強盗が人を殺し、又は人を傷けて死に致したるによりて成立する犯罪。

がうたう-づきん 一強盗頭巾（名）づきんの一種。縮緬又は紺染にしたる麻絲などにて作り、顔を包むやうにしてかぶるもの。賤学環「がうたうづきんとて、獄人のかぶる如く、縮緬にて拵へかぶるもあり」

がうたう-はん 一強盗犯（名）【法】がうたうざい（強盗罪）に同じ。

がうたう-ほふし 一強盗法師（名）法師にして強盗をなすもの。悪僧。砂石集「強盗法師一人、此の房主に、眞言の法問を問答しけり」同上「強盗法師之道心有事」

かう-たき 香燃（名）一頭香・腕香などをたく物もらひの一種。二たう（堂）をいふ、齋宮の忌詞。齋宮寮式「別忌詞、堂稱香燃（カウタキ）」

かう-たく 一行槖（名）旅行に持つ嚢。行李。五代史「魏王繼岌死渭南、籙悉取其行槖」

かう-たく 一膏澤（名）うるほひ。恵み。恩澤。孟子「離婁」「諫行言聽、膏澤下於民」春秋「若江海之浸、膏澤之潤」

かう-たけ 茅蕈（名）【植】擡子菌類、茅蕈屬の菌類。高さ四五寸。傘は稍漏斗狀をなし、下面に毛狀の突起物多し。柄部と共に全部黒色を帶ぶ。夏秋の際、我が國、各地の山野陰濕の地に自生す。乾燥して後食用とす。かはたけ。

かう-たみ 香疊（名）香合せに必要なる香包・香箸・銀ばさみなどを包む紙。五月雨日記「いついつ香あはせの事あるべし。香二種、香だたみしてもて出でよ」

かう-だち 神館（名）かむだち（神館）に同じ。類聚名物考

かう-だつ 一強奪　しひて奪ひとること。史記「秦王度之、終不可強奪」

かう-だて 紙立甲（かみたての音便）一正式襲應の時、七五三の勝などのもり物の廻はりに、紙にて折形をして附くること。一説、襲立（ヒタテ）の轉なりともいふ。二折形の名。

（—てだうか）

かう-たぶ 一高踏　かうたう（高踏）に同じ。

かうだ-やき 高田燒（名）やつしろやき（八代燒）に同じ。

かう-たん 一降誕　神佛・帝王及び異常の人の世に生まれ出づること。降世。「釋尊の降誕」松風村雨東帶鑑「をのこみこ、やすやすと降誕あり」花葵夫人宮詞「東宮降誕近」佳辰少海星邊擁瑞雲」

かう-たん 一浩歎　大いになげくこと。張九齡詩「浩歎楊朱子、徒然泣路歧」錢起詩「商歌向秋月、哀韵傘浩歎」

かう-だん 一講壇（名）講演また說經などする時に上ぼる壇。

かう-だん 一香緞（名）一香色の平絒。諒闇の時用ふ。二罷樂にて、道具を卷くに用ふる、青地又は赤に白の交じりたる色の、幅狹き布。

かう-だん 一香壇（名）神佛の前にて、香を焚く壇。

かう-だん 一高談　一高聲にはなしすること。憚らず物語すること。後漢書「申屠高談、無魂天下」杜甫詩「高談雄辯驚四筵」二人の議話の敬稱。おはなし。

かう-だん 一講談　かうしゃく（講釋）に同じ。

がう-たん 一亳端（名）筆のさき。筆端。蘇軾詩「霜毫入春色入亳端」

がう-たん 一豪膽　膽力のすわりて居ること。大膽。

がう-たん 一强談　强ひて談じつくること。無理なる談判をすること。

がうだん-し 一講談師（名）一こうだんし（講談師）に同じ。二かうしやくし（講釋師）に同じ。

かう-だん-し 一好男子（名）よきをとこ。美しき男。愉快なる男子。

かうだん-しゃくわいしゅぎ 一講壇社會主義（英 Socialism of chair）（名）【經】社會政策上の主義の一。現在の政治組織に變革を試みずして、單に改良を加へ、以て私有財産制及び自由競爭より生ずる弊害を矯正せんことを主張するもの。獨逸國諸大學教授の唱導したるによりて講壇の名あり。

かう-ち 交趾（名）一かうちやき（交趾燒）の略。二鮫皮の眞鮫の一種。

かう-ち 高知（名）多分の知行。假名手本忠臣蔵「我が君より高知を戴き、莫大の御恩を著ながら」

かう-ち 高致（名）高尚なる風致。けだかきおもむき。

かう-ち 高地（名）たかき地。（平地また低地の對）史記「乃廢二槊以引其河北戴之高地」韓愈文「徙厩於高地」

かう-ち 校地（名）校舍を建設すべき土地。明治二十四年四月文部省令第二號小學校設備準則第一「校地は日當り好く且成るべく開豁乾爽なるを要す」

かう-ち 耕地（名）耕作すべき土地。水田と陸田とに分かつ。（山林・宅地などの對）

かう-ち 狡智（名）わるがしこき智慧。

かう-ち 巧智（名）巧みなる才智。莊子「天道」「巧智神聖之人」

かう-ち 巧遲　物事をなすに遲けれども、できばえの巧みに勝れたること。（拙速の對）李衛公問答「兵聞拙速、不聞巧遲」

（諺）巧遲は拙速に如かず　巧みにせんとして遲きよりは、拙くとも速かなる方まさる。孫子作篇「兵聞拙速、未覩巧之久也」晉書「兵聞拙速、不聞巧遲」

かうぢ 麹糊（名）（古語、醸立（タカム）の略なるかむちの音便）米・麥又は大豆を蒸し、之に麹菌（カビ）を吸室にて盛んに發育せしめ、菌の作用により澱粉を葡萄糖に變化せしめたるもの。やや淡緑色を帶び、嚙めば少しく甘味あり。酒・味醂・醬

油等の釀造業上重要なるものなり。七十一番歌合「西京やかうぢのむろや乗れこめて、月のよどろをよそに見るかな」

かうぢ-いろ 麹色（名）染色の名。橙黃色。

かうぢ-いんでん 交趾印傳（名）印傳（インデン）の一種。絞（ヒボ）あらく、絞下（シボ）赤し。質佳なれども下品なるもの。類聚名物考

かうぢ-うり 麹賣（名）麹を賣るを業とするもの。七十一番歌合「麹うり。上戸たち御覽じて、よだれ流し給ふな」

かうぢ-かび 麹菌（名）【植】子囊菌類、麹菌屬の菌類。白色綿毛狀の多細胞より成る下等植物。後直立せる枝を出だし、頂端球狀に膨れ、玆に數多の串團子狀の淡黃綠色の胞子を生ず。我が國、各地に普通なるものにして、麹を製する上に缺く可からざるものなり。かうぢきん。かうぢだね。

かう-ぢき 一高直（名）一高きねだん。たかね。かうか（高價）。（下直（ヒタネ）の對）庭訓往來十二「渡唐之船依中綱、藥種高直之間、往來十二月」甲陽軍鑑「下直の物を高直にも申すまじ」二賞く得がたきこと。又、其の物。傾城反魂香「暇やるとの一札、王様の御綸旨より高直な物摂った」

かうぢきん 麹菌（名）【植】かうぢかび（麹菌）に同じ。

かうぢ-せい 一向地性（名）【植】植物學上の用語。地球の中心に向かひて伸長する性質。地球引力に感應するによる。植物の根・氣根等は皆此の性を示す。

かうぢ-せいり 一耕地整理（名）耕地の利用を增進するため、種種の設備をなすこと。即ち、土地の交換・分合、若しくは道路・畦畔・堤塘等の變更・廢置、又は之に伴ふ灌漑・排水等の設備をなし、又其の維持・管理等、必要なる設備をなすこと。耕地整理法「耕地整理」

かうぢだね 麹種（名）【植】かうぢかび（麹菌）に同じ。

かうぢ-づけ 麹漬（名）魚菜など、麹に漬けて味をつくること。又、其の物。

かうぢの-いろ 麹色（名）かうぢいろ（麹色）に同じ。牛玉心中「酒にはあらぬ麹の色、花の一分のからからから」

かうぢの-はな 麹花（名）次條に同じ。懇八卦桂曆「びん美酒の麹の花、ちろちろ眼にて立ち陽り」

かうぢばな 麹花（名）【植】二麹菌（カビ）が盛んに麹の上に發育し胞子を著くるときは、恰も小なる花の咲けるが如き觀を呈する故に此の名あり。かうぢのはな。二ははこぐさ（鼠麹草）の異名。

かうぢ-ぶた 麹蓋（名）麹を製造する時、麹の原料を盛りて麹室に入るる木製の淺き箱。

かうぢ-むろ 麹室（名）麹をねかすむろ。

かうぢ-や 麹屋（名）麹を製し、又商ふ家。傾城酒呑童子「お室の麹屋、吉田には八百萬屋」

かう-ちゃう 一綱丁（名）王朝時代、調・庸等の物を運ぶ人夫の長。主計寮式下「凡鑄錢司所進年料錢、隨二所進數、且附二綱丁、取二取文」三代實錄六貞觀四年「進二官米八十斛、載二於一船、綱丁進上、而遭二海賊、悉被二侵奪」宇治拾遺「この鮭のかうちやう、まさしく、わせんじやう取りて、懷に引き入れつといふ」

かう-ちゃう 一校長（名）學校の長。卽ち、校務を掌理し、所屬職員を統督する人。學校長。

かう-ちゃう 一港長（名）開港港界内に於ける船舶の出入・碇泊、其の他の運動を取り締まる職名。海務局長を以て之に充つ。開港港則第二條「港長」

かう-ちゃう 一坑長（名）鑛山にて一坑の長。其の坑を監督するもの。

かう-ちゃう 一高聽（名）他人の聽くことの敬語。清聽。

かう-ちゃう 一腔腸（名）【動】動物學上の用語。腔腸動物の體内の大部を占むる内腔。高等動物の體腔と消化管とを兼ぬ。

かう-ぢゃう 定考（名）〔文字を轉倒して讀むを例とす、上皇に晉近きを避くるなりと〕古へ八月十一日に、六位以下の人の藝能・行跡及び勤務の成績等を考へ定めて官僧を賜はる儀式。是れよりさき二月十一日に式部・兵部の二省より選抜し、上卿召し寄せて列見の儀あり。四月七日に其の被選の人名を奏聞す、之を擬階奏（ギカイソウ）といふ。其れより八月に至りて此の式あり。江次第八八月「定考（式部・兵部・朝所・音聲・相撲・馬・牛・犬・鷹・鳥・獸等）」公事根源「定考。是れは昔六位以上の加階をする人は、藝能・行跡・恪勤をえらびて榮爵を給ひけるなり」

かう-ぢゃう 一おしがみ（押紙）をいふ、中國及び土佐國の方言。物類呼稱

かう-ちゃう 一郷長（名）りちやう（里長）に同じ。

かうちゃう-どうぶつ 一腔腸動物（名）【動】動物界の一綱。複細胞動物中、最も劣等なる類。體は放射狀相稱をなし、傘狀・鐘狀・圓筒狀なり。體壁は二層の細胞より成り、内部は一大腔にして腔腸と稱し、他動物の體腔と消化管とを兼ぬるものたり。一端に口あり、其の周圍に若干の觸手を有す。體の表面には又刺細胞を具ふ。ひどら・くらげ・さんご等、皆此の類に屬す。

かうちやき 交趾燒（名）もと交趾・安南・暹羅等にて製せし陶器。現今京都にて巧みに模造す。釉藥厚くして西洋趣味を帶ぶ。交趾。

かう-ちゃく 一膠著　ねばりつくこと。

かうちゃく-ご 一膠著語（名）ねんちゃくご（粘著語）に同じ。

かう-ちゅう 一行廚（名）べんたう（辨當）に同じ。杜甫詩「竹裏行廚洗玉盤」黃庭堅詩「宣城凍筍供行廚」

かう-ちゅう 一講中（名）こうぢゆう（講中）を見よ。

かう-ちゅう 一膠柱　琴柱（ことぢ）に膠（ニカワ）すに同じ。ことぢ（琴柱）の條を見よ。

かうぢゅうさ 一扛重機（名）きぢゆうさ（起重機）に同じ。

かう-ちょ 一高著（名）人の著書の敬稱。

かう-ちょ 一較著　著しきこと。著明。後漢書列女「孝女曹娥者、會稽上虞人也」

かう-ちょ 一孝女（名）孝行なる女。

かう-ちょ 一豪猪（名）【動】やまあらし（豪猪）に同じ。

かう-ちょく 一鯁直（かう（鯁）は魚の骨、直言の受け難きを魚骨の喉に下だらざるに譬ふ）權勢を畏れず剛直なること。北史「于鯁直少言、有武藝」

がう-ちょく 一剛直　氣質强く正直な

ること。史記朱建傳「爲人有辯口、剛廉剛直」漢書賈誼傳「爲人剛直、使酒不好面諛」

かうちん 交趾雞 (英 Cochin) (名) 【動】鳥類中、雞の一品種。北清の原産なり。體肥大にして軟毛多く、頭は小さく、耳朶は赤く、尾は極めて短し。跗蹠部黄色にして羽毛を生ぜり。肉は食用として貴重せらる。くきん。

がうーぢん 一強陣 (名) きやうぢん(強陣)に同じ。平治物語「此の龍蹄を以て、いかなる强陣なりとも、などか破らでは候べき」

かうーづ 一港圖 (名) 港に出入・碇泊するに要する海圖。

かうーつう 一交通 ㊀ゆきかよふこと。ゆきき。往來。史記貨殖傳「諸所、交通、無非豪傑大俠」㊁相隔たりたる地にて、人身の往復、物品の運搬、又は各人互ひに意思を通達すること。運搬と通信とに分かつ。各條を見よ。

かうつうーきくわん 一交通機關 (名) 前條㊁に關する機關。即ち、道路・鐵道・船舶及び電信・郵便の類。

かうつうーぎやうせい 一交通行政 (名) 【法】往復・運搬及び通信に關する行政。

かうつうーけいざい 一交通經濟 (名) 【經】運輸・通信事業の經營に關する經濟。

かうつうーけいさつ 一交通警察 (名) 【法】保安警察の一。交通に關する危險の防止を目的とするもの。警視廳官制第十五條「交通警察」

かうつうーけいひ 一交通經費 (名) 交通に關して、國家又は公共團體の支出する經費。

かうつうーしやだん 一交通遮斷 (名) 【法】公共の安全を謀るために、特定の場所を限りて、人の交通を禁止すること。傳染病豫防法第三十一「交通遮斷隔離に關する諸費及交通遮斷隔離の爲」

かうつうーぜい 一交通稅 (名) 【經】㊀かうゐぜい(行爲稅)に同じ。㊁運輸・通行の行爲に賦課する租稅。即ち、出入港稅・鐵道運輸稅・通行稅の類。運輸稅。

かうつうーせいさく 一交通政策 (名) 【經】經濟政策の一。交通の方法に關するもの。陸運政策・水運政策・鐵道政策・通信政策に分かつ。各條を見よ。

かうつうせいさくーがく 一交通政策學 (名) 【經】經濟政策學の一。交通に關するもの。

かうつうーろ 一交通路 (名) 交通の道路。

かうーづか 一髮束 (名) 髮束にて、髻の先をいふなるべし。(松屋筆記) 著聞集「片手にて、かうづかをとりて、死ぬばかり打ちてけり」太平記三新田義貞自害「已れが喉笛二所さし切りて、自らかうづかを握み已れが首をうしろへ折り附くる音、二町計りぞ聞こえける」

かうーつがふ 一好都合 (名) 都合よきこと。をりよきこと。

がうーつくばり 一强突張 (名) 剛情にして人に從はざること。又、其の人。

かうーづくゑ 一香案 (名) 香爐をのする机。

かうづけーぼたん 一上野牡丹 (名) 紋所の名。

かうづけーわた 一上野綿 (名) 昔、上野國より産出したる上等の綿。庭訓往來八月「上野綿・上總鞦・武藏鐙」

かうーづつみ 一香包 (名) ㊀香を包む紙。五月雨日記「香づつみ」夕霧阿波鳴渡「懷中より香包み、名木火鉢に薫らせ」㊁折形の名目。

かうづつみーらめ 一香包梅 (名) 紋所の名。

かうーっと 一上手 (名) 【かみての音便】かうと(斯)に同じ。

かうて

(こみつづうか)

かうて 一斯 (副) 【かくての音便】かやうにて。竹取「翁のあらん限りは、かうてもいますかりなん」源花宴「かうてやみなんとは、さりともおぼされじなどの給へば」

かうて 一紙手 (名) おしがみ(押紙)をいふ、大阪及び和泉國の方言。(物類呼稱)

かうーてい 一高弟 (名) 多くの弟子中にて、勝れたるもの。高足。史記禮書「子夏門人之高弟也」

かうーてい 一香亭 (名) 佛語。彝儀の行列の具の一。香爐を安置する小屋。四方を紗にて張るを常とす。かうろ。勅修百丈清規潙仏「香亭・眞亭」

かうーてい 一行程 (名) みちのり。里程。道程。楊萬里詩「峽裏撐船更不行、櫂郎相語改行程」

かうーてい 一航程 (名) 航行のみち

かうーてい 一鉸釘 (名) 鐵鋼の建造物の接合に用ふる鋼鐵製の鋲。

かうーてい 一高低 (名) ㊀高きと低きと。あがることとさがることと。たかひく。朗詠「螫日螫風高低千顆萬顆之玉」九華山錄「回望九華橫側高低無一同者」㊁物價の騰貴と下落と。あがりさがり。「高低區區」昂騰。

かうーてい 一考定 考へ定むること。

かうーてい 一考訂 考へ正すこと。

かうーてい 一更訂 改めただすこと。

かうーてい 一校訂 書物の字句などを、しらべ正すこと。校正。

かうーてい 一校定 書物などの字句・意義などを比較し定むること。後漢書賈逵傳「可令通義理明習法律者、校定科比、一以其法度」唐書韋温傳「皆手校定」

かうーてい 一肯定 こうてい(肯定)を見よ。

かうーてい 一抗抵 ていかう(抵抗)に同じ。

かうーてい 一孝弟 孝悌 善く父母に事へ、又兄弟を敬愛すること。論語學而「孝弟而好犯上者鮮矣」

かうーでい 一膠泥 (名) せめんと又は石灰に、砂をまぜ水を加へて練りたるもの。石垣などを膠著せしむるに用ふ。

かうていーそくりやう 一高低測量 (名) すんじゅんそくりやう(水準測量)に同じ。

かうていーは 一高低波 (名) 【理】水面に起こる波。振りたる繩に起こる波の如く、波動をなす各部の振動の方向が、波の進む方向と直角なる波。横波(ハ)。

かうていーみ 一高低見 (名) 鑄たる活版の高低あるかを檢すること。又、その人。

かうーてう 一高潮 (名) ㊀あげしほ。みちしほ。㊁滿潮の極點に達したる時。(低潮の對)㊂物事の極度。絕頂。「情熱の高潮」

かうてうーじ 一高潮時 (名) 高潮に達したる時。

かうてうーはう 一鋼條砲 (名) かうせんはう(鋼線砲)に同じ。

かうーてき 一抗敵 手むかふこと。敵對すること。刑法第八十二「敵國に與して帝國に抗敵したる者」

かうーてき 一號笛 (名) あひづのために吹きならす笛。

かうーてき 一强敵 剛敵 (名) 手に餘るほどつよき敵。手ごはき敵。きやうてき。太平記九、久米「是れ皆强敵を拉ぐ氣、天を廻ぐらし地を傾けんとす」甲陽軍鑑「敵の地へ推し入るは剛敵也」

がうーてき (副) 非常に。すぐれて。すばらしく。すてき。がうぎ。がうせい。浮世風呂「がうてきに朝寢だの」膝栗毛「ありやなんだらう。がうてきにおほふな女どもだ」

かうてきーかうね 一抗敵行爲 (名) 【法】敵の戰鬪力を破る目的にてなす行爲。

かうてきーざい 一抗敵罪 (名) 【法】外國に通謀して我が國に對し戰端を開かしめ、又は敵國に與して我が國に抗敵したるによりて成立する犯罪。

かうーてつ 一鋼鐵 (名) 【化】炭素の含量〇、四—二%の鐵。鍛接することを得べく、硬くして彈性あり。俗に刃金(ハガネ)といひ、刃物・時計のぜんまい・彈き金・甲鐵艦・鐵軌等を造り、鐵類中、其の應用最も廣きもの。

かうーてつ 一更迭 迭(テツ)に入り更(カハ)ること。いりかはり。更代。詩經雅「終歲列宿、更迭而見」

かうてつーかん 一鋼鐵艦 (名) 鋼鐵を材料として造りたる軍艦。

かうてつーの-り 更迭理 (名) 【數】二つの比が相等しきとき、其の各の比の前項と前項との比が、後項と後項との比に等しと云ふこと。A:B=C:Dなるとき A:C=B:Dの類

かうーてん 一昊天 (名) ㊀ひろきそら。おほ空。詩經小雅「不弔昊天、不宜空我師」周禮春官「以昭事于昊天」㊁四天の一。夏のそら。爾雅「夏爲昊天」

かうーてん 一高天 (名) 高き天。そら。韓非子說疑「以其主爲高天泰山之尊」

かうーてん 一江天 (名) 河上の空合。又、江と天と。諸自量「江天渺渺として水光平かなり」張若虛詩春江花月夜「江天一色無纖塵、皎皎空中孤月輪」

かうーてん 一高點 (名) 多き點數。たかき點數。

かうーてん 一交點 (名) ㊀彼れと是れと相交じはる點。交叉點。㊁【天】惑星・彗星又は衛星等の軌道が、黃道面と交じはる點。㊂【數】線と線、又は線と面との交ほり。

かうーでん 一香奠 香典 (名) 香華の料として、死者の靈前に供ふる金圓。香料。新撰長祿寛正記寛正二年八月十一日「遊佐新左衛門尉を以て、御香奠百貫文を被遣」翰墨大全「特賜香奠焚帛外」

かうーでん 一耕田 (名) 耕作をなす田地。

かうーでん 一校田 古へ巡察使を遣して、田地の水旱・風蟲の災害及び開墾の成否、地目の變更、私田の隱沒等を檢査せしむること。類聚國史「位田之設、爲優其主。若所在國司、自今以後、校田之日、細校令申、不得更然」

かうでんーがへし 香奠返 (名) 香奠を受けたる返禮として、物を贈ること。又、其の物。

かうーてんさ 一好天氣 (名) 好き天氣。快晴。

かうーてんじやう 一格天井 (名) 天井の一種。障子のかの如く木を升形に組み入れて、これに板を張りたるもの。後者昔物語「店の後が、かう天井の如く光りて美美しかりし」

かうでんーちやう 一校田帳 (名) 古へ校田によりて田數を調査せし帳簿。

かうーと 一狡兎 (名) 敏捷なる兎。

(諺)狡兎三窟 狡猾なる兎は多くの逃路を用意しおくこと。戰國策齊「狡兎有三窟、僅得免其死耳」

(諺)狡兎死して走狗烹らる 狩獵にて狡兎の驅逐に功ありし狗も、狩獵終はれば烹らる。有事の際に功ありし者も、事變平げば却て除害せらる。史記淮陰侯傳「狡兎死良狗烹、高鳥盡良弓藏」

(諺)狡兎垂きて耳大烹らる 前條に同じ。

かうーと 一斯 (感) 物事を考ふるとき發する聲。ええと。笑門俄七福「それさ、かうと、今に一番が這入ると、練りこまにやならねえから」

かうーど 一耕土 (名) 土地の上層にして、耕鋤のため質軟くして作物を養ひ得る地。うはつち。(心土また底土の對)

かうーど 一高度 (名) ㊀程度高きこと。(低度の對)㊁【天】地平面より天體までの角距離。㊂【數】ぎやうかく(仰角)を見よ。

かうーど 一硬度 (名) ㊀物體の硬(カタ)き度合。即ち、きずを附けんとする時、物體の抵抗する度合。現今は金剛石を硬度最も高きものとす。㊁【化】かるしうむ鹽・まぐねしうむ鹽等の鐵物質を溶含せる水の性質の一。即ち、斯かる水は石鹼を用ひて洗濯をなすときに泡立つこと難く、從ひて石鹼が洗濯の作用をなさざるものなり。かうすゐ(硬水)を見よ。

かうーとう 一鴨頭 一香頭 (名) 吸物などの中に入るる柚子などの吸口。すひくち。太平記「宮方の鴨頭になりしゆの川は、都に入りて何の香もせず」狂言「いり物こそ出來たれとて、ゆのかうとうに具杓子おっ取りそへ持って出やう」四條流庖丁書「魚らせ物の上に置くかうとうの事、香頭とも申し、鷄頭とも申すなり」

かうーとう 一港燈 (名) 港口に設くる燈臺。

かうーとう 一昂騰 物價などあがること。騰貴。

かうーとう 一高等 ㊀程度の高きこと。物事のすぐれたること。後漢書黨錮傳「以高等、擢拜議郎」㊁上品。高尚。著實じみ。狂言「昔もかうとうにござらう、さながら當世もわるうござらう。ただ中昔ををすへて下だされえ」女敎油地獄「かうとうな兄御を手本にして」

かう-どう 〔名〕わるがしこきわらは。狡猾なる童子。詩經國風「彼狡童兮、不與我言兮」

かう-どう 〔行動〕一ふるまふこと。挙動。「行動人に異なり」二はたらき。しわざ。行爲。「行動を共にす」

がう-とう 〔名〕書物の本文の上。欄の上。又、其の書入れ。「鼇頭に記す」

かうとう-いんばい 〔高等淫賣〕〔名〕貴婦人などに扮裝して淫を賣る女。高等地獄。

かうとう-かいぬんしんばんじょ 〔高等海員審判所〕〔名〕海員審判所の一。遞信省に置き、地方海員審判所の裁決に對する控告を審判する所。所長・審判官・理事及び書記の職員を置き、審判長及び審判官を併せて五人の列席合議を以て審判を行ふ。海員懲戒法第八條「高等海員審判所」

かうとう-がくかう 〔高等學校〕〔名〕文部省直轄專門學校の一。中學校卒業程度の者に、專門學科を教授する所にして、帝國大學に入學する者のために、大學豫科を設くることを得。高等學校令「高等學校」

かうとうがくかう-だいがくよくわ 〔高等學校大學豫科〕〔名〕高等學校にて、帝國大學に入學する者のために、豫備教育を施す所。其の學科を第一部・第二部及び第三部に分かち、第一部は法科大學及び文科大學志望者に、第二部は醫科大學の藥學科・工科大學・理科大學・理工科大學及び農科大學志望者に、第三部は醫科大學志望者に課するものとす。高等學校大學豫科規程「高等學校大學豫科」

かうとう-ぎゃうせいくわん 〔高等行政官〕〔名〕高等官たる行政官。行政裁判法第三條「五年以上高等行政官の職を奉したる者」

かうとう-くわ 〔高等科〕〔名〕高等なる部門。程度の高き科。

かうとう-くわん 〔高等官〕〔名〕官吏の一。其の任免に、天皇の裁可を要するもの。親任式を以て親任する官と、其の以下一等より九等までの官とに分かつ。親任式を以て親任する官を親任官、其の一等・二等を勅任官、三等以下を奏任官とす。高等官官等俸給令「高等官」

かうとうくわん-さんじくわいぬん 〔高等官參事會員〕〔名〕府縣の高等官にて府縣參事會員たるもの。府縣制第六十「高等官參事會員」

かうとうくわん-たいぐう 〔高等官待遇〕〔名〕官吏に非ずして、高等官と同樣の待遇を受くること。

かうとう-ぐんぱふくわいぎ 〔高等軍法會議〕〔名〕りくぐんかうとうぐんぱふくわいぎ(陸軍高等軍法會議)又はかいぐんぐんぱふくわいぎ(海軍軍法會議)の略。陸軍治罪法第六編「東京に高等軍法會議一箇を設く」海軍治罪法第六編「判士長判士は高等軍法會議に於ては第一表に據り」

かうとう-けいさつ 〔高等警察〕〔名〕【法】保安警察の一。出版・集會・結社・火藥等、公共の安寧秩序に關する危害の防禦を目的とするもの。公安警察。高等保安警察。公共警察。(普通警察の對)内務省官制第六條「高等警察に關する事項」

かうとう-けいろく 〔高等教育〕〔名〕程度の高き教育。(初等教育及び中等教育の對)

かうとうけいろくくわいぎ 〔高等教育會議〕〔名〕文部大臣の監督に屬する、教育上の諮詢機關。高等教育會議規則「高等教育會議」

かうとう-こうけいがくかう 〔高等工藝學校〕〔名〕文部省直轄實業專門學校の一。工藝に關する學術・技藝の專門教育を施す所。京都高等工藝學校規程「京都高等工藝學校」

かうとう-こうけうがくかう 〔高等工業學校〕〔名〕文部省直轄實業專門學校の一。工業に關する高等の學術・技藝を教授する所。東京高等工業學校規程「東京高等工業學校」大阪高等工業學校規程「大阪高等工業學校」

かうとう-しけん 〔高等試驗〕〔名〕ぶんくわんかうとうしけん(文官高等試驗)の略。明治二十七年七月閣令第十九號「代言人試驗に及第し五箇年以上代言人たる者は當分の内高等試驗及實務練習を要せずして司法官に任することを得」文官試驗規則第七「文官試驗を出願する者には手數料として高等試驗に在りては金十圓普通試驗に在りては金二圓を納めしむ」

かうとう-しはんがくかう 〔高等師範學校〕〔名〕文部省直轄學校の一。師範學校・中學校及び高等女學校の教員たるべき者を養成する所。豫科・本科・研究科に分かち、附屬中學校及び附屬小學校を置く。師範教育令「高等師範學校」

かうどう-しゃ 〔行動者〕〔名〕一行動をなす人。二(英 Agent)どうさしゃ(動作者)に同じ。

かうとう-しゃうけうがくかう 〔高等商業學校〕〔名〕文部省直轄實業專門學校の一。商業に關する高等の學術・技藝を教授する所。東京高等商業學校豫科及本科學科規程「東京高等商業學校」山口高等商業學校規程「山口高等商業學校」長崎高等商業學校規程「長崎高等商業學校」

かうとう-しょいうけん 〔高等所有權〕(英 Eminent domain)〔名〕【法】十八世紀の末に、民約說と共に行はれたる理論。領土及び人民を財産と見做し、此の財産の上に行はるる支配權を、普通の所有權に對しての稱。

かうとう-しょくぶつ 〔高等植物〕〔名〕【植】植物學上の用語。概ね大形にして、體制複雜なる植物。總べての顯花植物・羊齒植物等の類。

かうとう-せうがくかう 〔高等小學校〕〔名〕小學校の一。義務教育を終はりたる兒童に、更に程度の高き初等普通教育を施すを目的とする所。其の修業年限は二箇年とし、土地の情況によりて三箇年に延長することを得。(尋常小學校の對)小學校令「高等小學校」

かうとうせうがくかう-ほしゅくわ 〔高等小學校補習科〕〔名〕高等小學校を卒業したる者、及び之と同等以上の學力を有する者に、高等小學校の教科目を補習せしむるを目的とする學校。其の修業年限は二箇年以下とす。小學校令施行規則第四十二「高等小學校補習科」

かうとう-たんぱう 〔高等探訪〕〔名〕新聞社の探訪の一。政治に關することを探訪するもの。又、その人。

かうとう-ぢごく 〔高等地獄〕〔名〕かうとういんばい(高等淫賣)に同じ。

かうとう-ちゅうがくかう 〔高等中學校〕〔名〕明治二十七年九月以前の高等學校の稱。高等學校令第一「第一高等中學校第二高等中學校第三高等中學校第四高等中學校及第五高等中學校を高等學校と改稱す」

かうとう-ぢょがくかう 〔高等女學校〕〔名〕女子に必要なる高等の普通教育を施す學校。高等女學校令「高等女學校」

かうとう-どうぶつ 〔高等動物〕〔名〕【動】動物學上の用語。組織の分化顯著にして、複雜なる生理作用を營む動物。一般に大形なり。即ち、脊椎動物の類。(下等動物の對)

かうとう-のうりんがくかう 〔高等農林學校〕〔名〕文部省直轄實業專門學校の一。農業及び山林業を處理・經營し、又は農林學科の教員たるべき者を養成する所。盛岡高等農林學校規程「盛岡高等農林學校」鹿兒島高等農林學校規程「鹿兒島高等農林學校」

かうとう-はふゐん 〔高等法院〕〔名〕一關東都督府法院の一。終審として、地方法院又は民政署長若しくは民政支署長の裁判に對する上訴の覆審をなす合議裁判所。關東州裁判令第六條「高等法院」二明治三十一年七月以前に於ける、臺灣の上告審の裁判所の稱。今の覆審法院に當たる。臺灣總督府法院條例第三十條「此條例施行前に於て高等法院の受理したる訴訟事件にして未た判決を受けさるものに關しては從前の高等法院の職務は覆審法院之を行ふ」三明治二十三年十一月以前、皇室に對する罪、國事に關する罪、皇族又は勅任官の犯したる罪を審理するために、司法卿の上請により、勅裁を以て開きし最高の刑事裁判所。裁判所構成法施行條例第八「高等法院」

かうとう-ぶくわん 〔高等武官〕〔名〕高等官たる武官。即ち、陸軍高等武官及び海軍高等武官の稱。明治三十年十月勅令第四百一號海軍軍人俸給令第一「高等武官の俸給」

かうとう-ふつうけいく 〔高等普通教育〕〔名〕小學校よりも更に程度高き普通教育。(初等普通教育の對)高等女學校令第一「女子に須要なる高等普通教育」

かうとう-ぶんくわん 〔高等文官〕〔名〕高等官たる文官。高等官官等俸給令「高等文官」

かうとう-ほあんけいさつ 〔高等保安警察〕〔名〕かうとうけいさつ(高等警察)に同じ。

かうとう-ほくわくしんけんじょ 〔高等捕獲審檢所〕〔名〕捕獲審檢所の檢定に對する抗議の檢定をなす所。長官・評定官及び檢察官・書記の職員を置き、首席及び評定官を併せて七名以上の列席合議を以て其の審問・檢定をなす。捕獲審檢令第一「高等捕獲審檢所」

かう-とく 〔孝德〕〔名〕孝行の德。漢書禮樂「清明恩矣、皇帝孝德」

かう-とく 〔高德〕〔名〕德の勝ぐれたること。又、その人。「高德の僧」

かう-どく 〔講讀〕書籍の義を讀みあきらむること。宋史董槐傳「爲人簡易端純、接諸讀、隨事納忠」

かう-どくそ 〔抗毒素〕〔名〕毒素を中和して無毒とならしむる作用ある物質。

かうど-けい 〔硬度計〕〔名〕鑛物の硬度を定むる標準とする鑛物。

がうな 〔寄居蟲〕〔名〕【動】やどかり(寄居蟲)の異名。枕三「日頃はがうなのやうに、人の家に尻をさし入れてなんさぶらふ」河貝子本草綱目名

かう-ない 〔港内〕〔名〕港の内。

かう-ない 〔坑内〕〔名〕炭坑・鑛坑の内。

かう-ない 〔校内〕〔名〕學校のうち。學校の内部。

かうない-しとど 〔名〕【動】ほほじろ(頰白)の異名。

かう-なう 〔香囊〕〔名〕にほひぶくろ(匂囊)に同じ。榮華衣蓋「關白殿かうのつぼ(かうなう)捧たせ給へり」晉書劉毅傳「兩婢持香囊」

かう-なう 〔行囊〕〔名〕郵便物を入れて、遞送するに用ふる袋。

かう-なう 〔膠囊〕〔名〕膠(にかわ)にて製したる小さき囊の如きもの。飲みにくき藥劑、又は胃に入りて始めて粘膜に接觸するを要する藥劑を容れて嚥下するに用ふ。

かう-なうまく 〔硬腦膜〕〔名〕【醫】腦を纏ふ被膜中、最外層に位するもの。直ちに頭蓋骨の内面に固著す。

かう-なが 〔髮長〕〔名〕かみなが(髮長)の音便。八卷都抄

かう-なぎ 〔巫〕〔名〕かむなぎ(巫)の音便。榮華後篇六卷「かうなぎをば、御車の口の方に乘せたり」

かう-なっとう 〔名〕嘗め物にする納豆。貞丈雜記

かう-なと 〔硬軟〕〔名〕硬(かう)きと軟(なん)きと。

かう-なん 〔江南〕〔名〕河のみなみ。支那にて、揚子江の南方。

かうなんのたちばな 〔江南橘〕支那の揚子江の南方に產する橘を江の北に移植すれば枳殼に變ずといふより、處によりて其の性質を變化する譬へ。太平記八十二「處異なれども、江南の橘江北に被移て枳と成る習ひ也」說苑「江南有橘、齊王使人取之、而樹之於江北、生不爲橘乃爲枳、所以然者、其土地使之然也」

かう-にく 〔膏肉〕〔名〕あぶらみ。

かう-にん 〔降人〕〔名〕降參したる人。かうじん。陸奥話記「獻首使者、率貞任從者降人」平治物語「降人になりて面縛せられ」後漢書光武紀「墨將降人分配諸將」

かう-にん 〔更任〕一改め任ずること。二古へ、除目にて、諸國の掾・目等に任ぜられたる者の、病氣などの事故により、任符を給はらずして年限を經過し、事故止みて、更に其の國に任ぜらるること。江次第除目「院宮更任」三或る任務に在る者を解任し、他の者をして、代はつて其の任務に就かしむること。貴族院伯爵議員選擧規則第七條二項「議員の更任ある毎に之を改選すべし」

かう-ぬし 〔神主〕〔名〕【かみぬし(神主)の音便】かむぬし(神主)に同じ。

かう-ねん 〔行年〕〔名〕ぎやうねん(行年)に同じ。

かうーねん 〔高年〕（名）年高きこと。又其の人。老年。漢書「子鄉里先耆艾奉高年古之道也」

かうーのいた 〔桒板〕（名）和船の歩（ほ）の間にある物見を塞ぐに用ふる取置きの板。

かうーのう 〔效能〕（名）こうのう（功能）に同じ。

かうーのう 〔耕農〕耕作を業とすること。又其の人。耕作。農業。史記「桒弘羊傳」「成人遂好耕農」

がうーのう 〔豪農〕（名）富豪なる農家。

かうーのーうり 〔香瓜〕（名）味噌漬の白うりをいふ、宮女の詞。

かうーのーさ （名）【植】しきみ（榊）をいふ、遠江國の方言。

かうーのーけ （名）まゆ（眉）をいふ、奥州の方言。

かうーのーこし 〔香輿〕（名）葬具。小さき輿の内に、香を焼きて葬送に從ふもの。和名十四、葬具「香輿乃右之」榮華月宴「香のこし・火のこしなど、皆あるわざなり」

かうーのーづ 〔香圖〕（名）【建築】床の落としかけなどを、柱に取り附くる時の木口（きぐち）の形。

かうーのーとの 〔守殿頭〕（名）〔かみのとの督殿（名）國守・左馬頭・右馬頭・衛門府又兵衛府の督などの尊稱。宇治拾遺「かうの殿だに、さたとこそ召せ」

かうーのーぬさじろ 〔香緯白〕（名）織色の名。緯は香色にて、緯の白きもの。

かうーのーし 〔守主〕（名）かうのとの（守殿）に同じ。

かうーのーふり 〔香瓜〕（名）かうのうり（香瓜）に同じ。大上薗御名之事「、かうの物。かうのふり」

かうーのーまくら 〔香枕〕（名）かうまくら（香枕）に同じ。

かうーのーまめ 〔香豆〕（名）下文を見よ。諸禮筆記「かうのまめの事。右具足の鏡開きの菜なり。香の物を大切りに一切りと、豆とをするなり」

かうーのーみづ 〔香水〕（名）たれ味噌の汁をいふ、宮女の詞。大上薗御名之事「一、しる。御しる。しるのしたりの味噌をかうの水といふ」

がうーのーむしゃ 〔剛武者〕（名）剛勇なる武士。鎌田兵衛名所盃下「保元・平治の合戰に、多くの敵に向かうても、薄手も負はぬ剛の武者」

かうーのーもの 〔香物〕（名）〔かう（香）は味噌の古名〕古く味噌漬のものをいひしが、後には糠・鹽・粕等に漬けたる野菜物の稱。かうかう。つけもの。傾城酒呑童子「客るもの久しから漬けの香の物」後撰夷曲集「大かうの者とは聞けど、糠味噌に打ちつけられて、しをしをとなる」

がうーのーもの 〔剛者〕（名）すぐれて剛（元自河邊）き者。勇猛なる武士。心剛なる人。保

（諺）剛の者に矢が立たず 剛勇なる者は、他より害を受くることなし。世話盡「剛の者に矢がたたず」

かうーのーもんこ 〔香文濃〕（名）織色の名。緯は薄香、緯は香にて織りて、地よりも紋濃く出でたるもの。

かうーは 〔一硬派〕（名）〔一すべて手強き意見を主張する一派。己れの主義を主張して曲げざる派。（軟派の對）二取引所の語。つよく（强氣）に同じ。「地場硬派の買ひ」

かうーば 〔行馬〕（名）一こまよせ（駒寄）に同じ。二鐵釘を端に打ちつけたる杙（くい）。陣頭に設けて、敵の騎兵の突入を妨ぐるもの。

かうーば 〔耕馬〕（名）耕作に使役する馬。

かうーはい 〔伉配〕（名）つれあひ。めをと。伉儷。

かうーはい 〔向背〕（名）一從ふこととそむくこと。二やうす。なりゆき。

かうーはい 〔高配〕（名）他人の配慮の敬語。御配慮。

かうーはい 〔向拜〕（名）神社にて、正面に張り出だしたる部分。參詣人の本殿に向かひて禮拜する所。こはい。

かうはい-かいさ 〔高配甲斐絹〕（名）甲斐絹の縞を、太絲にて織り現はしたるもの。

かうはい-はしら 〔向拜柱〕（名）【建築】神社の前面にありて、打越しだるきを承け支ふる柱。參詣者の向かひて拜する左右にあるよりいふ。

かうーはう 〔高報〕（名）價高しとのしらせ。「大阪の高報を聞き」

かうーはう 〔航方〕（名）船舶が互ひに近寄りて、衝突の虞あるとき、一方の船が、他の一方の船の航路を避くる方法。海上衝突豫防法「航方」

かうーばう 〔好望〕（名）好ましき見込みあること。

かうーばう 〔一香房〕（名）佛語。寺にて、役僧などの詰め居る所。かうべや。

かうーばら 〔香茅〕（名）【植】禾本科、香茅屬の多年生草本。莖の高さ七八寸。葉は披針形又は線形、主として下部に生ず。四五月頃、花穗を抽出し、花は小穗をなし、小穗は總狀に排列し、黄綠色を呈して光澤あり。我が國、各地の原野水濕の地に自生す。

かうーはう 〔號砲〕（名）合圖のため發砲すること。陸軍刑法「禮砲號砲其の他空砲を發すべき場合に於て彈丸瓦石其の他の物を裝塡して發したる者」

がうーはう 〔豪放〕氣象の大にして、小節に拘はらざること。豪膽にして放逸なること。北史「奔少而豪放、出入殿庭、步眄高上、無所顧忌」唐書「邕傳」「邕資豪放、不能治細行」

かうーはく 〔巷陌〕（名）ちまた。まち。朱淑眞詩「巷陌風輕燕燕飛」

かうーはく 〔皓白〕（名）白きこと。漢書「四人者從太子年皆八十有餘、須眉皓白、衣冠甚偉」

かうーばこ 〔香箱〕〔香盒〕（名）香を入るる箱。かうがふ（香合）。建武式目追加「盆・かうばこ・茶碗・花びん・香ろ・かな物已下廿箇月たるべきこと」

かうーばさみ 〔髪鋏〕（名）かみばさみ（髪鋏）の音便。

かうーはし 〔香箸〕（名）香をたくとき、香を挾むに用ふる木製の箸。きやうじ。五月雨日記「香だたみを取り、かうばしを抜き、火取りを取り、火加減を見させ給ひて」

かうばし 〔香芳〕（形）〔かぐはしの音便〕一かをりよし。にほひよし。かんばし。宇津保「楼上」「楼のかうばしきにほ

ひ限りなし」源氏「あやしくかうばしくにほふ風吹きつるを」二よし。うつくし。おもしろし。結構なり。「かうばしき名」「かうばしき事」保元「其の跡芳しく候へども」頼季集「かうばしき御音づれは、手の舞ひ足の蹈まん所もおぼえず」

かうばしーがひ （名）【動】海膽（うに）類の刺。

かうばしーけ 〔香氣〕（副）かうばしきさま。かうばしさう。

かうばしーさ 〔香〕（名）かうばしきま。かうばしき度合。宇津保「俊蔭」「親の御あたりのかうばしさに」

かうーはつ 〔皓髮〕（名）白き髮の毛。しらが。

かうーはつ 〔藁髮〕（名）【植】かさもち（藁本）の異名。

かうーはつ 〔藁茇〕（名）【植】蔔條に同じ。

がうはつ 〔亳髮〕一細き毛。毫毛。二極めて極少なること。唐船噺今國姓爺「今日主從の結びをなし、まだ亳髮の恩も與へず」論衡「有毫髮益美之化、無細大亳髮之虧」魏文帝文「與吳質書」「莫以亳髮故、棄捐素所愛」

かうーはな 〔香花〕（名）佛に奉る香と花と。かうげ。大磯虎稚物語「たまたま持つたる子供さへ、香花とるべき者もなく」

がうーはら 〔强腹〕（名）どふはら（業腹）の訛り。

がうーばり 〔强張〕（名）强情を張ること。節用「强張（がうばり）」女殺油地獄下「がうばりが强うて、いよいよ心が直らぬと、さぞ憎まるるは必定」

かうーひ 〔皓飯〕（名）白きこはめし。

かうーはん 〔鋼板〕（名）鋼鐵の板狀をなせるもの。

かうーはん 〔行犯〕（名）【法】積極行爲によりて成立する犯罪。即ち、通貨偽造罪・文書偽造罪の類。（不行犯の對）

かうーはん 〔皓礬〕（名）【化】りうさんあえん（硫酸亞鉛）に同じ。

かうーはん 〔交番〕（名）一交代して番をすること。かはりばん。二かうばんし（交番所）の略。

かうーはん 〔香盤〕（名）かうろ（香爐）に同じ。中務內侍日記「大きなる香ばんに、みやうがうや包ふらんと見えたり」砂石集「香盤の蓋に細き竹の筒をねぢ入れて、片端をば佛の鼻の穴にねぢ入れて、聊かも香の烟の散らぬやうにして」山門堂舍記「一、香盤机一脚、香盤一口有蓋」

がうーはん 〔强飯〕（名）一こはいひ。總國の方言。二ぼたもち（牡丹餅）をいふ、下總國の方言。

かうはん-しょ 〔交番所〕（名）市中の要所に配置せる巡査の派出所。交番。

かうばん-でんりう 〔交番電流〕（名）【理】かうりう（交流）に同じ。

かうーひ 〔考妣〕（名）死したる父母の稱。書經「百姓如喪考妣」禮記「生曰父曰母曰妻、死曰考曰妣曰嬪」

かうーひ 〔糠秕〕〔糠粃〕（名）米のぬかともみと。後漢書「雖有麋弩、糠秕相半」世說「習鑿齒曰、籤之、如糠秕在前」

かうーひ 〔高卑〕（名）高きと卑（ひく）きと。尊きと賤しきと。保元「法皇、有待の御身は、貴賤も高卑も異なることなく」禮記「坋丘隱之大小高卑厚薄之度」

かうーひ 〔一高批〕（名）他人の批評の敬稱。御批評。

かうーひ 〔高庇〕（名）おかげ。おめぐみ。韓愈詩「夏陰倘高庇、骨魂接虛攤」

かうーび 〔交尾〕鳥・獸・蟲・魚などの、雌雄の交接。つるむこと。つがふこと。書經「交接日尾」

かうびーき 〔交尾期〕（名）交尾する時期。さかりどき。

かうーひつ 〔鋼筆〕（名）からすぐち（烏口）に同じ。

かうーひねり （名）〔かみひねり（紙捻）の音便〕一かうより（紙縒）に同じ。二もとゆひ（元結）に同じ。

かうーひやう 〔好評〕（名）好き評判。（惡評の對）

かうーひやう 〔高評〕（名）一名高き評判。二かうひ（高批）に同じ。

かうーひやう 〔講評〕義理を說きて批評すること。

かうーびやう 〔鉸鋲〕（名）かうてい（鉸釘）に同じ。

がうーひやう 〔剛兵〕（名）剛勇なる兵。たけきつはもの。

（諺）剛兵は傷く事なし 剛の者に矢が立たず に同じ。がうのもの（剛者）の條を見よ。信長記「五十五夫、是剛兵は傷くことを無しと云ひし如く」

かうーびん 〔幸便〕（名）都合よき時のたより。びんぎ（便宜）。五十年忌歌念佛下「幸便に任せ、一筆啓上せしめ候」

かうーふ 〔耕夫〕（名）耕作する人。農夫。百姓。陸游詩「醉似在家狂道士、愚於識字老耕夫」

かうーふ 〔坑夫〕（名）礦山にて、採掘に從事する人夫。坑內にて勞働する人夫。

かうーふ 〔交付〕引き渡すこと。手渡しすること。刑法「三要塞陣營軍隊艦船其他軍用に供する堤所又は建造物を敵國に交付したる者」同「三兵器彈藥其他軍用に供する物を敵國に交付したる者」

かうーふ 〔降附〕降參して敵に附き從ふこと。後漢書「詔」「遂、棘拜令長以下、招懷綏輯、多來降附」

かうーふ 〔講武〕武藝を練習すること。禮記「月令」「乃命將帥、講武習射御」

がうーふ 〔豪富〕又、其の人。富豪。史記「秦始皇紀」「徙天下豪富於咸陽十二萬戶」

がうーふう 〔高風〕（名）けだかき風采。すぐれたる人がら。

がうーふう 〔校風〕（名）學校に特有なる氣風。

かうーふう 〔剛風〕（名）つよく吹く風。强風。抱朴子「去地四千里、風力猛壯、有剛風世界」顧瑛詩「樓船欲去引剛風」

がうーふうさう 〔綱封倉〕（名）大和國奈良の正倉院にて、三綱が封印をなす倉。

がうーぶぎやう 〔郷奉行〕（名）室町時代の職名。料所と定めたる土地の租稅などを掌る。

かうーふく 〔降伏〕かうさん（降參）に同じ。

かうーふく 〔幸福〕一まはりあはせよきこと。好運なること。さいはひ。しあはせ。二是ましき又は樂しき生活狀態。快樂ありて苦痛なき有樣。

かうーふく 〔一剛愎〕强情にしてねぢけた

ること。曲げて我意を張ること。左傳宣公十二年「其佐先縠、剛愎不仁」

かうふく-けいさつ 〔幸福警察〕 (名) Wohlfahrtspolizei; Begliückungspolizei) 【法】人民の幸福を増進するを目的とする警察。

かうふく-せつ 〔幸福説〕 (名) 【哲】幸福を以て人生の最高善として、そを道徳上行爲の目的なりとする學説。

かうぶくろ 香嚢 (名) 一香を入るる袋。にほひぶくろ。かうなう。二銀などにて毬形に作り、中に香を入れ、紐を附けて屋内に釣り下ぐる物。類聚雜要抄「香嚢一流」

(こうぶくろ)

かうぶし 〔香附子〕 (名) 【植】はますげの異名。類聚雜要抄「香附子」

かうぶしょ 〔講武所〕 (名) 江戸幕府の末、旗下の士に武術を講習せしめし所。

かうぶしょ-づきん 〔講武所頭巾〕 (名) 〔講武所へ通ふ者のかぶりたればいふ〕にらやまづきん(韮山頭巾)に同じ。守貞漫稿

かうぶだ 香札 (名) 香合せの時、香の名を記す札。

かうぶち 格縁 (名) 格天井にて、其の組みたる細き木の稱。

かうぶつ 〔好物〕 (名) 一よきもの。すきこのむ飲食物。左傳昭公廿「生好物也、死惡物也、好物樂也、惡物哀也」二すき。このみ。傾城酒呑童子二人間のぶうぶうを捻り殺すは、この公時が好物」

かうぶつ 〔香物〕 (名) 穩座に供ふる香・果物の稱。折敷に盛る。雅亮裝束抄「かうぶつとて、土たかつきをじきにしたるさかな、くだもの」

かうぶつ-をとこ 好物男 (名) わが好む男。氣に入りの男。平家女護島「腰骨太い達者づくり、これがおかみの好物男」

かうぶり 冠 (名) 〔かがふりの音便〕一かんむり(冠)に同じ。和名抄「冠」帽辯色立成云、幞頭賀字 宇津保貴宝「かうぶりをしりへ、さまにし、うへの袴をかへ、さまに著」二位階。舒明紀「給二冠位一級」宇津保俊蔭「一歳に二度、三度つかさ・かうぶり賜はり、日毎に加階まさりつつ」三五位に叙せらるること。敍爵。竹取「此の女、もし奉りたるものならば、おきなにかうぶりを、などかたばせざらん」古今雜上「宮仕へもせで、いそのかみといふ所にこもり侍りける頃、俄にかうぶり賜はれりければ」四ねんしやく(年爵)に同じ。榮華見はてぬ夢「受領までこそ得させ給はねば、つかさ・かうぶり・御封など奉らせ給へば」同玉村「上の御前の、かく后とひとしき位にて、よろづのつかさ・かうぶりを得させ給ひなどして」五うひかうぶり(初冠)の略。元服。伸哀紀「朕未レ逮二于弱冠一而父王既崩之」宇津保俊蔭「十二歳にてかうぶりしつ」

かうぶり を かく 掛冠 仕官を辭す。掛冠す。源氏賢き人かどの君も位を去り給ひぬるに、年ふかき身の、かうぶりをかけんに、何か惜しからん」

かうぶり-なほし 冠直衣 (名) 直衣(略)好物に乗りぬし すきなものは害なし。小町踊歌「好物に下戸もたたらじ花見酒」

かうぶり-の-を 冠緒 (名) おいかけ(老懸)に同じ。名義抄「綬冠ノヲ・オイカケ」

かうぶりの-を-とどめの-つむじ 冠緒留旋毛 (名) 馬の旋毛。たいえい(滯綬)に同じ。

かうぶる 被 (他動ハ) かうむる(被)に同じ。孝德紀「此冠中略齊時所著カウブル者」土佐日記「神佛のめぐみかうぶれるに似たり」宇津保祭使「その餌を、後までかうぶり侍らまし」名義抄「被カウブル・タ」

かうふん 〔香粉〕 (名) 粉末の香料。(香水・香油など、液體の物の對)

かうふん 〔昂奮〕 こうふん(興奮)に同じ。

かうぶん 〔告文〕 (名) こうもん(告文)に同じ。

かうぶん 〔高聞〕 (名) 他人の聞くことの敬語。「高聞に達す」

かうぶん 〔高文〕 (名) 他人の文章の敬語。

かうぶん 〔考文〕 (名) 考課のおもむきを記せる文書。考課令「京官懸内、十月一日、考文申二送太政官一」

かうぶん 〔行文〕 (名) 語句のくばり。文のこなし方。

かうぶん-ばく 〔好文木〕 (名) 【植】うめ(梅)の異名。十訓中「唐國の帝、文を好み給ひければ開き、學問怠り給へば散りしをれける梅は有りける。好文木とぞ云ひける」諸考抄「文を好む木なりけりとて、梅をば好文木とは附けられたれ」

かうべ 首 (名) 〔かみべ(上部)の音便。一説、髪部と〕くび。あたま。かしら。神代紀「千頭(ちぢ)」和名「首加字」名義抄「頭カシラ」

かうべ を めぐらす 回首 一後へふりむく。長恨歌「君王掩面救不得、回首血涙相和流」二往時を追懐す。

かうへい 〔降兵〕 (名) 降參したる兵士。王建詩「降頭多是用降兵」

かうへい 〔衡平〕 釣りあひを得しむること。平均せしむること。韓非子「懸二衡而知平」論衡「如衡之平、如鑑之開」

かうべい 〔粳米〕 (名) うるちごめ。うるち。南史孝克家道壁立、母患欲粳米爲粥、不能常辦」

かうべい 〔香餅〕 (名) たどん(炭團)に同じ。

かうべき 〔降幕〕 (名) 【數】或る文字の指數の高きものより、順次に低きものに至ること。

かうべき の じゅん 降幕順 【數】多項式が同一文字の種種なる冪を含むとき、最高次の冪より、指數の順に從ひ、順次其の小なるものほど右に列記すること。

かうべ-だう 首堂 (名) 首を葬りたる地の上に建立したる堂。くびだう。

かうべ-の-つじ 頭辻 (名) 頭の百會(ヒヤクエ)の邊にて、毛の渦巻きたる所。源氏烏帽子折「頭の辻には、天照大神五體を守護しおはしまし」

かうべ-の-はち 頭鉢 (名) ならがい(髑蓋)に同じ。源氏烏帽子折「敵の眞向・額口・鼻筋・頸筋・頭の鉢、さんざんに打ち割られ」

かうべや 香部屋 (名) かうばう(香房)に同じ。

かうべをめぐらすうた 旋頭歌 (名)

せどうか(旋頭歌)に同じ。射恆集「かうべをめぐらす歌」

かうべん 〔抗辯〕 一一方の者が、他の一方の者に張りあひて論辯すること。二【法】裁判上の抗辯。即ち、防訴抗辯・證據抗辯及び本案抗辯の總稱。

かうべん-けん 〔抗辯權〕 (名) 【法】抗辯をなす權利。

かうほ 〔香蒲〕 (名) 【植】がま(香蒲)の異名。

かうほ 〔行步〕 あるくこと。歩行。ぎやうぶ。朗詠「邑隣建德非行步、境接無何便坐忘」禮記哀公「行步則有環珮之聲」

かうほ 〔酵母〕 (名) 【植】かうぼきん(酵母菌)の略。

かうほう 〔高峯〕 (名) 高きみね。たかね。高嶺。

かうぼきん 〔酵母菌〕 (名) 【植】子囊菌類、酵母菌類の菌類。顯微鏡的の小なるもの。體は單細胞より成り、ほぼ楕圓形なるもの多し。芽生生殖に依り盛んに繁殖す。此の菌は糖類を酒精と炭酸瓦斯とに分解する作用を有し、酒精釀造上缺くべからざるものなり。酒・麥酒・葡萄酒等、夫れ夫れ固有の酵母菌により釀成せらる。いえすと。酵母。釀母菌。酒母菌。

かうほく 〔江北〕 (名) 河のきた。支那にては揚子江の北。諸橋通「江北の柳絮の」

かうぼく (名) 【植】樟科、六殿(ろくでん)屬の常綠喬木。葉は大にして、披針形なると長楕圓形なるとあり。花は白色にして小さく、繖形花序に排列し、各苞を有す。我が國、咲地に自生す。ぼくぼくの。

かうほく 〔高木〕 (名) たけ高き木。大木。喬木。

かうぼく 〔槁木〕 (名) 枯れたる木。かれき。枯木。莊子「形固可使如槁木、而心固可使如死灰乎」

かうぼく 〔香木〕 (名) 一にほひのよき木。五代史「其表以貝多葉書之、以香木爲函」二佛家にて、厠に出入の時、其の穢れを去る爲めに、兩手にて摩擦する香材の柿。

かうぼく 〔坑木〕 (名) 支柱用として、坑内に用ふる木材。

かうぼく 〔校僕〕 (名) 學校の小使。

かうぼく 〔考卜〕 うらなふこと。

かうぼく 〔耕牧〕 耕作と牧畜と。

がうぼく 〔拷木〕 (名) がうもく(拷木)に同じ。

かうぼく-くわ 〔香蒲科〕 (名) 【植】がまくわ(香蒲科)の異名。

かうぼね 〔蓬蓬草 河骨〕 (名) 一【植】睡蓮科。蓬蓬草屬の多年生草本。太き根莖を有す。葉は二形あり。一は水中に沈生し大形にして薄く柔かに、他は水面上に伸長し筒形全緣にして厚し。花莖は水上に抽出し、七八月の頃黄色の花各一箇づつを著く。我が國、各地の池沼・河流に自生す。かはほね。かど。こっすね。しんくれなゐ。類聚雜要二「干物五坏(諸橋牛蒡・河骨)」二紋所の名。(諸橋)みつかうぼね・みつつるかうぼね・みつつわりつるかうほね・よつつるかうほねなどの種類あり。

(にねほうり)

かうほねびし 河骨菱 (名) 紋所の名。

かうほり 〔蝙蝠〕 (名) 【動】かうもり(蝙蝠)に同じ。無名草子「源氏などうせ給ひて、末の世に、鳥なき島のかうぼりとかやして」

かうほん 〔校本〕 (名) 校正したる本。

かうほん 〔稿本〕 (名) したがき。草稿。韵會「稿本草創之本」

かうほん 〔藁本〕 (名) 【植】かさもち(藁本)の異名。

かうぼん 〔香盆〕 (名) 香をのする盆。北山行幸記「御おくり物は御小袖十重、印籠、かうぼんにすゑて參らせらる」

かうまい 〔秔米〕 (名) うるちごめ。うるしね。うるち。

かうまい 〔高邁〕 衆にすぐれたること。けだかきこと。晉書嵇康傳「楷風神高邁、容儀俊爽」

かうまい 〔豪邁〕 氣質のたけくして人にすぐれたること。豪壯にして英邁なること。宋史李舜「泰寮勁特、氣節豪邁」

かうまう 〔剛猛〕 心のこはく、あらあらしきこと。魏志毛玠傳「孫權以妹妻先主、妹才捷剛猛、有諸兄之風」

かうまう 〔毫毛〕 〔豪毛〕 一細き毛。史記項羽「吾不敢奪其用、智之如目見豪毛而不見其睫也」二極めて細少なること。莊子山木「朝夕賦斂、而毫毛不挫」

かうまくら 香枕 (名) 枕の中に香を炷く裝置を設けたるもの。

かうまつ 〔毫末〕 毛のさき。極めて細少また僅少なること。老子「合抱之木、生於毫末」莊子秋水「吾大天地、而小毫末」可乎」

かうまる (自動ラ) すわる。座す。膝栗毛附録「すわることをかうまるといふは、禪家に久しく座する事を行座といふ。行の字は久しき義なり。よつてかうまるといふ。まるは居るの心にて、ねまる・かしこまるのまるなり」

かうまわり 講參 (名) 講參を見よ。こうまゐり

かうまん 〔高慢〕 たかぶりて人を侮ること。ほこること。自負すること。孕常磐「我慢・高慢の人の心を栖家として」婆娑論「恃此高慢」梁簡文帝文「悔高慢文」

(諺)高慢の鼻柱 自慢すること。高慢なることを鼻を高くすといふより出づ。おごりて人をあなどること。たかぶりて禮を缺くこと。晉書傅咸傳「矜豪傲慢、敢輕忽朝廷」

かうまんがんくわう 硬滿俺鑛 (英 Psilomelane) 【化】二酸化滿俺の無定形なるもの。(形日鑛)

かうまん-くたい 〔くたいは臭の轉訛〕かうまんちやくれて居る。

かうまん-ちさ (名) 高慢なるを卑しめていふ語。

かうまん-ちやくれる (自動ラ) かうまんちきなるさまなり。年よりも過ぎてこざかし。こましやくれる。

かうみ 〔好味〕 (名) よきあぢはひ。美味。又、其の物。陶潛詩止酒「好味止園葵、大懼止稚子」

かうみ 〔香味〕 (名) 飲食物の香氣。にほひとあぢはひと。

かうみ-もの 香味物 (名) かうみや

く(香味藥)に同じ。

かう-みやう 〔名〕高名 ㊀名高きこと。評判の高きこと。枕「これやこの高名のゑぬたき」大鏡「高名のおほやけの世繼」㊁武功。戰場にて敵の首を取ること。槍下の高名・槍脇の高名・直取(ヂカ)の高名・太刀打の高名・組打の高名・場中(ヂウ)の高名・崩口(クヅレ)の高名・崩際(クヅレ)の高名等の語あり。平家九「保元・平治二箇度の軍に先懸けて高名したる、武藏國住人平山の武者所季重と名乘って」

(諺)**高名の中に不覺あり** 得意の時にも、往往失敗の種を詩くことあり。

かうみやう-だて 〔名〕高名立 高名をなさんとすること。津國女夫池「錆槍ひっさげ馳け附け、一働きと思ひしが、人も頼まぬ高名立て、知行欲しげに無益の事と」

かうみやう-ちやう 〔名〕高名帳 戰場にて、高名したる者の氏名を書き載する帳簿。吉野都女補「今やくる、今やくると、毎日の高名帳、夜はくって明日を待つ」

かうみやう-づく 〔名〕高名盡 てがらの限りを盡くしあふこと。百日曾我「高名づくにて貰はるる御馬ならば、新田まで遣らせうか、此の朝比奈が拜領申す」

かうみやう-ぬすみ 〔名〕高名盜 人の名譽又は功を盜みて己れの功とすること。又、その人。傾城島原蛙合戰「あれこそ父の高名ぬすみ、大河七郎と聞くより」

かうみ-やく 〔名〕香味藥 〔藥〕藥剤又は飲食物に香味を添ふるもの。香味料。かうみもの。

かうみ-れう 〔名〕香味料 〔料〕前條に同じ。

かう-みん 〔名〕高眠 枕を高くして眠ること。安眠。

がう-みん 〔名〕鄕民 〔鄕〕(ゲウ)の人民。在鄕のたみ。〔鄕〕村民。傾城島原蛙合戰「獅獅木・大矢野・春・千束・飛句・ちちはの鄕民ども」

かう-む 〔名〕校務 〔校〕學校の事務。

がう-む 〔名〕綱務 〔綱〕仁和寺の僧職。總法務の下にあり。海人藻芥「總法務者、御室ばかり被宣下也、是れを言綱務也」

かう-む 〔名〕行務 ㊀事務を執行すること。會計檢査院事務章程(第十五條)「部員の行務を監督し院長に報告すること」㊁銀行の事務。

かうむ-いくわん 〔名〕港務官 港務部の職員。上官の命を承けて、檢疫及び醫務を分掌する奏任官。明治四十年勅令第九十九號(第二條)「港務醫官」

かうむいくわん-ほ 〔名〕港務醫官補 港務部の職員。上官の指揮を承けて、檢疫及び醫務に從事する判任官。明治四十年勅令第九十九號(第二條七項)「港務醫官補」

かうむ-くわん 〔名〕港務官 港務部の職員。上官の指揮を承けて、其の事務を分掌する奏任官。明治四十年勅令第九十九號(第二條)「港務官」

かうむ-じういくわん 〔名〕港務獸醫官 港務部の職員。上官の指揮を承けて、獸畜に關する檢疫・檢査及び醫務を分掌する奏任官。明治四十年勅令第九十九號(第二條)「港務獸醫官」

かうむじういくわん-ほ 〔名〕港務獸醫官補 港務部の職員。上官の指揮を承けて、獸畜に關する檢疫・檢査及び醫務に從事する判任官。明治四十年勅令第九十九號(第三條)「港務獸醫官補」

かうむ-ちやう 〔名〕港務長 港務部の部長。知事の命を承けて、部下の官吏を指揮・監督し、所部の事務を掌理し、及び港長の事務を行ひ、所部の事務に關しては水上警察署長を指揮・監督する奏任官。明治四十年勅令第九十九號(第二條)「港務長」

かうむ-てうさいしゅ 〔名〕港務調劑手 港務部の職員。上官の指揮を承けて、調劑に從事する判任官。明治四十年勅令第九十九號(第二條)「港務調劑手」

かうむ-ねんど 〔名〕行務年度 事務執行の便宜のために定めたる年度。會計檢査院事務章程(第二十六條)「會計檢査院は行務年度を定め檢査の事務を執行す」

かうむ-はぐきようひん 〔名〕港務防禦用品 港務部にて、軍港の防禦に用ふべき物品。海軍兵備品會計規則(第一條)「港務防禦用品」

かうむ-ぶ 〔名〕港務部 神奈川縣・兵庫縣・長崎縣及び福岡縣の內務部及び警察部の外に設け、開港港則及び開港港則施行區域內に於ける行政警察及び衛生・檢疫等に關する事項を管掌する所。港務長・港務官・港務醫官・港務獸醫官・港務調劑手・通譯の職員を置く。明治四十年勅令第九十九號「港務部」

かうむる 〔他動〕被 蒙 ㊀頭上におほふ。いただく。かぶる。㊁外部におほふ。著る。つく。㊂負ふ。受く。箭を被る」大鏡「狂言「あの人に逢うて、疵を被らぬ者はござらぬが」㊃うく(受)の敬語。「恩を蒙る」大鏡「狂言「あらたに御靈夢を蒙った」

かう-めい 〔名〕抗命 命令・制止に反抗し、又は服從せざること。

かう-めい 〔名〕講明 ㊀意義を說明すること。㊁講究し明むること。ときあかし。

かう-めい 〔名〕高名 名高きこと。かうみやう。韓非子十過「過而不聽於忠臣、而獨行其意、則滅高名、爲人笑之始也」後漢書袁光「少有高名、與光武同遊學」蔡邕文機會「當世服重器、爲高名」㊁な(名)の敬稱。おなま。

かう-めい 〔名〕高明 高くして明かなること。中庸「高明配天、悠久無疆」

かうめい-ざい 〔名〕抗命罪 〔法〕陸海軍刑法の罪名の一。上官の命令・制止に反抗、若しくは服從せざるによりて成立するもの。陸軍刑法(第二編第四章)「抗命の罪」海軍刑法(第二編第四章)「抗命の罪」

かう-めう 〔名〕巧妙 すぐれて巧みなること。北史「浩工書、體勢及其先人、而巧妙不如也」李白詩「桃竹書筒綺縠文、良工巧妙稱絕羣」

かう-めう 〔名〕高妙 常人の企て及ばざるほど巧妙なること。

かう-めん 〔名〕高免 免(ユ)すことの敬語。おゆるし。

かう-めん 〔名〕綱目 〔かう(綱)は網の大綱、もく(目)は網の目〕事のおほぐ

くりと小わけと。大綱と細目と。南史「帝躬親綱務、綱目亦密」

がう-もく 〔名〕拷木 拷問に用ふる機械。盛衰記「五位殿四郎、下臈の白捕以「がうもくにかけて打ちせため、事の起りを尋ねたり」

かう-もと 〔名〕香元 香會の催主。

かうもり 〔名〕蝙蝠 ㊀〔動〕哺乳動物、翼手類に屬する小獸。よく空中を飛翔す。前肢の骨は甚だ長く、その指骨は特に細長、指間に薄き膜を張る。晝は洞穴內に潛み、夜間飛び出でて昆蟲類を食ふ。種類多し。やまかうもり・きくがしら・おほかうもり等は主なるものなり。かうぼり。かくひどり。かはほり。てんそ。ひそ。拾玉「かうもりは夜も戶たてぬ古寺に、內外もなく飛びわたるなり」伏翼(ふくよく)㊁かうもりがさ(蝙蝠傘)の略。

(諺)**蝙蝠が燕を笑ふ** 自ら知る明なくして他を笑ふ。

(諺)**蝙蝠も鳥のうち** 數ならぬものも其の種族には相違なしとの意。

(諺)**蝙蝠も鳥の眞似** 劣者が優者の所爲を學ぶこと。和歌民のかまど「蝙蝠も鳥の眞似」

かうもり-がさ 〔名〕蝙蝠傘 〔形、蝙蝠の翼をひろげたるに似たればいふ〕西洋より傳來したる傘。細き鐵の骨に絹・毛糟子などを張りて作りたるもの。晴雨共に用ふることを得。かうもり。

かうもり-かづら 〔名〕【植】防己科、漢防己(ハンヂキ)屬の多年生草本。莖蔓を有して他物に纏繞す。葉は長き葉柄を有する楯形、三乃至七角形にして、時として淺裂することあり。裏面に少しく毛茸あり。葉脚や心臟形を呈す。夏日、淡黃色の花を開き、單性、雌雄同株、圓錐花序に排列す。我が國、各地の山地に自生す。かうもりづた。

かうもり-かへで 〔名〕【植】うりのき」の異名。

かうもり-さう 〔名〕【植】菊科、よぶすまさう屬の草本。莖の高さ二三尺。葉はほぼ丈低き二等邊三角形。葉脚やや心臟形をなし、大小不等の鋸齒を有す。上部の葉は丈やや高し。花は帶灰色にして頭狀花序に排列し、秋日莖頂に開き、花序は亦總狀に集まれり。果實は白色の冠毛を有す。我が國、各地の山地に自生す。おほたかぐさ。

かうもり-しだ 〔名〕【植】㊀あみしだの異名。㊁びがくしだの異名。

かうもり-づけ 〔名〕蝙蝠附 鎧の喉輪(ワド)の草摺を、蝙蝠の羽を廣げたる如く廣く作りたるもの。

かうもり-づた 〔名〕【植】かうもりかづらの異名。

かうもり-はおり 〔名〕蝙蝠羽織 〔名〕かはほりばおり(蝙蝠羽織)に同じ。

かうもり-はんてん 〔名〕蝙蝠半纏 半纏のたけ甚だ短きもの。

かう-もん 〔名〕肛門 〔名〕會陰部にある消化器末端の孔。卽ち直腸の下の端にて、之より大便を體外に排出す。

かう-もん 〔名〕衛門 〔名〕かぶきもん(冠木門)に同じ。詩經(國風)「衛門之下、可以棲遲」

かう-もん 〔名〕港門 〔名〕港の入口。港口。

がう-もん 〔名〕拷問 犯罪を白狀せしむるため、肉體に苦痛を與ふる審理の一法。保元(古文拾補)「前瀧口秦佐康をば、靱負廳にて拷問せられけり」後漢書(明帝紀)「帝躬親綱務、綱目亦密」

がうもん-れっしやう 〔名〕【醫】肛門裂傷 〔名〕肛門の皮膚と粘膜との間に、ただれ又は潰瘍などを生ずること。きれぢ。

かう-や 〔名〕紙屋 〔紙〕(カミ)屋の略。かうやがみ(紙屋紙)。

かう-や 〔名〕かはや(厠)の晉便。

かう-や 〔名〕郊野 〔郊〕郊外の野原。宋書(謝靈運)「布衣蔬食、獨酌郊野、當其爲適、傍若無人」

かう-やう 〔名〕孝養 孝道を盡くして、能く父母を養ふこと。けうやう。書經(說命)「用孝養厥父母」禮記(文王世子)「退修之以孝養也」

かう-やう 〔名〕航洋 海洋を航行すること。

かう-やう 〔名・副〕斯樣 〔樣〕(ヤウ)の音便。かやう。土佐日記「かうやうの物もなき國なり」源氏(蜻蛉)「かうやうの折りは、御遊びなどせさせ給ひしに」同若紫「かうやうなる人の、しるしあらはさぬとき、はしたなかるべきも」

かう-やう-せん 〔名〕航洋船 〔名〕海洋の航行に供する船舶。海上衝突豫防法總則「第一條、洋海と海洋接續の場所とを問はず凡そ航洋船の運航し得へき水上に於ける船舶」

かう-やう-づ 〔名〕航洋圖 〔名〕大洋を航行するに用ふる海圖。

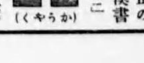
かうやがみ 〔名〕紙屋紙 〔名〕かみやがみ(紙屋紙)に同じ。枕「藏人所のかうや紙、引きかさねて」

かうやがみ 〔名〕高野紙 〔名〕からかさを張るに用ふる紙の一種。紀伊國高野山附近より產出するもの。

かうやかみそり 〔名〕高野剃刀 〔名〕紀伊國高野山附近より產出せし剃刀。庭訓往來(四月)「奈良刀・高野剃刀」

かう-やく 〔名〕膏藥 〔名〕藥品を膏に混ぜて煉りたる、外療用の藥。紙片又は布片に塗りて患部に貼る。拾遺(雜)「彈正のみこの、かうやく遣はしけるに」後漢書(皇甫嵩)「腦麝合膏藥、并以蘭書封於筒中」

かう-やく 〔名〕衡軛 陣立の名。甲陽軍鑑(十四、八幡)「衡軛」


(くやうか)

かう-やく 〔名〕【植】きみ(莽草)の異名。

かう-やく 〔名〕香藥 〔名〕【植】きみ(莽草)の異名。

かうやく-うり 〔名〕膏藥賣 〔名〕膏藥を賣ること。又、其の人。國姓爺「關宜の息子か、膏藥賣か」

かうやく-おばば 〔名〕膏藥御婆 〔名〕うちまたがうやく(內股膏藥)に同じ。(閑言鄙語)

かうやく-かぶれ 〔名〕膏藥感 〔名〕膏藥をはりたる跡の皮膚に、かぶれの出來たること。

かうやく-だい 〔名〕膏藥代 〔名〕傷害したる時、その治療の代價。

かうやく-ねり 〔名〕膏藥煉 〔名〕膏藥を練るを業とするもの。狂言(膏藥煉)「龍り出でたる者は、鎌倉方のかうやくねりでござる」

かうやく-ばり 〔名〕膏藥張 〔名〕障子・襖などの破れたる所所を、小さき紙にて、膏藥をはりたる如くはること。又、その所。

かうや-とけしのぶ 〔名〕【植】苦葱(コヤブ)科、苦葱屬の多年生草本。根莖は絲狀にして橫行し、之より葉を誅生す。葉は二回羽狀複葉、又は更に三回羽狀に分裂の傾きありて、長橢圓形鈍頭の裂片をなす。

葉縁僅に鋸齒を具ふ。子囊は葉の上部の裂片の頂端に、互ひに相接近して著生す。我が國、各地の山地に自生す。

がう-やど 郷宿 (名) 江戸時代、近郷の村民等の、公用にて城下の町及び陣屋・役所等の所在地に出づる時の定宿所。

かうや-どうふ 伊國高野山より製し出だす氷豆腐。今は他所の産にもいふ。 一高野豆腐 (名) 紀

かうや-の-まんねんぐさ 高野の万年草 (名) 【植】吾蘇類、かうやのまんねんすぎ屬の蘚類。横行せる根莖様のものを有し、處處より一二寸の葉を抽出して多く分枝し、綠色毛狀の葉を密生す。子囊は枝上に生ず。我が國、各地の山地濕陰の地に自生す。かうやのまんねんぐさ。きごけ。

かうや-ばうき 高野箒 (名) 【植】菊科、かうやばうき屬の落葉灌木。幹の高さ二三尺、細くして分枝疎なり。葉は卵形。秋日、淡紅白色の花を枝端に開き、頭狀花序に排列す。果實は褐色の冠毛を有す。我が國、各地の山地に自生す。切り取りて帚に用ふべし。ばいかうはぐま。

かうや-ばん 高野版 (名) 昔、紀伊國高野山金剛峯寺にて印行したる書籍。

かうや-ひじり 高野聖 (名) 一勸進僧の爲めに、紀伊國高野山より諸國に出づる僧の稱。砂石集「高野ひじりと聞いて、なつかしく思はれけるにや」 二【動】たがめ(田鼈)の異名。

かうや-まき 金松 (名) 【植】松杉科、金松屬の常綠喬木。幹の高さ數丈。葉は輪生長線形。花は單性、雌雄同株。果實は球果。我が國、各地の山地に自生すれども、社寺・庭園等に栽培せられて觀賞用にも供す。材は建築・器具の料とし、樹皮は槇肌(ハダ)を製す。ほんまき。まき。くさまき。たうまき。ほんまき。まき。

かうや-まゐり 高野參 (名) 紀伊國高野山へ參詣すること。又、その人。醒睡笑「高野まゐりの時」

かうや-わらび 高野蕨 (名) 【植】水龍骨科、かうやわらび屬の多年生草本。細き根莖あり。葉は長き葉柄を有し、葉身は羽狀に全裂し、葉柄に近き裂片は又鈍鋸齒を有す。別に實葉を有し、黑褐色の子囊を多數に著生して翌年に殘る。我が國、各地の原野水濕の地に自生す。ぜんまいしのぶ。

かう-ゆ 香油 (名) 化粧用にするほひよき油。北史「其俗皆、穿耳剪髮、無跪拜之禮、以香油塗身」

かう-ゆ 膏油 (名) 燈火用の油。もしあぶら。宋史「家貧無膏油、每拾薪、夜以繼晷」 韓愈文「焚膏油以繼晷」

かう-ゆ 高諭 (名) 他人の諭(ユ)の敬語。おさとし。東晉文「吾竊綴處者之末行、未敢聞子之高諭」

かう-ゆ 膏腴 (名) 一地味肥えて、作物に適すること。又、其の地。膏沃。肥沃。漢書「地理志」「號稱陸海、爲九州膏腴」 二職掌によりて利を得ること。やくとく。職原鈔「大炊寮、頭一人、温職中、尤膏腴也」

かう-ゆう 豪雄 (名) 衆人にすぐれたること。又、其の人。豪傑。李白詩「結髮未識字、所交盡豪雄」

かう-ゆう 豪勇 (名) すぐれて勇ましきこと。氣つよくいさましきこと。

がう-ゆう 剛勇 (名) たけく勇ましきこと。國姓爺後日合戰「剛勇不敵の國姓爺、力攻めに叶ふまじ」

かう-よう 効用 (名) 一つかひみち。用途。二きめ。功能。効驗。 三【經】財貨の人の願望を充たす作用。

かう-よう 行用 (名) 一かうし(行使)に同じ。民事訴訟法「債權者か取立を爲す可き債權の行用を怠りたるとき」

かうよう-ぜんげんほう 効用漸減法 (名) 【經】財貨が一定の分量を超過するときは、其の効用は分量の增加に伴ひて增加せず、却って漸次減少すとの法則。

かう-よく 膏沃 (名) 一膏腴(かうゆ)に同じ。周光鎬文「司農惜少府之藪、司土重膏沃之葉」

がう-よく 強欲 (名) 欲心の飽くまで深きこと。貪婪。

かう-より 紙縒 (名) 一かみよりの音便」こより(紙縒)に同じ。かんぜんより。かんじんより。甲陽軍鑑「かうよりを、なげしに、唯を以て附けて下がりたるを、前原竹刀にて幾つにも切りおとし候」

かう-ら 高欄 (名) 一かうらん(高欄)の略。

かう-ら 香螺 (名) 【動】ながにし(香螺)の異名。

かう-らい 高麗 (名) 一かうらいべり(高麗縁)の略。枕「御座といふたたみのさまにて、かうらいなどいと清らなり」 二かうらいやき(高麗燒)の略。大鏡「狂言人」「此の茶碗は、疑ひも無い高麗ぢや」

かう-らい 高來 (名) 他人の來ることの敬語。おいで。

かうらい-いわし 高麗鰯 (名) 【動】にしん(鯡)の異名。

かうらい-うぐひす 高麗鶯 (名) 【動】鳥類中、燕雀類、鳥科に屬する鳥。體は鶸(ヒワ)より稍小さし。羽色の大部分は黃綠色なるも、黑色の部分を混ず。鳴く聲圓滑なり。本邦には稀なるも、支那・朝鮮等に產す。朝鮮鶯。

かうらい-がき 高麗垣 (名) かうらいそでがき(高麗袖垣)に同じ。

かうらい-がらす 高麗烏 (名) 【動】かささぎ(鵲)の異名。

かうらい-ぎく (名) 【植】しゅんぎく(茼蒿)の異名。

かうらい-さじ 高麗雉 (名) 【動】鳥類中、擬擬類に屬する鳥。雉の一種。體色は銅赤色にて、頸部に白色の環を有す。北支那及び朝鮮に產し、本邦にては對馬島に棲息す。

(じきゝらうか)

かうらい-ざし 高麗刺 (名) 【植】たうがらし(蕃椒)の異名。

かうらい-ざし 高麗刺 (名) うねざし(畦刺)なるべし。藥師通夜物語「高麗ざしの木綿にぶ」

かうらい-しば (名) 【植】禾本科、結縷草屬の多年生草本。しばの一品種。葉・葉共に細少にして、しばに比し甚だ美麗なり。芝生として最上等のもの。我が國、諸所に見るべし。いとしば。からしば。てうせんしば。

かうらい-しょく 高麗卓 (名) 點茶に用ふる棚物の一。高麗臺子の小さきもの。即ち、高さ・長さ・幅共に一尺六寸。

かうらい-ぜしゃう 錢蒲 (名) 【植】天南星科、白菖(ショウ)屬の多年生草本。石菖蒲(ヒキヤウ)の變種。葉の細小なるもの。

かうらい-せんべい 高麗煎餅 (名) 一高麗せんべい。饅飩粉を原料として燒きたる小形のもの。世說愚案問答「さて供物の拵へやうは、或ひはかうらいせんべいなれば中略小さき箱、又は文庫などに仕切りをして」

かうらい-たけがき 高麗竹垣 (名) 竹を粗く菱形に組みたる袖垣。かうらいがき。

かうらい-だいす 高麗臺子 (名) 點茶に用ふる棚物の一。高さ一尺六寸、長さ二尺三寸、幅は一尺三寸餘。

かうらい-ぢゃわん 高麗茶碗 (名) 高麗燒の茶碗。東海道名所記「葦屋の釜・高麗茶碗・瀬戸の茶入れ」

かうらい-で 高麗手 (名) かうらいやき(高麗燒)に同じ。

かうらい-ぶね 高麗船 (名) こまぶね(高麗船)に同じ。

かうらい-べり 高麗縁 (名) 疊のへりの一種。白地の綾に雲形・菊花等の模様を黑く織り出だしたるもの。後世は、白き麻布に、黑く紋を染め出だしたるものをもいふ。社寺又は貴族の邸などに用ふ。枕「かうらいべりのたたみのむしろ、青う細かに、へりのもんあざやかに、黑う白う見えたる」

かうらい-ほうたふ 高麗寶塔 (名) 一高麗門 (名) 城郭庭園などに居うる五重又は三重の石燈籠。

かうらい-もん 高麗門 (名) 城郭の外門。控柱の屋根は本屋根と直角に低く別棟に造り、其の扉には菊座鋲を以て竪胴桟を打ち附く。

かうらい-やき 高麗燒 (名) 朝鮮にて燒きたる陶器・磁器の總稱。青高麗・白高麗の種類あり。からいで。からい。

かう-らう 一犒勞 ねぎらひいたはること。慰勞。周禮「其官爲羣人也」 韋注「須犒勞之、故名其官爲羣人也」 魏志「明帝紀」「遣使者持節、犒勞合肥壽春諸軍」

かう-らう 一郊勞 郊外へ出迎へてねぎらふこと。左傳「昭公五年」「自郊勞至于贈賄、禮無遺者」 同「同」「入有郊勞、出有贈賄」

かうらう-し 一郊勞使 (名) 中古、外國の人の京に入らんとする時、朝廷より郊外まで出迎へに發する使。

かう-らく 一行樂 樂しみ遊ぶこと。氣樂に暮らすこと。楊惲文「報孫會宗書」「人生行樂耳、須富貴何時」

かう-らん 一高欄 (名) 一宮殿・堂舍などのまはり、又は橋・廊下などの兩側に設けたる欄干。宇津保「藤原」「かうらんにおしかかりて、ながめおはしまして」 枕「わが上ぼるはいと危く、傍によりて彼のかうらんおさへて行くものを」 二椅子の手かけ。大鏡「殿上の御椅子に打ちかけられて、かうらん折れにけり」 三牛車の名所。車の前後の口に、下に張り亘したる低き仕切の板。とじきみ(軾)。ぎっしゃ(牛車)を見よ。蛙抄「搨御車中略箱無物見有、開戸前板者」 高麗」

かう-らん 一圖繡 (名) 張衡文「西京賦」「華岳義義、圖繡參差」

かう-らん 一高覽 (名) 寶(ヒ)ることの敬語。御覽。庭訓往來「四月「念有御下向、可有高覽歟」

かう-り 一狡吏 (名) わるがしこき官吏。狡猾なる役人。

かう-り 一港吏 (名) 港務部の職員。上官の指揮を承けて、事務に從事する判任官。明治四十年勅令第九十九號「第二條十一「港吏」」

かうり 一行李 (名) 【もと使者の義。左傳「襄公八年に見ゆ」】 一旅行に携ふる荷物。 二旅行の荷物を納るる具。竹又は柳などにて編みて作る。こり。 三兵語。騎馬・隊屬輜重・駄馬・車輛等の一團。大行李・小行李に分かつ。 四こり(梱)に同じ。

かうり 一高利 (名) 一法律にて制限したる利息より高き利息。不當に高き貸金の利息。政所壁書「若以密密儀、可取高利並日錢等之質物、造意歟」 二非常なる利益。塵袋「欲得價而沽、以射高利」

がうり 一毫釐 毫氂 (名) 物事の極めて少なく、小さく、細かなること。漢書「律曆」「度長短者、不失毫氂」 (誤)高下の差も千里の謬り 微小の原因も甚大なる結果を來たすこと。禮記「經解」「易曰、君子慎始、差若毫釐、繆以千里」 漢書「賈誼傳」「正其本、萬事理、失之毫釐、差以千里」

かうりう 一江流 (名) 河のながれ。杜甫詩「野日莞莞白、江流泯泯清」 蘇軾文「黠壁」「江流有聲、斷岸千尺」

かうりう 一幸流 (名) 能樂の小鼓の一流。幸四郎大郎を祖とす。後、本流・分流の別あり。

かうりう 一交流 【理】電池より生ずる電流は方向一定なれども、感應こいる中に起こる電流及びだいなもより生ずる電流は、週期的に方向反對となるものなり。即ち、交番に方向を變ずるといふ意にて交番電流といひ、或ひは略して交流といふ。之に對して、同一方向に通る電流を直流といふ。但し、だいなもの種類によりては、發生したる交流を直流に變ぜしめて使用するものもあれども、電力の輸送其の他電流の取扱ひ上、交流の方遙かに便益なるを以て、交流の儘使用するもの多し。

かうりうさ 一交流機 (名) 【理】かうりうはつでんき(交流發電機)に同じ。

かうりう-だいなも (英 Alternating current (dynamo)) 〔交流——〕 (名) 【理】交流を發するだいなも。だいなもを見よ。

かうりう-でんどうき 一交流電動機 (名) 【理】でんどうき(電動機)を見よ。

かうりう-はつでんき 一交流發電機 (名) 【理】はつでんき(發電機)を見よ。

かうりう-へんあつき 一交流變壓器 (名) 【理】或る電壓の交流を他の電壓の交流に變ずる裝置。電壓を降下せしむるものを遞降變壓器、上昇せしむるものを遞昇變壓器と云ふ。電柱上の黑き鐵函中に在るものは其の一例なり。此の場合には電線の節約上、發電所より高壓を以て交流を各電力使用地に送り、變壓器を經て、之を使用上危險の虞れなき低壓交流に變じて電力需要者に供給す。

かうりう-かし 高利貸 (名) 高利にて金錢を貸すこと。又、其の業に從事する人。

がうりき 一强力 剛力 (名) 一つよきちから。力つよきこと。東鑑「廿七、安貞二年四月廿六」「撰一族中堪能强力之輩、於御前庭上、令射小笠懸、召決相撲勝負」 二修驗者の伴ふ下僕。義經記「七、北國落」「武藏坊はきさん太と云ふ下部を、がうりきになして、かけさせたる笈の」 三登山の案内をする人。

がうりき-もの 剛力者 (名) 力のすぐれて強きもの。緋縮緬卯月紅葉「傳三郎は剛力者、非力の與兵衛を取って投げ」

がうり-ごむ (英 Kauri gum) (名) にゅーじーらんど・に產するかうり松の樹脂。わにす・の製造に用ふ。

かう-りつ 効率 (英 Efficiency) (名) 機械のなす利用し得べき仕事と、其の機械に施せる仕事の全量との比。

かう-りつ 高率 程度高き率。(低率の對)

かう-りゃう 綱領 (名) 一物事の大體。おほぐくり。主要なる眼目。幾志「統御之才」二古へ郡司の中に、選ばれて貢物を運ぶ時、綱丁を督して上京する者。

かう-りゃう 膏粱 (名) 肥えたる肉と甘き粟。美味なる食物。孟子「膏粱之味、足以令人口爽也」柳宗元文「味道腴、以代膏粱」

かうりゃう の ていい 膏粱子弟 富貴の家の子弟。天香樓偶得「今人謂富貴家曰膏粱子弟、言但知飽食、不諳他務也」

かう-りゃう 高粱 (名) 【植】たうもろこし(蜀黍)の異名。

かう-りゃう 考量 考へはかること。思慮。

かう-りゃう 較量 比較してはかること。

かう-りゃう 拷掠 罪人を拷問すること。

かう-りゃう-しゅ 高粱酒 (名) 高粱にて釀造したる酒。

かう-りゃく 行掠 人の財貨を强ひて奪ひ取ること。强奪。略奪。

かう-りょ 高慮 (名) 他人の考慮の敬語。高配。

かう-りょ 行旅 たびする人。孟子「行旅皆欲出於王之塗」

かう-りょ 考慮 かんがへおもんばかること。思慮。

かう-りょう 岡陵 (名) をか。丘陵。蘇軾詩「須臾立旆布行伍、有似修蛇橫岡陵」

かう-りょう 亢龍 (名) 高く上ぼりつめたる龍。

かうりょう の くい 亢龍悔 物の極盛に達すれば、下だり衰ふる時ある譬へ。徒然草「亢龍の悔いありとかやいふことを侍るなり。月滿ちては缺け、物盛んにして衰ふ」易經「亢龍有悔」

かう-りょう 蛟龍 (名) さめとたつと。中庸「電攝蛟龍魚鼈生焉」

かう-りょう 蛟龍 (名) 想像の動物。未だ龍に化せざるみづち。水中に潛み、雲雨に際會すれば天上に上ぼるといふ。國姓爺後日合戰「蛟龍其の池に遊び、麒麟其の囿に到る」吳越春秋「蛟龍殺馬、勇士入水三月、殺蛟龍」

(諺)蛟龍雲雨を得 英雄・豪傑の、時機に際會する譬へにいふ。蜀志「恐蛟龍得雲雨、非池中物也」

かうりょう-ばな 蛟龍鼻 (名) さきの方反りたる鼻。自身坊「鼻は蛟龍鼻」

かう-りょく 効力 (名) 一ほたらき。二きめ。効能。文同詩「少雖始知茶効力、大寒須試澄酒爭豪」

かうりょ-しばうにん 行旅死亡人 (名) 旅行中、死亡して引取人なき人。行旅病人及行旅死亡人取扱法「行旅死亡人」

かうりょ-びゃうにん 行旅病人 (名) 歩行に堪へざる行旅中の病人にて、療養の途を有せず、且つ救護者なきもの。行旅病人及行旅死亡人取扱法「行旅病人」

かう-りん 降臨 一神佛などの天降だること。「天孫降臨」二貴人の來臨せらるること。張說詩「逆、酒忘憂、饌簡謝客降臨」

かうりん-るゐ 硬鱗類 (名) 【動】魚類分類上の一亞綱。板鰓類と硬骨類との中間に位するもの。骨格は硬骨及び軟骨より成るか、又は軟骨のみなるもあり。鱗は齒質鱗にて、表面に琺瑯質を被りて、甚だ堅く光澤有り。尾は不正形にして、鰭は食道に連絡す。太古は夥しく生息したるも、現今は少なし。てふざめの類これに屬す。

かう-るゐ 柑類 (名) 柑子・蜜柑の類。

かう-るゐ 降涙 (名) おつる涙。

かう-れい 高嶺 (名) 高きみね。たかね。高峯。宋之問詩「高嶺逼星河、乘輿此地過」

かう-れい 綱領 (名) かうりゃう(綱領)に同じ。

かう-れい 好例 (名) よきためし。適例。

かう-れい 伉儷 (名) 〔かう(伉)は敵(たぐひ)、れい(儷)は偶(ひとつ)〕つれあひ。夫婦。配偶。左傳「成公十一年「已不能庇其伉儷而亡之」

かう-れい 伉禮 對等の禮を行ふこと。莊子「千乘之君見夫子、未嘗不分庭伉禮」

かう-れい 高齡 高きよはひ。としより。老年。高年。

かう-れい 號令 上位の者より下位の者に申し渡すこと。特に軍隊などにて、一隊に向かひ大聲にてする命令。下知。さしづ。命令。禮記月令「季秋之月、申嚴號令」易經「風主、號令、行于地上、猶如先王設教在於民上」史記「將軍號令明、當敵男取、常爲士卒先」

かう-れい 剛戾 心づよくねぢけたること。剛愎。

かう-れう 高料 (名) 料金の高きこと。高直。高價。

かう-れう 香料 (名) 一香のよき品。二かうでん(香奠)に同じ。

かう-れう 校了 印刷の校正などを、全く結了すること。

かう-れん 香奩 (名) 一女の化粧道具を納るる箱。朗詠「風鈿遺梅、鏡香奩」二香を神佛に供ふるに用ふる香箱。

かう-れん 孝廉 一孝行にして廉直なること。二孝廉の名高きより、朝廷に推舉せらるる者。支那、漢の時代の微士の名稱。周禮地官「興賢者、謂若今舉孝廉」漢書武帝「令二千石舉孝廉」

かう-ろ 香爐 (名) 一香を燒くに用ふる器。陶器又は銅・金・銀などにて作る。種種の形あり。天智紀「仍賜金香爐」和名抄「小品經云、以白銀香爐、燒黑沈木、供養般若」二かうてい(香亭)に同じ。

かう-ろ 高爐 (名) 竪爐のたけ高き爐。鐵石の熔煉に用ふ。

かう-ろ 行路 (名) 一路を行くこと。旅行。盛衰記「鶴中春葉、幾花鶯、行路倉」二道路を行く人。面識なき他人。潛夫論「君臣義重、行路輕」

かう-ろ 坑路 (名) 地下を穿ちて通じたる路。

かう-ろ 航路 (名) 船舶の通航の路。定期航路と不定期航路とに分かつ。各條を見よ。ふなぢ。海路。

かうろ ていげん 航路定限 檢査官吏が船舶を檢査し、其の船體の階級に應じて、其の航行し得べき航路に加へたる制限。船舶檢査法第六條「檢査官吏船舶を檢査し遞信大臣の定むる檢査規程に適合するものと認むるときは本船の航路定限旅客定員汽罐制限及航行期間を定め管轄官廳より船舶檢査證書を交付すへし」

かうろ へんかう 航路變更 航行の目的地を變更せずして、豫定の航路を變更すること。此の場合には、船長は、最初に到著したる港の管海官廳に出頭して、其の報告をなさざるべからず。

かう-ろう 高樓 (名) 一高き樓。たかどの。諸場「高樓に登りて中略身を投げ空しくなり給へば」魏志公孫瓚傳注「瓚諸將家家、各作高樓」古詩「西北有高樓、上與浮雲齊」二鷹の頭部の名所。たか(鷹)を見よ。

かうろ-ぎ 香爐木 (名) きやら(伽羅)をいふ。又、御伽雙紙「御伽草子「まき石のばんに、かうろぎのさかづきすゑて」

かうろぎ-の-すみ 唐墨の香ばしきをいふ。御伽草子「根之助冊子「雪のうすやうに、かうろぎの墨すり流し」富士人穴冊子「たけなるかんざしは、せいたいが立板に、かうろぎのすみすり流したる如くなり」

かう-ろく 高祿 (名) 多くの祿高。

かうろ-さうたがく-うんちん 航路相當額運賃 (英 Freight) (名) 【商】航海中、船舶が、沈沒し、又修繕すること能はざるに至り、或ひは捕獲せられたるとき、又は發航後、航海若しくは運送が法令に反するに至りたるとき、其の他不可抗力により、契約をなしたる目的を達すること能はずして契約を解除したる場合に、船主が、傭船者又は荷送人より、運送の割合に應じて受くる運賃。其の最高額は、運送品の價格を超ゆることを得ざるものとす。

かうろ-じょせいきん 航路助成金 (名) 特定の航路の航海を奬勵するために、政府の下付する補助金。

かうろ-しんがう 航路信號 (名) 航行中の船舶が、他船に近寄り、又は航路を變更せんとするとき、衝突を避くるために、汽笛若しくは汽角を以て、他船に我が船の針路を通知する音響信號。海上衝突豫防法「航路信號」

かうろ-なん 行路難 (名) 人の世に處するの困難なることの譬へ。白居易詩「行路難不在山、兮不在水、唯在人情反覆之間」

かうろ-へうしき 航路標識 (名) 航路の安全を圖るために設くる標識。燈標・晝標及び警霧號の種類あり。航路標識條例「航路標識」

かうろへうしき-くわんりしょ 航路標識管理所 (名) 遞信大臣の管理に屬し、航路標識の工事及び其の保守に關する事務を掌る所。所長・技師・書記・技手・看守の職員を置く。航路標識管理所官制「航路標識管理所」

かうろ-ほけん 航路保險 (英 Voyage policy) (名) せんだくほけん(船舶保險)に同じ。

かうろほけん-しょうけん 航路保險證券 (名) かうかいほけんしょうけん(航海保險證券)に同じ。

かうろ-ほじょきん 航路補助金 (名) かうろじょせいきん(航路助成金)に同じ。

かうろ-ようせんけいやく 航路傭船契約 (名) かうかいようせんけいやく(航海傭船契約)に同じ。

かう-ろん 香爐 (名) かうろ(香爐)の訛り。

かう-ろん 高論 一勝ぐれて高き議論。高尙なる議論。莊子「離世異俗、高論怨誹、爲元而已矣」漢書「文帝曰、車之一毋甚高論、令今可施行也」二議論の敬稱。張九齡詩「願欲接高論、清晨朝建章」

かう-ろん 講論 講說・議論すること。討議。論窮。漢書「講論五經于石渠」後漢書「數引公卿講論經理、夜分乃寐」

かう-ろん 抗論 他にはりあひて議論すること。後漢書「桓靈之世、若陳蕃之徒、成能樹立風聲、抗論愆俗」獨志「董扶發、辭抗論、益部少雙」

かう-わ 高話 (名) 他人の談話の敬稱。おはなし。

かう-わ 講話 講義めきたる話。講說。

かう-わ 講和 媾和 交戰主體が、相約して戰爭以前の狀態に復すること。唐書「講和以休息戎塞」

かう-わか 幸若 (名) 次條の略。武林鈔「幸若を舞ひて通りける」

かうわか-の-まひ 幸若舞 (名) 桃井幸若丸の創めたる舞曲。大夫の外に連あり、脇あり。扇拍子に大小の鼓を用ふ。さいわか。かうわか。まひまひ。應仁別記「石見太郎左衞門尉は、三條殿に幸若舞のありし、終はって桑集人人歸りに、辻切のやうに、山名殿よりぞ討たせける」雍州府志「傳云、古桃井氏之童、爲小兒在比叡山岩松家童赤然、是稱幸若丸、兩童共在山門、爲慰寺僧、作舞曲唱之、是稱幸若流。又有二家、其家紋大柏二枚相並、依之、其一流稱大柏流、至今有兩流、今稱大頭者、誤大柏者乎」

かうわ-でうやく 講和條約 (名) 交戰主體が、講和のために締結せる條約。

かう-わん 港灣 (名) 水の陳地に入りこみたる所。みなと。

かうわん-てうさくわい 港灣調査會 (名) 內務大臣の監督の下に、港灣に關する制度・計畫・設備其の他重要なる事項を調査・審議する所。會長・委員を以て組織し、其の他幹事・書記の職員を置く。港灣調査會官制「港灣調査會」

かうわん-ふうさ 港灣封鎖 (名) 【法】ふうかう(封港)に同じ。

かう-ゐ 高位 (名) 尊き位。高き官。又、其の人。朗詠「嫌小人而蹈高位、鶴有乘軒」狂言「連歌中興貴からずして高位の交はりをなし、面白いやうな面白い事はござらぬ」周語「高位寔疾僨」左傳「所獲多矣、敢辱高位、以連諸侯」

かう-ゐ 綱位 (名) 僧綱(そう)の位。本朝十訓「顯昭法師、綱位の望み有りけるに」

に」

かうね 一行爲 (名) 一しわざ。おこなひ。ぎやうね。二英 (conduct) 【哲】意志を伴へる動作。即ち、豫め一定の目的を定め、或る方法によりて之を實現せんとする有意的動作にして、道德上善惡の判斷を下だし得べきもの。三【法】意思を表示すること。民法第五百三條或行爲を爲したる者に一定の報酬を與ふへき旨を廣告したる者は其の行爲を爲したる者に對して」四【法】はふりつかうね(法律行爲)の略。民法第四百三條「權利を得又は義務を免るへき行爲」五【法】せききよくかうね(積極行爲)に同じ。(不行爲の對) 行政執行法第五條法令又は法令に基つきて爲す處分に依り命じたる行爲又は不行爲を强制する爲」

かうね 一校尉 (名) 古へ軍團の職員。二百人に一人を置く。軍防令「凡軍團中略校尉二百人」同「校尉以下、取二庶人便於弓馬者一爲之」

かうね 一更位 ちようそ(重祚)に同じ。太神宮諸事記「高野女天皇更位」

かうね 一綱維 大づなにてつなぎとむること。大づな。おほすぢ。大綱。莊子天道「執主張是、執綱維是」史通「略舉綱維」王起文藝總集「想二江湖之相忘一、逢二綱維之備設」

かうね-さくわん 一行爲機關 (名) 【法】或る人の行爲を生ずるために設くる機關。即ち、會社の取締役、府・縣・郡・市の參事會の類。(意思機關の對)

かうね-さむ 一行爲義務 (名) 【法】さくねぎむ(作爲義務)に同じ。(不行爲義務の對)

かうね-ぜい 一行爲稅 (名) 【法】財貨及び價格の移動を惹起すべき行爲、即ち經濟行爲に賦課する租稅。即ち、證券印紙稅・登錄稅・相續稅の類。財產移轉稅。(人稅及び物稅の對)

かうね-ち 一行爲地 (名) 行爲をなしたる地。法例第五條法律を異にする地に在る者に對して爲したる意思表示に付ては其通知を發したる地を行爲地と看做す」

かうね-ちはふ 一行爲地法 (名) 【法】數國の法律に關聯する或る行爲につき、其の行爲をなしたる地の法律。法例第七條「當事者の意思か分明ならさるときは行爲地法に依る」

かうね-ねど 一高緯度 (名) 【地】緯度の度數の多き所。即ち、極地方。

かうね-のうりよく 一行爲能力 (英 Capacity) (名) 【法】自ら法律上の効果を生ずべき行爲をなす能力。法律行爲能力と不法行爲能力とに分かつ。各條を見よ。

かうね-むのうりよくしや 一行爲無能力者 (名) 【法】むのうりよくしや(無能力者)に同じ。

かう-ね 一講會 (名) こうゑ(講會)に同じ。

かう-ね 一香會 (名) かうくわい(香會)に同じ。

かう-ねん 一高遠 高く遠きこと。高大にして悠遠なること。

かう-を 一好惡 好むことと惡むこと。禮記學記「好惡無節、於內、知誘二於外一」同「爲人君者、謹二其所一好惡一而已矣」

かう-をく 一高屋 (名) 高き家。又、他人の家の敬稱。

かう-をん 一高溫 (名) 次條の略。(低溫の對)

かう-をんど 一高溫度 (名) 溫度高きこと。高き溫度。(低溫度の對)

が-えい 一牙營 (名) 〔がゑ〕は牙旗の略。大將の居る本陣。

かえい-いっしゅぎん 一嘉永一朱銀 (名) 嘉永六年より明治二年まで、江戸幕府及び明治政府の鑄造せし一朱銀。面に一朱銀、背に銀座常是の文字あり。安政一朱銀。安政南錄。新一朱銀。大日本貨幣史三嘉永一朱銀」

か-えう 一歌謠 はやりうたをうたふこと。又、其のうた。風俗歌。史記南齊「童子不二歌謠一」詩經鄭「曲合樂曰歌、徒歌曰謠」

か-えき 一加役 【法】船長が、海員に對して加ふる懲戒の一。或る期間・常務時間外に役務に服せしむるもの。船員法第三十四條「加役」

かえきる 一加役流 (名) 古へ流刑の最も重きもの。遠所に配して、三年間役するもの。名例律爲加役流者本法既重、與二常流一理別、配二遠處一居役三年」

かえづ-かひ (名) 賦品を扱ふもの。日本隱語集

かえ-ぶ 一荷葉 (名) 一蓮の葉。はちすば。朗詠「自疑荷葉凝霜早、人道蘆花過雨餘」二煮物の名。蓮花の香に擬し、甘松香・沈香・甲香・白檀香・熟鬱金香・霍香・丁子香、以上七品或ひは安息香を加へ、煉り合はせて作る。夏用ふ。源氏梅枝「ただ荷葉を一くさ合はせ給へり。さまかはり、しめやかなるかして、あはれになつかし」三漢畫法の皺の一。蓮の葉の筋に似たるもの。山を描くに用ふ。

かえ-ぶ 一假葉 (名) 【植】植物學上の用語。葉柄又は托葉、若しくは夫れ等の一部が、扁平闊大となり葉身の狀をなすもの。此の場合には、眞の葉身を缺くか、又は不完全にして、假葉代はりて葉身の作用を營む。あかしやの一種の類。

かえぶし (名) かいぶし(鮫燻)の訛り。

かえらぎ (名) かいらぎ(梅華皮)の訛り。建武式目追加「禁制中略中間凡下輩中略同大口、刀のかえらぎ金銀但しめぬを除く事」

かえん 一佳宴 (名) 祝賀のさかもり。祝宴。楊汝士詩「再歲生徒陳賀宴、一時良史盡傳觴」

かえん 一賀宴 (名) 祝賀の席。賀の祝の宴席。

かえん 一賀筵 (名) 祝賀の席。賀の祝の宴席。

かおう 一歌謳 歌ふこと。うたひもの。歌謠。荀子「近者歌謳而樂之、遠者竭蹶而趨之」韓愈文「稚子嬉遊、連手歌謳」急就篇「長言謂之歌、齊歌謂之謳」

かおん 一加恩 恩命を加へ、祿など增し賜はること。甲陽軍鑑三十「三年に一度づつ知行わりあり、加恩を與へ」關八州古戰錄三刪方勢上籠城攻「茂木が働きを感じ、上總國市原郡に於いて、三箇村の加恩を行はれ」漢書「有二詔加一恩」宋史太宗紀「受二尊號一內外交武加恩」

が-おん 一牙音 (名) 古への音韻家の定めたる五音の一。加行の音を之に宛つ。

かか (名) 一はは(母)に同じ。「かかさま」衆妙集「あはれにもいまだ乳を飲むあまの子の、かかのあたりや離れざるらん」二賤しき人の妻の稱。(小兒の語を取りていふ)天正日記天正十八年「五郎兵衛かか、かしは餅くれる」狂言月花見「出家に成りませうか。なう、かか」嗚

かか (名) 〔かき(掻)の轉〕かつをぶし(鰹節)をいふ、女詞。普通におかかといふ。

かか 一家家 (名) いへいへ。朗詠「笙歌夜月家家思、詩酒春風處處情」解嘲「家家自以爲二樓契一、人人自以爲二阜陶一」杜甫詩「磚甓家家發、檐牙簡簡同」

かか 一簡簡 ひとつひとつ。かずかず。ここ。杜甫詩「砧聲家家發、檐歌簡簡同」同樂天「却繞二井欄一添二簡簡一偶經花蕊一弄二鶯鶯一」

かか 一佳佳 (副) 萬だよしといふこと。上等。

かか 一呵呵 (副) 大聲に笑ふさまにいふ語。あはは。からから。閑丘胤文寒山子詩「撫掌呵呵大笑」博雅「呵呵咳咳笑也」

かか 一砢砢 (副) 高くすぐれたるさまにいふ語。川中島合戰「森森たる人品、千丈の松の如く、磊磊として節多く、砢砢として目高し」

かか-り 一利 (名) 古語。くぼさ。利益。顯宗紀「建二利一遣」天武紀下「有二利一者」國家、寬百姓之術者」

かか 一加賀 (名) かがぎぬ(加賀絹)の略。元祿時代の語。曾根崎心中「此の頃拾をしやうと思ひ、堺筋でかが一疋、且那の名代で買ひかかる」

かか (副) きらきらと輝くさまにいふ語。出雲風土記「閤岩屋哉詔、金弓以射時、光加賀ゐ明也。故云二加加一」

が-か 一雅歌 (名) 風雅なる歌。みやびたる歌。

が-が 一峨峨 峩峩 (副) 山・巖などの、高く角だちて聳えたるさまにいふ語。平家十二「北には青山峨峨として、松吹く風颯颯たり」列子湯問「善哉、峨峨兮若二泰山一」史記相如「南山峩峩」劉向文九歎「冠二浮雲之峨峨一」

かが 嗚 (名) かかに同じ。聞上手かかあもかかあだ、ただ夜食ができたと云うてよこせばいいに」

かかあ でんか 嗚天下 一家の中にて、妻が夫よりも權力あること。

かかあ (名) 【植】ここあのき(柯柯阿樹)の異名。

かかあ-ざるもん 嗚左衛門 (名) 妻の心猛きものの稱。

かかあ-たばね 嗚束 (名) 文化頃、江戸に流行せし下髮の男の髮形の一。油を附けずに、たばを膨らかに出だし、はけ先をばらりと散らし、鬢のいちを高く上げて結ひたるもの。たばね。浮世風呂「額を拔きあげ、鬢きり、かかあたばね、二十二三の男」

かか-い 一河海 (名) かはとうみと。中庸「振二河海一而不二洩一」

(誡)河海は細流を擇ばず 度量の廣大なるに譬ふ。史記李斯「太山不二讓一土壤一、故能成二其大一、河海不二擇一細流一、故能就二其深一」

かか-い 一加階 位階の加はること。位の昇ること。字津保藤壺「七日になりて、人人かかいし給ふ。右おとど正二位」同上「正二位のかかいをものして」

かか-い 一加害 害をくはふること。

かか-いうぜん 一加賀友禪 (名) 友禪染の一種。花鳥・山水・寫生しの類を梅染にしたるもの。

かかい-かうね 一加害行爲 (名) 【法】他人に損害を蒙らしむる行爲。民法第七十條「他人の不法行爲に對し自己又は第三者の權利を防衛する爲め已むことを得すして加害行爲を爲したる者は損害賠償の責に任せす」

かかい-しゃ 一加害者 (名) 加害行爲をなしたるもの。(被害者の對)民法第七百二十四條「不法行爲に因る損害賠償の請求權は被害者又は其法定代理人か損害及ひ加害者を知りたる時より三年間之を行はさるときは時效に因りて消滅す」

かかいう 一加階 (名) 【植】蘿蔔科、蘿蔔屬の多年生草本。蔓莖を有して他物に攀繞す。葉は對生、長心臟形、銳頭、長き葉柄を有す。夏日、淡紫色の小花を葉腋に生じたる花軸上に叢生す。果實は蒴にして、種子は長き白毛を有す。我が國、各地の山野に自生す。種子の毛は綿の代用とし、皮部よりは纖維を取るべし。いかしき。かがみ。ごがみ。ごがみづる。ごがらび。ごまざい。ごまじほ。ごまじろ。ごましろかい。こまんざい。しこへい。じやいも。じやとうさう。ぢがいも。ちぐさ。はとかみ。

かかいう-くわ 蘿蔔科 (名) 【植】顯花植物、雙子葉類の一科。多年生草本、蔓草又は灌木。概ね乳液を含む。葉は托葉なし。花は完全整齊花にして、繖形花序に排列す。蕚は筒部短く、又は無し。花冠は合瓣、鐘狀・壺狀・皿狀又は漏斗狀にして五裂す。雄蕊は五箇、花冠に著生し、花粉は數多集合して花粉塊をなす。雌蕊は二箇、柱頭又は更に花柱に於いて合はせ著く。子房は上位一室、多胚珠を藏し、果實は二胞、種子は扁平にして長き綿毛を密生す。本科に屬する植物は廣く世界に分布す。らまくわ。ふなばらさうくわ。白前科。

かかいうろう 一加賀印籠 (名) 加賀國より製り出だしたる蒔繪の印籠。

かかう 一佳肴 嘉肴 (名) よきさかな。うまき料理。假名手本忠臣蔵「嘉肴有りと雖も、食せざれば其の味ひを知らずとは」禮記學記「雖二有二嘉肴一、弗二食不一知二其旨一」

かかう 一荷香 (名) 蓮の、花・葉などのにほひ。武平一詩「波搖岸影隨二橈轉一、風送荷香入二酒來一」劉威詩「竹葉一杯酒、荷香四座風」

かかう 一歌稿 (名) 歌の草稿。歌のしたがき。日本外史「忠澄檢二其鎧一得二歌稿一、因知二其爲一忠度也」

かかう 一河港 (名) 河岸にある港。(海港の對)

かかう 一下降 かうか(降下)に同じ。

かかう 一下行 下へ行くこと。下り行くこと。

かかう 一嘉幸 めでたきこと。よきしあはせ。庭訓往來正月「自他嘉幸、千萬千萬」

かかう 一加號 (名) よせ算の符號。即ち、+。

かかう 一雅號 (名) 文墨等、風雅の事に用ふる別號。

かかうぞめ 加賀梅染 (名) かがうめぞめ(加賀梅染)の略。

かかうた 加賀歌 (名) 加賀ぶしの歌。

かかうめぞめ 加賀梅染 (名) 加賀國より出づる梅染の絹。かがうぞめ。下文を見よ。貞丈雜記「加賀梅染。加賀の國より出づるうめぞめのきぬなり。うめぞめとは、うめやしぶといふものにて染むるなり。赤き色に黃ばみある色なり」

かかうめばち 加賀梅鉢 (名) 紋所の名。

かかお (名) 【植】ここあのき(柯柯阿樹)の異名。

かかおじ 柯柯阿脂 (名) ここあ

の樹の種子より得たる脂肪。軟膏・坐藥等を製るに用ふ。

かかがさ 加賀笠 (名) 加賀國より産出する菅笠。女穀油地獄「どうかせう、なんとかが笠、お吉と見るより」戀の手習「貸編笠のかさなりて、うきよ花笠、かがさに」

かかきぬ 加賀絹 (名) 加賀國より産出する生絹。庭訓往來四月「加賀絹・丹後精好」

かかく 家格 (名) 家の格式。いへがら。

かかく 歌格 (名) 歌の法則。

かかく 價格 (名) 一あたひ。直段。二〔經〕財貨と財貨との交換の比例。交換價格と有用價格とに分かつ。各條を見よ。

かかぐ 掲 (他動三) 〔かきあげ〕(掻上の約) 一高くさし上ぐ。夫木三秋深み曇りなき夜の大空に、誰がかかげたる鏡なるらん」二まくり上ぐ。捲き上ぐ。萬七少女らが織る機の上を、眞梯もて掻上たく島波間より見ゆ」宇鏡「振加久」三掻きたつ。燈火をともす。枕七「短き燈臺に、火を明くかかげて」源桐壺「燈火をかかげつくして、起きおはします」四書き載す。取りあげて記す。

かかく 家學 (名) 己れが家に傳はり來たりし學問。北史五五、式少專「家學」

かかく 歌學 (名) 和歌の學問。歌道。

かかく 下學 卑近なるところより學ぶこと。論語憲問「下學而上達、知我者其天乎」

かかく 賀客 (名) 祝賀をのぶるために來たる客。國史補纂「言未畢、賀客已在門矣」

かかく 雅客 (名) 一風雅なる人。みやびを。雅人。二〔植〕すゐせん(水仙)の異名。三柳軒雜識「水仙爲雅客」

かかく 雅樂 (名) 〔雅正なる音樂の義〕一正しき音樂。論語陽貨「惡鄭聲之亂雅樂」二本邦上古の歌舞・音樂、並びに唐・三韓等の外國より傳來したる樂の總稱。太平記四十中「盛亂之世、未必差雅樂」

かかく-かくてい-ほけんしょうけん 一價額確定保險證券 (名) 〔商〕海上保險證券の一。保證價額の確定せるもの。確定保險證券。(價額未定保險證券の對)

かかく-かた 歌學方 (名) 江戸幕府の職名。歌道の事を掌る。

かかく-くわん 一下顎管 (名) 〔醫〕顎下腺の排泄管中の一。

かかく-こつ 一下顎骨 (名) 〔醫〕額面の下部、下顎をなす骨。馬蹄鐵狀なり。顏顎骨と可動的に關節す。

かかく-せうきゃくほふ 一價格消却法 (名) 〔經〕使用によりて漸次減損すべき家屋・器械・器具等の價格を消却する方法。一時消却法・定額消却法・定率遞減法・年金法・評價消却法及び隨時不定額消却法等の種類あり。

かかく-ていけんぷ 一價格遞減法 (名) 〔經〕財貨が、一定の數量を超過する時は、其の價格は數量の增加に伴ひて、遞次に減少すとの法則。

かかく-ばいしゃう 一價格賠償 (名) 〔法〕金錢の支拂を以てする損害賠償。

かかく-ぶ 一雅樂部 (名) 明治四十一年以前の樂部の稱。

かかく-へうき 一價格表記 (名) 次條の略。郵便規則四十三「郵便物は之を書留と爲すことを得但し價格表記と爲したるものは書留と爲すことを得す」

かかくへうき-いうびんぶつ 一價格表記郵便 (名) 特殊取扱郵便の一。通貨・金銀・寶石・珠玉、其の他、有價の物件を封入したる郵便物には、其の價格を表記するを要し、該郵便物の亡失若しくは毀損のとき、其の價格に應じて損害を賠償するものとす。

かかくへうき-いうびんぶつ 一價格表記郵便物 (名) 特殊取扱郵便物の一。價格表記郵便の手續による郵便物。此の郵便物となし得べきものは、普通取扱郵便物・小包郵便物・別配達郵便物・留置郵便物・配達證明郵便物・代金引換郵便物の六種とす。郵便規則第三十六「價格表記郵便物」

かかくへうき-れう 一價格表記料 (名) 價格表記郵便の料金。郵便規則第三十五條六「價格表記料」

かかく-みてい-ほけんしょうけん 一價額未定保險證券 (名) 〔商〕海上保險證券の一。保險價額の確定せざるもの。豫定保險證券(價額確定保險證券の對)

かかぐり-おる 一柱より、かかぐりおるるものあり」(自動上二) すがりて下る。宇治拾遺「柱より、かかぐりおるるものあり」

かかぐり-つく (自動四) たどり著く。盛衰記十三「井寺にかかぐり著かせ給ひて、甲斐なき命の惜しさに、打ち憑み來たれり」

かかぐり-よる (自動四) たどりよる。落窪「ともかくもせよと放ち給ひしかばこそ、典藥も何も、かかぐりよりたりけめ」

かかぐる (自動四) かかりあふ。たどる。すがる。枕「碁をうつに中略ことの所に、かかぐりありくに」

がかく-れう 一雅樂寮 (名) 〔雅樂寮〕に同じ。職員令「雅樂寮。頭一人。掌文武樂曲・正音・雅音・男女樂人音樂人名籍・試・樂曲・選・事」

かかけ-いだす 掲出 (他動四) かかげて示す。掲示す。

かかけ-のはこ 掻上匣 (名) 古へ髮上げの具を入るる匣。かきあげばこ。源末摘花「わりなうふるめきたる鏡臺・からくしげ・かかけのはこなど取り出でたり」

かかける 掲 (他動下) かかぐ(掲)の口語。

かか-こて 加賀籠手 (名) 武具の名。加賀國より多く製出したる一種の籠手。花紋を鎖の間に繫ぐなど、頗る緻密なる細工を施せり。

かか-さま 母樣 (名) はは(母)の敬稱。かかさん。狂言「とときまやかかさまに云うて、取り返さずばおくまいぞ」

かか-さん 母樣 (名) 前條に同じ。傾城買二筋道「そして、ほんのかかさんかえ」

かかし 案山子 (名) 〔もと、燒きたる獸肉を串に挾みて、臭氣をかがしめて驚かすより起こるといふ。嬉遊笑覽〕一竹・藁などにて人の形を作り、弓矢を持たせ、田畑などに立てて、鳥獸を怖して作物の害を防ぐもの。かがし。かがせ。やまだのそほづ。大藏狂言「案山子をも拵へ、垣をも念を入れて結うておかうと存ずる」とりおどし西國がんおどし加賀で ほづ 關西かがし 北越 物類 呼稱 見ゆるもの。見かけばかりのもの。

かかし (形二) かまびすし(囂)に同じ。名義抄「囂 カカシ カマビスシ トイフカタ」

かかし 案山子 (名) かかし(案山子)に同じ。

かかし-あげ 案山子揚 (名) 除曆十月十五日、信濃國にて行はれたる案山子の祭。

かかし-あれ 案山子荒 (名) かかしあげの日に雨雪の降ること。信濃國の方言。

かかし-がしら 蚊頭 (名) かばり(蚊針)に同じ。

かかし-しら (名) 〔植〕かうがいぜきしやうの異名。

かかすけがさ 加賀菅笠 (名) かがが笠(加賀笠)に同じ。淀鯉出世滝櫻「加賀菅笠、しめをあらあらと召しませとよ」

かかすり 蚊飛白 (名) 衣服の模樣の名。蚊の脚の如き細きかすり。

かかせ 案山子 (名) かかし(案山子)に同じ。狂言「今夜は、某がかかせになってとらやう」

かかぞめ 加賀染 (名) 一模樣の名。加賀絹の無地の黑染。多くは五所紋染なり。紋は立田川に楓、或ひは雪月花等、彩色にて帶の紋の大さに染む。男女の羽織・衣服等に用ふ。二染色の名。赤に黃を帶びたる色。

かかたーぐさ (名) 〔植〕うきくさ(水萍)の異名。

かかち (名) 〔動〕へびるゐ(蛇類)の異名。

かかち (名) 〔植〕ほほづき(酸漿)の異名。

かかちゃ 一加賀茶 (名) 加賀國より産出する茶。主として煎茶。

かかつ (名) すりばち(擂鉢)をいふ。山陽・四國の方言。

かかっし (句) 〔斯く有りしの約〕かやうなりし。かうであった。かういふ。狂言朝比奈「かかっし所に、御所のつはものに、五十嵐の小文次と名乘って」

かか-づらひ (名) かかづらふこと。

かかづらひ-よる (自動四) よりかかる。源藤「やをら、御帳の内にかかづらひ、より

て、御衣のつまを引きならし給ふ」

かか-づらふ (自動四) 一かかりあふ。たづさはる。あづかる。關係す。源若紫「受領といひて、人の國の事にかかづらひいとなみて」同賢「かの親の心を憚りて、さすがにかかづらひ侍りし程に」二かかり傳ふ。つたはる。枕「雪の山にのぼり、かかづらひありきていねるのち」

かかーて 書出 (名) 古へ、朝廷にて、公事の定めある時、舊記・文書の中より書き抜きて、參考の爲め添へて奉るもの。かきだし。北山抄一位條「日錄・去年書出等、入笥進之」江次第九「史進文書於上卿、置硯於參議座」加「大夫史書出」

かかと 踵 (名) くびす(踵)に同じ。きびす。あくと。

かか-とび 加賀鳶 (名) 江戸時代、加賀國の藩主前田侯の江戸藩邸に召し抱へたる消防夫。氣幹偉大に、行裝亦他に類なきを以て稱せらる。

かか-なく (自動四) 〔かがは鳴く音〕古語。鷺など、靡を怒らしてがくがくと鳴く。萬十「筑波ねに可加奈久(カカナク)鷺のねのみをか鳴きわたりなむ、あふとはなしに」和名十「鵠 賀賀(カカ)」名義抄「咆 カカナク ホ」同「鵠 カカナク ナヲ」

かか-なべ-て (副) 〔日日並(カカ)べての義といふ〕古語。日を重ねて。記中「迦賀那倍氏(カカベ)夜には九の夜、日には十日を」

かか-なり 加賀形 (名) 盃の形の名。加賀笠にかたどりたるもの。

かか-のみ (名) 〔植〕かや(榧)の異名。

かか-のむ (他動四) 〔かかは飲む音〕古語。水などを、音たてて飲む。がふがふ飲む。かのむ。祝詞式大祓「速開都比咩(ハヒ)云神持可可呑(カカ)」延喜式、如此久可可呑(カカ)」常陸風土記「男稱那賀寒田之郎子、女號海上安是之孃子」中略自愛心減もの。帛のぼろ。かかふ。袖中抄「顯昭云中略世俗に、きりぎりすは、つづりさせかかはひろはんと鳴くといへり。かかはとは、きぬ布のやれて何にすべくもなきをいふ也」

かかはーび (名) かかはを燒くこと。下文を見よ。袖中抄「かかは中略などを物に蹈み切りたるには、そのさいでのはしを繩のやうになひて、火をつけて、その疵を溫むるをば、かかは火といふなり」

かかはゆーさ (名) かがはゆき度合。はづかしさ。驗牛繪詞「まことしく牛を歩ませて、目出あらん人に見え侍らんことのかがはゆさに、かくまぎらはし侍るやらん」

かかはゆし (形二) まばゆしに同じ。

かかはり 係 關 (名) かかはること。かまひ。關係。

かかはる 係 關 (自動四) 一彼れと此れとに涉る。互ひに關聯す。二たづさはる。あづかる。かかりあふ。かかづらふ。三一方にのみ片寄る。なづむ。拘泥す。屈託す。拘。

かかは-わらうづ (名) かかはにて織り作れる草鞋。下文を見よ。袖中抄「かかは中略それらは、わらうづにつくるに、くはへてつくりたれば强きなり。かかはわらうづといふ」

かが-ばんし 一加賀半紙 (名) 加賀國能美・石川・河北の三郡より産する紙の稱。色白くして質よし。

かがひ (名) 古語。うたがき(歌垣)に同じ。萬十一をとめ男の往きつどひ、かがふ嬬歌(ヒ)に、人妻に我れも交じらむ、我が妻に人もこと問へ中略嬬歌者、東俗語曰賀我比(ヒガヒ)」常陸風土記「男稱那賀寒田之郎子、女號海上安是之孃子中略自愛心減〔織〕經」月累日、嬬歌之會爲天下之技絃、邂逅相遇、于時郎子歌曰」

かかふ 抱 (他動四) 一腕又は手にて支へ持つ。腕の中にかこひこむ。いだく。だく。竹取「人人中略よりてかかへ奉れり」宇治拾遺十「犢額をかかへて」二かこひこむ。狂言鱸「浦山をかかへまして、上下の船などを眺め、ことの外、景の多い所でござりまする」三香など、含み有つ。枕「薰き物の香のいみじくかかへたる、いとをかし」同「汗のか、少しかかへたるきぬの薄き、ひきかづき」四家臣また婢僕など雇ひ入る。狂言「料理人と出家をかかへうと存ずる」同「在京のうち、女を抱へておいて」五かばふ。庇護す。平治物語「流罪せられよと公家に申ししかども、君抱へ仰せられしを」

かーかふ 二下合 (名) 〔天〕がふ(合)を見よ。

かかふ (自動四) 古語。かがひをなす。萬十一少女をとこの行きつどひ、加賀布(カガ)かがひに」

かかふ 考 (他動下二) 古語。かんがふ(考)に同じ。垂仁紀「宜檢挍(カカ)定」雄略紀「遣使者案(カカ)問皇女」

かーかふかいこつ 二下甲介骨 (名) 〔醫〕顏面骨の一。鼻腔の側壁を爲す一對の骨。

かーかふぶし 加賀節 (名) 一加賀女(カカ)の謠ふ歌の節なるべし。眞文鑑記「加賀節などは、今は聞きたる人も稀に候べし」二萬治・寛文の頃、狂言役者多門庄

左衛門・田來島小ざらし等の唄ひ出だしたる小唄の節。松の葉「かがぶし」㊁延寶の頃、京都にて、伊勢島宮内の門人宇治加賀掾が創めたる淨瑠璃節の一派。加賀掾は始め嘉太夫と稱せしかば、嘉太夫節ともいふ。

かがぶた 金銀蓮花 (名) 【植】龍膽科「著菜」屬の草本。水中に生じ、根は泥中にあり。莖は細し。葉は水面に浮かび、楕圓狀心臟形にして四五寸。花は白色にて、各長き花梗を有して叢生し、夏日開く。我が國、各地の池溏に自生す。きんぎんれん。

かがふり 冠 (名) 古語。かんむり(冠)に同じ。かうぶり。萬「此のごろの我が戀刀しるし集め、くうにまをさば五位の冠」宇鏡「鏡頭加加不」同「裏頭和我不」

かがふる 被 (他動) かうむる(被)に同じ。萬「かしこきや、みこと加我布利(カガフリ)」同「かしこきや、みこと加我布理(カガフリ)」明日ゆりや、かえがいむたねをいむなしにして」

かかへ 抱 (名) ㊀かかふること。いだくこと。㊁兩手にて抱ふるほどの太さ。㊂召しかかへたる人。めしつかひ。やとひ。傾城酒呑童子「抱への女郎いたみ諸白」

かかへ-あぶぎ 抱扇 (名) 能樂のかたの名。開きたる扇の要を持ちて腋の下へ抱へこみ、遠方を眺むさまをなすこと。

かかへ-いる 抱入 (他動下) ㊀いだきこむ。だき入る。㊁屋ひ入る。召抱ふ。

かかへ-いれる 抱入 (他動下) 前條の口語。

かかへ-おび 抱帶 (名) ㊀前にて帶を結ぶこと。(うしろおびの對) ㊁細く所けたる腰帶。しごき。心中宵庚申「目元しぼるる縮緬の、二重まはりの抱へ帶」誰袖海「花色じゆすの二つ割、紫ちりめんのかかへ帶」

かかへ-ぐるま 抱車 (名) 車夫を己れの家にかかへおきて挽かする人力車。てぐるま。(辻車・宿車の對)

かかへ-こむ 抱込 (他動四) ㊀いだきこむ。だきこむ。㊁抱きて内に入る。

かかへ-じ 抱字 (名) 一つ俳諧の中に置くことを避くべき二語の間に他の語を挾みて、全句却つてよく落ち附きたる時、その挾みたる語の稱。

かかへ-しゃふ 抱車夫 (名) かかへぐるまを挽かする車夫。

かかへ-すまふ 抱相撲 (名) 江戸時代、大名の抱へ置く力士の稱。

かかへ-ち 抱地 (名) ㊀江戸時代、屋敷地にて、圍ひ・家作を爲さずして、野畑の儘になしあるもの。㊁住宅地以外に所有する屋敷地。

かかへ-て 抱手 (名) 下人等を召しかかふる人。狂言「これでは、どこへ參つたとも、かかへてはござるまい」

かかへ-ばうし (名) こしおび(腰帶)を いふ。(畿内の方言。物類呼稱)

かかへ-もの 抱者 (名) 江戸時代、幕府又は諸侯より、一代限り召し抱へらるる者。

かかへ-やしき 抱屋敷 (名) 江戸時代、屋敷地にて、圍ひ・家作等を爲したる所有地。

かかへる 抱 (他動下) かかふ(抱)の口語。狂言「そつち へいてくれえ、かかへることはならぬぞ」

かかへる やうに おもふ 大切に思ふ。曾我會稽山「抱へるやうに思うても、御運の悪いお兄弟」

かかへ-をとこ 抱男 (名) 召しかかへたる男。雇男。

かかほ-ほほ 加賀頬 (名) 武具の名。加賀國より產する面頬(ボホヒ)の一種。

かがほり (名) ㊀かぶりもの。宇鏡「幡比太計乃加加保利」 ㊁古昔、婦人の用ひしかもじ。宇鏡「髢加加保利」同「鬘加加保利乃佐禰」

かがはやか (副) 古語。腰のかがまるやう。かがみがち。名義抄「僂(ニシテアガル)」

かがまり 屈 (名) かがまること。夫木「今は我れ世をうみにすむ老いえびの、もくづがしたにかがまりぞせる」

かがまり-ありく 屈歩 (自動四) かがむやうにしてあるく。腰をまげてありく。源行平「よはひなど、之よりまさる人、腰たへぬまで、かがまりありくためし、昔も今も侍るめれど」

かがまる 屈 (自動四) かがむやうになる。かがむ。竹取「髮も白く、腰もかがまり、目もただれにけり」宇鏡「僂加加屈仁」異記「曲屈(ヒ)可可末り」

かかみ 鏡 鑑 (名) 〔赫見(カガ)の意。一說、影見の義と〕㊀物の姿・形などを映し見る具。銀・銅・鐵等の金屬製と玻璃製とあり。金屬製中最も多きは銅製にして、青銅としろめとを和し、圓・方、古くは八花形などの平面板に作り、表に水銀を塗りて光を出だしたるもの。玻璃製は硝子板の裏に水銀を塗りたるものにて、現今最も廣く行はる。記上「い枕には加賀美(カガ)を懸け中略加賀美(カガ)なす、あがもふ妻」和名「鏡。孫愐切韻云、鏡加加照人面者也」㊁ほん(手本)。模範。いましめ。訓戒。萬「見る人の語り つぎてて、聞く人の可我見(カガ)にせむを」保元左府奥入道撫家の御身は、朝家の御鏡にておはしませば」㊂かがみもち(鏡餅の略。おかがみ。曾我會稽山「供へのお神酒・お鏡に、向かふ心の眞直なる冥慮ぞあんに有り難き」夕霧阿波鳴渡「餅搗の中略かがみ取る取る、やりてしゆの顏に、とりこの面白いとて」㊃樽の蓋。(形の圓きよりいふ)槍權三「四斗入りのあき樽中略それ鏡突き抜け」

かかみ-がいる 鏡入 拭きこみたるあとの、光りかがやく。

かかみ-にかく 鏡に映して見る如く明かなり。夫木「波に寄る月をみざはにゆり寄せて、かがみにかくる住吉の岸」壽門松「ねだつて金にするもがりとは、鏡にかけたこと」

かかみ-のかげ 鏡影 鏡にうつる影。古今物名「ぬば玉のわが黑髮やかはるらん、鏡のかげにふれる白雪」

かかみ-のそこ 鏡底 (鏡に映るを鏡の奥底に物のあるやうに見なしていふ) 鏡の中。新後撰雜中「いかにせん鏡のそこにみづはぐむ、かげも昔の友ならなくに」

かかみ-のつき 鏡月 鏡にて、月にかたどりたるもの。榮華物語「車中略左右のそばに、かがみの月を出だして瓦がき」

かかみ-のみづ 鏡水 鏡にて、海・川・池などの水にかたどりたるもの。榮華歌合「かがみのみづ、かねのすなどしたるすはまを」同相合「菊の折枝、かつらのもみぢ、かがみの水などをしたるが」

かかみ-のみづやり 鏡水遣 鏡にて、遣水のさまにかたどりたるもの。榮華歌合「況・紫檀の見すり、かがみのみづや

りなどしたるわりごども參らせたり」

かかみ 屈 (名) かがむこと。かがみたること。「腰のかがみ」

かかみ (名) 【植】㊀かがいも(蘿蔔)の異名。和名「芜菁蘆。」草云、蘿蔔子。一名、芜蘆加加美」 ㊁しらん(白及)の異名。

かかみ-あぶみ 鏡鐙 (名) 馬具。鐙の鳩胸(ムネ)の所を、銅又は銀にて張り包みたるもの。飾抄「美作守日「此宅出立、鞍右大將被借、橋井鐙並鏡也」

かかみ-いし 鏡石 (名) 表面透明にして、物の影の映る石。かがみいし。

かかみ-いた 鏡板 (名) ㊀表面の平滑なる板。「天井・杉戸のかがみいた」㊁能舞臺にて、正面の後の板。松を畫くを正式とす。㊂芝居の舞臺を能舞臺にかたどりたる時、其の後に張り附けたる板。松・竹・梅々描く。

かかみ-いは 鏡岩 (名) かがみいし(鏡石)に同じ。

かかみ-いを 鏡魚 (名) 【動】かがみだひ(鏡鯛)の異名。

かかみ-うちは 鏡團扇 (名) 團扇の表面に、小さき鏡を嵌め込みたるもの。百日曾我「置き鏡團扇や奈良團扇、さて繪團扇の品品は」

かかみ-うを 鏡魚 (名) 【動】かがみだひ(鏡鯛)の異名。

かかみ-おび 鏡帶 (名) 帶の仕立方を、鏡蒲團の如くにしたるもの。

かかみ-かけ 鏡懸 (名) かがみたて(鏡立)に同じ。印名「鏡臺加加奈」

かかみ-かた 鏡形 (名) 八花形(ヤツガタ)の鏡の形。宇津保藤上「機の天井には、かがみかた・雲のかたを織りたる高麗錦を張りたり」

かかみ-ぐさ 鏡草 (名) ㊀古へ禁中にて、正月元日に鏡餅の上に置く大根の稱。藏玉「加賀御草。大根正月一日天酒にて餅きき草の中にも早きかがみ草、やがてみつぎにそなへつるかな」㊁【植】あさがほ(朝顏)の異名。藏玉「鏡草。槿。あけ方ははづかしげなる朝がほの、鏡草にも見えてけるかな」㊂【植】うきくさ(浮草)の異名。藏玉「鏡草。浮草。波なくば何に咲かまし、かがみ草、氷のあとの水の花の名」四【植】やまぶき(棣棠花)の異名。下文を見よ。藏玉「鏡草。山吹。面影をたがひにと見しかがみ草、忘れ衣の名殘うらめし。昔男女あかずして別かれ侍りける時、鏡に面影を互ひにうつして、此の鏡をうづみ畢はんぬ。其の所より山吹生ひ出でけると云云。亘細忘衣の物語にあり」

かかみ-ぐさ 白歡 (名) 【植】葡萄科、蛇葡萄(ヘビブドウ)屬の多年生草本。蔓莖を有す。葉は掌狀複葉、三又は五筒の小葉より成り、各小葉は羽狀に深裂す。五六月の頃、黃綠色の小花を開き、漿纖花序に排列し、漿果を結ぶ。支那の原產なり。いはかがみ。びやくれん。やまかがみ。後拾遺「人の、草あはせしけるに、朝がほ・かがみ草など合はせしに」

かかみ-ぐつわ 鏡轡 (名) 轡の一種。透かしなくて、小さき丸鏡の狀に作れるもの。飾抄下「嘉保二四十七江記曰中略其導又鏡也」

かかみ-ぐみ (名) 【植】うきくさ(水萍)の異名。

かかみ-ぐら 鏡鞍 (名) 鏡地にしたる鞍。かがみぢのくら。保元白河殿「つきげなる馬に、鏡鞍置いてぞ乘つたりける」

かかみ-くれ-どり 鏡暮鳥 (名) 【動】ほととぎす(子規)の異名。蘭雪草

(わつぐみがか)

かかみ-ご 酸漿 (名) 【植】ほほづき(酸漿)の異名。印字本「酸醬酸浆」

かかみ-さう (名) 【植】いちやくさう(鹿蹄草)の異名。

かかみ-し 鏡師 (名) 鏡を作る人。又、それを磨く人。

かかみ-しほで 鏡較 (名) 馬具の名。較(デ)の裏に小さき圓鏡の如き金具を附けたるもの。

かかみ-だい 鏡臺 (名) ㊀次條に同じ。㊁能樂に用ふる作り物の一。鏡臺の形に作れるもの。

かかみ-たて 鏡立 (名) 鏡を立てかくるに用ふる木製のわく、又は臺。かがみかけ。かがみだい。きやうだい(鏡臺)。雪女五枚羽子板「浪人の憂き難義中略鏡立を米にしたり、硯箱を味噌にする」

かかみ-だひ 鏡鯛 (名) 【動】魚類中、硬鱗類、かがみだひ科の一種。體は長さ一尺五六寸、圓形に近くして扁平、鱗なくして鏡の如き光澤あり。春鰆に存する刺は殊に細長くして絲の如し。かがみいを。とうろのいを。まといを。まとだひ。

かかみ-ぢ 鏡地 (名) 較の前輪(マヘ)に、金屬を薄く張りて磨きたること。桃華藻葉「較(デ)懷地赤銅」

かかみぢ-の-くら 鏡地較 (名) かがみぢにしたる較。飾抄「御馬栗毛、鏡地較」

かかみ-つくり 鏡作 (名) ㊀鏡を作る人。かがみし。㊁古代の職名。鏡を造ることを掌る。神代紀上「鏡作部(カガミ)遠祖天糠戸」

かかみ-てんじやう 鏡天井 (名) 板にて張りたる天井。

かかみ-でんりうけい 鏡電流計 (名) 【理】絶緣せる細き銅線を、非常に多く捲きたるこいる內に、絹或ひは水晶の細線にて小なる鏡を吊り、其の裏面に二三箇の小磁針を貼附せるもの。之に由れば磁針のふれを精密に測ることを得。即ち、此の鏡に方たれる反射光線の方向の變化によりて、針のふれを讀む。

かかみ-とぎ 鏡磨 (名) 鏡の曇りたるを磨ぐこと。又、其れを業とする者。七十一番歌合「鏡磨。しろみの御かがみはとぎにくく侍り」

かかみ-なす 鏡成 (枕) 〔なすは、の如くの義〕見る。又はみにかけていひ、又、鏡は愛でづるものなれば愛づで思ふ義の語句などにもかけていふ。記下「ま玉なすあがもふ妻」萬「いもが手にまく、可我美奈須(カガミナス)みつの濱びに」同「鏡成(カガミナス)見れども厭かに」同「鏡奈須(カガミナス)かくし常見む」

かかみ-なる 鏡成 (枕) 前條に同じ。夫木「かがみなる我が見し君を、あはの野の花たちばなの玉にひろひつ」

かかみ-の 加賀裳 (名) 裳の一種。草綱・萌黃絲の綱を上にかけたるもの。加賀國より產出す。武家の著用。

かかみ-の-いへ 鏡家 (名) 鏡を入るる箱。女殺油地獄「女は中略嫁入先は夫の家、里のすみかも親の家、かがみの家の家ならで、家といふものなければ」

かかみ-の-す 鏡奩 (名) かがみばこ(鏡筥)に同じ。遊言便蒙抄「鏡奩(カガミバコ)」

かかみ-の-ま 鏡閒 (名) ㊀能樂にて、樂屋より橋懸りへ出づる閒にある室。常に姿見鏡を備ふればいふ。出演者此處に來たりて、その鏡に對ひて己れの姿を正しくするところ。㊁廚場にて、だいじん柱の有るところ。

かがみ-の-もちひ 鏡餅 (名) かがみもち(鏡餅)に同じ。夫木三千代までもかげをならべてあひ見んと、いはふかがみのもちひざらめや」

かがみ-は 鏡葉 (名) 面の滑かなる葉をいふなるべし。日本紀竟宴歌「玉かしはをか玉の木の鏡葉に、神のひもろぎそなへつるかな」

かがみ-ばこ 鏡筥 (名) 一鏡を入るる筥。二寝殿に設くる調度の一。鏡・汗手巾・領巾等を入れ置く筥。八花形にて臺あり。類字鏡「鏡 匣」本草

(にことばみがが)

かがみ-ばり 鏡張 (名) 鏡板(イタ)を張りたること。又、その處。

かがみ-ひざ 屈膝 (名) 膝のかがむこと。

かがみ-びらき 鏡開 (名) 昔、武家にて、正月に、男子は具足に、婦人は鏡臺に供へし鏡餅を、二十日に取り下げ、手にて砕き破り食ひし儀式。二十日は刃柄(ハガ)に、婦人は初額(ハツヒタ)に寄せて祝ふといふ。承應元年よりは廿日の御月忌に當たるより、改めて、十一日を用ふることとなれり。婦人は一に初鏡祝ともいふ。日次記事正月十「武具具足鏡餅開(禰中略)具足等供月足之鏡餅開之儀式(中略)先武具具足鏡餅開(禰中略)刀(武)祝之儀子板三天國小鍛冶義光、その外、名に負ふ銘の物、今日は御鏡開にて、奥の座敷に飾られたり」

かがみ-ぶくろ 鏡袋 (名) 鏡を入れおく袋。

かがみ-ぶとん 鏡蒲團 (名) 蒲團の裏の幅より廣くして、其の四方の餘れる所を表へ折り返して縫ひたるもの。鏡の形に似たるよりいふ。

かがみ-まくら 鏡枕 (名) 柱又は鏡臺に鏡を懸くる時、下に當つる爲めに用ふる棒形の蒲團。類聚雜要四「鏡枕。長五寸二分、口徑一寸二分、凡緒長一尺七寸六分、弘二分、同錦疊之、凡護樣也」

かがみ-まはる 屈回 (自動四) 諸方へ詣ひまはる。甲陽軍鑑三十「田頭衆ばかりに體の、かたましき者どもは」

かがみ-もち 鏡餅 (名) 円く平たくして、鏡の如くに作りたる餅。神に供へ、又吉禮の時に用ふ。かがみ。そなへもち。おそなへ。すわりもち。おすわりかがみのもちひ。もちひかがみ。類聚雜要「御齒固中略置鏡餅上。杠葉一枚、蘿蔔一株、押鮎一隻、三成橘一枝」雅楚醉狂集寄「明らけき君は天下のかがみ餅、ありがたしとやむかふ國民」そなへ・ふくでん東語ふくで信語「稱呼」

かがみ-もちひ 鏡餅 (名) 前條に同じ。基俊集「十二月つごもり、小法師といふ子のもとに、永緣鏡もちひおこすとて」

かがみ-もの 屈物 (名) 【動】えび(蝦)をいふ。宮女の詞。大上萬御名之事「女房詞中略一、えび。かがみもの」

かがみ-や 鏡屋 (名) 鏡を作り、又商ふ業。又、それを業とする人。用明天皇職人鑑職人「月はますみの鏡屋の」

かが-みる 鑑 (自動上) かんがみる(鑑)に同じ。

かが-みる 鑑 (他動上) かんがみる(鑑)も佛もかがみ給ひて」源氏心集「衆生の心のさまざまなるをかがみ給ひて」

かがむ 屈 (自動四) 一折れ曲がる。狂言鬼瓦「こなたのお腰がかがませられて、御くろに見えます」二身をひそむ。しのびかくる。天網島「どこにかがんで、此の苦をかける」

かがむ 屈 (他動四) かがむやうにする。折り曲ぐ。源氏「此のおよびをかがめてまかでぬ」紫式部日記「腰をかがめて行きちがひ」

かがめ 加賀女 (名) 加賀國より出づる遊女なるべし。貞文記「書札雜雜聞書」「公方へしらびやうしは不參候。かが女と申す遊女參り候。加賀ぶしなどとてはやり候」

かがめさ-あふ (自動四) 猿ども叫びかはす。今昔「猿中略木に走り登りて、かがめき合ひたり」

かがめく (自動四) 「かがは啼く聲」猿啼く。今昔「猿中略一の寶倉に向かひてかがめけば」

かがめっ-ちょ (名) 【動】かまきり(螳螂)の異名。

かがめる 屈 (他動下一) かがむ(屈)連動の口語。

かかも (名) 【植】すずきいこ(徐長卿)の異名。

かが-もん 加賀紋 (名) 上給に名がきて、色取りたる紋所。加賀の國人多く之を用ふるよりいふ。若風俗「黒羽二重の兩面、弁子人形の加賀紋」

かがやかし 赫耀 (形) はづかし。おもはゆし。まばゆし。面目なし。源宿木「隱れ忍びず、かがやかしからずいらへつつ」同常夏「かたへはかがやかしきにやと、いとはづかしげにきこえ給ふ」

かがやかしげ 赫氣 (副) かがやかしさう。はづかしげ。源橋姫「若き人人の、なだらかに物きこゆべきもなく、きえかへりかがやかしげなるも、かたはらいたけれど」

かかやかしさ 赫 (名) かがやかしき度合。はづかしさ。

かがやかす 赫耀 (他動四) 一かがやくやうにする。ひからす。きらめかす。紫式部日記「少將の君、秋の蝶・鳥などを、白銀して作りかがやかしたり」二揚ぐ。しめす。「名聲を四方にかがやかす」「武をかがやかす」

かがやき 赫耀 (名) かがやくこと。かがやきたること。

かがやき-あふ 赫合 (自動四) ひかりあふ。相照映す。榮華根「うすものより透きたる打ちめにかがやきあひたるほかげ、いみじうをかし」

かがやき-いづ 赫出 (自動下二) 光りて出で來たる。源紅葉「いろいろに散りかふ木の葉の中より、青海波のかがやきいでたるさま、いとおそろしきまで見ゆ」

かがやき-わたる 赫亙 (自動四) あまねくかがやく。廣くかがやく。一面にびかびかす。

かがやく 赫耀 (自動四) 一きはだちて光る。照りきらめく。びかびかす。きらつく。神代紀「螢火光光「カカヤ」神」竹取「毛の末には金の光かがやきたり」靈異記「炫「カカヤ」宇鏡「灼灼也久」曄煜」赫赫紀武 二かがやかしがる。恥かしがる。源蜻蛉「見ぐるしげなる人人も、かがやき隱れぬるほどに」今昔「女、扇を以て、顔に指し隱してかがやくを」

かがやく 赫 (他動四) かがやかしく思はす。恥ぢしむ。恥をかかす。枕「よるもひるも來る人をば、何かは、なしなども、かがやき歎さん」

かかやなつめ (名) 【植】はまなつめの異名。

かかやん-ばら (名) 【植】薔薇(バラ)科、薔薇屬の常綠灌木。幹は强き刺を有す。葉は羽狀複葉、各小葉は殆ど圓形。春日、白

色の花を枝端に一箇づつ開く。我が國、山地に自生すれども、亦庭園にも栽培せらる。

かかゆ 抱 (他動上) かかふ(抱)の訛り。狂言奈良「門の戸びらに手をかけ、えいやと押せばえいやとかかゆ」

かがゆし (形) かがやかし。まばゆし。

かかよふ 赫 (自動四) 一かがやく。きらめく。萬五見わたせば近きものから、いはがくり加我欲布「珠を取らずはやまじ」同十「ともしびのかげに蚊蜻欲布(カカヨフ)うつせみの、いもがゐまひしおもかげに見ゆ」二ちらつく。萬葉沈「すきかげに、ただ一人かがよひて」

かからはし (形) 古語。かかはるやうなり。萬五「もち鳥の可可良波志(カカラハシ)もよ」

かからふ (自動四) 一かかはる(係)に同じ。二觸る。さはる。雄略紀「易(ヒ)產腹者以確觸(カカラフ)」體、卽便懷脈」

かからふ 誂 (自動四) 古語。男女、かたらひあふ。挑みよる。舊解萬五「わたつみの神の少女に、たまさかに、い澪ぎむかひて、あひ誂良比(カカラヒ)右訓カタラヒ」

かかり 掛 懸 (名) 一かかること。關係すること。又、その人。松風村雨東帶鑑「どこにゆかり・かかりも無し」二うけもち。擔當。明治二十三年八月勅令第百九十二號行政裁判所處務規程第二「行政訴訟各事件の掛評定官」三かかりゐん(掛員)に同じ。市制十七條「選擧掛」四寄りかかること。「かかりどころ」五憂はること。たよること。「親がかり」「かかりびと」六てがかり。著手。七攻むること。「車がかりの陣」八つくりかた。構へ。結構。「家のかかり」大鑑狂言「大門のかかりなどは、誠に今迄の寺寺とは格別なものでござる」九ひえ。費用。入費。十「調上「絨も無し。かかりも無し。すべて立ちあふべき方もなし」十租稅。稅金。連歌文法上の語。下のむすびに對應したる助詞、ぞ・なん・か・や・こそなどの用法。係。

かかり 懸 (名) 一蹴鞠をなす處の垣に植ゑたる木。三本懸り・五本懸り・六本懸りなどあれど、四本懸りを普通とし、艮(東北)に櫻、巽(東南)に柳、坤(西南)に楓、乾(西北)に松を植う。新古今雜上「最勝寺の櫻は、まりのかかりにて久しくなりにしを」二蹴鞠の場所。源上「蹴鞠もたせ給へり中略よしあるかかりの程をたづねて、たちいづ」十調上「蹴鞠の會ありけるに、かかりの外にまりの落ちてありけるを」三女の髪の毛の、肩に垂れ下がりたること。女の髪の麥。津國女夫池三「髪のかかり、衣(ヒ)のあや、凡人ならぬところあり」

かかり (名) 釣針の鉤。

かかり (名) 釣針の末端の、曲がりたる部分。

かかり 斯有 (自動四) 〔斯く有りの約〕かやうなり。萬五「黑髮まじりおゆるまで、如是有(カカ)慰にはいまだ逢はなくに」同廿、可加良(カカ)むと兼ねて知りせば、こしの海のありその波も見せましものを」竹取「あめの下の事は、とありともかかりとも」

かかる ところ 斯有所 かやうなる場所。かうして居る中。枕「かかる所に來ぬる人は」

かかる-ほど 斯有程 かくてあるうち。かやうなる時。源梅枝「かかるほどに、さぶらひ給ふ例なきことなれば」

かかり 篝 (名) 一かがりびを盛る鐵の籠。亭子院歌合「杜鵑の歌は卯花に附けたり。よるのは鵜舟してかがりに入れて持たせたり」二かがりび(篝火)の略。萬五「しまつどり鵜かひびとは、ゆく川の清き淵ごとに可賀里(カガ)さし」和名「篝火。漢書陳勝傳云、夜篝火師古加加利」雲火。三かがりびの戸びらに手をかけ、えいやとしゆごに(ん)、篝屋守護人)の略。太平記四「篝屋人、大炊御門油小路の篝、小串五郎左衛門秀信召し捕って」

かかり 膳 (名) かがること。又、そのしかた。

かかり (接尾) 事の序にする意を表はす語。がけ。「通りがかり」

かかり 大鋸 (名) 鋸の大なるもの。がんぎ。宇鏡「鋸・鉄加加利」

かかり-あひ 掛合 (名) 一かかりあふこと。たづさはること。關係。二まきぞへ。連坐。連累。

かかり-あふ 掛合 (自動四) 其の事に關係す。かかはる。

かかり-いかだ 篝筏 (名) 方三四尺の板の上に篝火を焚きて、水に浮かべたるもの。

かかり-らど 掛人 (名) かかりびと(掛人)の音便。青物盡意見證文「此の傳吉が身の上は、青物屋のかかりらど」

かかり-かご 篝籠 (名) 篝火を焚く爲めに用ふる鐵製の籠。

かかり-くち 懸口 (名) 一軍陣の語。進んで攻め懸からんとする時。又、其の場所。甲陽軍鑑末書「城攻・迫り合共に、かかり口には强盛なる者先んずる事あり」文武五人男「士卒の手配り、軍の備へ、かかり口、一一に下知を爲し」二てがかり。又、喧嘩をしかくる口實。

かかり-ご 掛子 (名) 一人に養はる子。二老後のたよりとする子。平家女護島「かかり子に放れ、路頭に立ち、餓死にする親も有り」

かかり-ことば 係辭 (名) 文法の語。槙「ことばたる言葉。

かかり-こんじゃう 掛根性 (名) 他に依賴する心のつよき性質。

かかり-ざいく 膳細工 (名) かがりて細工すること。又、其の物。

かかり-だい 篝臺 (名) 能樂の作り物の一。船に篝火を燒きたる狀に擬するもの。通盛の曲に用ふ。

かかり-だいこ 懸太鼓 (名) 戰陣にて、進擊の相圖に搗ち鳴らす太鼓。國府臺戰記「懸り太鼓をはやめつつ、松戸の川を越えければ」

かかり-ちゃう 掛長 (名) 二人以上の掛員ある場合に、其の事務の總理者。市制第三「選擧掛は名譽職とし市長に於て臨時選擧人中より二名若くは四名を選任し市長町村長若くは其代理者は其掛長となり選擧會を開閉し其會場の取締に任す」

かかり-づな 繫綱 (名) 船具。船繫(ボカリ)に用ふる綱。

かかり-てき 懸敵 (名) 攻め來たる敵。甲陽軍鑑「信濃より當國へ取り懸かることなれば、あなたは懸り敵、こなたは待ち味方」

かかり-ど 掛人 (名) かかりうど(掛人)の略。

かかり-どうろう 篝燈籠 (名) 庭の中ほどに立てたる燈籠の稱。

かかり-どぜき 懸關 (名) 敵に攻め懸かる時、發する問の聲。見聞雜錄「今日、掛り問を一度もあげざるは、後の敵へ油斷さすべき爲めぢ」

かかり-どころ 懸所 (名) たよりとするところ。後撰三「ともかくもいふ言の葉の見えぬかな、いづらは露のかかりどころは」源少「さるべき人にたちおく

れて、世衰ふる末には、人にかかる傷らるに、かかりどころなき事になん」

かかりとり 掛取 (名) 手當を受くることを約して、囲ひ女となること。又、その女。

かかりのつぼ 懸壺 (名) かかり(懸)に同じ。

かかりのまつ 懸松 (名) 同じ。能樂の謠。さんのまつ(三松)に同じ。二蹴鞠の場の西北隅に立てる松の樹。

かがりのもの 篝者 (名) かがりやしゅごにん(篝屋守護人)に同じ。

かかりば (名) 垂れかかりたる髪のさま。さがりば。落窪「かしらつき、髪のかかりば、いとうつくしげなり」源末摘花「かしらつき、かみのかかりばしも美しげにて」

かがりび 篝火 (名) 同篝(ヒカリ)に燒く火。かがりと。古今雜二「かがりびにあらぬ我が身のなぞもかく、涙の川に浮きて燃ゆらん」源少女「中島のわたりに、ここかしこ、かがりびどもともして」二やりて(遣手)の異名。下文を見よ。當世武野俗談「かがりびとは、やりてといふこと。心の火を焚いたり消したり、物思ふといふこころ」

かがりびさう (名) 【植】てちなしぐさの異名。

かかりびと 掛人 (名) 人に憑(タノ)りて養ひを受くる人。ねさぶらふ。食客。かかりうど。

かかりぶね 掛船 (名) 沖に碇泊せる船。

かがりぶね 篝船 (名) 篝火(カガリビ)をたける漁船。壬二集「まてしばし波間のあまの篝船思ひにまさるうきねくらべん」

かかりまけ 懸負 (名) 入費の、利益より多きこと。

かかりまつ 篝松 (名) 篝火に用ふる松の薪。東鑑十三建仁二年十二月「洛中辻辻篝松用途事」

かかりむしや 懸武者 (名) かけむしや(懸武者)に同じ。別所長治記「秀吉元來無思慮懸り武者と聞く」

かかりむすこ 掛息子 (名) 掛子(カケガ)なるむすこ。

かかりむすび 係結 (名) 文法上の語。係りと、結びと。

かかりむすめ 掛娘 (名) 掛子(カケガ)なる娘。

かかりもの 告 (名) 目にかすみの出來たること。ほし。後漢三才圖會「告(カカリ)目病生醫曰告」

かかりや 篝屋 (名) 鎌倉時代、京都の篝屋守護人の宿衛所。東鑑建暦五建元元年閏七月六日「洛中辻辻篝屋」

かがりやのぶし 篝屋武士 かがりやしゅごにん(篝屋守護人)に同じ。

かがりやき 篝燒 (名) 下文を見よ。富士河記「鵜の吐きたる鮎を、かがり火にやきて賞翫す。是れをかがりやきといひならはしたるとなん。とりあへぬ夜川の鮎のかがり燒めづらともみつ、あはれともみつ」

かがりやしゅごにん 篝屋守護人 (名) 鎌倉時代、京都の辻辻に四十八箇所の番屋を構へて、盜賊を警め、市街を巡回したる武士。終夜篝を燃やして警固する故にいふ。かがり。かがりやのぶし。

かかりゆ 掛湯 (名) 風呂より出でて後、更に身體にそそぎて清むるため、別に設くる湯。あがりゆ。をかゆ。丹波與作「据風呂もしやんしやん、かかり湯取って、加減見て」

かかりゐん 掛員 (名) 或る事務を擔當すべく定められたる職員。

かかる 掛 (名) 能樂の謠本に附くる符號の一。謠ひ又は拍子に取りかかる意を示す記號。

かかる 懸 掛 (自動) 一物に著きて垂れさがる。たる。ぶらさがる。萬三十「つゐさはふいはれの山に、白妙に懸有(カカ)雲は、我が大きみかも」續古今雜「ときはなる松の名だてに、あやなくもかかれる藤の咲きて散るかな」二寄りかかる。もたれる。源御法「空をあゆむ心ちして、人にかかりてぞおはしましける」同行幸「御脇息にかかりて」三懸けてあり。掲げらる。「額がかかる」四秤にて量らる。「目方にかかる」釋迦如來誕生會三「かからぬ秤、なぜ持ってうせた」五そそぐ。ふりかかる。古今春上「春たてば花とや見らん白雪の、かかれる枝に鶯の鳴く」蜻蛉日記上「なげく涙の衣手に、かからぬ世にもふべき身は」同上「夜の内は松にも露はかかりけり、あくれば消ゆるものとこそ思へ」六被る。かぶさる。及ぶ。渉る。萬三「可加良(カカラ)ずも可賀利(カカリ)も、神のまにまに」古今仮題「思へどむなほうとまれぬ、春霞かからぬ山のあらじと思へば」後撰雜三「慰むることの葉だにもかからずば、今もけぬべき露の命を」枕三「御ぐしのかからせ給ふるなど」風雅雜上「沈む身を何歎きけん佐保川の、深き恵みのかかりける世に」七其の事に著手す。其の時にならんとす。とりつく。始まる。「仕事にかかる」竹取「神は落ちかかるやうにひらめきかかるに」新古今春上「柴の戸をさすや日影のなごりなく、春くれかかる山のはの雲」八迫みて擊つ。逼りて躍りつく。「敵にかかる」萬三「懸は我れはあらじと我れは思ひしを、いづくの鯨ぞつかみ懸(カカ)て」宇治拾遺三「鬼の姿になりて、大口をあきてかかりければ」九出遇ふ。あふ。でくはす。「災にかかる」「病氣にかかる」「通りかかる」源明石「海にます神の助けにかからずば、潮の八百重にさすらへなまし」枕二「驗者中將いたくわづらふ人にかかりて、物のけ調ずるも、いとくるしければ」十通り過ぐ。枕「みたけ・熊野、かからぬ山なく」金葉春「白雲にまがひ櫻をたづぬとて、かからぬ山のなかりつるかな」十一とまる。つく。萬三「まなかひに、もとな可利(カカリ)て、やすいしなさぬ」源椎本「をさなき程の御ひとへ心にかかります」十二狂言布施「過ぜねば氣にかかります」十三碇泊す。泊る。夫木三「海原や博多の沖にかかりたる、もろこし舟に時つくるなり」宇治拾遺三「舟中將かかりたる方もなき沖に出でければ」十四つく。憑(カカ)る。「狐がかかる」伸哀紀「時有神、託(カカ)三皇后而誨曰」十五たよる。頼む。世話になる。養はる。「子にかかる」「醫者にかかる」宇津保俊蔭三「麻呂が參らするものにかかり給へる母持ち奉りたり」源夕顔「うつせみの世はうきものとのみ知りにしを、また言の葉にかかる命を」十六たづさはる。かかはる。關係す。擔當す。「身の上にかかる」源若紫「さもかからぬくまなき御心かな」榮華玉蘂「かかり仕うまつる人人もたけく思へど、餘りになりて、ねぶりがちなり」十七かかりあふ。連坐す。連累す。顯宗紀「事連(カカリ)讒殺皇子押磐」後拾遺雜三「靜範法師、やはたの宮の事にかかりて、伊豆國に流されて」十八貶ゆ。いる。「金がかかる」「手間がかかる」

かからく 懸 かかる(懸)の延。新後撰春上「ながむればよもの白雲かからくの、初瀬の山は花匂ふらし」

かかるしまなし 懸島無 舟の寄り著く島なし。とりつきばのなきに譬ふ。

(諺)懸かるも引くも折りによる 進退共に時機あり。太平記六「懸かるも引くもをりによるとは、かやうの事を申すなり」

かかる 燻 (自動) 古語。あかがりがきれる。萬三十「稲つけば可加流(カカル)あが手を、こよひもか殿のわくごが取りてなげかむ」

かかる 縢 (他動) 絲を打ち交へに組みて編み又は綴る。からげぬふ。浮世風呂三「よくかがったねえ、これは板毬かえ」

かかれど (接) かくあれど。土佐日記「船にも思ふ事あれどかひなし。かかれど、此の歌を獨ごとにしてやみぬ」

かかれば (接) 斯く有れば。

かがをつな 加賀苧綱 (名) 加賀産の苧(ヲ)にて綯ひたる綱。苧綱中最も强き故に、大船の大綱に用ふ。廻船三綱(ニヤノイモヅナ)の第一。

かかん (名) かかの訛り。畿内の方言。かかあ。假名手本忠臣藏三「とさま出て見よ、かかんつ、かかん連れてといふ歌の通り」

かかん 一下濟 下瀚 (名) げじゆん(下旬)に同じ。

かかん 一河漢 (名) あまのがは(天河)に同じ。朗詠先三「遥今吹二其花一、如曉星之轉二河漢一」莊子逍遥遊「大而無用、衆人所同不反、吾警怖其言、猶河漢而無極也、太有逕庭、不近人情焉」宋之問詩「八月涼風天氣晶、萬里無雲河漢明」

かかん 一假感 (名) 假相より生ずる感情。美感の如き是れなり。(實感の對)

かかん 一下瞰 みおろすこと。劇談錄上施「板屋樓櫓二可以下瞰城中」

かがん 一河岸 (名) かはぎし。

かがん 一歩渚 (名) 魏志倭人傳「天子歩行邊河岸、岸高不能下」徐照詩「鄰園梅發盡、河岸草生遲」

ががん 一鑑眼 (名) ががんせん(鑑眼錢)の略。盛衰記十八「鑑眼百貫、鑷牙百石、附使者可申請候」明月記嘉禄三六月「夜鵲盜穿通具、輔之土倉、取下所々收置雜物、鵝眼三百貫、沙金一裹、濃州桑絲六十疋、鎧・鎗・鍬」下學集十「鵝眼(ガガ)穴錢(ガガ)」

かかんかい 一可感界 (名) 【哲】吾人の眼前に展開せる物質世界。卽ち、直接吾人の感官によりて感觸して、認識することを得る世界。(可想界の對)

がかんせん 一鵝眼錢 (名) 〔鵝鳥の眼の圓くして瞳の方なるに似たるよりいふ〕ぜに(錢)の異名。鳥目。通鑑宋紀「鵝眼錢劣於此者、謂之鵝眼錢、貫之以鏤、入水不沈」

がかんぼ (名) 【動】昆蟲類中、雙翅類の一種。體形は蚊に似て大きく、且つ黃褐色。複眼は大。一對の透明にて褐灰色の脈ある翅を有す。幼蟲は稻・麥の株を食害す。本邦、各地に產す。かのうば。

かき 垣 (名) 一一區劃を限る圍ひとして設けたるもの。土・石・竹・木などを用ひて作る。かきね。かきほ。記上「や雲たついづもやへ賀敝(ガキ)つまごみに、やへ賀敝(ガキ)つくる、そのやへ賀敝(ガキ)を」和名十「垣(賀敝)、籬(阿良正)、牆(佐久)、墻(佐久)、籬(加岐)」古語。二廊又は室內の障屏などの稱。崇峻紀「起二大法興寺佛堂與二步廊(カラヒガキ)」三紋所の名。からひがき・からひがきたまがき・ときはがき など種種あり。

(ヨキカキ)

壁に耳に同じ。かべ(壁)の條を見よ。北條時分「賀(垣)に耳あり」管子君臣「古者有二言、牆有耳、伏寇在側」

かき 書 (名) 書くこと。「繪をかきに行く」

かき 掻 (名) 掻くこと。掻きたるもの。「氷一かき」

かき (名) 古語。私家の奴。またげらい。顯宗紀「以二山守部一爲民(カキ)」孝德紀「部曲(カキ)之民」

かき 牡蠣 (名) 【動】軟體動物、鮏鰒類、かき科の一種。貝殼の長さ二三寸、幅は其の半にして、長卵形、右殼は扁平にて稍小なるも、左殼は大きくして膨る。淺海の多少淡水の混ずる所の岩石に、左殼を以て附著す。六七月頃產卵し、一二歲は發育最も佳し。安藝國廣島邊は有名の產地なり。和名十蠣(加岐)、蛤(ハマグリ)、蜆(シジミ)、蟹(カニ)字類「相著蟲殼似石者也」石花下學集蛤・蚌・蠣・蟹字類

かき 柿 (名) 一一【植】柿樹科、柿屬の落葉喬木。幹の高さ二三丈。葉は互生、楕圓形或ひは卵形、全緣鋭頭にして革質、上面は暗綠色、裏面は灰色を呈す。四五月の頃、帶黃色の花を開き、雜性又は單性にして、帶黃赤色大形の漿果を結ぶ。廣く我が國に栽培せらるる果樹にして、品種頗る多し。果實は生食又は乾柿として食し、澁柿よりは澁を搾り材は器具用とし、殊に心材の黑色となれるものは、黑柿として甚だ賞用せらる。かきのき。和名十「柿。說文云、柿加岐赤實果也」二かきいろ(柿色)の略。平治(陽明)「齡七十計りなる入道の、柿の直垂」著聞十一僧正、かきの水干を著て」

かきのもみぢ 柿紅葉 柿の葉の、もみぢしたるもの。伊勢集「かきの紅葉に、歌をなん書きつけける」

かき 一夏季 (名) 四季の一。夏の時節。

かき 一夏期 (名) 夏の期間。夏の頃。「夏期の講習」

かき 一夏氣 (名) 夏の氣節。夏の氣候。春秋繁露、春氣愛、秋氣嚴、夏氣樂、冬氣哀」李德裕詩「石渠淸夏氣、高樹蟬鮮鵰」

かき 一嘉氣 (名) めでたき氣。

かき 一佳氣 (名) めでたき雲の如き氣。後漢書光武「氣佳哉、鬱鬱葱葱然」全唐詩話杜荀鶴「長安此去無多地、鬱鬱葱葱佳氣浮」

かき 一佳期 (名) よき時期。好時期。

かき 一嫁期 (名) よめいりどき。嫁に行くべき年頃。

かき 一嘉卉 (名) 美しき草木。詩經小雅「山有嘉卉」

かき 一下器 (名) かつぎ(下器)に同じ。

かき 搔 (接頭) 動詞に冠らせて語勢を强むる語。かい。「かき暮らす」「かき消す」

かぎ 鉤 (名) 一尖(ヒ)の屈曲したる金屬製の具、又、其れに似て、尖の曲がりたるものの稱。垂仁紀「爲人也强力、以能毀角申鉤(カギ)」義殘後覺「木綿日本勢手分けをして四方より一同に押し寄せ中將八方より鉤(カギ)を打ち懸け」鉤。二かぎのて(鉤手)の略。雅亮裝束抄「うへの袴は、右をうはがへにして、腰を引き廻はして、左のうしろにかぎに結びて」三字句の頭に、かくるコ形のもの。かぎ點。達率故實抄三「懸鉤樣事。永萬元年正月廿一日、功過定。予懸鉤於表紙上文」

かぎ 鍵 鑰 (名) 一一錠(ヒ)の孔に入れて、之を開閉する具。其の製種種あり。萬三「隣の君は鑰れてよりさか妻かれて、請はなくに鑰(カギ)さへまたし、人のみなかくまどへるは」和名十「鉤匙加岐、鍵子乃鎖」

貫」宇鏡「鑑加支」鑰匙天智 餓字 ㊁時計のねぢをかくるもの。㊁ぬすびと(盗人)をいふ。隠語。錠前を開くるよりいふ。㊂權勢の家に立ち入ること。隠語 ㊃紋所の名。かぎ・かぎびしまる

(ふぎ かぎ)

にかぎなど種種あり。

かぎ-りしなひ **がち** 鍵失勝 事に託して、人の入るをこばむ譬へなるべし。狭衣「此の人のおはするよひ・曉の門も心安からず、かぎ失ひがちにもてなしつぶやくけはひ、御供の人人聞きて、めざましうあさましきに、蹈みこぼちて入りなまほしきをりをりありけり」

(諺)鍵の穴から天をのぞく 管の穴から天をのぞくに同じ。くだ(管)の條を見よ。傾城反魂香「さげた鍵の穴から天を覗けば、ほのぼの明け」

かぎ 嗅 (名) 嗅ぐこと。かぎたること。

かぎ 陰 (名) 古語。かげ(陰)に同じ。古へ東國の方言。萬「あかときのかはたれどきに、しま加根を漕ぎにし船のたづき知らずも」

かぎ-ぎ 嘉儀 (名) めでたき儀式。祝ひごと。賀儀。

かぎ-ぎ 一歌妓 (名) うたひめ。藝妓。孟浩然詩「當杯已入手、歌妓莫停聲」

がぎ 一餓鬼 (名) 一餓鬼道に住する亡者。飲食物に乏しくして皮肉枯槁し、或ひは腹大なれども咽喉細くして針の如ければ、飲食する能はず、常に饑渇に苦しむといふ。無緣佛。萬「あひ思はぬ人を思ふは、大寺の餓鬼なり」の略。和名「餓鬼。孫愐切韻云、餓鬼、其喉如針、不得飲水、見水則變成火。孫愐切韻云、餓鬼、鬼也」 二がきだう(餓鬼道)の略。狂言「地藏の住みし所は中略地獄・餓鬼・畜生」 三小供の賤稱。(食を食るよりいふ)雪女五枚羽子板「めなご・小悴、産みの儘なる餓鬼十二疋」膝栗毛「うちのかかめが病氣をわづらひをって、餓鬼共にはせちがはれる」 四楊弓・大弓にて、錢を賭物にするとき、錢一文の隠語。はづ。一時軒隨筆「一、かけものは中略錢のときは、壺錢を餓鬼、二錢を地といひ」

(諺)餓鬼の斷食 あたりまへの事を殊更らしく揚言する譬へ。愚愚痴物語「餓鬼の斷食、惡女の賢者ぶり」

(諺)餓鬼の花爭ひ 必要ならぬ事に爭ふ譬へ。世話盡「餓鬼の花爭ひ」

(諺)餓鬼の目に水見えず 水に渴する餓鬼の目には、水あれども見えず。熱望の甚しき、却って見逃すことあるに譬ふ。釋迦如來誕生會「餓鬼の目に水見えずとは姿のこと」

(諺)餓鬼の物をぴんづる 餓鬼の得たる食物を他が奪ひ取るに譬ふ。窮乏の者より物をせびり取るに譬ふ。ぴんづるは引っ取るの轉にて、賓頭盧にかけていふ。松風村雨東帶鑑「たまたま逢うた男を、餓鬼の物をぴんづる」

(諺)餓鬼の物を畠がせびる 前條に同じ。

(諺)餓鬼も人數 つまらぬものも、時に取りては多少の効ある譬へ。後撰夷曲集「お召しには餓鬼も人數と聞くからに、腰折れながら集を望めり」國姓爺「餓鬼も人數、しをらしい事ほざいたり」

がき 一牙旗 (名) (古へ支那にて、大將の旗は、竿上に象牙を飾りたりと云ふより出づ)大將の居る處に立つる旗。張衡文選京、戈矛若林、牙旗繽紛」李商隱詩「夜捲一牙旗、千帳雪」蘇軾詩「牙旗穿夜市、鐵馬響春氷」

がき (名) 一ひさし(庇)をいふ、越後國の方言。物類稱呼 二土藏のひさし。伊勢國の方言。物類稱呼

がぎ 祝ひごと。賀儀。嘉儀。

かぎ-あぎらむ 書明 (他動下二) 書きて意義を明かにす。源氏宗「まがふべくもあらずかきあきらめ給へれど、こと人は心もえず」

かぎ-あぐ 書上 (他動下二) 一書き記す。書きたつ。二記し終はる。かきをはる。三書きて、目上の人また官府に奉る。

かぎ-あぐ 掻上 (他動下二) 一上の方へ取り揚ぐ。かかぐ。靈異記中「搴(可岐阿)天」宇治拾遺「くくり高くかきあげて」同「膝をももまでかきあげて」二手にてささぐ。名義抄「擎(カキアグ)」三燈などかきたつ。かかぐ。徒然草「古へは車もたげよ、火かかげよといひしを、今やうの人は、もてあげよ、かきあげよといふ」

かぎ-あげ 書上 (名) 一かきあげたること。記し終はりたること。二書きて目上の人に奉ること。又、其の文書。申狀。

かぎ-あげ 掻上 掻揚 (名) 一掻きあぐること。かかぐること。二かきあげじろ(掻揚城)の略。續武家閑談「秀吉御下知を以て、三月十九日巳の刻過ぎより中略當座に、かきあげを仕る樣に被成度きもの歟と」三天鼓羅の一種。牛玉子と饅飩の粉とを搗き混ぜてころもとして揚げたるもの。

かぎあげ-さ 掻上木 (名) かきあげのき(掻上木)に同じ。雅亮裝束抄「遊臺より出づ」

かぎあ 中略かねのはさみとて、叙子のやうなるものを、かきあげぎには具したるなり」

かぎあげ-じろ 掻揚城 (名) (土を掻きあげたるまでの城の義)粗略に構へたる空濠の城。甲陽軍鑑「濃州いぬい天野宮内衞門は、則ち乾にかき上城あり」

かぎあげ-の-さ 掻上木 (名) 油火の、燈心をかきたつる棒。十訓「燈籠の火の、かきあげの木のはしにて、文字をけちて」

かぎあげ-ばこ 掻上匣 (名) かかげばこ(掻上匣)に同じ。類聚雜要「掻上筥(ニ階棚ニ文用事)」

かぎあげ-やしき 掻揚屋敷 (名) かきあげ城の小さきもの。甲陽軍鑑「侍のかきあげ屋敷に、あがり兵粮澤山あり」

かぎ-あげる 書上 (他動下二) かきあぐ(書上)の口語。

かぎ-あげる 掻上 掻揚 (他動下二) かきあぐ(掻上)の口語。

かぎ-あつ 嗅當 (他動四) 一嗅ぎて其の物と知る。二さぐりあつ。推察して的中す。長町女腹切下「伯母の家作り、常の話に大方かぎ當て」

かぎ-あつむ 書集 (他動下二) 種種の事を、多く集め書く。諸書より書き取りてあつむ。源胡蝶「いられがましきわびことどもを、かき集め給へる御文を」

かぎ-あつむ 掻集 (他動下二) 取りまとめて一つにす。寄せ合はす。源若菜「命婦の君ぞ、御なほしなどはかきあつめもてきたる」同梅枝「御覽じはじめし年月の事さへかきあつめ、萬におぼしつづけられて」

かぎ-あつめ 書集 (名) 書き集むること。

かぎ-あつめ 掻集 (名) 掻き集めたること。又、其の物。あつめもの。

かぎ-あつめる 書集 (他動下二) かきあつむ(書集)の口語。

かぎ-あつめる 掻集 (他動下二) かきあつむ(掻集)の口語。

かぎ-あてる 嗅當 (他動下二) かぎあつむ(嗅當)の口語。

かぎ-あな 鍵孔 (名) 鍵を差し入るために、錠に明けたる穴。

かぎあな-かくし 鍵孔隱 (名) 扉などの鍵孔を覆ひ隱すための飾金物。

かぎ-あはす 掻合 (他動四) 一手にて寄せ合はす。つくろふ。徒然草「又問はれて、袖かきあはせて、いかが候らん」二琴・琵琶などの絃を掻きて、調子をあはす。宇津保中國「うへは、きんの琴かきあはせつつ、ずんぜさせ給ひつつきこしめす」同初音「しやうの琴つかうまつりつ、あてこそは琵琶をなん、少しかきあはせらるる」

かぎ-あはせ 掻合 (名) 掻きあはすること。源少女「琴中略かきあはせなどひきすさび給ひて、おしやり給ひつ」

かぎあはせ-ぬり 柿合塗 (名) 赤塗法の一種。色を著け、柿澁を塗りたる上に上塗を施すもの。

かぎ-あはせる 掻合 (他動下一) かきあはす(掻合)の口語。

かぎ-あふ 掻合 (自動四) あつまる。つづく。落窪「二人の郎のさうぞくいささかなるひまなく、かきあひ縫はせ給へば」

かぎ-あぶ 掻敢 (他動四) 涙を拭ひおほす。玉葉「頃もうし初かりがねの玉づさに、かきあへぬものは涙なりけり」

かぎ-あへ 掻壓 (名) ぬたなるべし。狂言「鱠中略鱧中略うはみ・したみがある。是れをさっとかきあへにして振る舞はう」

かぎ-あみ 垣網 (名) 魚を本網又は或る場所に導き入るるために、前方、水中に張り設くる網。そであみ。

がぎ-あみ 一餓鬼阿彌 (名) (餓鬼阿彌陀佛の略。古淨瑠璃の小栗判官に、相模國藤澤寺なる小栗判官の塚割れて餓鬼の現れけるを、上人、餓鬼阿彌陀佛と名を命じ、車に乘せ熊野に浴して、終ひに蘇生することを得しめたる物語より來たれる語)餓鬼の蘇生せんとして、未だ生氣なきもの。轉じて、癩病患者。古淨瑠璃小栗がきあみと諸共に熊野本宮の湯に入って、やまふ平ゆう仕り、なれの果てが見たいよな」傾城反魂香「(中略)身を旅籠屋の水棚の、はしに目鼻のがきあみを、夫れとは史にしら絲の、緣はきたなき土車」

がぎあみ-ぐるま 餓鬼阿彌車 (名) 餓鬼阿彌を乘せたる車。古淨瑠璃小栗がきあみぐるまを御覽じて、胸の木札を見てあれば、萬僧供養と書いてあり」

かぎ-あやまり 書誤 (名) 書きあやまること。かきそこなひ。誤寫。

かぎ-あやまる 書誤 (他動四) かきそこなふ。書き損ずる。誤寫。

かぎ-あらたむ 書改 (他動下二) 改めて書く。書きかふ。

かぎ-あらたむ 掻改 (他動下二) あらたむ(改)に同じ。源若菜「やり水のみ草もかきあらためて、いと心ゆきたるけしきなり」

かぎ-あらためる 書改 (他動下一) かきあらたむ(書改)の口語。

かぎ-あらはす 書現 (他動四) 書きて狀態を明かにす。

かぎ-あらはす 書著 (他動四) 書物を書きて、世に公にす。著述す。

かぎ-あらふ 掻洗 (他動四) あらふ(洗)に同じ。宇治拾遺「手かきあらひて、はせの御方に向かひて」

かぎ-ありく 掻歩 (自動四) ありく(歩)に同じ。源竹川「夜ひと夜、ところどころにかきありきて、いとなやましうくるしくて臥したるに」

かぎ-いた 掻板 (名) 一裁ち物に用ふる板。或ひは、きぬたの板。類聚名物考 一說、坐右に置きて、物を裁ち切りなどする板。又は種種に用ふる板をいふなるべし。絵詞 江次第四、鳥第一「硯宮中略註件宮入中略板」めのとの草紙「御ぞたち縫ふ事中略掠候」桑の物さしに、柳のかきいたを御用ひ候」二元服の時用ふる具。柳の木の板を以て作る。此の板の上に髮先をのせて切り殺ぐ。貞丈雜記

かぎ-いた 柿板 (名) こけらいた柿板をいふ、大工の語。

かぎ-いだからぶ 掻抱 (自動四) 抱き合ふ。今昔「我が妻此の童と二人、掻き抱からひて臥しぬ」

かぎ-いだく 掻抱 (他動四) いだく(抱)に同じ。かきだく。宇津保「(中略)宮をば肩にかけ奉りて、今ひとところをば、ただにかきいだきておはす」源若菜下「いと小さやかなれば、かきいだきて、さうじのもとに出で給ふにぞ」

かぎ-いだす 書出 (他動四) かきだす(書出)に同じ。

かぎ-いだす 掻出 (他動四) いだす(出)に同じ。かきいづ。宇治拾遺「あの物をかきいだして、腹をそらして、けしけしとおこしければ」

かぎ-いづ 書出 (他動下二) 書きあらはす。かきいだす。枕「あいぎやうなく憎きものは、人人しうかきいづべきものの、やうにあらねど」

かぎ-いづ 掻出 (他動下二) かきいだす(掻出)に同じ。竹取「さが尻を掻き出でて、ここらのおほやけ人に見せて、はぢ見せん」

かぎ-いづ 舁出 (他動下二) かつぎいだす。東三條院瞿麥合「洲濱、おまへにかきいづるわらは四人」

かぎ-いばら 【植】のいばら(野薔薇)の異名。

かぎ-いばら 【植】かぎかづら(鈎藤)の異名。

かぎ-いる 書入 (他動下二) 一書き込む。記入す。狂言「文中略扨も扨も、あいだてない事をかき入れておかれたは」二抵當として、證文に書き加ふ。「家屋を書きいる」

かぎ-いる 掻入 (他動下二) いる(入)(他動)に同じ。宇治拾遺「死に入りたりければ、物にかき入れて、になひてもて行きけり」同「かぶり中略髮をよくかき入れたるに、とらへらるるものなり」

かぎ-いれ 書入 (名) 一かき入ること。又、書き加へたるもの。かきこみ。記入。二抵當。ひきあて。華族世襲財産法第十「世襲財産及び附屬物は之を賣却譲與又は質入と爲すことを得す」三是れと豫期すること。「其の日を書入れにして待つ」「かきいれで所望する」

かぎ-いれ 掻入 (名) 掻きいるること。

かぎ-いれ 除入 (名) 船の壹本水押(ヒオシ)の名所。

かぎいれ-どき 書入時 (名) 書入(ヒオシ)としたる時期。

かぎいれ-び 書入日 (名) 書入(ヒオシ)としたる日。

かぎ-いれる 書入 (他動下一) かきいる

（書人）の口語。

かさ-いれる　掻入（他動下）かきいる（掻人）の口語。

かさ-いろ　柿色（名）一柿澁にて染めたる如き赤茶色。二代赭色（タイシヤ）の濃きもの。

かさいろ-がみ　柿色紙（名）柿色の紙。伊豆國修善寺近傍より產す。

か-さう　一家斎（名）〔家斎の字音かきうなれど、普通にかちくとよむ〕かちく（家斎）に同じ。謝靈運文藝傳坑「孰是獸慰、程鄭趙李、家斎金紺、才練藝技」

かさ-う　掻得（他動ア）かきあつめう。新續古今和歌の浦ぢの玉藻をも、かきえぬ程はかなさに」

かさ-うだく　掻抱（他動ア）かきいだく（掻抱）に同じ。かきむだく。名義抄「勒（カキウダク）」

かさ-うち　垣内（名）垣のうち。かきつ。新六帖二「山かづの岡の雪まのかき内に、心せばくも若菜つむらん」

かさ-うち　缺打（名）〔建築〕一つの木を、他の木の幅ほど切り缺きて取り附くる方法。

かさ-うち　牡蠣打（名）生きたる牡蠣殼を割き開くに用ふる具。

かさ-うちば　柿團扇（名）〔柿澁團扇の略〕しぶうちは（澁團扇）に同じ。雄長老狂歌「大きなるかき團扇がな二三本、貧乏神をあふぎいなさん」

かさ-うつす　書寫（他動サ）書きとる。寫しとる。枕二「古今あまたかきうつしなどする人は」

かさ-うり　柿賣（名）柿の實を賣るを業とする人。狂言柿賣「眼り出でたるは、丹波の國（ぐり谷の柿うりで御ざる」

かさ-えきす　牡蠣越幾斯（名）牡蠣をえきすにしたるもの。

かさ-おき　書置（名）一遠方に去らんとする時、又は訪問して其の人の不在なる時などに、用事を書き遺しおくこと。又、其の文書。おきてがみ。二死後のため書き遺すこと、又、其の文書。遺言狀。遺書。狂言名山「いざ、かきおきをして死ぬまいか」

かさ-おく　書置（他動ア）書きて、後にのこす。記し留む。竹取「文を書きおきて罷らん」勢語「この男、かく書き置きたるを見て」

かさ-おくび　鉤衽（名）裁縫の語。衽の裁ち方。袖・身頃・襟を取りたる殘りを、鉤に裁ち落とすこと。

かさ-おくり　掻送（名）掻きおくること。

かさ-おくる　書送（他動ア）用事を書きて人に送る。

かさ-おくる　掻送（他動ア）櫂にて水を掻きて舟をやる。

かさ-おこす　書致（他動ア）書きてよこす。

かさ-おこす　掻起（他動ア）手にて動かしおこす。源夕顔「此の御傍の人を、かきおこさんとすると見給ふ」

かさ-おとし　書落（名）かきおとすこと。かきおとしたるもの。

かさ-おとす　書落（他動ア）書き誤りて、字また句などを脱かす。書きもらす。源少女「うちうちの事なれば、數多にも流れずやなりにけん、又かきおとしてけるにやあらん」

かさ-おとす　掻落（他動ア）かき切りて落とす。太平記三十三「北面の腰の刀を抜いて、御首を掻き落としけり」

かさ-おどろかす　掻驚（他動ア）一おどろかす（驚）に同じ。二かきたてて火氣を盛んならしむ。堀河百首冬「ねざめしてかきおどろかすうづみ火ぞ、冬の夜ふかき友にはありける」

かさ-おぶ　掻負（他動ア）背負ふ。更科日記「此の宮をかきおび奉りて、七日七夜といふに、武藏の國にいきつきにけり」

かさ-おぼす　書課（他動ア）かきをはる。書きはつ。源夫木花「みちの國紙のあつごえたるに中略いとようかきおぼせたり」

かさ-おぼす　賭果（他動ア）賭事（ヌカヒ）をして勝利を得。著聞三「七半中略よき程に一貫をおし出だしてかくに、又かきおぼせて二貫になりぬ」

かさ-およぶ　書及（他動ア）書き得。書き能ふ。源明石「心のいたり少なからん繪師は、かきおよぶまじと見ゆ」

かさ-かい　一餓鬼界（名）がきだう（餓鬼道）に同じ。

かさ-かうしぶくわい　一夏期講習會（名）夏期に開き催す講習會。

かさ-かぞぶ　掻數（他動ア）かぞふ（數）に同じ。萬八「秋の野に咲きたる花を、手折りつつ可伎數（カカヒカ）ば七くさの花」

かさ-かぞぶ　掻數（枕）かぞふといひて、數の二のふたにかけていふ。萬十「可伎加蘇布（カカフ）ぶたかみ山に、かむさびてたてるつがの木」

かさ-かた　書方（名）一書くべき仕方。書きやう。二うんぴつ（運筆）に同じ。三習字。

かさ-かづら　鉤藤（名）〔植〕西草科、鉤藤屬の草本。蔓莖を有し、葉腋に在る曲鉤によりて他物に攀緣す。葉は對生、卵形鋭頭。夏日、小形黄褐色の花を開き、球形の花序に排列す。我が國、唆地に自生す。かぎいばら。かぎづる。かぎのつる。からすのかぎづる。

かさ-かつを　掻鰹（名）鉋又は小刀などにて、掻き取りたる鰹節。

かさ-かね　繋金（名）戸などの締りに用ふる環また鉤（ホク）。かけがね。かすがひ。濱松七「かきがねの穴をさへふたぎて」簾中舊記「御格子のかきがねは、あしたとく御はづし候うて、よる御格子參らせ候へば御かけ候」

かさ-かはす　書交（他動サ）書きて取りかはす。手紙など、とりやりす。源帚木「ほどほどにつけて、書きかはしつつも見侍りなん」

かさ-がひ　牡蠣貝（名）かきがら（牡蠣殼）に同じ。記上「夏草のあひねの濱の加岐賀比（カキガヒ）に足蹈ますな、あかして通れ」蜻字紙

かさ-かぶ　書替（他動ア）書きあらたむ。かきなほす。源夕顔「御たたう紙に、いたうあらぬさまにかきかへ給ひて」

かさ-かへ　書替（名）一書きかふること。書きなほし。二已に効用を失ひたる證書などに代へて、新たに證書を作成し、舊證書と同樣の効力を付與すること。

かさ-かへ　掛替（名）かけかふること。かけがへ。一代男七「ふんどしのかきかへもなき人、ゆく所にあらず」

かさ-かへす　掻返（他動ア）一くりかへす。右京太夫集「その折りとありし、かかりし折り我が云ひし言のあひしらひ、何かと見ゆるが、かきかへすやうにおぼゆれば」二くりかへして掻きならす。源手習「たけふちちりちりたりたんなな

ど、かきかへし、はやりかに彈きたり」

かさ-かへ-ぶさぎやう　書替奉行（名）きりまいてがたあらためやく（切米手形改役）に同じ。

かさ-かへる　書替（他動ア）かきかふ（書替）の口語。

かさ-がみ　柿紙（名）一柿色の紙。二柿澁をひきたる紙。しぶがみ。三河物語「天日熱きとて、かきがみをかぶりて、我れ等にも不『出合』して臥せりて有るに」

かさ-がら　牡蠣殼（名）牡蠣（カキ）の貝がら。東海道名所記「その木像には、かきがらびしと取りつきて」

かさ-がらばひ　牡蠣殼灰（名）牡蠣の殼を燒きたるもの。石灰に代へて用ふ。又、蛤の殼を燒くもあり。かきばひ。かひいしばひ。かびばひ。

かさ-がら-ぶき　牡蠣殼葺（名）かきがらを屋根に載せおくこと。又、其の屋根。

かさ-がら-やね　牡蠣殼屋根（名）かきがらぶき屋根並びに月役といふ村木の事」「牡蠣殼屋根並びに月役といふ村木の事」大鏡冠二「この浦の牡蠣殼屋根も福福と、人の羨む老人は」

かさ-かる　掻刈（他動ア）古語。刈りとる。記上「山三尾之竹矣、本訶岐刈（カリ）、末押縮魚簪」

かさ-さらす　掻霧（自動ア）かき曇る。かきくらす。萬八「掻霧之（カキサ）雨のふる夜を、ほととぎす鳴きてゆくなる、あはれ其の鳥」

かさ-さり　鍵桐（名）紋所の名。かぎ（鍵）を見よ。

かさ-さる　掻切（他動ア）刃を內へ向けて、物を切る。平家四資盛「痛手餘多負ひ、腹掻き切って死ににける」狂言鶯「頸かききりて見てあれば」

かさ-ぐすり　嗅藥（名）嗅（ま）ぎ込む藥（飲藥などの對）

かさ-くだし　書下（名）一かきくだすこと。二矢條の略。竹崎五郎繪詞「かきくだしの狀にも載せられ候べき旨、つねすけ（申し候所に、さきの一段は、しさいを申し上げ」

かさ-くだし-じやう　書下狀（名）鎌倉時代、執筆奉行の奉書。かきくだし。かきくだしじやう。

かさ-くだし-ぶみ　書下文（名）前條に同じ。

かさ-くだす　書下（他動ア）一細を追ひて、下（書きゆく。二半に任せて、粗末に書く。三書下狀を書く。東鑑一、治承四年「以本知行地主職（如本可執行之由、蒙下知」中略土肥次郎實平爲奉行、邦通書下之」

かさ-くづし　書崩（名）一字畫を省略して書くこと。くづし。二草體に書くこと。

かさ-くづす　掻崩（他動ア）一破り散らす。くづす。宇津保俊蔭「かみな月しぐれにもみぢかきくづし、とどまる木の葉まれなり」二片はしより、殘りなくもの心づかひ、後の世を勤むるさま、かきくづし聞こえて」狭衣四「月ごろ少しおぼしまぎれわる心の中も、かきくづしおぼしつづけて」

かさ-くどく　掻口說（自動ア）くどく（口說）に同じ。平家三有王「さめざめと掻口說きければ」盛衰記五有王「首を一所に並べんと、掻詢（カキ）いひければ」

かさ-くばふ　書加（他動ア）かきたす。かきそふ。

かさ-くはへ　書加（名）かきくはふること。又、書き加へたるもの。かきたし。

かさ-くはへる　書加（他動ア）かきくはふ（書加）の口語。

かさ-くび　掻首（名）首をかき切ること。又、其の首。平治「押さへて掻首にぞしてける」

かさ-ぐひ　垣杭（名）垣を結びつくる杭。狂言瓜盜「まづかきぐひを抜かう」

かさ-くもらかす　書曇（他動ア）次條に同じ。平家代官「何となき御手まさぐりのついでに、書き曇らかさせ給ひしが」

かさ-くもらす　書曇（他動ア）書きて、紙などを黑くす。

かさ-くもる　掻曇（自動ア）くもる（曇）に同じ。古今雜五「月夜にはこぬ人まつとて、かきくもり雨もふらなん、わびつつも寢ん」枕十「さえつる空の、いと暗うかきくもりて」

かさ-くらがる　掻暗（自動ア）くらがる（暗）に同じ。かきくる。和泉式部集「天の原かきくらがりてふる雪を、夜目には明かき月かとぞ見る」

かさ-くらす　掻暗（自動ア）かきくる。かきくらがる。くらむ。古今雜三「かきくらしふる白雪の下ぎえに、きえて物思ふ頃にもあるかな」勢語「かきくらす心の闇にまどひにき、夢うつつとは今宵さだめよ」

かさ-くらむ　掻暗（自動ア）くらむ（暗）に同じ。

かさ-くる　掻暗（自動ア）一くらくなる。かきくらす。かきくらがる。源須磨「俄かに風吹き出でて、空もかきくれぬ。御祓もしはてずたち騷ぎたり。ひぢかさ雨とかふりきて」二心くらむ。源若菜上「きし方行くさきかきくれて、悲しくとどめ難く思きまるれば」新千載雜中「たらちねのあらばといとどかきくれて、涙に迷ふ敷島の道」

かさ-くる　掻繰（他動ア）かいくる（掻繰）に同じ。國姓爺四「駒の手綱を掻き繰って、輪乘りをかけて、くるくるくるくるくるりくるりと乘りまはし」

かさ-けがす　書穢（他動ア）書き損ふ。書き亂す。枕「例いとよく書く人も、あいなく皆つつまれて、かきけがしなどしたるもあり」源若菜「あはれなるふる事どもも、からのもやまとのも、書きけがしつつ」

かさ-けす　書消（他動ア）書きて又其れをけす。かきけがす。かきけつ。

かさ-けす　掻消（他動ア）けす（消）に同じ。かきけつ。かいけす。謠弱法「老翁は、かきけすやうにうせにけり」

かさ-けつ　書消（他動ア）かきけす（書消）に同じ。源浮舟「ふり亂れみぎはにこほる雪よりも、中空にてぞ我れはけぬべき。とかきけちたり」

かさ-けつ　掻消（他動ア）かきけす（掻消）に同じ。かいけつ。源椎本「とだえおき侍りし程に、跡を無くこそ、かきけちてうせにしか」

かさ-ごし　垣越（名）垣根の隔てを越すこと。かきねごし。後撰春上「垣ごしに散りくる花を見るよりは、根ごめに風の吹きもこさなん」

かさ-ごし　舁輿（名）肩に上げて舁く輿。

かさ-こす　書越（他動ア）書きておこす。一代女「初通よりして、文章、命も取るほどに、次第次第にかきこしぬ」

かさ-こす　掻越（他動ア）うしろの方へ垂れたる髮などを、前の方へ振りこす。

かいこす。金葉雜上「物いひける女の、髪をかきこして見けるをよめる」

かき-こなす 抄「攪ヲカキコナス」 (他動四) かきみだす。名義

かき-こはす 搔壞 (他動四) 爪にて搔きてくづす。

かき-こみ 書込 (名) 書きこむこと。書き込みたるもの。書入れ。

かき-こむ 書込 (他動四) かきいる(書入)に同じ。

かき-こむ 搔込 (他動四) 一已れの方へ搔きて寄す。己れの許に搔き集む。二飯など急ぎて食ふ。源氏冷泉節上「道中の十文盛り、搔き込んだばかりで、宿へ著いても、藥師如來ぞ、茶もたべずに驅け附けた」

かき-こむ 搔籠 (他動下二) こむ(籠)に同じ。夫木雜「春霞うちかきこむる絕えまより、夕浪白し志賀の花山」

かき-こむ 嗅込 (他動四) 一鼻に嗅ぎ入る。二かぎつく(嗅附)に同じ。

かき-こもる 搔籠 (自動四) こもる(籠)に同じ。榮華花山「大將殿も内へ參れば、胸痛しとて、かきこもりゐ給ひぬ」金葉雜上「ゆくへなくかきこもるにぞ、ひきまゆのいとふ心のほどは知らるる」

かき-ざき 鉤裂 (名) 衣服などを、釣の尖などに引きかけて裂くこと。又、其の裂けめ。

かき-さく 搔裂 (他動四) 爪にてひきかきて裂く。ひきさく。大藏狂言「鬪ひたりならば、かきさかいてのけう」

かき-さぐる 搔探 (他動下二) さぐる(探)に同じ。かいさぐる。神代紀上「畫成(カキサグ)」續日本紀「盧島」萬「いめの逢ひはくるしかりけり、おどろきて搔探(カキサグ)ども手にも觸れねば」

かきさけびん 搔下鬢 (名) 男子の結髮の一。下文を見よ。幾芳環「男の相應の生れつきにて、前髪のあるうちは、おさへ元結とて、頭の上より元結を掛け、左右へ分けて、耳の後より下げ、髮結はする人が兩手にておさへて持つ。是れは搔下鬢とて、若衆はもみあげの所へ鬢を搔き下げ、夫れより丸く上へ搔き上げて、扨髪を其の好み次第に結ひたり」

かき-さす 搔指 (他動四) 書きかけて、中止す。源總角「かきさしたるやうに、いとみだりがはしくて」

かき-さま 書樣 (名) 書きたるさま。かきやう。源椎本「ぬる夜なければなど、目も及ばぬ御かきざまも」

かき-さます 搔覺 (他動四) さます(覺)を强めていふ。榮華初花「御修法つかまつりけるに、あさましうおはしましける御ここち、かきさましおこたらせ給ひぬ」

かき-さます 搔冷 (他動四) さます(冷)を强めていふ。榮華雜上「殿ばら・宮宮歸らせ給ひにしかば、御堂かきさましたるやうになりしかば」

かき-さらふ 搔浚 (他動下二) 遽かに手にてひき奪ふ。かっさらふ。心中刃氷朔日「搔きさらへ、ひんだかへて奥へ入る」

かき-しく 搔敷 (他動四) しく(敷)に同じ。新千載雜上「もしほぐさかきしくあまの床を見て、くらさば宿と輕むはかなさ」

かき-しぐる 搔時雨 (自動下二) かきしぐれふる雨に、時時まじる雪の寒ぎさ」

かき-しば 垣柴 (名) 垣に結ひたる柴。金葉雜上「いかにせん山田にかこふかきしばの、しばしのまだにかくれなき身を」夫木「おしねほすいほのかき柴、風たちて時雨しらるる秋の山里」

かき-しぶ 柿澁 (名) 澁柿より搾り取りたる汁。之を一番澁また生澁(ジブ)といひ、其の滓に水を加へて、再び搾り取るを二番澁といふ。紙・木・麻などに塗りて腐朽を防ぐ。幾芳環「かきしぶに砂糖を入れて摺りまぜて」柿漆。

かき-じぶ 鉤十 (名) 徽號の一。刊の形したるもの。萬葉千紅「かぎじぶの家内の外は世の人の、下戸ならぬこそをのこはよけれ」

かき-じゃうゆ 牡蠣醬油 (名) 醬油の一種。牡蠣を煮て得たる汁にて製したるもの。

かき-しゃなぐる (他動四) 搔きむしる。曾根崎心中「つかみつき、搔きしゃなぐり、撲てど叩けど」

かき-しらぶ 搔調 (他動下二) しらぶ(調)に同じ。

かき-しる 嗅知 (他動四) 香をかぎて、其れと知る。枕「牛のしりがいのかの、あやしうかぎしらぬさまなれど」

かき-しるす 書記 (他動四) かきつく。しるす。續後紀「もろこしの詞をからず、書記(カキス)博士雇はず」

かき-しろ 垣代 (名) 垣の代りとするもの。かこひ。草根集「春の田の苗の垣代いくし立て、鳥驚かすしめのゆふしで」

かき-じろ 垣城 (名) 柵など結ひ廻ぐらして、城の構へとせしもの。一說、搔揚城(カキアゲ)の略か。鴉鷺合戰物語「森の木どもをかき城にとりて、鹿垣ゆひて矢倉あげ」

かき-すう 舁据 (他動下二) 輿・駕籠など、舁き來たりて置く。据ふ。枕「淀の渡りといふものをせしかば、舟に車をかきする てゆくに」平家三「大講堂の庭に御輿舁き居ゑて、大衆また會議す」

かき-すくぶ (他動四) すくひとる。すくふ。宇治拾遺「うしろよりかきすくひて、飛ぶやうにして出でぬ」

かき-すくむ (他動下二) 縮めて短き文に書く。かきちぢむ。源帚木「まんなを走り書きて、さるましきどもの女文に、なかば過ぎてかきすくめたる。あなうたて、此の方のたをやかならましかばと見ゆかし」

かき-すさぶ 書遊 (他動四) なぐさみに書く。源紅葉賀「扇中務森の下草おひぬればなど、かきすさびたるを」

かき-すさぶ 搔遊 (他動四) なぐさみに搔きたつ。弄ぶ。枕「火箸して、灰などかきすさび」

かき-すつ 書捨 (他動下二) 一書きたるまま打ち捨つ。二なげやりに書く。

かき-すつ 搔棄 搔捨 (他動下二) すつ(棄)に同じ。枕「雪中雜きたなげならんはかきすててなど、云ひくくめて」字鏡「件搔棄(ウチ)不文(ヒ)基(ヒ)加支須」

かき-すて 書捨 (名) 一書きすつること。又、其の物。川中島合戰三「書捨の反古を集め」二かきおき(書置)に同じ。古狀揃「西塔武藏坊辨慶、最後書捨之一通」室町千疊敷「書捨ての玉章千束に積もり、胸に思ひの滿つる折りしも」

かき-すて 搔捨 (名) 恥など搔きても、其のままにすること。「旅の恥はかきすて」

かき-すて-ぶみ 書捨文 (名) 書き捨てたる文。松風村雨束帶鑑「讀み捨て見捨てすきみて、書き捨て文の數數の」

かき-すます 書濟 (他動四) 念を入れて書く。立派に書く。著聞「草の額、殊に書きすましておぼえけるが、叡慮にかなひて」

かき-ずみ 鉤墨 (名) 【建築】墨さしにて、木材などに直角に引きたる線。

かき-すゑ-やかた 舁据屋形 (名) 小舟などに据ゑ附くる簡略なる屋形。又、其の舟。平家三「橋大納言」「けしかるかきすゑ屋形の舟に、大幕引かせ」

かき-すゑる 舁据 (他動下二) かきすう(舁据)の口語。

かき-そ 柿麻 (名) 柿色の布子。僧言集覽

かき-そこなひ 書損 (名) 書き損ふこと。又、そのもの。かきあやまり。書損(ソコ)。

かき-そこなふ 書損 (他動四) かきあやまる。書きそんずる。源若菜「かきそこなひつと、はぢてかくし給ふを」

かき-そこなふ 搔損 (他動四) 引き搔きて破る。かきやぶる。宇津保藤原「いみじき御いさかひあり て、御ぞ引きやられ、よろづの所かきそこなはれ給ひて」

かき-そふ 書添 (他動下二) 書き加ふ。書きたす。源藤「わが御手にいとよく似て、今すこしなまめかしう女しき所、かきそへ給へり」同末摘花「繪中略我れもかきそへ給ふ」

かき-そふ 搔添 (他動下二) 一そふ(添)他動に同じ。二手をそへて搔き撫づ。爲忠百首上「ほの見えし尾花すゑなるいもが髪、いづゆるるかにかきそへて見ん」

かき-そへ 書添 (名) 書き添ふること。書き添へたるもの。

かき-そへる 書添 (他動下二) かきそふ(書添)の口語。

かき-そめ 書初 (他動下二) 書き始む。書きだす。

かき-そめ 書初 (名) 新年に、始めて文字を書くこと。又、其の書き物。

かき-そめ 柿染 (名) 柿色に染むること。又、その染めたる物。狂言五「かちんや、淺黃や、はりの木染に柿染」

かき-そんじ 書損 (名) かきそんずること。源若菜「かきそこなふ(書損)に同じ。

かき-そんず 書損 (他動サ變) かきそこなふ(書損)に同じ。

かき-た 垣田 (名) 古語。禽獸の害を防ぐため周圍に垣を周らしたる田。日本紀神代紀上「天垣田(カキ)」

かき-だ 牡蠣田 (名) 竹また柴などにて海中に垣根を結び、牡蠣を附著せしめて養殖する處。

がき-だいしゃう 一餓鬼大將 (名) いたづら小供の頭。坂東太郎「赤貝のからや乘り始め餓鬼大將」僧言集覽

がき-だう 一餓鬼道 (名) 佛語。六道の一。地獄に次ぎて苦痛多き處とす。餓鬼界。盛衰記「有三「生きながら餓鬼道に落ち給ひたるやらん」

かき-たえ 搔絕 (副) たえて。うちたえて。一向に。源葵「さりとて、かきたえ又晉なひきこえざらんもいとほしく」同朝顏「かきたえ、なごりなきさまにはもてなし給はずとも」

かき-たく 搔抱 (他動下二) いだく(抱)に同じ。かきいだく。著聞十「時弘をかきだきて、地に投げふせたりければ」

かき-たくる 搔むしる。(他動四) かく(搔)を强めていふ。かきむしる。孕常磐「爪を立てて、何處も彼處も搔いて搔いて搔きたくり、ひりひりさせて」

かき-たし 書足 (名) かきたすこと。又、其の字句。かきくはへ。

かき-たし 書出 (名) 一書きだすこと。書き始め。大藏狂言「文山「まづ書出しを、扨も扨もと書いた」二芝居の番附など。

かき-たて-ぐび 搔立杭 (名) 前條に同じ。

かき-たて-じる 搔立汁 (名) おとし味噌の汁。心中曾庚申「飯は赤まじりのひね臭いをすっくりと挾かせ、かきたて汁に小菜の浮かし」

かき-たて-づゑ 搔立杖 (名) とうしんおさへ(燈心押)に同じ。

かき-たて-ぼう 搔立棒 (名) 前條に同じ。

かき-たて-もくろく 書立目錄 (名) 一つ書きに記したる目錄。榮華後宴「さべき御領の所所、さべき御寶物どもの書立て目錄せさせ給へりけるを」

かき-たて-る 書立 (他動下二) かきたつ(書立)の口語。

かき-たて-る 搔立 (他動下二) かきたつ(搔立)の口語。

かき-たばこ 嗅烟草 (名) 碎きて粉とせる烟草。火をつけず、烟を吸はず、唯、鼻にて香を嗅ぐものの。

かき-たむ 書溜 (他動四) 種種の事を書きてためおく。風雅雜下「書きたむるいにしへ今の言の葉を、殘さず君に傳へつるかな」

かき-たゆ 搔絕 (自動下二) うちたゆ。絕ゆ。源帚木「猶いとかきたえて思ふらんことのいとほしく」後拾遺三「くもでさへかきたえにける、ささ蟹の命を今や何にかけまし」詞花雜下「同じ所なる男の、かきたえにければよめる」

かき-たる 搔垂 (自動四) 古語。次條に同じ。觀詞式祭年「手監水沫畫垂(カキタリ)、向股泥畫寄垂」萬九「くれなるのおもての上に、いづくゆか鑛何伎多利(カタリ)し」

かき-たる 搔垂 (自動下二) たる(垂)自動に同じ。六帖「かきたれてふる白雪の君ならば、あなめづらしといはましものを」

かき-たて-ぎ 搔立木 (名) とうしんおさへ(燈心押)に同じ。

かきたる　掻垂（他動下）一垂るるやうにす。垂らす。萬葉「かぐろなる髪を、ま櫛もてここに敏寸垂」二櫛もてけづり垂らす。

かきたる　書垂（他動下）古語。乗れたるさまに書く。記「まよがき、こに加岐多禮」、遂はししをみな」

かきちゃ　嗅茶（名）飲まずに、香氣を嗅ぎて茶の善惡を辨ふること。雅建醉狂集夏「嗅茶」建鼎苑、揉鼎彼鱉田」犬子集「はながあれば名もおのづからかぎ茶かな」

かきちらし　書散（名）かきちらすこと。又、其の書き物。

かきちらす　掻散（自動四）散る。夫木「かきちらし花とのみふる白雪は、雲の都の玉の散るかも」

かきちらす　書散（他動四）筆に任せて書く。順序を正さず書く。天網島「阿房狂ひする者の起請誓紙は、方方先先、書出しほど書き散らす」

かきちん　書賃（名）書き物をなしたる勞力の報酬。書き物の手數料。

かきつ　垣内（名）垣根のうち。垣うち。萬「わがせこがふるき可吉都」の櫻花いまだふふめり、一目見にこね」同「鶯の鳴きし可伎都」に匂へりし梅、此の雪にうつろふらむか」

かきつ（名）【植】かきつばた（燕子花）の略。

かきつかばな（名）【植】はげいとう（雁來紅）の異名。

かきつかむ　掻摑（他動四）つかむ（摑）に同じ。大鏡狂言文藻「亂れ髪を掻き摑んで、頭をかけどもかかれず」

かきづき　柿糕（名）餅米に干柿をまぜて搗き、蒸して製したる餅。また、皮と種とを去りたる熟柿を麥こがしにまぜて、團子の如くしたるもの。

かきつさけ　柿月毛（名）馬の毛色。こうばいつきげ（紅梅月毛）に同じ。大日經疏「馬月毛」

かきつく　掻附（自動四）一とまり附く。とりつく。記下「たこむらに、あむ加岐都岐」二取りすがる。たよりつく。源氏「いとどかきつかん方なく、悲しげにながめすごし給ふ」散木集「ささがにのいとさる身とはならずとも、しばしかきつく方を知らばや」千載「うち出でていふとも誰れか、ささ蟹のいかさまにてもかきつかん」三とり附きて引きかく。徒然草「猫また中略足のもとへふと寄りきて、やがてかきつくままに、頸の程を食はんとす」狂言「猿聟」猿中略これはなぜにかきつく」

かきつく　書附（他動下）記しおく。書きとむ。萬「ま鳥棲むうなての森のすがの根を、きぬに書付（かきつけ）させむ子もがも」拾遺「書きつくる心見えなるあとなれど、見てもしのばん人やあるとて」

かきつく　掻附（他動下）髮など、なでつく。續詞花「草枕ねくたれ髪をかきつけし、その朝顔の忘られぬかな」

かきつく　嗅附（他動下）一にほひを嗅ぎだす。二其れと心づく。探り當つ。

かきつくす　書盡（他動四）殘りなく書く。源氏「梅枝」「さうのも、ただのも、女手をいみじうかきつくし給ふ」新古今「陸奥のいはでしのぶはえぞ知らぬ、かきつくしてよ壺のいしぶみ」

かきつくる　掻造（他動四）つくる（造）に同じ。月詣集「あたらしや賤の柴垣かきつくる、たよりにたつる玉の小柳」

かきつくろふ　掻整（他動四）つくろふ（整）に同じ。尚齋會記「鶴の羽かきつくろひしうれしさは、しかありけりな龍の苑にも」

かきつけ　書附（名）書きつくること。又、其の文書。榮華「花こや、をりびつものなど、殿上人などにの給はせたれば、皆書附をしつつ參らせたり」宇治拾遺「此の書附は何の料のかきつけぞと問へば、薄打ち、かき附も候はず、何の料の書附かは候はんとい（へ）ば」

かきつける　書附（他動下）かきつく（書附）の口語。

かきつける　嗅附（他動下）かぎつく（嗅附）の口語。

かきつた　垣内田（名）園ひの内にある田。萬「かみなびの清きみたやの、垣津田の池のつつみの、ももたらずいつきが枝に」

かきつたぶ　書傳（他動下）書きて後に傳ふ。續拾遺「いにしへの流れの末のたえぬかな、かきつたへたる水莖の跡」

かきつたへ　書傳（名）書きつたふること。書き傳へたるもの。

かきつたへる　書傳（他動下）かきつたふ（書傳）の口語。

かきつづく　書續（他動下）つづけて書く。かきつらぬ。源氏「よろこびきこえ給ふさま、かきつづけんもうるさし」

かきつづく　掻續（他動下）つづく（續）に同じ。源氏「古への事ども、かきつづけおぼし出でられて」

かきつづける　書續（他動下）かきつづく（書續）の口語。

かきつ-に（名）古語。あをに（青土）に同じ。常陸風土記「所有土、色如青紺、用畫麗之」

かきつ-ばた　燕子花（名）一【植】蒿尾科。蒿尾屬の多年生草本。長き根莖を有す。葉は劍狀、長さ二三尺、中肋無し。花は葉間より抽出せる花莖の頂端に生じ、大形、青紫色又は白色の二層の花被を有し、初夏開く。我が國、各地の池沼・濕地に自生す。觀賞用として栽培せらる。かいつばた。かほよぐさ。かほよばな。しきざきかきつばた。萬「加吉都播多（かきつばた）きぬにすり附け、ますらをのきそひ狩りする月は來にけり」和名「劇草。蘇敬曰、劇草、一名、馬蔺（加岐豆）杜若。二襲の色目の名。表は二藍、裏は萌黃。物具裝束抄「女房の五衣には、上の三つは薄色を匂はせ、次の二つは青の濃淡。單は紅。雅亮裝束抄「四月用ふ。榮華根合「女房の裝束中略あぶち・なでしこ・かきつばたなど」三かきつばたいろ（燕子花色）の略。四紋所の名。かきつばたの花・だきかきつばた。なかやまかきつばし・ふたつかきつばたのまる・まるにまむきかきつばた・むすびかきつばた等の種類あり。

かきつ-ばた　燕子花（枕）かきつばたは花の匂ひやかなる物なれば、にほふにかけていふ。萬「我れのみやかく戀するらむ、垣津旗（かきつばた）にほへる妹はいかにあるらむ」

かきつばた-いろ　燕子花色（名）燕子花の花の色。賀陽院水閣歌合「地敷三重杜若色、浮雲令蒼以紫雨降煙文」上屋幕十天「紫雨降煙文」紫色、紫丸、紫九

かきつばた-の-はな　燕子花花（名）紋所の名。かきつばた（燕子花）を見よ。

かきつばたびし　燕子花菱（名）紋所の名。

かきつばた-むすび　燕子花結（名）緒の結び方の名。

（びすびたばつきか）

かきつはな（名）【植】むさしあぶみ（由跋の異名。和名「由跋加岐都」）

かきつむ　書集（他動四）かきあつむ（書集）に同じ。榮華衣鳥「年頃書きつめさせ給ひける繪物語」新勅撰雜三「かきつむる神路の山の言の葉の、むなしく朽ちんあとぞ悲しき」

かきつむ　掻集（他動四）かきあつむ（掻集）に同じ。源明石「かきつむる物なげかしさ、まぎるる折り折りも侍る」夫木「かきつむるもくづをいかが思ふらん、浪になれたる和歌の浦人」

かきつむ　書詰（他動四）一餘白なきまで、一面に書く。二絶間なく書く。

かきつめる　書詰（他動下）前條の口語。

かきつもる　掻積（自動四）つもる（積）に同じ。夫木「かきつもる濱の松葉は年をへて、こだかく拂ふ風をこそ待て」

かきつ-やぎ　垣内柳（名）古語。垣の内の柳。萬「戀ひしけば來ませ我がせこ、可伎都楊疑（かきつやぎ）うれつみ枯らし、我れ立ち待たむ」

かきつらぬ　掻伴（自動下）ともなふ。つれだつ。かいつらぬ。

かきつらぬ　書列（他動下）書きならぶ。後拾遺「わぎもこがかけて待つらん玉章を、かきつらねたる初雁の聲」

かきつらぬ　掻列（他動下）つらぬ（列）に同じ。源氏「かきつらね昔のことぞおもほゆる、かりは其の夜の友ならねども」

かきつる　掻伴（自動下）つる。つれだつ。ともなふ。源氏「すけだちかきつれ參りて、さまことに今めかしく遊びくらし」

かぎ-づる（名）【植】かぎかづら（鉤藤）の異名。

かきて　書手（名）一書・畫を書く人。又、書きたる人。筆者。傾城反魂香上「書き手も書き手、日利も目利、前代未聞の名人や」二書畫を、巧みに書く人。名筆。

かきて　嗅手（名）香を嗅ぐ人。又、其のよしあしを巧みに區別する人。

かきて（名）かぎのて（鉤手）に同じ。

かきてのごひ　柿手拭（名）澁染の手拭。しぶてのごひ。

かきてん　鉤點（名）かぎ（鉤）に同じ。

かきどうふ　牡蠣豆腐（名）牡蠣に豆腐を交ぜて煮たるもの。

かきどこ　牡蠣床（名）かきだ（牡蠣田）に同じ。

かきところ　民地（名）古語。民の住み居る土地。顯宗紀「民地（かきコロ）」

かきとどむ　書留（他動下）書きて留めおく。かきとむ。記錄す。源氏「かきとどめて、姫君にも見せ奉り給ふべかりけるものを」

かきとどめる　書留（他動下）前條の口語。

かきどほし　連錢草（名）【植】唇形科・連錢草屬の多年生草本。莖性を帶び、莖は方形にして地上を匍匐す。葉は對生、心臟形、鋸齒を有し、葉柄あり。三月頃、紫色の小唇形花を葉腋に束生す。我が國、各地の原野に自生す。藥用に供せしことあり。かいとりぐさ。かんとりさう。ぜにかづら。つぼくさ。

（しほどきか）

かきとむ　書留（他動四）かきとどむ（書留）に同じ。新古今「哀鳥「書きとむる言の葉のみぞみづくきの、流れてとまるかたみなりけり」

かきとめ　書留（名）一書きとむること。又、其の書きもの。記錄。二次條の略。郵便規則第四條十「郵便物は之を書留と爲すことを得但し價格表記と爲したるものは書留と爲すことを得す」

かきとめいうびん　書留郵便（名）特殊取扱郵便の一。郵便物の送達を確實にするため、郵便局所備附の帳簿に、其の郵便物の種類・番號及び發送人と受取人との住所・姓名を登記するもの。電報規則第二條十「書留郵便を以て配達すへき電報」

かきとめいうびん-はいたつ　書留郵便配達（名）電報に用ふる指定事項の一。書留郵便配達電報たることを指定するもの。電報規則第九條十九號「書留郵便配達」

かきとめいうびんはいたつ-でんぱう　書留郵便配達電報（名）著信局所より受信人へ、書留郵便を以て配達する電報。

かきとめいうびんぶつ　書留郵便物（名）特殊取扱郵便物の一。書留郵便の手續による郵便物。書留通常郵便物と書留小包郵便物とに分かつ。各條を見よ。郵便規則第四十二條「書留郵便物」

かきとめ-とづつみ　書留小包（名）次條の略。郵便規則第四十六條「書留小包」

かきとめ-とづつみいうびんぶつ　書留小包郵便物（名）書留郵便の手續による小包郵便物。（次條の對）郵便規則第三十六「書留小包郵便物」

かきとめ-つうじゃういうびんぶつ　書留通常郵便物（名）通常の書留郵便物の稱。（前條の對）郵便規則第三十六「書留通常郵便物」

かきとめる　書留（他動下）かきとむ（書留）の口語。

かきとめれう　書留料（名）書留郵便の料金。郵便規則第四條十五「通常郵便物書留料」

かきともし　掻燈（名）かいともし（掻燈）に同じ。今鏡「宮の内におほとなぶらも奉らず侍りければ、いかにと尋ね給ひけるに、女官ども今のうちに參りて、かきともしする人もなしなど聞き給ふに」

かきとり　書取（名）一書き取ること。又、其の寫したる文。二人の讀む語句又は文章などを、書き取ること。

かきとり　鉛取（名）てんやく（典鉛）に同じ。持統紀「典鉛（トリヤク）」

かきとる　書取（他動四）他の文章又は言語などをうつし取る。寫す。萬「わがつまも繪に可伎等良（トラ）むいつまもか、旅ゆくあれは見つつしぬばむ」

かきとる　掻取（他動四）引き掻きて取る。

かきな（名）【植】一おほがらし（大芥）の異名。二こぶなぐさ（蓋草）の異名。和名「蓋草加岐奈云可乎」

かきなれん　柿暖簾（名）かきのれん（柿暖簾）に同じ。吉原徒然草「小袖より髮かたちまでいみじき女郎、柿なれんの内へぞ入りける」

かきながし　書流（名）書き流すこと。又、書き流したるもの。

かき-ながす 書流 (他動サ) 一筆に任せて、さらさらと書く。深く意を用ひず書く。源氏帚木「筆とどこほらずかきながしたるさま、譬へん方なし」 二書きて後に殘す。新古今雜下「かき流す言の葉だにも沈むなよ、身こそかくても山川の水」 ながす

かき-ながす 掻流 (他動サ) (流)に同じ。拾遺雜賀「動かぬ岸にまもりあげて、沈むみくづのはてはては、かき流されしかみなづき」千載雜二「人知れぬ木の葉の下のうもれ水、思ふ心をかき流さばや」

かき-なす 書成 (他動サ) 書き出だす。書きつく。枕「君をし見ればと、かきなしたるを」源若紫「をさなくかきなし給へるも、いみじうをかしげなれば」

かき-なす 掻成 (他動サ) 古語。かきまはす。かきたつ。記上「鹽許袁呂許袁呂通袁鳴(ナリ)」神代紀上「震(ナリ)沓海」

かき-なす 掻鳴 (他動サ) かきならす(掻鳴)に同じ。古今雜三「秋風にかきなす琴の聲にさへ、はかなく人の戀ひしかるらん」

かき-なづ 掻撫 (他動下) なづ(撫)に同じ。萬三「父母がかしら加岐奈弖(ナデ)さきくあれと、いひし詞ぞ忘れかねつる」同廿「やかた尾のま白の鷹を宿にすゑ、可伎奈泥(ナデ)見つつ倶はくし、よしも」

かき-なで 掻撫 (名・副) 物の表面を撫でたるばかりにて、眞義を知るまでに至らざること。ひとわたり。ひととほり。かいなで。源明石「只今世に名を取れる人人、かきなでの心やりばかりにのみあるを」

かき-なは 鉤繩 (名) 繩のさきに鉤の附きたるもの。人を捕縛するに用ふ。源平布引瀧「用意のかぎなは打ち懸くれば、首に懸かつて、きりきりきり」

かき-なほし 書直 (名) 一かきなほすこと。又其の物。二てんさん(點竄)に同じ。

かき-なほす 書直 (他動サ) 書きかふ。書き改む。

かき-なます 掻鱠 (名) 削りたる大根を入れて作りたる鱠。傾城酒呑童子「朝晩のかき鱠、おつけには何なりと、鯖の附いた燒物」

かき-ならし 掻平 (名) かきならすこと。かいならし。

かき-ならす 掻鳴 (他動サ) 琴などを、彈き鳴らす。かきなす。宇津保俊蔭「前なる琴を、いとほのかにかきならしてゐたれば」

かき-ならす 掻平 (他動サ) 掻きたてて平らにする。日本振袖始「地をかきならし、指を筆、書きつく砂のこまごまは」

かき-ならふ 書馴 (他動下) かきなる(書馴)に同じ。

かき-なり 鉤狀 (名) 鉤の如く、角に曲がれる形。

かき-なる 書馴 (他動下) 書くことに熟練す。かきならふ。源夕顔「かきなれたる手して、口とく返りごとなどし侍る」

かき-なれる 書馴 (他動下) 前條の口語。

かき-にくし 書惡 (形ク) 書くことかたし。書きやすからず。枕「いみじうかきにくく、すまひ申す人人ありける」

かき-ぬき 書拔 (名) 書きぬくこと。又、其の文。ぬきがき。抄錄。拔萃。抄書。

かき-ぬく 書拔 (他動サ) 書中の文の一部又は其の大要を拔きて書く。抄錄す。拔萃す。抄略す。

かき-ぬし 柿主 (名) 柿の樹の持主。

かき-ぬ 垣根 (名) 一垣のもと。二垣。萬三「萱の通ふ垣根(カキ)の卯の花の、うきことあれや、君が來ざぬ」枕三「卯の花中將あやしの家ども、おどろなる垣ねなどに、いと白う咲きたるこそをかしけれ」

かきぬ のやま 垣根山 家近く繞れる山を、垣に見立てていふ語。夫木「わが宿は秋のあはれを籠めがほに、かきねの山に鹿ぞ鳴くなる」

かきぬ-がくれ 垣根隱 (名) かきねに隱るること。又其の處。永久百首「日ざかりは垣根がくれにたちよらで、誰れをこひ草もえたてるらん」 辨内侍日記「雲井までいとともかしこく香ふかな、垣ねがくれの宿の梅が枝」

かきぬ-ぐさ 垣根草 (名) 垣根に生ずる草の總稱。用明天皇職人盡歌合「恐ろし鬼のしこ草に、隔つる中のかきね草」

かきぬ-ごし 垣根越 (名) かきごし(垣越)に同じ。

かきぬ-つづき 垣根續 (名) 續きたる垣根。垣根のつづきたる處。金葉「いづれをかわきて折らまし山里の、垣根つづきに咲ける卯の花」

かきぬ-なでしこ 垣根瞿麥 (名) 垣根にあるなでしこ。夫木「古郷やたれによそへて植ゑおきし、垣ねなでしこ花咲きぬらん」

かきぬ-ならび 垣根並 (名) かきねつづき垣根續に同じ。實國集「山里の垣ねならびの卯の花や、音なし川のせぜのしら浪」

かきの-き 柿樹 (名) 【植】かき(柿)の異名。

かきの-きくわ 柿樹科 (名) 【植】顯花植物、雙子葉類の一科。喬木又は灌木。堅き材質を有す。葉は全緣、托葉を有せず。花は葉腋に單生し、又は薬繖狀に排列し、單性・雜性稀に兩性、整齊花なり。蕚は下部三乃至七裂し、永存又は漸次增大す。花冠は合瓣にして早落し、三乃至七裂し、雄蕊は雄花に於いては花冠の裂片の數に二又は三倍し、雌花に於いては不完全なるもの數箇を存す。子房は上位、數室を有し、各室一乃至三箇の胚球を藏す。花柱の數は二乃至八箇、分離し、又は下部互ひに合はせ著く。雄花に於いては雌蕊は僅かに痕跡を止むるか、又は無し。果實は漿果。種子は楕圓形、胚乳は多量に存し、軟骨樣なり。胚の子葉は大にして葉狀をなす。本科に屬するものは、主に熱帶に產し、有用なるもの少なからず。

かきの-き-だまし (名) 【植】ちしやのき(松樞)の異名。

かきの-く 掻退 (他動下) のく(退)(他動)に同じ。宇治拾遺十「石中將屋の内に侍れば、かきのけんと思ひ侍れど、女は力弱し、かきのくべきやうもなければ」

かきの-ける 掻退 (他動下) 前條の口語。

かきの-こす 書殘 (他動サ) 書きて、後へ殘す。唐船噺今國姓爺「書き殘す聖人の書に」

かきの-ごふ 掻拭 (他動サ) のごふ(拭)に同じ。

かきの-ごろも 柿衣 (名) 柿色のころも。山伏などの著るもの。增鏡「素朝も山伏のまねして、柿の衣に綾藺笠といふ物きて」

かきの-し 書熨斗 (名) 進物などの時、熨斗の代りに「のし」と書くこと。

かきの-す 書載 (他動下) 書き記す。記載す。掲載す。

かき-のす 掻載 (他動サ) の す(載)に同じ。宇治拾遺三「石中將車にかきのせて、家に歸りて」

かき-のせる 書載 (他動下) かきのす(書載)の口語。

かき-のせる 掻載 (他動下) かきのす(掻載)の口語。

かき-のぞき 垣覗 (名) 垣よりのぞき見ること。「首のかきのぞき」

かき-の-たう 柿蔕 (名) 柿の花をいふ。京畿の方言。俚言集覽

かき-の-たみ (名) 古語。かきに同じ。皇極紀、百八十部曲(カキノタミ)

かき-の-つかさ (名) 一てんやく(典藥)に同じ。二後宮十二司の一。宮城以内の諸門の管鑰の出納及び其の諸門出入の雜物の勘檢を司る。關司。

かき-の-つる (名) 【植】かぎかづら(鉤藤)の異名。

かき-の-て 鉤手 (名) 一さしがねの曲がり角。まがりて角をなしたる形の稱。二折れまがりたるところ。まがりかど。雅亮裝束抄「もとどり中將のうらうへながら片かぎに結ぶなり。そのかぎのてを左右に結べば、左のはめのこ結びにせよ」

かきのはぐさ 巴戟天 (名) 【植】遠志科、遠志屬の多年生草本。莖の高さ尺餘。葉は卵狀、披針形、全緣、平滑やや柿に似たり。六月頃、黃色不整齊の花を開き、總狀花序に排列す。我が國、各地の山野に自生す。藥用に供せらる。

かき-のぶ 書延 (他動下) 敷延して書く。書き加ふ。十訓「後輩は才學優長也。然るをそれに優りて書きのべんこと、極めてありがたし」

かき-のべる 書延 (他動下) 前條の口語。

かき-のぼる 掻登 (自動サ) 掻き附きてのぼる。のぼる。宇治拾遺三「見あぐれば遙かに高き臺なり。かきのぼるべき方もなし」

かき-の-ま 垣間 (名) かきま(垣間)に同じ。和泉式部集「隔てつる垣のまわたる月ならば、かたらはずともかげは見てまし」

かき-のめす (他動サ) なぐりがきに書く。

かきの-もと-の-しゅう 柿本衆 (名) 後鳥羽院の御時、連歌に巧みなる者の稱。(栗の本の衆の對)

かき-のれん 柿暖簾 (名) 紺地に、紋所を柿色に染めたる暖簾。江戸時代、大阪新町にて、若衆女郎の居る娼家に懸けたり。(遊覽)洛陽集「青簾あはれなるものや柿暖簾」

かき-の-を 鉤緒 (名) 船具。綱の一端に鉤あるもの。まんりき。

かき-は 片葉 (名) かたひらの葉。一片の葉。神代紀下「磐根・木株・草葉(ハ)猶能言語」祝詞式大祓「草根可岐葉(ハ)平毛言止禮」

かき-は 堅磐 (名) (かたきいはの約)堅固なる岩。永久變はらぬことを祝ひていふ語。神代紀下「生兒永壽有、如磐石(ハ)之常存」祝詞式祈年「堅磐(ハ)常磐(ハ)に坐奉」

かきは (名) 【植】つるな(蔊菜)の異名。

かき-ざは (名) きは(際)に同じ。限り。きり。「かぎはがたつ」

かき-はき 掻佩 (名) 腰に帶ぶること。萬三「懸佩(ハキ)の小刀取りはき」

かき-はく 掻掃 (他動サ) はく(掃)に同じ。萬三「玉ははき刈りこ鎌まろ、むろの木となつめがもとと可吉將掃(ハカム)ため」

かき-はぐ 掻剝 (他動サ) はぐ(剝)に同じ。仁德紀「悉咋剝剝(ハギハギ)」

かき-はさむ 掻挾 (他動サ) はさむ(挾)に同じ。かいはさむ。崇峻紀「弛弓挾(ハサ)矢」

かき-はじむ 書始 (他動下) 書くことを始む。かきそむ。かきだす。

かき-はじめ 書始 (名) 書きはじむること。又、書き物の始め。かきだし。

かき-はじめる 書始 (他動下) かきはじむ(書始)の口語。

かき-はたけ 牡蠣畠 (名) かきだ(牡蠣田)に同じ。

かき-はつ 書果 (他動下) 書き終はる。書きおほす。

かき-はづす 掻外 (他動サ) はづす(外)に同じ。宇治拾遺三「車をやりかへして、御車にむかへて、牛をかきはづして、榻に類木をおきて」

かき-はな 鉤鼻 (名) 一鷲のくちばしの如く尖の曲がりたる鼻。若風俗「思ふ人のかぎばなを直し」二畫法の一。ひきめかぎばなを引目鉤鼻を見よ。

かき-はな 鉤花 (名) 【植】すみれ(菫)をいふ。東方地方・四國の方言。俚語集覽

かき-はなつ 掻放 (他動サ) はなつ(放)に同じ。ときはなつ。

かき-はひ 牡蠣灰 (名) かきがらばひ(牡蠣殼灰)に同じ。

かき-はやむ 掻早 (他動下) はやむ(早)に同じ。宇治拾遺三「馬をかきはやめて寄りければ」

かき-はらふ 掻拂 (他動四) 一とり去る。はらひ除く。源浮生「しげき草・蓬をだに、かきはらはんものとも思ひより給はず」二一物を殘さず取り去る。大和物語「此の家にありける物どもを、今の女のがり、かきはらひもてはこびいく」三掃除する。榮華玉雲「さらば御堂かきはらはせ、老法師の居所も拂はせ侍らん」

かき-はん 書判 (名) 文書の我が名の下に、自筆にて書く判。多くは、己れの名の字體をくづして、一定の形としたるもの。傾城島原蛙合戰「印判・かき判、或ひは爪形・筆の軸」

かき-はん 鍵番 (名) 江戸幕府の職名。下勘定所の戶締の鍵を保管し、又、其の火の元を檢する勘定役の稱。

かきひき-ばな 花 (名) 【植】すみれ(菫)をいふ。仙臺の方言。(笑覽)

かき-ひく 掻彈 (他動サ) かきならす。彈く。記下「しが餘り琴に作り、加岐比久(カキ)や」

かき-ひし 鍵菱 (名) 紋所の名。かぎ(鍵)を見よ。

かき-ひせ (名) かきのから。八幡愚童訓上「石花(キ)ひせといふもの、額に吸ひつきて、面見苦しさに」

かき-ひたし 柿浸 (名) 干柿を摺り、水を入れて汁としたるもの。一說、酒に浸して用ふ。榮華後拾遺「かきひたしの汁を、物の葉につけて參らすれど」 台記六・八・安二日「以柿浸供法皇」 增鏡三「同じひきげにて、柿ひたし參らすれば」

かき-ひびかす 掻響 (他動サ) ひびかす(響)に同じ。著聞「此の度ぞかし、俊憲宰相藏人左少將右衞門權佐東宮學士にて、かきひびかして侍りけることは」

がき-びやう 餓鬼病 (名) 餓鬼は

咽喉狭くして物を嚥下し難しといふより、咽喉のやまひ、せきのやまひなどの稱。著聞集「尾張が咳病をしてわづらひけるを、備後とぶらふとて、何を病み給ふぞといひたりける返事に、餓鬼病をやみ候ぞと答へたりければ」

かき-ひらく 書開 （他動四） 心ゆくやうに書く。書きて心をゆかす。十訓抄「時英・齊名・以言等に誘へしむとい〳〵ども、猶心に不叶。貴殿ばかりに書きひらかれんと思ふ」

かき-びん 掻鬢 （名） 江戸時代の初め、武家にて、前髪だちの若年の者の結びし髪の一種。下文を見よ。塵塚談下「武家の前髪の者はかきびん、年老の者はあはせびんに結ひけり。かきびんは耳の上より前髪の際迄、かきあげて束ね」

かき-ふ 一下級 （名） 等級の下なること。（上級の對）

かき-ふ 一加級 （名） かかい（加階）に同じ。下學集「加級カウ」

かき-ふ 一加給 給與を增加すること。增給。（減給の對）

かき-ふ-さくわん 一下級機關 （名）【法】上級機關に對して、服從の關係に立つ機關の稱。

かき-ふ-さぎゃうせいさくわん 一下級行政機關 （名）【法】上級行政機關に對して、其の指揮・監督に服する行政機關。

かき-ふ-ぎゃうせいくわん 一下級行政官 （名） 上級行政官に對して、其の指揮・監督を受くる行政官。

かき-ふ-ぎゃうせいくわんちゃう 一下級行政官廳 （名） 上級行政官廳に對して、其の指揮・監督に服する行政官廳。

かき-ふ-ぎゃうせいくわんぶ 一下級行政官府の對） （名） 前條に同じ。（上級行政官府の對）

かき-ふ-ぎゃうせいちゃう 一下級行政廳 （名） 上級行政廳に對して、其の指揮・監督に服する行政廳の稱。河川法第九條「地方行政廳は命令の定むる所に從ひ其の管内の下級行政廳をして河川に關する工事の一部を施行せしめ」

かき-ふ-くわんちゃう 一下級官廳 （名） 上級官廳に對して、其の監督權の下に立つ官廳の稱。

かき-ふ-くわんぶ 一下級官府 （名） 前條に同じ。（上級官府の對）

かき-ふ-くわんり 一下級官吏 （名） 上級官吏に對して、其の指揮・監督を受くる官吏の稱。

かき-ふ-こうきょうだんたい 一下級公共團體 （名） 上級公共團體に對して其の監督に服する公共團體。河川法第二十九條「地方行政廳は其の管内の下級公共團體をして河川に關する費用の一部を負擔せしむることを得」

かき-ふ-さいばんしょ 一下級裁判所 （名） 上級裁判所に對して、これに控訴又は上告をなすべき裁判をなす裁判所。裁判所構成法第四十「大審院に於て裁判を爲すに當り法律の點に付て表したる意見は其の訴訟一切の事に付下級裁判所を羈束す」 同百廿三條「控訴院長は其の控訴院及其の管轄區域内の下級裁判所を監督す」

かき-ふ-じちたい 一下級自治體 （名） かきふこうきょうだんたい（下級公共團體）に同じ。

かき-ふ-しん 一下級審 （名）【法】下級裁判所の審理の稱（上級審の對）

かき-ふす 掻伏 （他動下二） かき抱きて寢さす。源氏物語「人にかきふせられ給ふ」 榮華物語「さてかきふせ奉りて御湯を參るに」

かき-ふせる 掻伏 （他動下一） 前條の口語。

かき-ふ-だんたい 一下級團體 （名） かきふこうきょうだんたい（下級公共團體）の略。

かき-ふ-ちはうぎゃうせいくわんちゃう 一下級地方行政官廳 （名） 上級地方行政官廳に對して、其の監督に服する地方行政官廳。

かき-ふ-ちはうくわんちゃう 一下級地方官廳 （名） 前條の略。

かき-ふ-ちはうこうきょうだんたい 一下級地方公共團體 （名） 上級地方公共團體に對して、其の監督に服する地方公共團體。

かき-ふ-ちはうじちたい 一下級地方自治體 （名） 前條に同じ。

かき-ふね 牡蠣船 （名） 一牡蠣を採取する船。二安藝國廣島地方より牡蠣を積み來たり、料理して客に供する船。大阪名物の一。重井筒下「藻に埋もるる牡蠣船の、苦の際間の燈火の」

かき-ぶみ 鎰文 （名） 古へ大藏省もしくは諸國別納所の藏の鎰を開くべき命令の文。 江次第五位「近例加鎰文一通、申之」

かき-ぶり 書振 （名） 書くそぶり。書跡。筆跡。

かき-ふるふ 掻振 （他動四） かきはらふ（掻拂）に同じ。大和物語「物かきふるひいにし男なん、しかながら運びかへして」

かき-べ 民部 （名） 古語。かきに同じ。雄略紀「私民部（ワタクミベ）、名曰贄土師部」

かき-べ 垣邊 （名） 垣のほとり。壬二集「いくばくの田を作ればか山かづの、垣べの谷に鳴子引くらん」

かき-へうぐ 書表具 （名） 掛物の表裝の部分をも併せて書きたるもの。

かき-へうし 柿表紙 （名） 柿色の表紙。曾我五人兄弟「編笠引っこみ、柿表紙の假名本ひろげ」

かき-べの-かみ 民部卿 （名） 古語。みんぶきゃう（民部卿）に同じ。天武紀下「民部卿（カキベノ）」

かき-へんしぶ 一餓鬼偏執 （名） かたくなに己れのみよしと思ふことなるべし。甲陽軍鑑「己れを以て人にたくらべ、餓鬼偏執は武篇不案内の故如此」

かき-へんず 一餓鬼偏執 （名） 前條に同じなるべし。めのとの草紙「又いみじき人そしらはしき事候とも、ときによりて、いはぬ事にて候。さやうのうへを申し候（ばかきへんずとて笑ひ申し候」

かき-ほ 垣穂 （名） かき（垣）に同じ。古今「あな戀し、今も見てしか、山がつのかきほに咲けるやまとなでしこ」 宇津保俊蔭「此の家のかきほより、いとめでたく色清らなる尾花をれかへり招く」

かきほ なす 垣の如く障へ隔つ。離間す。邪魔をなす。萬「垣穂成人どと聞きて、吾がせこが心たゆたひ逢はぬ此の頃」

かきほ の たに 垣穂谷 垣の邊にある谷なるべし。夫木「わが宿のかきほの谷の朝とでに、雪をれくぐる谷の下道」

かきほ-がくれ 垣穂隱 （名） 垣にかくるること。續後拾遺「山がつの垣ほがくれのくずかづら、うらみありやと問ふ人もなし」

かき-ほたん 鉤鈕扣 （名） 鉤にて引き掛くるぼたん。

かき-ほ-わたり 垣穂邊 （名） 垣のほとり。拾遺「櫻花「山がつの垣ほわたりをいかにぞと、霜かれがれに問ふ人もなし」

かき-ほん 書本 （名） 書き寫したる書物。寫本。（版本の對）

かき-ま 垣間 （名） 垣の透間。萬「春されば卯の花くたし我が越えし、いもが垣間（マ）は荒れにけるかも」

かき-まぎらはす 掻紛 （他動四） かきまぎるるやうにす。まぎらはす。相模集「かきまぎらはして、こまやかにやりてしかば、あやしう見ときがたかりしを」

かき-まぎる 掻紛 （自動下二） 一まぎる（紛）に同じ。二特に秀でたることなく、尋常にてあり。ありふれてあり。源藤豐「世の常の覺えにかきまぎれたらば、さるたぐひなくやと思ふべきを」 同上「かきまぎれたるきはの人とぞ、かりそめにもたはやすき物忌み・方違へのうつろひもかろがろしきに」

かき-まさり 書勝 （名） 畫などにかきて、實際より勝さること。枕「かきまさりするもの」

かき-まず 書交 （他動下二） 種種混ぜて書く。源若菜上「ふることなど書きまぜ給ふを、とりて見給ひて」 同葵「さうにもまなにも、さまざま珍らしきさまに書きまぜ給へり」 同夕顏「なつかしくやはらぎたるかたなどを、靜かに書きまぜて」

かき-まず 掻雜 （他動下二） 一掻きまはしてまぜず。まぜ合はす。源野分「あじろの氷魚も心よせ奉りて、色色の木の葉にかきまぜもて遊ぶを」 大鏡「御歎き・御悅びかきまぜたることつかうまつれ」 二紛亂を起こさしむ。みだす。

かき-まぜ 掻雜 （名） 一かきまぜること。かきまぜたること。二普通。一通り。濱松「及びなく心靈くさざらんかきまぜの程は、かやうに心美しくなよよかならんこと、思ひとどめらるべきわざなりけれ」 同「かきまぜのきはだに、かやうの艶ある曉の別れをしのばせんと用意せん程は」

かき-まぜる 書交 （他動下一） かきまず（書交）の口語。

かき-まぜる 掻雜 （他動下一） かきまず（掻雜）の口語。

かき-まつぶ 掻雜 （他動下二） 手にてかきまとむ。掻き集む。賀古教信七墓廻「金銀を殘らず取って掻き抱き、袖より漏るるを掻きまつべ、取り落とせば掻き寄せて」

かき-まはす 掻廻 （他動四） 一手などにてかきまぜる。二膠手に取り投ふ。傾城買二筋道「うぬらにかきまはされてなるものか」

かき-まみ 垣間見 （名） かいまみ（垣間見）に同じ。神代紀下「知ニ天孫視其私屏（ヲウフヒノヅノ）の事」

かき-まめ 籬豆 （名）【植】人家の籬垣の側に植うる一種の豆。眉見豆（ミヤウケンヅ）の事にやといへり。三月種を下ろす。蔓生じ籬に沿ひて延へ纏ふ故に、換に沿籬豆と名づけ、又破墻豆（ハヘヅ）といふ。此の豆一粒を植うれば八升を得といふ。破墻と八升と音近きよりの附會なるべし。頭語時記

かきみ-ぐさ 垣見草 （名）【植】うつぎ（謂疏）の異名。垣根などに咲けばいふなるべし。藏玉「墻見草。卯花。ほとぎすきてや鳴かましかきみ草、花咲きにけり山里の宿」

かき-みそ 牡蠣味噌 （名） 牡蠣を煮て擂りたるものを味噌に加へて、鯛味噌の如くに製したるもの。

かき-みだす 書亂 （他動四） 一順序なく書く。書き散らす。二書きけがす。書き損ふ。

かき-みだす 掻亂 （他動四） かきみだるやうにす。雜ぜ亂す。かきまはす。紛亂せしむ。爲忠百首下「かきみだすここちこそすれ、津の國のこや其の人のあしでと思ふに」 風雅三「かきみだすねくたれ髪の眉墨も、うつりにけりなさ夜の枕」

かき-みだる 掻亂 （自動四） みだる（亂）に同じ。源朝五「そこはかとなく、かきみだり給へるしもぞ」 同夕顏「かきみだるここちし給ひて」

かき-みだる 掻亂 （自動下二） 前條に同じ。源藤豐「雪・みぞれ、かきみだれ荒るる日に」

かき-みだる 書亂 （他動下二） 亂りがはしく書く。源浮舟「筆にまかせてかきみだり給へるしも、見どころあり」

かき-みる 掻見 （他動上一） 古語。みる（見）に同じ。記上「打ち見る島のさきざき、加岐微流（カキミル）磯のさきおちず」

かき-むく 掻向 （他動四） むく（向）に同じ。むかはす。萬「鞆河たて捕らさむ鮎のしがはたは、我れに可伎無氣（カキム）思ひしもはば」

かき-むしゃ 一餓鬼武者 （名） 數ふるに足らぬ武者。文武五人男「なほも群がる餓鬼武者ども」

かき-むしる 掻毟 （他動四） 引きかきむしる。狂言柿實「我がうその吹かれぬ口をかきむしり」

かき-むすぶ 掻結 （他動四） 古語。むすぶ（結）に同じ。ちぎる。約束す。萬「あひかがらひ、こと成りしかば、加吉結（カキム）とこよに至り」

かき-むだく 掻抱 （他動四） 古語。いだく（抱）に同じ。うだく。萬「かみつけぬ、あそのまそ むら可伎武太伎（カキム）ぬれど飽かぬを、あどかあがせむ」

かき-めぐらかす 掻廻 （他動四） かきまはす。名義抄「攪（カキ）」

かき-めし 牡蠣飯 （名） 牡蠣を入れて、味を附けたる飯。

かき-も 垣面 （名） 垣のおもて。太平記「櫻花花盛「垣面の柴のしばしばも、ながらふべきここち侍らねば」

かき-もち 鈌餅 （名） 一正月の具足餅を、一片づつ手にて缺きたるもの。刀にて截るを忌みて なり。寬永發句帳「十五夜月蝕。まんまるな月かきもちの夜食かな」 二扁く長くして海參（コノワタ）の如く作りたる餅を薄く輪切りにし、かげ干にして貯へ置き、火に炙りて食ふもの。なまこもち。姫川親元日記文明八年「佛地院より柿餅三籠まゐる」 けづりもち 通後物類呼「そのかきもちの氷より、涙の氷解けやらぬうき身の上ぞ無慚なれ」 三しみもち（凍餅）に同じ。心中刃氷朝日

かき-もと 垣下 （名） 垣根のもと。記上「加岐母登（カキモト）に植ゑしはじかみ」

かき-もの 書物 （名） 文字などを書くこと。又、其の書きたるもの。毛利家記「隆景開召、御同意忝候。然らば他言有間敷由の書物を給はり候へかしと仰せられ」

かきもの-がた 書物方 （名） 書物をする役。又、その人。かきやく。

かきもの-さき 吳物聽 （名） 古へ夜間の斥候の稱。甲陽軍鑑「かまりの物見は、かぎもの聞きと云ふ」

かきもの-だい 書物臺 （名） 書物をする臺。又、それをのする臺。

かきもの-ぶぎゃう 書物奉行 （名） しよもつぶぎゃう（書物奉行）に同じ。

かき-もやう 書模様 (名) 書きたる模様。〔染模様・縫模様の對〕

かき-もらす 書漏 (他動四) かき入ることを忘る。かきおとす。源[榊本]「うるさく何となくこと多かるやうなれば、例のかきもらしたるなめり」

かき-もん 書紋 (名) 書きたる衣服の紋所。〔染紋・縫紋の對〕若風俗「薄かば染の小袖に、山盡くしのかきもん」

かき-や (名) 古語。城の門。神代紀下「其宮也、城闕(キノ)榮華」

かき-やう 書樣 (名) 書く仕方。書きかた。傾城反魂香中「目出度いと云ふ字は、書きやうも忘れて」

かき-やう 一佳境 (名) よき境地。愉快なる場合。晉書顧恺之傳「每〻食蔗、自尾至本、人或問之、曰漸入佳境」周必大詩「賞心到處窮佳境、人得異書」

かき-やう 一家鄉 (名) ふるさと。故郷。郷里。朗詠「裂黛紅顏錦繡錐、泣啼沙塞出家鄉」韓愈詩「如何逢曉語、祇是說家鄉」

かき-やう 一加行 (名) 五十音圖の第二の行の名。即ち、か・き・く・け・こ。

かき-やうかん 柿羊羹 (名) 柿の實をまぜて製したる羊羹。羊濃國大垣等の名産。

かき-やう-へんかく 一加行變格 (名) 文法の語。不規則動詞の一。來(カ)といふ動詞に限る。

かき-やく 書役 (名) 文書を草し、又寫字を勤めとする人。ものかき。

かき-やく 鉤役 (名) 江戸時代、人家の竈數により徵收したる稅。

かき-やく 鑑役 (名) 江戸時代、牢屋の役名。牢の鑑を掌る。

かき-やく 一苛虐 むごく扱ふこと。しばしば。苛酷。晉書[載記]「刑政苛虐、縱情肆欲」顏氏家訓「勤[ニ]誓誡者、可[レ]顧[ニ]虐手骨肉乎、誠不[レ]得已也」

かきやくはんおう 一可逆反應 (名) 【化】狀況の變化により、全く正反對の方向に進み得る反應。炭酸石灰を熱して生石灰と炭酸瓦斯とに分解するも、低溫度にては、逆に兩者は化合して炭酸石灰となる類。

かき-やぐら 舁櫓 (名) やぐらの最も簡略なるもの。舁きて移動す。だしやぐら。

かき-やね 牡蠣屋根 (名) かきがら(牡蠣殼屋根)の略。廛塚談「みなこけら葺にて蠣屋根也中略板にて葺き、その上に蠣を敷きならべる事也」

かき-やぶり 垣破 (名) 垣ある所は破りても通らんとする如く、是が非でもおし通してなさんとすること。横紙やぶり。東海道名所記「その松にさはりたれば、とて律義を忘るる道理なしと、垣やぶりに申しければ」曾我虎磨「事起こるとの神の告げ、用心せぬはかきやぶり」

かき-やぶる 掻破 (他動四) 掻きそこなふ。かきこはす。

かき-やぶし 柿山伏 (名) 山伏を嘲りていふ語。東海道名所記「此の山伏、嚴は、柿山伏か、蛭山伏か、然らずば、祇園・愛宕のこけら山伏か、いざ知らず」

かき-やみ 餓鬼病 (名) がきびやう(餓鬼病)に同じ。

かき-やり 鉤槍 (名) 槍の柄の刃に近き處に、十文字に鉤を附けたるもの。北條五代記[写]「當世はかぎ槍とて、くろがねを長く延べ、かぎをして槍の柄に十文字に入れ、其の先に小しるしを附け、柄にて人を突くべき威風をなし給ふ」

かき-やる 書破 (他動四) 書きて、破り捨つ。

かき-やる 書遣 (他動四) 書きてやる。書き送る。續拾遺[雜上]「かたみとて今は涙の玉づさを、かきやるかたもなく泣くぞ見る」

かき-やる 掻遣 (他動四) 手にてかきはらふ。はらひのく。かいやる。字津保[俊蔭上]「髮かきやり給ふ手つき、いと美しげなり」源[御法]「涙のこぼるるを、袖のいとまなく、えかきやり給はず」

かき-よ 一河渠 (名) 河とほりわりと。史記[序]「惟禹浚川、九州攸寧、愛及宣防、決汶濟通溝、作河渠書」唐書[志]「河渠署、令一人、丞一人、掌河渠陂池堤堰魚醢之事」

かき-よ 一家居 ひきこもりて家に居ること。又、其のすまひ。史記[酷吏]「廼病免家居」同[田蚡]「迺名士家居者貴之」

かきよ 一河魚 (名) 河に產する魚類の總稱。鯉・鮒・鮎の類。かはうを。

かき-よ 一下御 天子・皇后などの、御輿より下だり給ふこと。江次第[九小安殿行幸]「鄭疏地、寄御輿於北壇下、下御」

がきよ 一駕御 駕馭 (名) 一馬を自在に使ひこなすこと。二人を、吾が意の如く使用すること。吳志[孫皓]「爲人君者、駕御英雄」

かき-よく 一歌曲 (名) 一うたひもの曲譜。歌のふし。論衡「歌曲妙者、和者則寡」二うた。うたひもの。聲樂。

かき-よく 一下局 (名) 議政官の一局。各藩選出の貢士を以て組織し、上局の諮詢する事項を審議するもの。明治二年五月議政官の廢止によりて廢せられたり。

かき-よす 書寄 (他動下二) 書き集む。

かき-よす 掻寄 (他動下二) 一掻きて己れの許へよせつく。祝詞式[新年]「向駛留泥棄寄(ヨセ)」玉取作中「枕がみなる扇を、我が持たるして、及びてかきよするが」二散亂したるものをかたづけておく。源[夕顏]「かうの御唐櫃・みづしなどばかりあるはこなた・かなたにかきよせて」

かき-よせる 掻寄 (他動下二) 前條の口語。

かきよま (名) 緒絲の一種。二子撚の緒絲に、其の撚り合せの方向と反對に、別の絲を卷き附けたるもの。

かぎら-ず 不限 (副) 疑ひなく。必ず。てっきり。元祿時代の語。一代女「木枕二つ置きけるに、かぎらず曲者と思はれける」

かき-らん (名) 【植】すずらんの異名。

かぎり 限 (名) 一隈ること。又、限りたるところ。きは。きり。さかひ。狹衣「越えもせぬ關のこなたにまどひしや、逢坂山のかぎりなるらん」新古今[雜]「めぐりあはんかぎりはいつと知らねども、月な隔てそよその浮き雲」二はて。きはみ。極度。景行紀「天命(カギリ)忽至、隙駒難停」萬五「かくのみやいきつき居らむ、あらたまのきへ行くべく年の可伎利(カギ)知らずて」古今[秋上]「いつはとは時はわかねど、秋の夜ぞ物思ふ事のかぎりなりける」三まり。制限。格式。分際。源[桐壺]「限りある事に事を添へ給ふ」同[夕顏]「人となりて後は、限りあれば、朝夕にしもえ見奉らず」同[宿木]「かぎりある御とぶらひばかりこそあれ、あまりもえまうで給はで」四あひだ。ほど。うち。萬四「わが命のまたけむ限(カギ)も忘れめや、いや日にけには思ひますとも」古今[春上]「春きぬと人はいへども、鶯の鳴かぬかぎりはあらじとぞ思ふ」五其れのみなること。其ればかり。竹取「人も數多なるておはしまさず。近う仕

つる限りして出で給ひ」字津保[祭使]「延の破れひしげて、申子のかぎりある」六有りたけ。皆。全部。古今[夏]「今更に山へかへるな時鳥、聲の限りは我が宿に鳴け」枕「猫は、うへのかぎり黑くて、ことは皆白からん」同「あるかぎりむれだちて」

かぎり-ある くらゐ 有限位 此の上なき最高の位。源[若菜下]「女御の君は中略うせ給ひにければ、限りある御位を得給へれど、物のうしろのここちして、かひなかりけり」

かぎり-ある みち 有限途 冥途に行く途。死出の旅。源[椎本]「かぎりあらん道にも、おくれさきだたじと契らせ給ひけるを、さりとも打ちすててはえ行きやらじとの給はするを」

かぎり-ある よ 有限世 限りのある此の世。後撰[離別]「別かれてはいつあひ見んと思ふらん、かぎりある世の命とも見じ」

かぎり-ある わざ 有限業 物事に限りのあること。榮華[楚王]「日ごろ御几帳・御屏風の隔りだになく、よろづにあつかひきこえさせ給ひつれど、かぎりあるわざなりければ、ことごとにおはしますほど、いみじく哀れに悲し」

かぎり かぎり 限限 命の限り。今はのきは。最後。榮華[鳥邊野]「かぎりかぎりと見ゆるまで、いみじうわづらはせ給へば」

かぎり-なき くらゐ 無限位 無上の位。帝王の位。榮華[鳥邊野]「かぎりなき御位なれど、親子の御中の物悲しさを、おもほし知らぬやうにあらばこそあらめ」

かぎり-なき ひと 無限人 此の上なき人。最も貴き人。源[末摘花]「かぎりなき人も、親のあつかひ後見きこえ給ふ程こそ、若び給ふもことわりなれ」同[上若菜]「かぎりなき人ときこゆれど、かたかめる世をとおぼしくらべらる」

かぎり-なき み 無限身 此の上なき最上の身。榮華[玉蟲]「東宮何の御心の催しにかおはしますらん、かくて限りなきお身を、何ともおぼされず」

かぎり の こと 限事 死者の冥福を祈ること。はての事。源[御法]「あながちにしづめ給ひて、限りの御事どもし給ふ」

かぎり の たび 最後の旅。死して冥途へ行くこと。源[椎本]「はかなき御なやみと見ゆれど、かぎりのたびにもおはしますらん」著聞[三]「みちかはるるみゆき悲しき今宵かな、かぎりのたびと見るにつけても」

かぎり の たび の みゆき 限度行幸 天皇の御送葬を申し奉る。著聞[三]「かぎりのたびのみゆきには、左大臣・右大臣・前內大臣中略衣冠に、纏を卷きて、藥香をはきて供奉ありし、目もあてられざりしことなり」

かぎり-どころ 限草 (名) 【植】きく(菊)の異名。

かぎり-なし 無限 (形) 一ほてしなし。際限なし。此の上なし。萬[三]「水鳥の鴨の羽の色のあを馬を、今日見る人は可藝利奈之(カギリナシ)といふ」古今[雜]「かぎりなき雲ゐのよそに別かるとも、人を心におくらさんやは」二非常なり。甚し。勢語「女かぎりなくめでたしと思へど」字津保[俊蔭]「その子、心のさときことかぎりなし」

かぎり の つき 限月 (名) 十二月の異名。

かぎる 限 (自動四) 一物事又は人などを特に指して、其れ以外に及ぼさざる意を表はす。「此の品に限る」詞花[春]「山櫻惜しむにとまるものならば、花は春ともかぎらざらまし」新葉[雜下]「さのみなど思ひ知らでは過ぐすらん、うきは我が身にかぎりける世を」二定まる。きまる。勿論なり。浮世風呂[三]「不斷著の裾廻しは、秩父絹ぢやあ切れるにかぎってゐるから、今年は絹紬にしたら、いっそ丈夫でいいよ」

かぎる 限 (他動四) きはをたつ。界をなす。しきる。拾遺[春]「千とせまでかぎれる松もけふよりは、君にひかれて萬代やへん」源[賢木]「かかる所に、日をかぎりてこもりたれば」

かき-れう 書料 (名) 書きたる料金。かきちん。類聚雜要「書料世疋」

かき-れうり 牡蠣料理 (名) 牡蠣を種種に料理すること。又、その料理。

かき-ろどこ 缺艪床 (名) 船の名所。ろどこ(艪床)を見よ。

かきろひ 陽炎 (名) 古語。かげろふ(陽炎)に同じ。

かきろひ-の 陽炎之 (枕) かぎろひは春の頃殊にたつものなればはるにかけ、燃ゆるが如く見ゆればもゆにかけ、かすかにてよく見定められぬものなれば、ほのかなどの意にかく。記[下]「加藝漏肥能(カギロヒノ)もゆる家むら、妻が家のあたり」萬[三]「炎乃(カギロヒノ)春にしなれば」

かきろふ 蜉蝣 (名) 【動】かげろふ(蜉蝣)に同じ。

かき-わく 書分 (他動下二) 分けて書く。區別して書く。

かき-わく 掻分 (他動下二) 掻別 (他動下二) 左右へわけ開く。おしひらく。日本紀竟宴歌「佛すらみかどかしこみ、白妙のなみ迦幾和計(カキ)て來ませるものを」萬[三]「天雲のやへ掻別(カキ)て」

かき-わけ 書分 (名) 書き分くること。區別して書くこと。蜆山姥「後家・尼人の女房まで、段段の書分けは、妾が家の傳授事」

かきわけの-つむじ 掻分旋毛 (名) 馬の旋毛。ひりゆう「飛龍」に同じ。

かき-わける 書分 (他動下二) かきわく(書分)の口語。

かき-わける 掻分 掻別 (他動下二) かきわく(掻分)の口語。

かき-わたす 掻渡 (他動四) かき鳴らしもてゆく。源[竹河]「をさをさ、心にも入らずかきわたし給へるけしき、いとひびきこそ多く聞こゆ」同[若菜下]「え忍びはつまじきここちすれど、さまよくもてなして、をさをさ心解けてもかきわたさず」

かき-わらび 鉤蕨 (名) 蕨の芽だちの、鉤の手の如く曲がれるもの。著聞[三]「山もりのひましなければかぎわらび、ぬす人にこそ今はまかすれ」

かき-わり 書割 (名) 演劇にて、舞臺の背景。

かき-わり 缺割 (名) 鍊(ニヒ)の初漁の頃、背部の肉を缺き取りて乾したるもの。みかきにしん。

かき-ゑ 書繪 (名) 描きたる繪。(すりものの繪などの對)

かき-ゑ-こそで 書繪小袖 (名) 墨畫を畫きたる小袖。織留[三]「近年書繪小袖を仕出し、俄分限となりぬ」

かき-をる 掻折 (他動四) をる(折)に同じ。萬[三]「さし燒かむを屋のしき屋に、掻き棄てむやれどもを敷きて、掻將折(カキ)しこのしき手を、さしかへて寢なむ君

ゆゑ」

かさん 〔瑕疵〕 瑕瑾 (名) 〔瑕は玉のきず、きん(疵)はきず。瑾に作るは誤り〕 一物のきず。われめ。いたみ。 二あやまち。短所。闕點。文德實錄六、齊衡元年五月辰「親王性操貞潔中略至于終身、遂無瑕疵」 盛衰記廿、依賀太「山賊・海賊して死したらば、瑕疵・恥辱なるべし」 史記平準、成「大功一者、在下因二瑕疵一而遂忍之」後漢書第五倫傳「諸出入貴戚者、類多瑕疵禁錮之人」 三交際上、怨隙を生ずること。玩瑀文「或起瑕疵」

かさん 〔家禽〕 (名) 人家に飼育せられ、其の肉・卵等の需用せらるる鳥類。雞・七面鳥の類。梁書何點、胤常禁殺有異鳥如鶴、紅色集講堂、馴狎如家禽焉」

かさん 〔雅琴〕 (名) 風雅なる琴。朗詠、隨風蕭葉含蕭瑟、濺石飛泉弄雅琴」

かさん 〔雅金〕 (名) ちんきん(沈金)に同じ。

かく (名) 〔かかの轉か〕 はは(母)を云ふ。西國の方言。物類呼稱

かく 〔客〕 (名) 一きやく(客)に、二に同じ。 まらうど。詩經小雅、爲賓爲客、獻酬交錯」 二旅行せる人。たびびと。旅行旅。 三主に對するものの稱。「主客顚倒す」 四ひと。人士。「論客」「刺客」 五食客。ゐさふらふ。狂言鏡立、胡曹といふもの詩に中略朱門不養三千客、誰爲雞鳴得放廻」

かく 〔角〕 (名) 一つの。二方形。四角。「角に切る」 三四つ角。ある材木。「三寸かく」「五寸かく」 四すみ。 五かくのをしき(角折敷)の略。寿門松「將棊駒の名。かくかう(角行)の略。寿門松「將棊中略金持ちとは此の角がにらんで居る。かう寄つたらば金銀出して打たずはなるまいぞ」七鎧の角(ツノ)にて、馬の脇腹を鎹て逆まじむること。拾權三「權三が馬は逸物の、口を切つて角を入れ、はうっと掛けたる犀の内」 八小銃の射的に用ふる的。かくうち。 雍州府志六、倭俗鳥銃謂鐵砲、正鵠謂格」 格。 九五音の一。じふにりつ(十二律)を見よ。著聞三、宮・商・角・徵・羽の五音あり」禮記樂記、角爲民」 十かどあること。圓滑ならぬこと。「角ぢや世間が渡られぬ」 十一がくぎん(額銀)の略。博多小女郎波枕「やっちや一角せしめんと、人の巾著當てにして」 十二〔數〕一點より引ける二直線のなす圖形。其の點を角の頂點、其の直線を角の邊と云ふ。而して共範角中の大なるものを優角、小なるものを劣角といふ。 十三二十八宿の一。すぼし。 十四紋所の名。かくもち・すみいりかく・すみたてかく・たいふかく・たれかく・てっぽうかく・はっかく・ひらかく・よせかく・をりいりかく等の種類あり。

かく 〔格〕 (名) 一のり。しきたり。法則。法式。格式。砂石集廿「折りを知り、時に隨ひて、格を超え、禮に拘はらずして、物の意得て振る舞ふ、是れ實の達人也」 二くらゐ。身分。分際。分限。等級。「家の格」 三同じ仕方。流義。手段。陸奥歌「おのれが宿にて、新兵衛を廻はいた格とは違うたぞ」 四律・令・格・式の一。きやく(格)を見よ。 五〔文法〕名詞の他の語に對する關係。主格・目的格などの類。 六英 Figure 〔論〕三段論法の大前提及び小前提に於ける大辭・小辭・媒辭の位置が、互ひに其の關係を異にするによりて生ずる推論式の形。

かく 〔閣〕 (名) たかどの。樓。漢書樓護、雄恐從閣自投撲死」

かく 〔殼〕 (名) から(殼)に同じ。王安石詩「車螯肉之弱、恃殼保厥身」

かく 〔覺〕 (名) 感覺。砂石集竺、鼻と舌と身に有るを覺といひ」

かく 〔膈〕 (名) 一胸の内部。「胸膈」 二病の名。胃癌・食道癌の類の總稱。

かく 〔革〕 (名) 音樂の語。八音の一。はっちん(八音)を見よ。

かく 〔翮〕 (名) 鳥の羽の中軸をなせるもの。

かく 〔核〕 (名) 一生物學上の用語。生活せる細胞の實質中に埋没して存せるほぼ球形なる小體。これ實に細胞の生活官能の中樞を爲す。 二〔植〕植物學上の用語。核果に於ける堅牢なる内果皮。これ種子を保護せんが爲めなり。梅・桃等の果實は好例なり。

かく 〔佳句〕 (名) よき文句。名句。晉書謝靈運傳、嘗作天台賦、以示友人范榮期、榮期每垂佳句、輒云、應是我輩語」 韓愈詩「佳句喧人衆口」

かく 〔河區〕 (名) 川にて、海潮の影響を受けざる處より上流をさしていふ語。 一全きもの減る。不足す。萬三千歲に闕ることなく、よろづ世にあり通はむと」 二こはる。やぶる。そこなはる。損ず。神代紀上、劍刃少缺(カケ)」 和名三、飢饉加」 三滿月が漸次不完全なる形となる。萬三「世の中はむなしきものとあらむとぞ、此の照る月は滿ち闕(カケ)しける」 四脆(スク)く。洩る。おつ。垂仁紀「悔先皇之不及(カケタリ)」 五つひゆ。徒らに過ぐ。「暇かく」 六おろそかになる。等閑になる。「勤めがかく」

かく 〔驅駈〕 (自動) 馬にて馳す。とくはしる。かける。著聞三、牛退ふもののあらばやといはれければ、四天王のともがら、われもわれもとかけて射けり」 爲忠集「ぬしもなき夏野の原の離れ駒、心のままにかけつもどりつ」 延喜年家二、天慶石編「宗との者共七十三騎、我れ劣らじとをめいてかく」 諸祭文「かくるも引くも軍の習ひ」

(諺)駈くるも引くも折りによる 進退何れも時機に應ずべし。太平記「まよかきこに加岐(カキ)垂れ、あはしし をみな」竹取「文中略打ち泣きて、かくことは」源桐壺「長恨歌の御繪、亭子院のかかせ給ひて」 二文に作る。著し記す。著作す。源帚木「ふみをかけど、おほどかにことえりをし」

かく 〔搔〕 (他動) 一爪を立てて擦(カク)る。響異記下「彼犬嗥吠抓可愛、脫伽藍鑰欲奔」 萬三「月たちてただ三日月の眉根搔(カク)き、け長く戀ひし君にあへるかも」 二彈く。彈(ヒク)ず。記下「しが餘り琴に造り、加岐(カキ)ひくや」 三拂ひ除く。おしやる。萬三「あま雲のやへ搔(カク)わけて」枕四、雪中略初めのはおきて、今のはかきすてよ」同六、目に髮のおほひたるを、かきはやらで」 四切りとる。かききる。かきあつ

む。記上「山三尾之竹矣、本訶岐(カキ)刈、末押縮魚贄」新續古今賀、和歌の浦ぢの玉藻をも、かきえぬほどのはかなさに」 狂言文蘭「腰の刀をひん抜いて、頸かけどもかかれず」 五かき著く。かじりつく。記下「はしたてのくらはし山をさかしみと、岩迦伎(カキ)かねて我が手取らすも」 六くしけづる。萬四、ぬばたまのよとこかた去り、朝ね髮可伎(カキ)もけづらず」 七拭ふ。玉葉秋上「ころもうし初雁がねの玉章に、かきあへぬものは涙なりけり」 八田畑などを鋤きかへす。耕す。萬四十「かなと田をあら我伎(カキ)まゆみ日がとれば、雨をまとのす、君をとまとも」 九水をおしやる。おしのく。神代紀上、沈(ヒ)濯(カキ)於海底」萬八、朝なぎに い可伎(カキ)わたり、夕しほに漕ぎわたり」 十かき探る。さぐり求む。神功紀「探(カキ)其屍而不得也」 十一食物を口中に押し入る。かきこむ。盛衰記中三、光盛「無雙の平茸は京都にはきとなき物也。猫殿只かき給へ、かき給へと勸めたり」前太平記三、椀飯昇きすゑたるに、盛り並べたる飯・汁・御菜、みな鹿・猿の肉など、さまざまに取りいとなみてぞ出だしたる。童子打ち笑ひて、いざいざ掻き給へ、我れは又かたかたの饗應に預かりなんとて、引きよせ引きよせうち喰ひて」 十二手又は物もて動かす。「かきまはす」「かきよす」續後撰雜中、曉の鳴の羽がきかきもあへじ、我が思ふことの數を知らせばし」 十三爲す。あらはす。平家被瓦盞「船底に高鼾かいてぞ臥したりける」女殺油地獄上「ほえづらかく」薩摩歌中「餅よ粁よと世話かくが、そなたの目には見えぬか」

かく 〔缺闕欠〕 (他動) 一へらす。少なくする。不足せしむ。 二こはす。そこなふ。損ず。垂仁紀「强力以能毀(カク)角申(カク)」 字鏡「劓(カク)也、毀(カク)也、缺(カク)也、久」十訓上「額を突きかきなどして」 三脫(カク)かす。洩らす。おとす。若宮社歌合「同じくは住むべき千代の數となれ、ひとよもかかず立つる錦木」 四つひやす。徒らに過ごす。「暇をかく」 五おこたる。なほざりにす。「用事をかく」「神功紀「闕(カク)奉秋之朝」榮華見花「瀧口・たちはきなど、番かかずきぶらふ」

かかず おはず 法師物見車「かかずおはずに四人口」なに不足なし。彙好なに不足なし。

かく 〔旱〕 (他動) 二人以上にて、物を肩に荷ふ。かつぐ。枕五、淀の渡りといふものせしかば、舟に車輿(カク)をかきすゑて行くに」源蜻蛉「沈の箱中略おまへにかきたつ」宇治拾遺「五石なりの釜を五六旱きもて來て」

かく 〔掛〕 (他動) 古語。かく(掛)に同じ。雄略紀「伊勢のぬの桑えを、いほふる柯根(カク)て、しが盡くるまで大君にかたく仕へまつらむと」萬一「み名に懸(カク)せるあすか川」同四、あまさかるひなに名可加(カク)中略たち山に」同四「馬にこそふもだし可久(カク)もの、牛にこそ鼻繩はくれ」

かく 〔他動〕 組む。編む。構ふ。「あぐらをかく」武烈紀「おほきみの八重の組がき帶帶(カク)めども、なをあましみに帶帶(カク)ぬ組垣」萬三、こしきには蜘蛛の巣可伎(カク)て」

かく 〔他動〕 身に受く。かうむる。萬九「暑けきにあせ可伎(カク)なげき」狂言鬼瓦「かまひて、親に恥をかかすなよ」東海道名所記「たうがさをかき出だして、これを防がんとて、輕粉・大風子なんど、あらけなき藥を飲みて」

かく 〔掛〕 (他動) 一物に著けて下ぐ。釣り下ぐ。ぶらさぐ。記下「いくひには鏡を加氣(カク)て、まくひにばま玉を加氣(カク)」萬三「花橘中略下枝にしめを懸(カク)」 二繫。繫(カク)。「此れより彼れへわたす。拾遺雜「なかなかにいひは放たで、信濃なる木曾ぢの橋のかけたるや、なぞ」大藏狂言法師「春の宸は、弓に絃かくるが如く狂ふにぞ」 三上に載す。もたせ置く。よせかく。「鍋を火にかく」「梯子をかく」狂言鬼「床机にかけて讀みませう」 四高く掲ぐ。揚ぐ。「額をかく」土佐日記「舟に帆かけなどよろこぶ」源蜻蛉「とうろ遠くかけて」 五兼ぬ。渉らす。勢語「國のかみ、いつきの宮のかみかけたる」榮華晴日「弘徽殿・登花殿かけておはします」 六其の數に入る。加ふ。丹波奥作「此の旦那殿御聽走して泊めましや。お供かけて三人ぢや」 七ふり撒(マ)く。注ぎかく。まく。天智紀「唾(カケ)ヤ(カケ)ヤ」後拾遺哀傷「ゆゆしさに包めど餘る涙かな、かけじと思ふ旅の衣に」源若菜上「身を投げん淵もまことの淵ならで、かけじや更にこりずまの波」 八つく。觸る。平家十一、太刀高松の在家に火をかけて」狂言太刀「鄙中略それ首へかけいやい」大藏同名太「不掃除なにとよって、御目にかくることはなるまい」 九及ぼす。被らしむ。允恭紀「天皇之志、在(カケ)子衣通郎姫」勢語「昔男、思ひかけたる女の、え得まじうなりての世に」曾根崎心中「いづれも御苦勞かけました」 十言葉にかけていふ。萬三、可既(カケ)まくは、あやにかしこし」同廿「かしこきや、あめのみかどを可氣(カケ)つれば、ねのみし泣かゆ、朝よひにして」 十一かぶる。著る。狂言惡坊「面中略之をかけて、おどいて酒をたべうと存ずる」 十二下駄へ物を鏤頭に遣はす。かづく。御記「嬉川記「勸進能などに、申樂に花をかけ候時」 十三始む。牛ばにてあり。牛込にてやむ。枕「きこえかけて、歸り給ふ」大藏狂言鳴海「蓋の取りかけたのがある」 十四進みて爲す。しかく。「攻めかく」「おしかく」還魂紙料「他處へ行きて躍るを、踊をかくるといひ」 十五ひて他の答へを求む。大藏狂言能恵「歌をようで、かけうではないか」同京鹿「詞をかけ、同道に致さうと存ずる」 十六心にかく。氣にとむ。念ぶ。思ひかく。萬十、まそ鏡可氣(カケ)てしぬべとまつりたす、かたみの物を人に示すな」古今雜三「よひよひにぬぎて我がぬる狩衣、かけて思はぬ時のまもなし」夫木三「うかりけるみかげの山のもろはぐさ、かけきやかかるなげきせんとは」 十七船を泊む。六歌。くだます。 十八釣す。あらかじめす。馬内侍集「逢ふことを今日となかけそ、鵲のはし開くだにもゆゆしきものを」 十九まうく。構ふ。「あなをかく」後拾遺雜五、見渡せば浪のしがらみかけてけり、卯の花咲ける玉川の里」 二十鎖(カク)す。とざす。とぢ。狭衣三、妻戸荒らかにかけつる音すれば」簾中舊記「御格子のかきがねは中略よる御格子參らせ候へば御かけ候」 二十一秤(カク)にてはかる。古今雜三、秋の田のいねてふことともかけなくに、何をうしとか人のかるらん」六帖三、かけつればちぢのこがねも數知りぬ、なぞ我が戀のあふはかりなき」 二十二かけものとす。賭す。懸賞とす。「千金をかけて募る」宇津保初秋「御もとなると、かねまさがもとなるとくらべんに中略何をかかくべからん。政頼娘一人かけん」源夕顚「命をかけて、何の契りにかかるめを見るらん」 二十三かけ賣にす。かけにす。醒睡笑「錢を と云ふに、一錢のあてなし中略やがて返辨に及びなん、此の度はかけられよ」 二十四掛算をなす。數を乘ず。 二十五日掛・月掛の錢を出だす。「頼母子をかく」「掛け金」 二十六賞やす。冥途飛脚上「高駄賃かくからは、大事の家職」 二十七用ふ。使用す。「電氣をかく」

かけず さはらず。滯らず。保元白河殿義朝夜討「

「胸板かけず射通し」

かく 斯 (副) 上の語の意を承けて下に移す語。かやうに。かくの如く。かう。記「かもがと我が見し子ら、迦久(カク)もがとあが見し子に」同「加久(カク)のごと名に負はむと」萬「か行き加久(カク)行き見つれども」如此・若此紀代 **かく し** (しは助辭) かく(斯)に同じ。推古紀「よろづよに詞句志(シ)もがも、ちよにも詞句志(シ)もがも」萬「世の中は憂しきしるや、加久之(シ)あらば梅の花にもならましものを」同「可久之(シ)帶見む、おもがはりせず」 **かく しこそ** (しは助辭) かくて。かうして。萬「むつきたち春の来たらば、可久斯許貫(カクシコ)梅を折りつつ、たぬしきかへめ」 **かく すす** 斯爲爲 古語。かくしつつ。此のやうにしながら。萬「梓弓末に玉まき可久須酒(カクス)そ、寒なるなりに し、奥をかぬかぬ」 **かく ながら** 斯乍 此のままにて。源 桐壺「かくながら、ともかくもならんを御覽じはてんとおぼしめすに」 **かく ゆゑ** 斯故 かかるゆゑ。それゆゑ。萬「如是故(カクユエ)に見じといふものを、ささなみの舊き都を見せつつ、もとな」

かく 一較 くらべみること。比較。

かく 一確 たしかなること。堅固なること。「確たる思想」

かく 一赫 (副) かがやくさまにいふ語。きらきら。詩經大雅 皇矣上帝、臨下有赫」

かく 一各 (接頭) おのおのの・それぞれ・各自などの意を表はす語。「各閣體」「各階級」

かく 一客 (接頭) 過ぎし・去りぬるなどの意を表はす語。「客年」「客月」

かく 一隔 (接頭) 一つおき。間おき。「隔日」「隔年」

かーぐ 一家具 (名) 家の道具。日用の什器。家財。家什。建武式目追加「かぐ・ざふぐ等」孟郊詩「借車載家具(家具少於車)」晉書王導初述家貧、求試宛陵令、顧愛賻遺而修家具」

かーぐ 一下愚 (名) 極めておろかなる人。徒然草「此の人は下愚の性、移るべからず」論語陽貨「惟上智與下愚不移」

かぐ 嗅 齅 (他動) ほひを鼻に受く。古今夏「五月まつ花橘の香をかげば、昔の人の袖の香ぞする」宇鏡「嗅・嗅加久(カク)」 ほさぐり知る。聞きつく。かぎつく。

がく (名) 【植】くさあぢさゐ(胡蝶花)の異名。

がく 一學 (名) 学ぶこと。教へを受くること。學問。學術。懷風藻「潤德光身、孰先於學」朗詠「學抽麟角」遂味文章於魯二十編」論語學而「十有五而志學」 系統的に組織せられたる智識の團體。科學。「心理の學」「物理の學」 がくかう(學校)の略。「大學」「中學」 **(諺)學の前に書來たる** 好學の士の前には、求めずして書物集まる。志堅ければ事おのづから成るに譬ふ。毛吹草「學の前に書來たる」

がく 一樂 (名) 樂器を用ひて調子に合せ、美音を發せしめて人心を樂しましむるもの。歌又は舞をも之に伴はしむることあり。音樂。天武紀「伎樂(ギガク)」 枕「ばたらは中納言がくもいとおもしろし」 源氏 樂の聲まさり、物の面白きほどに」 書經賓典「夔命、汝典樂、教胄子」 主として雅樂(ガガク)の稱。宇津保 藤原「ゑがにはゆきまさ、がくには仲頼、そこらの遊び人どもにます人なく遊ぶ」同 琴がく始まりて、君たち舞つかうまつりなどす」 龍樂の舞の一種。雅樂の舞樂に擬したる曲。

がく 一額 (名) ひたひ。 紙・絹又は板などに、文字或ひは繪などを記して、社寺の門若しくは家の鳴居などに高く掲ぐるもの。額面。著聞 草の字額を、はれの門に打たれたりけり」同「大内十二門の額、南面三門が弘法大師」 數又は分量。たか。 がくにはち (ガクニハチ) をのべがく (ガク)

がく 一顎 (名) 【動】動物學上の用語。口に附屬する食物攝取又は咬嚙の器官。動物の部類により構造甚だ異なるを以て概述し難し。脊椎動物にては上下兩顎より成り、各骨を其礎とす。

がく 一萼 (名) 【植】植物學上の用語。花の保護器官の一。其の未だ著なる時之を保護するもの。花の外部を形成し、通常、綠色にして脆靡ならず。うてな。

かく-あげ 格上 (名) 米穀取引所が、受渡米の格附をなす場合に、上位に建米の格附をなすこと。「格下げ」の對

かく-あし 一格 (名) 馬術の語。馬の駈け方の一種。

がく-あぢさゐ (名) 【植】虎耳草科、八仙花(アジサイ)屬の落葉灌木。幹は高さ五六尺にして叢生す。葉は對生、楕圓形又は倒卵形、鋸齒を有して平滑。花は七月頃開き、大なる聚繖花序に排列し、中心のものは青色、周圍のものは白色なり。我が國、各地の庭園に栽培せられ、觀賞用に供せらる。

かく-あさりゆ 角雨龍 (名) 紋所の名。りゆう(龍)を見よ。

かく-あみ 角網 (名) 長方形の網にして、水中に建て置き、鰊・鮭・鱒等を捕らふるに用ふるもの。

かく-あんどん 一角行燈 (名) 四角なる行燈(丸行燈の對)

がく-あんどん 一額行燈 (名) がくどうろう(額燈籠)に同じ。

かく-い 一隔意 (名) 隔つる心。心の打ち解けぬこと。隔心。

かく-い 一客意 (名) かくじやう(客情)に同じ。朗詠「物色自堪傷客意、宜將愁字作秋心」

かく-い 一客衣 (名) 旅行中の衣服。旅人の衣。たびごろも。杜甫詩「未足臨書卷、時能點客衣」

かく-いう 一客遊 客游 他郷に客となりて、あそぶこと。出遊。戰國策「臣有老母、家貧客遊、以爲狗屠」可且夕得甘脆以養親」 史記 鄭「鄭陽客游、以讒見食」

かく-いう 一學友 (名) 同じ學校、又は同じ師に就きて學びたる友。同學の朋友。

がく-いうくわい 一學友會 (名) 學友の會合。同窓會。

かく-いし 角石 (名) 角形に切りたる石。

がく-いた 額板 (名) 額面の板。

がく-いちぶ 額一分 (名) 昔の貨幣。緣ありて、其の形額に似たる一分金。金銀圖錄 「一分判、世に丹尺一歩とも云ふ」 又一種重寶のもの有り。俗に額一分と云ふ。

かく-いつ 一膈噎 (名) かく(膈)に同じ。

かく-いてぶ 角銀杏 (名) 紋所の名。

かく-くう 一架空 (名) 空間に架け渡すこと。 根據なきこと。

かーぐら 一嘉耦 (名) よき配耦。よろしき配合者。左傳 僖公三年 嘉耦曰妃、怨耦曰仇、古之命也」

かくう-けーぶる 一架空——(名) 【理】電柱によりて空中に架せられたるけーぶる。多くは電話用にして、中には數百の電線を包有するもあり。(英 Aerial cable)

かくう-さくだう 一架空索道 (名) 山地など、運搬困難なる地に於いて、樹木又は支柱に架け互したる索條に、貨物を吊り下げて運搬する裝置。(英 Aerial wire rope-way)

かくう-しき-でんさてつだう 一架空式電氣鐵道 (名) 電氣鐵道の一。電車線を地表上相當の高さに架設し、以て電流を電車の電動機に供給するもの。

かくう-せん 一架空線 (名) 【理】腕木及び碍子により、主として電柱に架せられたる電線の總稱。又、屋上に建てたる鐵柱、或ひは家屋に沿ひて架渉せらることもあり。

かくう-ちかく。 角打 (名) 小銃の射的。

がく-うち 額打 (名) 扁額を打ち掲ぐること。平家「延暦・興福兩寺の大衆、額打論と云ふ事をし出だして、互ひに狼藉に及ぶ」

がく-うつぎ (名) 【植】虎耳草科、八仙花(アジサイ)屬の落葉灌木。幹の高さ四五尺。葉は對生、卵形又は長楕圓形、鋭尖頭にして微鋸齒を有す。花は五月頃開き、聚繖花序に排列し、中心のものは淡黃綠色、周圍のものは白色にして少數なり。我が國、各所の山地に自生す。こんてりぎ。

かくう-でんせん 一架空電線 (名) かくうせん(架空線)に同じ。

がく-うら 一額裏 (名) 額の裏面。 裏の外部に現はれ易き所に良き布を用ひて、胴裏などには粗末なる布を用ふること。又、そのもの。

かくう-らせん 一架空裸線 (名) 絶緣物を以て全く覆はれざる金屬線を、電柱の碍子につけて架け互したる電線。

かく-うん 一革運 (名) さんかく(三革)を見よ。

かく-うんどう 一角運動 (名) 【理】くわいてんうんどう(廻轉運動)に同じ。

かく-えふ 一各葉 (名) 一枚ごと。每葉。

かく-えふ 一隔葉 (名) 紙面の一枚おき。

かく-えり 角襟 (名) はうりやう(方領)に同じ。(丸襟(マルエリ)の對)

かく-おび 角帶 (名) 男子の專ら用ふる帶。博多織・小倉織を常とす。(へこおびなどの對)

がく-おん 一樂音 (名) 樂器の音。音樂。史記 樂書「須臾離樂則姦邪之行窮內、故樂音君子之所樂、義也」 【理】發音體が、規則正しく振動するときに發する音。耳に愉快の感じを起こさしむ。(噪音の對)

がく-おん 一顎音 (名) いきを硬口蓋に摩擦せしめて發する音。ちゃなどの類。

かく-か 一各家 (名) おのおのの家。漢書 藝文志 免冠・頓首閣下・良久」 高官の人の名宛の下に添ふる尊稱。因話錄「古者三公開閤、鄭守比古諸侯、亦有閤、故皆稱閤下」

かく-か 一閣下 (代) 高官・高官の人に對する尊稱。近時、陸海軍人の間には、少將以上の人の對稱代名詞に用ふ。

かく-が 一鶴駕 (名) 皇太子の御車。

かく-が 一客我 (名) 【哲】客觀的に自己を觀察すること。

かく-かい 一殼介 (名) 【動】かいかく(介殼)に同じ。

がく-かい 一學界 (名) 學問の社界。「學界の一大事」

がく-かい 一學海 (名) 學びの道の廣大にして海の如くなること。梁昭明太子文選 蜚胎于學海、卓爾超群」

がく-かい 一學階 (名) 神官の階級。學正・司業の二種あり。學正を五等に、司業を八等に分かつ。

かくかい-そう 一殼介層 (名) 【地】中生期の中部の地層。海百合・軟體動物の化石多し。

かく-かう 一角行 (名) 將棋の駒の名。すぢかひに遠近自在に進退することを得、なりては、更に一畫づつ、前後・左右に動くことを得るもの。

かく-かう 一各項 (名) おのおのの項目。

がく-かう 一學校 (名) 一定の設備及び方案により、德性を養ひ、學術・技藝を教授する所。現今は、其の經費者の差異により官立學校・公立學校及び私立學校に分かち、其の教育・教授の程度・性質により小學校・中學校・高等女學校・高等學校・大學・各種專門學校・實業學校・師範學校等に分かつ。各條を見よ。三代實錄 世四、元慶二年「雷電激發、震於國府廳事及學校並倉屋」詩經正子衿刺學校廢也」孟子 滕文公上「設爲庠序學校、以教之」

がく-かう-い 一學校醫 (名) 囑託を受けて、學校の衛生事務に從事する醫士。校醫。明治三十一年勅令第二號「學校醫」同年文部省令第六號「學校醫」

がく-かう-さほんざいさん 一學校基本財產 (名) 學校の維持費に充つるために設くる基本財產。地方學事通則第十條「學校基本財產」

がく-かう-くみあひ 學校組合 (名) 學校の設立・維持のために設くる、町村其の他の公共團體の組合。地方學事通則第一條乃至第六條「學校組合」明治二十六年勅令第三十三號「學校組合」學校組合令「學校組合」

がく-かう-けいいく 一學校教育 (名) 學校にて行ふ教育。(家庭教育などの對)

がく-かう-しゅっしん 一學校出身 (名) がくかうで(學校出)に同じ。

がく-かう-せいくわつ 一學校生活 (名) 學校に在りて、專ら學問・品性の修養に身を委ねること。

がく-かう-ちやう 一學校長 (名) 學校を統轄し、其の內部の秩序を保持し、外部に對して學校を代表するもの。校長。小學校令施行規則第十條「學校長」

がく-かう-ちよきん 一學校貯金 (名) 兒童に貯蓄の思想を涵養せしむるため、學校が兒童の貯金を奬勵し、其の貯金を受け取りて、これを銀行又は郵便局に送り保管・利殖を委託すること。

がく-かう-で 一學校出 (名) 學校の教育を經たる者。學校の出身。

がく-かう-でん 一學校田 (名) がく

かうれうでん(學校料田)に同じ。主稅寮式上「學校田中畧爲不輸租田」

がくかうでんせんびやう 病 (名) 學校に於いて特に傳染し易き病として、豫防と消毒とに注意するもの。三類に分かつ。第一類は痘瘡・ぢふてりあ・猩紅熱の類。第二類は赤痢・腸ちぶす・の類。第三類はとらほーむ・傳染性皮膚病の類。

がくかうびやう 〔學校病〕(名) 學校教育を受くる者の間に、多く發生する疾病。近視・脊柱屈曲症・腦神經衰弱症・消化不良・肺病等の類。

がくかうふたん 〔學校負擔〕(名) 公共團體が、一定の程度の學校を設立・維持し、又は其の費用を負擔すべき公法上の義務を負ふこと。即ち、市・町・村が尋常小學校の設立・維持の義務を負ひ、北海道及び各府縣が中學校の設備義務を負ふ類。

がくかうれうでん 〔學校料田〕(名) 平安朝時代、學校の奬勵のために、九州諸國の學校に充て置きて、學生・醫生・算生等に賜ひし不輸租田。學校田。類聚三代格弘一、請置學校料田事。右府學校六國學生・醫生・算生有二百餘人、雖免衛役、無賞勸人。請每國置田四町二町以賜明經秀才者二町以賜醫算優長者」

がくかうゑいせい 〔學校衛生〕(名) 學校の生徒並びに教員・職員の健康の保護・增進を圖ること。文部省官制第七條「學校衛生」明治三十一年勅令第二號「學校衛生」同年文部省令第六號「學校衛生」

がくかうゑいせいしゅじ 〔學校衛生主事〕(名) 明治二十九年五月文部省に置き、常に學校衛生に關する事務を掌らしめし奏任官。明治三十六年廢せられたり。明治三十一年勅令第二百七十九號文部省官制第十「學校衛生主事」

がくかうをん 〔學校園〕(名) 自然に對する實際の知識・感情等を生徒に養はしむる爲め、學校に一園を附設して、植物を集め植ゑたる所。

がくかく 〔客格〕(名) もくてきかく(目的格)を見よ。

がくかく 〔斯斯〕(副) 斯くを重ねたる語。かやうかやう。「かくかくの次第」

がくかく 〔赫赫〕(副) かがやくさま、功名などの殊に著しきさまにいふ語。「川中島合戰「赫赫晫晫たる太陽の」詩經六韜「明明在上、赫赫在上」同小雅「赫赫宗周、褒姒滅之」

がくがく (名) 鶴賀鳥(ツクバネ)の鳴く聲。高橋氏文「此浦聞異鳥之音、其鳴駕我久久(ガクガクの訛反)」

がくがく (副) 物の慄みて動搖するさまにいふ語。「ぐらぐら。「齒ががくがくする」

がくがく 〔諤諤〕(副) 一剛直にして權勢に畏れず、正論を申したつるさまにいふ語。孔子家語「湯武以諤諤而昌、桀紂以唯唯而亡」史記魯周公「千人之諾諾、不如一士之諤諤」二頑固にやかましくいひたつるさまにいふ語。國姓爺後日合戰「諤諤たる愚人の口」

がくがくせぎ 〔角柝木〕(名) 紋所の名。かせぎ(柝木)を見よ。

がくがくせん 〔顎下腺〕(名) 【醫】唾腺の一。顎下の三角部に在るもの。それより分泌する唾液を、口腔に排泄する管を下顎管といふ。

がくかた 〔角形〕(名) 四角なる形。方形(丸形などの對)

がくがたいっしゅ 〔角形一朱〕(名) 〔形、正方なるよりいふ〕ぶんせいいっしゅきん(文政一朱金の異名。

がくがとり 〔覺賀鳥〕(名) 【動】次條に同じ。景行紀「是時聞覺賀鳥(トリガ)之聲、欲見其鳥形」

がくがのとり 〔覺賀鳥〕(名) 【動】みさご(雎鳩)の異名なるべし。下文を見よ。釋紀「覺賀鳥可讀之」和名七「雎鳩中略日本紀私記云、覺賀鳥賀久加乃止利(カクカノトリ)高麗長炙云赤伊奈美」

がくがり 〔角刈〕(名) 頭髮の刈り方の一。

がくがん 〔角岩〕(名) 【鑛】石英の一種。多くは褐色又は黝色。

がくがん 〔擱岸〕(名) 船舶が、誤りて岸にのり上ぐること。海軍刑法第四十六、戰時又は擱岸坐礁其の他艦船危險の場合なるとき」

がくがん 〔擱岩〕(名) 船舶が、誤りて岩礁にのり上ぐること。

がくかん 〔學監〕(名) 學校長の命を承け、校務を監督するもの。

がくかんてん 〔角寒天〕(名) 四角に細長くしたる寒天。

がくき 〔客氣〕(名) 血氣(ケツキ)にまかせたる一時の元氣。左傳定公八年「虎曰、盡客氣也」

がくぎ 〔閣議〕(名) 內閣の會議。全會一致を以て之を決し、一人にても不同意あるときは成立せざるを例とす。內閣官制第五、左の各件は閣議を經へし中略其の他各省主任事務に就き高等行政に關係し事體稍重き者は總て閣議を經へし」同第六、主務大臣は其の所見に由り何等の件を問はす內閣總理大臣に提出し閣議を求むることを得」

がくき 〔學期〕(名) 學校にて、一學年の修業期を平分したる、其の一區分。普通三學期に分かつ。小學校令施行規則第廿五修三項「小學校の學期は府縣知事之を定むへし」中學校令施行規則第十六修三項「學年は分て三學期とし」

がくき 〔學規〕(名) 學校の規則。學課の規定。

がくき 〔樂器〕(名) 音樂に用ふる器械。笛・笙・篳篥・尺八・太鼓・琵琶・琴・おるがん・びわの等の類。宇津保吹上「よろづの樂器ども、こん瑠璃を磨き」左傳襄公廿五年「路晉侯、以宗器樂器」史記周本紀「抱其樂器而犇周」

がくきぶ 〔學級〕(名) 學校の一教室內にて、同時に同一の教授を受くる生徒の一團。小學校令施行規則第十九條「學級」

がくきゃう 〔客鄉〕(名) 客となりて居る土地。他鄉。

がくぎゃう 〔學行〕(名) 學問及び佛道の修行。用明天皇職人鑑「學行めでたき高僧あり」

がくぎゃうじ 〔樂行事〕(名) 古へ伶人を指揮して音樂を奏せしむる樂屋の取締。儀式の時臨時に設く。江次第十九、右大臣殿上人十數人、次被仰左右樂行事」著聞集「殿下此のよしを、樂行事の司に仰せられけり」

がくきゃう 〔學窮〕(名) 一學問のみ研究して、世に用ひられざる者。韓愈文「嬌嬌亢亢、惡圓喜方、蓋爲姦猜、不忽傷害、其名曰學窮」二迂遠なる學者を謗りていふ語。

がくぎょ 〔鰐魚〕(名) 【動】わに(鰐)に同じ。

がくぎょく 〔樂曲〕(名) 一音樂のふし。唐書禮樂「呂才叶其聲音、樂曲遂備」

樂府古題、遂傳以爲樂曲」二きがく(器樂に同じ。

がくきょくしょあてきょくばう 所宛局報 (名) 局報の一。電信事務に關して、電信局所、相互間に往復するもの。

がくきより 〔角距離〕(名) 【理】天文・觀測等に於いて、二點間の距りを表はすに用ふる語。即ち、觀測者より其の二點へ引ける二直線のなす角を、其の二點間の角距離といふ。

がくぎょるゐ 〔鰐魚類〕(名) 【動】爬蟲類の一目。體の長さ二丈餘。蜥蜴に似て全身に骨質の甲鱗を被り、尾は側扁、前肢は五指なるも、後肢は四趾を具へ、趾間に蹼を張る。舌は口外に伸ばすことなし。熱帶地方の河口に產し、性甚だ貪食にして暴惡なり。くろこちる・の類。

がくぎり 〔角切〕(名) 四角に物を切ること。又、その切りたるもの。若風俗「なま貝をかくぎりにして、さきぼその箸を添へて出せ」

かくさん 〔鶴禁〕(名) 皇太子の居まる所。東宮御所。列仙傳「周靈王太子、七月七日乘白鶴、駐山巔、謝時人而去。後世稱太子之駕曰鶴駕、禁曰鶴禁」

かくさん 〔恪勤〕(名) 〔かく(恪)はつつしむ、きん(勤)はつとむ〕わき目も振らずして、職を勵み勤むること。精勤。かくごん。國語「朝夕恪勤、守以惇篤」晉書陰史光「恪勤在公」

がくさん 〔額銀〕(名) 〔其の形、扁額に似たればいふ〕てんばういちぶぎん(天保一分銀)の俗稱。額判(ガクバン)。額。

かくさんくわう 〔角銀鑛〕(名) 【鑛】結晶は立方形にして小さく、塊狀・皮殼狀・晶腺等をなして出づる鑛物。成分は鹽化銀。軟かにして爪にて傷つくべし。色は灰・綠・黃・青等にて光澤あり、一見角質なり。本邦にては薩摩國に少しく產す。

かくく 〔隔句〕(名) 一句を隔つること。二かくくつゐ(隔句對)の略。作文大體「隔句有六種、謂輕重疎密平雜也中略六體同調平他摩也」同「輕隔句、下文飄簫屋空平草蔓顏淵之巷他萋萋深鎖他雨濕原憲之楓」

かくく 〔學區〕(名) 一明治の初め頃、學制の施行・監督のため、全國を區劃したる稱。大學區・中學區・小學區の別あり。二小學校設置の費用負擔の關係により、便宜に市町村に設けたる區域の稱。

がくく 〔樂工〕(名) がくこう(樂工)に同じ。著聞「貴殿は豐原數代の樂工、朝家要須の仁也」

かくぐう 〔客遇〕客の禮を以てもてなすこと。漢書季布「季諾本漢塞外都尉、何奴攻之、絳隆、而單于客遇絳」

かくぐう 〔客寓〕客となりて寄寓すること。又、其の家。客舍。

かくくえう 〔角九曜〕(名) 紋所の名。ひらがたくえう。

かくくさし (形) かどくさし。かんこくさし。こげくさし。きなくさし。

かくくし 〔角櫛〕(名) ほぼ四角にて、齒を深く ひきたる方形の櫛。(宇津保遊女) 獨吟歌仙「關の地藏を歌にゆりすてのの句角櫛を下駄の齒などとさみせられ」

かくくつわ 〔角轡〕(名) 紋所の名。くつわ(轡)を見よ。

かくくつゐ 〔隔句對〕(名) 漢詩・漢文にて、句を隔てて對句とすること。即ち、第一句と第三句とを對し、第二句と第四句と對する類。隔句。

かくくわん 〔各科〕(名) おのおのの科目。それぞれの科目。

かくくわ 〔各課〕(名) おのおのの課。それぞれの課。

かくくわ 〔核果〕(名) 【植】植物學上の用語。果實の一種。閉果なり。單子房一室より成り、果皮は明かに外・中・內の三層に分かれ就中、中果皮は多肉多漿、內果皮は堅硬にして所謂核をなし、種子を保有するもの。梅・桃等の果實の類。

かくくわ 〔學科〕(名) 學術の科目。帝國大學令第三分科大學の學科を卒へ、定規の試驗を經たる者」中學校令第十、中學校の學科及其の程度に關する規則は文部大臣之を定む」

かくくわ 〔學課〕(名) 學問の課程。

かくくわい 〔客懷〕(名) 旅中の情思。他鄉に在りての感想。客思。客情。客心。

かくぐわい 〔格外〕(名) 格(ハヤ)の外。なみはづれ。例外。格段。南史王僧之「格外之官、便今日爲重」

かくくわい 〔學會〕(名) 學術・文藝を研究する目的にて設立したる團體。

かくくわさらやう 〔隔靴搔痒〕(句) 靴を隔てて痒きを搔くに同じ。くつ(靴)の條を見よ。

かくくわん 〔覺官〕(名) かんかくきくわん(感覺器官)に同じ。

かくくわん 〔客觀〕(英 Object) (名) 【哲】精神作用の向けらるる一切の物。認識・思考又は感得せらるる客體。對象。對境。(主觀の對)

かくくわん 〔學館〕(名) がくかう(學校)に同じ。

かくくわん 〔學官〕(名) 學事に關する官。

かくくわん 〔樂官〕(名) 音樂に關する官。

かくくわんせつ 〔客觀說〕(英 Objectivism) (名) 【哲】一吾人の觀念には客觀的の確實性あるものとし、隨つて吾人の精神は眞正の眞理に到達し得る力を有するものなりとする學說。二實在に關する研究に於いて、專ら物質的の方面のみを見て、心意的及び心靈的の方面を無視する傾向ある學說。三快・不快の感情といふが如き主觀的性質のものに道德の標準を求めずして、專ら客觀的の性質のものに其の基礎を求めんとする倫理說。

かくくわんてき 〔客觀的〕(英 Objective) 客體を土臺として認識・觀察・思考等をなすこと。

かくくわんてきかかく 〔客觀的價格〕(英 Objective value) (名) 【商】しぢやうかかく(市場價格)に同じ。

かくくわんてきしゃうかうゐ 商行爲 〔客觀的〕(英 Objective commercial transaction) (名) 【法】ぜったいてきしゃうかうゐ(絕對的商行爲)に同じ。

かくけ 〔脚氣〕(名) 病名。脚に倦怠・麻痺を感じ、水腫(ケツ)を起こし、劇性なるは衝心して死に至るもの。あしのけ。かくびやう(脚病)。

がくけい 〔學兄〕(名) 學問上の先輩。學友に對する敬稱。

がくけい 〔學藝〕(名) 學問と藝術と。學問。管書文苑「玄度學藝優贍、筆削擅奇」唐書顏至「帝爲人寬仁、喜學藝、善隸書」

がくけう 〔學敎〕(名) 學問と敎化と。學術と敎育と。

がくげき 〔樂劇〕（名）おぺら。に同じ。

かくげ-しょうしん 〔脚氣衝心〕（名）病名。脚氣の心臟を襲ふに至れるもの。性命を失ふこと多し。

かく-けつ 〔喀血〕喀嗽によりて、氣管より鮮紅色なる血を排出すること。

かく-けつ 〔客月〕（名）あとの月。あとげつ。前月。去月。

かく-けつ 〔隔月〕（名）一月づつ隔つること。ひと月おき、王建詩「隔月大常先習樂、金書牌囊彩雲中」

かく-けつ 〔各月〕毎月。つきづき。

がく-けつ 〔學業〕（名）學びのわざ。

がく-けふ 〔學問〕晉書「華學優博、辭藻溫麗」

かく-けん 〔格言〕（名）經驗上の知識より得て、よく妙理を發揮し、人の行爲の實踐上の法則となるべき簡單なる詞。格率。魏志「此周孔之格言、二經之明義」

かく-こ 〔各戶〕（名）戶戶。毎戶。各家。軒別。

かく-こ 〔各箇〕おのおの。それぞれ。箇箇。

かく-こ 〔確固〕たしかにして手がたきこと。柳宗元文「當其時、而確固自守」

かく-こ 〔確乎〕（副）慥かに。固く。しっかりとして。易經上經「確乎其不可拔、潛龍也」 莊子「夫聖人之治也、治外乎、正而後行、確乎能其事而已矣」

かく-ど 〔格勤〕（名）かくごん(恪勤)に同じ。平家「こんでい童、もしは恪勤(カクゴン)の者などにてもや有りけん」 十訓上「太政大臣宗輔公中略恪勤(カクゴン)の者など、を勤當し給ひけるには」

かく-ご 〔客語〕（名）【論】命題の中にて、一般の概念を言ひ表はす語。梅は木なりといへば、木は客語なる類。賓辭。(主語の對) 【文法】他動詞の目的となる語。(主語の對)

かく-ご 〔覺悟〕覺寤 物事の道理をさとること。又、さとすこと。莊子「何不覺寤而不自責(過)矣」 史記「項羽本紀「何不覺寤」 莫覺莫悟、何相執也」 あきらむること。觀念。狂言「投鹽」身共も覺悟致してどざる。もとの清水へいて、身を投げませうず」 同「武惡」「殿の仰せぢや、覺悟せい」 嫌め心掃へすること。豫期。期待。宣胤卿記「文龜二年正月二日」「不參者知行可有覺悟」之由、室町殿仰候」

かくごの-まへ 覺悟前 かねて十分に覺悟して居ること。平治「信頼元より覺悟の前にて侍れば、驚くべきにて候はねども」

がく-ご 〔學語〕（名）がくじゅつご(學術語)に同じ。

がく-こう 〔樂工〕（名）音樂に巧みなる人。がくぐ。がくじん。 樂器の職工。

がく-こく 〔各國〕（名）おのおのの國。くにぐに。諸國。

かくこ-けらん 〔各箇教練〕（名）軍隊又は兵式體操に於いて、箇人・箇人に就きて、其の姿勢・行進・執銃等を教授・練習すること。

かくご-しゃ 〔恪勤者〕（名）かくごん(恪勤)に同じ。著聞「江次郎といふ格勤者(カクゴン)のありけるが」

かくこ-しゃげき 〔各箇射擊〕（名）部隊の小銃射擊に於いて、各兵、各箇に射擊すること。

がく-こつ 〔顎骨〕（名）あごのほね。上部のを上顎骨、下部のを下顎骨といふ。

かくこ-めいじ 〔各箇名辭〕（名）【論】團隊中の各箇に名づけ得る名辭。例へば「某學校の全生徒」に於ける「生徒」の如し。

かく-こん 〔客恨〕（名）旅中のうれひ。旅愁。

かく-こん 〔客愁〕客愁。

かく-ごん 〔恪勤〕 恪(カク)みて勤むること。懈らず事ふること。考課令「恪勤不懈者、爲一善」 朝野群載「諸司中略依年勞恪勤次第轉任官人等」 源氏「澪標」「よし長居し侍らんもすさまじきほどなり。やうやうらふつもりてこそは、かくごんをもとて立ち給ふ」 平安時代には侍の稱。武家時代には宿直を勤仕する番衆の類にて、庶士の中、最も下等なるもの。東鑑「九月大給日十日」「召篠山丹三可候格勤之由被仰含、是昨日所爲御感之餘也」 職原抄「凡稱侍者、親王・大臣以下恪勤之名也」

かく-さい 〔客歲〕（名）かくねん(客年)に同じ。去年。

かく-さい 〔隔歲〕（名）一年を隔つること。一年おき。

かく-ざい 〔角材〕（名）四角なる木材。

がく-さい 〔學才〕（名）學問の才。

かく-さう 〔客窻〕（名）客舍の窻。

かく-さう 〔學生〕（名）がくしゃう(學生)に同じ。宇津保「藤原俊蔭」「御馬ぞ四人、秀才(サイ)二人、進士(シ)二人」

がく-さう 〔植〕（名）【植】てさあちさゐ(胡麻花)の異名。

がく-さう 〔學窻〕（名）學問を修むる處。まなびのまど。保元「新院御所攻官軍」「信西を師として、靜かに學窻に籠もりて」 砂石集「南都に學匠ありけり。學窻に眠を下だして螢雪の功年つもりて、碩學のきこえありけり」

がく-さう 〔樂箏〕（名）さう(箏)に同じ。

がくさう-じん 〔學曹神〕（名）古へ大學寮の東西二曹に祀りたる神。菅原道眞及び大江維時の靈と云ふ。

かく-さく 〔角柵〕（名）角材の柵。

かく-ざくら 〔角櫻〕（名）紋所の名。

かく-さけ 〔格下〕（名）米穀取引所が、受渡し米の格附をなす場合に、下位に建米の格附けをなすこと。(格上げの對)

かくざき 〔角笹〕（名）紋所の名。

かく-ざたう 〔角砂糖〕（名）白砂糖を小さく立方形に固めたるもの。珈琲・紅茶などの中に投じて飲む。

かく-さつ 〔格殺〕 うち殺すこと。 王朝時代、死刑の一種。類聚三代格「太政官符。一、如有捕獲行火盜賊、勘當得實者、宜示衆格殺、以懲後惡」

かくさぶ 〔隱〕（他動）古語。かくす(隱)に同じ。萬「みわ山をしかも隱すか、雲だにも心あらなん、可苦佐布(カクサブ)べしや」 同「加久佐波(カクサブ)ぬあかき心を、すめらへにきはめ盡くして」

かくさま 〔斯樣〕（副）かくの如きさま。このやう。かうざま。萬「世の中の常のことわり、可久佐麻(カクサマ)になりにけらし、末のたねから」 源氏「胡蝶」「まことの親の御あたりならましかば、おろかには見放ち給ふとも、かくさまのうき事はあらましゃ」

かく-さら 〔角皿〕（名）四角なる皿。

(丸皿などの對)

かく-さん 〔各參〕（名）毎日・毎夜參ること。常に參ること。嵯峨「諸存日「晝夜各參の擁護懇ろなることを承り候に」

かくし 〔隱〕（名）隱すこと。 守護。藩屏。成務紀「爲中區之蔕屏(カクシ)也」 衣に縫ひつけたる小さき袋。小さき持物などを納る。ぽっけっと。 古語。だいべん(大便)の稱。記「其美人爲大便(カクシ)之時、化丹穴矢、自其爲大便之溝流下、突其美人之富登」

かく-し 〔客思〕（名）旅客の故鄕に對する感想。

かく-し 〔客死〕他鄕にありて死すること。史記「屈原賈生列傳」「身客死於秦」

かく-じ 〔角字〕（名）〔字樣方形なればいふ〕 〔草書に對して、楷書の漢字の稱。 假字書に對して、漢字の稱。本字。 紋所の名。まるにまつかくじ・まるにまんかくじなど種種あり。

かく-じ 〔各自〕おのおの。めいめい。

かく-じ 〔家具師〕（名）家具を造り、又、賣るを業とする人。

がく-し 〔學士〕（名）學問に從事する者。學者。史記「天下之學士、靡然鄕風矣」 唐書「學士之職、本以文學言語、被顧問、出入侍從、因得參謀議、納諫諍」 春宮坊の職員。經を執りて講說する事を掌る。東宮職員令「學士二人、掌執經」 宇津保「學士をかへて琴の師をつかうまつれ。東宮さとりあるみこなり」 帝國大學各分科大學の本科卒業生が稱ふる名稱。各學科の區別に從ひて法學士・醫學士・工學士・文學士・理學士・農學士・林學士・獸醫學士・藥學士の九種に分かつ。其の他、東京高等商業學校研究科卒業生は商學士、各所の專門醫學校卒業生及び各種の私立大學卒業生は、校名を冠して、此の稱號を稱するを得。公立私立專門學校規程「帝國大學分科大學(元東京大學各部元札幌農學校を含む)卒業者又は東京高等商業學校(元高等商業學校を含む)卒業者にして學士と稱することを得る者」

がく-し 〔學資〕（名）學問の修業に要する費用。學資金。師範教育令「學資」

がく-し 〔樂師〕（名）音樂師。伶人。禮記「樂記」「樂師辨乎聲詩、故北面而弦」 左傳「襄公十年」「使工爲之師」 茅鴟「社注」「工、樂師」 古へ雅樂寮の職員。樂生に音樂を教ふることを掌る。職員令「唐樂師十二人」 宇津保「樂生」「太鼓打ちて、しづかにやうやうがくし出づ」 樂部の職員。奏樂に從事する判任官。宮內省官制「樂師」

がく-じ 〔學事〕（名）學問上のこと。教育上のこと。

がく-じ 〔樂事〕（名）音樂に關する事。明治四十二年宮內省令第三號「樂生中略樂事を修習す」

がく-しう 〔客舟〕（名）旅客の舟。客遊の舟。陶潛詩「誰言客舟遠、近瞻百里餘」 劉長卿詩「葉落猿啼傍客舟」

がく-しう 〔客愁〕（名）他鄕に客たる身の物思ひ。

かくしうら 〔學修〕學び修むること。

かくしうら 〔隱裏〕（名）衣服の胴裏・袖裏などの如き、外面より見えざる所に、別の切れを附くること。一代女「あやめ八丈に、もみのかくしうらを附けて」

かくし-がう 〔學士號〕（名）學士の稱號。

かくし-がね 〔隱金〕（名）かくし持ちたる金錢。 見えぬやうに附けたる金物。

かく-しき 〔格式〕（名）身分・儀式などに關する制定。 格と式と。「三代格式」 北史「蘇綽」「律令格式、多威所定、世以爲能」 舊唐書「刑法志」「麟德二年、刪律格式」

がく-しき 〔學識〕（名）學問と見識と。南史「袁粲」「祖征曰、汝文章或小減、學識當過之」 學問上の識見。學問上より得たる識見。

かく-しさしゃう 〔隱起請〕（名）札。投票。

かく-しざぬ 〔隱衣〕（名）おすひに同じ。

がく-しきん 〔學資金〕（名）學資に使用する金。

かく-しぐき 〔隱釘〕（名）外部に見えざる樣に打ちたる釘。しのびくき。

かく-しぐひ 〔隱喰〕（名）人に隱して物を食ふこと。

かく-しけい 〔隱藝〕（名）人に知らせず、學び得たる技藝。

かく-じ 〔隱子〕（名）人に知らせぬ子。私生兒などの類。天神記「その家來の隱し子を拾ひしと聞こえなば、禍の基」

かく-じと 〔隱事〕いんじ(陰事)。人に隱してするしわざ。

かくし-ことば 〔隱詞〕（名）他人に知れぬやうに、仲間の者のみ用ふる符牒の語。あひことば。いんじ(隱語)。

かくし-しつけ 〔隱躾〕（名）裁縫の語。しつけをかくるに、表を小針に、裏を大針に出だすこと。

かくし-しのぶ 〔隱忍〕（他動）人に知れぬやうにす。かくす。欽明紀「一無隱匿(カクシシノブ)之發露所爲」

かくし-ぜい 〔隱勢〕（名）ふせぜい(伏勢)に同じ。國姓爺後日合戰「隱し勢あるらんと、此處のつまり、かしこの隅隅、驅け廻はり驅け廻はり、さがせども物音なく」

かくし-だ 〔隱田〕（名）官に隱して租稅を逃れ居る田地。おんでん。隱田。

かくし-だい 〔隱題〕（名）題を一首の歌の中に詠み込むこと。物の名。千載「名」「百首歌奉りける時の隱題の歌。きりぎりす。秋はきり霧過ぎぬれば雪ふりて、はるるまもなきみやまべの里」 奥義抄「隱題歌。是れ古式に不載事也。但し古今並びに拾遺集に物名部といふはこれにや。近代の人是れを稱隱題也」

かくし-だて 〔隱立〕（名）かくして容易に知られぬさまをすること。互ひにかくすさまをなすこと。

かくじち 〔隔日〕（名）かくじつ(隔日)に同じ。素門癖論「其間日而作者(隔日)」

かく-しつ 〔客室〕（名）きゃくしつ(客室)に同じ。

かく-しつ 〔鶴膝〕（名）書法の語。J のはねたるところ尖りて舒びたる稱。趨(ツ)の病とて之を燥ふ。 足の肉落ちて、鶴の脛の如く細くなる病。醫學名 神皇正統記「かの親王、鶴膝の御病ありて、あやふく思しめしける故なるべし」

かく-しつ 〔革質〕（名）剛くして、恰も革の如き質をなせるもの。

かく-しつ 〔確執〕（名）固く己れの意見を執りて動かぬこと。我意を張りて狂ぜること。不和になること。爭論。獄令「義疏「有違」稱告密示語、確不肯言、仍云」「事須面奏者、調先已三示、後若三示、後不肯言、方奏」「南都大乘院師房と六萬の大衆と、確執の事有って合戰に及ぶ」

かくじつ 一隔日 (名) 一日づつ隔つること。一日置き。

かくじつ 一確實 (名) たしかなること。まちがひなきこと。

かくじつ-せい 一確實性 (英 Validity) (名) 【哲】 ㊀認識或ひは判斷が、確實に一致相當すること。即ち、認識又は判斷が眞理の上に立つが如き、或ひは事實上の證據を以て十分證明せられ得るが如き性質を有すること。 ㊁判斷又は推論が、論理上の推理の法則に照らして、毫も誤りなきが如き性質を有すること。妥當性。

かくじつてき-だんてい 一確實的斷定 (英 Assertory judgment) (名) 【哲】げんじつてきだんてい(現實的斷定)に同じ。

かくし-づま 隱夫 (名) みっぷ(密夫)に同じ。かくしをとこ。

かくし-づま 隱妻 (名) 人に知らせぬつま。かくしめ。かくしをんな。

かくして 斯 (接) かくて(斯)に同じ。

かくし-どころ 隱所 (名) 隱すべき所。男女の陰部。今物語「はだかなる法師の、かくし所も打ち出だして」

かくし-な 隱名 (名) いつはりてなのる姓名。又、本名以外に、それと知れぬやうに附けたる名。

かくし-なき 隱泣 (名) 人に知れぬやうに泣くこと。曾根崎心中「犀を立てずの隱し泣」

かくし-にょうばう 隱女房 (名) かくしづま(隱妻)に同じ。佐夜中山集「若き時持つものとてや鬢鏡、きやらの油もかくし女房」

かくし-ぬく 隱拔 (他動) どこまでもかくしとほす。

かくし-ぬひ 隱縫 (名) 縫目を目立たぬやうに縫ふこと。

かくし-のみ 隱飲 (名) 人に隱して飲むこと。

かくし-はいおよ 隱賣女 (名) 江戸時代、竊かに淫を賣らしめたること。又、其の女。瀧田問答、山猫とて、隱し賣女を置き候、こと」

かくし-ぶ 一學習 學びならふこと。學修。史記[太史公]「士則學習法令、群禁」

かくしぶ-しょうしょ 一學習證書 (名) 數學年の兒童を一學級に編制し、同一の程度によりて、全部又は一部の兒童を教授する小學校にて、一學年學習せし者に授與する修學證書。小學校令施行規則[明三十四]「學習證書」

かくし-ぶたばり 隱船梁 (名) 河舟の船梁(ヤナ)の名。

かくし-ぶみ 隱文 (名) 人に隱す手紙。祕密の手紙。諸寄川「昨日の碁の隱し文」 智古教信七墓廻「隱し忍んでかくし文、替字・替名のやつし書き」

かくしぶ-ぬん 一學習院 (名) 明治天皇の優旨に基き、華族の子女に普通教育を施し、華族たる德性を涵養せしむるを目的とする學校。男子部と女子部とあり。宮內大臣の管理に屬し、院長・女學部長・主事・書記の職員を置く。學習院學制「學習院」

かくしぶぬん-てんそう 一學習院傳奏 (名) 安政年中に置かれし職にて、當時公家の子弟を教育したる學習院の事を執奏することを掌りしもの。

かくしほけん 一學資保險 (名) 【商】生命保險の一。幼兒の學資を供給するを目的とするもの。教育保險。

かくし-ぼたん 隱鈕扣 (名) 外部に表はれざるやうにして附けたるぼたん。

かくしま (副) 古語。斯くのさま。かくさま。續紀[宣命]「父我加久斯麻(カクシマ)爾在止念ヒ、於母夫人敎爾事」

かくし-まど 隱窓 (名) 外よりは見えぬやうに作りたる窓。一代女「あかりとりのかくしまど細く」

かくし-むすび 隱結 (名) 絲又は紐などを、外より見えぬやうに結ぶこと。吉野忠信「小枕なしの高島田、一筋懸けの隱し結び」

かくし-め 隱女 (名) かくしづま(隱妻)に同じ。かくしをんな。

かくし-めつけ 隱目附 (名) 江戸時代、刑事の探偵。おんみつ(隱密)。しのびめつけ。曾我曾稽山「住持が訴へに限らず、隱し目附の者ども、胥に耳に達したり」

かくし-もん 隱紋 (名) 衣服の裏より附けて、ほかに見ゆるやうにしたる紋所。五人玄「黑羽二重に裾とりのもみうら、金のかくし紋」

かくしゃ 一客舍 (名) はたごや。やどや。逆旅。旅宿。史記[商君]「商君亡至關下、欲入舍客舍」

かくしゃ 一客車 (名) きやくしや(客車)に同じ。禮記[曲禮]「客車不入大門」

かくしゃ 一覺者 (名) 佛語。事理に通達し、宇宙の眞理を覺悟したる人。法華經[序品]「梵語、佛陀此云覺者」

かくしゃ 一學者 (名) ㊀學問に長じたる人。禮記[雜記]「學者行之」 莊子[知北遊]「遊居學者之所好也」 五代史[唐家人傳]「尤喜春秋三傳與學者講論、終日無倦」 ㊁學問を學ぶもの。史記[太史公自序]「堅學者之不達其意而師悖ナリ」

かくしゃ 一學舍 (名) 學問を稽古する處。

かくしゃう 一客將 (名) 客分となりて働く大將。

かくしゃう (角行)に同じ。

かくしゃう 一角將 (名) かくかう

かくしゃう 一鶴氅 (名) 鶴の羽毛にて作りたる衣。朗詠「雪似鶴毛飛散亂、人被鶴氅立徘徊」

かくしゃう 一各省 (名) ㊀各省大臣が各自分掌の行政事務を取り扱ふ中央官廳。即ち外務省・內務省・大藏省・陸軍省・海軍省・司法省・文部省・農商務省・遞信省の九省の稱。大臣官房と各局とより成り、次官・局長・參事官・祕書官・書記官・屬等の職員を置く。各省官制通則「各省」 ㊁以上の九省に、宮內省を加へて十省の稱。

かくしゃう 一客情 (名) 旅行中などの感情。客意。湛方生詩「寄言賦新詩、忽忘羈客情」

かくじゃう 一閣上 (名) 樓閣のうへ。

かくしゃう 一學生 (名) 古へ大學及び國學にて、經業を受くるもの。文屋童(ブンヤノワラハ)江次「宇津保傳藏開「たびたびのぼりたるがく生(ガクシヤウ)のをのこども、さえあるをのこども」 同上「殿上、陣の座に、文人・學生などつきなみぬ」

かくしゃう 一學正 (名) 學階の一。がくかい(學階)を見よ。

かくしゃう 一學匠 (名) ㊀ものしり。學者。 ㊁佛道を學習して、師匠たる資格あるもの。盛衰記[山僧祭]「東塔南谷敎光坊大阿闍梨仙性とて、學匠の、しかも大惡僧なりけるが」 砂石集「常州の東城寺に、圓幸敎王房の法橋とて、寺法師の學匠有りけり」

かくしゃう-い 一鶴氅衣 (名) 仕立

ては被風(ヒ)の如くにて、白地に黑く緣を取りたる服。隱者などの著るもの。

かくしゃう-ぎょうせい 一各省行政 (名) 【法】各省大臣の、各自分掌する行政事務。

かくしゃう-けっさんはうこくしょ 一各省決算報告書 (名) 各省大臣が、各省豫定經費要求書と同一の區分に據り、其の省所管に屬する經費の決算を報告する文書。政府は之を總決算に添へ帝國議會に提出して、總決算の內譯を詳細に示すもの。會計法[第十七條]「各省決算報告書」

かくしゃう-じくわん 一各省次官 (名) 各省の職員の一。大臣を佐けて省務を整理し、各局部の事務を監督する勅任官。即ち、外務次官・內務次官・大藏次官・陸軍次官・海軍次官・司法次官・文部次官・農商務次官・遞信次官の總稱。各省官制通則[第十五]「各省次官は一人勅任とす」

かくしゃう-だいじん 一各省大臣 (名) 天皇の委任により、國家の行政事務を分擔し、其の責任を負ふ最高の單獨官府。即ち、外務大臣・內務大臣・大藏大臣・陸軍大臣・海軍大臣・司法大臣・文部大臣・農商務大臣・遞信大臣の稱。各省官制通則「各省大臣」

かくしゃう-とつき 一角狀突起 (名) 獸角狀の突起。

かくしゃう-よ 一各省豫算 (名) かくぶよさん(各部豫算)に同じ。

かくしゃう-よていけいひえうきうしょ 一各省豫算經費要求書 (名) 各省大臣が、毎會計年度に、其の所管の經費の需要高を算定し、前會計年度の定額と比較を立てて調製する文書。政府の歲出總豫算は之に基きて調製せられ、政府は帝國議會の參考のため、之を總豫算に添へて提出するものとす。會計規則[第二章]「各省豫定經費要求書」

かくしゃ-しゅ 一客主 (名) 客と主人。主客。左傳[僖公六年]「書曰會鄭伯、杜注所記不ト與ニ外事一同者、客主之言」

かくしゅ 一各種 (名) くさぐさ。さまざま。諸種。種種。

かくしゅ 一鶴首 首を延べて待つさまにいふ語。

かくじゅ 一疊樹 (名) ぼだいじゅ(菩提樹)に同じ。謝靈運「帝木の夜の言の葉は、終ひに疊樹の花散りぬ」

かくしゅ 一樂手 (名) 陸軍樂部の下士。技能ある樂手補より採用す。一二三等あり。陸軍武官官等表「陸軍一等樂手」

かくしゅく (角宿)に同じ。

かくしゅく 一角宿 (名) 【天】かく

かくしつ 一各出 (名) ぜにさし(錢差)をいふ。尾張國の方言。物類稱呼

かくじつ 一學術 (名) 學術と藝術と。學問。唐書[杜蘭]「其爲人少ニ學術一」

かくじつ-ご 一學術語 (名) 學術の研究上、特に用ふる語。學語。

がくしゅ-ほ 一樂手補 (名) 陸軍樂部に屬して、樂手を補助するもの。陸軍戶山學校條例[第一]「軍樂生徒に樂手補たるに必要なる敎育を爲す所とす」

かく-しょ 一各處 (名) ここかしこ。處處。

がく-しょ 一樂所 (名) ㊀昔、宮中にありて、音樂を調習する所。桂芳坊に在り。がくそ。和名抄「桂芳房(在樂芳房東也)一字津保(藏開)「がく所にはがくつかうまつりあはせて、いとおもしろし」 ㊁音樂を奏する所。がくや。榮華(御禮)「樂所は、中島に

ぞせさせ給ひける」

がく-しょ 一樂書 (名) 音樂に關する書。

かく-しょう 一確證 確實なる證據。

かく-しょく 一革職 めんしょく(免職)に同じ。

がく-しょく 一學殖 (名) 學問の素養。左傳[昭元年]「夫學殖也、不ト學將落」 錢詩文「學殖素深、文鋒甚銳」

かく-しょね (名) かくしばいぢよ(隱賣女)に同じ。世間息子氣質「三野狂ひの事はおいて、隱しよねのある所さへ知らず」

がくしょのあづかり 一樂所預 (名) 樂所の長官。著聞「樂所の預かり小監物源頼能は、上古に恥ぢざる數寄の者也」

がくしょはじめ 一樂所始 (名) 樂所を開きて、音樂の調習を始むること。增鏡「樂所はじめの儀式は、內裏にてぞありける」

かくしらくわん 一隱落欵 (名) 筆者の名を、畫中又は容易に氣附かぬ所に記すこと。

がくしゅん 一學士院 (名) ていこくがくしゅん(帝國學士院)の略。

がくしゅ 一隱繪 (名) ふと見る時はさもなけれど、よく見れば他の形などを隱してかきある畫。ゑさがし。一代女「當流の仕出し模樣、かくしゑのひとり笑ひ」

かくし-をとこ 一隱男 (名) みっぷ(密夫)に同じ。宇治拾遺「さればよ、かくし男來にけりと思ひて」

かくし-をんな 一隱女 (名) かくしめ。しのびづま。かくしづま。

かく-しん 一閣臣 (名) こくむだいじん(國務大臣)の稱。

かく-しん 一客心 (名) かくじゃう(客情)に同じ。杜甫詩「秋水淸無底、蕭然淨客心」 崔佛詩「山花慰客心」

かく-しん 一隔心 (名) うちとけずして、心中に隔てをおくこと。隔意。

かく-しん 一確信 確乎たる信念。確實なる自信。

かく-しん 一革進 舊弊を革めて、進歩の域に向かふこと。

かく-しん 一革新 かいしん(改新)に同じ。

かく-じん 一各人 (名) おのおのの人。めいめいの人。諸人。

がく-じん 一樂人 (名) がくにん(樂人)に同じ。謠[富士]「富士と申す樂人、是れも劣らぬ太鼓の上手にて候が」 禮記[少儀]「長則曰能從ニ樂人之事一矣」 史記[始皇本紀]「令ニ樂人調ニ絃之一」

かくす 隱藏 (他動) ㊀かくるやうにす。あらはならぬやうにす。陰かにおく。萬葉「むさしねのをみねみ可久思(カク)ジ忘れゆく君が名かけて、あをねしなくる」 同十「あひ見ればおも隱(カタ)るるものからに、つぎて見まくのほしき君かも」 ㊁人に知らせず。祕す。綾靖紀「苞ニ藏(カク)祠心一」 字鏡集「祕(ヒツカクカ)ナヒイカ」 神代紀「葬(カクシ)」 ㊂葬る。

(誹)隱すことはあらはる つつみかくす事は、とかく外へあらはれ易し。大友興廢記「かくせば、なほあらはる」

(誹)隱すは罪 かくしだてするは罪多しとの意。和歌民のかまど「隱すは罪」

(誹)隱すものの見たし 人の祕することは、殊更其の眞想を知りたし。

(誹)隱すより現る 隱すことはあらはるに同じ。

がくす 一學 (自動) 學問をなす。まなぶ。愚管抄「僧は經論・章疏あれども、學する人少なし」

かくすけ　角助　（名）　やっこ（奴）に同じ。

かくすり　鉸具摺　（名）　鎧の腸當の名所。鎧の鉸具の當たる所。革を張る。かこずり。すねあて（腸當）を見よ。

かくすみ　角錐　（名）【數】一つの平面多角形と、其の各邊を底邊とし、其の平面外の一點を共通の頂點とする三角形とにて界する多面體。

かくすみ　各出　（名）　各自より物を出だすこと。だしあふこと。駿臺雜餘「比叡山三塔あり。各出とて、物を出だす時、譬へば百貫文出づる事には、五十貫東塔、廿五貫西塔、又半分横川也」

かくすみだい　角錐臺　（名）【數】角錐の底面に平行なる截面と底面との間の多面體。

かくせい　客星　（名）　常は見えずして、臨時に現はれ、他の星宿を犯す星。史記天官書「客星出レ天、廷有二奇令一」　後漢書皇后紀「太史奏、客星犯二御座一甚急」

かくせい　隔世　（名）　世を隔つること。時代の異なること。「隔世の感」

かくせい　覺醒　（名）　眠りをさますこと。注意を喚び起こすこと。迷ひよりさむること。

がくせい　樂生　（名）　一古へ、唐樂・高麗樂・新羅樂・百濟樂などを學習する人。職員令「唐樂師十二人掌教二樂生一」　二式部職樂部に屬して、樂事を修習するものの稱。明治四十二年宮內省令第三號第三條式部職樂部に樂生を置く中略樂事を修習す」

がくせい　學生　（名）　一學術・技藝を學ぶ人。生徒。書生。後漢書習鬱傳「始置二鴻都門學生一」　二特に、海陸軍諸學校の准士官以上の生徒、及び大學本科生徒の稱。

がくせい　學政　（名）　けういくぎやうせい（教育行政）に同じ。

がくせい　學制　（名）　一學校に關する制度。　二けういくせい（教育制度）に同じ。

がくせいかん　學生監　（名）　帝國大學の職員の一。大學總長の命を承けて、學生の取締に關する事を掌る奏任官。東京帝國大學官制第一條第四條「學生監」　京都帝國大學官制第一條第四條「學生監」

がくせき　學籍　（名）　學校に在る學生・生徒の氏名・生年月・族籍・住所及び保證人・保護者等を登錄しあるもの。

がくせきぼ　學籍簿　（名）　學校に備へ置きて、生徒の學籍を記入する帳簿。小學校令施行規則第八十一市町村立尋常小學校長は第十號表に依り學年の始に於て入學したる兒童の學籍簿を編製すへし」同「學籍簿は入學の兒童に異動を生したるときは遲滯なく之を加除訂正すへし」

かくせつ　確說　（名）　たしかなる說。確と定まりたる說。

かくせつ　隔絕　（名）　隔たりてあること。隔つること。「千里隔絕」易經上繫「水流至習坎。注不以坎爲隔絕、相仍而至習二乎坎一也」　史記匈奴「以隔二絕胡與一羌通之路一」

がくせつ　學說　（名）　學理上の說。

がくせつしけん　學說試驗　（名）　學說の記憶・理解及應用の程度につきての試驗。（實地試驗の對）產業試驗規則第三條「學說試驗に合格したる者に非れは實地試驗を受くることを得す」同第四條「學說試驗に合格し實地試驗に落第したる者」

かくせん　客船　（名）　たびのふね。張九齡詩「薄暮津亭下、餘花滿二客船一」

かくせん　確然　（副）　かくこ（確乎）に同じ。

がくせん　愕然　（副）　おどろくさまにいふ語。史記傅靳傳「愕然欲レ殿レ之」

かくせんあんざんがん　角閃安山岩　（名）【地】安山岩の一種。角閃石を有するもの。本邦、甲斐國御嶽・越後國妙高山・肥前國溫泉岳等に見出ださる。角閃富士岩。

かくせんくわかがん　角閃花崗岩　（名）【地】花崗岩の一種。石英・正長石及び角閃石より成る。

かくせんせき　角閃石　（名）【鑛】短柱狀に結晶し、六角又は八角柱をなす鑛物。玻璃光澤を有し、色は綠・褐・暗綠・黃等なり。岩石の成分として普通に見出ださる。

がくぜんのたいふ　樂前大夫　（名）　古へ、正月十六日女蹈歌の節舞妓を導きて前行する者。中務輔を以て之に充つ。容顏美麗なる侍從中より選らびし事もあり。江次第歌三月「舞妓出。樂前大夫二人帽子前行」　建武年中行事正月「十六日蹈歌節會中略樂前大夫と云ふ者二人、帶劍して之をみちびく」

かくせんふじがん　角閃富士岩　（名）【地】かくせんあんざんがん（角閃安山岩）の異名。

がくそ　樂所　（名）　がくしよ（樂所）に同じ。源少弐「がくそ遠くておぼつかなければ、おまへに御琴ども召す」　榮華物語「がくその物の音ども吹きたる、えもいはずおもしろし」

がくそう　客僧　（名）　きやくそう（客僧）に同じ。

がくそく　學則　（名）　學校の教科及び編制に關する規則。文官任用令第三條「文部大臣の認可を經たる學則に依り法律學・政治學又は經濟學を教授する私立學校」

かくそくど　角速度　（名）【理】物體の廻轉する速さの割合。物體廻轉の中より單位の距離にある點が一秒間に動きたる距離、即ち速さを以て之を表はす。

かくそせつ　嚇阻說　（名）【哲】刑罰は、罪人を罰して實例を示し、依りて社會公衆を威嚇して、罪惡を犯さざらしむるを以て目的とすといふ說。（英 Deterrent theory）

かくそで　角袖　（名）　一方形の袖。二日本服の稱。（洋服の對）三次條の略。

かくそでじゅんさ　角袖巡査　（名）　探偵の便宜のため、制服を著ずして和服を著けたる巡査。角袖。

がくそわらは　樂所童　（名）　樂所の舞童。

かくそん　各村　（名）　おのおのの村。

かくたい　麁（名）　麁の翼の名所。たか（麁）を見よ。

かくたい　革帶　（名）　せきたい（石帶）に同じ。

かくたい　客體　（名）【法】一主體に對して、其の意思又は行爲を及ぼさるるもの。二もくてきぶつ（目的物）に同じ。

かくだい　角臺　（名）【數】かくする（角錐臺）の略。

がくたい　樂隊　（名）　音樂を奏する隊。

がくだいこ　樂太鼓　（名）　雅樂に用ふる太鼓。火焰の形を附けたる框の中に釣る。つりだいこ。

（こいだくが）

かくだいぶつぶし　角太夫節　（名）　江戸時代、山本角太夫の始めて語り出だし淨瑠璃節。

かくたう　角壔　（名）【數】一つの直線に平行なる三つ以上の平面と、其の直線に會する二つの平行平面とにて界する多面體。

かくだう　覺道　佛語。どだう（悟道）に同じ。

がくだう　學道　（名）　學問のみち。鎌倉大草紙「諸國大いに亂れ、學道も絕えたりしかば」

がくだう　學堂　（名）　學問を教授する所。學校。北史齊本紀「便與二諸生一祭二文翁學堂一」唐書學士傳「學堂至レ今猶存」　李廋文粹「闢二孔子之學堂一敷二一代之風雅一」

がくだう　樂堂　（名）　音樂を奏する堂。音樂堂。

がくだう　額堂　（名）　神社・佛寺などに、信者の奉納する額を揭げ置く堂。

かくたからむすび　角寶結　（名）　紋所の名。たからむすび（寶結）を見よ。

かくたぶ　確答　（名）　たしかなる返答。

かくたん　喀痰　（名）　痰を吐くこと。

かくだん　格段　（副）　かくべつ（格別）に同じ。

かくだんすう　格段數　（名）【數】數を表はすに、文字と數字とを用ふるとき、數字によりて表はさるる數。例へば $3+5n-8$ なる式に於いて、3・5・8の稱。

かくち　各地　（名）　ところどころ。ここかしこ。處處。

かくわ　他鄉。

かくち　客地　（名）　旅の土地。客土。

かくち　隔地　（名）　隔たりたる地方。遠き所。

かくち　覺知　悟り知ること。

かくちがひ　角違　（名）　紋所の名。

かくちく　角逐　競うて驅逐すること。互ひに爭ふこと。競爭。戰國策齊「駕犀首而驂馬服、以與二秦角逐一、秦當時避二其鋒一」曾愈詩「東西競角逐、遠近施二機緘一」

かくちし　隔地者　（名）　一土地を隔てたる人。二（法）直接に應答することを得ざる地位にある人。（對話者の對）民法第九十七條「隔地者に對する意思表示は其通知の相手方に到達したる時より其の効力を生ず」同第五百二條「隔地者間の契約は承諾の通知を發したる時に成立す」

かくちぶんけふ　各地分業　（名）【經】國內分業の一。國內の各地により、其の業を異にすること。

かくちやう　殼頂　（名）【動】三枚貝の兩殼附著せる頂點。又、螺にて螺旋の起端。

かくちやう　角頂　（名）【數】角の頂點。

がくちやう　學長　（名）　一ていこくだいがくぶんくわだいがくちやう（帝國大學分科大學長）の略。二旅順工科學堂の長官。三私立大學にて、總理・總裁等の命を受けて學事を統轄する者。

がくちやう　樂長　（名）　一樂部の職員の一。樂事を分掌する奏任官。宮內省官制第三十「樂長」　二陸軍樂部の士官。一等及び二等ありて、中尉及び少尉に相當す。

かくちやうじ　角丁子　（名）　紋所の名。よつはながたちやうじ。

かくちゆう　客中　（名）　他鄉に客となりてゐる間。旅中。

かくつう　角通　（名）　相撲の事に通曉せる人。相撲道の通人。

かくつう　各通　（名）　おのおのの書類又は書狀。

がくづか　額束　（名）　鳥居の島木と貫との間にある束。其の前に扁額を設くることあるより此の稱あり。

かくづきん　角頭巾　（名）　すみづきん（角頭巾）を見よ。

かくづけ　格附　（名）　米穀取引所が、其の賣買中の或る種類の米を、標準物即ち建米とし、之と他の種類の米とを比較して、其の品質の等級を定むること。明治二十六年七月勅令第七十四號第十三條米中略に限り標準物を以て賣買契約を爲し取引所に於て豫め指定する同種品の格附に從ひ代品を以て受渡を爲すの方法」

かくづけへう　格附表　（名）　格附けを記載したる表。

かくづと　角髮　（名）　江戸時代、御殿女中などの間に行はれたる女の髮の結ひ方の名。たぼを角がたにせるもの。（丸づとの對）奥女中袖鏡「丸づとか、かくづとか、兩樣の中を用ふ」

かくつば　角鍔　（名）　刀劍の鍔の一種。角形のもの。（丸つばの對）鎌田草子「四尺三寸のかくつばの打物」

かくつめ　角爪　（名）　琴爪の、角形なるもの。

かくて　搔手　（名）　ひくて（引手）に同じ。

かくて　搔手數多　ひくてあまた（引手數多）に同じ。ひくて（引手）の條を見よ。蜻蛉日記下「さざ蟹のいづこともなく吹く風は、かくてあまたになりぞすらしも」

かくて　斯而　（副）　このやうにして。かくして。萬「みな底に生ふる玉ものおひ出でず、よし此のごろは如是而通はむ」

かくて　斯而　（接）　かくありて。さて。それより。竹取「かくて、翁やうやうゆたかになりゆく」

かくてい　客亭　（名）　きやくてい（客亭）に同じ。

かくてい　角觝　角抵　相撲。力くらべ。角力。史記季斯「二世在甘泉、作二角觝倡優之觀一」漢書武帝紀「元封三年春、作二角抵戲一」

かくてい　確定　確と定まること。定まりて動かぬこと。

かくていさげん　確定期限　（名）　一（法）到來すべき時期の、豫め確定せる期限。（不確定期限の對）民法第四百四十二條「債務の履行に付確定期限あるときは債務者は其期限の到來したる時より遲滯の責に任す」　二或る事柄につき、其の事柄が確定して動かすべからざる狀態に至りたる期限。貴族院多額納稅者議員互選規則第十條「互選名簿は六月一日を以て確定期限とす」

かくていさじつ　確定期日　（名）　一確定不動の日。即ち、某年・某月・某日・某所にて大演習ありといふ類。二前條二項に同じ。貴族院伯子男爵議員選擧規則第六條「確定期日の前に於て新に資格を得及回復したる者あるときは之を名簿に記入す」

かくていけひ　確定經費　（名）　法令により、其の支出及び金額の定まりたる國家の經費。即ち、皇室費の類。

かくていこうさい　確定公債　（名）【經】公債の一。發行額・拂込みの順序・支

拂期限・利子割合、債還方法等が、法律により定まれるもの。無期確定公債と有期確定公債とに分かつ。各條を見よ。固定公債。(不確定公債の對)

かくてい-さいばん 〔確定裁判〕(名) 【法】かくていはんけつ(確定判決)に同じ。明治十九年三月司法省刑第二百二十三號訓示第七十八條「確定裁判とは上訴期限を經過し又は上訴を經盡して復之を動かす可からざるものを謂ふ」刑法第四十二條「確定裁判を經さる數罪を併合罪とす」

かくてい-さいむ 〔確定債務〕(名) 【法】債權の目的たる給付の確定せる債務。(不確定債務の對)

かくてい-しうにゅう 〔確定收入〕(名) 【商】公債・年金・抵當・貸金等より生ずる收入の如く、其の收入の確定せるもの。

かくてい-そくせつ 〔確定測設〕(名) 道路又は鐵道線路などを測量する時、豫測の後、更に精密に施す測量。

かくてい-ちゅうもん 〔確定註文〕(英 Firm order) (名) 【商】貨物の買人たらんとする者が、其の代價及び條件を定め、諾否の回答期を示して爲す賣買の註文。

かくてい-てすうれう 〔確定手數料〕(名) 【法】事件の大小等に關せず、其の額の常に一定せる手數料。

かくてい-の-うったへ 〔確定訴〕(名) 【法】法律關係の成立若しくは不成立を確定する判決を求むる訴へ。獨立的確定の訴へと先決的確定の訴へとの二種に分かつ。各條を見よ。確認訴訟。

かくてい-はんけつ 〔確定判決〕(名) 【法】確定の效力ある判決。即ち、不服申立ての期間を經過したる判決、又は上告審の判決の稱。確定裁判。刑事訴訟法第六條・第七條・第二百二十九條「確定判決」戶籍法第百六十九條「確定判決」

かくてい-はんけつしょ 〔確定判決書〕(名) 確定判決の判決書。衆議院議員選擧法第七條「選擧人名簿に登錄せらるへき確定判決書を所持し選擧の當日投票所に到る者あるとき」

かくてい-ひづけ 〔確定日附〕(名) 【法】證書作成の日につき第三者に對して、法律上完全なる證據力を有する證書の日附。民法第四百六十二條「前項の通知又は承諾は確定日附ある證書を以てするに非されは之を以て債務者以外の第三者に對抗することを得す」民法施行法第五條「證書は左の場合に限り確定日附あるものとす」

かくてい-ひづけ-ぼ 〔確定日附簿〕(名) 私署證書に確定日附を附すること、登記所、又は公證人役場に請求する者ある場合に、登記官吏又は公證人が、署名者の氏名及び件名を記入し、日附ある捺印及び割印をなす帳簿。民法施行法第六條「確定日附簿」

かくてい-ほけんしょうけん 〔確定保險證券〕(英 Valued policy) (名) 【商】海上保險證券の一。保險價額の確定せるもの。價額確定保險證券。(豫定保險證券の對)

かくてい-まうしこみ 〔確定申込〕(名) 【商】貨物の賣人たらんとする者が、其の代價及び條件を定め、諾否の回答期を示して爲す賣買の申込み。

かくてい-めいだい 〔確定命題〕(英 Definite proposition) (名) 【哲】していめいだい(指定命題)に同じ。

かくてう 〔格調〕(名) 詩歌の字句の排列、又は調子。

かくてう 〔角調〕(名) しもむてう(下無調)に同じ。吉野吉水院樂書「角調は下無調の一名、又就吟調と云ふ」

かくでう 〔各條〕(名) おのおのの條。

かくてう 〔樂調〕(名) 音樂の調子。

かくてう 〔角鐵〕(名) 横斷面の四角なる鐵材。(丸鐵の對)

かくてん 〔樂典〕(名) 音樂の法式を記したる書。

かくでん 〔學田〕(名) くわんがくでん(勸學田)に同じ。

かくでん 〔樂殿〕(名) がくだう(樂堂)に同じ。音樂堂。

かくでん 〔額殿〕(名) がくだう(額堂)に同じ。

かくと (名) 船具。河船の敷船梁(ナルバリ)を抑ふる木。

かくと 〔殼斗〕(名) 【植】植物學上の用語。殼斗科植物の雌花に見る總苞の變形して成れる、椀狀又は囊狀のもの。果實の下部又は周圍を圍擁す。表面には疣狀又は刺狀の突起物を有するものあり。

かくと 〔客土〕(名) 一かくち(客地)に同じ。二閑寬詩(秋風已振)衣、客土何時歸」三おきつち(置土)に同じ。

かくど 〔角度〕(名) 【數】角の大き。度・分・秒の單位によりて測る。一度は直角の九十分の一、一分は一度の六十分の一、一秒は一分の六十分の一。度・分・秒を表はすに。′″なる記號を用ふ。

1直角=90°
1°=60′
1′=60″

かくど 〔赫怒〕 はげしくいかること。大いに怒ること。詩經大雅「王赫斯怒」張衡文賦「遇卒清候、武士赫怒」

かくと 〔學徒〕(名) 一がくせい(學生)に同じ。二鎌倉大草紙「學領を寄進して、いよいよ書籍を納め、學徒を憐愍す」晉書(環上疏)「請得給其宅地、備其學徒」三かくしやう(學匠)に同じ。著聞集「一本は叡山の學徒なりけり」

かくとう 〔客冬〕(名) 去年の冬。舊冬。昨冬。

かくとう 〔角燈〕(名) ぶりきにて方柱形に製りたる框に板硝子を嵌め、中にらんぷを入れて、火を點ずるもの。家の軒先に出だし、又其の小なるものは郵便配達夫など携帶す。

かくとう 〔格鬪〕(名) 互ひに打ちあひたたかふこと。晉書(呂光)「拱臂似自首、攘臂似格鬪」北齊書(社稷)「弱卒所領親兵格鬪」

がくとう 〔學頭〕(名) 一勸學院の職員。別當の次に位す。學生の中より、才學のすぐれたるものを選拔して補す。中右記(長治元年二月二日)「以學生藤宗仁、可補學頭之由被仰」著聞集「此の隆賴は無雙の才人なりけり。學頭に成りたりけり」二吐僧の職名。鶴岡八幡宮學頭職次第(良喜比叡山西塔住)「中略(建仁元年八月八日)補之」三學校長また主席の教師などの稱。

がくとう 〔蔕筒〕(名) 【植】植物學上の用語。蔕の筒狀をなせる部。

がくどう 〔學童〕(名) 學問する兒童。漢書(藝文)「漢興、太史試學童、能諷書九千字以上、乃得爲史」

がくどう-ちょきん 〔學童貯金〕(名) がくかうちょきん(學校貯金)に同じ。

がくどうろう 〔額燈籠〕(名) 形・額に似て、横に長き行燈。額行燈(ガクアンドン)。堀山姥(謠曲)「文字を透しの透燈籠・額燈籠、手際やさしき花かつら」

がくどう-ゐせい 〔學童衛生〕(名) 就學に關して、家庭及び學校に於いて注意すべき兒童衛生。

かくどき 〔角度器〕(名) おくたんぎす時にしぞ鳴く」

がくし 〔樂師〕(名) がくし(樂師)に同じ。宇津保(俊蔭)「がくのしの心ととのへて、深き遺言せし琴なり」

がくのだう 〔樂堂・額堂〕(名) 陣所に設けたる小屋。物見の番人を置く處。甲陽軍鑑(十)「信玄公十六歳より五十三迄の間に、軍法工夫仕りたる樂、萩原常陸守中略相圖の物見・がくのだう」

がくのふね 〔樂船〕(名) 中にて、音樂を奏する船。源(紅葉)「例のがくの舟ども漕ぎめぐりて、もろこし・こまと盡くしたる舞ども、くさ多かり」

がくのぼう 〔角棒〕(名) 紋所の名。薩摩歌(閑吟集)「鴛鴦は輪ぬけに角の棒、美濃の加納の主なり」

がくのまく 〔額閒〕(名) 扁額のかけてある間。平治(物語)「紫宸殿の額の間に、尻を掛けてぞ居給ひける」

がくのまひ 〔樂舞〕(名) 樂を奏して舞ふこと。又、その舞。宇津保(藤原)「左右亂聲して、勝ち負けにがくのまひす」

かくのみ 〔香菓〕(名) 橘(タチバナ)の實(ミ)の古名。かくのこのみ。垂仁紀「非時香菓(カクノコノミ)」(音篤・此云二)(訓倭・此云二)十訓(十)「九種の香菓(カクノコノミ)以下の物を」

かくのみ 〔斯已〕(副) かくばかり。これほど。萬(五)「はしきよし、加久乃未(カクノミ)からにしたひこし、いもが心のすべもすべなさ」同(三)「加久能未(カクノミ)やいきづきをらむ、あらたまの來へゆく年の限り知らずて」

かくのやまひ 〔膈病〕(名) かく(膈)に同じ。甲陽軍鑑(二)「御心づかひなり。故に、後は膈の病をうけ給ふ」

かくのり 〔角乘〕(名) 水上に流す角の材木に乘りて働くこと。又、材木に乘りて種種の伎をなすこと。

かくのをしさ 〔角折敷〕(名) 四隅の角を切りたる折敷。角(カク)。伊勢家禮式「くぎやう、もしは角の折敷のやうなる盃の据わりたる臺」海人藻芥「火鉢置灰、角折敷に入、炭令持參、取手置之」

かくは 〔各派〕(名) おのおのの流派。それぞれの黨派。

かくば 〔角場〕(名) 小銃の射的をなす場。

かくは 〔學派〕(名) 學問上、其の基く所の精神又は原理又は研究法を異にするに從ひ、各一流をなせる系統、若しくは其の同一の系統に屬する者の稱。

かくはい 〔各盃〕(名) 盃を各自に持つこと。又、その盃。鎌倉年中行事(初獻)「二獻めは、各盃にて賜はる」海人藻芥「親王と大臣と參會之時者、每度各盃也」

かくはう 〔各方〕(名) それぞれの方面。諸方。

かくはう 〔確報〕 たしかなる報知。しかとしたる知らせ。

かくばう 〔角帽〕(名) 一帽子の一種。上の角形なるもの。(大黑帽子などの對)二ていこくだいがくぐせい(帝國大學學生)の異稱。角帽を制帽とするよりいふ。

かくばう 〔客房〕(名) 客ざしき。客間。客室。

かくばかり 〔斯許〕(副) かくの如く。これほど。かばかり。萬(五)「可久婆可里(カクバカリ)すべなきものか、世の中のみち」同(三)「可久婆可里(カクバカリ)戀ひむと兼ねて知らませば、いもをば見ずぞあるべくありける」

かぐはし 〔馨〕(形ク) 【香細(カグハシ)】しの義か)香ひよし。かんばし。記(中)「迦具波斯(カグハシ)花たちばな」萬(十)「たちば

なのした吹く風の可具波志伎(ヒヤヒ)、筑波の山を懇ひずあらめかも」

かぐはしさ 馨 (名) かぐはしきさま。かぐはしき度合。

かくはしら 角柱 (名) 〔一〕四角なる柱。(丸柱の對)聖德太子繪傳記「楠の尺餘の角柱、手に隨って動き立つ」〔二〕〔植〕たけ(竹)の異名。奥竹集「かくばしらとは竹を云ふ也。世と共に聞くぞ悲しき角柱、たゆまずふれる雪折れの聲」

がくはしら 額柱 (名) 額を掲ぐる爲めに設くる柱。がくづか。夏山雜談「嚴門に額を掲ぐるは、我が國中頃より、異國の法に倣ひたる也。神社鳥居にも額を掲ぐる事になりたり。鳥居に額柱と云ふは額をかくる柱也。後世は額を掲げぬ鳥居も、額柱を設くるやうになりたり。伊勢兩宮の鳥居に額柱のなきは、新儀を用ひざるとなり」

かくはつ 〔一〕鶴髮 (名) しらが(白髮)に同じ。鶴の羽毛の白きに譬へて云ふ。「童顏鶴髮」 庾肩吾詩「鶴髮辭軒晃、鮐背享奏萊」

がくはつ 〔一〕學閥 (名) 我が學校又は學派の有力なるを恃みて他を排斥すること。

かくばな 花の異名。〔植〕くさあぢさゐ(胡蝶花)の異名。

かぐはな 嗅鼻 (名) みるめかぐはな(眼目嗅鼻)を見よ。

かくはなびし 角花菱 (名) 紋所の名。

かくはる 角張 (自動四) かどがたつ。

かくはん 各般 (名) 諸般。もろもろ。いろいろ。

かくはん 隔板 (名) 船舶に設くる仕切板。積荷又は左右の舷燈の間を仕切るに用ふ。

かくばん 〔一〕隔番 (名) 一度づつ隔てて勤むること。代り番。交番。

かくばん 隔晩 (名) 一夜づつ隔つること。ひとばんおき。

がくはん 額判 (名) てんぱういちぶぎん(天保一分銀)に同じ。

かくばんがん 角蠻吾石 (名) 〔地〕かくれきがん(角礫岩)の異名。

かくび 蚊食 (名) 蚊にさされたるあとのきず。

かくひ (物部 假呼) (名) 木の切り株。土佐國の方言。

がくひ 〔一〕學費 (名) 學問の修業に要する費用。宋史(百官志)「諸路官鹽酒直、上者升增、二、中下增一、以充學費」

かくひつ 角筆 (名) じさし(字指)に同じ。

がくひつ 〔一〕擱筆 (名) 筆をさしおくこと。文を書き止むること。最後の書き納め。魏志(王粲傳注)「至於朝廷奏議、皆擱筆不能措手」 南史(神仙傳)「及見此文、乃擱筆」

かくひどり 蚊食鳥 (名) 〔動〕かうもり(蝙蝠)をいふ。畿内の方言。(物部 假呼)

がくひは 〔一〕樂琵琶 (名) 雅樂に用ふる琵琶。

かくびゃう 脚病 (名) かくけ(脚氣)に同じ。あしのけ。宇津保(藤原)「例わづらひ侍るかくびやう、すべてえ蹈み立てで、更にまかりありきといふものも侍らで」 源(若菜下)「例もわづらひ侍るみだりかくびやうといふもの、所せくおこりわづらひ侍りて」

かくびゃう 脳病 (名) かく(腦)に同じ。かくのやまひ。

がくひゃうし 〔一〕樂拍子 (名) 音樂の拍子。謠(大原)「太鼓の御役、今も妙なる

がくぶ 〔一〕革布 (名) 絹布の表面に假漆(ウルシ)を塗りたるもの。机・風琴の覆ひ、また傘の袋等に用ふ。

かくぶ 園 (他動四) 古語。かこふ(圍)に同じ。和名十「說文云、捧加久以柴攏之」

かくぶ 〔一〕各部 (名) それぞれの部分。おのおのの部曲。

かくぶ 〔一〕客部 (名) 〔文法〕文の成分に於いて、主部に對して、客となる部分の稱。即ち、客語、或ひは客語と之に屬する修飾語とを有する部。

がくぶ 〔一〕樂譜 (名) 音樂の譜。

がくぶ 〔一〕樂部 (名) 式部職に屬して、帝室の樂事を掌る所。部長・樂長・樂師の職員を置く。宮内省官制(第三十四條)「樂部」 同(第三十六條)「學問上の好尚・態度。

がくぶう 〔一〕學風 (名)

がくふきがう 〔一〕樂譜記號 (名) 樂譜に用ふる記號。音節記號・加線・音符・休止符等。

かくぶぢ (名) 〔植〕ふぢうつぎ(醉魚草)の異名。

がくぶぢ 額緣 (名) 〔一〕額のふち。〔二〕窠・出入口などの周圍にある化粧木。

がくぶちぬひ 額緣縫 (名) 四方にへりを取りて縫ふこと。鏡蒲團の類。

がくぶちぎう 〔一〕樂部長 (名) 樂部の部長。部務を掌理し、所務職員を監督する奏任官。宮内省官制(第三十六條)「樂部長」

かくぶつ 〔一〕格物 (名) 事物の道理をきはむること。大學「致知在格物」

かくぶつ 角鮒 (名) 〔動〕かじか(鰍)の異名。積猿雲「かくぶつや腹をならべてふるあられ」

がくぶとん 〔一〕額蒲團 (名) 裏の布を表へ折り返して緣としたる蒲團。

がくぶね 樂船 (名) 樂人を載せて樂を奏する船。樂の船。大織冠「唐船・樂船・見物船」

がくぶよさん 〔一〕各部豫算 (名) 各省、又は或る部局毎に、部分的に編製する豫算。本豫算の參考となるもの。各省豫算。

がくぶ 角兵衛 (名) かくべゑじし(角兵衛獅子)の略。

かくへい 〔一〕客兵 (名) 他より雇ひ入れたる兵。他より援助などに來たりし兵士。王問詩(謝長有)「客兵食悍不可制」

かくへさ 〔一〕隔壁 (名) 〔一〕物の間をへだつるもの。しきり。〔二〕船中の區劃。

かくべし 〔一〕鐵槌に似て、角形にて底平かなるもの。金物を打ちて平らにするに用ふ。

かくべ 角兵衛獅子 (名) かくべゑじし(角兵衛獅子)の略。

かくべじし 角兵衛獅子 (名) かくべゑじし(角兵衛獅子)の略。

かくべつ 〔一〕格別 (副) 〔一〕常の格にはづれて。格外。別段。格段。特別。庭訓往來(三月)「御餘造作事、不可有各別之作事」 甲陽軍鑑(上)「若くましますよりも、皆人の存ずるに各別なるは信玄公也」 〔二〕ともかくも。とにかく。「木石ならぬ若い者、當座の色は格別、極めし事はゆめゆめ無し」

かくべつ 〔一〕各別 (副) おのおの別別に。銘銘。左傳(哀公元年)「蔡人男女以辨」(杜注)「男女各別、保聚而出降」

かくべつてすうれう 格別手數料 (名) 〔法〕一般の手數料に對して、或る行政官廳の特有事務に對する手數料。

かくべゑじし 角兵衛獅子 (名) 〔角兵衛といふ人の作りたる獅子頭より起こる。(女)伊信一說、蒲原獅子の訛りと。(國語 笑覽)〕獅子頭をいただき、雞尾を附けたる衣を

被り、三四人して舞ふもの。多く正月などに舞ひあるく。災妖を除くといへり。越後獅子。

かくへん 〔一〕殼片 (名) 〔植〕植物學上の用語。蒴の裂開せる時、其の果皮の分片。

がくへん 〔一〕萼片 (名) 〔植〕植物學上の用語。萼を形成する各裂片。

がくぼく 〔一〕學僕 (名) 師家の僕となりて學問する人。

かくぼし 角星 (名) 兜の鉢の星に稜あるもの。

かくぼり 角堀 (名) 地を角形に掘ること。又、その堀。

かくぼん 角盆 (名) 四角なる盆。(丸盆の對)

かくまく 〔一〕角膜 (名) 〔醫〕眼球の最外層中、前面中央に位する圓形皿狀の透明膜。

かくまく 〔一〕核膜 (名) 〔生物〕細胞核の實質を包みて、細胞質との境界をなす薄膜。細胞分裂に際しては消失す。

かくまく 〔一〕隔膜 (名) 〔生物〕二箇の腔所の境界をなす膜。即ち、胸部と腹部との間にある横隔膜の類。

かくまく-えい 角膜翳 (名) 角膜の翳(ヒヤウ)りたる病。めぼし。

かくまく-えん 〔一〕角膜炎 (名) 眼病の一種。角膜の腫れて痛むもの。

かくまさ-ぐさ (名) 〔植〕〔一〕わうれん(黃蓮)の古名。和名十「黃蓮。本草云、黃蓮。一名王蓮(加久佐久末)」 〔二〕まわう(麻黃)の異名。

かくまつ 角松 (名) 紋所の名。

かくまぶ (他動四) 〔かくむ(圍)の延〕人を密かに隱し置く。隱匿す。隱蔽す。

かくまぶ (他動下二) 前條に同じ。卿丸「宮をかくまへ奉り、夜中に門を開かんこと不覺の至り」

かくまへる (他動下一) 前條の口語。

かくまもり 角守 (名) 紋所の名。

かくみ 闘 (名) かくむこと。かこみ。仁德紀「夏蟲のひむしのころも二重著て、箇區彌(カクミ)やたりは豈よくもあらず」 皇極紀「解圍(カクミ)退出」

かくみ-ぐさ (名) 〔植〕かくまぐさ」の訛り。

かくむ 〔一〕客夢 (名) たび路のゆめ。客中の夢。岑參詩「孤燈燃客夢、寒杵搗鄉愁」

かくむ 園 (他動四) かこむ(圍)に同じ。清寧紀「發軍士圍(カクム)天藏」 萬十「若草の妻も子供も、をちこちにさはに可久美(カクム)る」 惠慶集「山櫻近く見んとの心にて、けふは霞にかくまるるかな」

かく-む 〔一〕學務 (名) 學事・教育に關する事務。帝國大學令(第十)「分科大學長は分科大學の學務を統理す」

がくむ-ゐゐん 〔一〕學務委員 (名) 府・縣・郡・市・町・村及び町村學校組合が、教育事務のために置く常設委員。地方學事通則(第六)「學務委員」

かくめい 〔一〕革命 (名) 〔かく(革)はあらたまる義〕〔一〕天子は天の命を受けて天下に臨むといふより、前の王統あらたまり、他の王統代はりて統治者となること。易經(革)「天地革而四時成、湯武革命、順乎天而應乎人、革之時大矣哉」 〔二〕(英Revolution)〔法〕憲法の範圍を超えたる行動により、國家の基礎を變革すること。即ち、政體又は王統の變更の類。〔三〕〔哲〕萬物の狀態或ひは作用に、突然根本的の變化の現れ來たること。人の性格或ひは觀念などの急變する類。〔四〕曆法にて、辛酉の年の稱。甲子の年を革命といふ。古へ是れ等の年は變亂多しとして、改元など行はれたり。革命勘文「今年當大變革命年事」著聞集「康治三年甲子にあたりけり。例にまかせて、革命の定めあるべかりけるに」

がくめい 〔一〕學名 (名) 動植物學にて、學術上便宜のために、らてん語にて附けたる各國共通の名稱。らてんめい。

かくめい-ぐん 〔一〕革命軍 (名) 革命を目とする軍隊。

かくめい-たう 革命黨 (名) 革命を目的とする黨派。

がくめん 〔一〕樂面 (名) 舞樂に用ふる假面。

がくめん 〔一〕額面 (名) 〔一〕扁額のおもて。額(ガク)。〔二〕證書類の表面。國債規則(第五)「國債證券の額面金額」 〔三〕がくめん(額面額)の略。商法(第百九十二項)「額面以上の價額を以て株式を發行したるときは其額面を超ゆる金額は前項の額に達するまで之を準備金に組入ることを要す」 衆議院議員選擧法(第八十五)「保證金として三百圓又は之に相當する額面の公債證書を供託すべし」

がくめん-かかく 〔一〕額面價格 (名) 〔一〕公債・株券等の額面どほりの價格。(賣買價格の對) 〔二〕貨幣の表面に記せる價格。表價。貨幣法(第一)「流通不便の貨幣は其の額面價格を以て無手數料にて政府に於て之を引換ふべし」

がくめん-がく 〔一〕額面額 (名) 證書類の表面に記載せる金額。額面。

がくめん-はう 〔一〕角面堡 (名) 多角形の堡壘。地形と射擊の方向とによりて、面の數と諸面の配置とを異にす。

かくも (名) 〔植〕灰條の略。六帖「我が宿にかくもを植ゑてかくも草、かくのみ戀ひば我れ搜せぬべし」

かくも-ぐさ (名) 〔植〕わうれん(黃蓮)の異名。六帖「うかりけるみぎはがくれのかくも草、葉末も見えず行き隱れなん」

かくもち 角餅 (名) 紋所の名。かく(角)もちを見よ。

かくもの 角物 (名) 木材の横斷面の角形なるもの。

かくもり 角盛 (名) 飯など盛るに、上の方を角形にすること。

かくもり 角銛 (名) 銛(モリ)の穗先、角形に尖りて鉤あるもの。捕鯨に用ふるものは、これに軟鐵の軸と長き柄とを附く。

かくもん 覺門 (名) ぶつもん(佛門)に同じ。

がくもん 〔一〕學問 (名) 學び習ふこと。學藝を修むること。宇津保(藤原)「身のざえ人にすぐれ、がくもんに心いれて、遊びのみちにもいりたち給へる」 枕「古今の歌はた卷を皆うかべさせ給はんを、御學問にはせさせ給へ」 孟子(梁惠王上)「吾他日未嘗學問、好聽馬試之鈴」

がくもん-しゃ 〔一〕學問者 (名) がくしゃ(學者)に同じ。甲陽軍鑑「世間は物のわかりを云ひて人に教ふること、がくもんしやのわざなり」

がくもん-じょ 〔一〕學問所 (名) 〔一〕學問する爲めに設けたる校舍。〔二〕しやうへいざかがくもんじよ(昌平坂學問所)の略。〔三〕書齋。書院。庭訓往來(三月)「學問所・公文所・政所」 津國女夫池「此の邸のすみにしつらひおきし、學問所の萱屋」

がくもん-じょ-きんばん 〔一〕學問所勤番 (名) 江戸幕府の職名。昌平坂學問所の事を掌る。

がくもん-じょばん 〔一〕學問所番 (名) 鎌倉幕府の職名。將軍の學問所に交替宿直して、和漢の故事を講ずるもの。東鑑(建保元年三月二日)「昵近祇候人中、撰藝能之輩、被結番之、學問所番」

がくもん-じょ-ぶぎゃう 〔一〕學問所奉行